外3X54
31-319木

文學博士金澤庄三郎編纂

辭林

東京 三省堂發兌

四十四年版

大正
2.3.12
購求

31
319木

あつめおく辭の林ちりもせでちとせかはらじ和歌のうら松　（續千載和歌集）

國語は思想の代表者にして、辭書は國語の寶庫たり。故に其內容は直ちに以て其社會の發達を卜し、其文華の程度を窺ふ料とすべし。我言靈の幸ふ國、我言靈の助くる國、古くより辭書に乏しからず。上は和名類聚鈔、新撰字鏡の類より、下は東雅、和訓栞、雅言集覽、俚言集覽等に至るまで、皆其時代に應じて撰述せられ、後の見るものをして略遺憾なからしむ。世々の學者亦勉めたりといふべし。明治の昭代、文物燦然として學術の隆興實に前代未聞なるに際し、國語學界の事業獨り之に伴はざる憾あり。辭書の如きも、未だ多く德川時代の著作の羈絆を脫せず、中古以往の語にのみ詳にして、現代の活きたる言語に粗なり。これ社會全般の夙に認むるところにして、實に我學界のために惜まざるを得ず。明治式辭書の編纂は著者年來の希望にして、菲才を顧ず積年其材料の蒐集に從事し、今や漸く「辭林」の名を以て之を表するに至れり。然れども、由來、辭書編纂

の業容易ならず、更に改訂を加ふべきところ亦多々あらん、著者は専心一意、身を此事業に捧げ、版を重ぬる毎に改刪増補を怠らざるべし。博雅の君子、若しこの意を諒とせば、幸に指教の勞を吝む勿れ。これ獨り著者の幸のみにあらざるなり。

明治四十年四月、歐米漫遊の途に就かんとする前三日

東都本郷西片町の寓居に於て

金澤庄三郎

本書の初版を發行してより既に四星霜、その間増補第二版に於て改刪修補を加へ、稍面目を新にしたれども、ひそかに恧怩たらざるを得ざりき。されば、世運日新のさまを思へば、顧みてこの業を進め、今や全部に訂正を施し、不備の點を補ひ、新に難訓索引を加へ、茲に辭林四十四年版と稱してこれを公にするに至れり。これより後、辭林は年版數を重ぬる毎に、常に改善せられ、永く向上的たるべし。

著者は、本書に同情を寄せ有益なる助言を賜はりたる四方の諸君に感謝す。諸君の注意せられたるところは、一々これを調査して、本書の中に收めたり。今や帝國語の領土擴張せられ、善良なる辭書の需用急なる秋、著者は一層奮勵努力して、諸君の好意を空くせざるべし。

明治四十四年春四月

著者識

凡例

一、語詞の排列は五十音順に從ひ、促音は「ッ」の部に、撥音「ン」は最後、卽ち和行の後に排置したり。

一、語詞の排列は歷史的假字遣に從ひ、尙、一般の便宜を計らんがため、其直下に標音的假字遣を記入し、これを表はすに細字の片假字を以てせり。

一、「イギリス」語・「フランス」語・「ドイツ」語・「ロシア」語・「スペイン」語・「ポルトガル」語・「オランダ」語・梵語・「アイヌ」語・琉球語・朝鮮語及漢字の唐宋音に屬するものは片假字を以て記し、其他のものと區別せり。

一、語詞の上に冠したる符號の中、++は古語、‡は俚語、(は字音たることを示す。故に、外來語にあらずして、何等の符號をも有せざるものは、古今に通じて一般に用ひらるゝ國語なりと知るべし。

一、語原に關する事項は著者自ら所見ありと雖も、古來、其說の紛々たるものに至りては、見ん人の紛亂を惹き起す基とならんことを恐れて、全くこれを除

きたり。而して原義の轉々して漸次其意義を異にするに至りたるものは、㊁㊂の符號によりてこれを區別し、力めて其例證を擧げん事を期したり。

一、本書には發音・難訓・字音の三種の索引を設けたり。

發音索引は專ら今日の發音より古來の歷史的假字遣を知るためにす。例へば「桶」の假字遣は、これを今日の發音に從ひ「オケ」の部につきて披見せば、その「ヲケ」なることを知るべし。而して本索引に於て使用せる標音的假字遣は、大體に於て文部省假名遣改正案に從ひたり。卽ち「ヂ」「ジ」は悉く「ジ」「ヅ」「ズ」は悉く「ズ」とし、「ワ」に發音せらるゝ「ハ」は「ワ」に收め、「イ」「ウ」「エ」「オ」に發音せらるゝ「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」「ヰ」「ヲ」等は皆「イ」「ウ」「エ」「オ」にて表はしたり。例へば「鼓」の假字遣を知らんとせば「ツヾミ」の條にてこれを索むるが如し。

難訓索引は漢字の全畫と部首とを以てこれを索む。卽ち「柊」は九畫の木部に從ひ、「隼」は十畫の隹部に從ふが如し。而して熟語よりなるものは、その頭字の全畫と部首とによりてこれを索む。卽ち「女貞」を三畫の女部に「茵蔯蒿」を十畫の艸部につきて索むるが如し。

字音索引は漢字の全畫を以てこれを索む。卽ち「丁」は二畫に從ひ、「天」は四畫に從ひ、「金」は八畫に從ふが如し。

一、本書の編纂に關しては、足助直次郎氏終始予を助け、刻苦精勵克く其業を完からしめたり。茲に特記して謝意を表す。

略語表

（名）……名詞
（代）……代名詞
（數）……數詞
（自）……自動詞
（他）……他動詞
（形）……形容詞
（助動）……助動詞
（副）……副詞
（接）……接續詞
（助）……助詞
（感）……感動詞
（接頭）……接頭語
（接尾）……接尾語
（枕）……枕詞

（四）……四段活用
（下二）……下二段活用
（上二）……上二段活用
（上一）……上一段活用
（下一）……下一段活用
（か變）……加行變格活用
（ら變）……良行變格活用
（さ變）……佐行變格活用
（な變）……奈行變格活用
（形一）……形容詞ク活用
（形二）……形容詞シク活用

哲學……哲學
佛教……佛教
心理學……心理學
論理學……論理學
教育學……教育學
法律……法律
經濟……經濟
動物學……動物學
植物學……植物學
生理學……生理學
鑛物學……鑛物學
物理學……物理學
化學……化學
數學……數學
天文學……天文學
地質學……地質學

春の花のあした秋の月のゆふべ、おもひなのべ心をうごかさずといふことなし。ある時には米竹のしらべをとゝのへ、ある時には大和もろこしの歌ことばをあらそふ。敷島のみちのさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、辭の林昔よりもしげし。

（千載和歌集序）

辭林

あ

あ　口を開く開き舌を低くして發する母音、五十音圖にて、安行の第一に位し、安列の加・左・太・奈・波・末・也・良・和の頭となる。

あ［足］（名）あし。「一の音せず」。

あ［畦］（名）田のさかひ。あぜ。くろ。「一をだに未だ作らざりけり」。

あ［吾］（代）自己を指す語。われ。われ。「一が見し子に」。我。「一がほぞげ」［吾佛］自己の飽れる主義。

あ［彼］（代）❶遠きものを指す語。「淡路島—は」と雙非に見し月の」。❷第三者を指す語。あれ。かれ。「山のあづくに—を待つと」。——の-よ［彼世］死したる後に行く世。黄泉。

あ（感）應答する聲。「女房—といと」（唯、唯）。

あ（感）感歎したる時に發する聲。ああ。

アーク-とう［—燈—Arc lamp］（名）「ことう」（弧燈）に同じ。「に同じ。

アーク-ライト［Arc light］（名）「ことう」（弧燈）

アーチ［Arch］（名）❶石或は煉瓦等の材料にて、上部を圓く積み立てたるもの。追拱（ついきょう）。❷杉・檜等の薄板を以て包み飾りたる弓形の門。多く慶賀のときなどに建つ。緑門。

アートタイプ［Artotype］（名）一種の寫眞版。膠と重クロム酸との混合物の感光性を利用せるもの。

アームストロング-ほう［—砲—Armstrong gun］（名）「イギリス」國アームストロング會社にて製造する速射砲及鋼線砲の稱。「サー、ウィリアム、アームストロング」が千八百五十四年に創案し後綾旋條砲に基因して、漸次諸種の改良を加へたり。

アーメン［Amen］（感）「キリスト敎徒が祈禱の終りに唱ふる語。もと「ヴライ」語にて實にといふ意を表す。

アール［Are］（名）「フランス」國地積の名。一〇〇平方メートル、即ち我國の三十坪二合五勺。

ああ［嗚呼］（感）歎賞・悲哀等の情を表する時に發れ。［すゞ聲。嗟。嗚呼。於戲。

ああら（感）あゝ。あれ。［すゞ

あい［愛］（名）❶めづること。いつくしみ。あはれみ。❷好み樂しむこと。かはゆがること。❸慕ふこと。慾。❹

【佛】經語。

あい［哀］（名）❶あはれみ傷むこと。❷喪。——を-あらそ［爭］貴人の葬去したるとき、聲をあげてかなしみ泣く。「さまにいふ語。

あい（感）應答する聲。（唯）。

あい-あい［諾諾］（名、副）さげるさま又は多きさま。

あい-あい［哀哀］（名、副）かなしきさま又はいとはしさまにいふ語。

あいえん-きえん［愛絲機絲］（名）❶【佛】錢がありて人が相愛し、又、緣によりて種々の機會も生ずると。❷何事も緣の有無によると。❸不思議の緣。［緣。

あい-か［哀歌］（名）悲しき心を詠じたる歌。

あい-がい［埃塙］（名）もり。ほとり。

あい-かり［—カリ］［隘巷］（名）狹きこみち。

あい-かり［—カリ］［愛幸］（名）ちようあい。きにいり。

あい-かり［—カリ］［愛好］（名）愛しこのむこと。

あいきゃう［—キヤウ］［歡娛］（名）❶年をこえたる酒。❷盛酒けにしたる子持の鮎。［鮫鱒］。

あいきゃう［—キヤウ］［愛鄕］（名）鄕里を愛すること。

あいきゃう［—キヤウ］［愛敬］（名）かはゆしきこと。人づきのすること。［愛嬌］。

あいきゃう［—キヤウ］［愛敬］（名）あいきやう。

あいきゃう-あばた［—キヤウ—］［愛敬痘痕］（名）却て愛敬ある機に見ゆる痘痕。「そふるあくれ毛。

あいきゃう-げ［—キヤウ—］［愛敬毛］（名）顏に愛敬をかること。いつくしみ。あはれみ傷むこと。❷喪。——

あいきゃう-づく［—キヤウ—］［愛敬付］（自、か四）愛敬ある機に見ゆ。

あいきゃう-べに［—キヤウ—］［愛敬紅］（名）芝居にて俳優が耳朶に塗りたる紅。

あいきゃう-ぼくろ［—キヤウ—］［愛敬黑子］（名）却て愛敬ある機に見ゆるほくろ。

あいきゃう-まもり［—キヤウ—］［愛敬守］（名）婚禮の際花嫁の首にかくる守。

あいきゃう-もち［—キヤウ—］［愛敬餅］（名）婚姻後

［うはグンロトスムーア］

三日目に、舅姑におくる餅。
(あい-ぎょく[愛玉](名) 他人の娘の敬稱。
(あい-ぎん[愛吟](名) ❶つねに好みて詩歌を吟ずること。❷其の詩歌。「歌。」
(あい-ぎん[哀吟](名) 悲しみの意を詠じたる詩歌。
あい-くる-し[愛くるし](形,二) かはゆらし。あいきやうこぼるゝばかりなり。
(あい-ぐわん[哀願](名) なげきてねがふこと。哀情をうちあけてねがふこと、哀訴。
(あい-ぐわん[愛玩](名) 愛しもてあそぶこと。
(あい-け[愛假](名) [佛]婬欲のまよひ。
(あい-けい[愛敬](名) 愛情深くして禮儀厚きこと。
(あい-げう[愛樂](名) [佛]まことの愛。
(あい-こ[愛古](名) 古昔に關する事物を愛すること。好古。
(あい-ご[愛顧](名) なさけをかくること。ひきたて。
(あい-ご[愛護](名) ❶いつくしみて保護すること。❷芝居にて、女形の用ふる一種の鬘。
(あい-こく[哀哭](名) かなしみてなくこと。
(あい-こく[愛國](名) 自國を愛すること。自國を大切にすること。
(あい-こく-しん[愛國心](名) 自國を大切に思ふ心。「ふ心。」
(あい-こ-しゆぎ[愛己主義](名) [倫]「りこしゆぎ」(利己主義)に同じ。
(あい-さ[秋沙](名) [動]「あきさ」に同じ。
(あい-さう[愛想](名) ❶もてなしぶり又は應對。❷機嫌をとること。❸愛情、よしみ。——が-つきる[愛想盡] 興が醒めてその人に對する愛想も無くなる。——を-つかす[盡愛想] あいさうづかしをなす。

あいさう-づかし[愛想盡](名) ❶愛情を捨つること、よしみを絶つこと。❷よしみを絶ちて人を罵詈する言。
(あい-さつ[挨拶](名) ❶人と應對すること。❷否諾、返辭。❸時儀。
(あい-さつ-にん[挨拶人](名) ❶あいさつに出る人。❷仲裁人。「る人。」
(あい-し[哀子](名) 親の喪中にある子。
(あい-し[愛子](名) かはゆき子、いとしご。
(あい-じ[愛兒](名) 前條に同じ。
(あい-じつ[愛日](名) 〔左傳の註に冬日可愛とあるに出づ〕冬の日。
(あい-しふ[愛執](名) 愛情に執着すること。愛情絶ち難きこと。「情絶ち難きこと。」
(あい-しやう[哀傷](名) 人の死を悲しむこと。
(あい-じやう[愛情](名) 互に和合して他の幸福安寧を希ふ感情。めでいつくしむこと。
あい-す[愛](他,さ變) ❶いとほしく思ふ。かはゆく思ふ。❷異性人をかはゆく思ふ。❸たのしく思ふ。このむ。❹大切にす。❺すて難く思ふ、をしむ。
アイス-クリーム[ice-cream](名) 一種の食品。最も普通なる製法は、牛乳四合、玉子五個と砂糖三十目程の割合に混入して湯煎し、さまし置きて製氷器に入れ氷結せしむるなり。氷菓子。
(あい-せき[愛惜](名) をしむこと、をしみ。「こと。」
(あい-せき[哀惜](名) 人の死をかなしみをしむこと。
(あい-せき[哀戚](名) かなしみ、なげき。
(あい-せふ[愛妾](名) 氣に入りのめかけ。
(あい-ぜん[愛染](名) ❶[佛]明王の一。愛慾を司る。身色日光の如く、三目怒視し、六臂に杵(きね)鈴(すず)弓箭等を執り、光炎中に住す。❷役者の顔の隈どりの一、愛染明王に扮する時などに用ふ。

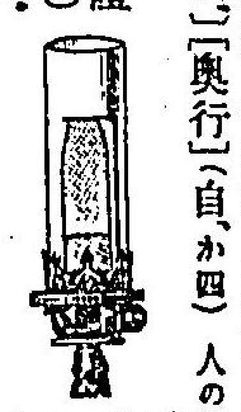
(あい-ぜん[靄然](名,副) たなびきわたるさまにいふ語。
(あい-ぜん[藹然](名,副) 和氣の集まるさまにいふ語。「ふ語。」
(あい-そ[哀訴](名) かなしみうつたへ。「あいぐわん」に同じ。
(あい-そ[愛想](名) 「あいさう」に同じ。
(あい-ぞう[愛憎](名) 愛することとにくむこと。
あい-そ-づかし[愛想盡](名) あいさうづかし。
(あい-た[愛他](名) 他人の幸福を計ること。
(あい-たい[靉靆](名) ❶雲のたなびきわたるさまにいふ語。❷めがね。
(あい-だい[欸乃](名) ❶舟に棹さす時相應ずる聲。❷ふなうたの節をとる聲。❸ふなうた。
(あい-たう[哀悼](名) 「あいせき」(哀惜)に同じ。
(あい-た-しゆぎ[愛他主義](名) [倫]自己の幸福は他人の幸福の中に見出すべしとし、他人の幸福を増進するを以て行爲の標準となす主義。利他主義。
廿あい-だち-なし[間斷無](形,二) ❶(あひだちなしの轉)❷わけへだてなし、差別なし。❸分別なし、わきまへなし。「いとあいだちなしや」
廿あい-だて-なし[商隔無](形,二) あいだちなし。
廿あい-たどころ[朝所](名) あしたどころ。
廿あい-だ-る[愛垂](自,ら下二) 愛せられてさまゞになす。あまゆ。「なまめきあいだれて」
(あい-たん-どころ[臺所](名) 「あしたどころ」に同じ。
(あい-ちやく[愛着](名) 愛にひかさるゝこと。愛情に執着すること。
あい-つ[彼奴](代) あやつ、あのやつ、きやつ。
廿あい-なし[間無](形,二) あひなし。

廿あい-なし[愛無](形,二) かはゆげなし。あいきやうなし。
廿あい-な-だのみ[あいな頼](名) あてにならぬ頼み。そらだのみ。「のみ。」
(あい-なめ[鮎並](名) [動]あゆなめ。
あい-にく[生憎](副) あやにく。
アイヌ[Ainu](名) 北海道舊土人の稱。元來彼等の國語にて人類の義なるを、廣くこれを以て其種族の名とす。

〔アイヌ〕

(あい-ねん[愛念](名) 愛するおもひ。
アイノ(名) 「アイヌ」に同じ。
(あい-ぶ[愛撫](名) なでさする如く寵愛すること。
(あい-べつ[哀別](名) かなしきわかれ。
(あい-べつり[愛別離](名) [佛]愛する人と心ならず別るゝこと。
(あい-べつり-く[愛別離苦](名) [佛]八苦の一。愛する人と別るゝ苦。
(あい-ぼ[哀慕](名) 親しきものに別れ、其人をかなしみしたふこと。
(あい-ほく[埃墨](名) 黒きほこり。
アイボリー[Ivory](名) 厚くして光澤ある西洋紙の名。名刺等を作るに用ふ。
(あい-まい[曖昧](名) ❶明白ならざること。たしかならざること。❷うしろぐらきこと。
(あい-まい-や[曖昧屋](名) 怪しげなる女を抱へおきて客を呼ぶ家。
(あい-みん[哀愍](名) あはれみ、なさけ。
(あい-ゆう[隘勇](名) 臺灣の生蕃を討平する土民の壯丁。
(あい-ゆう-せん[隘勇線](名) 隘勇が生蕃の來襲を防禦する爲に張れる歩哨線。

(あい-よく[愛慾](名) 愛着の心。
(あい-らく[愛樂](名) 相愛して樂しむこと。「とし。」
あい-らし[愛](形,二) かはゆらし、いとし。
(あい-れん[愛憐](名) あはれみいつくしむこと。
(あい-ろ[文色](名) あやめ、けぢめ、あやめ。
(あい-ろ[隘路](名) せまき嶮阻なる道。
(あう-あう[怏怏](名,副) 不快又は滿足せざるさまにいふ語、鞅鞅。
(あう-あう[嚶嚶](名) 小鳥の睦じげに鳴く聲。
あう-い-く[奥行](自,か四) 人の後につきて行く。
アウエル-とう[—燈][Auer lamp](名) 「はくねつとう」に同じ。


〔アウエルとう〕

(あう-き[快氣](名) 氣持のあしきこと。
(あう-ぎ[奥義](名) おくのて、おくぎ。
(あう-けい[狹陘](名) 狹(せま)き樹枝の間を飛びまはること。
(あう-さ[鶯梭](名) 鶯(うぐひす)の樹枝の間をくぐる如く飛びはねること。
(あう-さい[殃災](名) わざはひ、さいなん。
(あう-さつ[鏖殺](名) みなごろし。
(あう-し[奥旨](名) あうぎ、おくのて。
アウシキナ(名) 〔アイヌ語 Aush-kina〕[植] 毛茛科に屬する多年草。北海道などに産す。莖の高さ二尺五寸許、六七月の頃、莖頭に小白花開く。
(あう-しゆく-ばい[鶯宿梅](名) [植]梅の變種。花の香殊に高く、瓣は一重なるも八重なるもあり。
(あう-ぜつ[鶯舌](名) うぐひすのこゑ。「り。」

(あう-たう[櫻桃](名) [植]ゆすらうめ。
アウト[Out](名) 「ローンテニス」「ベースボール」などに用ふる語、技術を誤りて一點を失ひたること。
アウト-カーブ[Out curve](名) 魔球の一種。打手より遠き方に曲がるもの。
(あう-なう[懊惱](名) 心をなやますこと、なやみ、もだえ。
廿あう-なし[奥無](形,二) 深き思慮なし。あさはかなり。
(あう-べう[秧苗](名) 稻のなへ。
(あう-む[鸚鵡](名) [動]攀木類中鸚鵡科に屬する鳥。熱帶地方の産にして種類多し。體軀は頭に比して大に、嘴は短大にして、上嘴は鉤曲し下嘴は短小なり。舌は肥厚肉質にして巧みに人語をまね、羽色美麗なり。——の-さかづき[鸚鵡杯] 鸚鵡貝の殻にて作れる杯。
あう-む-がひ[鸚鵡貝](名) [動]頭足類中四鰓類に屬する貝。形は鸚鵡の嘴に似る。外套腔中に二對の鰓を具ふ。口の周圍に絲状の觸手數多あり。介殻は螺旋状をなし、外表に赤褐色の斑文あり、内面は美麗なる眞珠質を以て覆はる。介殻の内腔は許多の隔壁によりて數房に區分せられ、最終の大房に軀體を容る。介殻は、酒杯又は花瓶などに製す。
あう-む-がへし[鸚鵡返](名) ❶人より言ひかけられたる歌に、僅に詞を換へて、直ちに返歌となすこと。❷人よりさされたる杯を、僅に飮みて直ちに返杯すること。❸學說・議論などを聞きたるまゝに述ぶること。
あう-む-せき[鸚鵡石](名) ❶[鑛]孔雀石の一種。うすき黄緑色を帶ぶ。❷物の音の反響する石。
廿あう-よ-る[奥寄](自,ら四) 奥の方へ寄る。

廿あ-うら［足占］(名)　古昔の占法、足跡にて吉凶を占ふもの。

ア-ウン(名)　【佛】氣息の出入、悉曇音韻學により、アは一切開口の始め、ウンは諸聲合唇の終りなればいふ。(阿吽、阿呍)。

廿あえか(名)　㊀よわ〳〵しきさ。かよわきさ。㊁いたいけなると。

廿あえ-もの［肖物］(名)　あやかりもの。

(あ-えん［亞鉛］(名)　【化】青白色の脆き金屬、天然には方亞鉛鑛・菱亞鉛鑛等となりて存在す、適度に熱すれば展性を得、薄板となすべし、強く熱すれば再び脆くなり、遂に燃えて白色の酸化亞鉛を生ず、濕氣に觸るれば表面は變化すれど内部に及ばざるゆゑに、鐵線・鐵板を被ふに廣く用ひられ、又眞鍮・洋銀等の合金を製するに用ひらる。

あえん-イオン［亞鉛―］(名)　【化】無色にして二價の陽イオン、高等生物に對して毒性あり。

(あえん-くわ［亞鉛華］(名)　【化】白色の粉末、成分は酸化亞鉛にして、水に溶解せず酸類に溶解し、種々の亞鉛鹽を生ず、顔料及醫藥に用ひらる。

(あ-えんくわりん［亞鹽化燐］(名)　【化】揮發し易き無色の液體、淨水劑等として用ひらる。

(あ-えんそさん［亞鹽素酸］(名)　【化】烈しき腐蝕性を有する帶綠黃色の液、「ベンゼン」と硫酸との混合液に鹽素酸カリウムの粉末を混じて製す。

(あえん-ばん［亞鉛版］(名)　一種の印刷版、よく研磨したる亞鉛の面に描畫し、「タンニン」酸又は燐酸と「アラビアゴム」との混合液を用ひてこれを腐蝕せしめ、其上に「インキ」を捺して印刷す。

(あえん-まつ［亞鉛末］(名)　亞鉛の粉末。

あえん-めっき［亞鉛鍍金］(名)　亞鉛の溶液中に鐵を通じてその表に亞鉛の薄被を施すと、鐵の銹を防ぐに用ふ。

〔あれ・る らりるるれれ［煽］(自、他、ら四)　あふる。

あか［赤］(名)　七色の一、血の色に似たるもの。

あか［銅］(名)　【鑛】「あかがね」に同じ。

あか［垢］(名)　㊀あせあぶらなどの塵とまじりて肌に附着したる汚物。㊁物に附着したる流動體のかす。㊂身の不行狀

あか［淦］(名)　船中にたまりたる水。「㊀水。

アカ［閼伽］(名)　(梵語 Argha)㊀佛に奉る供物。

あか―［赤］(接頭)　或語に冠して、あらはなるさま、又は全きさまを表はす。「―はだか」、「―うそ」。

あか-あか［明明］(副)　頗るあかるく。

あか-あしげ［赤葦毛］(名)　馬の毛色、葦毛に赤みを帶びたるもの。

あかあし-しぎ［赤足鴫］(名)　【動】鴫科に屬する鶇(ツグ)大の鳥、嘴脚共に長く、脚は赤色を呈し、體の上部は「オリーブ」色にして、暗黃色の斑點あり、他は白色なり。あかがねしぎ。

あかあし-とんぼ［赤足蜻蛉］(名)　【動】とんぼの一種、雄は頭部胸部黑色にして、腹部は橙赤色なり、雌は雄よりも大きくして、胸腹部は赤色なり。

［あかあしぎ］

あか-あづき［赤小豆］(名)　【植】荳科に屬する栽培草本、花は概ね黃色、種子は通常帶赤色にして、稀に白色なるもあり、食料又は洗粉等に用ひらる。

あか-あは［赤粟］(名)　【植】禾本科に屬する直立草本、小穗狀花序は穗狀の圓錐花序に排列し、果實を生ずべき花は光澤を有す、種子は食用に供せらる。

あか-あり［赤蟻］(名)　【動】膜翅類中蟻科に屬する蟲、體長一分弱、體色黃褐色、後胸背の二刺は尖る、腹柄は二節にして腹部は光澤あり。

あかいと-をどし［赤絲縅］(名)　茜(アカネ)にて染めたる絲を以てをどしたる鎧。

あか-いも(名)　㊀【植】(い)さつまいもの一種、皮赤くして、味の佳良なるもの。(赤藷)。(ろ)さといもの一種、葉柄紫赤色なるもの。たうのいも。(紫芋)。

あか-いろ［赤色］(名)　㊀あかき色。㊁廿かさねの色目、表は蘇芳、裏は花田なるもの。あかばな。㊂廿織物の色、經紫にして緯の赤なるもの。

あか-いわし［赤鰯］(名)　㊀こぬかをまぶせたる鰯を、鹽漬けとなし又は乾したるもの、節分の日これをひいらぎに貫きて戸口に插し、おにやらひの儀式に用ふ。㊁錆びたる刀。

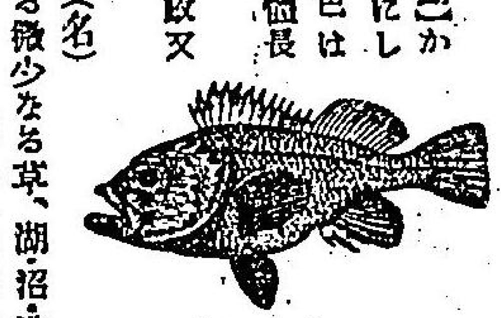
あか-うを［赤魚］(名)　【動】かさご科に屬する魚、體扁平にして口大く下顎稍隆起す、體色は脊部紅色にして腹部淡し、體長九寸餘に達す。

(あ-かう［阿衡］(名)　伊尹又は宰相の異名。

あか-うきぐさ［赤浮草］(名)　【植】蘋類槐葉蘋科に屬する微少なる草、湖沼・池・溝・水田等に夥しく浮生し、水面を紅色又は綠色ならしむ。(滿江紅)。

あか-うそ［赤噓］(名)　全くのいつはりごと。

あか-うなぎ［赤鰻］(名)　【動】圓口類中めくらうなぎ科に屬する魚、脊鰭なく、口唇に數條の鬚を生ず、鼻孔は口腔と通じ、眼は甚だ不完全にして皮下に隱る、體長一尺許、海に産し、口を以て他の魚體に吸着し、時には其體腔内に穿入して内部寄生を營むことあり。



［あかうを］

あか-うみがめ［赤蠵龜］(名)　【動】海洋に産する龜の一種、形狀大さ習性共にあをうみがめに酷似し、色は稍褐色を帶ぶ。

あか-うるし［赤漆］(名)　朱又は赤色の顏料を混へたる漆汁。

あか-えそ［赤鱛］(名)　【動】喉鰾類の魚、鯛に似て脊部に赤及び淡紅色の斑點あり、腹は白色にして深紅と淡紅との横條あり。

［あかえそ］

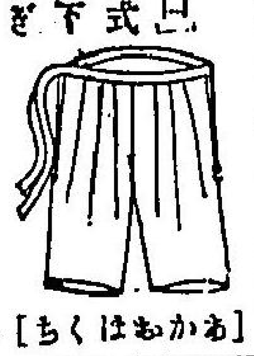
あか-えぞまつ［赤蝦夷松］(名)　【植】松柏科の喬木、北海道に産し、樹皮は赤褐色にして枝條細く軟かなり、針葉は細く枝に直角をなして互生す。

あか-えひ［赤鱝］(名)　【動】横口類に屬する魚、胸鰭頗る擴張して、體盤は圓扇形をなし、扁くして長き尾を有す、尾の中央に劍狀の鋭き棘ありて、背の中央に砂粒狀の突起線生す、體色は背淡黃にして腹白し、鰓孔は口と共に下面に開く、我國西南海に多く産す。

あか-えび［赤海老］(名)　【動】海老の一種、普通近海に見るものにして、長さ約三寸、車海老に似、體色は赤褐色、短毛を生ず。

あか-をどし［赤縅］(名)　茜にて染めたる絲又は革にて縅したる鎧。

廿あか-おほくち［赤大口］(名)　赤きはかまの別名、儀式などのときに、うへのはかまの下に著用するもの、すゞのひらぎぬを以て製す、色は緋を用ふるを常とすれど、老人は白張りを用ふ。



［あかおほくち］

あか-かうぢ［赤麴］(名)　色赤き麴、料理にてゆで玉子などを染むるに用ふ。

廿あか-かがち［赤酸漿］(名)　【植】ほゝづき。

あか-かげ［赤鹿毛］(名)　馬の毛色、鹿毛の赤みを帶びたるもの。(赤騮)。

廿あか-がさ［赤瘡］(名)　「はしか」に同じ。

あか-がし［赤樫］(名)　【植】殼斗科に屬する喬木、葉は橢圓形にして尖り、長き葉柄を有す、幼時は細毛生じ成長すれば平滑となる、木材は帶赤色を呈し、種々の用に供せらる。(赤樫、血樫)。

あか-がしは［赤柏］(名)　(い)【植】あかめがしは。(ろ)赤飯。「勝廻り外に物なし―」。

あか-かすげ［赤糟毛］(名)　馬の毛色、糟毛の赤みを帶びたるもの。

あか-かたばみ［赤酸漿］(名)　【植】酢漿草科に屬する小草本、酸味を有し、葉は三個の小葉より成る、莖は傾臥し、花は黃色なり、葉は食ふべく、又鏡を磨くに用ひらる。

あか-ガッパ［赤合羽］(名)　紅がら色の桐油紙にて製したる合羽、德川時代におもに卑賤なる者これを着用したり。

あか-がに［赤蟹］(名)　【動】蟹の一種、形小にして山谷溪間又は河堤等に穴居し、其の螯(ハサミ)赤色なり。やまがに。べんけいがに。

あか-がね［銅］(名)　【鑛】(赤金の義)淡赤色の光澤を帶びたる金屬、天然には純銅鑛・硫銅鑛となりて存在す、展性及び延性に富み、銀に次ぎて熱及び電氣の良導體なり、濕氣中にて綠色の銹を生じ、空氣中にて熱すれば黑色の酸化銅を生ず、用途甚だ廣し。

あかがね-しぎ［銅鴫］(名)　【動】あかあししぎ。

あかがは-をどし［赤革縅］(名)　茜にて染めたる革にて縅したる鎧。

あか-がひ［赤貝］(名)　【動】辨鰓類中あかがひ科に屬する貝、介殼は心臟形にして膨(フク)れ、ひだ數三十五内外あり、外面は淡褐色にして、内面は白色なり、我國にては多く東海に産し、淡水泥和せる淺海の泥中に棲息す、肉色赤くして食用に供せらる。きさがひ。

あか-がへる［赤蛙］(名)　【動】無尾類中尖指類に屬する兩棲動物、體色褐赤色にして暗褐色の斑點あり、指趾の末端尖り、よく跳躍す、肉は小兒の疳藥として効ありといふ。あかひき。

あか-かみきり［赤天牛］(名)　【動】天牛屬の甲蟲、頭部は三角形にして濃赤色なり、杉材の害蟲なり。

廿あか-がり［皸］(名)　「あかぎれ」に同じ。

アカ-き［閼伽器］(名)　「アカ」を佛に供する器具。

あか-ぎ［赤木］(名)　(い)【植】大戟科の喬木、葉は三出の複葉にして細小なる花簇生す、質堅牢にして色赤く、白色の木理あり、琉球・臺灣・印度より渡來し唐木細工に用ひらる。(ろ)皮をけづりたる材木。

あ-がき［足掻］(名)　あがくこと。

あか-ぎじ［赤雉］(名)　【動】「きんけい」に同じ。

廿あか-ぎぬ［緋袍］(名)　(い)緋色の袍(ハウ)。(ろ)赤色の狩衣を著たる檢非違使の下司。

あか-きび［赤黍］(名)　【植】禾本科の植物、もちきびの一種、穗の色赤し、酒を釀し或は團子に作る。(麻黍、丹黍)。

あか-ぎり［赤桐］(名)　【植】「ひぎり」に同じ。

あか-ぎれ［皸］(名)　(赤切の義)さむさにあたりて手足の皮の裂けたるもの。あかがり。

あ-が・く かきくくけけ［足掻］(自、か四)　㊀廿前足にて地をかく。(跑)。㊁あくせくす。㊂さま〴〵の方法を以て

て氣なもの。

あか-くさ［赤草］（名）【植】藜（アカザ）科に屬する草本、葉は細長にして全綠なり、花は苞を有せず、莖は帚とし、葉は食用に供せらる。

†**あか-ぐすり**［赤藥］（名）赤色の丸劑にして、昔時急病に用ひしもの、人參一匁と辰砂一匁とを混じて製す。

†**あか-ぐそく**［赤具足］（名）小札（コザネ）を赤き漆にて塗り、赤絲にしたる具足。

†**あか-くちば**［赤朽葉］（名）かさねの色目、うす紅に黃を帶びたるもの。

あか-ぐま［赤熊］（名）【動】食肉類中熊科に屬する獸、毛は茶褐色にして、喉に月の輪なく、大なるは八九尺に至る、性あらし、北海道に產す。（羆、熊）。

あか-くみ［淦汲］（名）あかとりひやく。

あか-くりげ［赤栗毛］（名）馬の毛色、栗色に赤を帶びたるもの。（黃騮）。

あか-げ［赤毛］（名）㊀赤ばみたる髮の毛。㊁樺に似たる馬の毛色。

あか-ゲット［赤毛布］（名）田舎より都會見物に出てたる人。

あか-けむし［赤毛蟲］（名）【動】蛾類の幼蟲、八九月頃現れ、桑の木に棲息し、九月の末土中に入りて蛹となり、翌年五六月頃羽化す、桑の害蟲なり。

あか-げら［赤啄木鳥］（名）【動】きつゝきの一種、脊は黑色にして白き斑點あり、頭及び腹の下部は赤色を呈し、腹の上部は茶褐色を帶ぶ、雌は稍色を異にせり。

あか-こ［赤子］（名）【動】毛足類中みゝず科に屬する細蟲、綫狀にして赤色を帶び、溝渠などの泥中に群棲す、採りて金魚の餌食とす。

あか-ご［赤子］（名）生まれてほどへぬ小兒。

あか-ごけ［赤苔］（名）【植】地衣類に屬する下等植物、紫色を帶ぶ。

あか-ごめ［赤米］（名）（い）細き赤斑のある米。（ろ）古びて赤みを帶びたる米。（は）だいたうまい。

あか-ごめつき［赤米搗］（名）【動】甲蟲類中米搗蟲の一種、頭・胸は黑色にして翅鞘は赤褐色なり、體は細長くしてやゝ扁平なり、巧に跳躍す。

あか-ざ［藜］（名）【植】藜科に屬する大草本、葉は長き葉柄を具して、綠邊に缺刻及少數の鋸齒を有し、多少卵形をなす、秋の頃粒狀の花開く、葉は食用に供せらる。

†**あかさか-やっこ**［赤坂奴］（名）江戸山の手の大名旗本に仕へたる奴。

あか-ざとう［赤砂糖］（名）精製せざる褐色の砂糖。

あか-さんご［赤珊瑚］（名）【動】珊瑚類の一種、暖流の深さ二十尋乃至百尋の海底の岩礁に固着す、觸手は八箇あり、皮質は橙色を呈し、骨格は緻密にして濃紅色を帶ぶ。

［ごんさかあ］

あかさんご-じゆ［赤珊瑚珠］（名）赤珊瑚の骨骼にてつくりたる珠。

あかし［證］（名）㊀あかすこと。證明すること。㊁證

あかし［燈］（名）ともしび。あかり。

†**あかし**［明釣］（名）餌を[illegible]、絲を寄せて釣ること。

あかし-ぶみ［證文］（名）ちかひぶみ。

あか-し［赤］（形、一）㊀[illegible]色なり。（丹、紅）。㊁光りあきらかなり。明。㊂心にうしろぐらき事なし。いつはりなし。

あかき-こころ［赤心］いつはりなき心。まごころ。（丹心）。

あかい-しんによ［赤信女］[illegible]。未亡人。

アカシア［Acacia］（名）【植】荳科に屬する植物、溫暖なる地方に產し、樹の高さ一二丈に及び、枝の末端に白き蝶形の小花開く、樹幹は材木とし、或はアラビアゴムの製造に用ひらる。

あかし-くらす［明暮］（他、さ四）夜をあかし日をくらす、月日をおくる。

あかし-だま［明石珠］（名）珊瑚珠に擬擬して、人工を以てつくれるもの、はじめ播磨國明石地方より出でしゆゑに此名あり。

あかし-ちぢみ［明石縮］（名）播磨國明石地方より產出するちゞみの織物。

あか-しで［赤垂柳］（名）【植】樺木科の喬木、高さ四五丈、外皮は平滑にして黑褐色を呈し、葉は互生し、楕圓形にして鋸齒を具ふ、花は雌雄を別にし、材は淡黃白色にして器具の柄とし、又椎茸を作るに用ひらる。

あか-しほ［赤潮］（名）硅藻類又は微細なる生物の多數に群集して色を生じたる海水、生物に害を及ぼす事あり。

あか-じみ［垢染］（名）垢にしみたるよごれ。

あか-じむ［垢染］（自、ま四）垢にしみてよごる、あかつく。

あか-しやこ［赤蝦蛄］（名）【動】海老の一種、大いさ車海老に匹敵し、前端の脚一對は螯（ハサミ）となり、背面には鞍形の紋あり。

あか-しらが［赤白髮］（名）あかみを帶びたるしらが。

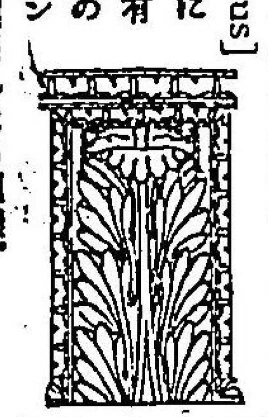
あか-す［明］（他、さ四）㊀あきらかにす。㊁祕密をあらはす。㊂うたがひを正して、事體を分明ならしむ。㊃障礙物を取りのぞく。㊄夜の明くるまで居る。

あか-すぐり（名）【植】虎耳草科の落葉灌木、莖の

欠

MISSING

アカンサス[Acanthus]（名）㊀【植】前世界に存し、鋸齒狀の葉を有したる多年生莨芀科の温帶植物。㊁アカンサスの葉を建築上に應用したる模樣。



[アカンサス(二)]

あかんぱう ⁻ᵖᵒ[赤坊]（名）あかご。みどりご。

あかんべい（名）「あかめ（赤目）」に同じ。

あき[秋]（名）夏のつぎ冬のまへ、即ち一年四時の第三次にあたる。天文學上にては、秋分より冬至までを其季節とし、氣象學上にては、九・十・十一の三ヶ月を其季節とす。――のあふぎ ⁻ᵒᵘᵍⁱ[秋扇]婦人の寵を其の侍（カシヅ）ける男子にうしなひで斥られざることを、圍の秋になりて用ひられざるにたとへていふ語。――のたのみ[秋田實]いね。――のななくさ[秋七草]秋に花さく七種の草、即ちはぎ・をばな・くず・をみなへし・ふぢばかま・なでしこ・あさがほ。廿――のみや[秋宮]皇后宮。

廿あき[商]（名）あきなひ。

あき[明]（名）㊀あきてあるところ。すきま。ひま。間隙。㊁なすことなくしてゐる時。ひま。いとま。閒暇。㊂ふさがりて居らぬこと。から。空虛。――のかた[明方]（名）陰陽家にて歲德神のありといふ方、萬福此方に集まるといふ。ゑはう。

あき[厭]（名）あくこと。いやになること。

あぎ[顎]（名）あぎと。あご。

廿あぎ（名）小兒。

（あぎ[阿魏]（名）㊀【植】繖形科に屬する多年生の草本、中央アジアに產す。㊁一種の藥品、あぎ草の根を截斷し、其流出せる乳液を採制したる褐膠樹脂樣のもの、不快なる臭氣を有す。おもに「ヒステリ」患者などに用ふ。

あき-あづき[秋赤小豆]（名）晚種の赤小豆、秋成熟するもの。

あき-あふひ ⁻ᵒᵘⁱ[秋葵]（名）【植】錦葵科に屬する植物、高さ六七尺、葉は掌狀に深裂し、花は大形にして、花瓣は黃色を呈し、下部は紅色を帶ぶ、肥大せる根は製紙の糊料に用ひらる。

[あきあふひ]

あき-いへ ⁻ⁱᵉ[明家]（名）人の住みて居らぬ家。「空家」。

あきうど[商人]（名）物品を賣買するを業となす人。あきんど。あきうにん。

あき-かぜ[秋風]（名）㊀秋の頃ふく風。㊁男女の情交冷かになること。

あきかぜ-づき[秋風月]（名）陰曆八月の異稱。

廿あき-がはり ⁻ᵍᵃʷᵃʳⁱ[商變]（名）一旦賣ひたるものをかへすこと。「――知ずとの御法あらばこそ」。

あき-かます[秋魳]（名）秋の頃のかます、味美なり。

あき-から[明空]（名）物の無くなりたる空。「り。

あき-からまつ-さう ⁻ˢᵒᵘ[秋唐松草]（名）【植】毛茛科からまつさう屬の宿根草、莖の高さ二三尺、葉は複葉にして小葉は三裂す、七八月の頃枝頭に花開く、花瓣なく、雄蕊は多く、雌蕊は三個あり。

あき-ぎり[秋霧]（名）秋の頃に立ちのぼる霧。

あき-ぎり[秋桐]（名）【植】唇形科の多年草、莖に稜ありて四角形をなす、葉は對生し、鋸齒あり、莖端に四五寸の花穗をつけ、紫色の花開く。

あき-ぐさ[秋草]（名）秋に花さく草の總稱。――のはな[秋草花]【植】「きく」に同じ。

廿あきくさ-の（枕）「むすぶ」に冠す。

あき-ぐみ[秋茱萸]（名）【植】胡頹子科に屬する植物、通常葉腋に數花を生じ、殆んど球形にして赤色なる果實を生ず。

あき-ご[秋蠶]（名）秋の頃、上蔟する蠶。

あきさ[秋沙]（名）【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、形は鴨に似て小さく、嘴端曲がりて嘴緣に齒あり、翼は黑白の斑を交へ、綠光あり、北地にて生殖すれど、冬期は南地に來る。こがも。あいさ。

廿あき-さ-す ˢᵃˢⁱˢᵘ ˢᵘˢᵉˢᵉ[贖]（他、さ四）買ひ主より賣り主にてつけをわたす。

あき-さば[秋鯖]（名）秋の頃のさば、味美なり。

あき-ざま[秋樣]（名）秋の樣なる時候。

あき-さめ[秋雨]（名）秋の候にふる雨。

廿あきさり-ぎぬ[秋去衣]（名）あきさりごろも。

廿あきさり-ごろも[秋去衣]（名）秋になりてきる著物。「――誰かとり見む」。

廿あき-しく[秋敷]（名）【植】「きく」に同じ。

廿あき-しとり（名）商賈の失敗。しくじり。「買ひてし絹の――かも」。

廿あき-しひ ⁻ˢⁱⁱ[明盲]（名）外觀は見ゆるが如くして、見えぬ目。あきめくら。

廿あき-しべ[秋蕊]（名）【植】「きく」に同じ。「雨。

あき-しめり[秋濕]（名）秋の頃長く降りつゞく

あき-しやう ˢʰᵒᵘ[飽性]（名）物事にあきやすき性質。

廿あき-しりぐさ[秋知草]（名）【植】をぎ。

廿あき-しろ[明白]（名）紙に文字などをかき殘したるところ。餘白。

あき-す[明巢]（名）㊀鳥の居らぬ巢。㊁人の居らぬ住家。

〔あきす-ねらひ ⁻ⁿᵉʳᵃⁱ[空巢狙]（名）人の居らぬ住家に入りて、物品を竊取する盜賊。

あき-ぜみ[秋蟬]（名）【動】蟬の一種、我國の特產

にして、形大きく、赤褐色の翅あり、夏より秋にかけて見ゆる最も普通のものなり、雄は腹部に鳴器を具へて、よく朗吟す。(蜉)。

[あきぜみ]

あきた[秋田](名) 稻の成熟せる頃の田。
あきたおり[秋田織](名) 羽後國秋田地方より産出する織物。
あきたじやうのすけ[秋田城介](名) 古昔、出羽の介にして、かねて秋田城を守りし者の稱。
あきたしゆんけい[秋田春慶](名)「あきたぬり」に同じ。
あきだな[明店](名) 人の居らぬ店、あきみせ。
あきたぶき[秋田蕗](名) [植] ふきの變種、羽後國秋田地方に産す、莖の高さ七尺、葉の大きさ傘ほどあり。
あきだる[飽足](自、ら四) 十分にあく、滿足す。
あきち[明地](名) 市街にて建物なき地、空地。
あきちやうじ[香茶菜](名) [植] 唇形科の草本、莖は方形にして高さ二三尺、葉は對生し、苦味あり、花は唇形にて紫碧色を呈す、驅蟲劑及び香料に用ひらる。
あきつ(名) [動] とんぼに同じ。
あきつかみ[明津神](名) 主上をたふとびて申し奉る語。
あきづく[秋付](自、か四) 秋の時候となる。
あきつは[秋津羽](名) 蜻蛉の羽の如き綾羅などのうすもの。「—のそでふるいもを」
あきつばめ[秋燕](名) [動] 天蛾科の昆蟲、前翅は灰褐色にして、細鱗を密生し、二本の黒條あり、後翅は小さくして赤褐なり、幼蟲は綠色にして白紋あり、兩側に二條の白線を呈す。

あぎと[頤](名) ❶あぎ、あご。❷うをの腮。
あぎとふ[喘](自、は四) ❶魚水面に浮かびて呼吸す。(噞喁)。❷小兒かたことにて物いふ。
あきなぐさ[秋無草](名) [植]「きく」に同じ。
あきなすび[秋茄子](名) 秋の頃の茄子、味美なり。
あきなひ[商](名) あきなふこと、物品の賣買。
あきなひはじめ[商始](名) 新年の商賣はじめ。
あきなひぶね[商船](名) 商品を載せて運ぶ船。
あきなふ[商](他、は四) 物品を金錢と交換す、賣買す。
あきにれ[秋楡](名) [植] 楡科に屬する木、葉は小形にして楕圓形をなし、周圍に鋸齒あり、花は九月末或は十月初に開く、果實は翅果にして柄を有す、木材は種々の用に供せらる。
あきはぎ[秋萩](名) [植] 豆科に屬する植物、山野に自生し、初秋花開く、葉は羽狀三出、花は紅紫色或は白色を呈し、莖は木質なり、果實は莢にして、觀賞用として栽培し、或は牛馬の食料に供す、又、葉は茶の代用に供せらる。(胡枝子)。
あきはつ[厭果](自、た下二)「なりはつ」、いやになる。
あきびと[商人](名) あきうど。
あきふたけ[秋二毛](名) 鹿の毛色、秋に至りて新しき短毛を發し、古き長毛を去りたるもの。
あきま[明間](名) ❶すきま、あはひ。❷不用にて明き居る室。(空房)。
あきみせ[明店](名)「あきだな」に同じ。
あきめくら[明盲](名) ❶あきしひ。❷文字をしらぬもの、文盲。

あきもの[商品](名) あきなひすべき品物。
あきもの[明物](名) 不用なるもの。
あきもも[秋桃](名) 秋になりて熟する桃實、なつもゝより大にして味美し。
あきや[明屋](名) 人の居らぬ家。(空屋)。
あぎやう[あ行](名) [文法] 五十音圖の第一行、あいうえおの稱。
あきやしき[明屋敷](名) ❶人家の敷地にして家の建ち居らざるところ。❷人の住まぬ邸宅。
あきらか[明](名) ❶はつきりとしたるさまにいふ語。あかるきこと。あざやかなること。❷疑はしきところなきさまにいふ語。判然たること。
あきらけし[明](形、二) あきらかなり。
あきらむ[明](他、ま下二) つまびらかに事の由をきはむ。(闡)。
あきらむ[諦](自、ま下二) おもひとまる、おもひきる。(念)。
あきらめ[諦](名) 思ひとまると、おもひきり。
あきれ(名)「あかぎれ」に同じ。
あきる[呆](自、ら下二) 思ひのほかなるものごとに遭遇して、なす所をしらずにあり。
あきれかへる[呆返](自、ら四) あきれてものがいへぬ、甚だしくあきる。
あきをさめ[秋收](名) 秋になりて田のものを收穫すること。あきのとりいれ。
あきんど[商人](名) あきうど。
あきんどかたぎ[商人氣質](名) 商人らしきこゝろ、些細の利をもおろそかにせぬならはし。
あきんどぶね[商船](名) あきなひぶね。
あきんどや[商人屋](名) 商賣をなせる家。

あきんどやど[商人宿](名) たび商人を宿泊せしむる宿屋。
あく[幄](名) 假屋などのまはりと屋根とに張りて圍へる幕。あげばり。

[あく]

あく[灰汁](名) ❶灰を水に浸したる黄色のうはずみ。❷植物類より出づる澁味を帶びたる液。
あく[惡](名) ❶好ましからざること、快からざること、つたなきこと、みにくきこと、粗末なること、めでたからざること、いやしきこと。❷[倫] 良心に於て否認し、又は嫌厭すべきものなること、道德律に違背したること。❸芝居にて、惡人の所わざを行ふ役、かたきやく。
あく[堊](名) 白き土。
あく[明](自、か四) ❶ひまになる、することなくなる。❷中の物なくなる、からになる。❸自然に開く。❹芝居が始まる。
あく[明](自、か下二) ❶あきらかになる、故まる。❷定まりたる年期が經過す。❸朝になる。
あく[明](他、か下二) ❶ひまになす。❷からになす。❸とざされたるものを開く。❹穴を穿つ。❺隔つ。❻芝居を始む。
あく[飽](自、か四) 十分に足る、滿足す。
あく[厭](自、か四) 十分にすぎていとはしくなる、いやになる。あきぬ。
あぐ[上](他、か下二) ❶上へやる、のぼす。(擧)。❷あたひを高くす。❸てうしを高くす。❹弘めつたふ、あらはす、「名を—」。❺登用す。❻手に持ちて高くす。❼官職又は祿などをうばふ。

❽無くす、「家をあげて行く」。❾獻上す、たてまつる。❿成功す、あがる。「又選の業を—」。⓫貴人の聲を請ふ。⓬へどつく、吐く。⓭藝妓などを身請に招く。
あくあく(しげ)[惡惡](形、二) 兒猶らしく、わるさうなり。
あくい[惡意](名) ❶人を害せむとする念慮。❷[法] 民法にて、或法律行爲をなすに當りて、其法律上の効力に影響を及ぼすべき事實の存在を知りながら實行せんとする精神。
あくうち[灰汁打](名) 灰汁をひき打ちたる紙。
あくうん[惡運](名) あく事をなせど、惡報をうけず、栄ゆること。
あくえき[惡疫](名) あしきはやりやまひ。
あくえん[惡緣](名) ❶男女の間、とかく思ふ儘にならねど、深く戀ひ思ふこと。❷あしき因緣。
あくがる[憧](自、ら下二) あこがる。
あくかん[惡漢](名) よからぬ事をする者。
あくかん[惡感](名) あくかんじやう。
あくかんじやう[惡感情](名) こゝろよからぬおもひ、不快なる心。
あくき[惡鬼](名) たゝりをなす魂、害をなす鬼。
あくぎ[惡戯](名) いたづら。わるふざけ。
あくきがひ[惡鬼貝](名) [動] 前鰓類の軟體動物、殼は心臟形にして鋭利なる突起多し、孔は圓形にしてその鉢は延長す。

[あくきがひ]

印度洋に多く産す。
あくきじん[惡鬼神](名)「あくき」に同じ。
あくぎやう[惡行](名) ❶惡しき行爲。❷みだらなるふるまひ、不品行。
あくぎやく[惡逆](名) ❶道德にもとれる極めて惡しき行。❷古の刑名、八虐の一、祖父・父母を殺さんと謀り、又伯叔父・姑兄・姉外祖父母・夫・夫の父母を殺すもの。
あくきん[惡金](名) ❶質の粗惡なる貨金。❷正當ならぬ手段によりて得たるかね。❸にせがね。
あくくわ[惡果](名) [佛] あしき果報。
あくくわ[惡貨](名) [經] 實質の價格が法定の價格と非常の差異ある貨幣、即ち、原質の甚だ粗惡なるもの。
あくくわへい[惡貨幣](名) [經] 前條に同じ。
あくげん[惡言](名) 惡しき言、わるくち。
あくこう[惡口](名) 人の感情を害する言。
あくごふ[惡業](名) [佛] 過去の惡事。
あくさ[惡作](名) [佛] 惡しき行を悔悟すること。
あくさい[惡妻](名) 婦德に缺けたるつま。
あくさう[惡相](名) 兇惡なる面相。
あくさう[惡瘡](名) ゑやうのあしきかさ。
あくさく[偓促](名)「あくせく」に同じ。
あくざけ[灰酒](名) 山茶花の灰を入れて醸したる酒、強烈なる風味ありて腐敗・變味等の憂なし。
あくさつ[惡札](名) 拙き書きもの。
あくし[惡詩](名) 拙き詩。
あくじ[惡事](名) ❶あしき行爲。❷わざはひ。

あかつき—あかり

あかつき—あかり　一四

あかつき—あかり

あかつき—あかり　一四

あかつき—あかり

あかつき—あかり　一四

あかつき—あかり

あかつき—あかり　一四

あかつき—あかり

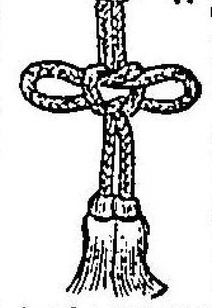
あけ-く・る れ、れ、る、るる、るれ、れよ [明暮](自、ら下二) 夜あけ日くれて、月日たつ。
あけ-くれ [明暮](名) よあけとゆふぐれと。あさばん。
あけ-くれ [明暮](副) 朝に夕に。つねに。ひゞに。
廿あけ-ぐれ (名) 夜明けがたのなほ少し暗き時。「―の程に出で給ひぬ」。
廿あけくれ-な・し くしき、けれ [明暮無](名) 夜にも日にも忘るゝ時なし。
あげ-こし [上輿](名) 肩にて擡(カ)く輿。
廿あげ-ごぜ [獻事](名) 神佛に物を供ふると。
あけ-ごろも [緋袍](名) 緋色のうはぎ。
あげ-さげ [上下](名) ㊀あぐるとさぐると。㊁ほむるとそしると。
あけ-さ・る ら、り、る、る、れ、れ [明去](自、ら四) 夜あけはなれて朝になる。あけはなる。
あげ-じとみ [上蔀](名) 上につりあげて開くやうにつくれる志とみ。
あげ-しほ オーシ [上潮](名) さしくる潮。さし志ほ。
〔あけ-すけ (名) おくそこ淺き人。秘密を守る能はざる人。
〔あけ-すけ (副) 無遠慮に。露骨に。
あげ-せん [上錢](名) ㊀物を貸し又は賣りて得たる錢。㊁日がけ又は月がけのかけせん。㊂人を勞したる報酬としてつかはす錢。
あげ-だい [揚代](名) 遊女をよぶ代。
あげ-だし [揚出](名) あげあぶらにて、豆腐・茄子などをかろくあげたるもの。
廿あげ-だたみ [上疊](名) 床の上におきて、貴人の座となす疊、其兩面に表と緣とをつけたるもの。
あけ-たて [開閉](名) 戸をあくるととづると。
廿あげ-だま [揚玉](名) かぶとの頭座のかざり。
廿あけつげ-どり [明告鳥](名) [動]にはとり。

あげつち-もん [上土門](名) ㊀屋根の上に土をおきたる門。あづち門。(垜門)。㊁圓柱二本の上に冠木を敲せ、女梁又は男梁にて勾配の緩なる屋根を受け居る門。
〔あげ-づめ [揚詰](名) ㊀物を常に上げ居る事。㊁藝妓などをあげつゞくると。
廿あげ-つらひ ラフーイツ [論](名) あげつらふと。辯論。
廿あげ-つら・ふ ラフーウ (はひふふへへ) [論](他、は四) すぢみちをあげ說く。よしあしをいひ爭ふ。ろんず。
あげ-ど [揚戸](名) 上に押しあげて開閉するやうにつくれる戸。
あげ-どうふ [揚豆腐](名) あぶらにてあげたる豆腐。あぶらあげ。
あげ-に [明荷](名) つゞらの一種。むしろにて作り、かどに竹をあみつけたるもの。
あけ-のこ・る ら、り、る、る、れ、れ [明殘](自、ら四) 夜あけて、なほ星などのこり見ゆ。
あげ-ば [揚場](名) 船より物を陸に上ぐる處。
あげ-ばうし ボーウシ [上帽子](名) 婚禮の時花嫁の被る帽子。
あけ-はなし [明放](名) あけはなすと。(開放)。
あけ-はな・す さ、し、す、す、せ、せ [明放](他、さ四) 戸などをのこりなく開く。あけてあるまゝにしておく。
あけ-はな・る れ、れ、る、るる、るれ、れよ [明離](自、ら下二) 夜があけさる。夜まったくあく。
あけ-はなれ [明離](名) 夜のあけはつると。又、其時。
あげは-のてふ テウ [揚羽蝶](名) [動]蝶の一種、普通にいふ蝶これなり、體長およそ八分乃至一寸、體色は綠黃又は黃色、前翅は長三角形にして後翅は半圓形をなし、共に黑色の地色に黃色の斑紋あり、物にとまるときは翅をあげ合はす、幼蟲は蝎蠋(イモムシ)なり。(鳳蝶)。

[あげはのてふ]

あげは-やどりばち [揚羽宿蜂](名) [動]揚羽蝶に寄生する蜂、胸及び腹の上部は赤褐色にして下部は黑藍色なり、脚は赤褐色に黑斑あり、翅は黃色なり。
あけ-はら・ふ ハーラウ (はひふふへへ) [明拂](他、は四) こと〴〵くあけはなす。
あげ-ばり [揚張](名) 假り屋などの四方・上部をかこふ幕。(幄)。
あけ-ばん [明番](名) 宿直を終へて退出すると。宿直せし次の日に休息すると。
あけび [木通](名) [植]木通(アケビ)科に屬する蔓草、山野に生ず、葉は掌狀複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初め花開く、萼片三個あり、雄蕊は六個ありて雌生す、果實は長楕圓形にして食すべく、わか葉も食用に供せらる。(山女、通草、丁翁)。
あけび-かづら [木通蔓](名) [植]あけび。
あけび-てふ チョウ [木通蝶](名) [動]一種の蛾、前翅は黑色、後翅は黃色にして黑紋あり、幼蟲は尺蠖に似て蛇目形の斑紋あり、多く木通の葉に棲む。
あげ-びさし [上庇](名) つきあげびさし。
あけ-ひろ・ぐ げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ [開擴](他、か下二) あけてひろくす。
あげ-ぶた [上蓋](名) あげいた。
あげ-ぶね [揚槽](名) 醪を壓搾してその汁液を受くる槽。
あけ-ぼの [曙](名) あかつきより朝までの間の少しくくらき頃の稱。ほの〴〵あけ。
廿あけぼの-ぐさ [曙草](名) [植]「さくら」の異名。
あけぼの-さう サウ [曙草](名) [植]龍膽(リンドウ)科に屬する草、葉は長卵形にして尖る、花は穀聚繖花序

に排列し、秋の初に開く、花冠は帶黃白色にして、暗色の細點を有す。ほたるさう。(獐牙菜)。
あけぼの-ぞめ [曙染](名) 染色の名、紅・鼠・紫・藍などにて、あけぼのゝ空色の如くに、ぼかしてそめたるもの。
あげ-まき [揚卷](名) ㊀小兒の髮のゆひかた、髮を左右兩方に分かちて結びたるもの。(總角)。㊁髮をあげまきに結ぶ幼時。こども。㊂あげまきむすび。㊃[動]有管類まてがひ科に屬する貝、介殼は稍や長方形をなして前後に開き、表皮は薄くして前後に於て少しくひだをなす、外面は淡茶褐色にして内面は白色なり、頭より紐の如きもの二すぢを出だし、あげまき結びに似たるゆゑ此名あり、我國西南海及内海等に多し。
あげまき-むすび [揚卷結](名) 紐の結びかた、輪を右左に出だし、中をいしだゝみに結びたるもの、みす・よろひなどのかざりとす。


[あげまきむすび]

あげ-まく [揚幕](名) ㊀能舞臺の橋掛りの出入口に垂下せる幕。㊁芝居の花道の出入口に垂下せる幕。
廿あげ-まさり [上優](名) 元服してかみをあげ、顏だち以前よりよく見ゆると。元服ばえ。
あげ-まど [上窓](名) つきだしまど。つきあげまど。
あげ-マンヂユウ [揚饅頭](名) 油にてあげたる饅頭。
廿あげ-みづ [揚水](名) 高き所に水を揚ぐる樣にしたる仕掛。
あけ-むつ [明六](名) あけがたの六つ時。卯の刻、午前六時のころ。

あげ-もち [揚餅](名) あぶらにてあげたる餅。
あげ-もの [揚物](名) ㊀一種の料理、水にてとかしたるうどん粉を、野菜又は魚介などにまぶし、これをあげあぶらにてあげたるもの。㊁ぬすみもの。
あげ-や [揚屋](名) 遊女を招きて遊ぶ家。
あげや-ざけ [揚屋酒](名) 揚屋にてのむ酒。
あげや-さしがみ [揚屋差紙](名) 娼妓を迎ふるとき揚屋より置屋に差し出す切手。
あげや-ばらひ バーラフイ [揚屋拂](名) 揚屋への遊興費の仕拂。
あけ-ゆ・く か、き、く、く、け、け [明行](自、か四) 東方よりほのかに志らみゆく。夜次第にあく。
あけらかん (名、副) 忙然たるさまにいふ語。
〔あ-げる げ、げ、げる、げる、げれ、げよ [揚](他、が下一) ㊀あぶらに浸(ひた)して煮る。㊁遊女・藝妓などを呼びてあそぶ。
あけ-わたし [明渡](名) あけわたすと。
あけ-わた・す さ、し、す、す、せ、せ [明渡](他、さ四) 家又は城をあけて、人手に渡す。
あけ-わた・る ら、り、る、る、れ、れ [明渡](自、ら四) 夜まったく明けはなる。
あげ-を [上緒](名) かむりの緒。(上緌)。
廿あ-こ [吾子](代) ㊀わが子を呼ぶ語。㊁人の子を親しみ呼ぶ語。
ア-コ [下火](名) (字の唐音) 禪宗にて火葬のとき、屍體に火をつくる法師の役名。(下炬)。
廿あ-こ [網子](名) あみを引く人。
あこ (名) [動]「あかう」に同じ。
〔あ-こ [彼處](代) あしこ。あそこ。
あご [顎](名) ㊀人類及其他一部の動物が發聲と食物の咀嚼とを營む器官、上顎と下顎とより成り、多くのもの、下顎は可動關節にして上顎は不動關節なり。あぎ。あぎと。(腭、頤)。㊁下顎の外面。おとがひ。㊂うをのえら。(鰓)。――が-おちる [顎落] 味よし。――が-ひあがる [顎干上] 生活の道を失ふ。――で-ひと-を-つかふ 自らたかぶり、人を見下げて指圖す。――を-はづす [脫頤] 大いに笑ふ。

アコウ [榕](名) (語原不詳) [植]桑科に屬する木、葉は革質にして、葉柄は細長なり、暖溫地方等に繁茂し、氣根を出だして横に平かに成長繁茂す、大なるは一樹の廣さ三町四方に至るものありといふ、觀賞用として栽培す。
廿あこがら・す さ、し、す、す、せ、せ [憧](他、さ四) あこがるゝやうにす。あこがらしむ。「我身をさしもあるまじきさまにあこがらし給ふ」。
あこが・る れ、れ、る、るる、るれ、れよ [憧](自、ら下二) ㊀心そゞろにうきたつ。魂身にそはず。㊁思ひをなやます。おもひこがる。あくがる。(憬)。
あ-こぎ [阿漕](名) (「逢ふ事をあこぎの浦に引く網の、たびかさならば人も知りなん」といふ歌より出づ) ㊀事の度のかさなると。㊁際限なくむさぼると。
あご-だいりき [顎大力](名) 口のみにて大きなる事をいふもの。
あこだ-うり (名) [植]葫蘆科に屬する蔓草、果實は形小さくして圓く、皮赤くしておもてに條なし。(紅南瓜)。
あこだ-がた (名) ㊀まるがた、圓形。㊁一種の兜、十代目宗安のつくりはじめしもの、形圓くしていただき凹む。
あご-なし [鰓無](名) [動]あごなし科の魚、上顎大きく、下顎極めて薄し、體は黃金色背に灰色の斑紋あり、鱗の各列に灰色の線あり、尾鰭の端はみな灰色なり。
あご-ひげ [顎鬚](名) ㊀下あごに生ずるひげ。

㊂芝居にて、役者の用ふる鬘(カツラ)の一種、頭頂のあるもの。

廿あこめ(名) あづのめ。賤婦。「田中の井どに光れる田藻、採め採め―」。

廿あこめ[衵](名) 中古、婦人の肌に近く着る衣。又、男子の裝束の下に着るものをもいふ。

[あこめ]

廿あこめ-あふぎ[衵扇](名) 一種の扇、三十九枚の薄き檜板を彩絲(イロイト)にて綴りたるもの、貴婦人の禮裝のときに用ふ。

廿あこめ-ぎぬ[衵衣](名) あこめ。

廿あこめ-すがた[衵姿](名) 衵を着たる姿。

廿あこめ-ばかま[衵袴](名) 古昔、女のつけたる袴、多く衵をきたるときに用ふれば、かくいふ。

あこや-がひ[阿古屋貝](名) 【動】異柱類中あこやがひ科に屬する貝、介殼は稍々四角形をなし、殼頂は一方に偏在す、外面は粗くして暗褐色に少しく蒼色又は黑色を帶ぶれど、内面は眞珠色にして閃光を帶ぶ、我國にては肥前・志摩・能登等に多く産す、世に貴重せらるゝ眞珠は、此貝の病的産物なり、しんじゆがひ。そでがひ。たまがひ。(珠母)。

[あこやがひ]

廿あこや-だま[阿古屋玉](名) あこやがひより出づるたま、即ち、しんじゆ。

アゴン[阿含](名) 【佛】(梵語 Agama)㊀敎法の義、特に釋迦牟尼佛の說けりし敎法をいふ、㊁特に小乘を指していふとあり。

あさ[朝](名) 夜あけてより正午までの間。――の-かう[朝講] 朝座(アサザ)の講席。

あさ[麻](名) ㊀【植】桑科に屬する草、葉は掌狀複葉にして對生す、花は雌雄異種にして、莖の皮の纖維を採りて絲を製す、其用途甚だ多し、種子もまた食用とすべし、廣く各地に栽培せらる。(大麻)。㊁あさいと。㊂麻の布。

あさ―[淺][接頭] 或語に冠してあさき意を表はす。

あざ[痣](名) 皮膚に異常の色をあらはしとゞむる部分、色素の病的增加又は充血によりて生ず。

あざ[字](名) あざな。

あさ-あけ[朝明](名) あさぼらけ。あけがた。

廿あさ-あけ[淺緋](名) あか色の薄きもの。

あさ-あさ[朝朝](副) まいあさ。あさごとに。

あざ-あざ[鮮鮮](名) はっきりしたるさまにいふ語。あざやか。たしか。

あさ-あさ・し[淺淺](形、二) あさはかなり。おくそこ見ゆ。

あざ-あざ・し[鮮鮮](形、二) あざやかなり。たしかなり。

あさ-あめ[朝雨](名) 朝のほどよりふりいだす雨、又、朝降りて晝に霽るゝ雨。

廿あさ-あゐ[淺藍](名) 藍色の薄きもの。

廿あさ-い[朝寢](名) あさね。

あさ-いと[麻絲](名) 麻の莖の皮を剝ぎ、其の纖維を採りて製したる絲、需用極めて多し。

あさ-うら[麻裏](名) あさうらざうり。

あさうら-ざうり[麻裏草履](名) 一種の草履、あさいとの平うちを裏につけたるもの。

あさ-うり[淺瓜](名) 【植】(い)しろうり。(ろ)へちま。

あさ-おき[朝起](名) あさ早くおくると。あさ早くおくる性質。

廿あさ-かげ[朝影](名) ㊀あさひに照らされて映(ウツ)る影。㊁人の瘦せたるすがた。「―に我が身はなりぬ」。

あさ-がけ[朝駈](名) ㊀朝早く敵陣に馳せ向かふこと。㊁朝早く外出すること。

あさ-がすみ[朝霞](名) 朝のほど、たなびくかすみ。

あさ-かぜ[朝風](名) ㊀あさふくかぜ。㊁【地】海岸及び山谷にて日出後しばらく陸地より海上へ、又は山頂より溪谷へ吹きおろす風。

あさ-がた[朝方] あさのほど。

廿あさ-かたち[朝形](名) あさのすがた。

あざ-がひ[阿座貝](名) 【動】はまぐりの變種、大形にして肉の色白し。

廿あざ-かへ・す[さしすせ](他、さ四) 心を入れて見る。くりかへして行ふ。

あさ-がほ[朝顏](名) ㊀廿朝、臥床より出でゝ程へぬほどの顏。ねおき顏。「ねくたれの―も時ならず御覽ぜん」。㊁【植】旋花科に屬する蔓草、變種多し、葉は心臟形にして通常三裂す、花は大形美麗にして種々の色を有し、夏より秋にかけて、朝早くひらき日中に至りてしぼむ。けにごし。しのゝめぐさ。(牽牛花)。㊂切面圖等の形が梯形をなせるもの。㊃【植】廿桔梗。㊄【植】廿むくげ。㊅【動】かげろふ。

あさがほ-あはせ[朝顏合](名) 種々の牽牛花を持ち寄りて、其優劣をあらそふあそび。

あさがほ-がひ[朝顏貝](名) 【動】腹足類に屬する貝、介殼は形狀稍や蝸牛の介殼に似て厚く、美麗なる紫色を呈す、軟體は介殼の内にありて球狀をなす、深海に棲息し、時に群集して大なる一帶となり、海面に浮游するとあり、我國小笠原島等に多く産す。

[あさがほがひ]

あさがほ-ぞめ[朝顏染](名) 染模様の名、紺又は紫を以て、大形に染めたるもの。

あさがほ-なり[朝顏形](名) 器物の形の牽牛花の形に似て、上方開き下方窄(スボ)みたるもの。

あさがほ-やき[朝顏燒](名) 牽牛花の花の形に燒きたる陶器、便所などに用ふ。

あさ-がみ[朝髮](名) 朝おきたるまゝにて、まだくしけづらざるほどの髮。あさねがみ。

あさがみ-の(枕)「おもひ亂れて」に冠す。

あさ-がみしも[麻上下](名) 武家時代の一種の服裝、麻布にてつくりたる上下。

あさ-がゆ[朝粥](名) 朝食ふ粥。

あさ-がら[麻殼](名) 皮を剝ぎ取りたる麻の莖。をがら。あさぎ。(麻幹、麻稭)。

あさ-がら[白辛樹](名) 【植】齊墩果(エゴノキ)科に屬する灌木、春の末白き花を結け實を結ぶ、花序は複性にして雄蕊は通常十箇あり、實は四五の翼を有す、これより油を採るべし。

あさ-がらす[朝烏](名) 朝のほどに鳴く烏。あけがらす。

あさ-がり[朝獵](名) 朝のほどはやく行ふ獵。

廿あさ-がれひ[朝餉](名) ㊀朝の食事。あさめし。㊁天子の朝の供御。㊂主上の朝食を召し上がる所、淸涼殿の内にあり。

あさ-ぎ[麻木](名) 「あさがら[麻殼]」に同じ。

あさ-ぎ[淺黃](名) ㊀刈安(カリヤス)にて染めたる色。うすき黃色。㊁廿かさねの色目、表も裏も共に薄き紺色のもの。

あさ-ぎ[淺葱](名) うすきあゐいろ。みづいろ。そらいろ。(淡縹)。

廿あさ-ぎ[惡木](名) 醜惡なる材木。そまつなる木。「東屋の―のはしら」。

あさぎ-ざくら[淺葱櫻](名) 【植】櫻の變種、花瓣は一重にして色は白なれど、萼の色萌葱(モエギ)なるにより、花も靑色をおびて見ゆ。

廿あさ-ぎた[朝北](名) 朝のほどに吹く北風。「―のいでこぬさきに」。

あさぎ-てふ[淺葱蝶](名) 【動】大形の蝶、前翅は水色にて外緣は黑色に水色の斑紋あり、後翅の外緣は暗赤色なり、幼蟲は毛なく、二三對の角狀の長き突起を出だし、蛹は逆に懸垂す。

あさ-ぎぬ[麻衣](名) 麻布の衣服、喪服に用ふ。

あさぎ-まく[淺葱幕](名) 劇場に用ふる淺黃色の幕。

廿あさ-ぎよめ[朝淨](名) 庭などを朝掃きてきよむること。

あさ-ぎり[朝霧](名) 朝のほど、たちおほふ霧。

廿あさぎり-の(枕)「おもひまどふ」に冠す。

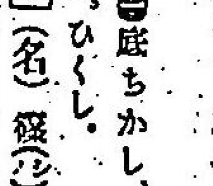
あさぎり-さう[朝霧草](名) 菊科艾屬の植物、莖の高さ一二尺、葉は細長く分裂し、七八月の頃複總花を開き全體に白毛を生ず。

廿あさぎ-わん[淺葱椀](名) 靑き漆にて塗りたる椀、多く京都にて製し德川時代の初世に行はる。

あさくさ-がみ[淺草紙](名) 一種の紙、古紙・襤褸(ボロ)等を水中に浸潤し、これを搗きて抄造す、紙の最も下等なるものにて、落紙(オトシガミ)として用ふ、東京淺草より多く出だす、すきがへし。

あさくさ-のり[淺草海苔](名) ㊀【植】あまのり。㊁一種の食品、あまのりを紙の如く漉きたるもの、色黑く紫色を帶び香氣あるを良しとす、武藏國大森邊より産す、古昔、多く武藏國淺草川邊より出だしゝより此名あり。

廿あさ-くちなし[淺山梔](名) くちなし色の薄きもの。


[あさぐつ]

あさ-ぐつ[淺靴](名) 一種のくつ、桐にて造る、もとは革なりしといへり、平常裝束着用の時にはく。

あさ-ぐも[朝雲](名) 朝のほど、空にたつ雲。

あさ-ぐもり[朝曇](名) 朝のほどのくもり。

あさくら-ざんせう[朝倉山椒](名) 【植】山椒の一種、實・葉共に普通の山椒より大きく香氣つよし、もと但馬國養父郡朝倉村より多く出でしによりて此名あり。(蜀椒、巴椒、漢椒)。

廿あさ-げ[朝開](名) あさあけ。

廿あさ-げ[朝餉](名) あさめし。あさがれひ。

廿あさけし-むらさき[淺消紫](名) 紫色を薄くし光澤を消したるもの。

あさ-けぶり[朝烟](名) あさのほど、飯を炊(カシ)ぎなどするよりたちのぼる烟。

あざけり[嘲](名) あざけること。わらひ。そしり。

あざけ・る[らりるるれれ][嘲](他、ら四) さげしみいふ。あざみわらふ。

あさ-ごろも[麻衣](名) 麻ぬのにてつくりたる服、多くは喪服として用ふ。あさぎぬ。

あさざ[莕](名) 【植】龍膽(リンダウ)科に屬する水草、葉は圓狀心臟形にして、葉腋に二三梗を出し、夏の頃花を水上に開く、花冠は絲狀に細裂せる緣邊を有して色深黃なり、嫩(ワカ)きものは食用に供せらる。はなじゆんさい。(莕菜、荇菜)。

廿あさ-ざ[朝座](名) 【佛】法華八講などのとき、朝につとむる勤め又は說敎。

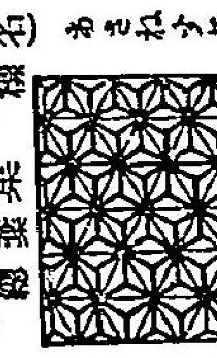
あさ-ざけ[朝酒](名) 朝のほどにのむ酒。

あさ-さむ[朝寒](名) 朝のほどに膚のうすさむく感ずること。

あさ・し[しくしき、しけれ][淺](形、二) ㊀底ちかし。奥近し。㊁うすし。あはし。㊂いやし。ひくし。

廿あさおぬ-はら[淺篠原](名) 篠(シノ)の疎に生

じたるはら。
あさ-じほ[朝潮](名) 朝の程さしくる潮。
あさ-じみ[朝凍](名) 朝、大地の凍りてあること。
あさ-じめり[朝湿](名) 冬の朝などの露霜にてものゝ濕れること。
あさ-じも[朝霜](名) ❶朝おきたる霜。❷あさざけ。
十あさじも-の(枕)「け」に冠す。
あさ-すがた[朝姿](名) 朝おきたるまゝの姿。
あさ-すず[朝涼](名) 夏季に朝のほどあつくならぬ間。
あさ-すずみ[朝涼](名) ❶夏季に朝はやく起きてすゞむこと。❷十「あさすず」に同じ。「―のほどに、出たまひけれど」。
十あさ-スハウ[淺蘇芳](名) すはう色の薄きもの。
あさ-せ[淺瀨](名) 水のあさき瀬。
あさ-だ[淺田](名) 底淺き田。
十あさ-だち[朝立](名) 朝早く出立すること。
あさ-ぢ[淺茅](名) みじかくして繁茂せざる茅。
あさぢ-ざけ[淺茅酒](名) 肥後國より産出する一種の酒。色白く味濃厚なり。
あさぢ-なは[淺茅繩](名) 祓除(ハラヒ)の時用ふる繩。茅にてつくれるもの。
十あさぢ-はら[淺茅原](名) まばらに茅の生じたる原。
十あさぢ-はら[淺茅原](枕)「つばら〳〵」に冠す。
十あさぢ-ふ[淺茅生](名) 淺茅の生ひたる處。
あさ-つき[淺葱](名) 【植】百合科に屬する栽培植物。葉は細くして空洞を有し食用に供せらる。花蓋は淡紫色を呈し、形狀稍らつきやうに類す。鱗莖の表皮は紅紫色を帶ぶ。(胡葱、蒜葱)
あさつき-なます[淺葱膾](名) 一種の料理。あさつきを茹(ゆ)でゝ、これにあさりのむきみを加へ、酢味噌にてあへたるもの。
あさ-づきん[麻頭巾](名) 麻の布にてつくりたる頭巾。昔の町老人の冠るもの。
十あさ-づく-ひ[朝附日](名) 朝さしのぼる日影。
十あさ-づく-ひ[朝附日](枕)「むかふ」に冠す。
十あさ-づく-よ[朝月夜](名) 曉方に夜未だあけはなれず、月のなほ殘りてあるほど。
あさ-づけ[淺漬](名) 大根を干して、麴又は鹽とにつけたるもの。
{あさって(名) あすのつぎの日。(明後日)
十あさづま-ぶね[朝妻船](名) ❶近江國坂田郡朝妻といふ處の渡船。❷その中にて賣淫する女。
あさ-つゆ[朝露](名) 朝のほどにおきたる露。
十あさつゆ-の(枕)「置く」「消」に冠す。
あさ-で[淺手](名) 輕少なる負傷。すこしのてきず。
十あさ-で[麻手](名) あさぬのゝきもの。(麻調布)
十あさで-こぶすま[麻手小衾](名) 麻ぬのなどにて作れる衾。あさぶすま。
十あさ-てづくり[麻手作](名) 手織の麻の布。
十あさ-ど[朝戸](名) 朝のほど、まだ開かぬ戸。
十あさ-どこ[朝床](名) 朝起き出ぬほどのね床。
十あさと-で[朝戸出](名) 朝はやく、外に出づること。(朝外出)
十あさ-どり[朝鳥](名) あさのほどに、塒(ネグラ)をたつ鳥。
十あさどり-の(枕)「かよふ」に冠す。
十あさと-やり[朝戸遣](名) 朝に戸をあくること。
十あさ-な[朝菜](名) 朝くふ食物。
あざな[字](名) ❶支那にて、實名の外に一般に親しく呼ぶ時に用ふる名。❷我國にて、學者文人が、支那風を學びて、實名以外に附したる名。❸あだな、渾名。❹一村のうちの小區域。
あさな-あさな[朝朝](副) 朝ごとに。まいあさ。
あさ-なぎ[朝和](名) 【地】朝のほど海風と陸風と交代するとき、一時間ばかり海上の靜穩なること。
十あさな-けに[朝來](副) 朝ごとに。日々。
あさ-なは[麻繩](名) 麻をなひつくりたる繩。
あざな-はる[糾](自、ら四) 絲などのからみあふ。まとはる。
あざな-ふ[糾](他、は四) 絲などをからみあはす。なふ。よる。まとふ。
あさな-ゆふな[朝夕](副) 朝にゆふに。あけくれ。あさばん。
あさ-にじ[朝虹](名) 朝、西の方に現はるゝ虹。
十あさ-ぬ[糾](他、な下二) あざなふ。
あさ-ぬの[麻布](名) 麻絲にて織りたる布。
あさ-ね[朝寢](名) 朝おそくまで眠りてゐること。
あさね-がみ[朝寢髮](名) 朝起きいでしまゝのみだれたる髮。
あさね-ばう[朝寢坊](名) あさねする人。
あさ-の-は[麻葉](名) 模樣の名。麻の葉より取りたる形。


[あさのは]

あさのは-かへで[麻葉楓](名) 【植】楓樹科の喬木。葉は數條に分裂し、四月頃黃色總狀の花を簇く。雌雄異株なり。
あさ-の-み[麻實](名) 苴麻(サク)の實。色黑く形圓し、噛みつぶせば一種の芳香あり、藥用又は食用とす。
あさのみ-むし[麻實蟲](名) 【動】金花蟲科の甲蟲、光澤ある暗綠色にして橢圓形をなす。麻の害蟲なり。

あさ-はか[淺](名) 思慮のたらぬこと。考へのあさきこと。
十あざ-はる[糾](自、ら四) あざなはる。
あさ-はん[朝飯](名) あさめし。あさげ。
あさ-ばん[朝晩](名) あさとゆふべと。あさゆふ。
あさ-ばん[朝晩](副) あさにばんに。ひゞ。
あさ-ひ[朝日](名) 朝昇る太陽。あさ出づる日。(旭) ――の-みはた[朝日御旗] 朝日の模樣のある旗。日本の國旗。
十あさひ-からかさ[朝日傘](名) 一種の傘。紙の色を緋芳(ヒハウ)にてそめて造る。元祿以前、あさひぐしと共におこなはれたるもの。
あさひ-かげ[朝日影](名) あさひのひかり。あさひの色。
あさひ-がに[朝日蟹](名) 【動】蟹の一種。甲は適度の厚さを有し、前肩の部に巨大なる扁棘を列生す。兩側は極めて狹き弧を畫き、甲尻に向ひて傾出す。甲色は朱紅にして美麗なり。べにがに。えやうぎやうがに。
あさひ-がひ[朝日貝](名) 【動】雙鰓類中異柱類に屬する貝。介殼は薄く蓋は扁く、色淡赤くして雲母の狀あり。よめがひ。
あさひ-かまぼこ[朝日蒲鉾](名) 背のうへを紅にてそめたる蒲鉾。
十あさひ-ぐし[朝日櫛](名) 一種の櫛。鹿の角を緋芳(ヒハウ)にてそめて造る。
十あさひ-こ[朝日子](名) あさひ。(朝暉)
あさひ-マンヂユウ[朝日饅頭](名) 紅色にそめたる饅頭。
あさひ-やき[朝日燒](名) 陶器の一種、正保年間小堀政一が山城の工人に命じて燒かしめたるもの、多く茶碗を製す。
十あさ-びらき[朝開](名) 朝、船の帆を開きて漕ぎ出づること。「―こぎにし舟」。
十あさ-ぶ[淺](自、は下二) ふかくもなくあさ〳〵しくあり。あさはかにてあり。
十あさ-ぶ[糾](他、は下二) あざなふ。
十あさ-ぶ[淺](他、は四) あさむ。あなどる。
十あさ-ぶ[淺](自、は四) あさくあり。
十あさ-ぶすま[麻衾](名) 麻にてつくりたる衾。
あさ-ぼらけ[朝開](名) 夜のあくる時。あけがた。
あさ-ま[朝間](名) あさのうち。あさのあひだ。
あさ-まし(形、二) ❶あさはかにてあり。たのみがひなし。❷興さめたり。あきるゝばかりなり。❸きもつぶる。おどろくばかりなり。❹さもし。みすぼらし。
あさ-まだき[朝未明](名) 夜のあけぬ前。まだき。
あさま-つげ[朝熊黃楊](名) 【植】伊勢國朝熊(アサマ)山に多く産するつげの木。材は黃色にして質堅く、印材となすべし。をはりつげ。
あさ-み[淺](名) ❶あさきところ。❷あさき度合ひ。❸鬘の一種。芝居にて俳優に扮する役者の用ふるもの。
あざみ[薊](名) 【植】菊科に屬する草本。たけ低くして葉は針狀の鋸齒を有す。苞は針狀の尖端を具し、總花托は圓毛狀の小苞を有す、莖は冠毛を帶ぶ。山野所在に自生し、夏秋の頃、紅紫色の花を開く。
十あざみ-あ-ふ[嘲合](自、は四) 相互にかろしめあふ。相互にそしりあふ。
十あさみ-ぐさ[淺見草](名) 【植】「まつ」の一名。
あざみ-ぐは[薊桑](名) 【植】桑の變種、葉は薊に似る。
あさ-みどり[淺綠](名) うすきみどりいろ。うす…
十あさ-む[淺](他、ま四) あさはかなりとおとしむ。あざけりあなどる。
あさ-む[淺](自、ま四) あきる。おどろく。
あざむ-く[欺](他、か四) ❶いつはりて、人をたぶらかす。だまかす。だます。❷そしる。わらふ。
十あさ-むらさき[淺紫](名) 紫色のうすきもの。
十あさ-め[朝目](名) 朝起きたるときに見るさま。
あさ-めし[朝飯](名) あさの食事。あさげ。
あさめし-まへ[朝飯前](名) ❶朝いまだ食事をせざるほど。❷仕事の易きこと。
十あさ-も[麻裳](名) 麻の布にてつくれる裳。――の-みぞ[麻裳御衣] 麻布にてつくれる白地の御喪服。
十あさも-よし(枕)「木」「莖」などに冠す。
あざやか[鮮](名) うるはしくあきらかなるさまにいふ語。はつきり。あきらか。
十あざや-ぐ[鮮](自、か四) あざやかになる。はつきりす。
十あざや-げる[鮮](他、か下二) あざやかにす。
あさ-やけ[朝燒](名) 日の出づる前、東の空の赤く見ゆること。
あさ-ゆ[朝湯](名) 朝入浴する湯。又、朝入浴すること。
あさ-ゆふ[朝夕](名) あさとゆふと。あさばん。
あさ-ゆふ[朝夕](副) あさゆふごとに。
あさ-よひ[朝宵](名) あさゆふ。
あさら-か[淺](名) あさ〳〵しきさまにいふ語。あさはか。
十あざらけ-し[鮮](形、一) あざやかなり。
あざらし[海豹](名) 【動】鰭脚類中あざらし科に屬する水産動物、前後の兩肢は共に短小にして五趾に隱る

[あざらし]

十古語　一個語方言　一字音

り、雄幹長く頭圓く、尾に至るに從ひ漸々細し、全身に毛密生し杏黑にして光澤あり、黑斑あるものは殊に麗し、北海道・千島等の寒き海に多く産し、常に水面に游泳す、毛皮は取りて服飾に用ひられ、又、脂肪より油を製す。
あさり [淺蜊] (名) 【動】有管類中はまぐり科に屬する貝、介殼は稍々三角形にして外面は多少鱗子(ウ)及稍居をなし、淡杏色にして白色又は淡黑色の斑紋あり、肉は食用に供せらる、我國東海・内海に多く産す。[す。(蛤仔)。
あさり [漁] (名) 魚をとること。
アザリ [阿闍梨] (名) 【佛】(梵語 Acārya)(い)師となるべき僧の稱、(ろ)僧の官名。
あさ・る らりるるれれ [漁] (他、ら四) ㊀魚貝などをたづね取る。㊁餌をさがす。食を求む。㊂尋ねさがす。求めあるく。「不和になる。
廿**あさ・る** れれるるれれよ (自、ら下二) 人と人とのあひだ、ざりわれこひのゐど」。
廿**あざ・る** れれるるれれよ [戲] (自、ら下二) たはぶる。たはむる。「たちあ「はむる。ざる。
廿**あざ・る** れれるるれれよ [餒] (自、ら下二) 魚肉などくさる。くさる。すゆ。(餒)。
廿**あざれ-がま・し** しくしくしきしけれ (形、二) 戲れがまし。みだりがまし。「ゆ。
あざれ-ば・む まみむむめめ (自、ま四) あざれがましく見
あざ-わら・ふ [嘲笑] (他、は四) せゝらわらひす。あざけりわらふ。
あさ-を [麻苧] (名) 麻の纖維より製したる絲。
(あ-さんくわちっそ [亞酸化窒素] (名) 【化】無色にして甘味を有する氣體、冷水に解け易し、暫時吸入すれば人をして笑ひを催さしむるゆゑに、笑氣の名あり、繼けて吸入すれば、一時感覺を失するに至る、齒科醫は多くこれを麻醉劑として用ふ。

(あ-さんくわどう [亞酸化銅] (名) 【化】さんくわだいいちどう。
ア-さん-れん [下三連] (名) (アは下の唐音) 漢詩にて、一句の下の三字が平ならば平三つ、仄ならば仄三つ、共に同じきものが揃ふと、近體にては、忌むべきものとす。
あし [足] (名) ㊀動物の下方の肢、地に立ち又は歩むためのもの。(脚)。㊁人類のあしのくるぶしより下の稱、趾骨十四對より成り、これに諸種の筋肉附着して其部局の運動を主どる。㊂あしのゆび。あしゆび。㊃あゆむこと。あゆみ。「—はやし」。㊄山のすそ。ふもと。㊅ものゝ下につきて、其物をさゝふる用をなすもの。「—つきの膳」。㊆餅などのねばり。「—が強い」。㊇垂れさがりて見ゆるものの下の方。「旗の—」。㊈船の水に沒する部分の稱。㊉一つの直線に、垂線の出合ふ點。⑪太刀の紐をつけてつるところ。⑫ぜに。——**があがる** [足揚] たよる所なくなる。——**がおもい** [足重] 動作にぶし。——**がつく** [足付] 行き方知らる。——**のやまひ** [足病] かっけ。——**のゆ** [足湯] 旅宿につきたるとき足を洗ふ湯。——**を あらふ** [洗足] 賤業を止めて正業に就く。——**をだす** [出足] ㊀秘密をふと漏らす。㊁豫定の金額より遣ひ過す。
あし [蘆] (名) 【植】禾本科に屬する水草、春宿根より生ず、枝なくして莖・葉共に竹に似る、秋白き穗の花を着く。よし。なにはぐさ。たまえぐさ。(蘆、葭、葦、葮)。——**のまろや** [蘆丸屋] 蘆にてふきたる假屋。
(あ-し [啞子] (名) おし。
あ・し しくしくしきしけれ [惡] (形、二) ㊀宜しからず。わるし。

㊁好ましからず。快からず。㊂粗末なり。いやし。みにくし。「に。
あし-あし-に [足足] (副) 人々。おのおの。各自
あし-あと [足跡] (名) 地に足の形を殘せるあと。
あし-あぶり [足炙] (名) 火を貯へて足をあたゝむる器、アンくわ。
あし-あらひ ダライ [足洸] (名) ㊀あしをあらふこと。「㊁あしだらひ。
あし-うち [足打] (名) 器にあしをつけたるもの。
廿**あし-うら** [足占] (名) あうら。「稱。足の下面。
あし-うら [蹠] (名) 足のそこの地にむかふ所の
あし-おし [足押] (名) 一種の遊戲、ゐりゐして、互にすねとすねとを押しあひて、勝負するもの。
あし-おと [足音] (名) あるく時に發する音。
あしか [葦鹿] (名) 【動】鰭脚類中あざらし科に屬する水産動物、性狀最もあざらしに近し、體色は茶褐、體長は殆んど二丈に達するものあり、或は海中に群泳し、或は岩上に起居す、岩上に睡眠するも必ず一頭の番兵をなすあり、東海・北海に多く産す、毛皮は種々の用具に製せらる。(海驢)。——**のばん** [葦鹿番] (名) 葦鹿が睡眠中その中の一頭が番兵をなすが如く代りあひて寢ずに番をなすこと。
あじか [簣] (名) 土などを運ぶ農具、形ざるかごに同じ、おもに竹又は藁にてつくる。「だい。
あしかが-じだい [足利時代] (名) むろまちじ
あし-がかり [足掛] (名) ㊀高處へのぼるとき、足をかくるもの。あしば。あしだろ。あなゝひ。㊁事に着手する手づる。たより。
あし-がき [葦垣] (名) 葦にてつくりたる垣。
あしがき-の (枕) 「ふる」「おもひみだる」「まぢかし」に冠す。
あし-かけ [足掛] (名) ㊀あしをかくる所。あしがゝり。㊁器械體操にて、鐵棒に兩手と片足とをかけてあがる技。㊂精密に月日を計算せずに、某年より某年までを概算していふこと。「—三年」。㊃てかけ。

あし-かし [足枷] (名) 足にはむるかせ、古昔、罪人を拘留する爲めに用ひしもの。あしかせ。
あし-かせ [足枷] (名) あしかし。
廿**あし-がた** [足形] (名) あしあとの形。
あし-がため [足固] (名) (い)足をすこやかにすること、足を歩行にならすこと。あしならし。(ろ)柱の下部を堅固にする爲に打ちつくる横木。
あし-がちる (枕) 「難波」に冠す。
あし-がなへ ガナヘ [足鼎] (名) 足ある鼎。
あし-かなもの [足金物] (名) 太刀のあしをなせる金物。

[あしかし]

あし-がに [葦蟹] (名) 葦のはえたる海邊などに「すむ蟹。
あし-がは ワーガ [足革] (名) 鷹につかふ鷹のあしにつくる革ひも。あしを。
廿**あし-かび** [葦芽] (名) あしの芽。
あし-がひ イーガ [葦貝] (名) 【動】はまぐりの變種、介殼は黃褐色にして、葦に似たるあやあり。
あし-がま [足釜] (名) 足のあるかま。
あし-がも [葦鴨] (名) 【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、頸長く、嘴は軟皮を被り末端のみ硬し、脚短くして後方に位し、前三趾間に蹼ありて游泳に適す、頭はやゝ赤く、眼上は赤又は白のすぢあり、背は淡褐色にして腹は灰色、つばさに碧き羽まじり、嘴と脚とは黑し、海川・池沼に棲む候鳥なり。
あし-がら [足搦] (名) あしがらみ。
あし-がらみ [足搦] (名) (い)相撲・柔術にて、他

の足を我の足をからみてうち倒す技。(ろ)かまきり蟲の巣。おほぢがふぐり。
あし-かり [葦刈] (名) 葦をかりとること。又其の人。
あし-がる [足輕] (名) ㊀合戰のとき、徒歩にて出て立つ賤卒。ざふひやう。ほそつ。㊁徳川時代にて、士分の下に屬する一階級。
廿**あし-ぎぬ** [絁] (名) ふとき絲にて織りたるき「ぬ。
廿**あし-きらひもの** イーキャウ [凶棄物] (名) あしく忌むべき穢物。「あなすゑの——」。
廿**あし・きる** らりるるれれ [剕] (他、ら四) 支那の古昔、膝蓋骨を切り去る刑に處す。
あし-くせ [足癖] (名) ㊀あしの形又は歩みかたにつきたるくせ。㊁相撲にて、敵の足に我の足を掛けてうち倒す技。
あし-くび [足首] (名) 足の踝(クルブシ)のあたりの稱。
アおくわん [阿字觀] (名) 【佛】悉曇音韻學にて一切の言語は、「ア」の音より出づといふより、阿字を觀ずれば一切諸法本不生の義を觀じて、諸法の空に達し一切の障を斷つといふこと。
あし-げ [葦毛] (名) 馬の毛色、白に黑みのさしげあるもの、古昔は、青馬をいへり。
あし-げ [足蹴] (名) 足にてけること。
あし-げい [足藝] (名) 手のなき者の仰臥して足にて手にてするが如き種々の技を演ずること。
廿**あしけ・し** くしくしきしけれ [惡] (形、二) わるきさまなり。「かるかやの亂れてあれどあしけくもなし」。
廿**あしけ-びと** [惡氣人] (名) あしき人。惡人。
あしげ-ひばり [葦毛雲雀] (名) 馬の毛色、あしげに雲雀毛のまじりたるもの。
あしげ-ぶち [葦毛斑] (名) 馬の毛色、あしげに「ぶちあるもの。
あし-こ [彼處] (代) あのところ。かしこ。

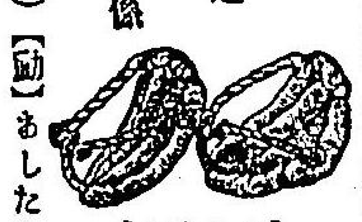
あし-ごゐ [葦五位] (名) ぼんなうさぎ。
あじさし (名) 【動】鷗(カモメ)に似たる一種の水禽、鷗よりは形小し、嘴は細くして末端曲がる、尾は燕に似て分岐す、常に海の上に飛びかふ、種類多し。

[あじさし]

あし-ざはり [足障] (名) (い)歩むにさゝはりとなるもの。(ろ)足の裏に物のふるゝ心地。
あし-ざま [惡樣] (名) わろきやうなること。「しざ。
あし-しろ [足代] (名) 高處へのぼる足がゝり。あしば。
あし-すだれ [葦簾] (名) 葦にてつくりたる簾。よしず。
あし-ずまふ モーズ [足相撲] (名) 一種の遊戲、兩人相尻居して、互に足のさきにてはねあひをなすこと、倒れたるを負けとす。
あし-ずり [足摩] (名) 憤怒・悲痛などのとき、身をもがきて足を踏みならすこと。ぢだんだをふむこと。あがき。(蹉跎)。
あし-ず・る らりるるれれ [足摩] (自、ら四) もがきて足をする。ぢだんだをふむ。
あし-ぞろへ ロエソ [足揃] (名) 人馬の足なみをそろふること、軍隊の進行を整ふること。せいぞろへ。
あし-だ [足駄] (名) みちわろきとき用ふる下駄、臺はおもに桐にて齒は樫・欅などにて造り、はなをすげて足にはく。
あした [朝] (名) ㊀あさ。㊁あす。明日。
あし-たか (名) 【動】みづすまし。
あし-だか [足高] (名) 脚などの足のたかきもの。
あしだか-ぐも [足高蜘蛛] (名) 【動】蜘蛛類中長脚類に屬する蟲、脚細く長く、これを高くして歩行す、離脱し易し、大概晝間は隱伏し夜間出て、徘

徊す。あしながぐも。(蟏蛸)。
あしたぐさ[鹹草](名)【植】繖形科に屬する草、海濱に生ず、うどに似たる葉ありて、夏白き花を開く、八丈島の民專ら食用とすといふ。あしたば。
あしたづ[葦田鶴](名)【動】つる。其の多く葦の生じたる水邊に居るよりいふ。
廿あしたどころ[朝所](名) 中古、太政官にありし一局の名。あいたどころ。あいたんどころ。
あしたば(名)【植】あしたぐさ。
廿あしだま[足玉] 古昔、脚結(アユヒ)につけて飾とせし玉。
あしだまり[足駐](名) ㊀すべて、足などとゞむる處の稱。㊁軍隊の暫時とゞまる處。
あしだらひ[足盥](名) 足をあらふたらひ。せんそくだらひ。
あしだを[足駄緒](名) 足駄のはなを。
[あしついで][足序](名) あるくついで。みちついで。途次。
あしつき[足付](名) 足のかたち。足のやうす。
廿あしつき[足杯](名) 足のつきたる食器。
廿あしつき[葦付](名)【植】水草にして海苔の類、食ふべし。「―とると瀨にたたすらし」。
あしつぎ[足繼](名) 高き所へ手をとゞかせんためのあしのだい。ふみだい。ふみつぎ。
廿あしづつ[葦筒](名) 葦の幹の空虛の面にある薄皮。
あしづの[葦角](名) 葦の新芽。(葭)。
廿あしづのの(枕) ひとへに冠す。
あしで[葦手](名) 一種の書體、文字をくづして葦の生えたるやうに書きなすもの、多くは詩歌などの歌のちらしがきに用ふ。
あしてがき[葦手書](名) あして。
あしでがた[葦手形](名) あしての書體。

あしてがらみ[足手搦](名) 手足にまとひつきて自由ならぬこと。又、妻子など身のほだしとなるにもいふ。あしてまとひ。ほだし。
あしてまとひ[足手纏](名) あしてがらみ。
あしでもじ[葦手文字](名) あしてにかきなしたる文字。
あしどめ[足留](名) (い)人の外出を止むること。(ろ)染色の斑を防ぐこと。
あしどめぐすり[足留藥](名) 染色のあしどめに用ふる藥品、多く硫酸礬達解汁よりつくる。
あしどり[足取](名) ㊀あしびやうし。あしぶみ。㊁あるきぐあひ。あしのはこび。㊂【經】取引所に於て相場の高低すること。
あしと・る[掎](他、ら四) ㊀他人のかた足を執る。㊁敵の後面を制す。
あしなか[足半](名) 一種の草履、馬のくつの如くにて、人の足の裏のなかばまでなるもの。
あしなが[足長](名) 古昔の想像上の人種、脚の非常にながきもの。
あしながぐも[足長蜘蛛](名)【動】あしたかぐも。


[あしなか]

あしながだこ[足長蛸](名)【動】蛸の一種、八腕手の中二本は非常に長し、食用に供せらる。
あしながばち[足長蜂](名)【動】蜂の一種、黑色にして背に四の赤褐條あり、腹部に粗毛生じ、脚長し。
あしながばへ[足長蠅](名)【動】蠅の一種、脚長く翅脈少く、水邊に棲みて他蟲を食す、益蟲なり。
あしな・ふ[蹇](自、は下二) 足のはたらき不自由になる。足きかずなる。(跛)。

あしなへ[蹇](名) あしなへたること。又、其人。(跛)。
あしなべ[足鍋](名) 一種の鍋、三足ありておもに酒のかんをするもの。
あしなへがめ[蹇龜](名)【動】すっぽんの一種。
あしなへ・ぐ[蹇](自、が四) あしなふ。(跛)。
あしなみ[足並](名) 歩む調子。
あしな・ゆ[蹇](自、や下二) あしなふ。(跛)。
あしならし[足馴](名) 足のはたらきをならすこと。あしがため。
あしな・る[足馴](自、ら下二) あるきなる。
廿あしに[葦荷](名) 葦を多くつかねたるもの。「大船に―かりつみ」。
あしぬぐひ[足拭](名) あしを拭ふ布。あしふき。
あしのけ[脚氣](名) かっけ。
廿あしのねの(枕) 「根」「分」「夜」「ひじか」に冠す。
あしのはがれひ[葦葉鰈](名) このはがれひ。
あしのはぶえ[葦葉笛](名) 葦の葉を卷きてつくりたる笛。
あしのほわた[葦穗綿](名) 葦の穗を衣服に入れ綿に代用したるもの。
あしば[足場](名) ㊀あししろ。あしがゝり。㊁あしもとのぐあひ。
あしばくぎ[足場釘](名) 圓柱に攀る足場として打込みたる釘。
あしばまるた[足場丸太](名) 足場を組むに用ふる丸太。
あしばや[足早](名) あゆみの早きさまにいふ語。
あしはやをぶね[足早小舟](名) よく走る小舟。
あしはら[葦原](名) 葦の生じたる原。
あしはらがに[葦原蟹](名)【動】蟹の一種、

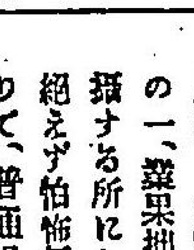
はさみに毛ありて、足には毛なきもの。
あしび(名)【植】石南(シャクナゲ)科に屬する小木、山野に自生す、葉は楕圓形にして常に綠色をなす、牛馬これを食へば中毒す、春小白花を開く。(馬醉木、梫木)。

[あしび]

あしび[葦火](名) 葦をたきてもゆる火。
あしびきの(枕) 「山」「峯」に冠す。
あしびやうし[足拍子](名) 舞樂・演劇などにて、樂人・俳優の足踏みしてとる拍子。
廿あしふ[葦生](名) 葦の生じ居るところ。
あしふき[足拭](名) あしぬぐひ。
あしぶね[葦船](名) 葦をつみたるふね。
あしぶち[足斑](名) 馬の毛色、四足共に白色なるもの。よつじろ。
あしぶとのこばち[足太鋸蜂](名)【動】鋸蜂科に屬する蜂、體稍大にして黑褐色なり、常に泥土に附着す、幼蟲は綠色にして黑き背線あり、樺の害蟲なり。
あしぶみ[足踏](名) ㊀足にて地を踏むこと。㊁體操にて、一定の場所にとゞまり、左右兩足にて交互に地を踏む動作。
あしべ[葦邊](名) あしの叢生したる水邊。
あしへん[足偏](名) 漢字の偏の名、跣・跨などの字の左方にある足の字の稱。
あしぼそ[足細](名)【植】禾本科の草本、莖は纖長にして節あり、葉は長き披針形にして脚部に向ひ漸く狹く質柔軟なり、花穗は一寸五分乃至二寸五分細長くして綠色なり。(莠竹)。

あしぼね[足骨](名) ㊀脚部を構成せる骨。㊁足の力量。
あしま[葦間](名) 葦の生ひ茂りたる間。
あしまかせ[足任](名) 足に任せてあるくこと。足のつゞく限り歩むこと。
あしまつひ[蜱](名)【動】線蟲類に屬する蠕形動物、形は線狀をなす、幼時かまきりの腹内に寄生し、終りに水中に出でゝ老成す。
あしまとひ[足纏](名) 足にまとひつくもの。
廿あしまゐり[足參](名) 貴人の足を撫でさすること、足の按摩。「右近を、御―に召す」。
あしもと[足下](名) ㊀足のもと。足のあたり。(脚下)。㊁足のはこびやう。㊂自家に接近なる場所。――をみる[見足下] 弱點につけこむ。
あしもとカハラ[足下瓦](名) 鬼瓦の左右につけたる裝飾用の瓦。
あしもとぬき[足下貫](名) 多く打ちつけたる貫の内最も下の貫。
(あじや[啞者](名) 發音の機能の缺けたるもの、多くは先天的に聽覺を缺く。
あしや[葦屋](名) 葦にて葺きたる家屋。
(あじやら[亞相](名) (相、即ち大臣に亞ぐ官の義)大納言の異名。
(あじやらあつ[亞晶質](名)【鑛】火成岩の合分、一部は結晶し、他部は結晶せざるもの。
あしやがま[葦屋釜](名) 足利時代に、筑前國葦屋村より鑄出したる釜、土佐光信等の下繪にて繪模樣を鑄出したるもあり、茶道にて最も貴重す。
あしやすめ[足休](名) つかれたる時などに足をやすむること。
アジャリ[阿闍梨](名)【佛】「アザリ」に同じ。

アシュラ[阿修羅](名) (梵語 Asura)㊀印度の鬼神。㊁【佛】六道又は六趣の一、葉果揣さものゝ生を損する所にして、常に闘戰絶えず怕怖無限なり、四種あり、普通には其第三なる變化生のものを指す、即ち、天と權を爭ふものといふ。


[アシュラ]

アシュラかい[阿修羅界](名)【佛】阿修羅の住する所。
アシュラだう[阿修羅道](名)【佛】阿修羅界へ趣く道。
アシュラわう[阿修羅王](名)【佛】力つよくたくましく、梵天・帝釋とあらそひて、正法をほろぼさんとしたる惡魔。
あしよわ[足弱](名) ㊀歩行の達者ならぬこと。㊁婦女・老・幼の稱。
廿あしよわぐるま[足弱車](名) 進みのおそき車。
あしらひ(名) あへしらひ。もてなし。
あしら・ふ(他、は四) あへしらふ。
あじろ[網代](名) ㊀冬期に、水中に竹又は木を組みならべて網の代りとし、魚を捕るに用ふるもの、㊁檜の木又は竹を組みて筵の如く織れるもの、用途甚だ多し。㊂あじろぐるま。

[あじろ(二)]

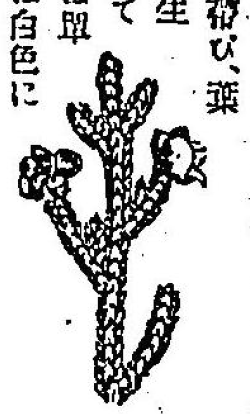
あじろあみ[網代編](名) ㊀あじろを編み造る人。㊁あじろがたに編みたるもの。
あじろうち[網代打](名) 網代を川に設くること。
あじろがき[網代垣](名) 網代にて造りたる垣。
あじろかご[網代駕籠](名) あじろにて張りたる駕籠。
あじろがさ[網代笠](名) 網代張のかぶり笠。

あじろ—あしを

あじろ-がた［網代形］（名） あじろの組み目の形に出來たるもの。
あじろ-がま［網代釜］（名） 竹の網代の籠の内外に白灰と砂とを苦汁にて煉り、これに塗りてつくり、鹽を煮つむるに用ふる釜。
あじろ-ぎ［網代木］（名） 魚をとるあじろをかくるためにたつる木。
あじろ-ぐみ［網代組］（名） 竹・薄板等を網代形に組みたるもの。
あじろ-ぐるま［網代車］（名） やかたをあじろにて張りたる車。
あじろ-ごし［網代輿］（名） 竹のあじろにて張りたる輿。
あじろ-てんじやう［網代天井］（名） 網代張の天井。
あじろ-ど［網代戸］（名） あみど。
あじろ-ばり［網代張］（名） ㊀あじろにて張りたるもの。㊁あじろ笠の一種、徳川時代の小身ものなど馬上にてかぶれり。
あじろ-びと［網代人］（名） あじろもり。
あじろ-びやうぶ［網代屏風］（名） 竹又は薄板の網代を綴ぢ合せて屏風となしたるもの。
あじろ-ほ［網代帆］（名） 竹を編みて造りたる帆。
あじろ-もり［網代守］（名） 川の網代の番人。
あし-わけ［足別］（名） 足のとりはづしの出來るやうに製作したる器物。
†あしわけ-をぶね［葦別小船］（名） あしまをわけて漕ぎ行く船。「みなといりの—さはりおほみ」。
あし-わざ［足業］（名） ㊀あしげい。㊁足をもちて人を投倒す柔道の技。
あし-わた［葦綿］（名） 葦の穗の綿の如きもの。
あし-を［足緒］（名） (い)狩獵用の鷹の足につなぐ緒。(ろ)太刀の足金物につけて帶取を通す革。
あし-をけ［足桶］（名） 水中にて仕事をなす時、凍えぬやうに足を入れおく桶。

あす—あせ

あす［明日］（名） 今日のつぎの日。みやうにち。あくる日。よくじつ。
†あ-す［淺］（自、さ下二） ㊀川・海などの底あさくなる。㊁色褪めてうすくなる。さめてかはる。うすらぐ。
〔あすこ［彼處］（代） あそこ。
あす-ならう［翌檜］（名）［植］あすはひのき。
あす-は［翌檜］（名）［植］あすはひのき。
あすは-ひのき［翌檜］（名）［植］松柏科に屬する喬木、直立十丈餘直徑二尺餘に及ぶものあり、樹皮は粗にして赤褐色を帶び、葉は鱗片狀をなして對生し、表面深綠色にして裏面粉白色なり、花は單性雌雄同株なり、材は白色にして淡黄を帶び、木理直く脂氣多くして濕氣に堪ふ、用途甚だ多し、最もよく深山陰濕の地に繁殖す。ひば。（羅漢柏）。


［あすはひのき］

あす-び［翌檜］（名）［植］あすはひのき。
〔あすぶ［遊］（自） あそぶ。
アスファルト［Asphalt］（名） どれきせい。
アスベスト［Asbestos］（名） いしわた。
アスラ［阿修羅］（名）［佛］「アシュラ」に同じ。
あせ［汗］（名） ㊀人又は他の動物の體表に出づる分泌液、鹹味と臭氣とを有す、絕えず分泌すれど、少量なれば直ちに蒸發するを以て認むるを得ず、體溫騰するときなど多量に分泌す。㊁船艙内の積荷より蒸發する水蒸氣の滴。——をかへす［返汗］ あせじむ。——になる［汗成］ あせをかく。——をにぎる［握汗］ 危く思ひていらだつ。
†あ-せ［我兄］（代） 男子を親しみて呼ぶ稱。

あぜ—あせか

あぜ［畦］（名） ㊀田と田とのさかひのほそみち。くろ。㊁敷居又は鴨居の溝の中間にある仕切。
あぜ［綜］（名） 織物の經絲をすべ持つために用ひる具。
〔あ-せい［亞聖］（名） 聖人に亞(ツ)ぐほどの大賢人の稱、儒學にて、孟子・顏淵などをいふ。
〔あ-せい［阿世］（名） 世間の俗人におもねると、又その人。
あぜ-いと［綜絲］ あぜの中にて機(ハタ)の上下のたていとをすべ持つ絲。
（あ-せうさん［亞硝酸］（名）［化］ 硝酸より酸素一分子少きもの、酸化窒素を氷水中に通ずるときこの水溶液を得、青色を呈す。
あせうさん-アミール［亞硝酸亞密爾］（名）［化］揮發可燃性黄色透明の液體、果實様の臭氣と灼熱様の味とあり、醫藥として用ふ。
あせうさん-アンモニウム［亞硝酸—］（名）［化］結晶狀の塊、潮解し易く分解し易し、窒素の製法に使用せらる。
あせうさん-カリウム［亞硝酸—］（名）［化］淡黄色の水に溶解し易き鹽、普通には棒狀として製す、人工色素を製するに用ひらる。
あせうさん-ソーダ［亞硝酸曹達］（名）［化］あせうさんナトリウム。
あせうさん-ナトリウム［亞硝酸—］（名）［化］水に溶解し易き鹽、その水溶液は弱アルカリ性の反應を呈す、硝酸ナトリウムを鉛と共に熱して製し、亞硝酸製法の原料とす。
あぜ-おり［畦織］（名） 織物の名、緯に太絲と細絲とを交ぜ、たかひくをあらはして織りたるもの。
あせ-かき［汗搔］（名） 汗にあゆる質。又、あせを多くかく人。

あぜが—あせち

あぜ-がや［畦茅］（名）［植］禾本科の草本、莖の高さ三四尺、葉は細長く、約一尺に及び、穗をつく。
あぜ-がやつり［畦莎草］（名）［植］莎草科の草本、全體平滑にして莖三四寸乃至二寸、葉は柔にして三四寸乃至一尺あり、穗は球形をなし、花は淡紅色なり、濕地に生ず。
あせ-ぐむ［汗含］（自、ま四） あせをもよほす。あせばむ。
あせ-くら［校倉］（名） 古代の建築の一、横に角木を組みあげて造りたる倉庫。
あせ-ゴロウ［畦吳絽］（名） 吳絽の一種、あぜおりに織りたる吳絽服。
あせ-じづく-に［汗垂］（副） 大汗を流して。一所懸命に。
あせ-じみ［汗染］（名） 汗のしみたるあと。
あせ-じむ［汗染］（自、ま四） あせ出でゝ物にしむ。あせにしむ。
あせ-じゆばん［汗襦袢］（名） 衣服に汗の染みざるために、肌に着る襦袢。あせとりのはだぎ。
あぜ-たうがらし［畦唐辛］（名）［植］玄參科の小草、全體平滑にして莖の下部は匍匐し、脚部より細根を生じ、上部は直立して枝を分ち多肉にして一尺に及ぶ、葉は無柄線狀、葉腋より花梗を出して花開く。
あぜ-たうな［畦唐菜］（名）［植］菊科の草本、根葉叢生し、その中心より莖を抽くと四五寸、葉は互生し、秋の頃淡黄色の花をつく。
†あせ-たなごひ［汗手拭］（名） 汗を拭ふに用ふる小き巾。あせてぬぐひ。あせふき。
†あぜ-ち［按察使］（名） 古昔、諸國の風俗政化などを觀察せし官職の名。
アセチレン［Acetylene］（名）［化］無色の氣體、特種の臭氣あり、點火し易く、光輝ある焰をあげて燃ゆ、炭化「カルシウム」に水を加ふれば發生す。

あせて—あせみ

あせ-てぬぐひ［汗手拭］（名） 汗を拭ふ手ぬぐひ。あせふき。
アセト-アニリド［Acet-anilid］（名）［化］「アンチヘブリン」。
アセト-アミード［Acet-amide］（名）［化］醋酸アンモニウムを蒸溜して生ずる無色の結晶體にして、水・「アルコール」に溶解す。
あせ-とり［汗取］（名） 肌着の一種、うはぎに汗の拔けぬために襦袢の下に着る服。
アセトン［Acetone］（名）［化］無色の液體、一種の香氣あり、木材を乾溜するとき「メチルアルコール」と共に生ず、其少量は尿中にあり、溶劑として用ひらる。
あぜ-な［畦菜］（名）［植］玄參科の小草、夏日田圃の間に生ず、莖は直立し、高さ四五寸にして方形なり、葉は卵形をなして對生し、葉柄なく、葉腋より花梗を抽き淡紅色の花をつく。
あせ-ながし［汗流］（名） 汗ばみたる身を洗ふと。——のあな［汗流穴］ 冑の附屬具なるめんぼほの下に、あけたる穴。
あせ-ぬぐひ［汗拭］（名） あせをぬぐふ布のきれ。あせふき。あせてぬぐひ。あせたなごひ。
あせ-ばむ［汗］（自、ま四） 汗をもよほす。あせぐむ。
あせ-ふき［汗拭］（名） あせぬぐひ。
あせ-ぼ［汗疣］（名） 多量なる汗のために皮膚ながく濕へるとき、肌に發する粟粒の如き赤色の細疹。あせも。
あせぼ（名）［植］あしび。
あせみ（名）［植］あしび。
あぜ-みち［畦道］（名） あぜの道。なはて。
あせ-みづ［汗水］（名） あせ。——を-ながす［流汗水］ 勞苦を厭はず、力を盡くして働く。

あせも—あそび

あせ-も［汗疣］（名） あせぼ。
あせも（名）［植］あしび。
†あせり-ざら［淺皿］（名） あさき皿。
〔あせ-る［急］（自、ら四） 望みを遂(ト)げんとして急ぐ。いらだち思ふ。せく。
（あ-せん-やく［阿煎藥］（名） ㊀一種の藥品、合歡科植物の「エキス」、褐色にして無臭なるも苦味あり、收斂劑として用ひらる。㊁［植］(い)豆科の常綠樹、樹狀「アカシア」に酷似し、高さ四丈に達し、花は黄色なり。(ろ)茜草科、木質の常綠植物にして、高さ一丈、葉は長卵形にして對生し、花は淡紅色にして球狀に集合して開く。
†あそ［朝臣］（名） あそみ。
アソウギ［阿僧祇］（名）（梵語 Asamkhya）［佛］無數又は無央數と譯す、無限の長時間をいふ。
アソウギ-ゴフ［阿僧祇劫］（名）［佛］「ゴフ」に同じ。
アソギ-ゴフ［阿僧祇劫］（名）［佛］「ゴフ」に同じ。
アゾ-くわがふたい［—化合體＝Azo compound］（名）［化］「ニトロベンゼン」と「アミドベンゼン」との中間に位すべき化合體。
あ-そこ［彼處］（代） あのところ。かしこ。
†あそそ-に［淺淺］（副） ほのかに。おぼろげに。わづかに。「—はかつは知れども」。
あそばか-す［遊］（他、さ四） 遊ばしむ。あそばす。
あそば-す［遊］（他、さ四） ㊀あそぶやうにす。㊁おこなふ・爲すなどの敬語。
あそばせ-ことば［遊言葉］（名） かう遊ばせ、あゝ遊ばせなど、すべてあそばせを用ひて言ふ丁寧なる言葉遣ひ。
あそび［遊］（名） ㊀あそぶこと。なぐさみ。たはむれ。

㊁廿音樂、管絃。㊂狩獵。㊃酒色のたのしみ。㊄廿あそびめ、遊女。㊅ばくち、博奕。

あそび-あひて[遊相手](名) あそぶ友。

あそび-がほ[遊顔](名) きまりのなき顔。

あそび-がたき[遊敵](名) あそぶ相手の友。

あそび-がね[遊金](名) 融通せずして徒にしまひおく金錢。

あそび-ぐさ[遊草](名) あそぶ種、遊戲の材料。

あそび-ごと[遊仕事](名) 力をこめず、ゆるゆるとする仕事。

あそび-だうぐ[遊道具](名) 小供のもてあそびもの。おもちや。

あそび-とぎ[遊伽](名) あそびのもり。あそびのとも。

あそび-にん[遊人](名) ㊀一定の業なき人。㊁ばくちを以て生業とする者。ごろつき。

廿あそび-まさ-る[遊益](名) 感興がりてあそぶ。

あそび-め[遊女](名) うかれめ。遊女。

あそび-もの[遊物](名) ㊀あそびだうぐ。おもちや。㊁うかれめ。

廿あそび-を[遊男](名) 伶人、樂人。

あそ-ぶ[遊](自、は四) ㊀好むことをしてたはむる。なぐさみごとをす。㊁音樂を奏す。㊂酒色にふける。ほうたうす。㊃博奕す。ばくちをうつ。㊄たのしむ。なぐさむ。㊅人をあざわらふ。人をもてあそぶ。㊆山野などにいたりて心をなぐさむ。㊇へめぐる。經歷す。旅行す。「千里の外に—」。㊈諸所を經歷して學問す。遊學す。學ぶ。「先生の門に—」。㊉職務なくして居る。ひまにてあり。⑪はなる。附着すべきものの遊離す。——いと[遊絲] いとゆふ。

廿あそみ[朝臣](名) ㊀姓(カバネ)の名、第二等に位す。

あそ。㊁四位以上の爵位ある人の敬稱。

廿あそん[朝臣](名) あそみ。

あた[仇](名) ㊀我にたてつき爭ふもの。我に害をなすもの。恨みあるもの。かたき。てき。(讐)。㊁侵入し來たる敵兵。てき。(寇)。㊂うらみ。怨恨。㊃仕かへし。復讐。

廿あた[咫](名) 太古の尺度の名、今の四寸。

あだ[徒](名) ㊀はかなきこと。かりそめ。㊁いたづら。むだ。無益。㊂はか。別。

〔あだ[仇](名) ㊀あた。㊁うはき。浮薄。

(あ-だ[阿娜](名) 美女のなまめきたる風情。(婀娜)。

あだ-あだ-し[仇仇](形、二) なまめかし。(婀娜)。

あだ-うち[仇討](名) ㊀親屬若しくは朋友を殺したる人を殺して、怨みをかへすこと。かたきうち。㊁怨みをかへすこと。

あだ-おろそか-に[徒疎](副) なほざりに。粗末に。

あだ-がたき[仇敵](名) あだ。かたき。

あたか-も[恰](副) さながら。ちやうど。そつくり。そのまゝ。まさしく。

廿あだ-く[阿娜](自、か下二) なまめく。色を好む。「うちあだけ過ぎたる人」。

あだ-くち[徒口](名) 無益なる言語。むだくち。

あだ-ぐも[徒雲](名) やがて消ゆるはかなき雲。

あだ-くらべ[阿娜競](名) 耳になまめきたる風情を競ふこと。

廿あだけ[阿娜](名) なまめきたること。いろけ。「今さへかゝる御—こそといひあへり」。

あだけ-もの[阿娜者](名) あだけなる人。なまめきたるもの。

あた-げる[仇](自、か下二) わざと暴

行す。つらあてに亂暴す。あくたれる。いたづらす。あばる。

あたご-ごけ[愛宕苔](名) 【植】卷柏科に屬する隱花植物、莖細く、葉は檜木に似て冬緋色に變ず、山城國愛宕山に多きより此名あり。

あだ-ごころ[仇心](名) うはきなるこゝろ。

あだ-ごと[徒言](名) あだくち。

あだ-ざくら[徒櫻](名) 散りやすき櫻。

廿あだ-し[他](形、二) ことなり。別なり。

廿あだ-し[徒](形、二) ㊀はかなし。かりそめなり。㊁いたづらなり。無益なり。

〔あたじけ-な-し(形、一) やぶさかなり。しはし。

廿あだし-ごころ[徒心](名) 移りやすき心。ふたごころ。

廿あだし-の[徒野](名) なきがらを葬るところ。

廿あだし-ちぎり[徒契](名) 末のとげられぬ契、はかなきちぎり。

廿あだし-びと[徒人](名) ほかのひと。たにん。

廿あだし-よ[徒世](名) 生きて居て益なき世。はかなき世。

あだ-す[寇](他、さ變) ㊀てきたふ。はむかふ。(仇)。㊁兵を加ふ。せめいる。㊂廿強く擊つ。

あだ-ぜに[徒錢](名) いたづらに遣ふ錢。

あたたか[暖](名) ㊀あつくなく寒くなき溫度。ぬくきこと。㊁資財豐かなること。㊂愛情深きこと。

あたたか-し[暖](形、一) あたたかなり。

あたたけ-し[暖](形、一) あたたかなり。

あたたまり[暖](名) あたゝまること、又、あたゝかになる氣。

あたたま-る[暖](自、ら四) あたゝかになる。ぬくまる。

あたた-む[暖](他、ま下二) あたゝかにす。

廿あた-たむら[仇屯](名) 仇の屯所。敵營。

あだ-な[徒名](名) うはきの名。むだつの名。

あだ-な[綽號](名) 人の面貌・性質・擧動などにより、實名の外に他人の負ふせ呼ぶ名。(渾名)。

廿あだな-ぐさ[徒名草](名) 【植】「さくら」の異名。

廿あだ-な-ぶ[冦](自、は四) あたをなす。あだす。

あだ-なみ[徒浪](名) 人心の浮き〳〵して定まらざるに喩へいふ語。(仇浪)。

あだ-ね[徒寢](名) ひとり空しく寐ること。あだぶし。

廿あた-は-す(他、さ四) 男女交合す。

あだ-ばな[徒花](名) 【植】さきて實(ミ)らざる花。雄花。

廿あた-はら[疝](名) せんき。

あたひ[價](名) ㊀寶貨の相場。ねだん。(値)。㊁勞働の報酬。ちんぎん。㊂ねだんにあたる金錢。㊃人又は物の品格。たふとさ。㊄【數】演算を經て得たる數。數値。

あだ-びき[徒彈](名) 正しき音律によらず、戯れごとに、琴・三味線の類をひくこと。

あだ-びと[徒人](名) ㊀心のさだまらぬ人。うはきもの。㊁他人。

あた-ふ[能](自、は四) ㊀適合す。かなふ。㊁爲し得。できる。

あた-ふ[與](他、は下二) わがものを人にわたして、其所有となさしむ。くれる。やる。

廿あだ-ふ[戯](自、は下二) 故意に惡戯す。禮儀作法に缺けたるわざす。ふざける。

あだ-ぶし[徒臥](名) ひとりね。あだね。

〔あた-ふた(名、副) ㊀驚きて心の動搖するさまにいふ語。㊁たくさん。ぎやうさん。

廿あたへ[直](名) 上古の姓(カバネ)の名。

あだ-ぼれ[徒惚](名) かひなき人に戀すること。

あたま[頭](名) ㊀かしらのいただき。なうてん。㊁首より上。又は前の稱。かしら。㊂物事のはじめ。㊃物事のうへ。㊄頭髮。かみ。㊅一人前。㊆思想。かんがへ。——のはち[頭鉢] 頭蓋骨。——をあぐ[上頭] 世に出づ。社會にあらはる。——をかく[搔頭] 失敗す。又、こまる。——をさぐ[下頭] 屈從す。志たがふ。——をなやます[惱頭] 思ひわづらふ。——をはる[頭打] うはまへをかすりとる。

廿あたま-がくし[頭隱](名) 一種の頭巾、元祿の頃、比丘尼・老女などの冠りしもの。

あたま-かず[頭數](名) ひとかず。人數。

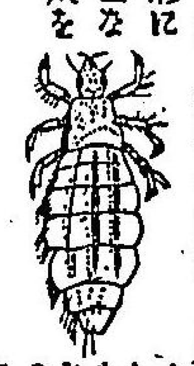
あたま-がち[頭勝](名) ㊀釣り合ひなはづれて頭大なること。㊁はじめの終りより大なること。

あたま-から(副) 始めより。

あたま-ごなし-に(副) あたまから惡く。あたまから叱りつけるやうに。

あたま-なみ[頭並](名) 頭わりに平等にわりつくること。

あたま-じらみ[頭蝨](名) 【動】人・猿等の頭髮中に住む蝨、腹部は卵形にして各環節の周緣は褐色なり、普通の蝨より大なる爪を有す。



[あたまじらみ]

あたま-わり[頭割](名) あたまかずに應じて割りつくること。

あだ-まくら[徒枕](名) かりそめに男女合衾すること。

廿あた-む[仇](他、ま四) 敵視す。てきたふ。

あだ-めく[阿娜](自、か四) ㊀なまめきて見ゆ。㊁情に溺れやすきさまに見ゆ。

あだ-もの[徒物](名) つまらぬもの、はかなきもの。

あだ-もの[婀娜者](名) うつくしくなまめかしき人、美人。

廿あだ-や[徒矢](名) まとに中らざる矢。

廿あた-ゆまひ[仇忌](名) 人を仇の如く忌むこと。「—わがするときに」。

あたら[惜](名) をしむべきこと。をしきこと。

あたら-し[新](形、二) ㊀舊くなし。㊁あらたまりたり。㊂はじめなり。㊃腐りてあらず。

廿あたら-し[惜](形、二) をしむべし。をし。

廿あたらし-む[惜](他、ま四) をしむ。

あたり[當](名) ㊀あたること。㊁事の思ふ如くなりたること。㊂てがゝり。

あたり[邊](名) ㊀わたり。ほとり。きんじよ。㊁ころ。とき。

廿あたり-あたり[邊邊](名) こゝかしこ。處々。「板屋ども—いとかりそめなり」。

あたり-あ-ふ[當合](自、は四) たゝかふ。わたりあふ。きりあふ。

あたり-きやうげん[當狂言](名) 評判よき芝居の狂言。

あたり-きんじよ[邊近處](名) そのちかまはり。わが居る處の近邊。

あたり-きんぺん[邊近邊](名) あたりきんじよ。

あたり-さはり[當障](名) さしひゞき。影響。

あたり-ずみ[當墨](名) 見當をさだむる爲に墨繩にて付けたる線。

あたり-どし[當年](名) ㊀田畠のとりいれの多き年。㊁たくめる事のよく成功する年。

あたり-はづれ[當外](名) 豫想の當りたるとはづれたると。成功と失敗と。

あたり-ぶるまひ[當振舞](名) 事の成功し

たる祝ひとして、人を饗應すること。

あたり-まへ[エーマ][當前](名) ㊀是非ともしかるべきこと、當然。㊁通例、尋常、なみ。

あたり-もの[當物](名) (い)人氣に投じたるもの。(ろ)食物のために、中毒を起したるもの。

あた-る[ら、り、る、る、れ、れ][當](自、ら四) ㊀さはる。觸る。㊁ぶつかる。衝突す。㊂目的どほりに成就す。㊃光りが差す。㊄てあふ。あふ。㊅對す。むかふ。㊆敵す。はりあふ。㊇比す。くらぶ。㊈のぞむ。たふ。㊉あてはまる、かなふ。(十一)その方角にあり。(十二)火にあたゝまる。(十三)さしひゞく。(十四)つらき仕向をなす。いかりを遷す。(十五)さぐる。試みる。(十六)中毒す。(十七)果實が損傷す。

(あたん)[亞炭](名)【鑛】泥炭より稍密なる燃料、色は褐色なり、岐阜縣・愛知縣等より産す。

あ-ち[彼方](代) あなた。かなた。

あぢ[鯵](名)【動】硬鰭類中あぢ科に屬する魚、體は長楕圓形をなし腹底は水平なり、鰓下より尾まで一條の刺あり、背部は蒼色にして微赤色を帶び、腹部は白くして紅色を含む、北海道より西海道に至る沿海諸所に産す。まあぢ。

あぢ[味](名) ㊀食物に對する舌の感覺、あぢはひ。㊁物事の趣味。おもむき。「風流の―」。㊂手際よきこと、うまく行くこと、ぢやうず。㊃―**を-しめる**[占味] 一度深く興味を覺えてより再々企つること。

―を-やる[遣味] ㊀巧に事を處理す。㊁巧に利益を占む。

あぢ(名)【動】あぢがも。

あぢ-うり[味瓜](名)【植】まくはうり。

あぢ-がも[味鳧](名)【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、形は鴨に似て鴨より小し、頭は黄赤を帶びたる青緑色、翅は灰色、胸は黄赤色に小黑點を混へ、腹は白く、背は灰白の中に赤黑き羽毛雜る、數百群をなして生棲す。

あぢき-な-し[くしきけれ][味氣無](形、二) ㊀しかたなし、益なし。㊁面白くなし、興なし。㊂つらし。なさけなし。

あち-こち[彼方此方](代) あちらこちら。かなたこなた。

廿**あぢさき**(名)【植】ちさのき。

廿**あぢ-ざけ**[味酒](名) 味の佳良なる酒。

あぢさゐ[紫陽花](名)【植】虎耳草(ユキノシタ)科に屬する灌木、葉は平滑にして卵形をなし、光澤ありて周圍に鋸齒を有す、花は美麗にして四瓣碧色、簇生す、觀賞用として栽培し、又、花を藥用に供す。(白綉毬)。

[あぢさゐ]

あぢ-な-む[め、め、む、むる、むれ、めよ][味嘗](他、ま下二) 味を試む。

あぢはひ[ワーヮ][味](名) ㊀あぢはふこと。あぢ。㊁うまみ。㊂おもむき。

あぢは-ふ[ワーヮ][はひふふへへ][味](他、は四) ㊀飲食物の味を試みる。㊁おもむき又は趣味を思ひ考ふ。

廿**あぢ-まさ**[檳榔](名)【植】「びらう」に同じ。

廿**あぢ-まめ**[味豆](名)【植】いんげんまめ。

あぢ-み[味見](名) 味の加減を試みること。毒見。

あちやら-づけ(名) 一種の漬物、はすの根・ずゐき・ごばう・大根などを細かにきざみて、酢・酒・醤油に漬けたるもの。

あ-ちら[彼方](名) あち。あなた、かなた。

あ-つ[て、て、つ、つる、つれ、てよ][當](他、た下二) ㊀さはらす。うちつく。㊁あてはまらす。㊂正しく判斷す。㊃目的どほりに成す。㊄あてがふ。(充)。㊅つかさどらしむ。㊆むかはす。㊇あはす。

あつ-あつ[熱熱](名) 男女間の愛情極めて深きさまにいふ語。

あつ-いた[厚板](名) ㊀厚さのあつき板。㊁能樂の裝束に用ふる大口袴。㊂織物の名、絹のねりいとを經とし、生糸を緯として織りたるもの。㊃【植】羊齒類の植物、根莖は木質、根は鬚根にして硬く、葉は有柄にして厚し、別に生殖葉を出だす。

(あついんきかい)[壓印機械](名) 金屬板に極印を壓しつくる機械。

あつ-うす[厚臼](名) ひきうす。

廿**あつえ-びと**[篤癃人](名) 惡疾又は不具の人。

あつ[illegible](名)「あつやう」に同じ。

(あつ-かく)[壓覺](名)【心】皮膚に及ぼす物體の壓力を感ずる感覺。

あつ-かしら[厚頭](名) 髮の厚く生ひたる頭。

あつ-かは[ワーカ][厚皮](名) ㊀皮膚のあつきこと。㊁恥を知らぬこと。あつかましきこと。

あつ-かは-し[しくしししきしけれ][煩](形、二) うるさし、わづらはし、しつこし。

廿**あつ-かは-し**[しくしししきしけれ][暑](形、二) あつくるし。

あつかは-づら[ワーカ][厚皮面](名) あつかましき面つき。

あつかひ[イーカ][扱](名) ㊀あつかふこと。㊁爭ひの仲裁。

あつかひ-だて[イーカ][扱立](名) あつかひのしなし、氣に入らぬあつかひ。

あつかひ-にん[イーカ][扱人](名) 仲裁人。

あつ-がひ[イーガ][厚介](名)【動】斧足類の中世代より存する貝、殼は甚だ厚く長卵形にして、優等なる眞珠質を包有するを以て、裝飾品に用ひらる。

あつか-ふ[カーハ][はひふふへへ][扱](他、は四) ㊀とりはからふ。とりさばく。㊁つかふ。もちふ。㊂世話をなす。めんだうを視る。㊃當惑す。あぐむ。

あつか-ふ[カーハ][はひふふへへ][熱](自、は四) 身に熱ありて惱む。

あつかま-し[しくしししきしけれ](形、二) 恥を知らずしてしつこし。つらのかはあつし。

あつ-がみ[厚紙](名) はり合せたる厚き紙。

あつがり(名) 暑さをおそるゝ性質、又、其の人。

あづかり[預](名) ㊀あづかること。㊁あづかりまもる人。㊂留守番。㊃一局部の官長。㊄あづかりの證書。㊅相撲の勝負の曖昧なるとき、行司これを決せずにおくこと。

あづかり-きん[預金](名) ㊀他よりあづかりたる金。㊁【經】政府・銀行等が、一定の法規に從ひ、他より受託したる金、利子を付するを例とす。

あづかり-にん[預人](名) ㊀あづかりて居る人。㊁金錢其の他物品の保管者。㊂人より預り置く罪人。

廿**あづかり-しよ**[預所](名) 莊園の領主の命を受けて、その領地を管理するもの。

あづかり-しようけん[預證券](名)【經】金錢其他のものを保管する證として、預主に交付する證書。

あづかり-しようしよ[預證書](名)【經】あづかりしようけん。

あづかり-てがた[預手形](名)【經】あづかりしようけん。

あつが-る[ら、り、る、る、れ、れ][暑](自、ら四) 暑氣をつよく感ず。暑さをおそる。

あづか-る[ら、り、る、る、れ、れ][預](他、ら四) 引き受けて守る。自身の許に借りて置く。保管をなすことを約す。

あづか-る[ら、り、る、る、れ、れ][與](自、ら四) 關係す。

あつ-かん[熱燗](名) 酒の燗のあつきこと。

あつ-ぎ[厚着](名) 衣服を多く重ねて着ること。

あづき[小豆](名) ㊀【植】荳科に屬する栽培草本、葉は奇數羽狀複葉をなし、花は黄色なり、種子は通常帶赤色なれど稀に白色なるものあり、食用とし又洗粉の原料とす。

あづき-いろ[小豆色](名) 赤にすこしく黑を帶びたる色。

あづき-がは[ワーガ][小豆革](名) あづき色に染めたるなめしがは。

あづき-がゆ[小豆粥](名) 赤小豆をまじへて炊ぎたる粥、正月十五日に食ふ。さくらがゆ。

あづき-なし[小豆梨](名)【植】やまなし。

あつ-ぎぬ[厚絹](名) 「あついた」(三)に同じ。

あづき-むし[小豆蟲](名)【動】小豆を害する小甲蟲、黄色にして褐色の斑紋あり、小豆の莢に卵を產み、孵化せる幼蟲は中に入りて種子を食し、そのまゝ越年し、翌春蛹となり、尋て成蟲となる。

あづき-めし[小豆飯](名) 赤小豆をまじへて炊ぎたる飯。

あづき-もち[小豆餅](名) 赤小豆の餡をつけたる餅。あんころもち。

あづ-く[け、け、く、くる、くれ、けよ][預](他、か下二) 假りに人手に渡して保護せしむ。保管をたのむ。

あつ-くる-し[しくしししきしけれ][熱苦](形、二) 苦しきほどあつし。

(あつ-くわん)[壓卷](名) 書籍中の最も價値ある部分。

あつ-け[暑氣](名) ㊀あつきはてり。炎天の氣。㊁炎天の氣に犯されたること。

あつけ[呆氣](名) おどろきてあきるゝこと。――**にとらる** いたくあきれて、我をうしなふ。

あづけ[預](名) ㊀あづくること。㊁廿德川時代に、罪過ある人を、他にあづけて守らしめしこと。

あづけ-きん[預金](名) ㊀寄託したる金。㊁【經】政府又は銀行のあづかりきんを、預主よりいふ稱。

廿**あつけ-し**[しくしししきしけれ][熱](形、二) あつし。

あつけし-さう[ウーソ][厚岸草](名)【植】藜科の一年草、莖の高さ一尺五六寸に及び、枝を分ち、節多くして葉無し、枝上に微細なる花をつく。

あつ-げしやう[ウーシヤウ][厚化粧](名) おしろいを濃くつけたるけしやう。

あつけ-な-し[くしきけれ][呆氣無](形、二) 滿足にてなし、はかなし。

あづけ-ぬし[預主](名) 物をあづけたる本人。

廿**あづけ-もの**[預者](名) 罪ありて他にあづけられたる人。

(あつけらかん)(名) ぼんやり。うつけ。

廿**あつ-ご-ゆ**[え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ][厚肥](自、や下二) 厚くなる、厚くふくらむ。

あつ-さ[熱](名) ㊀あつき度合。(暑)㊁夏の時候。

あつ-さ[厚](名) ㊀厚くある度合ひ。㊁【數】立體の長さ及幅にあらざる第三方の徑、平たき物體の最短なる邊の長さ、平たき物體殊に層なるとき其二面間の距離。

あづさ[梓](名)【植】あかめがしは。

(あつ-さく)[壓搾](名) おしちゞむること。

あつさくくうき-ポンプ[壓搾空氣喞筒](名) 空氣若しくは他の氣體を壓搾して濃縮せしむるに用ふるポンプ。

あつ-さつ[壓殺](名) 壓しつけて殺すこと。

あづさ-みこ[梓巫](名) あづさの弓をひきて、神おろしをするみこ。

あづさ-ゆみ[梓弓](名) あづさの木にて造りたる弓。(枕)「張る」「引く」「射」「よる」「もと」「すゑ」「おと」に冠す。

あつさり(名) しつこくなきさま、又はてがるきさ

まにいふ語。たんぱく。けいべん。

（あっさり）（副）　あつこくなく。てがるに。たんぱくに。けいべんに。

†あづさゐ（名）【植】あぢさゐ。

アツシ［厚子］（名）（アイヌ語 Attush）㊀織物の名、「アツシ」の樹皮より製したる絲にて織りたるもの、「アイヌ」人の常用衣服に用ひらる。㊁織物の名、和泉國より產出せる厚き平地の木綿、其質ぢやうぶなるを以て、多く勞働者の仕事着に用ひらる。（厚司）。

あつ・し（くしきけれ）［熱］（形、二）㊀はげしくほとる。㊁怒氣強し。（慍）。㊂熱心なり。

あつ・し（くしきけれ）［厚］（形、二）㊀表面と裏面との距離多し。あつさ多し。㊁ゆたかなり。㊂こまやかなり。こし。㊃まこと多し。なさけ深し。（篤）。㊄あさはかならず。かろぐしからず。（敦）。㊅恩澤深し。（渥）。㊆病重し。（篤）。

†あつ・し（しくしきけれ）［篤］（形、三）　やまひ重し。「ろへはいとあつしくおはしますと」。

（あっ・し）［壓死］（名）㊀おしてころすと。㊁おされて死ぬると。

（あっ・し）［遏止］（名）　とゞむると。

（あっしゅく）［壓縮］（名）　おしちゞむると。

あっしゅく・ポンプ［壓縮唧筒］（名）　あつさくくろきポンプ。

†あつ・しる（れるるれれよ）［篤］（自、ら下二）病危篤なり。

あっ・す（せしすするすれせよ）［壓］（他、さ變）㊀上より抑へつく。おしつく。㊁下風に立たす。屈服せしむ。㊂おしづむ。とりおさふ。㊃おし下す。おし倒す。おし迫る。

（あっ・せい）［壓制］㊀けんぺいづくにふるまふと。むりにおしつくると。㊁公力を利用して、自由を束縛し言動をおさへつくると。

（あっ・せん）［斡旋］（名）㊀めぐらすと。むきかへると。㊁とりもち。せわ。

（あっ・たう）［壓倒］（名）㊀おしたふすと。㊁他を凌駕すると。おのぐと。

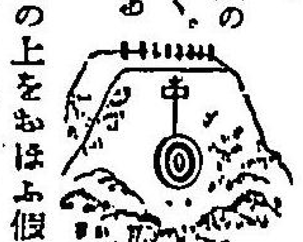
†あつ・たちばな［厚橘］（名）【植】くねんぼ。

あづち［垜］（名）　土を塀の如くに築きて、弓を射る的をかくるもの。いくはどころ。

あづち・まくら［垜枕］（名）　庭の置き枕、形垜に似たるより名づく。

あづち・もん［安土門］（名）　あげつちもん。（埒門）。

あづち・や［垜屋］（名）　あづちの上をおほふ假屋。



［あづち］

（あっ・てん）［壓點］（名）【心】皮膚の表面に分布して、壓覺又は觸覺を司る神經末梢の點。

（あつ・でんき）［壓電氣］（名）【鑛】壓力によりて或る種の鑛物に起る電氣。

あっ・と（副）いたく感じて。聲を立てゝ。――ばかりに　あっと聲立つるばかりにいたく感じて。

†あづなひ（イーナ）（名）二人を一處に葬ると。

アツニ（名）（アイヌ語 At-ni）【植】楡科に屬する喬木、高さ十丈に達す、葉は裏面に毛を生じ、倒卵形又は長橢圓形にして尖頂をなし鋸齒を有す、花は緑葉す、北海道に產し、木材は種々の用に供せらる、「アイヌ」は此樹の皮にて「アツシ」を製す。

（あっ・ぱく）［壓迫］（名）おしせまると。おすと。

あっ・ぱひ（イーパ）［熱灰］（名）火氣の冷却せざる灰。

あっぱれ［適］（感）讃美・感嘆の意を表はす語。あゝ。（天晴）。

あっぱれ［適］（名）讃美又は感歎に價すべきと。

（あつ・び）［壓尾］（名）最後。最終。

†あつ・びたひ（クーヒ ケイ）［厚額］（名）いそのあつき一種の冠、古昔、男子十六歳以上より用ひしもの。

†あつ・びん［厚鬢］（名）德川時代の初世の男子の髷、びんをあつく結ひ、神主などのよそほひしもの。

（あっ・ぷく）［壓伏］（名）おしつくると。押へつくると。

†あつ・ぶさ［厚總］（名）ふさを多くかざりに付けたる馬の尻がい。

†あつ・ぶすま［厚被］（名）綿の多く入りたるふすま。（厚衾）。

あづま［東］（名）あづまごと。（東國、吾妻）。

†あづま・あそび［東遊］（名）六人にて舞ふ上古の歌曲。

†あづま・うた［東歌］（名）萬葉集古今集などに載せたる東人のよみたる歌。

†あづま・うど［東人］（名）東國の人。

†あづま・がらう（ウーロ）［東家老］（名）江戸詰の家老。

†あづま・からげ［東滕］（名）衣の裾を高くからぐると。

あづま・ぎく［東菊］（名）【植】菊科に屬する草、春の頃、淡紅色若しくは白色の花開く。

†あづま・ぎぬ［東絹］（名）東國より織り出だすわろき絹。

あづま・げた［東下駄］（名）一種の女下駄、歴の齒の下駄に疊表をつけたるもの。

あづま・コート（名）一種の被服、形は被布に似て長さ裾に及ぶ、羅紗・セルなどにて仕立つ。

†あづま・ごと［東琴］（名）ことの一種、六絃のもの。やまとごと。あづま。（和琴）。

†あづま・こゑ［東聲］（名）あづまびとの甲（カン）ばしりたるこゑ。

あづま・じやうるり（ウーリヨ）［東淨瑠璃］（名）江戸に行はれし淨瑠璃、半太夫節・永閑節・土佐節などこれなり。

†あづま・ぢ［東路］（名）㊀畿内よりあづまへ行く道。㊁あづまの地方。

あづま・つづれ［東綴］（名）　下野足利にて織出す女帶地、生絲を經とし異色の二種の緯を以て七子地とし、撚絲にて模樣を織出せるもの。

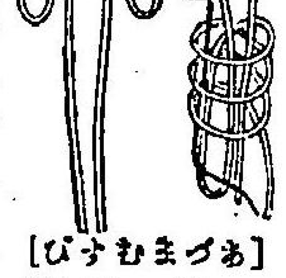
あづま・つめくさ（名）【植】蘿科の一年草、高さ一二寸、莖は平滑纖長にして節あり紅色を帶ぶ、葉は無柄にして對生し、葉腋より白色の花をつく。

†あづま・なまり［東訛］（名）東國のことばのなまり。

あづま・ひやくくわん（ツーヒヤ）［東百官］（名）關東武士の用ひたる名、伊織・求馬などの類、京都禁廷の百官に似たればいふ。

†あづま・まひ（イーマ）［東舞］（名）東遊の舞。

あづま・むすび［東結］（名）紐の結び方、簾・暖簾などをあげ置きて結ぶときに用ふ。



［あづまむすび］

あづま・や［東屋］（名）屋根を四方にふきおろしたる質素なる小屋、壁なくして柱は四本あり、庭園などに建てゝ休憩所とす。（四阿）。

あづまや・づくり［東屋造］（名）屋根を四方へ葺きおろしたるつくりかた。

あつまり［集］（名）あつまると。集りたる團體。まとゐ。むれ。

あつまり・せい［集勢］（名）紀律なき團體。烏合の衆勢。

あつま・る（らりるるれれ）［集］（自、ら四）多くのもの一所に寄りつどふ。とりまとまる。よる。むらがる。

†あづま・わらは（グーワ）［東童］（名）古昔、内侍司に屬せし女官。（東豎子）。

†あづま・をり［東折］（名）あづまからげ。

（あつ・みつ）［遏密］（名）嚴重にとゞむると。

あつ・む（めむむるむれめよ）［集］（他、ま下二）多くの物を一つ處により來らしむ。まとむ。あはす。よす。

あつ・むぎ［熱麥］（名）うどん又は素麵（サウメン）を熱くしたるもの。ひやむぎの對。

あつめ・しる［集汁］（名）五月五日に蠶豆（ソラマメ）・燒豆腐・あはびなどを入れて煮る汁。

あつも・しる［集汁］（名）あつめしる。

あつ・もの［羹］（名）菜・肉などを入れてこしらへたる汁。すひもの。

あつもり・さう（ウーツ）［敦盛草］（名）【植】蘭科に屬する多年草、母衣（ホロ）形の紫色の花を開く。

あつもり・そば［敦盛蕎麥］（名）もりそばをあたゝめたるもの。

†あつ・やう［厚樣］（名）厚き鳥の子紙。

†あつ・ゆ（ゆいゆゆるゆれいよ）［篤］（自、や上二）病おもり行く。「大宮もたのもしげなくあついたまへるは」。

（あつ・よく）［壓抑］（名）上よりおさへつくると。人の自由を束縛すると。

あつら・ふ（ウーラ）（へへふふるふれへよ）［誂］（他、は下二）造るを賴む。注文す。（囑）。

あつらへ（エーラ）［誂］（名）あつらふると。又、あつらへたる品。

あつらへ・むき（エーラ キー）［誂向］（名）誂どほりに出來居ると。

（あつ・りょく）［壓力］（名）【理】物體が他の物體を壓迫する力。

（あつりょく・けい）［壓力計］（名）氣體の壓力を計る裝置、其形種々あり、普通なるはU字形の曲管に水銀を入れ、其一脚を壓力を計らんとする氣體を

入れたる器に絲ぎ、兩脚内の水銀面の高さの差によりて計るものなり、又、蒸汽機關に用ふるものは、金屬製の彎曲管にして、これに蒸汽を導くときは、其壓力は曲管を伸長せんとして指針を動かすを以て、指針の位置により、盤面上の目盛りを讀みて、壓力を知るを得。

（あつりよく・へんしつ）［壓力變質］（名）【地】地殼の變動によりて生ずる壓力のために、岩石の變質すると。

†あつ・る（れるるれれよ）［暑］（自、ら下二）暑さになやむ。

†あて［貴］（名）身分の貴きと。上ひん。

（あつ・れき）［軋轢］（名）㊀車のきしると。㊁人の不和にしてもめあふと。

あて［充］（名）㊀わりあつると。あてがひ。㊁其人と指すと。なざし。（宛）。

あて［當］（名）㊀當つると。㊁たのみ。たより。㊂もくてき。まと。めど。みこみ。㊃物を打ちなどするとき其下におくもの。――が・はづれる　豫期したるとが齟齬す。

（あて）（名）㊀惡質の木材。㊁醜女。

あて・あて［充充］（副）それぞれ。

（あ・てい）［阿弟］（名）弟をしたしみいふ語。

あて・いし［當石］（名）黃金の眞否をためす石。試金石。

あて・うま［當馬］（名）牝馬の發情の徴候不明なるときに牡馬を近づけてこれを驗する法、又、其の牡馬。

†あておこなひ・じやう（ジヨウ ナイ）［充行狀］（名）　あてぶみ。

†あて・おこな・ふ（ナーフ）（はひふふへへ）［充行］（他、は四）あてがふ。

あて・が・ひ（イーガ）［充行］（名）あてがはすると。あて

こなふ物。

あてがひ-ぶち[充行扶持](名) ㊀あてがひてわりわたす扶持。㊁先方の望に應ぜず、此方の心のまゝに與ふる物。

あてが-ふ[充行](他、は四) ㊀あてゝわりわたす。㊁心まかせにくばる。㊂あてはめ置く。㊃こゝろみにあはせて見る。

あて-くち[當口](名) あてこすり。

あて-こすり[當擦](名) あてこすること。あてこする言。

あて-こす-る[當擦](自、ら四) 或人の面前にて、他事にかこつけ遠まはしに惡しくいふ。

あて-ごと[當事](名) あてにする事。頼みにして事をなす。

あて-こ-む[當込](他、ま四) 成功を見込み事。

あて-じ[當字](名) 其語の意義に拘はらず、よみごゑなどによりてそれに當てたる字。

〔**あて-ずっぽう**〕(名) むちやくちや。でたらめ。

あて-ずゐりやう[當推量](名) よりどころもなきにおしはかること。

あて-つ-く[充付](他、か下二) あてがふ。

あて-ど[當所](名) めど。めあて。たのみ。

あて-な[充名](名) 手紙・願書などにて、充てゝやるべき先方の名。(宛名)。

あて-に[貴](副) 上ひんに。品よく。あてやかに。

あて-のみ[當飲](名) 他人の酒をあてにして飲むこと。

廿**あて-はか**[貴](名) あてなるさま。

あて-はか-る[當量](他、ら四) おしはかる。

あて-はま-る[當嵌](自、ら四) ほどよくはまる。適當す。

あて-は-む[當嵌](他、ま下二) あてはむ。あてはまらしむ。

廿**あて-ば-む**[貴](自、ま四) 上ひんめく。よき人ぶる。

廿**あて-びと**[貴人](名) 身分ある人。きぢん。

廿**あて-ぶみ**[充文](名) 鎌倉又は室町時代に、幕府より、土地を給與し、若くは其管理者を任命するときに出す文書。

あて-ぶり[當振](名) てたらめに行ふをどり。「てずっぽうのをどり。

あて-み[當身](名) 柔術にて、こぶしを人の急所に突きあて、一時呼吸をとゞむること。

あて-もの[中物](名) ㊀かくせる物をいひあつること。又、其あそび事。㊁箭を物に射當つること。

廿**あて-やか**[貴](名) みやびやか。高貴。上品。

あと[跡](名) ㊀踏みたる所にのこる足の形。あしあと。(趾)。㊁ゆくへ。ゆくて。(迹)。㊂ゆきゝ。わうらい。㊃過去にありし物事の名ごり。㊄流傳せる事跡又は威徳。㊅ためし。ぜんれい。㊆あとめ。家督。――さ-す[爲跡] 手本とす。模範とす。――の-しるし[跡印] 人の死にたる跡につくる標。墓。碑。――を-くらま-す[晦跡] にぐ。出奔す。――を-た-る[垂跡] あとたる。――を-つける[付跡] その跡を追ひ行く。追跡す。

あと[後](名) ㊀のち。㊁うしろ。㊂去りへ。すゑ。㊃以前。㊄以後。㊅死後。㊆子孫。――の-まつり[後祭] ㊀常例の祭典終りたる其翌日。㊁機會を失して事に効なきにいふ語。――を-ひく 或る事がながくつゞく。かぎりなくむさぼる。

(**あ-と**)[阿堵](名) あとぶつ。

あど(名) ㊀能狂言のわき去。㊁能狂言の拍子をとること。

あと-あし[後脚](名) けものゝ去りへの脚。――で-すな-を-かく 人の許を去るにのぞみて、仇をなして行くにいふ。

廿**あとら-かたり**(名) ㊀話の應答。㊁なぞなぞがたり。「知れるどちこそ――もすれ」。

廿**あとら-ふ**(自、た四) 人の話しに拍子を取りて應答す。

あと-おさへ[後押](名) ㊀行列などの最後。

あと-おし[後押](名) ㊀車などを後より押してたすくること。㊁人の後だてとなりてたすくること。

あと-かた[後肩](名) 輿・擔架等にて後方の棒を擔ふもの。あとぼう。さきかたの對。

あと-かた[跡形](名) 物事の見るべき形跡。

あと-かたづけ[後片付](名) 物事の終りたる後を片付くること。

あと-かた-な-し[跡形無](形、二) ㊀ありたる跡見えず。㊁わけわからず。

あと-がね[後金](名) 契約の金額の内、幾分を返済したる殘金。のこりきん。

あと-がばね[後姓](名) 血統をひきたる子孫。「ちつゞき。後裔。

あと-がはり[後替](名) 前のかはりとなるべき人。候補者。あとがま。

あと-がへり[後返](名) 俳優の技の一種、うしろむきに身を空に一轉して、復び立つこと。とんぼがへり。

あと-がま[後釜](名) あとがはり。

あと-ぎよめ[後淸](名) 葬式の時、棺を送り出だし、後にて、巫僧を請じ室内を祓ひ淸むること。

あと-きん[後金](名) あとがね。のこりきん。

あと-くち[後口](名) ㊀殘りたる部分。のこりぶん。㊁物を飲食したるあと。㊂話しのあまひ。

あと-げつ[後月](名) 前に過ぎたる月。去月。先月。

あと-け-な-し(形、二) わるぎなし。無邪氣なり。

あと-さき[後先](名) もとゝさきと。ぜんご。まへとうしろと。――みず ぜんごの思慮なく事を行ふこと。むてっぽう。

あと-ざん[後産](名) のちざん。

あと-ざまに[後樣](副) 後の方に。

あと-しき[跡式](名) 父又は兄などの後を承けて、家主となること。あとめ。家督相續。

あと-しざり[後退](名) ㊀あとへ退くこと。あとずさり。あとびさり。㊁【動】「あとびさり」に同じ。

あと-ずさり[後退](名) あとしさり。

あと-ぞなへ[後備](名) 戰列隊の後方にある軍兵。あとおさへ。

廿**あと-た-る**[垂跡](自、ら下二) 神佛の顯はれて永く此世にとゞまる。

あと-ぢゑ[後智慧](名) 物事のすみたる後に出づる分別。

あと-つぎ[跡繼](名) ㊀先代のあとをつぐべき人。よつぎ。あととり。あとめ。(後嗣)。㊁前官・前職の跡をつぎて、其事務・職權を承る人。㊂學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あと-とり[後取](名) あとつぎ。

あと-なし-ごと[跡無事](名) 跡形もなきこと。

廿**あと-なし-びと**[跡無人](名) ところさだめず流浪する人。

あと-のり[後乘](名) ㊀後列に從ふ騎馬。㊁時機に後れたること。

あと-ば[後齒](名) ㊀下駄の齒の後方のもの。㊁後齒のみを入れ、前齒は臺の一部を刳りなして作りたる下駄。

廿**あと-ばこ**[後箱](名) 將軍・大名などの行列の後より調度を入れて持ちはこぶ箱。

あと-ばら[後腹](名) ㊀産後の腹痛み。㊁事の過ぎたる後のくるしみ。

あと-ばらひ[後拂](名) 葬送又は儀式などの果てたる後を片付くること。

あと-ひき[後引](名) 酒などを慾得て慾食ること。

あとひき-おやうど[後引上戶](名) あとひきの癖のある酒のみ。

あと-びさり[後退](名) ㊀あとへ退くこと。あとしさり。㊁【動】蜘蛛類中擬蠍類の小動物、體扁平にして、前脚は鉗をつけ、腹部は數節に別れ、尾端より絲を吐き、反古の間にありて小虫を捕へ食す。

廿**あと-ふ**[聘](他、は下二) 妻をむかふ。

廿**あと-ふ**[誂](他、は下二) あつらふ。

(**あと-ぶつ**)[阿堵物](名) (「こんなもの」の義にして、晉の王衍が錢を見て婢に「擧ニ却阿堵物ー去」といひたる言より出づ) 金錢。ぜに。

あと-ぶね[後船](名) (い)この次に入港する船。(ろ)芝居の見物の席の後方にあるもの。

廿**あと-べ**[後方](名) 足の方。後の方。

あと-ぼう[後棒](名) 擔架などの後棒を擔ふもの。さきぼうの對。

あと-まく[後幕](名) ㊀あとの狂言。㊁あとの去ぐさ。

廿**あと-まくら**[後枕](名) 臥したるとき、足の方と頭の方と。「――も去らずかきふし」。

あと-まはし[後廻](名) 前にある事物を他の後となすこと。

あと-め[跡目](名) ㊀のち。うしろ。あと。㊁先代の家督。

あと-もどり[後戾](名) 後へ返ること。㊁事物の退歩すること。

廿**あと-もふ**[率](他、は四) ひきゐる。いざなふ。

あと-やく[後役](名) 前者の役目を繼ぐもの。

あ-とり(名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形ははゞおろに似て、頸・嘴は樺色、背は背く、頭は淡灰鼠色なり、背・頭に黑斑あり。(花鷄、猫子鳥)。

アトロピン[Atropine](名)【化】莨菪・莨陀羅華等の茄科植物中に含有するアルカロイドにて、白色絹絲様の光澤ある針狀の結晶體にして、一種不快の苦味を有す、劇毒にして眼に注入すれば瞳孔を散大す。

あと-わ[後輪](名) 「しづわ」に同じ。

あな[穴](名) ㊀くぼみたる所。うがてる所。(孔、竅)。㊁あやまち。きず。㊂損失。――を-あける 會計を司りて缺損を生ぜしむ。

廿**あな**(感) 喜怒哀樂等凡て感歎の意を表はす發聲。

(**あ-ない**)[案內](名) あんない。

あな-いち[穴一](名) (い)錢うちの一種、地に穴をあけ、錢を打ち込む小兒の遊戲。(胡投)。(ろ)神代文字の一種、直線と點との配合によりて單音を表はす音標文字。

あな-うめ[穴埋](名) 缺損を補ふこと。

廿**あな-うら**[足裏](名) 足のうら。

あな-かがり[穴絓](名) 釦又は紐を通す衣服の穴の緣を絲にてかがること。

あな-がち[强](副) 無理に。强ひて。

廿**あな-かま**[噫喧](感) やかましい。だまれ。

廿**あな-かま-し**[噫喧](形、二) かしまし。やかまし。「あなかまし、つちにくしといふに」。

あな-かんむり[穴冠](名) 漢字の冠りの名。空・穿の如き字の頭にある穴字をいふ。

あな-ぐま[穴熊](名) 【動】食肉類中鼬鼠科に屬する獸、大さ狸の如く、穴居す、走ること遲かなり、我國深山に産す。

あな-ぐも[穴蜘蛛](名) 【動】蜘蛛類中眞正蜘蛛類に屬する蟲、地に管狀の穴を穿ちて巢となし、絲を以て其內面を覆ひ、戶を作りて巢口を塞ぐ。

あな-ぐら［穴藏］(名) 地中に穴を穿ちて、其處に品物を藏する用となすもの。(窖)。

あなぐら-だいく［穴藏大工］(名) 穴藏の内側にあつる箱又は湯槽などをつくる大工。

あな-ご［穴子］(名) 【動】喉鰓類中あなご科に屬する魚、體形うなぎに似る、鱗なくして胸鰭よく發達し、尾端は尾鰭によりて圍まる、近海魚にして、晝間は泥底に潛み、夜間出て食餌を求む。(海鰻)。

あな-さがし［穴探］(名) 人の過失を搜索すること。

あなし(名) 西北の風。あなぜ。

卄あな-すゑ［足末］(名) ㊀足のさき ㊁子孫。後裔。

〔あなぜ(名) あなし。

あ-なた［彼方］(代) ㊀あのかた。むかふの方。あちら。かなた。㊁貴下。ごへん。

あな-だいく［穴大工］(名) あなぐらだいく。

卄あなぐ・る［穿］(他、ら四) ㊀穿つ。㊁探索す。

あな-ぢ［穴痔］(名) 肛門のかたはらに穴のあく痔。

卄あなづらは・し［可侮］(形、二) 輕々し。人に侮蔑せられやすし。

卄あなづり［侮］(名) あなどり。

卄あなづ・る［侮］(他、ら四) かろしむ。あなどる。

あなどり［侮］(名) あなどること。けいべつ。

あなど・る［侮］(他、ら四) みさぐ。かろしむ。いやしむ。かろんず。けいべつす。

あな-なし［穴無］(名) 女の不具者、陰門が膜にて掩はれたるもの。

アナナス［Ananas］(名) 【植】鳳梨科に屬する熱帶地方の常綠草、葉は大にして尖り、花は多數集合し、實は松の實に似て、食用に供せらる。(鳳梨)。

［アナナス］

卄あなな-ひ(名) ㊀たすけ。むぎなひ。補助。㊁高き處にのぼるあしがゝり。あしば。(麻柱)。

卄あなな・ふ(他、は四) むぎなふ。補助す。

卄あなな-はじかみ(名) 【植】しやうが。

あな-ばち［穴蜂］(名) 【動】膜翅類中細腰蜂科に屬する蟲、我國に產する細腰蜂中にて、最大なる種なり、全體黑色を呈し、前頭及後胸背に金色毛を密生す、常に花間に遊飛す。(地蜂)。

卄あな-ひら［蹠］(名) 足の甲。(跌)。

卄あなへ・ぐ［蹇］(自、が四) あしなゆ。

あな-ほり［穴掘］(名) ㊀穴を掘ること。㊁あなほりだいく。㊂彌りの穴を掘るを業とするもの。㊃【動】あなぐま。

あなほり-だいく［穴掘大工］(名) ㊀穴を掘るを職とする大工。㊁技の拙き大工。

卄あなめ(感) あな。あなや。「秋風の吹く度毎に―小野とはいはじ薄生ひたり」。

あな-もん［穴門］(名) 煉瓦を穿ちて作りたる門。

卄あな・り［有］(自、ら變) 「あるなり」の約。

あに［兄］(名) ㊀同胞にして年長なる男子。え。㊁妻の兄。夫の兄。又、姉の夫。㊂男子を親しみて呼ぶ稱。せ。いろせ。

あに［豈］(副) 何として。いかに。どうして。

〔あにい［兄］(名) あに。

〔あにい-かぶ［兄株］(名) 人に推戴せらるゝ身分の男。

あに-き［兄貴］(名) 兄の尊稱。

あにき-かぶ［兄貴株］(名) 博徒・職人などの中にて頭だつもの。

あに-ご［兄御］(名) 他人の兄に對する敬稱。あにさま。

アニス-ゆ［―油＝Anise oil］(名) 大茴香の種子より搾取したる無色又は淡黄色の芳香ある油液、食料及び醫藥用とす。

卄あに-ずゑ［兄季］(名) すゑの兄。

あに-ぢやひと［兄人］(名) あに。

あに-でし［兄弟子］(名) 我より前に師に就きたる人。

あに-ぶん［兄分］(名) 假りに定めたる兄。

あに-よめ［嫂］(名) 兄の妻。

アニリン［亞尼林＝Aniline］(名) 【化】無色油狀の液體、石炭を乾溜するとき發生する一物質にして、工業上多量に製するには、「ニトロベンゼン」を鐵及稀鹽酸にて還元するなり、無色にして特異の臭氣を有す、其水溶液に漂白粉の溶液を加ふれば、紫色を呈す、染色の原料として多く用ひらる。「アニリンゆ。」

アニリン-えん［―鹽］(名) 【化】「アニリン」の鹽化物。

アニリン-ゆ［―油］(名) 【化】「アニリン」に同じ。

あね［姉］(名) ㊀同胞にして年長なる婦人。㊁妻の姉。夫の姉。又、兄の妻。㊂女子を親しみて呼ぶ稱。

〔あねい［姉］(名) あね。

〔あねえ［姉］(名) あね。

〔あねえ-かぶ［姉株］(名) 人に推戴さるゝ身分の女。

あね-き［姉貴］(名) 姉の尊稱。

あね-ご［姉御］(名) ㊀他人の姉に對する敬稱。㊁博徒等の親分の妻。

あね-ごぜ［姉御前］(名) 女を親しみていふ語。

あねさま-ごと［姉樣事］(名) 女兒の人形などを並べて遊ぶこと。

あね-ぢよらう［姉女郎］(名) 一の妓樓にて古き女郎。

〔あ-ねったい［亞熱帶］(名) 【植】植物帶の一、熱帶と溫帶との中間にありて、二七乃至三六南北緯度中に位するもの。

〔あねったい-しよくぶつ［亞熱帶植物］(名) 【植】亞熱帶に屬する森林植物の總稱、即ち常綠のかしくすのきすぎ等の類。

あね-にようばう［姉女房］(名) 夫より年上なる女房。

あね-ぶん［姉分］(名) 假りに定めたる姉。

あね-むこ［姉聟］(名) 姉の夫。

アネロイド-せいうけい［―晴雨計＝Aneroid barometer］(名) 金屬の袋より成り携帶に便なる晴雨計、袋の表面は翅狀をなし、外氣に觸るゝ面を大きくなし、内部は稍々空氣を除去したるものにして、外氣の壓力大なるときは表面を壓し、壓力弱くなるときは彈性により、表面膨出し、指針を左右に動かすを以て、盤面の目盛りを讀みて、大氣の壓力を知るべし。

［アネロイドせいうけい］

アノード［Anode］(名) 【理】「やうきよく」に同じ。

アノクタラ-サンミヤク-サンボダイ［阿耨多羅三藐三菩提］(名) (梵語 Anuttara-samyak-sam-bodhi)【佛】无上正偏知又は无上正等正覺と譯す。諸佛所證の最上の妙道をいふ。无上道。涅槃界。

アノク-ボダイ［阿耨菩提］(名) 【佛】「アノクタラサンミヤクサンボダイ」に同じ。

あは［粟］(名) 【植】禾本科に屬する一年生の栽培草本、おほあは・こあはの二種ありて、二種ともに粳(ウル)・糯(モチ)の別あり、瘠地にもよく生育して旱魃に堪へ、穀粒は長年の貯藏に堪ふ。

あは-あは・し［淡淡］(形、二) ㊀きはめて淡し。ごくうすし。㊁おもしろみなし。

あは-あめ［粟飴］(名) 粟と麥とより製したる上品なる水飴。

卄あは-いひ［粟飯］(名) 粟を炊ぎたる飯。

あ-はう［阿房］(名) 智恵なきもの。おろかもの。

あはう-かづら［阿房鬘］(名) 芝居にてあはうに扮するときに用ふる鬘。

あはう-ぐち［阿房口］(名) たはけたる言葉。

あはう-ぐるひ［阿房狂］(名) 女にたはけくるふこと。

あはう-ぢから［阿房力］(名) ㊀愚人の強き力。㊁愚人の如き強き力。

あはう-どり［阿房鳥］(名) 【動】水禽類中長翼科に屬する鳥、嘴端鈎狀をなし、翼は至つて長くして末端尖れり、前三趾は蹼を以て相連なる、熱帶產の海鳥なり。(信天翁)。

［あはうどり］

あはう-ばらい［阿房拂］(名) 德川時代に行はれし一種の刑罰、武士の腰に帶べる兩刀をうばひて追放すること。

アバウラセツ［阿防羅刹］(名) (梵語 Avo-raksas)【佛】下方可畏鬼と譯す、獄卒にして牛頭人身牛蹄なるもの。(阿旁羅刹)。

あはう-りつぎ［阿房律儀］(名) ばか正直。

あは-おこし［粟粔籹］(名) 一種の菓子、粟を蒸して煎(イ)り、砂糖汁にて固めたるもの。

あは-がゆ［粟粥］(名) 粟の實を交へて煮たる粥。

あは-がら［粟稈］(自) ㊀粟の穗をとりたるあとの莖。㊁【動】「やがら」(二)に同じ。

卄あはぎ［檍］(名) 【植】「かし」に同じ。

あは・く(自、か下二) ㊀卄油斷す。㊁油斷してあわつ。

卄あは・く［暉］(自、か四) 馬勞る。あへぐ。

あば・く［發］(他、か四) ㊀土を掘り開きて、物を出だす。㊁人の密事などをさぐりだして、世にあらはす。

あは-こ［粟子］(名) 粟の實の如く小さき魚の卵。

あは-ごけ［粟苔］(名) 【植】水馬齒(ミヅハコベ)科に屬する一年生の小草、陰處陰濕の地に生ず、莖の高さ一二寸粟粒の如き小葉對生す、葉腋に微細なる花を開く、雌雄別花なり。

あは・し［淡］(形、一) ㊀濃からず。しつこくなし。あつさりしてあり。㊁味うすし。㊂趣すくなし。㊃色あさし。㊄懇篤せず。

あは-ぜうろ［粟松露］(名) 【植】松露の一種、色黄なり。

あは・す［合］(他、さ下二) ㊀一つにす。㊁同じくす。㊂あつむ。かさぬ。㊃めあはす。たぐはす。㊄着く。結ぶ。㊅藥品を配劑す。㊆音律を調ふ。㊇やはらぐ。むつましむ。㊈對す。㊉比ぶ。

〔あば-ずれ［阿婆擦］(名) 婦人の世路を歴て惡かしこくあつかましくなりたること。

あはせ［袷］(名) 裏を着けたる衣服、單衣と綿入との間の時候に用ふ。

卄あはせ(名) 飯にあはせて食する菜。

あはせ-いと［合絲］(名) よりあはせたる絲。

あはせ-かがみ［合鏡］(名) 二つの鏡を前後にして、うしろ姿を見ること。

あはせ-がき［醂柹］(名) 澁柹の石灰水又は灰汁に浸し、後空樽に入れて澁をぬきたるもの。

あはせ-ガッパ［袷合羽］(名) 裏をつけたる合羽。

あはせ-きす［合鱚］（名）一種の料理、鱚の肉を合せ燒にしたるもの。

廿**あはせ-ぎぬ**［合衣］（名）「あを（襖）」に同じ。

あはせ-ぐすり［合藥］（名）數種の藥劑を調合せるもの。

あはせ-ぎょり［合鱸］（名）一種の料理、鱸の肉を合せ燒にしたるもの。

あはせ-おゆばん［袷襦袢］（名）裏をつけた襦袢。

あはせ-たきもの［合薫物］（名）數種の香を蜜にて煉り合はせたるもの。ねりかう。

あはせ-つち［合土］（名）石灰と細石・黄土とを混じて、たゝきかためたるもの、土間などのたゝきに用ふ。

あはせ-ど［合砥］（名）一種の砥石、刀・かみそりなどを研ぐ時、砥石の表面を平にしその脂をとる爲に用ふる小さき帶白黄色の粘板岩。

あはせ-どう［合銅］（名）鉛を入れて吹きたる銅。

あはせ-ばおり［袷羽織］（名）裏を付けたる羽織。

あはせ-はぎ［合矧］（名）二種の鳥の羽を合せて矧ぎたる矢。

あはせ-びん［合鬢］（名）男の鬢のゆひ方、髷の下實をおくり込み、太き元結にて結びたるもの。

あはせ-ぶき［合吹］（名）【鑛】金銀を含有せる銅より、これを抽き取る爲に鉛を交へて吹くこと。

あはせ-め［合目］（名）ものを合はせたる筋目。

あはせ-もの［合物］（名）㊀合はせたる物の總稱。㊁一の器物に、數品の食物をもりたるもの。

あはせ-やき［合燒］（名）料理の一種、魚の肉を三枚におろし、肉目と肉目とに雞卵の蛋白を入れ、竹串にさし、鹽をふりかけて燒きたるもの。

あはせ-わうど［合黄土］（名）黄土に似たる色。

廿**あはた**［膕］（名）膝ぼれ。ひざのかはら。

あは-た［粟田］（名）あはたやき。

〔**あばた**〕（名）痘瘡のあと。じゃんこ。（痘痕）。

あは-たけ［粟茸］（名）【植】菌類の一、秋生ず、黄色にして稍や黒色を帶ぶ、食ふべからず。

廿**あはた-こ**［膕子］（名）あはた。

廿**あはた-す**［淡］（自、さ四）おとしめ見くだす。

あは-たつ［沫立］（自、た四）㊀髮などのおほく起つ。㊁恐怖又は寒氣のため、身の毛いよだつ、さうけだつ。

あはた-やき［粟田燒］（名）粟田口より燒き出だす陶器の總名、釉にひゞありて薩摩燒に類す。

あは-ちぢみ［阿波縮］（名）阿波國より産出する木綿ちゞみ。

あはぢ-ばんし［淡路半紙］（名）淡路國より産出する漉入の半紙。

あはぢ-むすび［淡路結］（名）絲の結び方、左右にわなを二つならべ、互に絲を通はしたるものにして、物のかざりに用ふ。

あはぢ-やき［淡路燒］（名）陶器の一種、天保年間淡路國三原郡伊賀野村の工人加集珉平の燒き始めしもの、主として黄色の釉藥を用ひ、酒器・丼皿等を製し、近時外國品を模造して輸出す。

廿**あはつけ-し**［淡］（形、一）㊀あはあはしくあり。㊁不遠慮なり。

あは-つぶ［粟粒］（名）粟の實のつぶ。

あはの-ぜん［粟野膳］（名）常陸國粟野より産出する膳、鉋目ありて淡黄色に塗れるもの。

あはひ［間］（名）物と物とのあひだ。人と人との交りの間。あひだ。あひま。

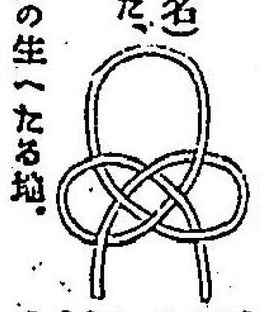
あはび［鰒］（名）【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、介殼は卵圓形にして中央少しく高し、外面には多少不正なる渦紋狀の線條及瘤狀の突起あり、外面は褐色又は蒼紫色にして、内面は眞珠色を帶ぶ、潮流佳良なる近海に棲息し、概ね海藻を食とす、我國伊勢・伊豆・相模・安房・上總等に産す、肉は食用に供せらる。（鮑、石決明）。

あはび-しらたま［鰒白玉］（名）あはびだま。

あはび-だま［鰒珠］（名）鰒の中にある珠。

あはび-のし［鰒熨斗］（名）鰒の肉を乾し引きのばして造りたる熨斗、婚禮を除く外の祝儀に用ひらる。

あはび-むすび［鰒結］（名）鰒の形に似たる紐の結びかた、檜扇の絲餘りなどを結ぶ。


［あはびむすび］

廿**あは-ふ**［粟生］（名）粟の生へたる地。

あは-ぶ［粟麩］（名）黄色の麩。

廿**あば-ふ**（他、は四）庇護す。かばふ。

あは-ぼり［阿波彫］（名）專ら阿波より出す裝劍具の金屬彫刻、野村正矢の蜂須賀侯に召されたるに始まる。

あは-みづあめ［粟水飴］（名）あはあめ。

あは-みどり［粟綠］（名）干菓子の一種、砂糖をずみにて黄色に染め、新引糯と微塵粉とを混じて、枠にて押しつけ、つぶを塗りたるもの。

廿**あは-む**［淡］（他、ま下二）淡くす。うとくす。うとむ。冷淡にす。

あは-めし［粟飯］（名）粟を炊ぎたるいひ。

あは-めん［粟麪］（名）粟にて製したる麪。

あは-もち［粟餅］（名）もち粟を蒸して搗きたる餅。

あはもち-いし［粟餅石］（名）粟餅の如き黄色なる一種の石、庭園などに用ふ。

あは-や（感）甚しく驚きたる時の發聲。

あは-やき［粟燒］（名）㊀粟おこし。㊁粟餅に餡を包みて燒きたる菓子。

廿**あは-ゆき**［淡雪］（名）薄く降りたる雪。

あばら［荒］（名）㊀荒れすさびたるさまにいふ語。㊁まばらなるさまにいふ語。

あばら［肋］（名）あばらぼね。

あばらす-だう［荒堂］（名）荒れはてたる堂。

あばら-だるき［肋棰］（名）まばらに割りたる棰。

あばら-ぼね［肋骨］（名）ろくこつ。

あばら-や［荒屋］（名）㊀あれはてたる家。㊁途上に旅人などの休み所に設けたる圍なき亭舍。

あ-ばり［網針］（名）あみばり。

あば-る［荒］（自、ら下二）荒れはつ。

あはれ（名）㊀いたはしきこと。あはれむべきこと。びんぜん。（哀）。㊁感賞に價すべきこと。あっぱれ。

あはれ（感）㊀あゝ。㊁あっぱれ。

〔**あばれ**〕［荒］（名）㊀あばれさわぐこと。らんばう。（暴）。㊁家垣などの荒れくづれたるさまにいふ語。

あはれ-がる（他、ら四）あはれに思ふ。あはれむ。

あばれ-がひ（名）際に餌を與ふること。

あばれ-ぐひ［暴食］（名）亂暴にさまざまの物を食ふこと。

あばれ-たんぜん［暴丹前］（名）㊀芝居にて、あばれものに扮する役者の着るたんぜん。㊁芝居の囃子の名、笛と太鼓とにてこれを奏す。

廿**あはれ-び**［憐］（名）あはれみ。

廿**あはれ-ぶ**［憐］（他、ば四）あはれむ。

あはれ-み［憐］（名）なさけをかくること。ふびん。

あはれ-む（他、ま四）ふびんに思ふ。いとしがる。なさけをかく。

〔**あばれ-もの**〕［暴者］（名）㊀亂暴狼藉なる者。㊁博徒。侠客。㊂酒色に狂へる者。

〔**あば-れる**〕［暴］（自、ら下一）㊀無法なる事を行ふ。亂暴す。㊁道樂をなす。放蕩す。

あは-を［合緒］（名）よりあはせる絲。よりいと。

あひ［間］（名）㊀あひだ。あはひ。ま。あひま。すき。㊁能樂の中入の間。
——**の-かき**［間垣］庭又は路次の中の仕切の垣。
——**の-かね**［間矩］二の勾配の平均の勾配。
——**の-きやうげん**［間狂言］能樂の中入の間にする狂言。
——**の-くさび**［間楔］（名）㊀材と材との間にうつくさび。㊁或事のひまに、他事をなすこと。
——**の-しゅく**［間宿］（名）宿場と宿場との間にある家里。
——**の-すさび**［間樂］（名）㊀あひのすさび。定まりたるつとめのひまに、たのしみにするわざ。
——**の-つなぎ**［間繫］㊀物と物との間をつなぐもの。㊁「あひのくさび（二）」に同じ。
——**の-ま**［間間］㊀主要なる二の室の間にある室。㊁神社の本殿と拜殿との間。

あひ［遇］（名）面食。てあひ。

あひ（名）【動】あひる。

あひ（名）あひのつち。かけや。

あひ—［相］（接頭）㊀或る語の上につきてかれもこれも、互になどの意をあらはす語。㊁書狀文にて、動詞の上に用ひて語調を整ふる語。

アビ［阿鼻］（名）（梵語 Avici）【佛】無間と譯す、八大地獄の一、間斷なく苦を受くるところ。

あび（名）【動】寒地に産する水禽、大いさ鵜に等しく、嘴脚は鴨に似たり、上部は黒褐色にして白斑あり、腹部は白色なり、水をくゞり魚を捕ふるに巧なり。

廿**あひ-あか**［間赤］（名）德川時代に、奧女中の禮服の下に着し紅色の小袖。

あひあひ-がさ［相相傘］（名）二人にて一本の傘をさすこと。あひがさ。

あひ-いん［合印］（名）割符などのまるしに押す印。

あひ-うち［相擊］（名）擊劍にて、互にうちあふこと。（合打）。

あひ-うち［合討］（名）味方二人にて敵の一人を討つこと。

廿**あひらべ-まつり**［相嘗祭］（名）あひむべまつり。

あひ-えん［合緣］（名）よく合ひたる緣。

あひえん-きえん［合緣奇緣］（名）あいえんきえん。

あひ-おい［相老］（名）夫婦もろともにとしよること。

あひ-おひ［相生］（名）㊀もろともに同時に生ひ出づること。おない年。㊁同じ所に生活すること。

あひおひ-ざし［相生插］（名）男松と女松と數柑子とを合せて挿したる生花。

あひおひ-むすび［相生結］（名）紐の結び方、一本の紐を普通の女結に結び一の端を更に二度その結び目に通すもの。

あひ-かき［相缺］（名）木を組み合はすに、双方の木半づゝ缺きて繼ぎ合はす方法。

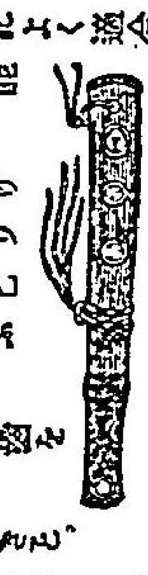
あひ-かぎ［合鍵］（名）定まりたる鍵の外に、それと同じくあはせ造りたる鍵。

あひ-かご［相駕］（名）諸共に一挺の駕籠に乘ること。

あひ-がさ［相傘］（名）あひあひがさ。

あひ-かた［相方］（名）㊀あひて。㊁舞臺の上にて一の役者の相手になる役者。㊂嬪客の相手になる遊女。

あひ-かた〔アイ〕[合方](名) ❶芝居のせりふの間に入るゝ囃子。 ❷能の謡の囃子方。
あひ-かた〔アイ〕[相肩](名) 兩人にて物をかつぐとき、その一方のものゝ稱。
あひ-がみ〔アイ〕[間紙](名) 器と器との間にはさみ置くうすき美濃紙。　「生じたるもの。
あひ-がも〔アイ〕[間鴨](名) 【動】鴨と家鴨との間に
†あひ-ぎ〔アイ〕[間着](名) 徳川時代に奥女中の禮服のうちかけの下に着し黃色の小袖。
あひ-ぎ〔アイ〕[間着](名) (い)禮服の綿入れの下に着る衣服。(ろ)あひふく。
†あ-びき[網曳](名) あみひき。
あひ-ぎり〔アイ〕[間切](名) 竹の節と節との間を切りて拵へたる筒。ひとよぎりの類。
あひ-きやく〔アイ〕[相客](名) ❶二人以上の客が、同室をかり合はすこと。又其の人。 ❷同時に其の家の客となりたること。又、其の人。
あひ-くぎ〔アイ〕[合釘](名) 兩端の尖りたる釘。板と板とを繼ぎ合はすに用ふるもの。　「る薬。
あひ-ぐすり〔アイ〕[合藥](名) その人によく適合す
あひ-くせまひ〔アイ〕[相曲舞](名) 能の舞の一種。二人同時に舞ふ曲舞。
あひ-くち〔アイ〕[合口](名) (い)鍔を附けず、鯉口と柄の縁とよく合ふやうに作りたる短刀。くすんごぶ。たんたう。(ヒ首)。(ろ)話のよくあふこと。よく話の合ふ友人。
†あひ-くち〔アイ〕(名) 口を大きく張りて齒をあらはすこと。



あひくち(一)

あひ-ご〔アイ〕[相子](名) 互に勝負のなきこと。
†あひ-ごと〔アイ〕[逢事](名) 男女の共に寢ること。
あひ-ことば〔アイ〕[合詞](名) 合圖に用ふる語。
あひ-ごま〔アイ〕[間駒](名) 象棋にて遠くより王手をしたるときその間に置きて防禦する駒。
あひ-さげ〔アイ〕[相提](名) 小印籠と腰瓢と、又は煙草筒と煙草入とを同時に腰に提ぐること。
(あ-ひさん[亞砒酸](名) 【化】白色透明の片、湯に溶け、熱すれば霧の如き臭氣を發す。有毒にして、これを飲めば烈しく胃腸「カタル」を起して死す。少量を服して習慣となるときは却て身體を強壯ならしむることあり。
(あひさん-どう[亞砒酸銅](名) 【化】亞砒酸鹽類の溶液に銅鹽の溶液を加へて得たる綠色の沈澱物。綠色の顔料とす。毒性あり。
あひ-し〔アイ〕[相仕](名) てつだひ。てがはり。
あひ-しやう〔アイシヤウ〕[相性](名) 男女の生れ年を五行に配當したる其の性(シヤウ)の合へること。即ち、男女の性が火と木、水と木、火と土、土と金、金と水となるをいふ。かくすれば、其縁組は吉なりといへり。
あひ-しやくや〔アイ〕[相借家](名) 棟つゞきの長屋に同じく借屋すること。
あひ-じやくり〔アイ〕[合決](名) 板を矧ぎ合はす法。兩方の板の厚の半づゝを刳りとりて繼ぎ合はすもの。　「あいさつ。
あひしらひ〔アイシラヒ〕(名) あひしらふこと。あへしらひ。
あひしら-ふ〔アイシラフ〕[應答](他、は四) 應接す。待遇す。點綴す。あへしらふ。あしらふ。
あひ-し・る〔アイ〕[ら・り・れ][相知](他、ら四) たがひにしりあふ。またはる。つきあふ。
あひ-じるし〔アイ〕[合印](名) ❶まちがひの起らざるやうに、其物に付くる目じるし。 ❷軍中にて、敵・味方のまぎれぬために、味方に付くるしるし。
†あひ-しろ〔アイ〕[間白](名) 徳川時代の奥女中が、禮服のうちかけの下に着し白の小袖。
あひ-ずみ〔アイ〕[相住](名) 長屋などの一棟の中に、一處に住むこと。　「ますこと。
あひ-ずり〔アイ〕[相掏](名) 他人とはかりて人をだ
{あびせる[浴](他さ下二) あぶす。
あひだ〔アヒダ〕[間](名) ❶かれとこれとの中。うち。なか。あはひ。 ❷すきま。ひま。たえま。 ❸へだたり。ちがひ。 ❹とき。をり。ころ。
あひだ〔アヒダ〕[間](副) よりて。ゆゑに。
あひ-たい〔アイ〕[相對](名) 二人差し向ひにて、事を行ふこと。相談して事をなすこと。
あひたい-ごと〔アイ〕[相對事](名) ❶あひたい。 ❷†訴訟事件。　「賣買の相場。
あひたい-さうば〔アイ〕[相對相場](名) 【經】相對
あひたい-じに〔アイ〕[相對死](名) 心中。情死。
あひたい-づく〔アイ〕[相對盡](名) 相談の上にてなしたること。
あひたい-ばいばい〔アイ〕[相對賣買](名) 【經】賣主と買主と合議の上契約を結びて行ふ賣買。
あひ-たがひ〔アイタガイ〕[相互](名) かたがひ。さうはう。
あひだ-がら〔アヒダ〕[間柄](名) ❶彼我の關係。 ❷つづきあひ。えんある。
あひだ-ぐひ〔アヒダグヒ〕[間食](名) 三度の食事の外に物を食ふこと。かんしよく。
†あひたけ-びと〔アイ〕[相宴人](名) 饗膳の相伴人。
あひ-だち〔アイ〕[相太刀](名) 互に打ち合はす太刀。
あひ-だな〔アイ〕[相店](名) 一つ店にて物を賣ること。　「あひだに食する物。
あひだ-もの〔アヒダ〕[間物](名) 三度の食事のほか。
†あひだ-よ〔アヒダ〕[間夜](名) 夫婦のあはぬ夜。

アビ-ぢごく[阿鼻地獄](名) 「アビ」に同じ。
あひ-づ〔アイ〕[合圖](名) あらかじめ定めたる仕方によりて、事を知らすること。
†あひ-づくり〔アイ〕[相作](名) てつだひに同じ。
あひづ-ごよみ〔アヒヅ〕[會津暦](名) 會津地方に行はるゝ暦。
あひ-づち〔アイ〕[相槌](名) 互に打ち合はす槌。むかひづち。――を-うつ[打₂相槌₁] 他のいふ所に、調子を合はす。
あひづ-ぬり〔アヒヅ〕[會津塗](名) 漆器の一種。岩代國若松町にて製す。天正年間蒲生氏郷の南部塗を模して製せしめしものといふ。
あひづ-ぼん〔アヒヅ〕[會津盆](名) 會津塗の盆。
あひ-づま〔アイ〕[相褄](名) 祿先のところの社の巾。
あひづ-やき〔アヒヅ〕[會津燒](名) 磁器の一種。岩代國大沼郡本郷村に於て正保年間に燒き始めしもの。多く茶器を製す。
あひづ-らふそく〔アヒヅラウソク〕[會津蠟燭](名) 岩代國會津地方よりいづる蠟燭。質良好にして、花模樣などを描きたるもの。
あひ-て〔アイ〕[相手](名) ❶事を共にする人。 ❷相ひ對向して爭ふ人。
あひて-かた〔アヒテ〕[相手方](名) 【法】法律行爲に關する一方の當事者を他の一方の當事者より呼ぶ稱。
あひ-でし〔アイ〕[相弟子](名) 同じ先生に就きて、共に學ぶ人。
あひて-しだい〔アヒテ〕[相手次第](名) 相手のやう如何によりて、我の爲す所を異にすること。
あひて-ど・る〔アヒテ〕[ら・り・れ][相手取](他、ら四) あひてとす。あひてがたとす。
あひ-でん〔アイ〕[相殿](名) あひどの。
あひ-どの〔アイ〕[相殿](名) 同じ社に、二柱以上の神を合はせ祀ること。
あひ-とも-に〔アイ〕[相共](副) 諸共に。ともどもに。
あひ-なげ〔アイ〕[相投](名) 相撲四十八手の一。敵が投げを掛けたるとき、押寄せて背負投げにすること。
†あひ-な・し〔アイ〕[く・し・き][間無](形、一) へだてなし。區別なし。
あひ-なめ〔アイ〕[相嘗](名) あひむべまつり。
あひなめ-まつり〔アイ〕[相嘗祭](名) あひむべまつり。
あひ-のこ〔アイ〕[間子](名) ❶異種生物の間に生れたる仔。 ❷異人種の間に生れたる子。 ❸兩者の何れにも屬せざる性質を有するもの。「一料理」。
あひ-のて〔アイ〕[合手](名) 音曲にて、歌聲をしばらく中絶するとき、樂器のみを吹彈すること。
あひのやま-ぶし〔アイ〕[間山節](名) 古昔行はれし俗謠の一。伊勢國古市の間山の乞食が謠ひ出したるもの。伊勢音頭はこれより出づといふ。
あひ-のり〔アイ〕[相乘](名) 二人一車に乘ること。又、其の車。　「❷連帶にて捺す印。
あひ-はん〔アイ〕[合判](名) ❶わりふに捺(オ)す印。
あひ-ばん〔アイ〕[相番](名) 二人以上一處に番を務むること。又、其の務むる人。
あひ-ばん〔アイ〕[間版](名) 紙の版の名。大版と小版との中間に位するもの。　「と。
あひ-びき〔アイ〕[逢引](名) 男女のひそかに相逢ふこ
あひ-びき〔アイ〕[相引](名) ❶雙方共に陣を引き去りぞくこと。 ❷なれあひ。 ❸箏のまち。――の-を[相引緒](名) 箏のひきあはせの緒。
†あひ-ぶぎやう〔アイブギヤウ〕[相奉行](名) 同役の奉行。
あひ-ふく〔アイ〕[間服](名) 夏と冬との間に着る袷服。　「袷の誤。
あひ-べら〔アイ〕[合箆](名) 裁縫の合印につけたる
あひ-ぼう〔アイ〕[相棒](名) ❶駕籠の前と後とになりてかつぐ人。 ❷かごかきなどが、互に相手を呼ぶ稱。 ❸なかま。相手。
あひ-ぼれ〔アイ〕[相惚](名) 男女互に深く相慕ふこと。
あひ-ま〔アイ〕[間](名) すきま。てすき。　「と。
あひ-まひ〔アイマイ〕[合舞](名) 能にて二人同時に舞ふ
あひ-みたがひ〔アイミタガイ〕[相身互](名) 互に扶けあふ
あひ-むこ〔アイ〕[相聟](名) 妻の姉妹のむこ。　「と。
†あひ-むべ〔アイ〕[相嘗](名) あひむべまつり。
†あひむべ-まつり〔アイ〕[相嘗祭](名) 古昔、新嘗祭の前に新穀を神に供する祭。十一月上の卯の日に行はる。
あひ-もち〔アイ〕[相持](名) ❶互に持つこと。 ❷費用などを等分に負擔すること。
あひ-やく〔アイ〕[相役](名) 同じ役。又、其の人。
あひ-やけ〔アイ〕(名) 仙臺地方の男姑。
あひ-やど〔アイ〕[相宿](名) 一つ宿に、共にやどる
†あひ-やどり〔アイ〕[相宿](名) あひやど。　「こと。
あひ-やり〔アイ〕[相槍](名) 敵一人に、味方二三人にて槍を合はすること。
あひ-よめ〔アイ〕[相嫁](名) 夫の兄弟の妻。
あ-ひる[鶩](名) 【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、まがもの變種にして、嘴は軟皮を被り、末端のみ硬し。頭は長く、脚は短かくして後方に附く。前三趾間に蹼を張り、後趾は小にして自在なり。古來より多く家に飼ふ。ために飛力退化せり。(家鴨)。――の-きやはん[鶩脚絆] 物の短かきをたとへいふ。
あひる-げた[鶩下駄](名) 踏附の低き下駄。前齒と後齒との間のせばきもの。

廿あひ-ろ[鷺](名)[動]「あひる」に同じ。

あひ-をれくぎ[合折釘](名) 合釘の曲りたるもの、襖の縁を打ちつくるなどに用ふ。

(あふ[窩](名)「あん(窩)」に同じ。

(あ-ふ[阿附](名) へつらひつくこと。

あ-ふ[合](自、は四) ㊀一つになる。㊁あつまる。かさなる。㊃つく。むすばる。㊄適當す。かなふ。㊅配す。たぐふ。㊆敵す。あたる。㊇やはらぐ。むつぶ。㊈音律調ふ。

あ-ふ[逢](自、は四) ㊀互に相見る。めんくわいす。㊁であふ。でくはす。(遇、會)

あ-ふ[齏](他、は下二) 食物に味噌・酢などを合はす。

廿あ-ふ[饗](他、は下二) 馳走す。饗應す。ふるまふ。

あ-ふ[敢](他、は下二) ㊀強ひて爲す。㊁爲し遂ぐ。

あぶ[蝱](名)[動]雙翅類に屬する蟲、大形なる灰黑色の種類にして、胸背に三個の黄色の縦毛條を有し、腹背の中央に太き縦線を有す、うしあぶ・はなあぶ・あをあぶ等の種類あり。

[ぶあ]

あ-ぶ[浴](他、は上二) 湯水などを體に注ぐ。

あふぎ[扇](名) ㊀あふぎて風を起すに用ふる具、竹の條を骨として、本を要(カナメ)にてとぢあはせ、末を廣くし、これに紙を張りたるもの。㊁あふぎの形。あふぎなり。

廿あふぎ-あはせ[扇合](名) 古昔、行はれし一種の遊戯、互に扇子に詩歌を書き、之を合せて勝負を定むるもの。

あふぎ-がき[扇垣](名) 建物又は塀の端に結びたる扇形の垣、萩又は竹にてつくる。

あふぎ-あみ[扇網](名) 扇の形にひらく網。

あふぎ-かけ[扇懸](名) 床柱などに扇をひろげて掛け置く具。

あふぎ-がた[扇形](名) ㊀本狹く、末廣くして、扇のかたちをなすもの。あふぎなり。㊁[數]圓弧を其兩端に於ける半徑にて圍める形。

あふぎ-がひ[扇貝](名)[動]あげまき。

あふぎ-がみ[扇紙](名) 扇にはる紙。

あふぎ-ぐるま[扇車](名) 扇三本を廣げて圓形に結びつけ串の端につけて、上棟式に棟の上に立つるもの。

あふぎ-ぞめ[扇染](名) 染模様の名、あふぎ形などの中に、花鳥人物などを染め出だすもの。

あふぎ-だな[扇棚](名) 扇の形、即ち圓形を四分したる形の棚、床脇などに附く。

あふぎ-だるき[扇垂木](名) 扇形にひらきたる垂木、神社などの軒につく。

あふぎ-どもゑ[扇巴](名) 紋所の名、扇の地紙形の中に三つ巴をかきたるもの。

あふぎ-ながし[扇流](名) 模様の名、水の形に種々の扇をゑがきたるもの。

あふぎ-なり[扇形](名) あふぎがた。

あふぎ-ばこ[扇函](名) 扇を入るゝ細長き函。

あふぎ-びき[扇引](名) 一種の遊戯、扇を拇指と食指との間に挾みて、引きあふもの。

あふぎ-びやうし[扇拍子](名) 扇をうち鳴らして、謡曲の拍子をとること。

(あふ-きやう[凹鏡](名)[理]反對面が互になかくぼなる鏡、球面凹鏡にありては、物體が若し其中央點より、其球の半徑の半より遠き距離にある

ときは、倒立の實像を結べども、其以内にあるときは、直立の虚像を作る。凹面鏡。

あふ-ぐ[仰](自、か四) ㊀上へ向く。あふぬく。あをむく。あをのく。㊁たふとぶ。敬ふ。㊂上に對して請ふ。

あふ-ぐ[扇](他、か四) 扇子・團扇などをつかひて、風を起す。

あぶく[泡](名) あわ。

あぶく-ぜに[泡錢](名) 勞せずして得たるかね。

あふご[朸](名) 兩端にものを掛けてになふ棒。「テンビン棒。

廿あふ-ど[會期](名) めんくわいする時。

廿あふさ-きるさ(名) ㊀あちらこちら。行きかへり。㊁一方善ければ一方惡しく、又一方に盡くせば一方に濟まざるさまなどにいふ語。

(あふ-じ[押字](名) 華押に書きたる文字。

(あふ-しう[押收](名)[法]人民の所有物件を差押へ、これを官府に沒收すること。

(あふ-じやう[壓狀](名) おどして、我心のままに認めさする書狀。

あふ-じやう-づくめ[壓狀盡](名) おどして、我思ふまゝにならしむること。

(あふ-しよ[押署](名) 署名して華押を書くこと。

(あふ-しよ[押書](名) ㊀約束の履行又は命令の服從を誓ふ爲に差し出す書。㊁あふじやう。

[あぶ-す[餘](他、さ四) あます。のこす。

あぶ-す[浴](他、さ下二) ㊀湯水などを身體に注ぎかく。㊁強ひて人に負はす。

(あふ-そう[押送](名)[法]囚人若しくは刑事被告人を、或官衙より他官衙へ送ること。

(あふそう-じやう[押送狀](名)[法]罪囚

の押送に當り、發送廳衙が被押送者の本籍・住所・所屬部隊・身分・氏名・年齡・刑名・刑期又は被告事件人相並に着用被服・所持品・送致貨幣・物品・書類の目錄等を記して押送者に交付する書面。

あぶ-だま[油卵](名) 一種の料理、揚豆腐の油をぬき、卵黄と共に煮たるもの。

あふち[棟](名)[植]楝科に屬する木、高さ丈餘に達す、葉は複葉をなし、雄蘂は脫體に結合す、子房の各室は二個の重なりたる胚珠を含み、花は帶紫色にして果實は核果なり、觀賞用として栽培し、木材は種々の用に供せらる。せんだんのき。(樗、楝)

(あふち-こ[凹地湖](名)[地]海面より低き水面を有する湖。

(あふ-ちやく[押着](名) 人を憚らざること、狡猾なること。

(あふ-てい[押丁](名)[法]監獄署の最下級の官吏、罪人を取扱ふもの。

アプトしき-てつだう[—式鐵道=Abt rack railway](名) 汽車の峻路を上下するに設くる鐵道、二條の軌鐵の中間に、更に齒のある一條の軌鐵を敷設し、此齒と機關車の車軸の中央部に裝置せる齒車の齒とくひあひて進行するもの。

(あふ-とつ[凹凸](名) たかひく。

あふとつ-レンズ[凹凸—](名)[理]一方が凹にして、他方が凸なる球面を有せる「レンズ」。

あぶな-し[危](形、一) あやふし。

(あふ-なつ[押捺](名) 印をおすこと。

あふぬ-く[仰](自、か四) あふむく。

あふぬ-く[仰](他、か下二) 上へ向かす。

あふの-き[仰](名) あふのくこと。

あふの-く[仰](自、か四) あふむく。

あふの-く[仰](他、か下二) 上へ向

かす。あふむかす。

あぶ-の-め(名)[植]玄參科の小草、夏水田に生ず、高さ五六寸、根の際より數莖に分れ、枝なく、葉は小さく披針形をなして對生し、莖も葉も液に富み、花は少さくして淡紅色なり。

(あふ-はん[凹版](名) 一種の印刷版、銅鐵又は銅の板の表面に、印刷せんとする模様を凹く彫刻し、これにインキを擦付し、布にて摩擦すれば、インキは凹部にのみ殘りて、これに紙を當てゝ印刷すれば所定の模様を得べし、インキの紙につくこと多ければ精緻なる印刷物に適す。

あふひ[葵](名) ㊀[植]錦葵(ゼニアフヒ)科に屬する草本の總稱、莖高くして枝を生ぜず、葉は皺を有す、花は大形にして短き柄を具し、紅・紫・白色等を呈す、觀賞用として栽培せらる。㊁かさねの色目、表うす青にして、裏のうす紫なるもの。㊂紋所の名、葵の二葉を材料としてゑがけるもの。

廿あふひ-かづら[葵鬘](名) ㊀葵を冠にさすこと。㊁德川時代に奥女中などが四月一日の酉の日に頭に葵の花をかざしたること。

あふひ-ぐさ[葵草](名)[植]かもあふひ。

あふひ-ごけ[葵苔](名)[植]旋花科の多年草、莖は纖長にして地上を匍匐し、所々に根を生じ、微毛密生し、葉は圓形全緣にして長柄あり、葉腋より花梗を抽き黄花を開く。

あふひ-ざ[葵座](名) 兜の八幡座の形の名。

あふひ-すみれ[葵菫](名)[植]菫菜科菫菜屬の小草、すみれに似、全體毛を生じ、葉は心臟形にして、花は淡紫色、實は頭を結ぶ。

あふひ-つば[葵鍔](名) 葵の形に作りたる刀の鍔。

あふひ-ぼん[葵盆](名) 鉋目ありて曲物(ワゲモノ)

の緣をつけ、淡黄色に塗れる盆。

あふひ-まつり[葵祭](名) 山城國加茂神社の祭典、陰曆四月中の中の日を當日と定められ、中古最も盛んに行はれたり。

あふひ-まめ[葵豆](名) いんげん豆の一種、長さ四五分にして葉は葵の如し。

あふひ-むすび[葵結](名) あはびむすび。

(あふ-へい[押柄](名) 尊大なること。驕りたかぶること。おほふう。

あ-ぶみ[鐙](名) (足踏の義)馬具の名、鞍より馬の脇腹の左右にさげ、乘者の足を踏み掛くるもの。

[みぶあ]

あぶみ-いた[足踏板](名)[建築]工事等に、足代に登り、又はその上にて仕事をなすときに、通路とする板。

あふみ-おもて[近江表](名) 近江國より出だす疊表、備後表よりは下品なるもの。

あふみ-がさ[近江笠](名) 近江國より產出する菅笠。

廿あぶみ-がしら[鐙頭](名) 鞍の出ばりたる頭。さいづちあたま。

あぶみ-がは[鐙革](名) 鐙を鞍に吊りさぐる革の紐。

あぶみ-ガハラ[鐙瓦](名) 丸瓦の軒のところに葺きたるもの。

あふみ-かぶら[近江蕪](名)[植]かぶらの一種、近江國大津邊より產出す、塊根扁くして圓し、最も大形なるものなり。

あふみ-がや[近江蚊帳](名) 近江國より出だす蚊帳。

あぶみ-ぐは[鐙鍬](名) 鐙の形に似たる鍬、雜草を除くに用ふるもの。

あふみ-ざらし[近江晒](名) 近江國より出

だす上品なるさらしぬの。
あふみ-しやうにん[近江商人](名) 近江の國の商人、諸國を行商し勤勉を以て名高し。
あぶみ-ずり[鐙磨](名) ㊀馬の脇ばらの、あぶみにて磨るゝ處の稱。㊁あふりの一種。
あふみ-ちりめん[近江縮緬](名) ながはま「ちりめん。
あぶみ-つり[鐙釣](名) 馬具の名、鐙をつる物。
あふみ-はっけい[近江八景](名) 近江國琵琶湖の南西岸にある勝景、即ち、比良の暮雪・矢橋の歸帆・石山の秋月・瀬田の夕照・三井の晩鐘・堅田の落雁・粟津の晴嵐・唐崎の夜雨。
あふみ-ぶし[近江節](名) 「ごさいぶし」に同じ。
あふむ-く[仰](自、か四) 上へ向く。
あふむ-く[仰](他、か下二) 上へ向かしむ。
(**あふめん-きやう**)[凹面鏡](名) 【理】あふきやう。
(**あ-ふよう**)[阿芙蓉](名) 【植】「けし」に同じ。
(**あふよう-ゆ**)[阿芙蓉油](名) 阿芙蓉より取りたる油。
あぶら[油](名) ㊀燃燒しやすき一種の中性物質にして、おもに炭化水素の化合物より成り、通常溫度にては水に溶解せず、動植物質より採り、或は鑛物を蒸餾し、又は地下より湧出す、點火・醫藥・塗擦料・化粧用・食用等用途甚だ廣し。㊁【動】あぶらぎっちよ。‡——のつかさ[油司] 大寶令に見ゆる宮内省の被官、貢油を司る。——をうる[油賣] 仕事の間に、ひそかになまける。——をかける[油掛] 人をほめおだつ。
あぶら[脂、膏](名) 「あぶら(脂肪)」に同じ。——がのる[脂乘] 身體に脂肪が增す。——をしぼる[脂絞] 人を苦しむ、懲らす。——をとる[脂取] 人を苦しむ。

あぶら-あげ[油揚](名) あげどうふ。
あぶら-あし[脂足](名) 脂の多き性質の足。
あぶら-あせ[脂汗](名) ㊀脂のまじりたる汗。㊁苦しきときに出づる汗。
あぶら-いし[油石](名) (い)色黒くして光りある石。(ろ)【鑛】石炭。(は)米の中にまじれる油くさき小石。
あぶら-いため[油煠](名) 食品を油にていりつけてやはらかくすると。あぶらいり。
‡**あぶら-いひ**[油飯](名) 【動】麻の實の油にてあげたる飯。
あぶら-いり[油煎](名) あぶらいため。
あぶら-いろ[油色](名) 黃に赤みを帶びたるともしあぶらの如き色。
あぶら-うを[油魚](名) 【動】へうの類、體は蒼色にして眞珠色の横線あり、脊鰭は黒色にして、その他の鰭及び喉は黃色なり。
あぶら-おとし[油落](名) 一種の軟き石、色はうすみどりにして黒點あり。
あぶら-かす[油粕](名) 動植物の體より油を搾り採りたる殘滓(カス)、窒素燐酸に富み、我國にては植物性のもの最も多く、魚肥に次ぐ貴重の肥料なり、家畜の飼料としてもまた大に効あり。
あぶら-ガス[油瓦斯](名) 石油に高熱を與へて氣化したるもの、他の燈用瓦斯に混じてその光力を增加するに用ひらる。
あぶら-がみ[油紙](名) 油を引きたる紙。とうゆがみ。
あぶら-がめ[油瓶](名) 油を入るゝ瓶。あぶら「つぼ。
あぶら-がや[油茅](名) 【植】莎草科に屬する小草、葉は狹長にして黃綠色を帶び、滑かにして油の臭を有す、花序は穗狀をなす。

あぶら-からだ[脂體](名) 脂肪の多き身體。
あぶら-ぎく[油菊](名) 【植】菊科に屬する草、葉は微尖頭を有し淺綠色をなす、花は黃色の舌狀花冠を有し、舌狀瓣は花柱より長きと數倍なり、多く山野に生ずれど、觀賞用として栽培す。いはやぎく。のぎく。
あぶら-ぎっちよ(名) 【動】螽斯(ギス)の油色をなしたるもの、機織の如き聲を出して鳴く。
あぶら-ぎり[油桐](名) 【植】大戟(タカトウダイ)科に屬する木、葉は往々劣狀に分裂し、花は單性にして花瓣を有す、木材は種々の用に供し、種子より桐油を製す、此油は揚性を有すれど、燈火用其他種々の用に供せられ、樹皮はまた染料に供せらる。やまぎり。いぬぎり。(荏桐、罌子桐)。
あぶら-ぎる(自、ら四) 油にてぎらつく。脂「多くあり。
あぶら-け[油氣](名) 油あるが如く見ゆると。
あぶら-げ[油揚](名) あげどうふ。
‡**あぶらげ-うり**[油揚賣](名) 寶延・寶曆の頃に行はれたる小供の行商、提籠の中に油揚を入れて賣りあるきたるもの。
あぶら-こ[油子](名) 【動】あゆなめ。
あぶら-こき[油扱](名) 麻絲を染めて、油を引きたるもの。
あぶら-こし[油濃](形、二) 油氣多し。脂多し。
あぶら-ごま[油胡麻](名) 【植】油の多き黃色の「胡麻。
あぶら-さし[油差](名) ㊀ともし油を油皿に注ぐに用ふる具。あぶらつぎ。㊁車の軸又は機械の多く摩擦するところに油をさす金屬性の器具。

あぶら-さし[油尺](名) 桶の中の油の深さによりて、その量をはかる爲に用ふる尺。
あぶら-ざめ[油鮫](名) 【動】鮫の一種、肝臟より多く油を出だす。
あぶら-ざら[油皿](名) 陶器又は金屬の小皿、燈油を盛るに用ふるもの。
あぶら-しば[油芝](名) 【植】あぶらがや。
あぶら-しみ[油染](名) 油にしむと。
あぶら-しめぎ[油搾木](名) 油をしぼりとる轆轤づくりの器械。

[あぶらしめぎ]

あぶら-しやうじ[油障子](名) 雨を防ぐため、紙に油を引きたる障子。
‡**あぶら-おり**[膠](名) 鳥の尾の部分の脂肉。
あぶら-すすき[油薄](名) 【植】禾本科の草本にして、薄に似たり、伊吹山・白山等の高山に産す。
あぶら-ずな[油砂](名) 石油鑛より掘り出す石油を含める砂。
あぶら-すまし[油澄](名) 胡麻油・赤味噌・溜醬油を混ぜ合せて煮、葱飯・蕎麥などにかけて食ふもの。
あぶら-ぜみ[油蟬](名) 【動】あきぜみ。
あぶら-だま[油球](名) あぶらが玉の如くになりて、水などに浮きあがりたるもの。
あぶら-だる[油樽](名) 油を入るゝたる。
あぶら-ちやせん[油茶筅](名) 芝居にて役者の用ふる光澤なき茶筅髷の髮。
‡**あぶら-つき**[油坏](名) あぶらざら。
あぶら-つぎ[油注](名) あぶらさし。
あぶら-づく[脂着](自、か四) 體に脂肪み「つ。
あぶら-づけ-くわんづめ[油漬罐詰](名) 魚肉をオリーブ油にて煮て、罐詰にしたるもの。

あぶら-つつじ[油躑躅](名) 【植】石南科の灌木、白色の花を開く、日光・富士等の高山に產す。
あぶら-つの[輠](名) 車の軸の油をさすところ。
あぶら-つぼ[油壺](名) あぶらがめ。
あぶら-で[脂手](名) 脂の多く出づるたちの手。
あぶら-でり[油照](名) 空薄く曇り、風なく、日光の照りつくると。
あぶら-な[油菜](名) 【植】十字花科に屬する一年生或は二年生の草本、葉は大形にして、基部を以て莖を圍み、花は黃色にして總狀花序をなし、四瓣六雄蕊なり、種子は一列に相並ぶ、種子を菜種(ナタネ)といひ、これより油を搾り、嫩葉は食用に供せられ、廣く各地に栽培せらる。(蕓薹、油薹)。
あぶら-ぬぐひ[油拭](名) 毛絲を束ね、心を針金にて結び、銃腔内の油を拭ふもの。
あぶら-はうしや[油硼砂](名) 油氣を含みたる硼砂。
‡**あぶら-ばうず**[油坊主](名) 【動】深海の岩礁内に住む魚、大なるものは六尺に達するものあり。
‡**あぶら-び**[油火](名) ともし火。「—の光に見ゆるわかかづら」。
あぶら-ひや[油火矢](名) 油をそゝぎかけたる「火矢。
あぶら-べに[油紅](名) 梳油(スキアブラ)に紅を練りこみたるもの、傑毀が出血せるさまを擬するに用「ふ。
あぶら-み[脂肉](名) 肉に脂の多き部分。
あぶら-みがき[油磨](名) (い)‡油をひきたる如くなめらかにみがくと。(ろ)金工の最後に油をひきて磨くと。
あぶら-むし[油蟲](名) (い)【動】直翅類中蜚蠊科に屬する蟲、通常廚房竈邊に見る所のものにして、前翅は褐色、後翅は扇狀にたゝみて淡褐色なり、脚は稍々扁平にして步行極めて迅速なり、觸るれば惡臭を放つ。(ろ)㊀【動】ありまき。㊁ひやかし、すけん。(遊郭にていふ)。㊂人につきまとひて、妨げをなすもの。

あぶら-め(名) 【動】「いたちうを」に同じ。
‡**あぶら-もち**[油持](名) 昔時、高貴の人外出の時、その車の油を持ちし從人。
‡**あぶら-もり**[油守](名) 昔時、宮中の燈油を司りし女官。
‡**あぶら-わた**[油綿](名) 小壺に綿を入れ、香油をさして髪を固むるに用ふるもの。「かみを短くきりて—をぬられたりければ」。
あぶら-ゑ[油繪](名) 油繪具にて描ける畫、今日、西洋畫の主位を占むるもの。
あぶら-ゐど[油井戸](名) 石油をくみ出だす井。
あぶら-ゑのぐ[油繪具](名) 西洋畫に用ふる亞麻仁油を混和したる繪具。
あふり[煽](名) ㊀あふると。㊁馬具の名、鐙と馬の脇腹との間に垂れて馬の兩傍を覆ひ、泥のはねあがるをふせぐもの、革などにて製す。(障泥)。
あふり-いか[障泥烏賊](名) 【動】二鰓類に屬する烏賊の一種、軀幹は楕圓形、體色は淡紫色にして中央部最も濃し、我國南海殊に薩摩に多し、平素は遠海に棲息すれども、五六月の頃、產卵のため内海に來る。
あふり-いた[障泥板](名) 棟の左右にありて雨押(アマオサヘ)となるべき板。
あぶり-こ[炙子](名) ㊀衣服などをあたゝむるための竹籠、中に火を置きて用ふ。㊁餅などを燒くに用ふる鐵の網。
あぶり-だし[炙出](名) 白紙に、酒又は明礬などにて、畫又は文字をかき、これを火にて炙れば、其畫

又は文字が明かに現はるゝもの。
あぶり-どうふ[炙豆腐](名) やきどうふ。
あぶり-どめ[焙止](名) 閉ぢたる扉の風に煽らるゝを防ぐ金物。
†あぶり-め[炙布](名) 昆布を火に炙りて細く切りたるもの。
あぶり-もの[炙物](名) やきもの。やきざかな。
†あふりやう-し[押領使](名) 古昔、諸國の兇賊を押へ鎭むるため朝廷より派遣せし官吏。
あふ・る[溢](自、ら下二) ❶溢ちあまる。あまりて出づ。こぼる。❷手を空しくして歸る。利を得ずして止む。
あふ・る[煽](自、ら四) うごきひるがへる。風に吹かる。(團)。
あふ・る[煽](他、ら四) ❶吹きうごかす。ひるがへす。(團)。❷火を吹き起こす。風をおくりて火氣をさかんにす。❸馬上にて、あぶみを動かしあふりを打ちて、馬をいそがす。「馬をいたくあふりければ」。❹おだつ。そゝのかす。❺水・酒などを一氣に飲む。
あぶ・る[炙](他、ら四) 火にあてゝ火氣をとほす。ほす。火にあつ。
†あぶ・る(自、ら下二) おちぶる。零落す。「あちあぶれてさすらへんとし」。
[あぶれ(名) 手を空しくして歸ること。利なかりしこと。
[あぶれ-もの[溢者](名) やくざもの。ぶらいかん。わるもの。ならずもの。
あふ-レンズ[凹—](名) [物]中央薄く、周緣に至るに從ひて厚きレンズ。物體より出づる光線が此種のレンズを通過するときは、發散して實像を作ることなし。
(あふ-ゐん[押韻](名) 詩を作るに、句の中の一定の所に韻をふむこと。

あへ[韲](名) 韲ふること。又、あへ物。
†あへ[饗](名) 饗應。馳走。
あべ-かは[安倍川](名) あべかはもち。
あべかは-もち[安倍川餅](名) 駿河國安倍川邊の名物。燒きたる餅を、砂糖を混じたるきなこにまぶしたるもの。きなこもち。
あへ・ぐ[喘](自、か四) つかれて呼吸烈しくなる。いきぎれす。いきせく。
あべ-くぬぎ[阿部櫟](名) [植]あべまき。
[あべ-こべ(名) ものゝ反對なること。
あへ-しらひ(名) あしらひ。もてなし。
あへ-しら・ふ(他、は四) ❶挨拶す。應答す。❷待遇す。もてなす。❸取り添へて體裁をつくろふ。點綴す。「に同じ。」
†あべ-たちばな[安部橘](名) [植]「くねんぼ」
†あへ-つき[韲杯](名) 韲物を入るゝ器。
あへ-づくり[韲作](名) 肉を切りて和(あ)み合せたるもの。あへもの。
あへ-て[敢](副) おし切りて。強ひて。無理に。
†あへ-な・し[敢無](形、ク) 頼みがひなし。はりあひなし。
†あへ-ぬ・く[相貫](他、か四) 貫きてつらぬく。「さつきのたまにあへぬくまでに」。
あべ-まき[阿部槇](名) [植]殼斗科の植物。葉はくぬぎに似て厚く、葉面に毛茸を密生す。樹皮より木栓をとる。
あへ-まぜ[韲雜](名) 魚に削りたる鰹節をまぜて酒にひたしたるもの。
あへ-もの[韲物](名) ❶野菜と魚肉とをまぜあはせ、酢にて味を付けたるもの。❷ひうを。乾魚。(團)。

あへ-もの[饗物](名) 饗膳に出したる物。
アヘン[阿片=Opium](名) 一種の藥品。罌粟の未だ熟せざる果殼に切傷を附け、これより流出せる乳液を乾燥せしめて得たる褐色の粉末。苦味ありて特異の臭氣を有し、痲醉性の毒を有す。
アヘン-タバコ[阿片煙草](名) 阿片を加へて製したる煙草。
アヘン-ちゆうどく[阿片中毒](名) 阿片の毒にあたりて發する病。頭痛眩暈し、呼吸不正、皮膚蒼白となり、精神異狀を呈し、又昏睡狀態に陷る。
アボイルヂュボイス-かう[—衡=Aavoir-dupois](名) 「イギリス」國及び「アメリカ」合衆國にて普通に用ふる衡量。七千グレインを以て一「ポンド」となすもの。「にて學徒をうつこと。」
(アーボウ[下棒](名) (字の唐音)[佛]禪僧家が杖
アボス(名) 吸出の膏藥。
アポストロフ[Apostrophe](名) 英語等を綴る際、文字を抄略し、又は所有格をあらはす時に用ふる符號。o'clock 又は a boy's hat 等に於ける「'」の如し。
†あほひ[葵](名) [植]あふひ。
あほだら-きやう[阿呆陀羅經](名) 一種の俗謠。小形の木魚二つを打合せて調子をとるもの。
†あま[天](名) ❶あめ(天)に同じ。❷家の上の棚のかゝるところ。——の-いはと[天岩戸] あめのいはやど。——の-うきはし[天浮橋] 神代に、天と地との間に掛かれりといふ橋。——の-さかて[天逆手] 上古、物をまじなふときに打ちし拍子の名。——の-じやく[天邪鬼] ❶故意に人の言にさからひて、かたいぢを張るもの。❷四金剛の踏まへたる惡鬼の稱。——の-はごろも[天羽衣] ❶天人の服。❷神の服。❸古昔、天

皇が神事のために、湯にて聖體を淨めたまひしときの御衣。——の-はら[天原] おほぞら。
あま[海人](名) ❶すなどり。りやうし。❷海底に住みて魚介をとることを業とするもの。あまさん。(蜑、海人、白水郎)。——の-すてぐさ[海人捨草] 海人が鹽を燒きてすてたる灰。
アマ[尼](名) (「パーリ」語 Amma) ❶[佛]世を捨て頭髮を剃りて、佛門に入りたる女。「ビクニ」。❷[古]婦人をのゝしりて呼ぶ語。——が-べに[尼紅] 夕日の傾くころ、西の空の赤くやくること。ゆふやけ。
アマ[亞麻](名) (「ラテン」語 Amama) [植]亞麻科に屬する栽培草本。細き葉と帶紫色の花とを有す。莖より纖維を採り、種子より油を搾る。用途多し。

[アマ]
†あま-あかね[甘赤菜](名) [植]のぜり。
あま-あがり[雨上](名) 雨のはれたること。
あま-あし[雨脚](名) 雨のふり來り降り往くこと。
アマ-いと[亞麻絲](名) 亞麻の纖維より紡ぎたる絲。「テーブル」掛・敷布等を織るに用ふ。多く「フランス」國に產し、我國にては北海道より出づ。
あま-いぬ(名) 「こまいぬ」。「まきつばな。」
†あまうけ-ばな[雨承鼻](名) 上を仰ぎたる鼻。
あまうち-ぎは[雨打際](名) 軒端の雨のしたゝり落つるところ。あまおち。
あま-うり[甘瓜](名) [植]まくはうり。
あまえ-た・る[嬌垂](自、ら下二) 愛に慣れてわがまゝをいふ。あまゆ。
あま-おさへ[雨押](名) 板べいなどの上に、雨をふせぐために打ちつけたる板。かさぎ。

あま-おち[雨落](名) あまだれの落つる處。あまだれおち。
あまおち-いし[雨落石](名) 雨落の處に置きて、雨滴の爲に地の凹むを防ぐもの。
あまおち-びやうし[雨落拍子](名) 一定の時間をおきてうつ變化なき拍子。
あま-おほひ[雨覆](名) 雨のしづくを防ぐ爲に、ものゝ上を覆ふもの。
あまか[淦溜](名) 和船の淦(あか)をためおくところ。
アマ-がう[尼講](名) [佛]寺院にて婦人の信者のより集まること。
†あま-がくれ[雨隱](名) 物の陰に雨を避くること。「木陰に—立ちたるやうに」。
†あま-がけ・る[天翔](自、ら四) 空をとびかける。「あまがけりくにがけりて」。
あま-がさ[雨傘](名) 雨天に用ふるからかさ。
あま-がす[甘糟](名) 酒のかすのあまきもの。
あま-かぜ[雨風](名) ❶雨をふくみたる風。❷[地]降雨を伴ふ風。
†あま-がつ[天兒](名) 古昔、幼兒の傍に置き、その兒のわざはひをうつし負はするために用ひし人形。そのさまははふこに似たり。(天倪、尼兒)。
あま-ガッパ[雨合羽](名) 雨をふせぐ爲に衣服の上に著るもの。多くは油紙にてつくる。
あま-かは[甘皮](名) 樹木又は果實の内部にありて、核を含みたるうすき皮。
†あま-がは[雨皮](名) のりものなどに、雨をふせぐためにつけたる具。
あま-がへる[雨蛙](名) [動]かへるの一種。體形は小、色は淡綠又は茶褐色、居所によりてその體色を變ふ。指趾の末端に圓形の吸盤を具し、以て

巧(たく)に樹木の枝葉に攀綴す。叫聲ありてよく鳴く。
†アマ-がほ[尼顏](名) 扮飾せざる顏容。すがほ。
アマカワ[亞瑪港](名) 清國廣東省澳門即ち古昔の亞瑪港より舶來したりといふ上品の珊瑚。(亞媽港、天川)。
あまから-せんべい[甘辛煎餅](名) 砂糖と醬油との汁をぬりたる煎餅。
†あま-き[甘木](名) [植]「かんざう」(甘草)に同じ。
あま-ぎ[雨著](名) 雨のふる日に著るための衣服。あまよそほひ。
†あま-ぎぬ[雨衣](名) 前條に同じ。
†あま-ぎら・す[天霧](自、さ四) あまぎる。
†あま-ぎら・ふ[天霧](自、は四) あまぎる。
あま-ぎり[雨霧](名) ❶雨の降れるが如き濃き霧。❷[地]後には雨となるべき霧。
†あま-ぎ・る[天霧](自、ら四) 霧・靄にて空くもる。
あま-ぐ[雨具](名) 雨天の外出に用ふる雨を防ぐ具。
あま-くさ[甘草](名) [植]「かんざう」に同じ。
あまくさ-いし[天草石](名) [鑛]あまくさたうせき。
あまくさ-きりんさい[天草麒麟菜](名) [植]紅藻類に屬する海藻。圓柱狀にして、兩緣より羽狀に分枝す。多く肥後國天草島に產す。
あまくさ-たうせき[天草陶石](名) [鑛]天草島に產する陶石。その質本邦中にて最良なり。
あまくさ-と[天草砥](名) 天草島より出づる碾灰岩よりなれるあら砥。
あまくさ-やき[天草燒](名) 天草島本戸村より

製する陶器。頗る雅致ありて、多く茶器・花瓶・菓子器等をつくる。

†あま-くだす〔天降〕(他、さ四) 天上より人間界へくだす。

†あま-くだる〔天降〕(自、ら四) 天上より人間界へくだる。

あま-くち〔甘口〕(名) ❶甘味を好むと。❷酒などの甘味あるもの。❸人の氣に入るやうなる言語。❹愚なる人。「ナカ。」

あまくち-ねずみ〔甘口鼠〕(名)〔動〕はつかねずみ。

あま-ぐも〔雨雲〕(名)〔地〕雨滴より成る雲。始めは暗黒色にして後には淡灰色となる。一定の形狀なく、位置低くして、概ね雨となりて落下す。

†あま-ぐも〔天雲〕(名) そらにあるくも。

†あまぐも-の(枕)「ゆく」「わくる」「わかる」「よそ」「たゆたふ」に冠す。

†あま-ぐり〔甘栗〕(名) 大饗の時、朝廷より大臣に賜ふ栗。

あま-け〔雨氣〕(名) 雨を催はすが如きけはひ。

あま-け〔甘氣〕(名) あまみ。あまさ。

あま-ご〔甘子〕(名)〔動〕ますの幼兒、形鮭に似て赤黒き小斑點あり。

あま-ごひ〔雨乞〕(名) ひでりの時、神佛に雨の降らんことを祈ると。

あま-ごもり〔雨籠〕(名) 雨にふりこめられて、家に居ると。

†あま-ごろも〔天衣〕(名) 天人のきる衣。羽衣。

†アマ-ごろも〔尼衣〕(名) 尼のきる衣。

†あま-ごろも〔雨衣〕(名) 雨ふりの外出にきる著物。あまぎぬ。

†あま-ごろも〔海人衣〕(名) 海人のきる著物。

あま-ぐろつばめ〔雨黒燕〕(名)〔動〕あまつばめ。

あま-さうぞく〔雨裝束〕(名) あまじたく。

†あま-さかる(枕)「ひな」に冠す。

アマ-さぎ〔尼鷺〕(名)〔動〕さぎの一種。大いさも形も普通の白鷺にひとしく、たゞ背に赤茶色の羽あるを異なりとす。

あま-ざけ〔甘酒〕(名) 一種の飲料。糯(モチ)の飯に麹を入れて釀したるもの。一夜にて成熟す。味甘し。ひとよざけ。(醴)

†あま-ざはり〔雨障〕(名) 雨にさまたげられたると。「一つれする君は」

†あま-さへ〔剩〕(副) あまつさへ。

あま-ざらし〔雨曝〕(名) 覆ふものなく雨にぬるゝと。雨にさらすと。

あま-し〔甘〕(形、一) ❶砂糖・飴などの味あり。❷鹽氣すくなし。❸にぶし。のろし。❹きびしからず。ゆるし。❺心に逆はず。

あま-じし〔餘肉〕(名) 瘤・疣などの如き贅肉。

あま-じたく〔雨支度〕(名) 雨天に外出するときの用意。

あま-しだり〔雨滴〕(名) あましづく。

あま-しほ〔淡鹽〕(名) 輕く鹽漬けにすると。

あま-しめり〔雨濕〕(名) 雨のために、濕氣を帯ぶると。

あま-しもの〔餘物〕(名) ❶不用になりて餘したるもの。❷世の中よりもてあまされたる人。

あま-しやうじ〔雨障子〕(名) あぶらしやうじ。

あま-じやうぞく〔雨裝束〕(名) あまさうぞく。

あま-す〔餘〕(他、さ四) あまるやうにす。のこす。

†アマ-ぜ〔尼前〕(名)(尼御前の略) 尼を敬ひて呼ぶ稱。

†アマ-そぎ〔尼削〕(名) 女の兒の髪を頸の程にて切りそろへたるもの。「みぐし」のほどにてゆら

くと。

†あま-そそぎ〔雨注〕(名) 雨だれの落つると。

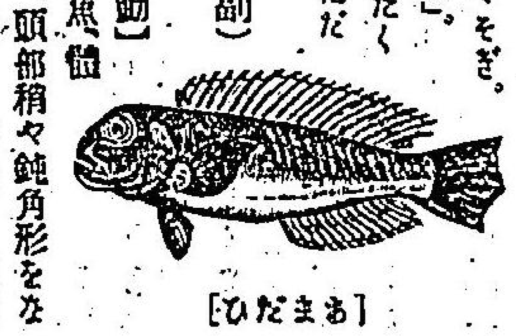
†あま-そそる〔天聳〕(自、ら四) 空に高くそびゆ。

†アマ-そり〔尼剃〕(名) アマそぎ。「一なるほどの眼に髪の入るを」

あま-た〔許多〕(副) 數多く。たくさん。たんと。どっさり。おびただしく。(數多)

あま-たび〔許多度〕(名、副) たびたび。いくたび。

あま-だひ〔甘鯛〕(名)〔動〕硬鰭類中あまだひ科に屬する魚。體形は側扁にして、額骨隆起し、頭部稍々鈍角形をなす。體色は背部紅にして淡黄色の斑あり、腹部白し。我が國東海・西海に多く産す。(方頭魚)



〔あまだひ〕

アマ-だふし〔亞麻倒〕(名)〔植〕旋花科の寄生植物。索麵の縷ひきたる如く亞麻の幼莖に寄生し、遂にこれを斃す。

あま-だへ〔許多重〕(名) 幾重にもかさなると。

あま-だま〔天玉〕(名)「こはく(琥珀)」に同じ。

あま-だり〔雨滴〕(名) 雨だれ。あまだれ。

あま-たるし〔甘弛〕(形、一) 過度に甘し。

あま-だれ〔雨垂〕(名) 軒にたれて落つる雨水。あまだり。

あまだれ-おち〔雨滴落〕(名) あまだれを落すところ。あまおち。

あま-ちや〔甘茶〕(名) ❶〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する小木本。花は二様ありて、外國のものは大形の蕚を有す。色は始め青にして後紅に變ず。あまちや(土常山)。❷あまちやの葉莖を煎じたる汁。四月八日の灌佛會に用ふるもの。

あまちや-づる〔甘茶蔓〕(名)〔植〕葫蘆科に屬する草本。卷鬚を以て他物に倚り登る。葉は複葉にして粗なる鋸齒あり、葉腋に絲狀の花莖を抽き、數多の細花を綴る。つるあまちや。(絞股藍)

アマ-ぢよらう〔亞麻女郎〕(名)〔動〕燈蛾(ヒトリ)の一種。前翅は赤褐、後翅は赤色にして黒紋あり。幼蟲は褐色の毛蟲にして、亞麻及び荳科植物の害蟲なり。

†あま-つ-かぜ〔天津風〕(名) そらの風。

†あま-つ-かみ〔天津神〕(名) 天にましますす神。

†あま-つ-くに〔天津國〕(名) 天上に在りと想像する國土。

あま-づけ〔天漬〕(名) 鹽をあまくして漬けたる物。

あまつ-さへ〔剩〕(副) 此の事のあるが上に、他事を加へ添へて。おまけに。

†あま-つ-しるし〔天津證〕(名) 天位にありといふ確かなる證據。即ち、三種の神器。(天璽)

†あま-つ-そら〔天津空〕(名) ❶あまは空。❷朝廷・禁裡の敬稱。❸うはのそら。うちやうてん。

†あま-つ-たふ(枕)「日」に冠す。

†あま-つ-つみ〔天津罪〕(名) 素盞嗚尊が天上にて犯し給ひし罪。畔放(アハナチ)・溝埋(ミゾウメ)・樋放(ヒハナチ)・頻蒔(シキマキ)・串刺(クシザシ)・生剥(イキハギ)・逆剥(サカハギ)・屎戸(クソヘ)等これなり。

あま-づつみ〔雨包〕(名)(ゝ)あまおほひ。(ゞ)「あまぐもり」。

あま-つばめ〔雨燕〕(名)〔動〕一種の鳥。形は甚だ普通の燕に似て大きく、腹部は白色なり。尾短くして分叉せず。夏日群をなして深山の懸崖に營巣し、秋に至りて南方へ去る。

†あま-つ-ひつぎ〔天津日嗣〕(名) 天皇の御位。

†あま-つ-みづ(枕)「あふぐ」「まつ」等に冠す。

†あま-つ-やしろ〔天津社〕(名) 天津神を祭れる社。

あま-づら〔案摩面〕(名) 器物の取手などに用ふる形。舞樂の案摩の假面に似てふくらみたるもの。

†あま-づら〔甘葛〕(名) ❶〔植〕あまちやづる。❷甘茶葛の汁、食物に甘味をつくる爲に用ひらる。

†あま-つ-をとめ〔天津少女〕(名) ❶天人。てんによ。❷五節の舞姫。

アマ-デラ〔尼寺〕(名)〔佛〕尼の住む寺。

†あま-てらす〔天照〕(他、さ四) ❶そらよりてらす。❷天が下をあまねくしろしめし給ふ。

†あま-てる〔天照〕(自、ら四) 空にて光る。空より照る。「あまてる光いくよ經ぬらむ」

あま-ど〔雨戸〕(名) 家の緣側の外にありて、雨を防ぎ夜を戒しむための戸。常には戸袋の中に收む。

あま-どうふく〔雨胴服〕(名) あまばおり。

あま-どころ〔甘草薢〕(名)〔植〕百合科に屬する草本。莖は多少屈曲し、葉の下面は帶白色を呈す。種々の變種あり、根莖は食用に供せられ、又澱粉を製すべし。かきゆり。(甘野老、玉竹、玉女菜、萎蕤)

†あま-とぶ-や〔天飛〕(自、は四) 空を飛ぶ。

あま-どり〔雨鳥〕(名)〔動〕一種の鳥。形は燕に似て稍々大きく、腹は黄にして斑文あり。ボルネオ島などの海岸にある暗黑なる大洞穴の内に巣構ふ。舌の兩側にある腺の分泌液は、粘着力甚だ強く、これを吐出して絲となし、以て巣を作る。清國人は好みて此巣を食す。

あま-な〔甘菜〕(名) ❶甘味の辛からぬ菜の總名。辛菜の對。❷〔植〕百合科に屬する草本。莖は細長く、花瓣の片は白色にして外面に暗紫色の線紋を具へ、鱗莖は食用に供せらる。(山慈姑、光慈姑)

あま-なっとう〔甘納豆〕(名) 一種の菓子。あづきを砂糖にて煮つめ、砂糖にまぶしたるもの。

あま-なづな〔甘薺〕(名)〔植〕十字科の一年草。莖の高さ一二尺、葉は披針形にして黄色無柄の總狀花を開き、倒卵形の莢ある實を結ぶ。

†あま-なふ〔甘〕(自、は四) 心にかなふ。承知す。あまんず。

†あま-なふ〔和〕(他、は下二) 交際を親密にす。

アマ-にふだう〔尼入道〕(名)〔佛〕アマにようばう。

アマ-にゆ〔亞麻仁油〕(名) 亞麻の實より製したる油。黄色又は褐黄色を帶び、一種の臭氣を有す。下劑とし、又ペンキ・印肉等を製するに用ひらる。乾性油。

アマ-にようばう〔尼女房〕(名)〔佛〕在家のまゝ入道したる尼。

あま-ねし〔遍〕(形、一) 行きわたりてあり。及ばぬくまなし。(周、普)

†あま-ねはす〔遍〕(他、さ四) あまねく及ぼす。

あまの-おもては〔安摩面羽〕(名) 安摩の面の如き三角形の斑ある矢の羽。

あま-の-がは〔天河〕(名)〔天〕晴夜に天空を亘裂きて河の如く見ゆる灰白色の帶狀部。幅十度乃至十五度にして、無數の微光を放てる恒星の集合より成る。夏秋の交最もよく見ゆ。(銀河、天漢)

あまの-さけ〔天野酒〕(名) 河内國錦部郡天野邊より出でたる酒。

あまの-じやく(名) 天[illegible]の條を見よ。

あまの-おやこ(名)〔動〕「ぎうむし」に同じ。

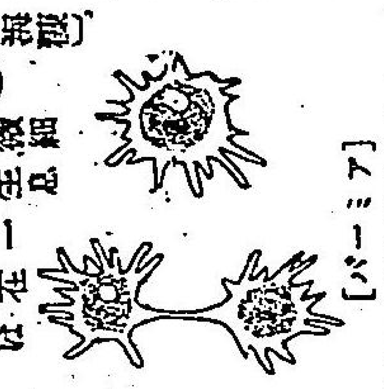
あまの-たる〔天野樽〕(名) 婚禮その他祝儀のときに用ふる角樽、もと天野酒を入れたるもの。

あま-の-め［安摩目］(名) あまのおもては。
あま-のり［甘海苔］(名) 【植】紅色類に屬する海藻、磯れ海岸の淺處に生ず、葉狀は有性生殖によれり、武藏國品川沖などにて盛にそだを植ゑてこれを繁殖せしむ、食用に供せらる。(紫菜)
あま-ばおり［雨羽織］(名) 昔時、雨をまのぐため に著たる羽織。
あま-ばかま［雨袴］(名) 雨を防ぐ爲に著る油をひきたる袴。 「口。
あま-はき［雨吐］(名) 溜りたる雨水を吐き出す
あま-ばしり［雨走］(名) 兜の目庇の上にて屋の庇の如くなれるところ。
†あまはせ-づかひ ヅカヒ［天馳使］(名) ❶そらをはしらする使。 ❷早く行くつかひ。
あま-はだ［甘肌］(名) 檜木などの薄き皮、舟などの洞をふさぐに用ふるもの。まいはだ。
あまはた-いし［雨畑石］(名) 甲斐國富士川の川筋に産する粘板岩、古來、硯材として用ひらる。
あまはた-すずり［雨畑硯］(名) 雨畑石にて造りたる硯。
あま-はれ［雨晴］(名) 雨の晴るゝこと。
あま-ひき［雨引］(名) 「あまごひ」に同じ。
あま-びこ［天彦］(名) 音響の空に反響すること。
あま-びこ［雨彦］(名) 【動】「やすで」に同じ。
†あまびこ-の(枕) 「おと」に冠す。
†あま-びさし［雨庇］(名) あまびさしのくるま。
――のくるま［雨庇車］ 古昔、貴人の乘る車の一種、檳榔車の最も貴きもの。
†あま-びたひ ビタヒ［尼額］(名) 尼の如く髮を切りたる額つき。「額―ひきつくろひ」。
†あま-びと［海人］(名) 「あま」(海)(二)に同じ。

†あま-びと［天人］(名) 天人。天女。
†あま-ふ ウ［諂］(他、は下二) 男をゆるされんと謂ふ。わぶ。「いとはしたなくいひ爲りければ、あまへて逃げにけり」。 「防ぐもの。
あま-ぶた［雨蓋］(名) 垣などの上を覆ひて雨を
あまぶた-ガハラ ガハラ［雨蓋瓦］(名) 堀鎭の端の方にて、兩方の庇の瓦の會したる所を覆ふ瓦、動物などを彫刻したるものあり。
あま-ぶね［海人船］(名) 魚をとる船。いさり船。
†あま-べ［餘戸］(名) 大寶令の制にて、五十戸に滿たざる里。(戸部)。 「る柿。(烏柿)。
あま-ぼし［甘干］(名) 皮を去り日に輕く干した
アマ-ほふし ホウシ［尼法師］(名) 比丘尼。「アマ」。
あま-ま［雨間］(名) (い)雨の晴れ間。「―もおかずながめせしまに」。(ろ)雨の降る間。「はとゝぎす―もおかず聲叫きわたる」。 「しのくるま。
†あまままゆ-の-くるま［雨眉車］(名) あまびさ
あま-みづ［雨水］(名) 雨降りて溜りたる水。
あま-も［海藻］(名) 【植】眼子菜(ひるむしろ)科に屬する海草、葉は細長く、幅五分内外ありて縱溝を有し、肥料・緩衝料又は椅子・蒲團などの心に用ひらる。(大葉藻)。
あま-もやう ヤウ［雨模樣］(名) あめもやう。
あま-もり［雨漏］(名) 屋根などより雨のもること。
アマ-や［尼屋］(名) 尼のゐる家。
アマ-やき［尼燒］(名) 樂燒の一種、宗巖の妻貝林尼の燒きたるもの。
あまやか-す ス［嬌］(他、さ四) 小兒を、ゆるく育(そだ)てゝ我儘ならしむ。あまえしむ。
あま-やどり［雨宿］(名) 雨のはるゝまで、宿りて脚を止むること。

あま-やみ［雨止］(名) 雨の降りやむこと。又、其の間。
あま-ゆ ユ［嬌］(自、や下二) 親しみ過ぎてわがまゝになる。なれてきまゝをなす。
あま-よ［雨夜］(名) 雨の降る夜。――の-つき［雨夜月］ 雨天に見る月、即ち、たゞ想像すべくして現實ならざるものにたとへいふ語。「形みぬ君は―なれや」。 「どり。
あま-よけ［雨避］(名) ❶あまおほひ。 ❷あまや
あま-よそひ ヨソヒ［雨裝］(名) 雨をふせぐよそひ。
あま-より［甘捻］捻のよくかゝらざる絲。
あま-よろこび［雨喜］(名) 旱天に雨ふりたるときを喜びてなす饗讌。
あまり［餘］(名) あまること。あまりたるもの。
あまり［餘］(副) 法外に。度を過ぎて。
†あまり-さへ エ(副) あまつさへ。「―ありて行くべき年だにも」。 「の。
あまり-もの［餘物］(名) 無用のもの。のこりも
あま-りよう［雨龍］(名) 龍の類、角無く尾細く、とかげの形したるものといふ。(蛟龍)。
あま-る ル［餘］(自、ら四) 充ちて殘る。程を過ぐ。のこる。 「屬との合金。
アマルガム［Amalgam］(名) 【化】水銀と他の金
アマルガム-はふ ホウ［―法］(名) 【化】「アマルガム」より水銀を蒸溜し去りて、金屬を析出すること。
あま-をとめ［海少女］(名) 海人の少女。
あま-をとめ［天少女］(名) 天人の少女。
あま-をぶね［海小舟］(名) ❶いさりぶね。漁船。 ❷【動】一種の貝、形はあさりに似て、介殼は内外白く、殼は紫紅色を帶ぶ。
あまん-ずる［甘］(自、さ變) こゝろに足れりとす。まんぞくす。

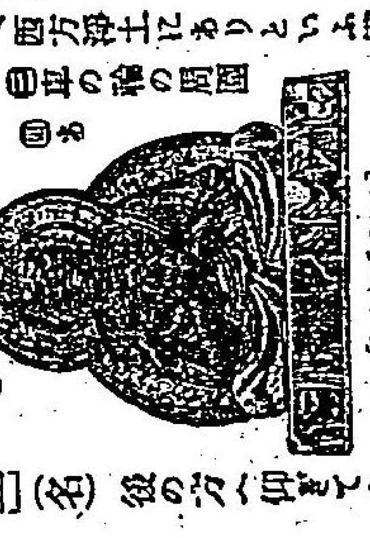
あみ［網］(名) ❶魚類又は鳥獸を捕ふるに用ふる具、絲を打ち違ひに編み結びて作れるもの、其の形種々あり。 ❷すべて絲又は針金などを、網の目の如くに編み結びて作りたるものゝ稱。 ❸人を捕ふる手段。 ❹とがめ。刑罰。――が-おりる［網下］ 犯罪をなせる處へ警吏が踏み込む。――の-め［網目］網の絲と絲との間のすきま。
あみ［醬蝦］(名) 【動】裂足類中あみ科に屬する節足動物、形狀・構造共に蝦の幼蟲に類似す、胸部第六環節の内枝に聽囊を有するを以て著名なり、多く泥海に産す、えはからなどゝなして食用に供せらる。あみえび。ぬかえび。(醬蝦、糠蝦)
アミーバ［Amœba］(名) 【動】原生動物の一、極めて微細なる蟲にして、池沼などに生息す、體は僅單なる原形質の一塊に過ぎず、其の體表より自在に突起を出送して、移行又は捕食を營む。


［バーミア］

あみあげ-ぐつ［編上靴］(名) 足の甲に當るところを編みあげて、足に結ひつくる半靴。 「ろ。
あみ-あし［網足］(名) 立網の下部。
あみ-あたま［網頭］(名) 地引網の袋のあるところ。
あみ-あをさ［網蝸菜］(名) 【植】綠藻類あをさの一種、體の表面に細孔ありて網の如し、琉球に産す。
あみ-アンドン［網行燈］(名) 方柱形の鐵骨に鐵網を張りたる行燈、その一方を開閉して火を點ず。
あみ-いし［網石］(名) ❶網の重しの石。 ❷【地】古生代の石炭紀等に多き苔蟲の類。
あみ-いた［編板］(名) あみ彫物の類にて、古昔、罪人をのせしもの。

あみ-いと［網絲］(名) 網を編む絲。 「其の人。
あみ-うち［網打］(名) 投網をもて魚を取ること。又、
あみ-えび［網蝦］(名) 【動】「あみ」(醬蝦)に同じ。
あみ-えり［網魞］(名) 「えり」(魞)に同じ。
あみ-がさ［編笠］(名) 編みて作りたる笠、もとに菅などを用ふ。
あみがさ-がひ ガヒ［編笠貝］(名) 【動】一種の貝、介殼扁くして、形あみがさに似る。
あみがさ-さう サウ［編笠草］(名) 【植】大戟(たいげき)科に屬する小草本、葉は互生して椰の葉に類似す、花は單性にして黃色、苞は大形にして莖頭に着く。えのきぐさ。
あみがさ-たけ［編笠茸］(名) 【植】菌類、頭部は一二寸、褐色にして蜂窩の如く、柄は二三寸、中空なり、陰地に生ず。
あみがさ-もち［編笠餅］ まんじゅうを丸く薄く延ばし、中に餡を入れ、二つに折りたるもの。
あみがさ-ゆり［編笠百合］(名) 【植】百合科に屬する草本、花は鐘狀に開き、淡黃色にして、内面は淡綠線條に紫色細點を交へたる網狀紋を有す、觀賞用又は藥用として栽培す。ばいも。(貝母)。
あみ-がひ ガヒ［網貝］(名) 【動】苔蘚蟲類に屬する蝸形動物、群體をなして生活す、群體共有の骨格は直立し、許多の孔を以て開通す、其狀網の如く、白色又は暗紅色なり、海底に産す。(雜冠介)。
あみ-ぐら［網倉］(名) 漁業用の網を藏する倉、濕氣と風害とを防ぐ爲に、床を高くし壁を二重にす。
あみ-こ［網子］(名) 地引網を引く人。
あみ-ざいく［編細工］(名) 絲を編みて靴下・手袋等の種々のものを造ること。 ❷其の細工もの。

あみ-ざこ［醬蝦雜魚］(名) あみ(醬蝦)。
あみざこ-めし［醬蝦雜魚飯］(名) あみざこを混ぜ、味をつけて煮たる飯。
あみ-さし［網刺］(名) あみすき。
あみ-ぐさ［網齒朶］(名) 【植】羊齒類の一種、莖の高さ一尺ばかり、毛茸を生じ、葉も一尺ばかりにして、葉脈は多く分岐して網狀をなす、四國・西海に産す。 「汗取の「シャツ」。
あみ-シャツ［網襯衣］(名) 絲の網にて造りたる
あみ-じゃくし［網杓子］(名) 金網にて造れる杓子。 「たる襦袢。
あみ-じゅばん［網襦袢］(名) 絲を編みて作り
†あみ-す ス［浴］(他、さ下二) あぶす。
あみ-すき［網結］(名) 網を作ること。又、其の人。
あみすき-ばり［網結針］(名) 網を作るに用ふる針、竹・木又は鯨の骨などにてつくる。あみばり。
あみ-そ［網苧］(名) 網を作る材料となす麻絲。
アミダ［阿彌陀］(名) (梵語 Amitabha) ❶【佛】無量壽又は無量光と譯す、西方淨土にありといふ佛の名號。 ❷あみだくじ。 ❸車の輪の周圍の木。これに輪金を箝む。 ❹あみだかぶり。――の-ひかり［阿彌陀光］ あみだくじ。
あみ-だいく［網大工］(名) 網を造り、又は網を修理する人。


［アミダ(一)］

アミダ-がさ［阿彌陀笠］(名) 後の方へ仰ぎてかぶりたる笠。
アミダ-かぶり［阿彌陀被］(名) 帽子を後頂にずらしてかぶること。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの　はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

†古語　〜俚語方言　（字音

アミダ-くじ[阿彌陀籤] 一種の遊戲、金額の多寡を志るしたる籤を引きて、其志るしある金額を出しあひ、物を買ひてこれを等分すること。
アミダ-ゴマ[阿彌陀護摩](名) 【佛】阿彌陀如來を祈念する爲に焚く護摩。
アミダ-だうドウ[阿彌陀堂](名) ㊀【佛】阿彌陀佛を安置したる堂。㊁茶の湯に用ふる釜の一種。
アミダ-ブ[阿彌陀佛](名) 【佛】「アミダ」に同じ。
アミダ-ブツ[阿彌陀佛](名) 【佛】前條に同じ。
アミダ-ほふホウ[阿彌陀法](名) 【佛】滅罪生善の爲め、阿彌陀を祈念する密教の修法。
アミダ-わり[阿彌陀割](名) 町の割方、東京の如く一の中心より大道を八方に散出するもの。ごばんわりの對。
あみ-つくだに[醬蝦佃煮](名) 醬蝦の中より汚物をのぞきて煮たる佃煮。
あみ-づな[網綱](名) 網につけたる綱。
あみ-ど[編戸](名) 竹又は木を編みて作りたる「戸」。
あみ-ど[網戸](名) かなあみを張りある戸。
アミド[硼基=Amid](名) 【化】「アンモニア」中の水素の一部若しくは全部を酸基を以て置換して得たる化合物。
廿**あみ-どり**[網捕](名) 網にて鳥を捕ること。
廿**あみ-どり**[網鳥](名) 【動】「ほとゝぎす」の異名。
あみ-なはナワ[網繩](名) あみづな。
あみ-の-き(名) 【植】「あふち」に同じ。
あみ-の-め[雀舌草](名) 【植】石竹科に屬する草本、田圃に自生す、葉は卵形或は楕圓形にして、萼片は通常花瓣より大きく、花柱は三個あり。
あみ-のりもの[網乘物](名) 網をかけたる乘物、徳川時代に、重き犯罪人を護送するに用ひたり。

あみ-は-も[網葉藻](名) 【植】綠藻類の海藻、莖は單條にして短く、葉は分岐して網狀をなし、卵圓形なり。
あみ-ばり[網針](名) あみすきばり。
あみ-びと[網人](名) あみこ。
あみ-みどろ(名) 【植】綠藻類の淡水藻、全體嚢狀をなして圓柱形の細胞多數結合して網狀をなす。
あみ-め[編目](名) 物と物とを編み合はせたる目。
あみめ-ばん[網目版](名) 印刷術の一種、感光板の前に縱横の規則正しき網を置きて、印刷せんとする繪畫・文字を撮映し、その印畫を幾多の小部分に區分し、これを製版用の金屬板に燒きつけて原版となして印刷す。
あみ-もの[編物](名) あみざいく。
アミル-アルコール[Amyl alcohol](名) 【化】糖分の「アルコール」醱酵に當りて「エチルアルコール」に伴ひて發生する化合體、「フーゼル」油の主成分をなす所の醱酵「アミルアルコール」は主としてこれより成る、流動し易き無色の液體にして、一種不快の臭と味とを有す。
あみ-を[編緒](名) 編みたる苧の紐。
アミン[Amine](名) 【化】「アンモニア」中の水素を「アルキル」基を以つて置換して得たる化合體。
廿**あむ**[虻](名) 【動】あぶ。
あ-むまむみむむめめ[編](他、ま四) ㊀【動】絲・竹・籐などの類をくみあはす。㊁書史を寄さつゞる。
廿**あ-む**みみむむるむれみよ[浴](他、ま上二) あぶ。
廿**あむ-しろ**[編代](名) あじろ。
廿**あむ-す**さしすすせせ[浴](他、さ四) あぶす。
廿**あむ-す**せせすするすれせよ[浴](他、さ下二) あぶす。
廿**あむ-づち**(名) (編む土の意) あづち。

あめ[天](名) ㊀あを〳〵として高く大地をおほひ、日月星辰其間にかゝる所。てん。こくう。そら。㊁日の神のおます所。造化の神のおます所。人間以上の靈力あるものゝ住める所。——**が-した**[天下] 天に覆はれたるところ。國土の總稱。——**の-いはと**イワト[天岩戸] あめのいはやど。——**の-いはや**イワヤ[天岩屋] 天上にありといふ岩屋。——**の-いはやど**イワヤド[天岩屋戸] 天上にある岩屋の戸。——**の-した**[天下] あめがした。——**の-はごろも**[雨羽衣] あまのはごろも。廿——**の-ますびと**[天益人] ひと。人間。廿——**の-みかげ**[天御陰] 天皇のみちせらるゝところ。宮城。
あめ[雨](名) 雲の水分子凝集して水滴漸く增大し、遂に空中に浮遊する能はずして、地上に降下するもの。——**の-あし**[雨脚] あまあし。——**の-ひ**[雨日] 雨の降れる日。
あめ[鯇](名) 【動】あめのうを。
あめ(名) 【動】みづすまし。
あめ[飴](名) 一種の食品、餅米を蒸し大麥のもやしを入れ、熱湯を加へ搾り、釜に入れて煉りたるもの。——**の-もち**[飴餅] 水飴をぬりたる餅、遠州小夜中山の名物。——**を-くはす** 勝つべき技倆あれど、先づ負けて相手を喜ばす。
アメーバ(名) 【動】「アミーバ」に同じ。
あめ-あと[雨跡](名) ㊀雨のしづくのあと。㊁【地】岩面に存する雨滴の跡、即ち岩石の未だかたまらざる時に、雨ふりて凹みを殘したるもの。
(**あ-めい**)[蛙鳴] 蛙のなきごゑ。
あめ-いし[飴石](名) 一種の石、割れば中の色水飴の如し。
(**あめい-せんさう**ソウ)[蛙鳴蟬噪](名) 蛙・蟬などの鳴聲の如くさわぐこと。

あめ-いろ[飴色](名) 飴のごとき色あひ。
あめ-うし[飴牛](名) あめいろの牛。(黄牛)。
あめ-うり[飴賣](名) 街上に飴を賣り歩く商人。
あめ-かす[飴滓](名) 飴を搾りたる滓、牛豚などの飼料とす。
あめ-くかきくくけけ[叫](自、か四) 高く聲をあげてさけぶ。わめく。
あめ-ざいく[飴細工](名) ㊀かた飴にて、鳥獸・人物などの形をつくりたるもの。㊁外形いたづらに觀るべくして、實質の感測なるもの。
あめ-しづく[雨雫](名) 雨のしづく。
廿**あめ-しらす**さしすすせせ[天知](他、さ四) 天上を治め賜ふ。崩御す。
あめ-ちまき[飴粽](名) 飴をなすりたる粽。
あめ-つち[天地](名) 天と地と。——**の-ふくろ**[天地袋] 初春にぬひて、天地を縫ひ合はせ、すべての幸福を入るといふ意の祝ひの袋。
あめ-の-うを[鯇](名) 【動】喉鰾類中さけ科に屬する魚、體は延長にして多少側扁なり、體長四五寸許、體色は背部暗蒼色にして黑色の小點散在し、腹部銀白色なり、我國東北地方の溪流・湖川に產す。
あめ-ばうボウ(名) 【動】みづすまし。
あめ-はりびきホウ[飴寶引](名) 籤にて景物を添へて飴を賣ること。
あめ-ばち[飴蜂](名) 【動】姬蜂科の蜂、全身飴色にして小形なり。
廿**あめ-びと**[天人](名) ㊀天上の人。㊁殿上人。
あめ-ふらし[雨降](名) 【動】(い)腹足類中後鰓類に屬する軟體動物、海中に產し、形狀は蛞蝓に似る、鰓を右側に具し、外套を以てこれを蔽ふ、體に觸るれば紫色の液を放つ、うみうさぎ。(ろ)陸棲の山中に、雨中に出づる、形の石決明(アハビ)に似て殼なき動物。(雨虎)。

[あめふらし(る)]

あめ-ふり[雨降](名) ㊀雨の降ること。㊁雨の降る日。
廿**あめ-ふれ-ば**(枕) 「かさ」に冠す。
あめ-ます[鯇鱒](名) 【動】あめのうを。
あめ-もやうモーヨウ[雨模樣](名) 雨の降りさうなる氣色。
あめや-やき[阿米屋燒](名) 樂燒陶器の一種、明人宗慶の燒き始めたるもの。
アメリカ-ごけ[—後家](名) 「アメリカ」へ出稼せる人の留守する妻。
アメリカ-なでしこ[—撫子](名) 【植】石竹科の多年生草本、「ヨーロッパ」の原產なれど近來我國に移植す、莖の高さ一尺ばかり、葉は卵狀披針形にして葉脈五條あり、庭園に栽培し、花頗る美麗なり。
アメリカ-ばうふうボーフウ[—防風](名) 【植】繖形科の一二年草、莖の高さ二三尺、葉は複葉にして二乃至五の小葉よりなり、秋下種し、翌夏黃色の繖形花をつく。
アメリカ-はぎ[—萩](名) 【植】荳科の多年草、莖は高さ二三尺、毛茸を生じ、葉は三出、葉腋よりは紫紅色の總狀花を出し、甚だ美なり。
アメリカ-まつ[—松](名) 【植】松柏科の植物、松に似て北「アメリカ」の西部に產す、船材又は建築材用とす。
アメンドウ(名) 〔ポルトガル語 Amendoa〕 【植】(い)㊀薔薇科の喬木、高さ一丈より二丈餘に達し、葉は披針形にして綠に鋸齒あり、葉の出づる前に花を開く、花は大にして一寸ばかり、淡紅色にして美麗なり、實は肉硬く、熟すれば裂開して核を現はす。㊁「アメンドウ」の核、其の仁食ふべし。(ろ)「カラ」もゝの一名。(桃屋跡)。

あめん-ばうボウ[飴坊](名) 【動】みづすまし。
あめん-ぼう[飴棒](名) 棒形につくりたる飴。
廿**あも-る**らりるるれれ[天降](自、ら四) 天上より下界へくだる。あまくだる。
あや[文](名) ㊀さま〴〵に顯はれたる色合ひ、又は模樣。㊁たくみ。てだて。㊂文章の修飾。㊃うまみ。おもむき。㊄すぢみち。けぢめ。
あや[綾](名) あやを織り出したる絹。——**の-し**[綾師] あやとりのし。
廿**あや**(感) あな。あなや。
あやいと-をり[綾絲織](名) いちらくおり。
あや-をり[綾織](名) 「あやし(綾)」に同じ。
廿**あや-がき**[綾垣](名) 古昔、絁を以つて殿内又は室内を隔つるに用ひしもの。
あやかし(名) ㊀海に出づといへるばけ物。㊁【動】「ごばんざめ」。
あやかり-もの[肖者](名) ㊀長者に似たるもの。㊁あはせもの。
あやか-るらりるるれれ[肖](自、ら四) ㊀感じて似る。㊁感じて似んとねがふ。
あや-ぎぬ[綾絹](名) 綾織にしたる絹。
あや-ぎり[文桐](名) 【植】あをぎり。
あや-ぎれ[綾切](名) 歌の節のとぎるゝこと。
廿**あや-くず**[綾葛](名) 綾織の葛布。
あや-ゴロ[綾吳絽](名) 綾織の吳絽服。
あや-ししくしきしけれ[怪](形、二) ㊀不可思議なり。くすし。㊁めづらし。ことなり。㊂いぶかし。うたがはし。㊃賤し。
あやし-び[怪](名) ふしぎ。不分明。
あやし-び[怪火](名) ㊀其のもとの不分明なる火。㊁妖怪の燃す火。㊂燐火。

あやし・ぶ [怪](他、は四) あやしむ。

あやしみ [怪](名) あやしむこと。ぎねん。いぶかり。

あやし・む [怪](他、ま四) あやしと思ふ。ふしぎとなす。うたがふ。いぶかる。

廿あや・す (他、さ四) 血又は汗などを出だす。ながす。もらす。

あや・す (他、さ四) 愛しなぐさます。

あや・すぎ [文杉](名) ㊀[植]杉の一種、葉は杉に似て裏白し。㊁杉の薄板を網代に編みたるもの、垣などに用ふ。㊂人の字の如き形を連ねたる模様、刀劍の中心(ナカゴ)などにほりつくるもの。

あや・すげがさ [綾菅笠](名) 菅を綾に編みてつくれる笠。

あや・たけ [綾竹](名) 引窓に横たへて引綱をかくる竹。

あや・ぢ [綾地](名) あやおりの地合。

[あ・やつ] [彼奴](代) あのやつ。かやつ。

あや・つき [文槻](名) 槻の木理の綺麗なるもの。

あやつり [操](名) ㊀あやつること。㊁あやつりにんぎやう。

あやつり・ざ [操座](名) あやつりしばゐ。

あやつり・しばゐ [操芝居](名) 操人形を舞はせて見する芝居。

あやつり・にんぎやう [操人形](名) 人形に絲をつけ、かげよりあやつりて、所作をなさしむる戲。

あやつ・る [操](他、ら四) ㊀絲をつけ、かげよりひきて物を動かす。㊁かげにありて、物をさまざまにはたらかす。㊂あやなす。

あや・どり [綾取](名) ㊀布を織ること。㊁絲を手指に纏ひ、さまざまに組み合すること。廿——の・し [綾取師] 古昔、織部司に屬し、織物の事をつかさどりし技手。

あやど・る [操](他、ら四) ㊀あやつる。㊁あやなす。

あやな・し [文無](形、二) 不分明にあり。筋道立たず。

あやな・す [操](他、さ四) 巧にあしらふ。ほどよくあつかふ。

あや・に [奇](副) ㊀きたいに。めうに。㊁はなはだしく。きはめて。

あや・にく [嘆惜](副) ㊀おもはず。意外に。㊁をりあしく。あはせわろく。

廿あやにく・ごころ [嘆惜心](名) 意地の惡しきこと、「いとけしからぬ御—なりかし」。

あや・にしき [綾錦](名) ㊀綾の織物と錦の織物。㊁[植]紅藻類の海藻、諸國の沿海に產す、紅色にして美麗なり。

あや・ぬの [綾布](名) 綾おりのぬの。

あや・はがさ [文羽笠](名) 檜の薄板を網代に編みつくりたる笠、やまぶしの被るもの。

あや・はぜり [漢織](名) 古昔、漢國より渡來したるはたおりの稱。

あや・はぶたへ [綾羽二重](名) 綾織にしたる羽二重。

あや・ひがき [文檜垣](名) 檜の薄片を以て編みたる垣。

あやぶ [危](名) 曆の中段の日柄、家作・種まき・婚禮・酒造等に吉、高きに登り舟に乘るには凶なり。

あやふ・し [危](形、二) ㊀危難近し。わざはひ及ばんとす。㊁むづかし。かたし。

あやぶ・む [危](他、ま四) あやふしと思ふ。かたしとす。うたがふ。

あやぶ・む [危](他、ま下二) あやふくす。

[あや・ふや] (名) 曖昧にして、事態を明白ならしめざるさまにいふ語。

あや・まき [綾卷](名) 砧(キヌタ)を打つとき布をまきつくる棒。

あやまち [過](名) あやまつこと。まちがひ。おちど。

あやま・つ [過](他、た四) ㊀まちがひをなす。仕損ず。そこなふ。㊁罪を犯す意なくして、罪を犯す。

あやまり・じやうもん [誤證文](名) わびあや[illegible]

あやま・る [誤](他、ら四) ㊀仕損じて筋道たたず。㊁人にあやまりをなさしむ。まどはす。「人の子を—」。㊂罪を謝す。わびをなす。㊃病みて心亂る。

あや・む (他、ま下二) あやしく思ふ。不審をたつ。いぶかる。

あや・むしろ [綾蓆](名) 織物にてつくりたるむしろ。

廿あや・め [文目](名) ㊀もやう。色彩。㊁差別。

廿あや・め [文女](名) 布を織る女。

あや・め [菖蒲](名) ㊀廿[植]あやめぐさ。㊁[植]はなあやめ。㊂かさねの色目、表は青にして裏は紅梅なるもの。㊃[動]へび。——の・うら [菖蒲占] 占法の一種、軒の菖蒲に蜘蛛の網をはらば事成就し、然らざれば成らずといふもの。——の・かづら [菖蒲鬘] あやめかづら。——の・せっく [菖蒲節句] 五月五日の端午の節句。——の・まくら [菖蒲枕] 端午の夜、菖蒲をその下に敷きて寢る枕。——の・ゆ [菖蒲湯] しやうぶゆ。

あやめ・がたな [菖蒲刀](名) あやめを束ねて刀の如くにつくりたる小兒の玩具、古昔、五月五日男兒の節句の祝ひに用ひしもの。

廿あやめ・かづら [菖蒲鬘](名) 古昔、端午の節句に參內するとき、冠にかけたる菖蒲。

あやめ・がひ [菖蒲貝](名) [動]蛤の類、色紫にして、これを三つ寄すれば、溪蓀(ハナアヤメ)の花に似たり。

あやめ・かぶと [菖蒲兜](名) あやめにてつくりたる兜、古昔、五月五日、男兒の節句の祝ひに用ひしもの。

あやめ・ぐさ [菖蒲草](名) [植]鳶尾(イチハツ)科に屬する多年生草本、葉は細長し、花蓋の內層の片は、花柱の花瓣様の部分より長くして廣く、花蓋の外層の片は、下部の內面に網狀の斑紋を有す、山野に自生す、又、觀賞用として栽培す。しやうぶ。

あやめ・ざけ [菖蒲酒](名) 菖蒲をこまかに切りてうかべたる酒、これを飲まば邪氣をさるといふ。

あやめ・たむ (名) [植]「われもかう」に同じ。

あやめ・だんご [蒲菖團子](名) ㊀竹を四亞(ヨツマタ)に渡し、枝毎に小さき團子を四つ宛つらねたるもの。㊁絲切り團子に餡をつけたるもの。

あやめ・どり [文目鳥](名) [動]「ほとゝぎす」の異名。

あやめ・ふき [蒲菖葺](名) 端午の前夜、菖蒲にて軒を葺くこと。

[あや・める] (他、ま下一) ㊀あやむ。㊁人を殺傷す。人を害す。

あや・ラシヤ [綾羅紗](名) 綾織の羅紗。

あや・ゐがさ [綾藺笠](名) 「ゐがさ」に同じ。

あゆ [鮎](名) [動]有胶魚類中さけ科に屬する魚、脂鰭は多少側扁なり、體色は背部蒼黑にして腹部は黃白、吻頭は稍や淡紅色を帶ぶ、體長大なるものは一尺に達す、我國にては、全國の河川概ね產せざるはなく、殊に西南地方のもの大なりとす、海中に棲息し、三四月頃より河川に溯(サカノボ)る、性敏捷にしてよく品列なる急湍に游泳す、肉甚だ美味なり。(年魚)。

廿あゆ (名) ひがしの風。

(あ・ゆ) [阿諛](名) おもねりまたがふこと。へつらひ。

廿あ・ゆ [肖](自、や下二) あやかる。

廿あ・ゆ (自、や下二) 血又は汗などしたゝりおつ。

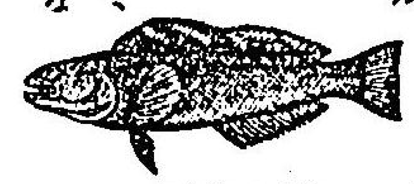
廿あ・ゆ [熟](自、や下二) 果實成熟す。

廿あゆが・す [搖](他、さ四) 物を動搖せしむ。うごかす。

廿あゆ・ぐ [搖](自、が四) ゆるぐ。うごく。

廿あゆ・ぐ [步](自、が四) あゆむ。

あゆ・なめ [鮎並](名) [動]硬鰭類中あゆなめ科に屬する魚、全身淡黑色にして濃黑色の斑紋あり、鱗多くは微黃色を帶ぶ、體長大なるものは七寸許に達す、我國にては、多少產せざる所なく、殊に西南海に多し、近海魚にして水の中層以下に游泳し、概ね一定の居處ありて遠く去ることなし、肉甚だ美味なり。(鮎身魚)。



[あゆなめ]

廿あ・ゆひ [足結](名) 古昔、足に纏ひたるもの、鈴などつけたり、今時のきやはんの類。——の・すず [足結小鈴] 足結に結びつけたる鈴、步行とともに鳴る。

あゆび [步](名) ㊀あゆぶこと。㊁和船の屋根の中央にありてこれを兩舷に分つ二個の縱の材。

あゆび・あひ [步合](名) あゆみあひ。

廿あ・ゆ・ふ [足結](自、は四) あゆひをはく。

あゆ・ぶ [步](自、ば四) ㊀あゆむこと。あゆむ。

あゆみ [步](名) ㊀あゆむこと。步行。㊁あゆむ調子。あしなみ。㊂數個のものをならべたる各個の間の距離。㊃[理]螺旋の縱斷面にあらはれたる突起と突起との距離。

あゆみ・あひ [步合](名) 雙方讓りあひて、折り合ひをつくること。

あゆみ・いた [步板](名) 物の上にわたして其の上を渡る板。「陸奥の小川の橋の—」。

廿あゆみ・つ・る [步連](自、ら下二) 共々にあゆむ。つれだちてあゆむ。

あゆ・む [步](自、ま四) 足を運びてすゝみゆく。あるく。

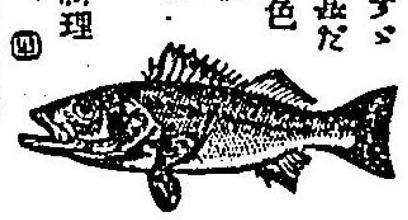
あゆ・もどき [鮎擬](名) [動]あゆの一種、口邊に鬚あり、形も味もあゆに似たり、山城桂川に產す。

あゆ・やき [鮎燒](名) 鮎の形に似せて燒きたる菓子。

廿あよ・ぐ [搖](自、が四) あゆぐ。

廿あよ・ぶ [步](自、ば四) あゆむ。

あら [阿羅](名) [動]硬鰭類中すゞき科に屬する魚、體形は側扁、鱗甚だ小くして頭部をも蓋ふ、體色は褐色にして腹部のみ銀白色をなす、體長大なるものは三尺許に達す、深海の岩礁間に常棲す。(鯍魚)。



[あら]

あら (名) ㊀ほね。㊁魚などを料理したるあとの骨。㊂米穀の上皮。㊃棄つべき殘餘。㊄きず。あやまち。缺點。

あら [新](名) 新しきもの。

あら [荒](名) ㊀粗暴。㊁馴れざること。㊂天然のまゝにして、未だ人工の加はらざること。(粗)。

あら (感) あな。あゝ。

あら— [新](接頭) 或語に冠してあたらしき意を表はす。

あら— [荒](接頭) ㊀或語に冠して粗暴又は馴れざる意を表はす。㊁未だ人工を經ざる意を表はす。(粗)。

あら— [疎](接頭) 或語に冠して密ならざる意を

あら-あら［粗粗］（副） おほよそ。大略。ざつと。ほぼ。
あら-あら（感） 歎歎・悲痛の意を表はす發聲。あな。「あら。」
あら-あら-し しく・しき・し・しけれ ［粗粗］（形、二） 甚だ粗末なり。いとあらし。
あら-あら-し しく・しき・し・しけれ ［荒荒］（形、二） 甚だ粗暴なり。たけし。「りそ。」
あら-いそ［荒磯］（名） 荒浪の打ちよする磯邊。あ
あらいそ-ぎれ［荒磯切］（名） 濃き縹（ハナダ）色に金絲にて浪に鯉の模樣を織り出せる織物。「波浪。」
あらいそ-なみ［荒磯波］（名） 荒磯に打ちよする
あら-いた［粗板］（名） 切りさきたるまゝにて、未だ鉋にて削らざる板。
廿あら-いね［荒稻］（名） もみのまゝの稻。
あら-いみ［荒忌］（名） 神事にあづかる人の、前かたより齋戒すると。眞忌（マイ）の對。（散齋）。
あら-り［荒鵜］（名） 人に馴れぬ鵜。
あら-うま［荒馬］（名） 人に馴れぬ馬。
あら-うみ［荒海］（名） 波浪のたちあるゝ海原。
廿あら-えぞ［荒蝦夷］（名） 王化に服せざる蝦夷。
あら-えびす［荒夷］（名） 王化に服せざる蠻族。
廿あら-か［殿］（名） （在り所の轉）宮殿。「みーをたかしりまして」。
アラカ［阿羅訶］（名） 【佛】「アラカン」に同じ。
あら-がき［疎垣］（名） あらくつくりたる垣。
廿あらがき-の（枕） 「よそ」に冠す。
あら-かし［粗樫］（名） 【植】くろかし。
あらかじめ［豫］（副） 前より。かねてより。かねがね。かねて。まへもって。
あら-かせぎ［荒稼］（名） ㊀あら仕事。ちから仕事。㊁強盜・山賊などの業。

あら-かた［粗方］（名、副） おほかた。大抵。大概。
あら-がね［粗金］（名） ㊀山より掘り出だしたるまゝの金屬。（鑛、鉱）。㊁鐵。
あらがね-どうふ［粗金豆腐］（名） 一種の料理。豆腐を酒と醤油とにていりつけ、これにさんせうの莢又は實のすりたるをまぜあはせたるもの。
廿あらがね-の（枕） 「つち」に冠す。
あら-かは ーカハ ［粗皮］（名） ㊀獸類などの上皮。毛皮。㊁米穀の類の外皮。もみがら。
あら-がひ ーガイ （名） けんくわ。いひあひ。爭論。
あらが-ふ ーガウ ［爭］（自、は四） あらそふ。抵抗す。
あら-かべ［粗壁］（名） また中塗りをなさぬ壁。あら土をぬりたるまゝの壁。
あら-がみ［荒神］（名） ㊀あきつかみ。㊁あら「〳〵しき神靈。
アラカン［阿羅漢］（名） （梵語 Arhat）【佛】應供と譯す。見思の惑ひを斷じて三界の生を受けず、智斷の功德已に具足して、人天の供養を受くる聖者の位地。「てあく處、殯宮」。
廿あら-き［荒城］（名） 貴人の屍體を假りに埋葬しおく處。
あら-き［粗木］（名） 伐採せるまゝの材木。
廿アラキ［阿刺吉］（名） （「オランダ」語 Arrak）古昔、和蘭より舶來したるアルコール性の飲料、波斯・暹（ヤシ）の密を醱酵して製し、主とし印度地方の諸國にて常用す。（荒氣）。
あら-ぎ［荒儀］（名） あら〳〵しきふるまひ。
廿あらき-だ［新田］（名） 新しく開墾したる田。
あらきだ-づち［荒木田土］（名） 武藏國豐島郡荒川沿岸の荒木田原より出づる土、壁下又は屋根の瓦下に用ふ。
廿あらき-はり［簀］（名） 新に田を開墾すると。
あら-ぎやう ーギヤウ ［荒行］（名） 修行者などの甚だ苦しき修業をなすと。

あら-く けこ・くく・くる・くれ・けよ ［疎］（自、か下二） 間あく。あらくなる。はなる。ちり〳〵となる。（散）。「ぐ。」
廿あら-くさ［荒草］（名） 荒れ立つ、さわ
あら-くさ［荒草］（名） 荒野に生ふる雜草。
あら-ぐし［粗櫛］（名） 齒のあらき櫛。
あら-ぐま［荒熊］（名） たけきくま。
廿あらくま-し しく・しき・し・しけれ ［荒］（形、二） あら〳〵し。あらし。「くなる。あれだつ。」
あらく-る れ・れ・る・るる・るれ・れよ ［荒］（自、ら下二） あら〳〵しくなる。間あく。（散）。「あらくる日」。
あらく-る れ・れ・る・るる・るれ・れよ ［粗］（自、ら下二） 粗末になる。
あら-くれ［荒］（名） あらくるゝと。「亂暴なり。」
あらくれ-な-し しく・しき・し・けれ ［荒］（形、一） あらあらし、
あらくれ-もの［荒者］（名） 亂暴する人。
あら-けづり［粗削］（名） ㊀粗末に板を削る事。㊁粗末に削りたる板。
あらけ-な-し くしき・けれ ［荒］（形、一） あらくれなし。
廿あら-と［疎籠］（名） 編み目のあらき籠。
あら-と［疎粉］（名） 糯（モチゴメ）のあらき粉、餅菓子の上にふりかくるもの。
あら-ごし［粗漉］（名） 水嚢の目のあらきもの。
あら-ごと［荒事］（名） 芝居にて、役者が勇者に扮して行ふ仕業（シワザ）。「る役者。」
あらごと-し［荒事師］（名） あらごとをむねとす
あら-ごなし（名） ㊀物を粗末に粉にくだくと。㊁粗末に消化すると。㊂物を粗末に造りあぐると。㊃彫刻にて大體の形を彫りあぐると。
あら-ごも［粗菰］（名） あらく編みたる菰。
あらこ-らくがん［疎粉落雁］（名） 菓子の一種、疎粉と砂糖とを混じて型にいれてつくりたる落雁。

あらし［嵐］（名） 風雨のあれたつもの。暴風雨。
あら-し く・し・き・けれ ［粗］（形、一） ㊀くはしからず。めんみつならず。㊁きめこまかならず。なめらかならず。㊂そまつなり。ざつなり。㊃まばらなり。（疎）。
あら-し く・し・き・けれ ［荒］（形、二） 亂暴なり。はげし。
あらし-ぐさ［嵐草］（名） 【植】虎耳草（ユキノシタ）科の高山植物、莖は腎臟形にして莖狀は掌狀をなし、五裂又は七裂す、夏月莖間より花軸をぬき、白色の複總花を開く、御嶽・駒ケ嶽・白山・乘鞍嶽等に產す。
あら-しと［粗扱］（名） あら削りをなす鉋（カンナ）。（荒仕子、粗仕鉋）。
あらし-と［荒子］（名） ㊀農家などに奉公する卑賤のもの、農事の勞働者。㊁雜兵。せこ。（嵐子）。
あら-しごと［荒仕事］（名） ㊀はねをりわざ。ちから仕事。㊁亂暴なる動作。㊂強盜のあわざ。人を殺傷し又は毆打するなどのあわざ。
あら-しほ オーシ ［粗鹽］（名） 粗く結晶したる鹽。
あらしほ-やき オーシ ［粗鹽燒］（名） 魚類に鹽を撒布して炙る料理法。
あら-しやうらう ーシヨウリヨウ ［新精靈］（名） 【佛】その年の盂蘭盆に始めて祭る精靈。あらぼとけ。
あら-しよたい［新世帶］（名） 新に構へたる世帶。
廿あらし-を［荒男］（名） ますらを。たけを。
あら-す さ・し・す・せ・せ ［荒］（他、さ四） ㊀破壞す。そこなふ。㊁害す。さわがす。
あら-すき［粗犂］（名） 米俵を解きて一寸ばかり「に切りたる苆。
あら-すぢ［粗筋］（名） はなしの大體の筋。梗概。
あら-ずみ［荒炭］（名） かた炭。
廿あら-すゐぎやう ーギヤウ ［荒水行］（名） 修業者の寒中水をあびてする苦行。
あらせいとう［紫羅欄花］（名） 【植】十字科の

一年草、莖の高さ二三尺にして下部は灌木狀を呈し、葉は楕圓狀披針形にして全緣をなし、五六月頃花開く、大にして紫色、頗る美なり、庭園に栽培す。
あら-そ［粗苧］（名） 粗製の麻苧。
あらそひ イ-ッ ［爭］（名） あらそふと。いさかひ。こうろん。抵抗。衝突。
あらそ-ふ ウ-ツ ［爭］（自、は四） ㊀衝突す。抵抗す。さからふ。はりあふ。㊁前後をきそふ。㊂優劣をくらぶ。「染」。
廿あら-ぞめ［粗染］（名） 薄紅に染めたる布。（桃花
あら-た［新］（名） 新しきと。
あら-た［荒田］（名） 耕作をなさぬ田。
あらた（名） あらたか。
あらたか（名） 神佛などの靈驗のいちじるしきさまにいふ語。（灼然）。
あら-たか［荒鷹］（名） 人に馴れざる鷹。
あらた-し しく・しき・し・しけれ ［新］（形、二） 新にてあり。
あら-だ-つ てつ・つる・つれ・てよ ［荒立］（自、た四） あらくなる。
あら-だ-つ て・て・つ・つる・つれ・てよ ［荒立］（他、た下二） 激勵せしむ。あらくならしむ。「（粗栲）。
廿あら-たへ エ-ク ［荒妙］（名） 織り目のあらき麻布。
廿あらたへ-の（枕） 「ころも」「ぬの」に冠す。
廿あら-たま［荒魂］（名） 勇武・雄健などの德をつかさどる靈魂。
あら-たま［粗玉］（名） ㊀掘り出だしたまゝの玉。（璞）。㊁年。㊂年の始め。（新玉）。
廿あらたま-の（枕） 「年」「月」「日」「夜」「春」に冠す。
あらたま-る らり・る・る・れ・れ ［改］（自、ら四） ㊀新規になる。あたらしくなる。㊁更はる。變ず。㊂殊更に行儀をよくす。

あらた-む め・め・む・むる・むれ・めよ ［改］（他、ま下二） ㊀あらたにす。新規にす。變更す。かふ。㊁檢閱す。ぎんみす。あらぶ。
あらため［改］（名） ㊀あらたむると。㊁ぎんみ。
廿あらた-よ［新世］（名） 改まりてよくなりたる世。「文貞へるおやしき鍛も一といづみの川に」。
あらち-を［荒男］（名） あらくれ男。あらしを。
あら-づくり［粗造］（名） ㊀あたごしらへ。㊁あらあらしくつくれるもの。「の見當。
あら-づもり［粗積］（名） あらかたのつもり。大抵
あら-て［新手］（名） ㊀戰場にて、まだ戰はぬ若者なる兵士。㊁同一の仲間にて、まだ其の仕事にたづさはらず控へ居るもの。
あら-て［荒手］（名） 仕事の荒々しきと。
あら-と［粗砥］（名） 一種の砥石、粗粒狀の砂岩にて作りたるものにして、質粗く刃物を磨ぐに最初に用ふるもの。
あら-どう［荒銅］（名） 【鑛】未だ精製せざる銅にして、多量の雜物を混ず。
あら-どこ［新床］（名） 新しき蓐の床。
あら-どこ［荒床］（名） 死人を假りにおく所。
あら-なは ーナ ［荒繩］（名） おもに藁にて綯（ナ）ひたるふとき繩。
あら-なみ［荒波］（名） 荒れ立つ波。激浪。
あら-に（名） 魚類のあらをこまかく切り、砂糖と醤油とにて煮たる料理。
廿あら-ぬ［荒野］（名） あらの。
あら-ぬか［粗糠］（名） もみぬか。
あら-ぬり［粗塗］（名） 壁などを初めにあらくぬると。あたぬり。「あらのら。（曠野）。
あら-の［荒野］（名） 荒れはてたる野邊。あれの。

あらの-ら［荒野］（名）あらの。
廿あらは［陽］（名）おもてむき。うはべ。
廿あらはか・す［さしすせ］［現］（他、さ四）あらはす。
あらは・す［さしすせ］［現］（他、さ四）㊀秘密をあきらかにす。隠れたるものを出だす。㊁いちぢるしからしむ。きはだゝしむ。（顕）。㊂書物を述作して世に出す。ちよじゆつす。（著）。
あら-はだ［新膚］（名）まだ男に觸れざる女。
あら-ばた［荒畑］（名）あれたる畑。
あら-ばたらき［荒働］（名）あらしごと。
あらは-に［陽］（副）㊀かくさずに。あらはして。あきらかに。㊁おもてむきに。人前ばかりに。
廿あらは-に-ど［陽露耶］（名）現世の事。
廿あらはひ［洗］（名）物を洗ふと。せんだく。「―などする人なかりければ（大和）。
あらは・る［れれるるれよ］［現］（自、ら下二）㊀表へ出づ。あきらかになる。おもてむきになる。（顕）。㊁いちぢるしくなる。きはだつ。（著）。㊂發覺す。あらはれる。（露）。
あらひ［洗］（名）㊀洗ふと。㊁一種の料理、魚の生身をきざみ、冷水にてあらひ、肉にちりめんじわを寄せたるもの。
アラビア-うま［亞剌比亞馬］（名）【動】「アラビア」種の馬、馬匹中最も優秀なる體格を具へたるもの、頭小く額廣く、丈四尺八寸乃至五尺三寸あり、生長稍々遲緩なれど長壽を保つ。
アラビア-ゴム［亞剌比亞護謨＝Gum Arabic］（名）ゴムの一種、おもに「アラビア」に產する「アカシヤ」屬の植物より採收したる白色乃至赤褐色の固體にして、冷水・溫水に容易に溶解し粘狀となる、種々の用に供せらる。

アラビア-すうじ［亞剌比亞數字＝Arabic figures］（名）1・2・3・4・5・6・7・8・9・0 の數字、「アラビア」に初まりし故に此の名あり。
廿あらひ-いと［洗絲］（名）粗染にしたる絲。
廿あらひいと-をどし［洗絲縅］（名）粗染に染めたる絲にて縅したる鎧。
廿あらひ-かた［洗方］（名）罪のうたがひを辯解すると。
廿あらひ-がは［洗革］（名）白くして柔かなる韋（ナメシガハ）。
廿あらひかは-をどし［洗革縅］（名）洗革にて縅したる縅。
あらひ-がみ［洗髮］（名）洗ひたるまゝにて結はざる頭髮。
あらひ-ぐつわ［洗轡］（名）馬の體を洗ふときにはむる轡。
あらひ-こ［洗粉］（名）白あづきを粉末とし、皮膚を洗ふに用ふるもの。
あらひ-ごひ［洗鯉］（名）鯉の料理の一種、あらひにしたるもの。
廿あらひ-ざら［洗皿］（名）ものをあらふ淺き皿。
あらひ-ざらし［洗晒］（名）衣服などをたび〳〵洗ひて、染色あせて白くなりたると。
あらひ-ざらひ［洗浚］（副）何から何まで。こと〴〵く。悉皆。
あら-ひおり［荒墾］（名）あら〳〵しき亂暴なる儕。
廿あら-ひしほ［粗醬］粗製のひしほ。
あらひ-すゝぎ［洗洒］（名）せんだく。
あらひ-ぜき［洗堰］（名）上流の水位を高むるために、川の全幅に横へてつくりたる堰堤、その上には常に水の溢流するもの。
あらひ-だて［洗立］（名）舊悪を飽くまで深く穿鑿すると。
廿あらひと-がみ［現人神］（名）現世に於て人の形を成して居る神、天皇を稱し奉る。

あらひ-のり［洗海苔］（名）甘海苔の一種、出雲國より產す。
あらひ-はり［洗張］（名）舊き布を洗濯して、板にはりつけ皺を延ばすと。
あらひ-みそしる［洗味噌汁］（名）味噌を篩にかけて煮たる汁。
あらひ-や［洗矢］（名）毛を束ねて、筒の内部を洗ふに用ふるもの。
あらひ-よね［洗米］（名）神などに捧ぐるため、研く洗ひたる白米。せんまい。かしよね。
アラビン［Arabine］（名）【化】無色硝子様の化合物、「アラビアゴム」の主成分にして、甜菜などにも含有せり。
あら・ふ［はひふふへ］［洗］（他、は四）㊀物を水にすゝぎきよむ。㊁吟味す。あらぶ。㊂恥辱をすゝぐ。
あら・ぶ［ばびぶぶれびよ］［荒］（自、ば上二）㊀亂暴す。あばる。㊁騒動す。あれだつ。㊂をさまらず。ひらけず。㊃廿疎遠となる。うとくなる。
あら-ぶき［荒吹］（名）【鑛】銅鑛を製錬する第一歩の方法にして、主として銅鈹を製するを目的とす。
あら-ぼとけ［新佛］（名）【佛】あら志や ろうろう。
あら-ぼね［骼］（名）枯れたる骨。
あら-ぼねをり［荒骨折］（名）荒仕事。あらかせぎ。
あら-ぼり［粗彫］（名）彫刻にてあらごなしの上を、小刀又は鑿にて、粗末に彫りあぐると。
あら-まき［稿］（名）たがやさずして、種を蒔くと。
廿あら-まき［荒卷］（名）藁又は竹の皮などにて、魚を包みて贈物となすもの。つと。
あら-まさめ［疎柾目］（名）疎き木理。
廿あら-まし［豫］（名）心あて。心だのみ。豫算。
廿あらま・し［しくしきしけれ］［荒］（形、二）あらし。

あら-まし（副）あらかた。およそ。（荒增）。
廿あらまし-ごと［豫事］（名）心だのみ。こゝろあて。
廿あらま・す［さしすせ］［豫］（他、さ四）心あてにす。豫期す。
あら-み［新身］（名）新規にきたひたる刀。
廿あら-みかげ［荒御蔭］（名）あらみさき。
廿あら-みさき［荒御前］（名）人の仲を裂く神。
あら-みたま［荒御魂］（名）「あらたま」に同じ。
あら-むしや［荒武者］（名）㊀あらき武士。㊁荒荒しきわざ。
あら-むしろ［粗筵］（名）あらき筵。
あら-め［荒布］（名）【植】褐色藻門に屬する海藻、莖の長さ一尺乃至三尺、さきに扁平なる主葉を出だし、更にこれより幾多の副葉を生じ、葉面滑かにして縦に皺あり、色は黑褐色にして長さ四五尺に達す、溫暖なる地方にて稍々深き海に產す、食用・肥料に供せらる。（海帶、滑海藻）。――のふくめ 一種の料理、荒布をゆでゝ水分をさり、鰹節を入れて砂糖と醬油とにて煮たるもの。
あらめ-あみ［疎目網］（名）目のあらき網。
あらめ-をどし［荒目縅］（名）目をあらく三色におどしたる鎧。
あらめ-めし［荒布飯］（名）荒布を切り込み、味をつけて炊きたる飯。
あらめ-こんぶ［荒布昆布］（名）【植】北海道に產する一種の昆布、全體のちゞみたるもの。
廿あら-もと［糲］（名）搗くときに碎けたる米。
あら-もの［新物］（名）新規のもの。
あら-もの［荒物］（名）稍大きなる家具、即ち、帚・塵取などの類、小間物の對。
あら-もの［荒者］（名）亂暴もの。
あら-やすり［粗鑢］（名）めのあらきやすり。

あら-やまみち［荒山路］（名）荒れたる嶮阻なる山路。
あら-ゆる［所有］（副）あるたけ。のこりなく。
あら-らか（名）あらきさまにいふ語。
廿あららぎ［蘭］（名）【植】（い）ぎやうぢやにんにく。（茖葱）。（ろ）いちゐ。
廿あららぎ（名）塔（齋宮の忌み詞）。
あられ［霰］（名）㊀雲の水分子急激に氷結して、地上に降下するもの、不規則なる結晶をなす、雹よりは小片なり。㊁あられもち。
あられ-いし［霰石］（名）【鑛】方解石と同成分にして透明若しくは不透明なる鑛物、硬度は四、斜方晶形をなし、色は一定せず。
あら-れうぢ［荒療治］（名）㊀外科醫者のてあらき療治。㊁人を殺傷すると。
あられ-がひ［霰貝］（名）【動】螺の類、あられの如きぼつ〳〵が、介殼の外面に列れるより此名あり。
あられ-がま［霰釜］（名）茶の湯に使ふ一種の釜、あられの形を外面に出だしたるもの。
あられ-がゆ［霰粥］（名）鯛などの魚肉をすり込みたる粥、すまし汁をかけて食す。
あられ-カン［霰羹］（名）薯蕷を霰形に切りて入れたる羊羹。
あられ-こもん［霰小紋］（名）小紋の名、あられの如きつぶを細かく表はしたるもの。
あられ-ざけ［霰酒］（名）麴の粒の溶（ト）けずして、あられの如くなりたるにごり酒。
あられ-せうが［霰生姜］（名）生姜を一分角位に切りて酢につけたるもの、膾などの上にかけて食す。
あられ-そば［霰蕎麥］（名）かけそばの一種、ばか貝のはしらを其の上にふり掛けたるもの。

あられ-ぢ［霰地］（名）織物の名、あられのやうなる細かき小紋をもりだしたるもの。
あられ-どうふ［霰豆腐］（名）豆腐を一寸程の角に切りたるもの。
廿あられ-ばしり［霰走］（名）古昔、正月十六日に行ひし踏歌（タフカ）。
あられ-もち［霰餅］（名）さいのめに刻みたる細かきかき餅。
あられ-も-な・し［くしきけれ］（形、一）普通にありうべくもあらず。ありさうも無し。
廿あら-をだ［荒小田］（名）荒れたる田。
アラナ［阿蘭那］（名）【佛】次條に同じ。
アランニヤ［阿蘭若］（名）（梵語 Aranya）【佛】テラ。
あり［蟻］（名）【動】膜翅類に屬する昆蟲、觸角は絲狀若しくは根棒狀をなす、群棲して一社會を成し、地中或は朽木に巢を營む、雌雄二蟻の外に職蟻と稱する中性のものあり、又、其の一社會中、雌は通常一匹にして女王と稱す、冬日、巢中に眠食して越年するものは、雌と職蟻とのみなり。――のタフ［蟻塔］蟻の巢を地中につくるに、職蟻の地中を穿ち、其の土を地上に堆積したるものにして、高さ二尺に及ぶものあり。ありづか。――のとわたり［蟻門渡］㊀一列になりて行く蟻の行列。㊁陰部と肛門との間。會陰（エイン）。
あり（名）扁平なる板を反らせぬために、溝を掘りて細き木を嵌むると。（蟻、歩）。
あり［有］（名）物事の有ると。實在、存在。廿――のすさび ある時の調子。その時々の都合。廿――のまがひ［有紛］まぎれやすきほどに物の多きと。――のまゝ［有隨］あるそのまゝのありさま。あからさま。ありてい。

あり [有](自、ら變) ㊀現に存す。(在)。㊁とゞまる。すむ。㊂いきながらふ。
あり-あけ [有明](名) ㊀空に月の殘りながら夜の明くること。
ありあけ-アンドン [有明行燈](名) 夜あけまで點(モ)しおく行燈。
あり-あは・す [有合](自、さ下二) 其場に現存す。ありあふ。
あり-あはせ [有合](名) ありあふこと。ありあふもの。
あり-あひ [有合](名) ありあはせ。
あり-あ・ふ [有合](自、は四) 丁度其の場にある。そこにありあはす。
あり-あま・る [有餘](自、ら四) 入用よりも多くあり。
あり-あり [在在](副) まざまざと。鮮明に。分明に。
あり-いた [蟻板] 破風(ハフ)の拜(ヲガ)を堅固にする爲に裏に打つけたる板。
(あ-りりう) [亞流](名) 第二位に立つ人。
(あ-りりうさん) [亞硫酸](名) [化]二酸化硫黄を水に溶解するときに生ずる不安定の化合物、漂白又は殺菌の用に供せらる。
ありりうさん-ガス [亞硫酸瓦斯](名) [化]にさんくわゆわう。
ありりうさん-ナトリウム [亞硫酸—](名) [化]巨大なる結晶體にして容易に溶解又は風化す、寫眞の顯像藥に用ふ。
あり-うち (名) 世の中に往々あるべきこと。
あり-か [在處](名) 物の在る處。
†あり-か (名) わきが。わきくそ。
あり-かず [有數](名) ㊀世に經る年のかず。㊁其場にある物のかず。
あり-がた・し [難有](形、二) ㊀世に在ること稀なり。㊁ならび少なし。㊂感謝すべし。かたじけなし。
あり-がたち [有形](名) ありさま。
ありがた-なみだ [難有涙](名) たふとく又は嬉しく思ひて出づる涙。
ありがた-めいわく [難有迷惑](名) かたじけなきやうにて、却て自己の爲めに不利益なること。
ありがた-や [難有屋](名) 神佛を盲信する人。
あり-がね [有金](名) 手許にあるだけの金錢。ありたけのかね。
†あり-がほ・し [有欲](形、二) 活きながらへたし。
†あり-かよ・ふ [有通](自、は四) 常に通ふ。「ありかよひや年のはに見つゝ忍ばむ」。
†あり-き [歩](名) あゆむこと。「遺き—する人のつぎ〳〵絶たづねて」。
ありき-ぞめ [歩初](名) 小兒のあるきはじむること。
あり-きたり [在來](名) もとよりあること、元のまゝなること。
†あり-きぬ [鮮絹](名) 鮮かに美しき絹。
あり-きり [有切](名、副) ありたけ。
†あり-く [歩](自、か四) あゆむ。
あり-くひ [食蟻獸](名) [動]おほありくひ。
†あり-ぐる・し [在苦](形、二) 此の世に生れきて活きてある事が苦し。
†あり-さき (名) 袍の名どころ、襴が兩側より左右に出て垂れたるところ。
あり-ざし [蟻刺](名) 板のそりを防ぐ爲に刺し込みたるはめ木。
あり-さま [有樣](名) やうす。もやう。ようだい。
アリザリン [Alizarin](名) [化]一種の染料、茜根より製したる赤色の結晶體にして、水に溶解せず水酸化「アルカリ」に溶解し、金屬酸化物と化合して不溶解性物質を作る。
あり-しな [在品](名) 現在店にある商品。
あり-しよくぶつ [蟻植物](名) [植]蟻と共生の關係を保ち、互に相利益をなす植物、即ち、さくら・そらまめ・あをぎり等の如く、蜜を分泌して蟻を誘引し、餌食を與へ、それにより他の害蟲の侵來を防禦せしめて護衛の用となすもの。
†あり-す [在巣](名) 巣。「來すむ—の鷹は」。
ありすがは-ぎれ [有栖川切](名) 藍色地に菱形と獸とを金絲にて織出せる名物切。
あり-すひ [蟻吸](名) [動]攀木類に屬する禽鳥、嘴は直くして堅く、四肢中の二趾は前に向ひ二趾は後に向ふ、形は啄木鳥(キツツキ)より小さく、體は茶色なり、森林に棲息し、舌長くして蟻などの小蟲を啗(ス)ひ食ふ。
あり-すん [有寸](名) 木材の實際の寸法。
†あり-そ [荒磯](名) あらいそ。
†ありそ-うみ [荒磯海](名) あらいそのほとりのうみ。
†ありそ-なみ [荒磯浪] あらいそにうちよするなみ。
ありそ-まつ [荒磯松](名) あらいそに生じたる松。
あり-だか [有高](名) 現在あるだけの高。
あり-たけ [有丈](名、副) 其の場にある限りの數。
あり-だけ [蟻茸](名) [植]高等菌類の一種、「ブラジル」產にして一種の蟻がその食用として培養するもの。
あり-たさう [土荊芥](名) [植]藜科の一年草、莖は高さ二三尺、葉は披針狀にして互生し、葉柄は短し、枝上に穗狀花を開く、「メキシコ」の原產にして寶永年間舶來し、庭園に栽培す、葉は乾かして茶を

製す。
†あり-た・つ [在立](自、た四) 常に立つ。「さよばひにありたゝし」。
†あり-たもとほ・る [在廻](自、ら四) 此の世にありて經めぐる。「まさきくもありたもとほり月たゝば」。
あり-たやき [有田燒](名) 磁器の一種、肥前の國有田にて朝鮮人金江參平の窯法に從ひて製するもの、多く小花瓶・盌・茶碗等を製す。
あり-ぢごく [蟻地獄](名) [動]うすばかげろふの幼蟲、砂地に擂鉢形の穴をつくり、蟻の來るをまちてこれを取り食ふ。あとびさり。
あり-づか [蟻塚](名) ありの「タフ」。
†あり-つかは・し [似付](形、二) 似つかはし。
あり-つき [有付](名) たよりにすること。たよりつくところ。
あり-つ・く [有付](自、か四) ㊀につかはしくあり。にあふ。㊁住みつく。えんづく。㊂より所を得。
あり-つ・くる [有付](他、か下二) ㊀住み付かす。えんづかす。㊁より所を得しむ。
あり-てい [有體](名) ありのまゝ。うそいつはりの無きこと。
あり-どほし [蟻通](名) [植]茜草科に屬する小灌木、山中の陰地に自生す、莖は直けれど高さ二三尺に達するは稀なり、莖は長さ四五分にして、卵形又は長楕圓形にして鋭く尖り、葉本ごとに長き刺あり、花は小くして白く、實は紅にして美なり。(虎刺)。
あり-なし [有無](名) ㊀あるとなきと。存すると存せざると。㊁あるかなきか、極めて微にして目に立たぬさまにいふ語。†—のひ [有無日](名) 中古、五月二十日の稱、即ち、村上天皇崩御の日にて、急要事件の外は、政治の執行なきよりいふ。
†あり-な・む [有否](他、ま四) いなむ。「ひこづらひありなみすれど」。
あり-ならひ [有習](名) ありならふこと。習慣。
あり-なら・ふ [有習](自、は四) ありなる。
†あり-な・る [有馴](自、ら下二) 習慣となる。慣る。「ありなれし契もたえて今更に」。
あり-に [在荷](名) 現在店にありて未だ賣約せざる貨物。
ありのタフ-ぐさ [蟻塔草](名) [植]蟻塔科に屬する小草、山野に生ず、莖細くして地上に延び、每節鬚根を出だす、葉は長さ二分許にして對生し、卵形尖頭にして鋸齒を有す、花は大さ二分許、莖頭に族り着き、淡黄にして褐色を帶ぶ。
†あり-の-ひふき (名) 桔梗の異名。
あり-の-み (名) 梨の實の異名。
†あり-は・つ [有果](自、た下二) 命終る。「げにありはてぬ世いくばくもあるまじけれど」。
†あり-ふ [有經](自、は下二) 世に在りて、年月を過ごす。「ありふるにつけていとはしたなくたへがたき事おほかる世なれど」。
〔ありふ・れる〕 [有經](自、ら下一) 至るところに存す。常にあり。
アリヘイ (名) 「アルヘイ」に同じ。
あり-まい [有米](名) [經]現に市場にある米。
あり-まき [蟻卷](名) [動]有吻類中蚜蟲科に屬する蟲、草木の新芽又は綠葉等に寄棲し、其の寄棲する所によりて、種類・形態及體色等を異にすれど、何れも小形にして僅かに五厘内外なり、脚は細くして長けれど、微弱にして疾行する能はず、彼に羽化すれど、また微弱にして巧に飛翔する能はず、此蟲の分泌する液は味甘きが故に、蟻多くこれを舐む。あぶらむし。(蚜蟲)。
†あり-まさ [在方](名) 占者。
ありま-さう [有馬草](名) [植]蘭科に屬する小草、葉は笹の如く、花は黄又は白色にして光澤あり。
ありまつ-しぼり [有松絞](名) 尾張國有松より出づる絞纈(シボリ)染め。なるみしぼり。
ありま-ふで [有馬筆](名) 一種の筆、筆毫を筆管より出入するやうに作る、攝津國有馬より出す。
あり-もどき (名) [動]蟻に似たる甲蟲、體赤く、頭と翅鞘とは黒く後翅に白條あり、松柏科植物の害蟲を捕食す。
†あり-もど・く [有戾](他、か四) 世にありて人に逆(サカ)らふ。「ありもどくまじう思ひたる世の中に」。
ありもの-がほ [有物顔](名) 物を多くもてるらしき顔つき。
〔ありや〕 (感) あれ。あれは。
あり-やう [有樣](名) ㊀ありさま。樣子。㊁まこと。ありてい。㊂あり得る理由。あるべきはず。
〔ありや-こりや〕 (名) あれなるべきものとこれなるべきものとを顚倒すること。あべこべ。はんたい。
〔ありやこりや-に〕 (副) かれとこれとに。あべこべに。
アリル [Aallyl](名) [化]炭水化合物、韮・芥子中に存在し多く劇臭を有す。
アリル・アルコール [Allyl alcohol](名) [化]「グリセリン」に沃化燐を作用せしめて沃度「アリル」を製し、之に水酸化銀を作用せしむるときに生ずる

無色にして刺戟性の臭氣を有する液體。

廿ありわた・る[在渡](自、ら四) 存在して、年月を經つゝあり。生きながらふ。「かくかたはにしつゝありわたるに」。

ありわづら・ふ[在煩](自、は四) ㊀此の世にながらへ難し。㊁此の世を厭ふ。「いでや世にありわづらひ官位人よりは短し」。

廿ありわ・ぶ[在詫](自、は上二) 居兼ぬ。「京にありわびて」。

廿あ・る[生](自、ら下二) うまる。

あ・る[荒](自、ら下二) ㊀あらくなり猛烈しくなる。(暴)。㊁荒廢す。破れすたる。㊂手足の皮膚の脂肪乏しくなる。

ある―[或](接頭) 他語に冠し確定せざるものゝ意を表はす語。

ある・かぎり[有限](名、副) ありたけ。

アルカリ[亞爾加里=Alkali](名)【化】金屬又はアンモニウムの水酸化物、「アルカリ」性反應を呈し、酸と作用して鹽類をつくり、水に溶解し易し、水酸化「ナトリウム」水酸化「カリウム」等これなり。

アルカリ・きんぞく[亞爾加里金屬](名)【化】著しく「アルカリ」性を有する軟き白色の金屬、「ナトリウム」「カリウム」「ソヂウム」「セシウム」「ルビヂウム」等これなり、其の水酸化物は最も強きアルカリ性を有し、安定なる鹽類を作る。

アルカリせい・はんおう[亞爾加里性反應](名)【化】赤色「リトマス」溶液又はこれに類似せる植物色素を靑色に變ずる作用。

アルカリ・どきんぞく[亞爾加里土金屬](名)【化】「カリウム」又は「アルミニウム」に類似する金屬、多くは土砂中に存在す、「カルシウム」「ストロンチウム」「バリウム」これなり。

アルカロイド[Alkaloid](名)【化】植物中に存在する窒素化合物にして、酸基の作用をなすもの、其の種類甚だ多し、多くは烈しき毒物にして、又、有用なる藥劑なり。

あるき[歩](名) ㊀あゆみ。ありき。㊁用事をきゝて使にあるくもの。

あるきぞめ[歩初](名) ありきぞめ。

アルキル[Alkyl](名)【化】炭素の一分子と水素の二分子とよりなる基。「メチル」「エチル」等これなり。

アルキル・き[―基](名)【化】前條に同じ。

ある・く[歩](自、か四) あゆむ。

アルコール[亞爾箇保兒=Alcohol](名)【化】酒類の主成分にして、炭化水素の一群が水酸基によりて置きかへられたるもの、無色の液體にして、一種の芳香と苛味とを有す、點火し易く、靑色の焔を擧げて燃ゆ、種々の有機物を溶解するを以て、溶劑として化學上・醫療上・工業上等に廣く用ひらる、これを製するには、馬鈴薯又は穀類に、發芽したる大麥を加へて糖類に變じ、酵母を加へ溫所に放置し、氣體の發生するに至り、其の液を蒸溜するなり、水を吸收し易きを以て、無水のものは得難し。酒精。

アルコール・いんれう[亞爾箇保兒飲料](名)「アルコール」を含める飲料。

アルコール・かんだんけい[亞爾箇保兒寒暖計](名)「アルコール」を用ひたる寒暖計、その精密なるものは烈しき寒氣を計るに適し、最低寒暖計等に用ふ。

アルコール・けい[亞爾箇保兒計](名) 液体中に含める「アルコール」の濃度を計る器、これを液中に浮かして、その液面に對する管上の目盛によりて、その百分比を知る。

アルコール・ちゆうどく[亞爾箇保兒中毒](名)「アルコール」の毒に中りて發する病、急性は眩暈・耳鳴・嘔吐等を催し、痙攣・痲痺を起し、心悸增強し、慢性症は飲酒せざれば身神勝れず、顏色蒼白となり、精神に異狀を呈す。

アルコール・ランプ[Alcohol lamp](名) 油の代りに「アルコール」を用ふる「ランプ」、理化學の實驗に用ふるもの。

アルコーレート[Alcoholate](名)【化】「アルコール」類の水酸基の水素を金屬にて置換したるもの、「ナトリウムメチレート」「ナトリウムエチレート」の如きはこれなり。

アルゴン[Argon](名)【化】大氣中に僅かに存する氣體、無色無味にして他の物質と化合し難し、熱したる銅により、空氣の酸素を除きて後、熱したる「マグネシウム」により窒素を除けば、これを集むるを得。

あるじ[主](名) ㊀一家の主人。ぬし。ていしゆ。㊁廿主人となりて、人を饗應すると。馳走。

廿あるじ・まうけ[饗設](名) 馳走の支度。

アルター[亞爾答亞](名)(ラテン語 Althaea)【植】錦葵科(ゼニアフヒ)科の多年草、毎年宿根より數莖を出す、莖の高さ二三尺、毛茸密生し、葉は對生にして心臟形をなし、質厚く、短き葉柄あり、淡紫色の花を開く、根には「アスパラギン」・澱粉等を含み、藥用とす。

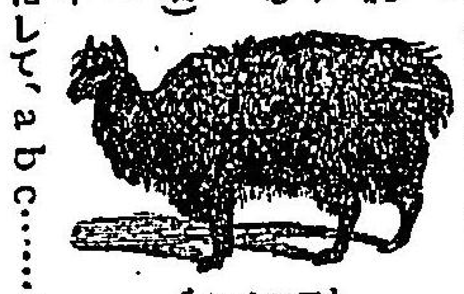
アルデヒド[Aldehyd](名)【化】揮發し易く刺戟性の臭氣を有する液體、「アルコール」の不十分なる酸化により生ず、還元性甚だ強し。

あるときばらひ[有時拂](名) 金錢のある

ときに借金を返すと。

ある・は[或](副) あるひは。

アルパカ[Alpaca](名) ㊀【動】有蹄類に屬する反芻動物、南米智利・秘露に產し、やはらかき黑色の毛あり、これを取りて織物に用ふ。㊁「アルパカ」の毛を混じて織りたる布、「ショール」・裏地等に用ふ。


〔アルパカ〕

アルハベット[Alphabet](名) 現今歐米各國に用ひらるゝ一種の音標文字、もと「フエニキア」の文字を改造したるものにして、a b c……の如く一定の順序に配列したるもの。

アルバム[Album](名) 寫眞・繪葉書などをさしはさむ帖。

あるひ・は[或](副) ㊀これとかれと二つ以上のものを取り合せていふときに用ふる語。または。㊁もしくは。おそらくは。

アルブモーゼ(名)(ドイツ語 Albumose)【化】蛋白質の消化作用によりて蛋白質及び「ペプトーン」間に生じたる中間物、水に溶解し、酸「アルカリ」に溶解す、其の溶液は煮沸するも凝固せず、然れども硝酸に逢へば沈澱す。

アルヘイ[有平](名)「アルヘイル」に同じ。

アルヘイ・ざいく[有平細工](名)「アルヘイル」にて色々の形に拵へたる菓子。

アルヘイ・たう[有平糖](名) 次前に同じ。

アルヘイル(名)(「ポルトガル」語 Alfeloa)砂糖を煎じつめ、練りて飴のやうに固めたる物。氷絲糖。

アルボース[Arbos](名)【藥】消毒劑の一種、帶黃白色の固體狀の物質にして、樟腦樣の臭氣ありて水に溶け易し、石鹼又は軟石鹼となして、皮膚病及び寄生蟲驅除に用ふ。

アルミ[Aluminium bronze](名) 銅九分と「アルミニウム」一分とより成る合金、質堅く空氣中にて變色せず、金色の光澤を放つ、裝飾品に用ひらる。

アルミ・どう[―銅](名) 前條に同じ。

アルミニウム[Aluminium](名)【化】靑白色の金屬、天然には長石・雲母・鋼玉等の中に存在し、又、粘土の主成分を成す、質堅くして強く、延性・展性に富み、又、輕くして空氣中にて光澤を失はず、器物を製するに用ひらる。

アルミニウム・ばん[―版](名) 一種の印刷版、「アルミニウム」板を燐酸を以て腐蝕し、石版に代用するもの。

アルミンさんえん[―酸鹽=Aluminate](名)【化】水酸化「アルミニウム」が酸の作用を呈して生ずる化合物。

あるものがほ[有物顏](名) ありものがほ。

廿あれ(名) 四月、加茂の祭りに、色々の布を榊に垂れ飾りたるもの。(阿禮)。

あれ[荒](名) 風雨のあらきこと。あらし。暴風雨。

廿あれ[吾](代) われ。「國わかれして――はいかにせん」。

あれ[彼](代) かれ。あのもの。

あれ(感) 驚愕の意を表する發聲。あゝ。

(あ-れい[啞鈴](名)「ダンベル」に同じ。

(あれい・たいさう[啞鈴體操](名)【敎】啞鈴を用ひて行ふ體操。

あれ・これ[彼是](代) かれこれ。

あれ・しき[彼式](名) あれくらゐ。あればかり。

あれ・た[荒田](名) 荒れてある田。

あれ・だ・つ[荒立](自、た四) あらあらしくなる。あらくなる。

あれ・ち[荒地](名) 荒れたるまゝに、手を入れざる土地。

廿あれ・つ・ぐ[生繼](自、が四) うまれて受け繼ぐ。

あれ・の[荒野](名) 荒れたる野。

あれ・のみ[荒飲](名) 酒を暴飲すると。

あれ・ば[荒場](名) 去ゆらば。

廿あれはたれどき[彼誰時](名) 明けがた又は夕暮などの薄暗くして、人影の定かならぬ時。ほのぼのあけ。かはたれどき。「――なるに、物のあはれどもおもしろく」。

あれ・は・つ[荒果](自、た下二) 全く荒る。荒れをはる。

廿あれ・ばこ(名) 加茂祭のあれを納むる箱。

廿あれ・ひき(名) 加茂の祭日に、あれの榊の綱を引くこと。

廿あれ・まくら[荒枕](名) あばらやに旅寢すること。

あれ・ゆ・く[荒行](自、か四) 荒れて年月を經。ますます荒る。

廿あれ・をとこ(名) 加茂の祭の祭主となる神官。

廿あれ・をとめ(名) 加茂の齋主。

廿あろじ[主](名) あるじ。

あわ[泡](名) ㊀液體の氣體を包含して、丸くふくれたるもの。㊁硝子中の空虛。㊂口の端に噴くつばきのたま。(沫、涎)。――を・くふ[喰泡] おどろきあわつ。――を・ふく[吹泡] 不意を打たれて狼狽す。

廿あわ[沫緒](名) あわを。

廿あわ・さ・く[泡起](自、か四) あわだつ。

廿あわ・しほ[泡鹽](名) 純白なる鹽。

あわただ・し[慌](形、二) あわてたる樣なり。騷きて騷動さわがし。

あわ・だ・つ[泡立](自、た四) 泡が起る。泡生ず。

あわ・だ・つ[泡立](他、た下二) 泡を生ぜ

あおぞら-ふじん【青空婦人】(名) 職業を持たず、家庭にいる婦人。

あおぞら-ぶんこ【青空文庫】(名) 著作権の切れた文学作品などを、インターネット上で無料で公開するボランティア活動。

あおぞら-もの【青空者】(名) 家を持たない人。

あおぞら-やしき【青空屋敷】(名) 建物のない屋敷。

あおぞら-やね【青空屋根】(名) 屋根のない家。

あおぞら-やまい【青空病】(名) 屋外で働く人がかかりやすい病気。

あおぞら-ゆうえんち【青空遊園地】(名) 屋外にある遊園地。

あおぞら-ゆうびんきょく【青空郵便局】(名) 屋外で営業する郵便局。

あおぞら-よきょ【青空預金】(名) 通帳を発行しない預金。

あおぞら-よきょく【青空預金口座】(名) 通帳を発行しない預金口座。

あおぞら-よきょくしゃ【青空預金者】(名) 青空預金口座を持つ人。

あおぞら-よきょくせいど【青空預金制度】(名) 青空預金口座を利用する制度。

あおぞら-よきょくだんたい【青空預金団体】(名) 青空預金口座を利用する団体。

あおぞら-よきょくにん【青空預金人】(名) 青空預金口座を持つ人。

あおぞら-よきょくぼ【青空預金簿】(名) 青空預金口座の通帳。

あおぞら-よきょくもの【青空預金者】(名) 青空預金口座を持つ人。

あおぞら-よきょくやくしょ【青空預金役所】(名) 青空預金口座を扱う役所。

あおぞら-よきょくやくにん【青空預金役人】(名) 青空預金口座を扱う役人。

あおぞら-よきょくやくば【青空預金役場】(名) 青空預金口座を扱う役場。

あおぞら-よきょくやくひん【青空預金役品】(名) 青空預金口座を扱う役品。

あおぞら-よきょくやくぶつ【青空預金役物】(名) 青空預金口座を扱う役物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分】(名) 青空預金口座を扱う役分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分所】(名) 青空預金口座を扱う役分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分人】(名) 青空預金口座を扱う役分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分場】(名) 青空預金口座を扱う役分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分品】(名) 青空預金口座を扱う役分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分物】(名) 青空預金口座を扱う役分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶん【青空預金役分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんしょ【青空預金役分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんにん【青空預金役分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんば【青空預金役分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんひん【青空預金役分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶつ【青空預金役分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶん【青空預金役分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんば【青空預金役分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんば【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分場。

あおぞら-よきょくやくぶんひん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分品。

あおぞら-よきょくやくぶんぶつ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分物。

あおぞら-よきょくやくぶん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分。

あおぞら-よきょくやくぶんしょ【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分所。

あおぞら-よきょくやくぶんにん【青空預金役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人】(名) 青空預金口座を扱う役分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分分人。

あおぞら-よきょくやくぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ

こけくさか　もとすしさ　とてつもた　のねにな

あをに-いんがん [青赤銅元] (名) 青色を呈する赤銅の一種。

あをに-がき [青土佐] (名) 土佐国より出だす一種の紙。厚くして紺色なるもの。こんどうし。

あをに-ぐり [青鳥] (名) 未熟なるもの。「青し」。

あをに-さんぼ [青鞘筒] (名) 【画】鞘筒の一種。色青し。

あをに-な [青菜] (名) ❶野菜。❷【植】たうな。

あをに-なし [青梨] (名) 【植】梨の一種。果皮の色青し。

あをに-なみ [青波] (名) 青々と見ゆる波。

あをに-なめし [青革] (名) 「あをがは」に同じ。

あをに-に [青丹] (名) ❶青き色の土。❷【錬】いはゆる青丹を焼きたるもの。

あをに-に [青煮] (名) 一種の料理。豚肉などを青色の野菜を加へて煮て、味噌と醤とを和したるもの。

あをに-いんがん [青煮醤元] (名) 青色を呈せる赤銅の太刀拵物。

あをに-ぬの [青絹] (名) 埼玉県の産より出す絹織物。

あをに-ぬま [青沼] (名) 青色を呈する沼。

あをに-ねり [青練] (名) 青色を呈する練絹。

あをに-の [青野] (名) 青色を呈する野。

あをに-はぜ [青鯊] (名) 【魚】「あをはぜ」に同じ。

あをに-ばら [青原] (名) 青色を呈する原。

あをに-ひさご [青瓢] (名) 【植】「あをひさご」に同じ。

あをに-ひら [青平] (名) 【植】「あをひら」に同じ。

あをに-ぶくろ [青袋] (名) 【植】「あをぶくろ」に同じ。

あをに-ぶち [青斑] (名) 【植】「あをぶち」に同じ。

あをに-ぶな [青橅] (名) 【植】「あをぶな」に同じ。

あをに-ぶね [青船] (名) 青色を呈する船。

あをに-ぼし [青星] (名) 【天】「あをぼし」に同じ。

あをに-まつ [青松] (名) 【植】「あをまつ」に同じ。

あをに-まめ [青豆] (名) 【植】「あをまめ」に同じ。

あをに-みそ [青味噌] (名) 青色を呈する味噌。

あをに-むし [青虫] (名) 【動】「あをむし」に同じ。

あをに-むら [青村] (名) 青色を呈する村。

あをに-もの [青物] (名) 青色を呈する物。

あをに-やき [青焼] (名) 【写】「あをやき」に同じ。

あをに-やま [青山] (名) 青色を呈する山。

あをに-よし [青丹吉] (名) 奈良の枕詞。青丹を産するより。

あをに-わら [青藁] (名) 青色を呈する藁。

あをね-ずみ [青鼠] (名) 【動】「あをねずみ」に同じ。

あをの-ぐち [青口] (名) 【動】「あをぐち」に同じ。

あをの-ぐみ [青茎] (名) 【植】「あをぐみ」に同じ。

あをの-ぐり [青栗] (名) 【植】「あをぐり」に同じ。

あをの-ぐろ [青黒] (名) 【動】「あをぐろ」に同じ。

あをの-けら [青] (名) 【動】「あをけら」に同じ。

あをの-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをの-さし [青指] (名) 一種の食虫。青蠅を殺す。

あをの-じま [青島] (名) 【植】青色の苔。

あをの-すずめ [青雀] (名) 【鳥】「あをすずめ」に同じ。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種。我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-だま [青玉] (名) 緑色の翡玉。

あをの-だん [青短] (名) ❶花合の「カルタ」の緑色なる短冊のつくりたるもの。❷花合の役、青短の札の三枚をあつめたるもの。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

あをの-ぢさ [青藺] (名) 【植】藺草の一種、形小し。

あをの-せん [青銭] (名) 青銅にて鋳たる銭。

あをの-そ [青麻] (名) 麻の粗皮、あさ縄などにする。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。「あをぞら」に同じ。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 【動】「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-だま [青玉] (名) 緑色の翡玉。

あをの-だん [青短] (名) ❶花合の「カルタ」の緑色なる短冊のつくりたるもの。❷花合の役、青短の札の三枚をあつめたるもの。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

あをの-ぢさ [青藺] (名) 【植】藺草の一種、形小し。

あをの-せん [青銭] (名) 青銅にて鋳たる銭。

あをの-そ [青麻] (名) 麻の粗皮、あさ縄などにする。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

あをの-ちさ [青千草] (名) 【植】同科の多年草、根は倒卵形にして、茎の高さ五十乃至一尺、下部の葉は倒卵形にして、上部の葉は披針形なり、茎上に緑色の花を着生す。

あをの-ちや [青茶] (名) 青みを帯びたる茶色。

あをの-つ [青] (名) 【動】(自ナ四) あをむ。「に」。

あをの-つぐら [青葛] (名) 【植】「あをかづら」に同じ。

あをの-つづら-ふぢ [木防己] (名) 【植】防己科の蔓性植物。茎は緑色にして葉は互生し、心臓形を呈す。花は淡緑色にして雌雄異株なり。

あをの-つばき [青椿] (名) 青く茂れる椿。「いやまレの、やつをに茂る一」。

あをの-て [青砥] (名) 砥石の一種、質は粘板岩にして色青く、刃を青く研ぐに用ふ。

あをの-とかげ [青石龍子] (名) 【動】石竜子(とかげ)の一種、色青し。

あをの-とさ [青土佐] (名) 土佐国より出だす一種の紙。厚くして紺色なるもの。こんどうし。

あをの-とり [青鳥] (名) 未熟なるもの。「青し」。

あをの-なんばん [青蕃椒] (名) 【植】蕃椒の一種、色青し。

あをの-な [青菜] (名) ❶野菜。❷【植】たうな。

あをの-なし [青梨] (名) 【植】梨の一種、果皮の色青し。

あをの-なみ [青波] (名) 青々と見ゆる波。

あをの-なめし [青革] (名) 「あをがは」に同じ。

あをの-に [青丹] (名) ❶青き色の土。❷【錬】いはゆる青丹を焼きたるもの。

あをの-に [青煮] (名) 一種の料理。豚肉などと青色の野菜を加へて煮て、味噌と醤とを和したるもの。

あをの-にがん [青煮醤元] (名) 青色を呈する赤銅の太刀拵物。

あをの-ぬの [青絹] (名) 埼玉県の産より出す絹織物。

あをの-ぬま [青沼] (名) 青色を呈する沼。

あをの-ねり [青練] (名) 青色を呈する練絹。

あをの-の [青野] (名) 青色を呈する野。

あをの-はぜ [青鯊] (名) 【魚】「あをはぜ」に同じ。

あをの-ばら [青原] (名) 青色を呈する原。

あをの-ひさご [青瓢] (名) 【植】「あをひさご」に同じ。

あをの-ひら [青平] (名) 【植】「あをひら」に同じ。

あをの-ぶくろ [青袋] (名) 【植】「あをぶくろ」に同じ。

あをの-ぶち [青斑] (名) 【植】「あをぶち」に同じ。

あをの-ぶな [青橅] (名) 【植】「あをぶな」に同じ。

あをの-ぶね [青船] (名) 青色を呈する船。

あをの-ぼし [青星] (名) 【天】「あをぼし」に同じ。

あをの-まつ [青松] (名) 【植】「あをまつ」に同じ。

あをの-まめ [青豆] (名) 【植】「あをまめ」に同じ。

あをの-みそ [青味噌] (名) 青色を呈する味噌。

あをの-むし [青虫] (名) 【動】「あをむし」に同じ。

あをの-むら [青村] (名) 青色を呈する村。

あをの-もの [青物] (名) 青色を呈する物。

あをの-やき [青焼] (名) 【写】「あをやき」に同じ。

あをの-やま [青山] (名) 青色を呈する山。

あをの-よし [青丹吉] (名) 奈良の枕詞。青丹を産するより。

あをの-わら [青藁] (名) 青色を呈する藁。

あをね-ずみ [青鼠] (名) 【動】「あをねずみ」に同じ。

あをの-ぐち [青口] (名) 【動】「あをぐち」に同じ。

あをの-ぐみ [青茎] (名) 【植】「あをぐみ」に同じ。

あをの-ぐり [青栗] (名) 【植】「あをぐり」に同じ。

あをの-ぐろ [青黒] (名) 【動】「あをぐろ」に同じ。

あをの-けら [青] (名) 【動】「あをけら」に同じ。

あをの-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをの-さし [青指] (名) 一種の食虫。青蠅を殺す。

あをの-じま [青島] (名) 【植】青色の苔。

あをの-すずめ [青雀] (名) 【鳥】「あをすずめ」に同じ。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

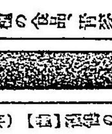
あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。



[(一)あをさぎ]

あをさぎ-かずけ [青鷺糟毛] (名) 「あをさぎ」(二)に同じ。

あをさぎ-ざし [青櫛] (名) あをさぎにて作りたる櫛。又其の櫛(青櫛)。

あをさ-ざし [青指] (名) 一種の食虫、青蠅を殺す。

あをさ-ぢ [青] (名) ❶あをはみたる緑色。(謡)。❷かきれの色目、表は濃き青にして、裏はつねの青なるもの。

あをさ-ぢ [青地] (名) 【動】豚木鳥の一種、地色は上部緑色下部淡緑色にして、頭下に深紅を交へたる斑点あり、頭と頬と尾とは赤く、嘴と足とは黒し。

あをさ-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをさ-じら [青白] (名) 【植】青色の苔。

あをさ-じま [青駒] (名) 【植】青馬。

あをさ-じみむし [青座蟲] (名) 【動】歩行虫科に属する甲虫、体は三五分にして、緑色を呈し、頭尻中に住してよく疾行し、臭気を放つ。

あをさ-ぎ (名) ❶【植】(い)緑色系に属する種類、形扁平にして細き茎を有し、色は暗緑色なり、葉の形は線状三三寸、我が国沼沢に生ず、これを産するさるる所なし、食用とすべきも味美ならず。(蘭茎、石竜)。(ろ)かはあをのり。❷雑草をぬきたる雑物。

あをさ-ぎ [青鷺] (名) ❶【動】鷺の一種、体は灰青色の部多く、頭頸は白く、冠羽に長き飾羽を生じ、所々に漆黒を斑点を帯ぶ、肉は味美なり。❷馬の毛色、つきげ毛の青きもの。

あをさ-ぎ [青鷺] (名) 【植】(い)緑色系に属する種類、形扁平にして細き茎を有し、色は暗緑色なり、葉の形は線状三三寸、我が国沼沢に生ず、これを産するさるる所なし、食用とすべきも味美ならず。(蘭茎、石竜)。(ろ)かはあをのり。❷雑草をぬきたる雑物。

あをさ-ぎ [青鷺] (名) 【動】鷺の一種、体は灰青色の部多く、頭頸は白く、冠羽に長き飾羽を生じ、所々に漆黒を斑点を帯ぶ、肉は味美なり。❷馬の毛色、つきげ毛の青きもの。

[(一)あをさぎ]

あをさぎ-かずけ [青鷺糟毛] (名) 「あをさぎ」(二)に同じ。

あをさ-ぢ [青地] (名) 【動】豚木鳥の一種、地色は上部緑色下部淡緑色にして、頭下に深紅を交へたる斑点あり、頭と頬と尾とは赤く、嘴と足とは黒し。

あをさ-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをさ-じら [青白] (名) 【植】青色の苔。

あをさ-じま [青駒] (名) 【植】青馬。

あをさ-じみむし [青座蟲] (名) 【動】歩行虫科に属する甲虫、体は三五分にして、緑色を呈し、頭尻中に住してよく疾行し、臭気を放つ。

あをさ-ぎ (名) ❶【植】(い)緑色系に属する種類、形扁平にして細き茎を有し、色は暗緑色なり、葉の形は線状三三寸、我が国沼沢に生ず、これを産するさるる所なし、食用とすべきも味美ならず。(蘭茎、石竜)。(ろ)かはあをのり。❷雑草をぬきたる雑物。

あをの-ふぢ [青藤] (名) 【植】「あをかづら」に同じ。

あをの-ふな [青鮒] (名) 【魚】「あをぶな」に同じ。

あをの-へび [青蛇] (名) 【動】「あをへび」に同じ。

あをの-ほし [青星] (名) 【天】「あをぼし」に同じ。

あをの-まつ [青松] (名) 【植】「あをまつ」に同じ。

あをの-まめ [青豆] (名) 【植】「あをまめ」に同じ。

あをの-みそ [青味噌] (名) 青色を呈する味噌。

あをの-むし [青虫] (名) 【動】「あをむし」に同じ。

あをの-むら [青村] (名) 青色を呈する村。

あをの-もの [青物] (名) 青色を呈する物。

あをの-やき [青焼] (名) 【写】「あをやき」に同じ。

あをの-やま [青山] (名) 青色を呈する山。

あをの-よし [青丹吉] (名) 奈良の枕詞。青丹を産するより。

あをの-わら [青藁] (名) 青色を呈する藁。

あをね-ずみ [青鼠] (名) 【動】「あをねずみ」に同じ。

あをの-ぐち [青口] (名) 【動】「あをぐち」に同じ。

あをの-ぐみ [青茎] (名) 【植】「あをぐみ」に同じ。

あをの-ぐり [青栗] (名) 【植】「あをぐり」に同じ。

あをの-ぐろ [青黒] (名) 【動】「あをぐろ」に同じ。

あをの-けら [青] (名) 【動】「あをけら」に同じ。

あをの-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをの-さし [青指] (名) 一種の食虫。青蠅を殺す。

あをの-じま [青島] (名) 【植】青色の苔。

あをの-すずめ [青雀] (名) 【鳥】「あをすずめ」に同じ。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-だま [青玉] (名) 緑色の翡玉。

あをの-だん [青短] (名) ❶花合の「カルタ」の緑色なる短冊のつくりたるもの。❷花合の役、青短の札の三枚をあつめたるもの。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

あをの-ちさ [青千草] (名) 【植】同科の多年草、根は倒卵形にして、茎の高さ五十乃至一尺、下部の葉は倒卵形にして、上部の葉は披針形なり、茎上に緑色の花を着生す。

あをの-ちや [青茶] (名) 青みを帯びたる茶色。

あをの-つ [青] (名) 【動】(自ナ四) あをむ。「に」。

あをの-つぐら [青葛] (名) 【植】「あをかづら」に同じ。

あをの-つづら-ふぢ [木防己] (名) 【植】防己科の蔓性植物。茎は緑色にして葉は互生し、心臓形を呈す。花は淡緑色にして雌雄異株なり。

あをの-つばき [青椿] (名) 青く茂れる椿。「いやまレの、やつをに茂る一」。

あをの-て [青砥] (名) 砥石の一種、質は粘板岩にして色青く、刃を青く研ぐに用ふ。

あをの-とかげ [青石龍子] (名) 【動】石竜子(とかげ)の一種、色青し。

あをの-とさ [青土佐] (名) 土佐国より出だす一種の紙。厚くして紺色なるもの。こんどうし。

あをの-とり [青鳥] (名) 未熟なるもの。「青し」。

あをの-なんばん [青蕃椒] (名) 【植】蕃椒の一種、色青し。

あをの-な [青菜] (名) ❶野菜。❷【植】たうな。

あをの-なし [青梨] (名) 【植】梨の一種、果皮の色青し。

あをの-なみ [青波] (名) 青々と見ゆる波。

あをの-なめし [青革] (名) 「あをがは」に同じ。

あをの-に [青丹] (名) ❶青き色の土。❷【錬】いはゆる青丹を焼きたるもの。

あをの-に [青煮] (名) 一種の料理。豚肉などと青色の野菜を加へて煮て、味噌と醤とを和したるもの。

あをの-にがん [青煮醤元] (名) 青色を呈する赤銅の太刀拵物。

あをの-ぬの [青絹] (名) 埼玉県の産より出す絹織物。

あをの-ぬま [青沼] (名) 青色を呈する沼。

あをの-ねり [青練] (名) 青色を呈する練絹。

あをの-の [青野] (名) 青色を呈する野。

あをの-はぜ [青鯊] (名) 【魚】「あをはぜ」に同じ。

あをの-ばら [青原] (名) 青色を呈する原。

あをの-ひさご [青瓢] (名) 【植】「あをひさご」に同じ。

あをの-ひら [青平] (名) 【植】「あをひら」に同じ。

あをの-ぶくろ [青袋] (名) 【植】「あをぶくろ」に同じ。

あをの-ぶち [青斑] (名) 【植】「あをぶち」に同じ。

あをの-ぶな [青橅] (名) 【植】「あをぶな」に同じ。

あをの-ぶね [青船] (名) 青色を呈する船。

あをの-ぼし [青星] (名) 【天】「あをぼし」に同じ。

あをの-まつ [青松] (名) 【植】「あをまつ」に同じ。

あをの-まめ [青豆] (名) 【植】「あをまめ」に同じ。

あをの-みそ [青味噌] (名) 青色を呈する味噌。

あをの-むし [青虫] (名) 【動】「あをむし」に同じ。

あをの-むら [青村] (名) 青色を呈する村。

あをの-もの [青物] (名) 青色を呈する物。

あをの-やき [青焼] (名) 【写】「あをやき」に同じ。

あをの-やま [青山] (名) 青色を呈する山。

あをの-よし [青丹吉] (名) 奈良の枕詞。青丹を産するより。

あをの-わら [青藁] (名) 青色を呈する藁。

あをね-ずみ [青鼠] (名) 【動】「あをねずみ」に同じ。

あをの-ぐち [青口] (名) 【動】「あをぐち」に同じ。

あをの-ぐみ [青茎] (名) 【植】「あをぐみ」に同じ。

あをの-ぐり [青栗] (名) 【植】「あをぐり」に同じ。

あをの-ぐろ [青黒] (名) 【動】「あをぐろ」に同じ。

あをの-けら [青] (名) 【動】「あをけら」に同じ。

あをの-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをの-さし [青指] (名) 一種の食虫。青蠅を殺す。

あをの-じま [青島] (名) 【植】青色の苔。

あをの-すずめ [青雀] (名) 【鳥】「あをすずめ」に同じ。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-だま [青玉] (名) 緑色の翡玉。

あをの-だん [青短] (名) ❶花合の「カルタ」の緑色なる短冊のつくりたるもの。❷花合の役、青短の札の三枚をあつめたるもの。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

あをの-ぢさ [青千草] (名) 【植】同科の多年草、根は倒卵形にして、茎の高さ五十乃至一尺、下部の葉は倒卵形にして、上部の葉は披針形なり、茎上に緑色の花を着生す。

あをの-ちや [青茶] (名) 青みを帯びたる茶色。

あをの-つ [青] (名) 【動】(自ナ四) あをむ。「に」。

あをの-つぐら [青葛] (名) 【植】「あをかづら」に同じ。

あをの-つづら-ふぢ [木防己] (名) 【植】防己科の蔓性植物。茎は緑色にして葉は互生し、心臓形を呈す。花は淡緑色にして雌雄異株なり。

あをの-つばき [青椿] (名) 青く茂れる椿。「いやまレの、やつをに茂る一」。

あをの-て [青砥] (名) 砥石の一種、質は粘板岩にして色青く、刃を青く研ぐに用ふ。

あをの-とかげ [青石龍子] (名) 【動】石竜子(とかげ)の一種、色青し。

あをの-とさ [青土佐] (名) 土佐国より出だす一種の紙。厚くして紺色なるもの。こんどうし。

あをの-とり [青鳥] (名) 未熟なるもの。「青し」。

あをの-なんばん [青蕃椒] (名) 【植】蕃椒の一種、色青し。

あをの-な [青菜] (名) ❶野菜。❷【植】たうな。

あをの-なし [青梨] (名) 【植】梨の一種、果皮の色青し。

あをの-なみ [青波] (名) 青々と見ゆる波。

あをの-なめし [青革] (名) 「あをがは」に同じ。

あをの-に [青丹] (名) ❶青き色の土。❷【錬】いはゆる青丹を焼きたるもの。

あをの-に [青煮] (名) 一種の料理。豚肉などと青色の野菜を加へて煮て、味噌と醤とを和したるもの。

あをの-にがん [青煮醤元] (名) 青色を呈する赤銅の太刀拵物。

あをの-ぬの [青絹] (名) 埼玉県の産より出す絹織物。

あをの-ぬま [青沼] (名) 青色を呈する沼。

あをの-ねり [青練] (名) 青色を呈する練絹。

あをの-の [青野] (名) 青色を呈する野。

あをの-はぜ [青鯊] (名) 【魚】「あをはぜ」に同じ。

あをの-ばら [青原] (名) 青色を呈する原。

あをの-ひさご [青瓢] (名) 【植】「あをひさご」に同じ。

あをの-ひら [青平] (名) 【植】「あをひら」に同じ。

あをの-ぶくろ [青袋] (名) 【植】「あをぶくろ」に同じ。

あをの-ぶち [青斑] (名) 【植】「あをぶち」に同じ。

あをの-ぶな [青橅] (名) 【植】「あをぶな」に同じ。

あをの-ぶね [青船] (名) 青色を呈する船。

あをの-ぼし [青星] (名) 【天】「あをぼし」に同じ。

あをの-まつ [青松] (名) 【植】「あをまつ」に同じ。

あをの-まめ [青豆] (名) 【植】「あをまめ」に同じ。

あをの-みそ [青味噌] (名) 青色を呈する味噌。

あをの-むし [青虫] (名) 【動】「あをむし」に同じ。

あをの-むら [青村] (名) 青色を呈する村。

あをの-もの [青物] (名) 青色を呈する物。

あをの-やき [青焼] (名) 【写】「あをやき」に同じ。

あをの-やま [青山] (名) 青色を呈する山。

あをの-よし [青丹吉] (名) 奈良の枕詞。青丹を産するより。

あをの-わら [青藁] (名) 青色を呈する藁。

あをね-ずみ [青鼠] (名) 【動】「あをねずみ」に同じ。

あをの-ぐち [青口] (名) 【動】「あをぐち」に同じ。

あをの-ぐみ [青茎] (名) 【植】「あをぐみ」に同じ。

あをの-ぐり [青栗] (名) 【植】「あをぐり」に同じ。

あをの-ぐろ [青黒] (名) 【動】「あをぐろ」に同じ。

あをの-けら [青] (名) 【動】「あをけら」に同じ。

あをの-こ [青粉] (名) 古語。青海苔の粉をいひ、後にはふはふはからしの葉を乾かし粉末としたるものをいふ。食物の香料に用ふ。

あをの-さし [青指] (名) 一種の食虫。青蠅を殺す。

あをの-じま [青島] (名) 【植】青色の苔。

あをの-すずめ [青雀] (名) 【鳥】「あをすずめ」に同じ。

あをの-ぞら [青空] (名) 青く見ゆる天。

あをの-た [青田] (名) あをあをと見ゆる田。

あをの-だ [青鱈] (名) 「あをだら」に同じ。

あをの-だいおうりん [青大将] (名) 【動】蛇の一種、我国普通見ゆる所のもの。体色は少しく緑色を帯び、体大なるものは六尺余に達す。性強暴なれど人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(蛇類)。

あをの-だうしん [青道心] (名) ❶【俚】なまなかに仏道に入りたる人。❷なまはんかを作個。

あをの-だおさ [青田押] (名) 青田の雑草をかきとること。

あをの-だけ [青竹] (名) ❶伐りたる竹材の色の青きもの。❷古語。「一本草のうく人ふさたて、」。❸緑色の図案性の染料。

あをの-だこ (名) 【植】木肌材の青木、高さ三四丈、樹皮は青緑灰白色にして滑なり、葉は倭葉にして對生し、小葉は楕円形にして長さ約四寸、鋸歯縁をなし、表面は深緑色、裏面は白色を帯ぶ、六月の頃枝端に淡白色の円錐形散花をつく、萼は四裂し、花瓣は四枚ありて狭針形をし、二雄蕊、一雌蕊あり、材は緻密、其を刻して又新疾の料とす。

あをの-だま [青玉] (名) 緑色の翡玉。

あをの-だん [青短] (名) ❶花合の「カルタ」の緑色なる短冊のつくりたるもの。❷花合の役、青短の札の三枚をあつめたるもの。

あをの-ちく [青竹] (名) 【植】竹の変種、茎及び枝は緑色にして、花の色は白し。

ざる様に發たる隠元豆、その法は隠元豆を焼て、蒸て急に冷す。

あを-にぎて［靑和幣］(名) 靑色の和幣。

廿**あを-に-ごろも**［靑丹衣］(名) ㊀あをにに匪れて染たる衣。㊁耻のうはぬり。「いふ語。

廿**あを-にさい**［靑二才］(名) 年若き男を卑しめて

廿**あを-にび**［靑鈍］(名) ㊀靑ばみたるはなだ色。㊁かさねの色目、表裏共に靑鈍色なるもの。

あを-にぶ［靑鈍］(名) 前條に同じ。

あを-に-みつば［靑煮三葉］(名) 靑色の失せざるやうに煮たる三葉、その法は三葉は若く煠てゝ急に冷水に入れて冷す。

あを-にようばう［靑女房］(名) とし若く未だ物事に慣れざる女房。

廿**あを-に-よし**［靑丹吉］(枕) ならに冠す。

あを-ぬた［靑饅］(名) 芥の靑葉をぬたにあへたるもの。

あを-ね-かづら［植］水龍骨科に屬する羊齒植物、古木又は岩石に着生す、常綠なり、根・莖互に交錯して塊をなし、或は匍匐して枝を分つ、葉は細長にして長き葉柄を具す。(水龍骨)。

あを-のき［仰］(名) あをのくこと。

あを-の-く［仰］(自、か四) あをむく。

あを-の-く［仰］(他、か下二) あをむけにす。あをのける。

あを-のけ［仰］(名) あをのくること。

あを-のり［靑海苔］(名) ［植］綠藻類に屬する海藻、形狀絲の如く、細管狀をなし、圓盤狀の根を有す、長さ二三寸より一尺に及ぶ、生處によりて色を異にすれど、通常鮮綠色なり、外洋又は內海にも產すれど、河口に產するものは上品なり、食用に供せらる。(石蓴・乾苔・海苔菜)。

あを-ば［靑葉］(名) ㊀樹木の靑き葉。㊁樹木の嫩き葉。わかば。㊂わかばのあを〳〵としたる頃。

あを-ば［靑羽］(名) 鳥の羽の靑きもの。

あを-はこべ［靑蘩蔞］(名) ［植］石竹科の小草、莖は地に臥し、葉は長さ二分乃至六分にして卵形をなし、花は花瓣なく、萼は五片にして披針狀をなし、十雄蕊あり、果實は頭を結ぶ。

あを-はだ［靑肌］(名) 毛を削りたるあとの靑々としたるはだ。

あを-はだ(名) ［植］冬靑(ソヨゴ)科に屬する落葉喬木、山中に生ず、幹の高さ三四丈に及び、外皮は平滑にして灰白色に綠色を帶ぶ、葉は互生して楕圓形をなし、葉緣に鋸齒ありて長き葉柄を有す、六七月頃、葉腋に小白花を綴る、雌雄異株にして、果實は球形をなす、木材は種々の用に供せらる。いぬけやき。

あを-ばた［靑畑］(名) ［植］「あをまめ」に同じ。

あを-ばち［靑蜂］(名) ［動］膜翅類中細腰蜂科に屬する蟲、全體黑色なり、腹柄細長にして二節より成り、第三腹節は赤色なり。

あをば-づく［靑葉木菟］(名) ［動］小形のふくろ、頭大にして耳羽なく、眼は黃金色をなし、全身黑褐色にして腹と尾と稍白し、夏日我が國に來りて、深葉中に住み、夜間「ホウホウ」と鳴く。

あを-ばと［靑鳩］(名) ［動］鳩の一種、きじばとより少しく大きく、體の上部は濃綠色なれど、頭上及び下部は黃綠色にして、風切羽及び尾は外側は黑く、脚は赤し。「去る。

あを-ばな［靑鼻］(名) 子供などの垂るゝ靑き鼻

あを-ばな［靑花］(名) ［植］(い)鴨跖草(ツユクサ)科に屬する草本、葉は長楕圓又は卵狀にして通常鋭頭を有し、佛焰狀の苞は殆ど平滑なり、花は通常靑色を呈す。つゆくさ。(ろ)うつしばな。

あをばな-いんこ［靑花鸚哥］(名) ［動］いんこの一種、藍色をなせるもの。

あを-ばへ［靑蠅］(名) ［動］蠅の一種、大形にして、色靑黑く堅高し。

あをば-はごろも［靑葉羽衣］(名) ［動］有吻類中白蠟科に屬する昆蟲、體は約二分七厘にして黃綠色を呈し、靑は淡綠にして前靑は周緣に赤色を帶び、靜止するときは翅を兩側に置きて烏帽子形をなす、樹木の害蟲なり。

あを-はまきむし(名) ［動］鱗翅類中螟蟲蛾科に屬する小蛾、體は茶褐色にして腹部は白く、翅は三角形をなし、前翅は黃褐にして黑紋あり、後翅は黑白の斑を呈し、幼蟲は約六分、綠色にして、五月頃出で葉を捲きて巢となし、葉中に越年し、翌春蛹となり、尋て羽化す。「齒者」。

あを-は-もの［靑齒者］(名) 軍中の人夫雜兵。(白

あを-はんめう［靑斑猫］(名) ［動］芫靑(ハンメウ)科に屬する小形の甲蟲、體色濃綠にして觸角黑し、藥用に供せらる。

あを-び［靑火］(名) おにび。燐火。

あを-ひえ［靑竹刀］(名) 小兒の臍の緒を切る竹にてつくりたる刀、眞に切るにはあらで，眞似をするのみ。

廿**あを-ひとぐさ**［靑人草］(名) 人の年々生れ出づるを草の生え茂るにたとへていふ語たみ。蒼生。庶民。

廿**あを-び-る**［靑］(自、ら下二) 靑くなる。靑ざむ。「色あさましうあをびれたるものども」。

あを-ぶか［靑鱶］(名) ［動］「あをざめ」に同じ。

あを-ふくべ［靑瓢］(名) ㊀色の靑き瓢箪。㊁顏の色の靑きもの。「みたる垣根。

廿**あを-ふしがき**［靑柴垣］(名) 靑葉の柴にて編

あを-ふち［靑淵］(名) 水深くして靑くみゆる淵。

あを-べうし［靑表紙］(名) (い)經書。(ろ)靑色の表紙をつけたる淨瑠璃の稽古本。

あを-べうたん［靑瓢箪］(名) あをふくべ。

廿**あを-へど**［靑反吐］(名) なまなまし、きへど。「―をつきてのたまふ」。

あを-べら［靑部屋］(名) 魚の名、體色靑く褐條・赤條・赤斑あり、六七丈の海底の礁間に住み、海藻を食す、肉は食料に供すべし。

［あをべら］

廿**あを-ほそびき**［靑細引］(名) 德川時代に、罪人をしばりたる靑き細引繩。

あを-ほらごけ(名) ［植］羊齒類の隱花植物、本邦南部に產す、根莖は絲狀をなし黑色にして黑毛を生ず、葉は卵形にして蓬賀獮し。

あを-まめ［靑豆］(名) ［植］大豆の一種、果實の綠色に微暗色を帶びたるもの。あをばた。

あを-まるもち［靑丸餅］(名) 餅菓子の一種、腰の高き大福餅に餡を入れ、靑くぬりたるもの。

あを-み［靑味］(名) ㊀靑ばみたる色。㊂吸物又は炙物などに添へて、形容を點綴する野菜もの。

あを-み［靑海］(名) あをうなばら。

あを-みかん［靑蜜柑］(名) ［植］橘の一種、果實は皮靑きときより食ふべし。

廿**あをみ-くるま**［靑蓋車］(名) 中古、人の乘る車、上臈(ﾔ)の靑きもの。

あを-みづひき［靑水引］(名) 半ば白く、半ば紺色にそめたる水引、凶事に用ふ。

廿**あをみ-づら**［靑匏］(名) 「あをふくべ(一)」に同じ。

あを-みどり［靑綠］(名) ㊀濃き綠色。㊁［植］接合藻門に屬する單細胞植物、一列の細胞より成りたる線維狀のものにして、螺旋狀の葉綠體を有し、淡水に生殖す。あをみどろ。(水綿)。

あを-みどろ(名) ［植］前條に同じ。

廿**あを-みなづき**［靑水無月］(名) 六月の異名。「―も涼しかりけり」。

あを-みやりばん［靑明礬］(名) ［鑛］「ろうは」に同じ。

あを-む［靑］(自、ま四) 靑くなる。

あを-むく［靑］(他、ま下二) 靑くす。

あを-むき［仰］(名) あをむくこと。「く。

あを-む-く［仰］(自、か四) 上へ向く。あふむ

あを-む-く［仰］(他、か下二) 上へ向かす。「むること。

あを-むけ［仰］(名) あをむくること。上にむかし

あを-むし［靑蟲］(名) ［動］(い)蝶蛾類の仔蟲の菜の葉などにつき綠色を呈するものゝ總稱。(螟蛉)。(ろ)鱗翅類の昆蟲、概ね榛褐色にして翅は共に三角形、觸角は鞭狀をなす。

あをむし-とがねばち［螟蛉黃金蜂］(名) ［動］膜翅類小繭蜂科の小蜂、あをむしに寄生す、體は黑色、口と脚とは黃色なり。

あを-むらさき［靑紫］(名) 靑みを帶びたる紫色。

あを-め［靑眼］(名) 眼球の虹彩の靑きもの。

あを-めくらがめ［靑盲椿象］(名) ［動］有吻類盲椿象科の小昆蟲、體は綠色にして頭に灰白色の細毛を被る、苗代に生じて稻の嫩葉を食害す。

あをめ-おまき［靑梅縞］(名) 武藏國靑梅より產出する縞物。

あをめ-わた［靑梅綿］(名) 上等なる入れ綿、多く武藏國靑梅に產す。

あをも-ぐさ［靑藻草］(名) ［植］綠藻類の海藻、體は球狀にして綠色、吸盤を有したる細胞密生し、岩石又は他の海藻に附着して生活す。

あを-もち［靑餅］(名) 「くさもち」に同じ。

あを-もの［靑物］(名) 「やさい」に同じ。

あをもの-いち［靑物市］(名) 靑物を賣買する「市。

あをもの-いちば［靑物市場］(名) 常に靑物市が立つ一定の場所。

あを-もみぢ［靑紅葉］(名) ㊀未だ色づかぬ紅葉。㊁かさねの色目、表は靑く裏は朽葉なるもの。

あを-ヤウカン［靑羊羹］(名) 靑粉をまじへて煮たる羊羹。

あを-やか［靑］(名) 靑々としたるさまにいふ語。

あを-やぎ［靑柳］(名) 靑々としたる柳。

あをやぎ-さう［靑柳草］(名) ［植］百合科の多年草、高さ二三尺、葉は披針形にして平行脈を有し、花は淡綠色にして圓錐花序に配列す。

廿**あをやぎ-の**(枕) 「絲」「かづら」に冠す。

あを-やなぎ［靑柳］(名) ㊀「あをやぎ」に同じ。㊁かさねの色目、表裏共に濃き靑色のもの。

あを-やま［靑山］(名) 樹木の靑々と茂げれる山。

あを-やまぶき［靑山吹］(名) かさねの色目、表靑、裏黃なるもの。

あを-ゆべし［靑柚餅子］(名) 一種の料理、白味噌・榧の實・刻みたる胡桃・寒晒を交ぜ砂糖鹽を和し、柚子の皮を卸したる液を加へて捏ね蒸したるもの。

あを-わかめ［靑和布］(名) ［植］褐藻類昆布科の

褐藻、形狀昆布とわかめとの中間にあり、通常のわかめよりは質脆くして品劣る。
あを-わらは[青童](名) ものなれざる童。
あを-ゐ[青藺](名) [植]「ふとゐ」に同じ。
あを-ゑ[青繪](名) ごすやきの陶器にある繪。
あを-をんな[青女](名) 若くして物慣れざる女。
(あをんぞ(名) 青々として血の氣なき面相。
(あん[案](名) ㊀つくゑ。だい。㊁未だ決行するに至らざるもの。已に成立したる考慮。かんがへ。志ゆかう。㊂未だ實施するに至らざるも、已に成立したる文書。志たがき。さうかう。
アン[餡](名) (字の宋音)㊀一種の食品、小豆を煮て摺り潰し、これに砂糖を混ぜて煮たるもの。㊁一種の食品、葛粉に酒・醬油を和し煮て粘き汁となし、食物にかくるもの。くずだまり。
(あん[庵](名) いほ。いほり。
(あん[盦](名) 支那古代の蓋ある銅器、食物を容る。
(あん[鞍](名) [地]㊀地層の曲りたるところの高き部分。㊁二個の山頂の間にある低きところ。
(あんあん-り[暗暗裏](名) 人の知らざるうち。
(あん-い[安意](名) あんしん。
(あん-いつ[安佚](名) 骨を折らず遊びくらすこと。(安逸)
(あん-か[安價](名) 代價の低き事。
(あん-か[案下](名) ㊀机の下。㊁机の傍。㊂轉じて、手紙の宛名の下に書きそふる語。机の旁に進ずる意。
(あん-が[晏駕](名) 天子の崩御。
(あん-かう[安康](名) 異變なきこと。安らか。
(あん-かう[鮟鱇](名) [動]硬鰭類中あんかう科に屬する魚、頭部扁平にして裸皮なり、刺多し、眼は上面に在りて口は甚だ廣く、體色は背部淡褐にして腹部較や淡し、性鈍悧にして游泳拙劣、徐々に匍進す、東北諸國の海に多く產す。
(あん-がう[暗號](名) ふてふ。あひことば。あひず。かくしことば。
(あん-がう[庵號](名) ㊀庵室の名。㊁書齋の名。
あんかう-がた[鮟鱇形](名) あくびがた。
(あんがう-でんしん[暗號電信](名) 隱語又は符牒語を以て記載したる電信。
アン-かけ[餡掛](名) 食品に、くずだまりをかくること。
アンかけ-うどん[餡掛饂飩](名) くずだまりを掛けたるうどん。
アンかけ-そば[餡掛蕎麥](名) くずだまりをかけたる蕎麥。
アンかけ-どうふ[餡掛豆腐](名) くずだまりを掛けたる豆腐。
(あん-がふ[暗合](名) 期せずして物事の相同じきこと。互に相知らずして物事の一致すること。
(あん-かん[安閑](名) ㊀茫然として居ること。㊁無事にくらすこと。身心やすらけきこと。
(あん-き[安危](名) 危きと安きと。
(あん-き[晏起](名) 朝おそく起ること。あさね。
(あん-き[暗記](名) そらんずること。そらおぼえ。
(あん-き[暗鬼](名) ㊀暗所に見ゆる鬼。㊁妄想。
アン-ギヤ[行脚](名) (字の宋音)㊀諸國を巡りあるく僧。ろんすゐ。「ツダ」。㊁轉じて、車馬によらずして徒歩遊歷すること。
(あん-きよ[暗渠](名) 上を覆ひて地上よりは見えざるやうにつくりたる溝渠。
(あん-きよ[闇虚](名) [天]太陽の光線の太陰によりて覆はれたる部分。
(あん-ぐ[暗愚](名) 事理に暗く、おろかなること。
アン-ぐう[行宮](名) (「アン」は、字の宋音)天子行幸して假にとゞまりたまふ宮。「アンざい」。
(あんぐり(副) 茫然自失して、聲えず口をひらくさまにいふ語。あんごり。
アン-くわ[行火](名) (「アン」は、字の宋音)火を入れて手足などを暖むる具。
(あん-くわい[暗晦](名) ㊀くらきこと。やみ。くらがり。㊁かくるゝこと。くらますこと。
(あん-ぐわい[案外](名、副) 思の外。ぞんぐわい。
あんぐわい-もの[案外者](名) 慮外もの。ふとゞきもの。
(あん-くん[暗君](名) おろかなるくんしゆ。
(あん-けら(名) 惘然自失のさまにいふ語。
(あんけら-かん(名) 前條に同じ。
(あん-けん[按驗](名) とりしらべ。ぎんみ。
(あん-けん-さつ[暗劔殺](名) 九星の方位の一、方位は一定せずして、中宮に居る九星の異なるに從ひて變ず、最も凶なる方位にして、これを犯せば、多く生命を喪失する事に遭遇すといふ。
(あん-ご[安居](名) [佛]僧侶の、夏時に遊行を休み、家に籠り居て靜かに業を修すること。
(あん-こう[殷紅](名) 赤黑きこと。
(あん-こう[暗溝](名) 「あんきよ(暗渠)」に同じ。
(あん-こく[暗黑](名) ㊀くらがり。やみ。㊁精神上若しくは生活上に、悲慘又は惡德の存すること。
(あんこく-じだい[暗黑時代](名) 世態の混亂せる時代。文物道德の衰へ腐敗せる時代。罪惡又は戰爭の多き時代。
(あんこく-せん[暗黑線](名) [理]「あんせん」に同じ。
(あんこく-めん[暗黑面](名) 悲慘又は惡德の存在せる方面。
(あんごり(名) あんぐり。
アン-ころ[餡轉](名) あんころもち。
アンころばし-もち[餡轉餅](名) あんころもち。

アンころ-もち[餡轉餅](名) 小片の餅に餡をまぶしたるもの。
(あん-ざ[安坐](名) ㊀安らかに坐ること。㊁あぐらをかくこと。
アン-ざい[行在](名) (「アン」は、字の宋音)「アンぐう」に同じ。
アンざい-しよ[行在所](名) (「アン」は、字の宋音)前條に同じ。
(あん-さつ[暗殺](名) 不意に乘じて、人を殺すこと。やみうち。だましうち。
(あん-さつ[按察](名) 吟味。取り調べ。
(あんさつ-し[按察使](名) 「あぜち」に同じ。
(あん-ざん[暗算](名) 心のうちにて、かずをつもること。めのこざん。むなざん。目算。
(あん-ざん[安產](名) 子を安く產むこと。
アンざん-がん[安山岩](名) [鑛] (「アン」はAndes「アンデス」山岩の義) 火山岩の一種、火山の熔岩の斜長石・角閃石・輝石の主たるものが、內部にて固結せるもの。富士岩。
(あんざん-し[案山子](名) 「かゝし」に同じ。
(あんざん-じゆ[安產樹](名) [植]十字花科に屬する熱帶植物、高さ六七寸、葉形よめなに似る。
(あん-じ[暗示](名) ㊀理由又は意旨を明瞭に顯示せず、擧動・容貌等によりてこれを他人に與ふること。㊁[心]自然的又は人爲的の刺戟によりて生ずる精神的或は身體的の活動を開發する感覺・觀念・知覺。
あん-じ[案](名) かんがへ。志んぱい。
(あん-じち[庵室](名) 次條に同じ。
(あん-じつ[庵室](名) 小さき假りの住家、おもに、僧の住むところ。
(あん-じつ[暗室](名) 密閉して光線の透入せざるやうにつくりたる室。
あんじつ-ランプ[暗室―](名) 暗室內にて寫眞の乾板を處理するときに用ふる「ランプ」、金箔「ブリキ」等にて包み、赤色「ガラス」にて光線を遮ひたるもの。
(あん-じや[暗射](名) 見えざる敵兵の位置を推しはかりて射擊すること。
アン-じや[行者](名) (「アン」は、字の宋音)[佛]寺院の給仕、有髮にして寺に依止す。
(あん-じやう[安詳](名) 靜に步むさま。
(あん-じやく[暗弱](名) 心おろそかにして、身體の弱きこと。
(あんじや-しよく[暗赭色](名) 黑に赤味をおびたる色。
(あんじや-ちづ[暗射地圖](名) 地名を記入せず、輪郭のみをあらはしたる學習用の地圖。白圖。
アンジヤベル(名) (語原不詳、或は「オランダ」語なりといふ)[植]石竹科の多年草、「ヨーロッパ」南部の原產にして我國に舶齎す、莖の高さ一尺乃至三尺、下部に葉をつく、長さ約五寸にして線狀をなし、白色を帶ぶ、夏月花を開く、重瓣にして花瓣は倒卵形なり、色は種々にして香氣あり、觀賞用として庭園に栽培す。
(あん-じゆ[按手](名) 基督教に於て長老が信者の頭に手を按じ、その祝福を祈り、教職に列し、又は聖餐に與る事を得る權利を附與する儀式。
(あん-じゆ[庵主](名) 次條に同じ。
(あん-じゆ[庵主](名) 庵室の主人。
‡あん-じゆ[案主](名) 「あんず」に同じ。
(あん-じゆ[暗誦](名) 「あんしよう」に同じ。
(あん-じよ[晏如](名) やすらか。安泰。
(あん-しよう[暗誦](名) 文章・文句などを、そらに覺えて誦むこと。
(あん-しん[安心](名) ㊀心やすまること。あんど。あんい。㊁[佛]次條に同じ。
(あん-じん[安心](名) [佛]信仰によりて心の歸趣を決定し、一切の苦より解脱して、これに安住すること。
(あんじん-志んによ[安心眞如](名) [佛]安心して平等不變の域に達したること。
(あんじん-めうぎ[安心妙義](名) [佛]全く解脱安心したる至妙の位置。
(あんじん-りつめい[安心立命](名) 信念確立し、身世の安危に處して、何等の疑惑畏怖なきこと。
‡あん-ず[案主](名) (い)中古・檢非違使廳・郡衙・攝關・大將等の政所にありて、その書類を司りし役人。(ろ)鎌倉幕府の政の書類を司りし役人。
アンズ[按司](名) 維新前、琉球の地方の高官。
アンズ[杏子](名) [植](字の宋音)薔薇科に屬する木本、葉は楕圓形或は卵形にして尖り、花は淡紅色にして春開く、果實は梅より大きくして味また少し甘し、核は藥用に供せられ、木材もまた種々の用に供せらる。
あん-ず[案](他、さ變) ㊀かんがふ。おもふ。㊁心配す。志あんに志づむ。
あん-ず[安](自、さ變) 安心す。
あん-ず[安](他、さ變) ㊀安心せしむ。やすんず。㊁志づむ。
アンズ-うめ[杏子梅](名) [植]梅の變種、果實は酸味少なし。
(あん-せう[暗礁](名) [地]海水にかくれて見えざる岩石。かくれいは。
(あん-せい[暗星](名) [天]恒星にして光を發せざるもの。
(あん-せき[暗射](名) 物を見ずにいひあつること。
(あん-せん[暗線](名) [理]「スペクトル」中に現

はる、暗黒なる線、白光が或液體若しくは氣體を通過するとき、特種の色の光これに吸收せらるゝによりて生ず、日光の「スペクトル」には幾多の暗線あり。

(あん-ぜん[安全](名) 恙なきと、安きと。

(あんぜん-とう[安全燈](名) 鑛山などにて、工夫が坑中を照らすに用ふる燈、即ち金網を以て被ひたる提げ「ランプ」にして、金屬は熱の良導體なるを以て、これを熱すれば忽ち其の熱を散散せしめ、反對側に熱氣を及ぼさしめざる故に、此の燈を提げて坑中に入るときは、點火し易き沼氣の如き瓦斯ありとも、内部の火氣外部の沼氣に移らず、ただ内部に潜入せる沼氣のみ點火するを以て、直ちに危險を知りて通知するを得。

[あんぜんとう]

(あんぜん-べん[安全瓣](名) 汽鑵などに設けたる蒸汽排出口、汽鑵の破裂する虞を防ぐために、蒸汽が規定以上の壓力を生じたるときは、此排出口より脱出するを得しむる裝置なり。

(あんぜん-マッチ[安全—](名) 成分に黄燐を加へず、その軸の頭を箱の横にある藥品に摩擦するにあらざれば發火せざる「マッチ」、その軸頭及び箱の横につくる藥品は一定せず、多くは軸頭には鹽酸加里・重「クロム」酸加里・二酸化「マンガン」・酸化鉛・硫黄・鉛丹・「ガラス」粉・松脂・膠等を混ぜ用ひ、箱の横の藥には赤燐・硫化「アンチモニー」・酸化鐵・膠等を混ぜ用ふ。

(あん-そく[安息](名) やすむと。

(あんそく-かう[安息香](名) ㊀【植】齊墩果(エゴノキ)科に屬する喬木、樹皮は茶褐色、葉は長形尖頭、花は小さく實は圓し、「マライ」諸島に産する熱帶植物なり。㊁一種の藥品、安息香樹の樹皮を切傷し、

流出する液を凝結せしめたる香油質の樹脂にして、特異の芳香を有す。

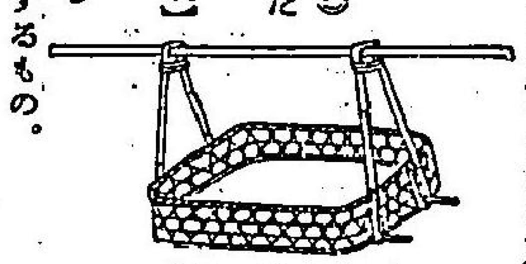
(あんそくかう-さん[安息香酸](名)【化】「次條に同じ。」

(あんそく-さん[安息酸](名)【化】種々の樹脂殊に安息香を徐熱するとき昇華する白色狀の結晶體、これを熱せば蒸汽を發生し、咽喉を刺戟し、咳を起さしむ、醫藥に用ふ。

(あんそく-じつ[安息日](名) 基督教徒が、聖日として俗事を廢し宗教的儀式を行ふ日、多くは日曜日を以てこれに充つれど、土曜日を以てするを正しとす。

あんそく-び[安息日](名) 前條に同じ。

†あんだ[箯輿](名) (編板の義) 板をもて臺として竹にて釣りたる輿。



[あんだ]

(あん-たい[暗體](名) (い)【理】自ら光りを放たざる物體。(ろ)漢詩の法、題の字を用ひずして詩中にその意を含ませて、詠ずるもの。

(あん-たい[安泰](名) あんぜん、やすらか。

アン-だう[行堂](名) (「アン」は、字の宋音) 【佛】寺の雜物、行者の居るところ。

アンダヱ[安陀會](名) (梵語 Antarvasa) 【佛】中宿衣又は下衣と譯す、五條の袈裟。

(あん-たん[暗憺](名) ㊀まっくらがり。㊁ものすごきと。

(あん-ち[安置](名) ㊀やすらかに据うると。すゑおくと。㊁佛像などをまつり納むると。

アンチピリン[安知必林=Antipyrin](名)【化】白色板狀の結晶體、水に溶け易し、止血・鎭痛・

殺菌又は解熱等に用ふれども、大量を用ふれば危險なり。

アンチヘブリン[安知歇貌林=Antifebrin](名)【化】無色無味小板狀の美麗なる結晶體、「アルコール」「エーテル」に溶解す、解熱・鎭痛の作用あれども、大量を用ふれば貧血を生じ危險なり。

アンチモニー[安質母尼=Antimony](名)【鑛】次條に同じ。

アンチモン[Antimon](名)【鑛】脆くして白色の光澤を有する金屬、天然には硫安礦として産す、鉛との合金は活字を作るに用ひらる。

アンチモンくわすゐそ[—化水素=Antimony hydride](名)【化】無色にして不快の臭氣を有する氣體、酸類を分解する金屬と「アンチモン」との合金に稀硫酸を作用せしめて得。

アンチモン-しゆ[—朱](名) 深紅色なる硫化「アンチモン」「ゴム」「ペンキ」の着色料とす。

(あん-ちゆう[暗中](名) やみのうち。

(あん-ぢゆう[安住](名) 安らかに住まふと、又、安んじとゞまると。

(あん-ぢゆう[庵住](名) 庵に住むと。又、其の「人。」

(あんちゆう-ぼさく[暗中摸索](名) 暗中にて物をさぐりもとむると。

(あん-てい[安定](名) ㊀おちつくと。やすらか。㊁やすんずると。㊂【理】重心が物體の底邊の中心にあると。㊃【化】化合物が容易に分解せられざると。

アン-でん[行殿](名) (「アン」は、字の宋音) 「アンぐう」に同じ。

(あん-ど[安堵](名) ㊀居處に安んずると。㊁安心すると。㊂舊知行の地をそのまゝ賜はると。

アンドウ[行燈](名) 「アンドン」に同じ。

あんとく-め[安徳布](名)【植】褐藻類昆布科の海藻、葉は羽狀に分裂し、其の面には不規則なる皺あり、貧民の食料又は肥料等とす。

(あんど-じやう[安堵狀](名) 朝廷・幕府・國司・領主等が人に與へて土地の所有・官職の補任を認めたる文書。

アントラセン[Anthracene](名)【化】「コールタール」中より分餾して得たる無色板狀の結晶體にして、美麗なる藍色の螢光を有し、「ベンゼン」に溶解し、「アルコール」「エーテル」には少しく溶解し、水には溶解せず、「アリザリン」を製するに用ふ。

あんとく-わかめ[安徳若布](名)【植】「あんとくめ」に同じ。

アンドン[行燈](名) (字の宋音) 燈火をともして据ゑおく具。

アンドン-ばかま[行燈袴](名) 襠(マチ)のつかざる袴。

(あん-ない[案内](名) (文案の内容の義) ㊀實情、内實。㊁嚮導、みちびき、てびき。㊂しらせ、通知。㊃留書、先例書。

(あんない-しや[案内者](名) あないをする人。

(あんない-じやう[案内狀](名) 事を知らする狀、通報書、招待狀。

あん-なか[足半](名) あしなか。

アン-ニン[杏仁](名) (字の宋音) 杏子の核。

(あん-ねい[安寧](名) ㊀やすらかなると。平和。㊁社會の人々が共同生存に關する條件を守りて相犯さゞると、即ち、社會の秩序正しく、生命財産等の安全なる狀態をいふ。㊂【倫】倫理學者の一派の稱ふる至善の狀態、人心の完全なる活動をいふ。

あん-ねつせん[暗熱線](名)【理】「せきぐわいせん」に同じ。

あん-ばい[鹽梅](名) ㊀五味を調和すると。㊁程よく物をならぶると。(按排)。㊂ぐあひ、程度。——が-わるい[鹽梅惡] 健康すぐれず、病氣なり。

あんばい-ず[鹽梅酢](名) さんばいず。

アンパイヤ[Umpire](名) 「ベースボール」「ローンテニス」「フートボール」等の競技の勝負を判斷するもの。

あん-ばこ[暗箱](名) 寫眞機械の一部分、内部を黑く塗り、側壁は皮或は布にて伸縮するやうに作る、前壁に「レンズ」を取りつけ、後壁に磨硝子及取枠(トリワク)をはめ得るもの。

(あん-ぱふ[罨法](名) 炎症を消し、充血を去る爲に、身體の患部を溫め、又は冷やす治療法。

アン-パン[餡麪麭](名) 餡を包みたる「パン」。

(あん-ぴ[安否](名) 安らかなると否ざると。

(あん-ぴ[鞍皮](名) 乾したる鮫鰊の皮、料理に用ふ。

(あん-ぶ[鞍部](名)【地】「あん(鞍)」に同じ。

(あん-ぷ[安不](名) 「あんぴ(安否)」に同じ。

(あん-ぷく[按腹](名) 腹に按摩を施すと、筋肉をもみやはらぐるのみならず、更に内部の治療にも及ぼすものとす。

(あんぶん-ひれい[按分比例](名)【數】比例分配。

アンペーア[Ampere](名)【理】電流の單位、一秒につき一「クーロン」の電氣の量を送る電流。

アンペラ(名) (語原不詳) ㊀【植】莎草科に屬する多年生の草本、莖は一尺五寸乃至三尺に達し、ふとゐのに類して直立す、印度諸島等に多く産す。㊁一種の筵、「アンペラ」草の莖にて編みたるもの。

あんぽつ(名) 乘物籠に類せる小さき一種の粗籠。

(あん-ぽん-たん[安本丹](名) ㊀【動】「かさご」に同じ。㊁痴者をののしりていふ語。

(あん-ま[按摩](名) ㊀一種の醫術、身體を或は敲打し或は撫摩し、器械的方法によりて筋肉の緊急を調へ、血液の循環を助けなどすると。もみれうぢ。㊁按摩を業とする者。㊂めくら。

あんま-とり[按摩取](名) 「あんま(二)」に同じ。

〔あんまり[餘](副) 「あまり」に同じ。

(あん-みん[安眠](名) こゝろやすらかにねむると。うまい。やすい。

(あんみん-ばうがい[安眠妨害](名) 夜深けて喧擾をほしいまゝにし、自然に他の安眠をさまたぐると。

(あん-めい[安命](名) 曆のうらなひの一法、卯の日を吉日とするもの。

(あん-めい[闇冥](名) くらがり。やみ。

アンメンドー(名)【植】「アメンドウ」に同じ。

(あん-もく[暗默](名) 外界に明にあらはれざるさま。

アン-もち[餡餅](名) 「アン」をつけたる餅。又、「アン」をつゝみたる餅。

アンモニウム[Ammonium](名)【化】窒素一分子と水素四分子とよりなる基、「アルカリ」金屬と同じく種々の酸基と化合して鹽類を生ず、鹽化「アンモニウム」・硫酸「アンモニウム」の如し。

アンモニウム-みやうばん[—明礬](名)【化】硫酸「アルミニウム」に硫酸「アンモニウム」を加へて得たる白色の結晶體。

アンモニヤ[暗謨尼亞=Ammonia](名)【化】特種の刺戟性の臭氣を有する無色の氣體、鹽化「アンモニウム」に、二倍の生石灰を加へて熱すれば發生す、十分の酸素を得て燃燒し、よく水に溶解す。

アンモニヤ-すゐ[—水=Liquid ammonia](名)【化】「アンモニア」の水溶液、アルカリ性強く、

醫藥及化學上に多く使用せらる。
(あん-もん)［案文］(名) したがきの文書。
(あん-もん)［按問］(名) しらべたづぬること。
(あん-や)［暗夜］(名) やみよ。くらきよ。やみの夜。
(あんやう-じやうど)［安養淨土］(名)【佛】極樂淨土。
(あん-らく)［安樂］(名) こゝろ安くして樂しきこと。
(あんらく-イス)［安樂椅子］(名) 一種の椅子、普通のものよりは大形にして、よりかゝりて前後に動くことを得べき裝置のもの。
(あんらく-じやうど)［安樂淨土］(名)【佛】「極樂淨土」
(あんらく-せかい)［安樂世界］(名)【佛】極樂淨土。
(あん-ゐ)［安慰］(名) なぐさめて安心せさすること。
(あん-をん)［安穩］(名) 安く穩かなること。無事。

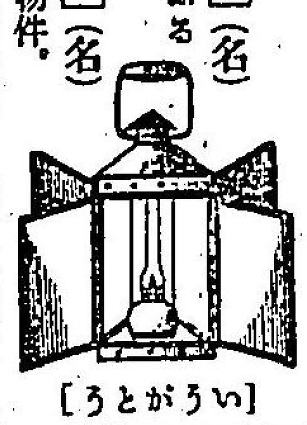
い

い 唇を扁平に開き、舌の前部を高めて發する母音、五十音圖にて、安行第二に位し、伊列の幾・志・知・仁・比・美・以・利・井の韻となる。
廿い［膽］(名)「たんなう」(膽囊)に同じ。
廿い［寢］(名) 寢ること。睡眠。「ーをし寢せ」。
廿い(名) 蜘蛛の巢。「蜘蛛のーかきたるに」。
(い)［意］(名) ㊀心に好むところ。心に望むところ。㊁おもひ。おもはく。かんがへ。㊂志こゝろばせ。ゆゐ。いみ。わけ。㊃私慾。私心。㊄【心】選擇又は決行する心的作用。

(い)［醫］(名) ㊀疾病を治療すること。㊁病を治療することを業とする人。いしや。いし。
(い)［異］(名) ㊀ことなること。ふしぎ。㊁人と異なる說、又は行動。
(い)［易］(名) たやすき事。容易。
(い)［移］(名) 官府又は公共の間往文書、即ち、廻章又は照會狀などをいふ。うつしぶみ。
(い)［匜］(名) 銅製の水注にして支那上古の祭器。
(い)［彝］(名) 支那上古の祭器にして、形は方圓の二種ありて、銅を以つてつくり、左右の把手をつく、水又は酒を盛る。
(い)［螠］(名)【動】棘尾類の動物、體は圓筒狀をなし、海濱の砂泥中に埋沒して生活す。
廿い［五］(數) いつゝ。いつ。
廿い(數) 五十。いそ。
廿い(助) 主格をあらはす弖爾乎波。「毛野の若子ーよ笛吹きのぼる」。
い―(接頭) 語調を整ふるために用ふる語。「ー向る。」
廿い-あづち［射垜］(名) あづち。
い-あ-ふ［射合］(他、は四) 互に矢を射ること。
(い-あん)［怡安］(名) よろこび安心すること。
(い-あんじん)［異安心］(名)【佛】師の道と異なる方法にて安心すること。
(い-い)［易易］(名、副) たやすきさまにいふ語。
(い-い)［猗猗］(名、副) 物事の美しく盛んなるさまにいふ語。
(い-い)［依依］(名、副) 木のしげるさま、たをやかなるさま、又はおもひのあとに殘るさまにいふ語。
(い-い)［怡怡］(名、副) よろこばしくたのしきさまにいふ語。
(いいえ)［否］(感) いゝえ。いな。いゝや。
いい-ぎり［椅］(名) (い)【植】椅科の落葉喬木、幹の高さ四五丈、樹皮は白褐色にして、褐色の斑點あり、葉は長さ四五寸の心臟形にして、鋸齒緣を有し、裏面は白色を呈し、葉柄は長し、五月頃梢頭に複總花を開く、雌雄異株なり、實は赤色にして南天竹に似、鳥に啄食せらる、材は堅牢にして樂器その他の器具を製す。(ゐ)【動】おかまこほろぎ。
(い-いく)［意育］(名)【教】主として意志の發達をはかる教育上の主義。
(いい-だくだく)［唯唯諾諾］(名) 是非の別なく他人の意見に盲從すること。
い-い-づ［射出］(他、だ下二) 家又はものゝ内より外へ矢を射る。
い-い-る［射入］(他、ら下二) 家・城などの内に矢を射る。
いいや［否］(感) いや。いな。いゝえ。
(いう)［優］(名) ㊀すぐれたること。まさりたること。㊁品よきこと。やさしさ。しとやか。㊂ゆたか。ゆるやか。㊃のろきこと。決斷なきこと。
(いう)［悠］(名)「いういう」(悠悠)に同じ。
(いう)［尤］(名) とがめ。
(いう)［尤］(名) 最すぐれたるもの。
(いう)［卣］(名) 支那上古の祭器、口なき土瓶の如き形したるものにして、酒を盛るに用ふ。
(いう-あい)［友愛］(名) 朋友又は兄弟間の愛情。又、其の愛情の深きこと。
(いう-あく)［優渥］(名) なさけめぐみのあつきこと。
(いう-あん)［幽闇］(名) くらがり。やみ。
(いう-い)［有意］(名) ㊀考のあること。下心のあること。㊁【心】意識せること。㊂意識のあること。
(いう-いう)［悠悠］(名、副) ㊀遙るさまにいふ語。㊁いそがざるさま、又はゆるやかなるさまにいふ語。(油油、優優)。㊂時久しきさまにいふ語。㊃はるかにしてかぎりなきさまにいふ語。(幽幽)。

(いう-いう)［優遊］(名、副) ㊀閑暇ありて、心に惡なきさまにいふ語。㊁決斷なきさまにいふ語。
(いういう-かんかん)［悠悠閑閑］(名、副) 物事にいそがざるさまにいふ語。
(いういう-ふだん)［優遊不斷］(名) 因循して決定せざること。
(いうい-こざう)［有意故造］(名)【法】したごころありて、わざと構へてなしたること。
(いうい-はん)［有意犯］(名)【法】法にそむくことを知りつゝ罪を犯したること。
(いう-いん)［誘引］(名) いざなふこと。さそひ。
(いう-いん)［誘因］(名) 或る物事のなりたつやうになる近因。
(いう-いん)［遊印］(名) 文人の用ふる戲印、書畫の落款、賞鑑家の審定等に用ふ。
(いう-う)［友于］(名) 兄弟なかのむつまじきこと。
(いう-うつ)［憂鬱］(名) 氣の晴れやらでむすぼるること。きふさぎ。
(いううつ-びやう)［憂鬱病］(名) 氣のむすぼるゝ病氣の稱にして「ヒステリー」などにいふ。
(いう-えい)［游泳］(名) ㊀およぎ。すゐれん。
(いう-えう)［有要］(名) 役に立つこと。
(いう-えき)［有益］(名) 利益あること。
(いう-えき)［郵驛］(名) しゆくば。しゆくつぎ。
(いう-えき)［誘掖］(名) 人をみちびきをしふること。
(いう-えん)［遊宴］(名) さかもり。
(いう-えん)［優艷］(名) うるはしきこと。つやゝか。
(いう-かい)［幽界］(名) あの世。よみぢ。めいど。
(いう-かい)［誘拐］(名) かどはかし。
(いう-がい)［有害］(名) 害あること。害となるべきこと。
(いうがい-くわしや)［有蓋貨車］(名) 屋根のある貨車。

(いうかい-ざい)［誘拐罪］(名)【法】未成年者を略取し又は誘拐して、自ら藏匿し、若しくは他人に交付したる罪。
(いう-かう)［有効］(名) しるしあること。きゝめあること。
(いうかう-すうじ)［有効數字］(名)【數】1より9までの數字の稱、0と區別するために名づく。
(いう-かく)［優角］(名)【數】共軛(キヨウヤク)角中の大いなるもの。
(いう-かく)［幽客］(名) ㊀世を避けて閑居せる人。㊁【植】蘭。
(いう-がく)［遊學］(名) 諸國を遊歷して、學問すること。遠方に行きて、修業すること。
(いうか-しようけん)［有價證券］(名)【經】權利の利用に就き、その占有を必要とする證券。時價によりて授受せらるゝ證券。例せば、手形・公債・株券などの如きもの。
(いうが-とう)［誘蛾燈］(名) 害蟲を誘ひ殺す爲に用ふる燈火。


［いうがとう］

(いうか-ぶつ)［有價物］(名) 金錢上の價格を有する物件。
(いう-き)［有機］(名) 生活機能を具備し、生活力を有するものなること。內部より發展して生活の目的を遂ぐるものなること。
(いう-き)［幽鬼］(名) 死者の靈。亡靈。亡魂。
(いう-ぎ)［友誼］(名) 朋友間の情誼。とものよしみ。
(いう-ぎ)［遊戲］(名) ㊀あそびたはむるゝこと。たはむれ。㊁【教】一定の方法に從ふ興味ある運動。
(いう-きう)［悠久］(名) はなはだ久しきこと。年の久しく經たること。

(いうき-おん)［有氣音］(名) 音の一層強き氣息に伴はれて出でたるもの。
(いうき-がん)［有機岩］(名)【鑛】枯死したる有機體より成りたる岩石、白堊・硅藻土・石炭・金剛石等これなり。
(いうき-かんかく)［有機感覺］(名)【心】身體內部の刺戟によりて生ずる感覺。
(いうき-くわうぶつ)［有機鑛物］(名)【鑛】「いうきがん」。
(いうき-くわがく)［有機化學］(名)【化】有機化合物につきて研究する科學。
(いうき-くわがふぶつ)［有機化合物］(名)【化】炭素を主成分とする化合物、多くは炭素・水素・酸素よりなりて窒素を含むもの、又、炭素・水素よりなるものもあり、以前は生活體內に存する物質は、生活力の作用によりてのみ生じ、人工にては製することを能はずと信じ、かゝる物質のみを有機化合物と稱したりしが、動物の排出せる尿素が人工によりて製せらるゝことの發見せられし以來、有機・無機の界は存在せず、たゞ便宜的に設くることとなれり。
(いうき-けい)［有期刑］(名)【法】一定の時間を限りたる刑罰。
(いうき-こうさい)［有期公債］(名)【經】償還の期限を豫定したる公債。永久公債の對。
(いうき-こくさい)［有期國債］(名)【經】國家より發行する有期公債。
(いうき-さん)［有機酸］(名)【化】有機物より製したる酸、蟻酸・酒石酸・乳酸・安息酸の如きこれなり、現今は無機物よりもこれを製することを得。
(いうき-たい)［有機體］(名) 有機物の組織體にして、生活機能を具備するもの。生活體。有生物。
(いうき-てき)［有機的］(名) 個體各個は獨立すれ

ども、その相互の關係は有機體の如くなると。國家・社會等の狀態これなり。
(いうきてき-だんたい)[有機的團體](名) 分子各個の關係が有機的なる團體。
(いうき-ちけい)[有期徒刑](名)[法] 十二年以上十五年以下の徒刑。
(いうき-ねんきん)[有期年金](名)[經] 一定の期間にのみ拂ひ出す年金。
(いうき-ひれう)[有機肥料](名) 動植物の死屍よりとれる肥料。「の對」
(いうき-ぶつ)[有機物](名) 生活體の組成分、有機化合物。
(いうき-ふりゐん)[有給吏員](名)[法] 自治體の吏員の給料を受くるもの。
(いうきやく-こ)[有脚湖](名)[地] 水の流出すべき河川を有する湖。
(いうき-ゆうけい)[優弓形](名)[數] 優弧にて圍まれたる弓形。
(いうきよ)[幽居](名) 靜かなる地のすまひ。
(いうぎよ)[遊魚](名) 泳げる魚。
(いうきよう)[遊興](名) 遊び興ずると。
(いうき-りうけい)[有期流刑](名)[法] 舊刑法に定めたる重罪の主刑の一、十二年以上十五年以下の流刑。
(いうきん-るゐ)[游禽類](名)[動]「すゐきんるゐ」に同じ。
(いうく)[憂懼](名) 憂ひおそるると。
(いうくわ)[幽花](名) おくゆかしき花。
(いうくわく)[遊郭](名) 娼妓置屋貸座敷を許されたる一定の區劃。
(いうくわん)[遊宦](名) 地方にて官職につくと。
(いうくわん)[遊觀](名) ❶遊覽。❷ものみ。

(いうくん)[遊君](名) いうぢよ。娼妓。
(いうぐん)[遊軍](名) 戰列外にありて、時の勢を見て、味方を援護する兵。
(いうげ)[遊戲](名)「いうぎ(遊戲)」に同じ。
(いうけい)[有形](名) 形をそなへたるもの。かたちの見得べきもの。無形の對。
(いうげい)[遊藝](名) あそびに屬する藝能、即ち、香茶の湯・衣粧・音樂等。
(いうけい-ざいさん)[有形財產](名)[經] 信用に基く無形財產に對して、貨幣・商品等の如き形體ある財產の稱。有形の富。
(いうけい-しほん)[有形資本](名)[經] 一定の價格を有する資本、即ち、商品・貨幣・土地・建築物の如きもの。無形資本の對。
(いうげい-ザンマイ)[遊藝三昧](名) 遊藝にふけりて、他の事を顧みぬと。
(いうけい-にん)[有形人](名)[法] 自然人の稱。無形人なる法人の對。
(いうげき)[遊擊](名) 豫め攻擊すべき敵を定めおかずして、臨機應變に突擊すると。
(いうげき-たい)[遊擊隊](名) 敵の背面又は側面にありて、その交通を遮斷し、軍資を損害し、情況をさぐる部隊。
(いうげつ)[由蘖](名) ひこばへ。
(いうげん)[幽玄](名) 深くして、容易に探り知るべからざると。「險」
(いうげん)[莠言](名) 價値なき議論。譏れる議論。
(いうげん)[遊言](名) 事實無根の風說。
(いうげん)[有限](名) かぎりあると。
(いうげん-くわじよ)[有限花序](名)[植] 花莖の尖端にある花先づ開き、順次其下部の花の開き行く花序。繡毬花・あぢさゐの花の如きはこれなり。

(いうげん-すう)[有限數](名)[數] 數ふるとを得べき數。無限大・無限小の對。
(いうげん-せきにん)[有限責任](名)[經] 會社の債務に對する會員の責任は、其の出資額に限るものなると。
(いうげん-ちよくせん)[有限直線](名)[數] 指定したる部分の間の直線。
(いうこ)[優弧](名)[數] 共軛弧(キヤウヤクコ)の中、大なるもの。「のおほ」
(いうこう)[有功](名) てがらのあると。りえきのあると。
(いうこう-しやうはい)[有功賞牌](名) 博覽會品評會などに出品したる物品が、世上に利益を與ふるものと認められたるとき、官より與ふる賞牌。
(いうこう-せい)[有孔性](名)[物] 物質の有する性質の一、即ち、物質が無數の小孔を有すると。固體は液體・氣體を吸收し、或は固體が液體に溶解するは、其小孔に潜入するが故なり。
(いうこう-ちゆう)[有孔蟲](名)[動] アミーバに近き下等動物、體は原形質の微塊にして、美麗なる石灰質の介殼を有し、數房に分れ、各房の間に細孔あり、介殼にも又多數の細孔あり、これより僞足を出して食物を取る、其の生殖は體質の發外に芽生するに因る。
(いうこく)[幽谷](名) 深き谷。山奥の谷。
(いうこく)[憂國](名) 國家の事を憂慮すると。
(いうこん)[幽魂](名) 死したる人の靈魂。なきたま。
(いうざい)[有罪](名) 罪あると。
(いうざい-はさん)[有罪破產](名)[法] 破產宣告を受けたる債務者が、支拂停止又は破產宣告の前後を

問はず、不正の執務を行爲し、又は財產の隱匿・毀棄の僞造・變造等の詐僞行爲ありたる場合の稱。
(いうし)[幽思](名) ふかきおもひ。しづかなる思ひ。
(いうし)[遊子](名) 旅路にあるもの。「たびびと」
(いうし)[遊絲](名)「かげろふ」に同じ。
(いうし)[有司](名) つかさびと。官吏。役人。
(いうし)[有志](名) ❶或る事にたづさはらんとする志のあると。❷有志者。
(いうし)[猶子](名) ❶兄弟の子。❷人の子を己の子と同樣にみなしたるもの。"猶子の如く"家督を讓るともなく、義理もなし。子分。
(いうじ)[有事](名) 事變のあると。
(いうしう)[憂愁](名) 凶事を豫想して氣がはれず、心にうれふると。「幽愁」
(いうし-しや)[有志者](名) 或る計畫に加はらんとする志のある人。
(いうしやう)[優賞](名) ❶厚くほむると。❷厚きほうび。
(いうしやう)[熊掌](名) 熊の足の裏、甘くして味美なり、支那人は好んでこれを食す。
(いうじやう)[友情](名) 朋友間の相愛の情。「友誼」
(いうしやう-けいやく)[有償契約](名)[法] 當事者雙方が利益を受くる契約。
(いうしやく-ぎゐん)[有爵議員](名) 貴族院議員にして爵位を有するもの。
(いうしゆ)[遊手](名) 何をなすともなしに、衣食して居ると。又、其の人。「ぶ」
(いうしゆう)[有終](名) 物事を完全になしとぐると。
(いうしゆう)[有衆](名) 人民。くにたみ。
(いうしゆ-ぶつ)[有主物](名)[法] 確定せる所有主ある物。
(いうしよ)[郵書](名) 郵便にて發送する書狀。

(いうしよ)[由緒](名) 傳來のわけ。いはれ。
(いうしよ)[遊所](名) 色ざと。遊郭。
(いうじよ)[宥恕](名) ❶寬大に取り扱ふと。ゆるして責めざると。❷[法] 減刑の一、犯罪の要件はことごとく具備すれど、犯人の情狀に宥恕して刑罰を減輕すると。法律上の規定に基づくものにして、裁判上の任意のものにあらず、例せば、未成年者の犯罪の如きこれなり。
(いうしよう)[優勝](名) すぐれたると。競技に勝ちたると。
(いうしよう-き)[優勝旗](名) 競技に勝ちたるものに授けて其の名譽を表はす旗。
(いうしよう-れつぱい)[優勝劣敗](名) 強者榮えて弱者滅ぶると。優れたる個係のあるものは劣りたるものよりも、遂に勝を制すると。
(いうしよく)[遊食](名) 何事をもなすことなく、衣食して居ると。
(いうしよく)[有識](名) 古實などの事を取り調ぶる學問。いうそく。(有職、有識)
(いうしよく-か)[有識家](名) 古實の事をよく識りたる人。
(いうしよく-じんしゆ)[有色人種](名) 白人種に對して皮膚の色の黄・銅・黒色などなる人種。
(いうじよ-げんけい)[宥恕減輕](名)[法]「いうじよ(宥恕)❷」に同じ。
(いうじん)[友人](名) ともだち。ほういう。
(いうじん)[幽人](名) しづかなる地に世を避けてすまひする人。
(いうしん-ろん)[有神論](名)[哲] 宇宙の根底に人格を有する絶對無限の者の存在せりとなす論。
(いう-す)[有す](他,サ變) 持つ。
(いう-す)[幽す](他,サ變) おしこむ。
(いうすゐ)[幽邃](名) 山色などの、おくふかく

して靜かなると。
(いうすゐ-るゐ)[遊水類](名)[動] 鳥類の一目、水邊に棲息し、常に水面又は水中に游泳して、魚類を捕へ食す、脚短く趾間に蹼(みづかき)を有し、步行甚だ拙し、がんかも等の類これなり。
(いうせい)[遊星](名)[天] 太陽の周圍を各自の軌道に循ひて周行する星、其の主なるものを太陽よりの距離の順に列擧すれば、水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星これなり、其の他、火・木二星の間に散在する七百餘個の小さき遊星あり、遊星は自ら光りを放たず、太陽の光りを受けて輝くものなり、行星。惑星。
(いうせい)[優勢](名) 他よりすぐれたる勢。盛んなる勢。
(いうせい)[幽棲](名) 世をはなれたる靜かなるところに住むと。
(いうせい)[有生](名) 生活をたもつと。
(いうせい)[疣贅](名) ❶こぶ。❷むだもの。
(いうぜい)[遊說](名) 四方に說きまはると。
(いうぜい)[郵稅](名)「いうびんれう」に同じ。
(いうせい-おん)[有聲音](名)[文法] 聲帶の振動を伴ひて發せらるゝ音、母音及び g.d.b.z.j.m.n.l.r 等の子音は即ちこれなり。
(いうせい-せいしよく)[有性生殖](名) 雌性・雄性の各異なりたる個體によりて、生殖作用をなすと。卵と精子とが、合一して新しき個體を成すと。
(いうせい-ぶつ)[有生物](名) 自ら生活をたもつもの、即ち、動植物。
(いうぜん)[悠然](名,副) おちつきていそがざるさま。ゆるゆる。
(いうぜん)[油然](名,副) 雲の涌くさま。又は

すみ得ざるさまにいふ語。

(いう-ぜん)［友禪］(名)「いうぜんぞめ」に同じ。

いうぜん-あふぎ［友禪扇］(名) 友禪風の繪を畫きたる扇。

いうぜん-カナキン［友禪金巾］(名) 友禪染の金巾。

(いうせん-かぶ)［優先株］(名)【經】一種の優先權ある株、株式會社が資本增加の際に發行するもの。

(いうせん-けん)［優先權］(名)【法】或る物に對して、後に物權を得たるものに先んじ、且常に普通の債權者に先んじて、權利を實行し得ること。

いうぜん-ぞめ［友禪染］(名) 染め方の名、地質の緻密なる絹布に、種々の染料を用ひて、人物・花鳥等の模樣を鮮明に染め出すものにして、京都の畫工梅九(或は宮崎)友禪の創始にかゝる。

いうぜん-ちりめん［友禪縮緬］(名) 友禪染の縮緬。

いうせん-やど［遊船宿］(名) 川岸にありて遊興を主とする船を貸す家。

いうぜん-ゑ［友禪繪］(名) 友禪風の繪。

(いうそう-し)［游走子］(名)【植】胞子の一にして雌雄の性を有せず、その體は膜を破らざる原形質にして、水中を游泳し、他の物體に附着して後、發生す、下等植物に多し。

(いう-そく)［有識］(名)「いうしよく」に同じ。

(いう-そこ)［有識］(名)「いうしよく」に同じ。

(いう-そ-ち)［有租地］(名)【法】地租を賦課せらるべき土地。

(いう-だ)［遊惰］(名) なまけあそぶこと。

(いう-たい)［優待］(名) 厚く人をもてなすこと。

(いうたい-けん)［優待券］(名) それをもてる人には特に優待する入場券。

(いうたい-じどうし)［有對自動詞］(名)【文法】

自動詞の一種、その動作の標準となる語を必要とするもの。

(いうたい-どうさん)［有體動產］(名)【法】質體を備ふる動產。

(いうたい-ぶつ)［有體物］(名)【法】吾人の感官に觸接するものにして、權利の目的となり得べき物。

(いうたい-るゐ)［有袋類］(名)【動】哺乳類中、無胎盤類に屬する一目、牝は腹部に一箇の囊を有し、幼兒は極めて小さきとき、其の囊中に哺育せらる、濠洲に多く產す、「カンガルー」は其の一例なり。

(いう-たう)［遊蕩］(名) 遊びに耽(フケ)ること。はうたう。だうらく。

(いう-だう)［誘導］(名) ㊀いざなひさそふこと。みちびき。㊁【理】電氣・磁氣が電界・磁界內の物體に及ぼす作用。

(いう-だう)［有道］(名) 德行のある人。

(いう-だう)［遊道］(名) まじはり。つきあひ。

(いうだう-たい)［遊導體］(名)【化】一個の基中の或る原子を、他の原子又は原子團によりて交換して生ずる物體。

(いう-ちやう)［優長］(名) ㊀おちつきてあわてざること。㊁氣の長きこと。㊂物事にたけたること。

(いう-ぢよ)［遊女］(名) 男子の宴席に侍し、又淫を賣る女。娼妓。

(いう-ちよう)［優寵］(名) 他のものよりも、すぐれて寵愛すること。

いうぢよ-や［遊女屋］(名) 遊女をかゝへおく家。ぢよらうや。

(い-うつ)［伊鬱］(名) うつ〳〵してむしあつきこと。

(いう-てい)［友悌］(名) 兄弟の間の睦じきこと。

(いう-てい)［遊偵］(名) まはしもの。

(いう-てい)［遊底］(名) 小銃の腔底にありて圓錐形をなせるもの。中に擊針を藏す。

(いう-てい)［遊艇］(名) あそびぶね。ゆさんぶね。

(いう-てい)［郵亭］(名) しゆくば。

(いうてい-るゐ)［有蹄類］(名)【動】哺乳類に屬する一目、凡て大形の食草獸にして、四肢は迅走に適し、各肢一二の趾を有するのみ、爪は蹄をなす、馬・牛などの類これなり。

(いう-でん)［郵傳］(名) しゆくつぎ。

(いう-と)［幽都］(名) よみぢ。

(いう-とう)［優等］(名) 他にすぐれたること。拔群。

(いうどう-くわう)［黝銅鑛］(名)【鑛】光澤強き黑灰色の鑛物、四面體の結晶をなし、成分は主として銀銅よりなる。

(いうどう-ぐん)［遊動軍］(名) 要塞防禦の際、敵の攻圍を防碍する爲、要塞外に出て、動作する部隊。

(いう-とく)［有德］(名) 德行のある人。

(いうどく-しよくぶつ)［有毒植物］(名)【植】毒性を有する植物。

(いうはい-しゆし)［有胚種子］(名)【植】その內部に胚と胚乳とを備ふる種子。

(いうはい-るゐ)［有肺類］(名)【動】軟體動物中腹足類に屬する一目、螺旋殼を有すといへど突起なし、時には全く無殼のものもあり、主として陸上或は淡水に產し、肺を以て空氣を呼吸す、雌雄同體なり、蝸牛・なめくぢ等これなり。

(いう-はう)［友邦］(名) 常に親しき交ある國。

(いうはう-せき)［黝方石］(名)【鑛】火山岩の合分として出づる白色又は灰色の鑛物、その主成分は硅酸なり。

いうはう-ソウ［遊方僧］(名)「あんぎやソウ」に同じ。

(いう-ひ)［優比］(名)【數】前項が後項より大なる比。

(いう-び)［優美］(名) 優にうつくしきこと、品よくけだかきこと。みやびやか。やさしさ。あいらしさ。

(いう-ひつ)［右筆］(名) 貴人の傍に侍りて、物を書くことを司る書吏。

(いうひ-りんけい)［有皮鱗莖］(名)【植】薄き膜にて被はれたる鱗莖。

(いうび-るゐ)［有尾類］(名)【動】兩棲類に屬する一目、生長の後は、大なる尾を有し水中を游泳す、肺を具すれど、頗る不完全にして鰓に總狀をなすのみ、四肢短小なるにより、陸上にては運動甚だ鈍し、ゐもり・さんせううを等これなり。

(いう-ひん)［遊牝］(名) 獸類の交尾すること。

(いう-びん)［郵便］(名) 公共の通信を取り扱ふ業務、信書其の他一定の物品を集配遞送するものにして、現今の制度にては、遞信省の管理に屬す。

いうびん-かはせ［郵便爲替］(名) 郵便局の爲替事務によりてなす送金の方法、金額は五十圓以下に限られ、通常爲替・小爲替及び電信爲替の三種あり、現金を郵便局に拂ひ込み、其の額に對する爲替證券を受け取りて先方へ送附す、先方はこれによりて、通常爲替及び電信爲替は指定の郵便局にて、證券引き換へに現金を受け取ることを得。

いうびん-かはせ-けん［郵便爲替券］(名) 郵便爲替の證券、現金拂ひ込みに對して、其の爲替取り扱ひの郵便局の發せるもの。

いうびん-かはせ-しようしよ［郵便爲替證書］(名) 郵便爲替券。

(いうびん-きよく)［郵便局］(名) 郵便物の遞送・集配及郵便貯金・郵便爲替等をつかさどる局。

いうびん-きって［郵便切手］(名) 郵稅拂ひ濟の證として郵便物に貼用するもの。

(いうびん-きんせいひん)［郵便禁制品］(名)【法】郵便物として差出すことを禁ぜられ居る物品。

(いうびん-しふはいにん)［郵便集配人］(名) 郵便物を各所の郵便函より取りあつめ、又、到達せし郵便物をそれ〴〵へ配達する使丁。

(いうびん-せん)［郵便船］(名) 郵便物を遞送し、かねて航海中は、船中にて郵便事務を取り扱ふ船。

(いうびん-ちよきん)［郵便貯金］(名) 郵便局の取り扱ふ貯金。

いうびん-ばこ［郵便函］(名) 郵便物を投入するために各處に設けある函。「ポスト」。

(いうびん-ぶつ)［郵便物］(名) 郵便によりて遞送する信書及び其の他の物品。

いうびん-ふりかへ-ちよきん［郵便振替貯金］(名) 振替貯金。

(いうびん-れう)［郵便料］(名) 郵便物の遞送に對する賃錢。

(いうふ-かん)［有夫姦］(名)【法】夫ある婦人が、夫にあらざる他の男子と姦通すること。

(いう-ふく)［有福］(名) 財產に富みて家のゆたかなること。

(いう-ぶつ)［尤物］(名) ㊀すぐれたるもの。㊁美しき婦人。美女。

(いう-ふん)［憂憤］(名) 世のさまを愁ひていきどほること。

(いう-ぶん)［右文］(名) 文事を尊ぶこと。

(いうふん-るゐ)［有吻類］(名)【動】昆蟲の一目、長く抽出したる吻あるもの、以て物體を刺し、その液を吸引するに便す。

(いう-へい)［幽閉］(名) ㊀とぢふさぐこと。㊁おしこめ。

(いう-ほ)［遊步］(名) そゞろあるき。さんぽ。

(いう-ぼく)［遊牧］(名) 牧畜を業とし、水草を逐ひて居を移すこと。

(いうほ-ぢやう)［遊步場］(名) うんどうば。

(いう-みん)［遊民］(名) なすこともなく遊び居る人民。

(いう-む)［有無］(名) 有ると無きと。

(いう-めい)［幽冥］(名) ㊀かすか。くらがり。ほのか。やみ。㊁よみぢ。

(いう-めい)［幽明］(名) 現世と來世と。

(いう-めい)［有名］(名) 名の高きこと。

(いうめい-むじつ)［有名無實］(名) 名ばかりにして、それに副(ソ)ふ實なきこと。

(いう-めん)［宥免］(名) 罪咎をなだめゆるすこと。

(いう-もん)［憂悶］(名) 心配してもだゆること。

(いう-もん)［幽門］(名)【生】胃の右端、腸に通ずる門戶。

(いう-や)［遊冶］(名) あそびにふけり、容貌のみをつくろひかざること。

(いう-やう)［悠揚］(名) かすかに遠方に見ゆること。

(いうや-らう)［游冶郎］(名) 放蕩もの。やさをとこ。だうらくもの。

(いう-よ)［有餘］(名) あまりあること。

(いう-よ)［猶豫］(名) ㊀疑惑して決せざること。ためらふこと。㊁時日を延ばすこと。

(いう-よう)［有用］(名) 役に立つこと。用をなすこと。

(いうよう-かかく)［有用價格］(名)【經】或る物の價格をこれを得んと欲する人を本として定めたるもの、例せば、藥品の如きもの。

(いうよう-しよくぶつ)［有用植物］(名)【植】人類に有益なる植物、稻・麥・梨・松の如し。

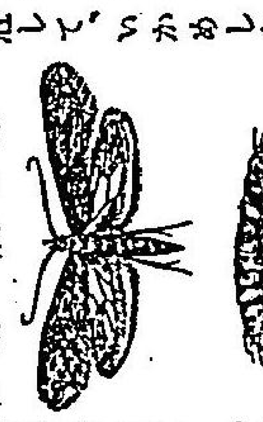
(いう-らく)［遊樂］(名) 遊びたのしむこと。遊びまはること。

(いう-らん)［遊覽］(名) 遊びながらの見物。

(いう-り)［遊離］(名) ㊀分離すること。㊁【化】單體が他と化合せずして存在すること、化合物が單體に分離すること。

(いう-り [遊里](名) いろざと。遊郭。
(いうりくわ-すうすう [有理化乘數](名) 【數】無理式に乘じて、これを有理式となす數。
(いうり-さいばう [遊離細胞](名) 【植】組織をなさずして遊離したれども、獨立して生活せざる細胞、花粉・胞子等これなり。
(いうり-しき [有理式](名) 【數】根號を含まざる代數式。無理式の對。
(いうり-すう [有理數](名) 【數】整數又は分數の稱。無理數の對。
(いう-りよ [憂慮](名) くらう。心配。
(いう-りよく [有力](名) 力あること。勢ひあること。
(いう-れい [幽靈](名) ❶死者の靈。亡魂。 ❷死者の姿を現はしたるもの。
いうれい-づら [幽靈面](名) 幽靈の如く青くやせおとろへたるかほ。
いうれい-び [幽靈火](名) おにび。
(いうれう-いうびんぶつ [有料郵便物](名) 料金の支拂を要する通常郵便物。
いうれう-かしつけ [有料貸附](名) 【法】料金又は報酬を得て金錢物品を貸しつくること。
(いうれう-しよう [有料使用](名) 【法】料金又は報酬を拂ひて、他人又は他人の所有物を使用すること。
(いう-れき [遊歷](名) 諸國をめぐりあるくこと。
(いう-れつ [優劣](名) まさることおとること。
(いう-れふ [遊獵](名) 山林をあそびめぐりて、獵すること。
(いう-わく [誘惑](名) いざなひまどはすこと。惡道にみちびくこと。惡計におとしいるゝこと。
(いう-ゐ [有爲](名) 役に立つこと。才能あること。

(いえ [否](感) いゝえ。あらず。
(い-えき [怡懌](名) よろこぶこと。
(い-えつ [怡悅](名) よろこぶこと。
い-おと-す [射落](他、さ四) 上にあるものを射て落す。
イオン [Ion](名) ❶【理】電解物の電流によりて解離したる各部分。 ❷【化】溶液中に存在する獨立成分。
い-おんびん [伊音便](名) 【文法】音便の一種、き・しなどの音の轉じていとなるもの。
いか [烏賊](名) 【動】二鰓類に屬する軟體動物、十腕手を具し、中二本は長し、軀幹の側縁は多少扁平に擴張して鰭狀をなす、背部に、石灰質の甲殼を藏す、淋蘆なり。 ――-の-かふ [烏賊甲] 烏賊に藏せる石灰質の甲殼、色白くして齒磨粉の材料となす。 ――-の-くろみ [烏賊黑味](名) いかのすみ。 ――-の-すみ [烏賊墨](名) 烏賊の體内水管の下に在る嚢の内に藏する紫黑色の液。
いか [凧](名) いかのぼり。
(い-か [衣架](名) いかう。みそかけ。
(い-か [以下](名) これより下。これから後。
(い-か [醫家](名) いしや。醫師。
†い-か [五十日](名) 小兒生れて五十日めに當る「日。
いか― [厳](接頭) 或語に冠して、いかめしき意を表はす語。
いが [毬](名) 果の實の外部を包める殼斗、總苞の成長せしものにして、外面に長刺密生す。
(い-が [衣蛾](名) 【動】鱗翅科の蛾、體二分ばかりにして、褐色を呈し、前翅は灰黃色に暗褐色の紋あり、後翅は淡灰白色、幼蟲は約三分ばかりにして白色を呈し、衣服・毛布にありてこれを害す。



[が い]

(いが-いが-し [いがいがし](形、二) 甚だ燥(イラ)し。
(い-かう [衣桁](名) 着物を掛けおく具。いか。
(い-かう [衣香](名) 衣服にそみたる香氣。
(い-かう [異香](名) 普通ならぬ好き香氣。
(い-かう [意向](名) ❶こゝろのおもむく所。こゝろばせ。 ❷【倫】豫想したる行爲の結果。
(い-かう [以降](名) それから後。以來。
(い-かう [倚排](名) よりかゝること。たよること。
(い-かう [移項](名) 【數】等式の一邊にある項を、符號を更へて他邊に移すこと。
†い-かう [一向](名) いつかう。
いか-が [如何](副) どのやうに。どんなに。
いか-かご [烏賊籠](名) 烏賊を取る籠、鐘の如き形をなし、これを海底に沈め、烏賊が産卵する爲に集りたるとき、引上げて捕獲す。
いかがは-し [いかがはし][如何](形、二) ❶疑はし。疑はし。 ❷思はし。みだりがはし。
いが-がやつり [毬莎草](名) 【植】莎草科の一年草、莖は三稜にして叢生し、直立して五六寸より尺餘に及ぶ、葉は短く、花は繖形花序をなす、琉球・臺灣・その他熱帶地方に産す。
†い-がかり [忌懸](名) 五親の喪に入れること。
いかき [笊](名) 竹を以てつくりたる籠。
‡い-かき [網結](名) 蜘蛛の巢を結ぶこと。
†い-がき [忌垣](名) いみがき。
(い-かく [異客](名) ❶外國より來れる人。 ❷異郷に客となれる人。
(い-かく [衣閣](名) 【佛】禪家にて、法衣を藏し、又はこれを管ることろ。

い-かく [射掛](他、か下二) 向ひて矢を放つ。
い-かく [沃懸](他、か下二) そゝぎかく。
(い-がく [異學](名) 主義を異にしたる學問。
(い-がく [醫學](名) 醫療の術を研究する科學。
(い-がくかう [醫學校](名) 醫學及び醫術を教授する學校。
いが-くさ [毬草](名) 【植】莎草(カヤツリ)科の草本、莖は密生して直立し、高さ四五寸より二尺に及び、三稜にして平滑なり、葉は線狀にして莖よりも短く、梢頭に茶褐色の繖房花を密生す。
いが-くり [毬栗](名) いがに包まれたる栗實。
いがくり-あたま [毬栗頭](名) こはき毛を短く刈りたる頭。
い-かけ [沃懸](名) いかけぢ。
いかけ-ぢ [沃懸地](名) 漆塗りの上に、金粉又は銀粉をまきかけたるもの。
い-かけ [鑄掛](名) 銅器・鐵器などのわれめに、とろかしたる銅鐵をそゝぎかけて、接(ツ)ぎあはすること。(團)。
いか-さうめん [烏賊索麪](名) 烏賊を細く索麪の如く切りたるもの。
いか-さま [如何樣](名) 其の物らしき形をまなること。にせ。まがひ。
いか-さま [如何樣](副) ❶なるほど。まことに。いかにも。 ❷どのやうに。いかやうに。
いかさま-し [如何樣師](名) さぎし。
いかさま-だち [如何樣立](名) 角力にて敵の壁をかけて立ちあがりたるとき、これに應ぜず、敵の力の拔けたるを見はからひて、急に立ちて勝負せんとすること。
いかさま-もの [如何樣者](名) 某國のうたが「はしきもの。

い-かし [嚴](形、一) ❶いかめし。嚴重なり。 ❷あらし。たけし。 ❸はなはだし。ふとし。おほし。 ❹たいさうなり。
い-か-す [活](他、さ四) ❶蘇生せしむ。よみがへらす。 ❷助けて生命を全うせしむ。 ❸殺さずにおく。 ❹活用す。
いかだ [筏](名) 竹木をあみて、水上にうかぶるもの。
い-がた [鑄型](名) 金屬の器を鑄る模型、多くは土を用ひて、其の中に鑄るべき器の形を空虚につくり、これに鎔かしたる金屬をそゝぎて器を作る。
†いが-たうめ [伊賀專女](名) ❶【動】狐の異名。 ❷たばかること。
いかた-だび (名) いはたおび。
いかだ-がた [筏形](名) 竹製の釣花瓶、長さ三尺ばかりの竹の一部を長圓形に切りぬき、横たへて釣りたるもの。
いかだ-ごばう [筏牛蒡](名) 一種の料理、牛蒡をたゝきて筏の如くなしたるもの。
いかだ-なます [筏膾](名) 料理の一種、鮎を膾とし、柳の葉を筏の如くならべたるもの。
いかだ-ばり [筏張](名) 床板などの張り方、板の繼手を順々に送りて筏の如くに張りたるもの。
いかつ-し [嚴](形、一) いかめしくあり。
いか-づち [雷](名) なるかみ。かみなり。
いか-で [爭](副) ❶いかにして。どうして。なんとして。 ❷何とかして。どうぞ。なにとぞ。
いかで-か [爭](副) いかで。
いかな-いかな (副) どうしてどうして。なんでふ。
いか-なご [鮊子](名) 【動】軟鰭類中いかなご科に屬する小魚、體狹長にして全身細鱗を以て被はれ、鱗は微小なり、體は稚小なる中は白色なれど、成長すれば淡褐色となる、我國の近海至る所なれど、殊に西海に多し。(鮊魚子、玉筋魚)。
いかなご-じやうゆ [鮊子醬油](名) 鮊子を鹽漬にし、百日餘にして殆ど分解したるところを紙にて濾過し、これを煮て生じたる液、その用法普通の醬油と同じ。
いか-に [如何](副) どのやうに。どんなに。どれ「ほど。
いか-のぼり [凧](名) 小兒の玩弄物、竹を骨とし、これに紙を張り、絲にてつりを取り、風の勢によりて空中に揚ぐるもの、たこ・いか・はた・たつ等地方によりて種々の稱呼あり。(風箏、紙鳶)。
いが-ばかま [伊賀袴](名) 裾をくゝりたる袴。たちつけ。
いか-ばかり [如何計](副) どのくらゐに。どれ「ほどに。
(い-か-はんさう [衣架飯囊](名) 衣服を着、物を食ふのみにて他に能なきものを嘲りていふ語。
い-がひ [貽貝](名) 【動】異柱類中いがひ科に屬する貝、介殼は不等にして長き三角形をなし、後方圓し、外面黑色にして内面は眞珠色を呈す、我國東海・内海・西海等に多く産す。
い-かへ-す [射返](他、さ四) ❶矢を射かけて、敵をしりぞく。 ❷敵より射たる矢を取りて、敵へ射る。
いか-ほど [如何程](副) どのくらゐ。いくばく。「どれほど。
いが-ほほづき [毬酸漿](名) 【植】茄科の宿根草、高さ二三尺、枝を分ち、葉は廣卵形にして下部は互生し上部は對生す、梢頭の葉腋には白色の花をつく、花梗は長くして花は俯下せり、後白き漿果をつく。
いがみ [啀](名) いがむこと。
いがみ-あひ [啀合](名) いがみあふこと。
いがみ-あ-ふ [啀合](自、は四) ❶獸

など互に怒りあふ。㊁人が互に言ひ爭ふ。

いがむ（まみむむめめ）［啀］（自、ま四）獸など怒りはゆ。齒をあらはしてたけり向ふ。

〔いがむ（まみむむめめ）［歪］（自、ま四）ゆがむ。

〔いがむ（めめむむるるれめよ）［歪］（他、ま下二）ゆがむ。

いかめ・し（しくしきしけれ）［嚴］（形、二）威ありておごそかなり。

いがもち［毬餅］（名）糝（シンコ）に餡を包み、餅米を上面につけて、これを蒸したるもち。

いかもの［嚴物］（名）いかめしき作りの品物。

いかもの［僞物］（名）にせもの。まがひもの。

いかもの・ぐひイーグ［僞物食］（名）物を選まずに妄りに食ふこと。

いかもの・し［僞物師］（名）さぎし。

いかものづくり［嚴物造］（名）いかめしきさまの製作。又、其の劒。（嚴物造）。

いかやうウーヨ［如何樣］（名）いかなる樣。どのやう。

いがやき［伊賀燒］（名）陶器の一種、建武年間伊賀國より製したるもの、甚だ信樂燒に似たり。

いからかす（さしすすせせ）［怒］（他、さ四）いからす。

いから・し（くしきけれ）［嚴］（形、一）極めていかめし。

いから・す（さしすすせせ）［怒］（他、さ四）㊀いからしむ。おこらす。（瞋）。㊁勢を作す。角（カド）を立つ。

いかり［怒］（名）いかると。はらだち。

いかり［碇］（名）一種の船具、船を一所にとゞむるため、綱を付けて水底に沈めおくおもり。（錨）。――をうつ［打碇］碇を水底に沈む。――をおろす［下碇］尻を据ゑて動かざると。

いかりうを［碇魚］（名）［動］「かじか」に同じ。

いかりがた［怒肩］（名）高く張りたる肩。

いかりごゑ［怒聲］（名）はらだちて發する聲。

いかりさうウーソ［碇草］（名）［植］小蘗（メギ）科に屬する草、數莖一根より生ず、高さ一尺餘、葉は卵形にして鋸齒を有す、夏時花を莖頭に開く、四瓣にして色は淡紫・淡黄等種々あり。（淫羊藿）。

いかりてんま［碇傳馬］（名）碇の上げ下げに用ふる傳馬。

いかりづな［碇綱］（名）いかりに付くる綱。

いかりなはワーナ［碇繩］（名）いかりづな。

いかりばうふうウーボウー［碇防風］（名）防風の莖をさきて碇の如き形となし、刺身のつまとするもの。

いかりばん［碇番］（名）敵に船の碇をきられざらん爲に、小船に乘りて番すると。

いかりもり［碇銛］（名）尖頭に左右の突起ありて碇に似たる銛。

いかりゐ［怒猪］（名）怒りてくるへる猪。

いか・る（らりるるれれ）［怒］（自、ら四）㊀激して氣あらだつ。いきどはる。はらだつ。㊁うらみて心平かならず。㊂かど立つ。そびゆ。㊃目にかどをたつ。にらむ。㊄勢張る。氣滿つ。㊅勢を作す。ふるふ。

〔いか・る（らりるるれれ）［活］（自、ら四）生花が瓶にさゝれて、生を保つ。

いかる［斑鳩］（名）［動］次條に同じ。

いかるが［斑鳩］（名）［動］鳩鴿類に屬する鳥、嘴は小にして少しく膨大し、末端のみ角質なり、翼長大にしてよく飛翔し、足は赤色にして短小なり、形狀は普通の家鳩（バト）大にして、頸部に白色の羽毛を現生す。（鵤爽扈）。

いかわたおやりゆウーショ［烏賊腸醬油］（名）烏賊の腸を鹽に漬し、百日餘を經て分解したるものを濾過し、これを煮て製したる液、普通の醬油の如く用ふ。

いかん［如何］（副）いかに。

いき［息］（名）動物の呼吸する空氣、又、其の呼吸。――がかよふ［息通］呼吸せり。生活せり。――がきれる［息切］呼吸止る。死す。――のした［息下］臨終のとき、息の絶えぐになりたると。――のね［息根］呼吸の根元。いのち。――のを［息緒］いのち。玉の緒。――をきる［切息］あへぐ。――をこらす［凝息］いきをころす。――をころす［殺息］呼吸を抑へて靜にす。――をつく［衝息］はげしく呼吸す。――をつぐ［繼息］やすむ。――をふく［吹息］蘇生す。

いき［生］（名）㊀いのちのあると。㊁圍碁にて、二目以上ある石の、如何にしても敵に殺されざると。

〔いき［意氣］（名）㊀きだやう。きだて。心だて。㊁ゐなかびて居ぬと。あかぬけして居ると。

〔いき［依稀］（名）さも似たると。はっきりと見分かぬと。ほのか。

〔いき［意義］（名）ことわけ。意味。趣意。

〔いき［異儀］（名）常にかはりたるさまかたち。

〔いき［異議］（名）他の意見若しくは決定に異なりたる意見若しくは決定。

〔いきあ・ふウーア（ははひふへへ）［行合］（自、は四）ゆきあふ。

いきいき［生生］（名）勢盛んにして活動せんとするさまにいふ語。

いきい・づ（でででづる…）［息出］（自、た下二）よみがへる。いきがへる。

十いきう・す（せせすするすれせよ）［行失］（自、さ下二）ゆくへ見えずなる。

いきうつし［生寫］（名）㊀生きて居るまゝの姿を寫し取ると。㊁物の甚しく類似したると。

いきうめ［生埋］（名）活きながら人を地中に埋

めて殺すと。

十いきかく・る（れれるるるれれよ）［行隱］（自、ら下二）行き去りて、ゆくへ知れずなる。

〔いきがけ［行掛］（名）「ゆきがけ」に同じ。

いきかた［意氣方］（名）こゝろいき。こゝろがけ。

いきがひイーガ［生甲斐］（名）生きてゐる効驗。生きてゐるしあはせ。

いきかへ・る（らりるるれれ）［生返］（自、ら四）一旦絶息せるもの、再び蘇生す。よみがへる。

いきがほオーガ［生顔］（名）いきてゐるときの顔つき。

いきが・る（らりるるれれ）［意氣］（自、ら四）自ら意氣なりと思ふ。

十いきぎみ［齟］（名）はぎしり。

いきぎも［生膽］（名）生存せるものゝ、内臓よりとりたる膽。――をぬく［拔生膽］おどろかす。――をとる［取生膽］（名）おどろかす。

いきぎれ［息切］（名）㊀呼吸烈しくして、息のつゞかぬと。あへぎ。㊁呼吸止ると、死。

いきぐさ［生草］（名）［植］「べんけいさう」に同じ。

いきぐち［生口］（名）神降（カミオロシ）に生きたる人の靈のうつりて語る語。

いきぐる・し（しくしきしけれ）［息苦］（形、二）あへぐ樣なり。

いきごと［意氣事］（名）男女の間の關係。

いきごみ［意氣込］（名）いきごむと。

いきご・む（まみむむめめ）［意氣込］（自、ま四）勢ひをこむ。いきはふ。

いきども・る（らりるるれれ）［息篭］（自、ら四）㊀呼吸器が閊りてくるし。㊁氣むすぼれて樂しからず。

いきざし［息差］（名）いきづかひ。呼吸。

〔いきさつ（名）ゆきがゝりのわけ。なりゆきの事。

いきしに［生死］（名）いくると死ぬると。

いきおびき［生字引］（名）㊀非常なるもの知り。㊁博覽にして、その學を應用せざる人。

いきおよりてん［意氣衝天］（名）意氣が天をつくばかりに盛なると。

いきす［海髮］（名）［植］次條に同じ。

いぎす［海髮］（名）［植］紅藻類の海藻、綠色にして毛髮の如く細く、分枝して叉狀をなす、五月頃採取し、乾して糊の材料とし又刺身のつまとす。（髮菜、小凝菜）。

〔いきすぎ［行過］（名）㊀ゆきすぎ。㊁分を過ぎたるふるまひ。

〔いきすぎもの［行過者］（名）いきすぎの行爲をなすもの。てすぎもの。

〔いきす・ぐ（ぎぎぐぐる…）［行過］（自、か上二）㊀ゆきすぐ。㊁分に超えたる事をなす。

十いきすだま［生靈］（名）生存せる人の怨靈が、祟りをなすと。いきりやう。「ものゝけ」などいふもの多くいて來て」。

いきすのり［海髮糊］（名）［植］「いぎす」に同じ。

いきずり［生掏摸］（名）㊀掏摸をのゝしりていふ語。㊁他人をのゝしりていふ語。

〔いきせ［生世］（名）生きてゐるとき。生存中。

〔いきせい［息精］（名）呼吸と精力と。

〔いきせいは・る（らりるるれれ）［息精張］（自、ら四）氣張る。烈しく疑ふ。いきごむ。

いきせき［息急］（名）いきをせきこむと。甚だしく急ぐと。――きる［息急切］いきせきしてものごとをなす。

〔いきた・つ（たちつつてて）［活立］（自、た四）事業など進みて成立す。

いきたな・し（くしきけれ）［寢穢］（形、二）㊀容易に目さめず。ねざめあし。㊁ね姿見苦し。ねざまわろし。

いきだは・し（しくしきしけれ）［喘］（形、二）呼吸烈し。いきゞれして苦し。

〔いきだふれオーダ［行斃］（名）「ゆきだふれ」に同じ。

いきち［生血］（名）生存せるものゝ體中よりいづる血液。なまち。

（いきぢ［意氣地］（名）他に對する面目上、これぞと思ひこみたる念慮。いぢ。

〔いきちがひガイーチ［行違］（名）「ゆきちがひ」に同じ。

〔いきちが・ふガウーチ（はひふふへへ）［行違］（自、は四）ゆきちがふ。

十いきち・る（らりるるれれ）［行散］（自、ら四）分れ〳〵になりて退散す。

いきづかひカイーツ［息遣］（名）呼吸をなす樣子。

いきつぎ［息繼］（名）はたらきたるあとにて、休息すると。

いきつ・く（かきくくけけ）［行着］（自、か四）㊀ゆきつく。㊁事を繼續する資力盡く。回復の望み絶ゆ。ゆきつく。㊂死ぬ。

いきづく［意氣盡］（名）いきはりづく。

十いきづ・く（かきくくけけ）［息衝］（自、か四）ながき息をつく。ためいきつく。

〔いきづま・る（らりるるれれ）［行詰］（自、ら四）ゆきつまる。

十いきづ・む（まみむむめめ）［息詰］（自、ま四）呼吸をつむ。

いきづら［生面］（名）「いきがほ」に同じ。

いきづゑ［息杖］（名）肩に物を擔ぐ人の、其の天秤棒を支へ、物品の重みを防ぎて息をやすむる杖。

いきどほりドーイ［憤］（名）いきどはると。いかり。

いきどほ・るオルドーイ（らりるるれれ）［憤］（自、ら四）㊀心平かならず。なげく。うらむ。㊁敵に對する憤惱起す。いかる。おこる。

十いきどほろ・しオードーイ（しくしきしけれ）［憤］（形、二）心の

ろちにて腹立しく思ふ狀なり。
いき-どまり[行止](名) いきどまりたること。いきどまりたる所。
いき-どま・る[生止](自、ら四) 生きながらへて、此世にとゞまる。いきのこる。
いき-なが-ら・ふ(自、は下二) この世に長く生存す。
〔いき-なり[行也](副) ㊀ゆきなり。㊁不意に。だしぬけに。㊂事の成りゆきの儘にまかせて、其のまゝに。
〔いき-なり-さんぼう[行也三寶](名) いきなりのまゝになげやること。物をなげやりにすること。
〔いき-なり-はふだい[行也放題](名) 前條に同じ。
いき-によらい[生如來](名) 道德極めて高き僧。
いき-にんぎやう[生人形](名) いきたる人のごとくに、模擬してつくれる人形。
いき-のこ・る[生殘](自、ら四) 生きて此の世にとゞまる。
廿いき-はぎ[生剝](名) 天つ罪の一、生きたる馬の皮を剝ぎて織殿を穢すこと。
いき-はだか・る(自、ら四) 生きてこの世にはだかり居り。
廿いき-はだ-だち[生膚斷](名) 國つ罪の一、生きたるものゝ皮膚に傷をつけて殺すこと。
いき-はぢ[生恥](名) 現世にてのはぢ。
いき-はり[意氣張](名) いきはひのはりくらべ。意氣地のはりあひ。
いき-はり-づく[意氣張盡](名) いきはりのつくしくらべ。
いき-は・る[意氣張](自、ら四) 意氣地を張る。意地を張りとほすこと。

いき-ば・る[息張](自、ら四) いきをつめて腹を張る。いきむ。
廿いき-ぶれ[行觸](名) けがれたるものに行き會ひふるゝこと。
いき-ボサツ[生菩薩](名) ㊀いきによらい。㊁容貌美しくやさしき女。
いき-ホトケ[生佛](名) いきによらい。
いきほひ[勢](名) ㊀いきはふこと。いきはふちから。㊁人を壓服せしむる威力。㊂物を行動せしむる動力。㊃ありさま。やうす。㊄志は。はずみ。㊅意氣。氣燄。
いきほひ-こ・む[勢込](自、ま四) いきほひをこめ加ふ。
いきほ・ふ[勢](自、は四) いきほひつよく盛んになる。氣さかる。
いき-ま・く[息卷](自、か四) 憤怒して、呼吸はげしくなる。
廿いき-ま・ふ(自、は下二) いきはふ。
廿いき-み[生身](名) 生存せる身體。なまみ。
いきみ[息](名) いきをこめ、はらをはること。
いき-みたま[生御魂](名) 陰曆、七月八日より十三日までの間に於て、日を撰び、生存せる父母に祝ひものを贈る禮式。
いき・む[息](自、ま四) いきをこめ、はらを張る。
いき-もの[生物](名) 生存せる動物。
(い-きやう[異鄕](名) たこく。たきやう。
(い-きやう[異境](名) 「いきやう」(異鄕)に同じ。
(い-きやう[異香](名) 非常によき香氣。
(い-ぎやう[異形](名) よのつねにかはりたるさま。あやしむべき風姿。
いき-やくし[生藥師](名) 極めて醫術に長じたるもの。
(い-ぎやう-だう[易行道](名) 〔佛〕念佛三昧を以て、彌陀の願力により、往生決定すること。

いき-やすめ[息休](名) いこふこと。いきつぎ。
(い-きよ[依據](名) よりどころ。
(い-きよ[夷踞](名) あぐら。
イギリス-まき[一卷](名) 女の髮の結び方、横に長き束髮に、髱を出したるもの。
いき-りやう[生靈](名) 生存せる人の怨靈、いきすだま。
いき・る[熱蒸](自、ら四) むしあつくあり。
いきれ[熱蒸](名) いきること。むしあつきこと。
いきれ-くさ・し[熱蒸臭](形、一) 物のいきれたるが如きにほひあり。
いき-わか・る[生別](自、ら下二) いきわかれをなす。
〔いき-わか・る[行別](自、ら下二) ゆきわかる。
いき-わかれ[生別](名) 生きながら永く別るゝこと。
いき-わた・る[行亙](自、ら四) ㊀あまねく及ぶ。殘らずとゞく。㊁物事に注意とゞく。
いき-をさめ[息收](名) いきやすめ。いきつぎ。
〔い・く[行](自、か四) ゆく。
い・く[生](自、か四) 次條に同じ。
い・く[生](自、か上二) ㊀命をたもちてあり。生存してあり。㊁生きかへる。よみがへる。
い・く[生](他、か下二) 生存せしむ。蘇生せしむ。いかす。
い・く[活](他、か下二) ㊀花卉を花瓶に挿して、生を保たしむ。㊁立て植う。㊂物を埋む。
いく-[幾](接頭) ㊀或る語に冠して數の多き意を表す。㊁或る語に冠して數の知れぬ意を表す。
(い-く-いく[郁郁](名、副) 文物の盛なるさまにいふ語。

(いく-えい[育英](名) 英才を敎育すること。
廿いく-ぐすり[生藥](名) 去なぬ藥。不死の藥。
廿いく-く・む(自、ま四) 心中に憤怒す。心平かならず。いきどほる。
いくさ[軍](名) ㊀へいたい。ぐんたい。㊁たゝかひ。せんさう。——の-かどで[軍門出] いくさだち。——の-その[軍園] 戰場。——の-には[軍庭] 戰場。
いくさ-がみ[軍神](名) いくさのときに味方をまもるかみ。武神。
いくさ-ぐるま[軍車](名) 軍陣にありて、兵粮などを運搬する車。
いくさ-ごっこ[軍事](名) いくさの眞似をする兒童の遊戲。
廿いくさ-だいしやう[軍大將](名) 主將より軍の進退を委ぬる役。
いくさ-だうぐ[軍道具](名) 武器。軍器。
いくさ-だち[軍立](名) 戰場に出發すること。しゆつぢん。
いくさ-ならし[軍習](名) 軍隊をねること。てうれん。
いくさ-にん[軍人](名) ㊀いくさをなす人。ぐんじん。㊁甲冑をつけたる人。
いくさ-びと[軍人](名) いくさにん。
廿いくさ-ぶぎやう[軍奉行](名) 軍陣中諸般の事務を總裁する人。
いくさ-ぶね[軍船](名) いくさをなすに用ふる船。ぐんかん。
いくさ-まつり[軍祭](名) 軍神を祭ること。
いくさ-ものがたり[軍物語](名) 戰場のありさまをものがたること。

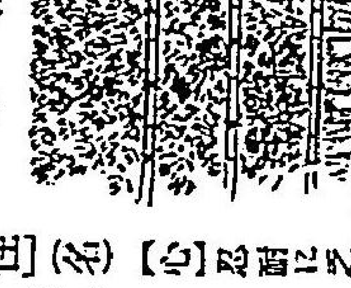
廿いくさ-もよひ[軍催](名) 戰を開くに當り、その軍陣を立て調ふること。
廿いくさ-よばひ[軍呼](名) ときのこゑ。
(いく-じ[育兒](名) 嬰兒をそだつること。
(いくじ-ゐん[育兒院](名) 孤兒又は貧兒を養ひそだつるところ。
廿い-ぐし[齋串](名) 神をまつるとき、幣などをかくる榊の類。
(いく-ぜん[燠然](名、副) ㊀あたゝかなるさまにいふ語。㊁厚くうるはしきさまにいふ語。
廿いく-そ[幾十](副) なにほど。どのくらゐ。
廿いく-そ-ばく[幾十許](副) いくらほど。なにほど。
廿いく-だち[生太刀](名) たち。
(いく-たて[經緯](名) 事のなりゆき。顚末。
〔いく-ぢ[意氣地](名) いきぢ。
い-ぐち[兎脣](名) 上脣裂けたる不具なる人。みつくち。(缺脣)。
〔いくぢ-な・し[意氣地無](形、一) 氣力なくして役にたゝず。ふがひなし。
(いく-どうおん[異口同音](名) 異なりたる口より同じ聲を發すること。多くの人の同じ說をなすこと。
廿いく-は[的](名) 矢を射るに用ふる目標。
廿いく-ばく[幾許](副) どれくらゐ。なにほど。——も-なく[幾許無] 多く時日を經ずに。ほどなく。まもなく。やがて。
廿いくは-どころ[的所](名) あづち。
廿いく-ひ[生日](名) 儀式祭禮などある日を祝ひていふ語。廿——の-たるひ[生日足日](名) いくひ。
い-ぐひ[齋杙](名) 神事に物を掛けて奉る料の杙。
いぐひ(名) 〔動〕「うぐひ」に同じ。

いく-ひさ・し[幾久](形、二) いつまでも變らず。ながく久し。
廿いく-ふ[射込](他、は四) 矢を射込む。
廿いく-ゆみや[生弓矢](名) 弓矢。
廿いく-む[射組](他、ま四) 互に弓を射あふ。
いく-よ-もち[幾世餅](名) 餅を炙りて餡をつけたるもの。
いく-ら[幾何](副) なにほど。どれほど。
廿いくり[礁](名) 海中にある石。
いぐるみ[繳](名) 矢に綱又は絲をつけて、鳥を射ること。
(い-くわ[異化](名) 原形質が細胞内に於て漸次破壞し、簡單且つ安定なる物質に變ずること。
(い-ぐわい[以外](名) その外。その外のもの。
(い-ぐわい[意外](名) 思ひの外。あんぐわい。
(い-くわがく[醫化學](名) 〔化〕醫學に應用したる化學。
(いくわ-じゆせい[異花受精](名) 〔植〕異なる花粉より精を受くること。
(い-くわん[衣冠](名) ㊀ころもとかんむりと。㊁文物閑けく禮儀整ひたる儀にいふ語。㊂常の袍に指貫を着くること。

いくわん(三)

(い-くわん[醫官](名) 軍隊の醫師。軍醫。
(い-くわん[以還](副) それよりのち。此のかた。
(い-ぐわん-ききやう[依願歸鄕](名) 軍人、官吏等が上長官の許可を得て鄕里に歸ること。
(いぐわん-めんしよく[依願免職](名) 當人の申出でによりてその職を解くこと。
いけ[池](名) 地を掘り水をたゝへてある所。——

-のま［池間］ 鉦の突起のあるところの下の部分。
いけ［活］（名） いかしおくこと。
〔いけ―（接頭） 意味を強めて、惡しのこゝろを表はす語。
（い-げ［以下］（名） 「いか（以下）」に同じ。
（い-けう キヤウ［異教］（名） 我が奉ずる所の教へと異なる教へ。他の宗教。
いけ-うを［活魚］（名） たゝへたる水の中に、いかしおける魚。


［いけがき］

いけ-がき［生垣］（名） 木を植ゑつらねたる垣根。
（いげき-せい［易激性］（名） 【心】忍耐にとぼしく僅かの刺戟にも興奮する性質。
いけ-どひ イヒ［活餌］（名） いけすの中に飼へる餌。
いけこみ-ばしら［活込柱］（名） 直に地中に根を埋め込みたる柱。鉄折戸等の柱に用ふ。
いけ-す［生簀］（名） 魚をいけおく所。（簗）
いけ-ずみ［活炭］（名） 灰に埋めおく炭火。
いけだ-ずみ［池田炭］（名） 攝津國東谷村一庫にて焼き、池田地方より出だす櫟（クヌギ）の炭。
いけ-づくり［活作］（名） 活きたる魚をつくりて、あらひにしたるもの。
いけ-どり［生捕］（名） 生きながら捕へたる敵兵。捕虜。とりこ。
いけ-ど-る らねれる［生捕］（他、ら四） 生きながら敵兵を捕ふ。とりこにす。
いけ-にへ ニヘ［生贄］（名） ❶獸を生きながら神に奉りて、にへとすること。又、其の獸。（犧牲） ❷或る物事のために名利生命等をすつること。又、其の人。
いけ-はぎ［生剝］（名） いきはぎ。

いけ-ばな［活花］（名） 草木の花枝を花器にいかしおくこと。又、其の法。「まやの栞」
（い-げふ ゲフ［醫業］（名） 醫術を職業とすること。い
いけ-ぶくろ［生袋］（名） 鷹の餌を入れおく袋。
いけ-ぶね［活船］（名） 生魚をいけおく水槽。
いけ-ま［生馬］（名） 【植】蘿藦（ガガイモ）科に屬する蔓草。莖は緑にして紫色を帶び、葉は對生し圓形にして尖り、夏の末に、白き小花を開く、馬の病を醫するに用ふ。（牛皮消、白兎藿）
いけみ-ぐさ［池見草］（名） 【植】蓮の異名。
〔い-ける けれけるけれ［生ける］（自、か下一） ❶ゆくことを得。❷なすことを得。
（い-けん［意見］（名） ❶考案の結果。みこみ。ぞんじより。❷己の思ふところを告げて、人を諫むること。
（い-けん［異見］（名） 人と異なれる考。いぞん。
（い-ご［以後］（名） 其の後。これよりのち。
（い-ご［咿唔］（名） 讀書の聲。「伊」
（い-ごう［已講］（名） 【佛】會式の講師をつとむる
（い-こく［異國］（名） 自國以外の國。外國。
〔いご-く ごけくけ［動］（自、か四） うごく。
（いこく-じん［異國人］（名） 外國のひと。
（いこく-せん［異國船］（名） よそのくにのふね。
いこく-ばり［異國張］（名） 古衣を洗ひ張りして、新しきものゝ如くにすること。
‡いこ-ず じげずず（他、さ上二） 植物などを根こぎに堀る。「こぞの春いこじて植ゑし」
‡いこの-ふ ハ［はひふへ］（他、は四） の、しる。「まへしやこしや、此はいごのふぞ」
いこ-ふ コフ［はひふへ］［憩］（自、は四） ❶仕事を中止して、息をつぐ。きうそくす。やすむ。❷くつろぎて、家にゐる。❸つかへずして、野に居る。

いこ-ふ コフ［へふふれ］［息］（他、は下二） やはしむ。休んず。やすます。
（い-ごふ ゴフ［意業］（名） 【佛】三業の一、意識を以て思慮分別すること。「る。
い-こ-む はまみめ［射込］（他、ま四） 矢を射て、中に入
い-こむ はまみめ［鑄込］（他、ま四） 金屬を熔かし、型の内に流し入れて鑄る。
い-こも-る られるれ［忌籠］（自、ら四） 籠みて家に籠
‡いこやか（名） いこよか。「りゐる。
‡いこよか（名） 身のたけのたかきさまにいふ語。「一なる姿」
‡いさ（感） いやどうして・どうであらうか等の意をあらはす感聲。
いざ（感） 人をいざなふとき、又は事をなしはじめんとするときに發する聲。いで。「いる。
（い-さい［異彩］（名） 異なるひかり。きはだちたる
（い-さい［易碎］（名） 【鑛】壓力によりて鑛物が容易に碎かるゝ性質。「風鎧」
（い-さう ソウ［異相］（名） 異樣なる面相。異樣なる
（い-さう サウ［意想］（名） おもひ。かんがへ。
（いさう-ぐわい サウグワイ［意想外］（名） おもひもよらざること。おもひのほか。案外。
いさ-がは（名） 【動】「あしはらがに」に同じ。「ひ。
いさかひ イカ［諍］（名） いひあひ。こうろん。あらそ
いさか-ふ イカ［はひふへ］［諍］（自、は四） ❶互にいひあらそふ。いひあふ。こうろんす。❷叱る。「犬をだにもいさかふまじ」
いさき（名） 【動】硬鰭類中いさき科に屬する魚。體は稍圓形にして背高からず、鱗は大にして齒は微小なり、背部は暗蒼褐色にして腹部は白し、體側に綠褐色の縦線あり、我國多少産せざる所なし。（雞魚）

いさぎ（名） 【植】あをぎり。
いさざ（名） 【動】「いさき」に同じ。
いさ-ぎよ-し にしきれ［潔］（形、一） ❶更にきよし。きれいなり。❷勝行なし。たゞし。❸未練なし。わるびれず。
いさ-ご（名） 小さき魚の子。
いさ-ご［砂］（名） （石子の義）小さき石。すな。まさご。「ごご。
いさご-ぢ［砂地］（名） すな多き處。すなぢ。まさ
いさご-つち［砂土］（名） 砂の交れる土。
いさご-むし［砂蟲］（名） 【動】毛翅類に屬する昆蟲、二雙の翅を具し、前翅に細毛若しくは細鱗あり、後翅は廣くして襞襞（ヒダ）あり、頭小にして絲狀の觸角を具す、腮部に剛毛多し、幼蟲は水中に棲息し、草片又は小石を以て巣を作る。（石蠶）
いささ―［小］（接頭） 或語に冠していさゝかなる意を表はす。
いさざ［鮴］（名） 【動】沙魚（ハゼ）科の淡水魚、沙魚に似て頭圓く、長さ一寸ばかり、琵琶湖に産す。（鱎）
いささか［聊］（名、副） ❶すこし。すこしばかり。❷かりそめ。ちよつと。
‡いささけ-し にしきれ［聊］（形、一） いさゝかなり。「いさゝけき事は今の帝行ひ給ふ」
‡いささけ-わざ［聊業］（名） いさゝかなるしわざ。つまらぬわざ。
いさざ-ずし［鮴鮨］（名） 鮴の頭をさき、飯の上に載せてつくりたる鮨、越前の名産なり。
‡いささめ（名） ❶わづか。かりそめ。「一に時まつ間にも日は經ぬる」 ❷小唄の一種、三味線につれて歌ふもの。
いさざ-め（名） 【動】軟鰭類中たら科に屬する近海魚、體は細長にして鱗なく粘液あり、體色は全身白くして腹側に七個の黒點あり、體長は二十寸、我國には多く東海に産す、十月頃川を溯りて産卵す。
イサチン［Isatin］（名） 【化】藍青の酸化により、又は靛紅アミッド及鹽酸より化生する黄赤色の稜柱狀の結晶體、温湯・酒精・苛性加里液に溶解す。
‡いさ-つ ちつつる（自、た上二） 甚しく泣く。
‡い-ざと［寢聰］（名） 目ざめの疾きこと。めざとき
と。「めざとし。
‡い-ざと-し にしきれ［寢聰］（形、一） 目さめやすし。
いざ-なみ（感） いな〳〵。さにあらず。
‡いさ-な［勇魚］（名） 【動】「くぢら」に同じ。
‡いさな-とり（枕） うみ・はまに冠す。
いざなひ イナ［誘］（名） いざなふこと。
いざな-ふ イナ［はひふへ］［誘］（他、は四） ❶さそふ。つれだつ。つれゆく。ひく。みちびく。すゝむ。❷をしふ。さとす。❸我が意若しくは我が説にしたがはしめんと試みる。
いさ-は［斑葉］（名） 草木の葉の、黄・白などの線又は斑點・條條などのあるもの。ふいり。
いさ-は［五十集］（名） ひもの又はなまものなどを商ふこと。
‡いさ-ふ サフ［はひふへ］［訶］（他、は四） しかる。
〔いさぶ-る られるれ［搖］（他、ら四） ゆする。
いさまし-い しいけれ［勇］（形、二） いさはひ強し、たけし。をゝし。
いさみ［勇］（名） ❶いさむこと。いさはふこと。❷坊間にて俠氣をてらふこと。又、其の人。「り。
いさみ-はだ［俠肌］（名） 俠客の風。いさみのふり。
‡いさみ-や-む むめむむる（他、ま下二） 禁ず。とゞむ。

いさ-む まめむめ［勇］（自、ま四） 氣滿ち張る。心勇み起る。すゝむ。いきはひこむ。はずむ。
いさ-む むめむむる［諫］（他、ま下二） 人に其の非を告げて改めしむ。いけんす。
いさめ［諫］（名） いさむること。いけん。かんげん。
‡い-さめ［寢覺］（名） ねざめ。
いざよひ イヨ（名） ❶‡いさよふこと。ためらひ。ちうちよ。猶豫。❷陰暦月の十六日の月。又は十六夜。（十六夜、十六宵） ――のつき［十六夜月］ 陰暦十六日の夜の月。
いざよひ-ざくら イヨ［十六夜櫻］（名） 【植】さくらの變種、陰暦正月十六日の頃に開く、伊豫國道後にあり。
いざよひ-ばら イヨ［十六夜薔薇］（名） 【植】薔薇の變種、葉は細小にして、花は夏開く。
‡いさよ-ふ ヨフ［はひふへ］［自、は四］ 進まんとして進み得ず。行かんとしてとゞまる。ためらふ。徘徊す。猶豫す。「る意を表はす。
‡いさら―［些］（接頭） 或語に冠していさゝかな
〔い-さらひ ラヒ［鑄浚］（名） 次條に同じ。
い-さらへ ラヘ［鑄浚］（名） 鑄たる金器に磨きを掛けて、滑かにさらふこと。「き井。
‡いさら-ゐ［些井］（名） 水の少
‡いさり［漁］（名） すなどること。
いざり-うを（名） 【動】いざりうを科の魚、體あんかうに類し扁平にして皮面に鱗なく小刺あり、頭上には三個の大刺あり、胸鰭を以て海底を匍匐す、色は黄にし、褐色の斑あり。

［をうりざい］

‡いさり-び［漁火］（名） いさりをするときに、魚

をよせんためにたく火。

廿いさり-ぶね［漁船］（名）いさりするふね。れふせん。ぎよせう。すなどりぶね。

いさり-れふ リ‐リョウ［漁獵］（名）海宿を徒歩し、漁(スヽ)にて魚を突きとる漁。

廿いさる［筌］（名）竹をあみてつくれる器。

いさ-る らりるれれ［漁］（他、ら四）㊀魚・貝等を取る。すなどる。㊁あさる。さがしもとむ。

廿いさ-を［勇雄］（名）勇ましきをのこ。ますらを。

いさを［勲］（名）善良なる成績。名誉ある成功。てがら。（功）。

いさをし［勲］（名）前條に同じ。

廿いさを-し しくしくしきしけれ［勲］（形、二）㊀勇猛して事にあたるさまなり。骨を折るさまなり。㊁てがらを成せり、功あり。

廿いさをし-びと［勲人］（名）いさをある人。

いし［石］（名）㊀岩石の小片にして砂より大なるもの、稱。㊁石材。㊂圍碁に用ふる黒白の石。ごいし。㊃硯。廿——の-あぶら［石油］せきゆ。——の-おび［石帶］せきたい。——の-つぼ［石御壺］いしつぼ。——の-ほどとこ オ［石大床］せきくわく（石槨）に同じ。——の-ま［石間］權現造の神社の本殿と拜殿との間を石にて敷きたるところ。

（い-ゑ［醫師］（名）醫術を開業せる人。いゑや。

（い-ゑ［意志］（名）（い）こゝろざし。かんがへ。おもひ。こゝろ。（ろ）［心］㊀心の動的方面。㊁思慮し選擇し決行する心的作用、（一）の優勢なるもの。

（い-ゑ［懿旨］（名）皇后・皇太子などの御心。

（い-ゑ［異志］（名）ふたごゝろ、そむかんとするこころ。

（い-ゑ［頤使］（名）あごにて人をつかふこと。人を見下げてつかふこと。

（い-ゑ［縊死］（名）紐にて首を締めて死ぬること。

廿い-ゑ［椅子］（名）四角にして手すりのある高座。

廿い-し しくしくしきしけれ［美］（形、二）㊀よろし。このまし。㊁あぢよし。うまし。㊂てぎはよし。たくみなり。㊃殊勝なり。けなげなり。

（い-ゑ［意字］（名）主として意義を表はす文字。

（い-ゑ［異事］（名）普通ありうべからぬ事。非常の事。

（い-ゑ［異時］（名）ほかのとき。のち。他時。

いし-あはせ ワ‐アセ［石合］（名）一種の遊戲。いしなごの石を左右あはせて、かちまけを決するもの。

いし-あやめ［石菖蒲］（名）【植】「せきしやう」に同じ。

いし-いし（名）だんご。

いし-いも［石芋］（名）【植】天南星科に屬する植物、山野に自生す、さといもに似たる塊根あれど、食用に適せず。

いし-うす［石臼］（名）石にてつくりたる臼。

いしうす-げい［石臼藝］（名）役にたゝぬ藝。

いし-うち［石打］（名）（い）小石を互に打ちつけあふこと。小石を打ちあふ爭鬪。（ろ）いしうちのはね。——の-そや［石打征矢］いしうちのはねにてはぎたる矢。——の-はね［石打羽］鷲の尾の羽の左右の端より第一第二にあたれるもの、稱にして、極めて強きが故に、矢にはぎて珍重す。——の-やなぐひ イ‐グイ［石打胡籙］（名）いしうちのそやをいるゝやなぐひ。

廿いし-うら［石占］（名）一種の占法、石を舉げてその輕重によりて吉凶を占ふもの。

いし-がき［石垣］（名）石を積みあげて造りたる垣。

いしがき-だひ イ‐ダイ［石垣鯛］（名）【動】石鯛科の魚、體は扁く、高く小なる櫛状鱗を被る、齒は集合して上下各一枚をなし、全身灰色黒褐色の圓點あり。

いし-がけ［石崖］（名）㊀石を積みてつくりたる崖。㊁いしがけこもん。

いしがけ-こもん［石崖小紋］（名）大小の圓を組みあはせて、石崖の形の如く染めたる模樣。

いしがけ-ゑぼり［石崖絞］（名）石崖の合せ目にかたどり、六角形をならべたるさまの絞染。

いし-がに［石蟹］（名）【動】蟹の一種、胸甲は幅濶く腹部は至つて小さく且扁平なり、第一對の脚は必ず螯(ハサミ)に變ず、其の色赤し、山谷溪間又は河堤に穴居す。やまがに。

いし-かは ワ‐カ［石川］（名）石の多くある川。

（い-ゑ-がへし エ‐ガエシ［意趣返］（名）いゑゆがへし。

いし-がみ［石神］（名）石にてつくりたる神像。

いし-がめ［石龜］（名）【動】龜鼈類に屬する爬蟲、函狀の背腹兩甲を有し、背面は穹窿にして腹面は平かなり、此の甲は下皮の化骨したるものと、脊椎及肋骨の癒合したるものとにして、外面は上皮角質の鱗を以て覆はる、我國到る處の池沼に產す。（秦龜）。

いし-がれひ レイ‐ガレイ［石鰈］（名）【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、體形は頗る側扁にして卵形をなし、背鰭は眼の直上より起る、口は小にして甚しく仰向す、體色は濃灰又は淡褐なり、體長は二尺許に達す、東海・東北地方に多く產す。

（い-ゑき［意識］（名）【心】心的作用の一切の稱、即ち知覺・情慾等心の事實は、意識の現象なり。

廿いし-き［石槨］（名）石にて疊み、死人の棺を入るゝ處、せきくわく。

（い-ゑき-えうそ ヨ‐ヨウ［意識要素］（名）【心】意識の內容を分析して更に分つと能はざるに至りしも

の。

いし-ぎく［石菊］（名）【動】珊瑚蟲類中多放腔類に屬する腔腸動物、許多の觸手を具ふ、其の數は必ず六の乘數にして、單體なり、骨骼ありて狀恰も菊花の滿開したるものに似る。

（い-ゑき-くわん［意志機關］（名）【法】法人の意志をつくる機關、株式會社にては株主總會の如きこれなり。

いし-ぎり［石切］（名）㊀石を切ること。又、石を切る業。㊁石を切る職人。

（い-ゑ-ぎり［意趣斬］（名）いゑゆぎり。

（い-ゑき-りう［意識流］（名）【心】進行えつゝある意識、動ける心。

いしきり-のみ［石切鑿］（名）本まるく、末尖りたる鑿、石を彫り、又は切るに用ふるもの。

いし-きりば［石切場］（名）（い）石材を切り出すところ。（ろ）建築場に於て石を切るところ。

廿いし-く［石工］（名）石を切る職人。いしきり。

いし-くばり［石配］（名）碁にて、始めて要點に石を置き、大體の陣形を立つること。

いし-ぐみ［石組］（名）庭園に石を配置する法。

いし-ぐら［石藏］（名）石を疊みあげて造りたる倉庫。

いし-ぐるま［石車］（名）大石を運搬する車、四輪を附く。

いし-くれ［石塊］（名）小さき石、又は石のかけ。いしころ。

いし-げ（名）【植】褐藻類の海藻、全體小さく、黑褐色にして枯枝狀をなし、末梢は扁平なり。

いし-げた［石下駄］（名）上古の副葬品、石にて下駄の形を模造したるもの。

いし-けり［石蹴］（名）一種の遊戲、地上に幾多の區劃を設け、一箇の小石を片足にて蹴りつゝ、區劃を逐ひ行くもの。

いし-けん［石拳］（名）一種の遊戲、手を開きたるを紙、指を二本出だしたるを鋏、こぶしを石とし、紙は石に勝ち、石は鋏に勝ち、鋏は紙に勝つものと定め、各同時に手にて紙・鋏・石の形をなして勝負をなすもの。ぢやんけん。

いし-こ［石粉］（名）長石の粉、ガラスの材料とす。

いし-ご［石子］（名）石のつみかさなりたること。

いし-ごけ［石後家］（名）貞操の堅固なる後家。

いし-こっぱ［石木端］（名）石を切りたる屑。

いしこ-づみ［石子積］（名）いしこづめ。

いしこ-づめ［石子詰］（名）古昔の殿刑の一、罪人を生きながら、小石にて埋むること。

いし-ごひ イ‐ゴイ［石鯉］（名）【動】「せんざんかふ」に同じ。

いし-ころ［石塊］（名）小さき石。こいし。さゞれいし。いしくれ。（礫）。

いし-ころも［石衣］（名）乾菓子の一種、餡に水飴を加へて煉り固め、蜜をつけたるもの。

いし-ざか［石坂］（名）㊀石の多き坂。㊁いしだたみにしたる坂。

いし-さじ［石匙］（名）石器時代の遺物、石を以て造りたる匙の如きもの。

いし-ざら［石皿］（名）石器時代の遺物、石を以て造りたる皿。

いし-じき［石敷］（名）石を以つて敷きつめたるところ。

いし-じり［石尻］（名）石垣の石の表面より最も奧なる端。

いし-ゑわう ウ‐ヲ［石雌黃］（名）【鑛】鑛石のまゝの雌黃。

いし-ずみ［石炭］（名）【鑛】「せきたん」に同じ。

いし-ずり［石摺］（名）㊀石碑などの字を、油ずみなどを用ひて紙に摺り取ること、又、其の摺り取りたる地黑く字白きもの。（石搨、石本）。㊁黑地に白く文字を表はしたる摺物。

いし-ずゑ［礎］（名）㊀家などを建つるどだいの石。㊁物事の基礎となるもの。㊂物事の主腦となるもの。

いし-だこ［石蛸］（名）【動】いひだこ。

いし-たたき［石敲］（名）【動】せきれい。

いし-だたき［石叩］（名）【鑛】㊀槌にて鑛石を粉碎すること。㊁鑛石を粉碎する槌。

いし-だたみ［石疊］（名）㊀板石を敷きならべたるもの。（甃）。㊁いしだん。㊂方形をならべ、一つづゝ置きて、白黑の色など入れちがへたる紋模樣。

いし-だひ イ‐ダイ［石鯛］（名）【動】石鯛科の魚、色は褐色にして、體形石垣鯛に似たり。

いし-だて［石立］（名）いしくばり。

いし-だん［石段］（名）石にて作りたるだん。いしばし。

いし-ぢ［石地］（名）㊀石の多き土地。㊁いしぢぬり。

いしぢ-ぬり［石地塗］（名）漆塗りの灰色にして光澤なきもの。

（い-ゑつ［異日］（名）その日の外の日。他日。

廿いし-つい-ぢ［石築地］（名）いしがき。

いし-づき［石突］（名）㊀かたなのこじり。（鐺）。㊁鎗・なぎなた・ほこなどの地にあたる方のさきを包みたる金具。（鐓。鐏）。

いし-づき［石付］（名）土中にて朽ちたる竹の根。

いし-づくり［石造］（名）㊀石を細工する職人。㊁石を用ひて、物をつくること。又、其の細工物。

いし-づけ［石漬］（名）一種の漁法、湖沼の淺き處に石を猥に積み、えび・うなぎ等の集るを待ちてこ

れを細ふるもの。

いし-げたひ[石傳](名) 渓流・小川などの石に傳ひて渡ること。

†いし-つつい[石槌](名) 石にてつくれる槌。「一もち討てしやまむ」。

いし-つぼ[石壺](名) 伊勢神宮内にて、石を敷き祭儀のとき勅使・神官等の着座すべきところ。

いし-つみ[石積](名) 小兒の遊戯、石を積み、その他の石を動さずに多く取りたるを勝とするもの。

†いし-でん[一身田](名) 功により、一代に限りて賜はりたる田地。

いし-どうろう[石燈籠](名) 石にて造りたるとうろう。

いし-どこ[石床](名) 石よりなれる川の底。

†いし-どさか[石鶏冠](名) 石の如く堅きとさか。

いし-なぎ[石投](名) 【動】硬鰭類中すゞき科に屬する魚、體は側扁にして鱗甚だ小なり、體色は蒼黑にして體長は三尺五寸許に達す、深海の磯間に棲す、味美ならずして少毒あり。

[いしなぎ]

いし-なげ[石投](名) 石をなぐること。又、石を投げてあそぶたはむれ。

いし-な-ご[石子](名) 小さき石。

いし-なご[石投子](名) 一種の遊戯、石を撒き、中の一個を空に投げ、其石の落ちぬうちに、下の石をさらひて、之とうち合はするもの。(石投、石擲)。

いし-などり(名) いしなご。(石投子)。

†いし-の-ち[石乳](名) 【鑛】first=ようにゆうせき。

いし-のみ[石鑿](名) いしきりのみ。

†いし-はし[石階](名) いしだん。

いし-ばし[石橋](名) 石にて造りたる橋。

いし-はじき[石彈](名) (い)一種の兵器、古昔、敵陣へ石を投ぐるに用ひしもの。(礟)。(ろ)一種の遊戯、碁石を指先にて彈き、中りたる敵の石を取りて、勝負を爭ふもの。

いし-バチ[石鉢](名) 石にて造りたる鉢、手水鉢などに用ふ。

いし-はなび[石花火](名) 【植】いそまつ。

いし-ばひ[石灰](名) 酸化「カルシウム」の粉末、介殼を燒きて製し、漆喰・「セメント」・肥料等に用ふ。——の-だん[石灰壇] いしばひを固めて造りたる壇、清涼殿の庇の南にあり。——の-ま[石灰間] 漆喰塗りの室。「いせき」。

いしばひ-いし[石灰石](名) 【鑛】せきくわい。

いしばひ-がま[石灰竈](名) 石灰石・貝殼等を燒きて石灰を製する竈。

いしばひ-ひれう[石灰肥料](名) 水を混じたる生石灰の肥料。

いしばひ-も[石灰藻](名) 【植】いしも。

いしばひ-やき[石灰燒](名) 石灰石を燒きて石灰を製することを業とする人。

いし-はら[石原](名) 小石の多くある處。

いし-ばり[砭](名) 石にて造りたる鍼、鍼術に用ふるもの。「ひ」。

いしばり-だひ[石針鯛](名) 【動】あかめだひ。

いしびき-うた[石挽歌](名) きやり。

いし-びや[石火矢](名) あはづゝの類、中古に使用せられたる武器にして、當時は石片を以て彈丸となしたり。

いし-ふぐ[石河豚](名) 【動】固顎類中硬皮類に屬する箱狀の硬骨魚、上顎の諸骨は頭蓋と相固着す、堅牢なる甲鱗を被り、頭に二角あり。

いし-ぶし[石伏](名) 【動】かじか(鰍)。

いし-ぶし(名、副) 猶豫するさまにいふ語。ぐづぐづ。

いし-ぶね[石船](名) 石材を運搬する船。「ゞ」。

いし-ぶみ[石碑](名) 後世にのこすために、その事蹟を記し、石にほり付けたるもの。

いし-ぶろ[石風呂](名) (い)石造の湯槽。(ろ)石にて造りたるむしぶろ。

いし-べい[石塀](名) 石にて造りたる塀。

(いし-へうじ[意思表示](名) 【法】當事者が自己の意思を外部に發表して、他人の認め得べきものとなすこと、法律行爲の基本なり。

いし-べっつひ[石竈](名) 石を組みてつくりたるかまど。

いし-へん[石偏](名) 漢字の偏の名、砕・硯などの如き字の左方にある部分。「く」。

いし-ぼたん[石牡丹](名) 【動】いそぎんちやく。

いし-ボトケ[石佛](名) 石にて造りたる佛像。

†いし-ま[磁](名) うつはもの、やきもの。

いし-まくら[石枕](名) 我が國の古墳内より發見する蛇紋石製の器具、屍の頭を載するもの。

†いし-み[筥](名) たけかご。ふご。(筥)。

いしみかは(名) 【植】蓼(たで)科に屬する一年生の莖草、葉と莖と共に刺あり、花は紅色又は白色にして形蘩蔞に似る、實は圓し。(杠板歸)。

†いし-むじかる[蹙](自、ま四) ゆがむ。くねる。いがむ。かじく。まがる。

いし-むろ[石室](名) 岩石にて造りたる室。

いし-め[石目](名) (い)岩にあるわれめ。(ろ)彫刻物などの表面に打ち出だせる細點、なゝこ。

いしめ-こもん[石目小紋](名) 染物の模樣、いしめ(ろ)の如き小紋。

いしめ-たがね[石目鏨](名) 金屬面に石目を打つに用ふる鏨。

いし-も[石藻](名) 【植】紅藻類の化石植物、石灰の沈澱物を含有し、褶襞狀又は樹狀をなし、堅きこと石の如し。

いし-もち[石持](名) 【動】硬鰭類中いしもち科に屬する魚、體は側扁にして、眼小く、口濶し、小き櫛形の鱗を有す、體色は灰銀にして、體長は一尺許、近海の泥底に棲息する定着魚なり、其の頭中に石の如きものあり、故に名づく。(鮸、石首魚)。

[いしもち]

いしもち-こもん[石持小紋](名) 染物の模樣、石を正しく稍み重ねたるが如き小紋。

いしもち-さう[石持草](名) 【植】茅膏菜(もうせんごけ)科多年生の肉食植物、塊根より一莖を抽き、高さ四五寸、葉は對生にして半月形をなし、腺毛簇生し、粘液を分泌して昆蟲を捕獲す、葉柄は長く、花は白色五瓣にして五雌蕊あり。(茅膏菜)。

(い-しや[醫者](名) 醫術を行ふ人。くすし。いゑ。

(い-しやう[意匠](名) ㊀こゝろのたくみ。かんがへ。㊁工業上の物品に應用すべき形狀・模樣・色彩又は其の結合に關する新規の考案。

(い-しやう[衣裳](名) きもの。衣服。

(い-じやう[以上](名) ㊀これから上。これから前。㊁次件又は目錄などの末尾に記して、終結の意を表する語。㊂照否文の末尾に用ひて敬意を表する語、中世、官家よりの下し文の終に、「以下」とあるに對し、敬意を表はすといふ。㊃徳川時代に、將軍に謁見することを得たる士分、御目見以上の者。

(い-じやう[異常](名) つねの樣にあらざること。

(い-じやう[異狀](名) ひごろにことなりたるさま。つねにあらざるやうす。

いしやう-かた[衣裳方](名) 芝居にて、俳優の扮裝に要する衣裳の事を世話するもの。

(いしやう-ぐわ[意匠畫](名) (い)既定の線・點等によりて意匠をめぐらして畫をかくこと。(ろ)實用上の物品に應用すべき繪畫。

いしやう-このみ[衣裳好](名) 美服又は珍物をえりごのみすること。又、其の人。

(いしやう-せんよう-けん[意匠專用權](名) 【法】意匠案出者又は其の承繼人の請求に基きて、これに附與する特權、此の特權あるものは、十年間該考案の專用を得るものとす。

(いしやう-だんす[衣裳簞笥](名) 衣類を入るゝたんす。

いしやう-づけ[衣裳附](名) ㊀俳優が衣裳を着ること。㊁いしやうかた。

(いしやう-とうろく[意匠登錄](名) 【法】意匠案出者又は其の承繼人の請求によりて、特許局長が必要の事項を原簿に記入すること。

†いしやう-どころ[衣裳所](名) 戰國時代に、諸大名邸中にて衣裳を藏せしところ。

(いしやう-にんぎやう[衣裳人形](名) 婦女・若衆・俳優・女郎等に擬したる人形。「ひつ」。

いしやう-びつ[衣裳櫃](名) 衣類を入るゝ

いしやう-まく[衣裳幕](名) 染物・刺繍等を綱にかけて幕の代とするもの。

(いしやう-れう[意匠料](名) (い)意匠案出の手數料。(ろ)【法】意匠登錄の手數料。

いし-やき[石燒](名) 陶器の燒き方、ゑうつちの粉に深かき土をまぜて水に溜し、其のなか澄みを火にかわかし、捏(こ)ねて燒くこと。

いしやき-どうふ[石燒豆腐](名) 鍋に油を塗り、其の上にてつけ燒きになしたる豆腐。

いしや-だふし[醫者倒](名) 【植】せんぶり。

(いしや-ばうず[醫者坊主](名) いゑや。

いし-やま[石山](名) ㊀石多き山。㊁石を切り出す山。

いしやう-がひ[細螺](名) 【植】きさご。

(い-しゆ[異種] 種類のことなること。

(い-しゆ[意趣](名) ㊀心の趣向。こゝろばせ。㊁うらみを含むこと。うらみ。わとん。

(い-しゆう[異宗](名) ことなりたる宗旨。他宗。

(い-しゆう[依從](名) 【心】自己に決定の力なく、他の意志によりて行動すること。

いしゆ-がへし[意趣返](名) 怨みをかへすこと。遺恨をむくゆること。

(いしゆ-かんかく[異種感覺](名) 【心】異なる感官に起れる感覺。

いしゆ-ぎり[意趣斬](名) うらみに因りて、人をきり殺すこと。

(い-じゆく[異熟](名) 【佛】今世の善惡の業が來世にて無記性の果を受くること。

(い-じゆつ[醫術](名) 醫療の術。

(い-じゆつ[異術](名) てじゆつ。

(いじゆつ-かいげふ[醫術開業](名) 醫術の營業をなすこと。

(いじゆつかいげふ-しけん[醫術開業試驗](名) 一定の資格なきものゝ醫術を開業せんとするときに受くる試驗、文部大臣これを課し、前期。

後期の二次あり。

いしゆ-ばらし[意趣晴](名) いしゆがへし。

いしゆ-ぶし[意趣節](名) 怨を受けたる原因。

いしゆみ[石弓](名) 古昔用ひし一種の兵器。石を放擲(投げやる)もの。(弩)。

(い-しよ)[意緒](名) こゝろもち。

(い-しよ)[醫書](名) 醫學・醫術の事を書き述べたる書物。

(い-しよく)[移植](名) ❶苗をわけうゑること。樹木などを處をかへてうゑること。❷身體の病的部分を癒するために、健康體の同部分を切り取りてこれに移し植うること。

(い-しよく)[衣食](名) ❶衣服と食物と。❷着ると食ふと。生活。

(い-しよく)[異色](名) ❶いろの相同じからざること。相同じからざる色。❷かはりたる様子。

(い-しよく-じんしゆ)[異色人種](名) 皮膚の色に因りたる人種の區別上、他人種を指していふ語。

(い-しよく-ぢゆう)[衣食住](名) ❶衣服と食物と居住と。❷着食ひ或は住ふと。生活。

‡**い-しらま-す**[射白](他、さ四) 矢を射て敵をくじく。

(いし-わた)[石綿](名) [鑛]蛇紋石又は角閃石の變種。纖維状をなして、軟きこと恰も絲又は綿の如く、性强靱にして布に織るべし、火に耐ふるを以て、防火器等を包む。「アスベスト」(石絨)。

いし-わり[石割](名) ❶[動]いひくひどり。❷いしわりがひ。❸(武)裏皮を厚くし、踵に鐵鋲をつけたる草履。

いしわり-がひ[石割貝](名) [動]斧足類の貝。いがひに類し、長さ一寸乃至一寸五六分、二枚の介殼は長楕圓形をなし茶褐色なり。

いし-ゐ[石井](名) ❶岩石に穿ちたる井。❷石がはなる井。

(い-しん)[懿親](名) ❶父子の間の睦きこと。❷親しきみうち。

(い-しん)[倚信](名) たより、たのみ。

(い-しん)[異心](名) ふたごころ。むほんのこゝろ。

(い-じん)[異人](名) ❶普通の人間以上の不思議なる術を行ひたる人、仙人。❷凡庸ならぬ人、英雄。❸異國の人、外國人。

(い-しん-でんしん)[以心傳心](名) 言文に顯はして說かず、心を以て心につたふること。

イス[椅子](名) (字の宋音) 腰をかくる具、腰かけ。

(い-すう)[異數](名) ことなれるとりあつかひ。つねならぬためし。

いす[柞](名) [植]金縷梅科に屬する喬木。葉は常綠にして花瓣は存在せず、雄蕊は二個乃至八個あり。觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に供せらる。ひよんのき。ゆす。(蚊母樹)。

いすか[鶍](名) [動]燕雀類中すゞめ科に屬する鳥。雀大にして體は深色を帶ぶ。嘴は交叉して、巧みに松實の内部にある種子を取り食ふ。(交喙)。——**のはし**[鶍嘴] 物事のくひちがひて、意の如くならざるにいふ語。

‡**い-すゝ-ぐ**(自、か四) おどろきさわぐ。ちうばいす。「立ち走りいすゝぎて」。

(い-すぶる)[揺](他、ら四) ゆすぶる。

イスランド-ごけ[一苔](名) [植]地衣類の多年生隱花植物、高山に產し、體は扁平にして分枝し、緣邊には毛状突起を生じ、色は灰白にして少しく綠を帶ぶ。食用に供して滋養に富む。

(い-する)[揺](他、ら四) ゆする。

‡**いすろぎ-ふ**(自、は四) そゞろに心進む。勇ひさかふ。「神たちのいすろぎひあれびます」。

いせ-あみがさ[伊勢編笠](名) 多く伊勢にて製する編笠。

‡**い-せ**[五十瀬](名) おほくの瀬。

(い-せい)[異姓](名) 己と異なりたる姓。他姓。

(い-せい)[異性](名) ❶性質を異にすること。❷男女雌雄の性の異なるもの。❸(化)物質は同一の分子式を有すれど、性質は相異なるもの。

(い-せい-たい)[異性體](名) ❶性質異なるもの。❷(化)分子式同一にして性質の異なる物質、例へば「メチルエーテル」と「アルコール」との如し、その分子式は共にC_2H_6Oなれども、前者は攝氏零下二三度にて液化する氣體にして、後者は沸騰點七八度の液體なり。

(い-せい)[以西](名、副) これより西。これより西の方。

いせ-えび[伊勢蝦](名) [動]十脚類中いせえび科に屬する節足動物。體は圓筒形をなし、甲殼を有す、甚だ堅し、前部の環節は厚くして頭胸甲を有し、尾部は長く後方に至りて狹し、大なる尾を具ふ。觸角は暗褐紫にして、體長は殆ど七寸許、體は成長するに從ひ脫皮す、常に流通する深さ六十尺以下の岩礁間に棲息し、夜間出でて、食物を攝取す、我國東海の近海に多し。かまくらえび。(龍蝦、伊勢海老)。

いせ-おしろい[伊勢白粉](名) 「はらや」に同じ。

いせ-おんど[伊勢音頭](名) ❶一種の俗曲、伊勢國古市にて盛んに行はる。もと其の近傍なる川崎より起り、川崎おんどと稱せり、一說に、相の山節より出でたりといふ。❷伊勢音頭に合せて演ずる踊。

いせ-かうり[伊勢講](名) 伊勢まゐりするために結びたる講。

いせ-かはり(名) 「いせおんど」に同じ。

(い-せき)[射席](名) 射場に設けたる射手の席。

(い-せき)[醫籍](名) 「いしよ」に同じ。

(い-せき)[依藉](名) たよること、依頼すること。

いせ-ごひ[伊勢鯉](名) [動]あかめに同じ。

いせ-ごよみ[伊勢暦](名) 伊勢の大神宮より出す暦本。

いせ-ごり[伊勢行李](名) 伊勢より出る柳行李。

(い-せつ)[異說](名) 普通と違ひたる說。

いせ-ざき[伊勢崎](名) 次條に同じ。

いせざき-おり[伊勢崎織](名) 上野國伊勢崎近傍にて製出する絹絲の太織物。

いせざき-じま[伊勢崎縞](名) 前條に同じ。

いせ-さんぐう[伊勢參宮](名) いせまゐり。

いせ-じま[伊勢縞](名) 「いせもめん」に同じ。

いせじま-ぶし[伊勢島節](名) 京都に行はれし歌澤節の一種、伊勢島宮内の語り出でしもの。

いせ-すりバチ[伊勢擂鉢](名) 多く伊勢より產する擂鉢。

いせ-ちや[伊勢茶](名) 伊勢國より產する茶。

いせ-どうふ[伊勢豆腐](名) 一種の料理、やまのいもをすりおろして、鯛のすりみを混ぜ、卵の白身を加へてよくすりあはせ、これにくずだまりをかけたるもの。

いせ-ばうふう[伊勢防風](名) [植]はまばうふう。

いせ-バチ[伊勢鉢](名) 「いせすりバチ」に同じ。

いせ-はなび(名) [植]爵牀科の小灌木、陸地に生ず、高さ一二尺、葉は長楕圓形にして互生し、花は帶紫色にして唇形花冠をなす。

いせ-まゐり[伊勢參](名) 伊勢の大廟に參詣すること。

いせ-もめん[伊勢木綿](名) 伊勢の國より產する木綿。

い-せる(他、さ下二) ちゞめて縫ひ合はす。くゝり縫ひにす。

いせ-をどり[伊勢踊](名) 「いせおんど」に同じ。

(い-ぜん)[依然](名、副) もとのまゝ。

(い-ぜん)[怡然](名、副) よろこぶさま。又は、たのしむさまにいふ語。

(い-ぜん)[夷然](名、副) 心の平なるさまにいふ語。

(い-ぜん-げん)[已然言](名) [文法]動詞・形容詞・助動詞の活用の一、確定したる條件によりて前提となるもの、例へば行けば押せどの行け・押せの類。

いそ[磯](名) ❶湖海の邊の石ある所。湖海の波うちぎは。うみべた。はまべ。❷冠の額の緣ところ。

‡**い-そ**[五十](數) 十の五倍。ごじふ。

いそ-あけ[磯明](名) 漁業の禁制の解かれたること。

いそ-あはもち[磯粟餅](名) [動]腹足類の動物、體は淡黃色にして背に斑點あり、介殼を有せず。

いそ-あゆなめ[磯鮎並](名) [動]硬鰭類中かんだひ科に屬する魚、全體紅色にして褐黃色の條線あり、背鰭の兩翅は淡黃なり、體長四尺に及ぶ、近海に棲息し、五六月頃に產卵す。

いそ-いそ(名、副) 悦び勇むさま。

いそ-いそがに(名) [動]まめがにに同じ。

いそ-いり[磯煎](名) 芹を加へたる鯛の吸ひ物。

(い-そう)[移送](名) [法]裁判所がその管轄にあらざる訴訟事件を他の管轄の裁判所へ送ること。

いそ-うたせあみ[磯打瀬網](名) 打瀬網の小さきもの。

いそ-うを[磯魚](名) [動]海濱の海藻の間に棲む魚類。

いそ-えび[磯蝦](名) [動]えびの一種、淡紅色にして紫色の小斑點あり、腹には低き稜を有す、海濱の沙中に棲む。

いそ-がき[磯牡蠣](名) [動]かきの一種、きはめて小形なるもの。こがき。

いそがし-がる(自、ら四) いそがはしく思ふ。

いそが-し[忙](形、二) ❶事繁し。用多し。せはし。❷餘裕なし、急性なり。きびし。

いそがは-し[忙](形、二) いそがしに同じ。

いそ-がひ[磯貝](名) ❶[動]すずめがひ。❷波のために磯に打寄せられたる貝殼。又、鮑の殼に片のみなるもの。

‡**いそがひ-の**(枕) 「かたおもひ」「かたこひ」に冠らする枕詞。

いそぎ[急](名) ❶いそぐこと、あわたゞしさ。❷準備、仕度。

いそぎ-あし[急足](名) 足をはやめてあるくこと。はやあし。

いそ-ぎく[磯菊](名) [植]菊科の多年生草本、莖の高さ二三尺、葉は楔形又は倒形にして鋸齒を具へ、細毛密生す、秋期梢末に花を開く、黃色の頭状花を密集し、繖房状をなす。

いそぎ-もの[急物](名) 急速に製作し又は施行すべきもの。

いそ-ぎは[磯際](名) うみべ、なみうちぎは。

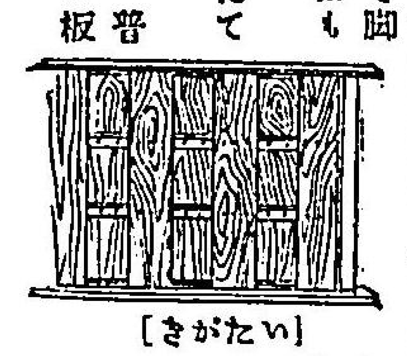
いそ-ぎんちやく[磯巾着](名) [動]珊瑚蟲類中多放腔類に屬する腔腸動物、通常海濱の岩上に生ず、單體にして骨骼を具有せず、綠色又は紅色を呈し、觸手を開くときは美麗なり。(菟葵)。

(い-そく[夷則](名) ●十二律の一、七月にあたる律。●七月の異名。
いそ-ぐ いそがば、いそげ[急](自、か四) ●速かに爲す、急に行く、せく。●仕度す。
いそ-ぐ いそがば、いそげ[急](他、か四) 速かになさしむ、急に行かしむ、せく。
(いそく-るゐ[異足類](名)【動】腹足類中の一小類、體は透明にして、介殻は螺旋狀又は烏帽子狀或は全く無きものあり、足扁平にして長く、これを上にして游泳す、雌雄異體にして、多く暖海に産す。
いそ-ざんせう[磯山椒](名)【植】薔薇科に屬する小灌木、暖地の海邊に生ず、葉は山椒に似て小く、冬凋まず、夏の初、五瓣の白花を開く、實小くして圓し、(小石積)。
‡いそ-し[勤](形、二) よくつとむるさまなり、「いそしきわけと褒めむともあらず」。
いそ-しぎ[磯鴫](名) 海邊に住む鴫。
いそ-しば[磯芝](名)【植】褐藻類の海藻、本邦太平洋岸の岩石に叢生す、高さ一寸乃至五寸、絲狀にして往々捻れて螺旋狀をなす、軟骨質にして色は暗褐色なり。
‡いそし-む[勤](自、ま四) ●つとめはげむ、はたらく。●功を立つ、事をなす。
‡いそ-ぢ[磯路](名) ●磯邊のみち。●磯の邊。
いそ-ぢ[五十年](名) 歳の五十年なれること。
いそ-ちどり[磯千鳥](名) 磯邊に居るちどり。
いそ-つぐみ[磯鶇](名)【動】鶇(つぐみ)の一種、形ひよどりに似て大なり、尾長く、色青黑し。
いそ-な[磯菜](名) 磯に生ずる草の食用とすべきもの。
‡いそな-どり(名)【動】「ちどり」の異名。
‡いそ-ね[磯根](名) いそ。いそべ。

いそ-ね[磯寐](名) 磯邊にやどりて寐ること。「す」
‡いそ-の-かみ[石上](枕) 「ふるき」「降る」等に冠す。
いそ-の-き(名)【植】鼠李科の灌木、葉は互生し卵形にして短き葉柄を具ふ、花は葉腋より出でて繖形をなす。
‡いそは-く(自、か四) ●勤めつとむ、いそしむ。●爭ふ、競ふ、「いそはく見れば神ながらならし」(萬葉)。
いそ-ばな[磯花](名)【動】珊瑚の一種、隔壁及觸手は八あり、群體は樹狀をなす、赤黄の二種あり。
‡いそば-ふ[戯](自、は四) うかれて遊び戯る、あそぶ、たはむる、そばえる、「吾が父を取らくを知らにいそばひ居るも」。
いそ-ひよどり[磯鵯](名)【動】いそつぐみ。
‡いそ-ふ[挑](他、は四) ●いどむ。●爭ふ、競ふ。 「同じ。
いそ-ふぐ[磯河豚](名)【動】「きたまくら」に
いそ-ぶし[磯節](名) 俗曲の一種、常陸の磯濱町より起る。
いそ-ぶね[磯鮒](名)【動】隆頭魚科の魚、體は長くして側扁、鱗は櫛狀にして茶褐色なり。
‡いそ-ぶり[磯觸](名) 磯邊によする波。
いそ-べ[磯邊](名) 磯のほとり。
‡いそ-ま[磯間](名) 磯のほとり。
いそまき-たまご[磯卷玉子](名) 一種の料理、淺草海苔にて玉子の薄燒を卷きたるもの。
‡いそ-まくら[磯枕](名) 舟中にてたびねすること、なみまくら、「天の川原に一まくら」。
いそ-まつ[磯松](名) ●磯邊に生ふる松の稱。●【植】磯松科に屬する灌木、葉細く、花は五瓣にして紅色又は黄色なり、(石蓯蓉)。

いそ-まめ[磯豆](名)【植】莧(ひゆ)科に屬する越年草、暖地の海邊に自生す、形なたまめより小し。
いそ-むし[磯蟲](名)【動】海の淺瀬に棲息するちひさき蟲の總稱。
いそ-め[磯蚯蚓](名)【動】環蟲類の一種、みみずに似て長く五六寸より一尺に及び金屬性の光澤を有し、體環の兩側には足に相當する突起あり、海岸の沙中に住み、釣餌とす。
‡いそ-め-く[急](自、か四) いそいそす。
いそ-めばる(名)【動】「そいを」に同じ。
いそ-もく(名)【植】褐藻類の一種、全體四五寸乃至一尺、莖刀形にして枝の脚部は圓く、末梢は平扁、頂端は鋸形にして鋸齒あり、倒卵形の氣胞を有す。
いそ-もなか[磯最中](名) 菓子の一種、磯の形
いそ-もと[磯本](名) 磯の波うちぎは。 「の最中。
いそ-もの[磯物](名) うみくさ、海藻。
‡いそ-や[磯屋](名) 磯邊にある家。
‡いそ-やかた[磯館](名) 前條に同じ。
いそ-やき[磯燒](名) 一種の菓子、饂飩粉に砂糖・鷄卵を加へ、砂糖醬油を和して煉り、餡を包みて燒 「きたるもの。
いそ-わ[磯廻](名) 磯のほとり。
いそ-わし[磯鷲](名)【動】海邊に棲む鷲。
(い-ぞん[異存](名) 他人と異なりたる意見。
い-そんず[射損](他、さ變) 射たる矢まとを外る。
いた[板](名) ●材木を薄く扁くひき割りたるもの。●金屬又は石などを薄く扁くなしたるもの。●いたのもの。——の-もの[板物] 板を芯に入れて、たゝみたる織物。
いた-あふぎ[板扇](名) 薄き板を重ね、あや絲にて綴りたる扇。

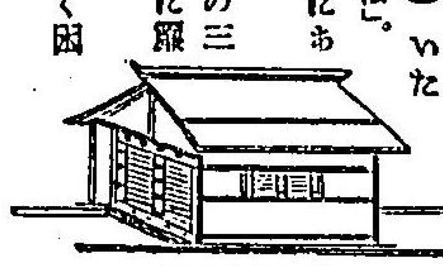
(い-たい[衣帶](名) ●ころもとおび。●装束、束帶。
(い-たい[異體](名) つねにかはりたる姿。
いた-いし[板石](名) 板の如く、薄く扁き石。
(いたい-どうしん[異體同心](名) からだはことなれども、心さまのおなじきこと、即ち、極めて親密なるあひだがらにいふ語。
いたい-け(名、副) (稚氣の轉)小兒などのいたいたしく、あはれむべきさまにいふ語。
いたいけ-ざかり(名) 小兒のきはめていたいけなる年頃。 「●粘板岩。
いた-いし[板石](名) ●板の如く扁平なる石。
いたいた-ぐさ[痛痛草](名) 「いらくさ」に同じ。
いた-いた-し[傷](形、二) はなはだあはれむべし。
(い-だう[醫道](名) 醫術の道、醫者の道。
(い-だう[夷道](名) 平坦なる道。
いた-おひ[板笈](名) 長方形の薄板に太き緣を付け、其の下端を長くして脚とし、連索を付けて背に負ふもの、修驗者の具。



[きがたい]

いた-がき[板垣](名) 板にて造りたるかき。
いた-がこひ[板圍](名) 普請場などの外がこひ、假の板屏。
いた-かす[板糟](名) いたのごとくにかためたる酒のかす。 「したるもの。
いた-がね[板金](名) 金屬を板のごとくに扁く
いた-がひ[板飼](名) 馬をつながずして、厩の中に放ちがひにすること、(擺飼)。

‡いた-かぶ[板株](名) 徳川幕府より與へられたる版權。
いた-かべ[板壁](名) 板張にしたる家の壁。
いた-がへし[板返](名) 屋根の板を葺きかふること。
いた-がみ[板紙](名) 板の如き厚くかたき紙。
いた-ガラス[板硝子](名) 「ガラスいた」に同じ。
いた-からど[板唐戸](名) 板を二枚ならべ、上下に樞(くるる)を附したる戸。
いた-ぎれ[板切](名) 板の斷片(きれ)。
(い-たく[依託](名) たよること、たのむこと。
いだ-く[抱](他、か四) ●腕の内に物をかゝへもつ、だく。●なかに囲む。●心中に藏す。
(いたく-しやげき[依託射擊](名) 照準を正確ならしめんが爲に、銃を塹壁に托して射擊すること。
(いたく-でんぱう[依託電報](名) 配達人に依托して差出すことを得る電報。
いた-ぐら[板倉](名) 板を壁として造りたる倉。
‡いた-ぐるま[板車](名) 古昔、人の乘りたる車、板を張りて作り、武士・下級の官吏等の乘用とせしもの。
‡いたけ-し[猛](形、一) いたし、「いたけくの日にけに増せば」。
いた-ご[板子](名) 舟の底にあるあげいた。



[しごたい]

いた-ごし[板輿](名) 屋形の三方を板にて張り、前と横窓とに簾を掛けたる輿。
いた-ごと[痛事](名) 甚しく困りたること。
いたこ-ぶし[潮來節](名) 徳川時代の中頃に、

下總の潮來(いたこ)より流行し初めたる俗謠。
いた-こんがう[板金剛](名) 板を裏に付けたるぞうり、ざうりげた、いたつけ草履。
いた-し[甚](形、一) ●はなはだし、きつし。●いと甚し。
いた-し[痛](形、一) ●身體にいたみを感ず、いたみあり。●心もひなやまし、いたまし。●憐れむべし、いたはし。——がゆし[痛痒](名) 掻けば痛く、掻かねばかゆきこと、何とか處置せざるべからざれど、分別のつきかぬるにいふ。 「歌。
‡いだし-うた[出歌](名) 五節の舞のときうたふ
‡いだし-うちき[出袿](名) 「いだしぎぬ(い)」。
いた-じき[板敷](名) 板を敷きたるところ。
‡いだし-ぎぬ[出衣](名) (い)古昔、男子の常服の下襲は裾を袴の内に入るべきを、外に出して、上着の裾の下より見ゆるが如く着ること、又その下襲。(ろ)古昔、女房の簾の下より衣の袖・裾などを出したること、又その衣。 「供の者の乘る車。
‡いだし-ぐるま[出車](名) 古昔、貴人の外出に
いだし-づま[出褄](名) 「いだしぎぬ(い)」。
いた-じとみ[板蔀](名) 裏に板を張りたる蔀。
‡いだし-ぬ-く[出拔](他、か四) 人をして油斷せしめ、其の虚に乘じてせんをこす、だしぬく、「途にいだしぬかれにけり」。
いた-じめ[板締](名) 染め方の名、ちりめん其の他の絹物の類を板にて締め、花卉・蝶鳥などの模樣を染め出したるもの、專ら婦人の下帶に用ふ。
いたじめ-らふ[板締蠟](名) 魚油中より濾收したる蠟分。
いた-す[致](他、さ四) ●及ばしむ、到らしむ、おくる、とゞく、はこぶ。●來らしむ、まねく、あ

つむ。「賢者を—」。㊂ゆだぬ。まかす。「命を—」。㊃極む。審かにす。「理を—」。㊄行ふ。爲す。

いだ・す さしすすせせ「出」(他、さ四) ㊀内より外へやる。此より彼へやる。㊁現はす。「見—」。㊂行ふ。作す。「奇計を—」。㊃吐く。言ふ。

いただき「頂」(名) ㊀あたま。頭上。㊁みね。山巓。㊂物の最高處。——**もち**「戴餅」(名) 糕(シン)を圓く扁くして、中に餡を嵌たるもの。十——**もちひ** ダイモ「戴餅」(名) 古昔、元日の祝賀に、兒女の頭上に餅を載せしこと。

いただ・く かきくくけけ「戴」(他、か四) ㊀頭上に載す。のす。㊁高くさしあぐ。さゝぐ。㊂君長として敬ひ仕ふ。㊃賜んでもらひ受く。

いた・だたみ「板疊」(名) えんに板を入れてつくりたる疊。

いたち「鼬鼠」(名)【動】肉食類中鼬鼠科に屬する哺乳動物、蹠行にして指趾五あり、尾長く、其基部に肛門腺ありて、窮したる場合には惡臭を放つ、これを「いたちの最後屁」といふ。——**うを**「鼬鼠魚」(名)【動】一種の魚、頭は大にして、體は延長し、尾に至るに從ひ次第に小となる、全身は細鱗を以て覆はれ、體色は褐色にして體長一尺五寸に達す、深海に棲息す。十——**とっこ**(名) 小兒の遊戲、二人互に手の甲を抓みあひ、順々に重ねゆくこと。——**のめかげ**「鼬鼠目蔭」(名) 手を目上に翳(カザ)して、遠方を見ること。——**のみちきり**「鼬鼠道切」(名) 全く往き來の絶ゆるにいふ語。

十**いたつ・がは・し** ワシ―ガ(しくしくしき、しけれ)「勞」(形、二) ㊀いたく勸勞するさまなり。ほねをりてあり。㊁わづらはし。なやまし。

いた・つき「板付」(名) 矢ぢりの一種、多く弓術を學ぶときに用ふ、形小にして鋒扁し。(平題箭)。

いたつき「勞」(名) ㊀ほねをり。勸勞。㊁なやみ。びやうき。

いたづ・く かきくくけけ「勞」(自、か四) ㊀ほねをる。つとむ。㊁やむ。つかる。

いたづ・く かきくくけけ「勞」(他、か四) いたはりあつかふ。ねぎらふ。なぐさむ。

いた・つけ「板付」(名) 釘の一種、長さ四分以上六分以下のもの、板を打ち付くるに用ふ。——**ざうり** ウリ―ゾ「板付草履」(名) ざうりの裏に板を付けたるもの。ざうりげた。

いたって「至」(副) えごく。もつとも。きはめて。

いたづら「徒」(名) ㊀無益にして惡しきたはむれ。むだなるあそび。(惡戲)。㊁益なきこと。用なきこと。むだ。むえき。むよう。㊂みだら。淫奔。——**いね**「徒寢」(名) あだね。ひとりね。——**ごと**「徒言」(名) 無益なる言語。むだぐち。——**ごと**「徒事」(名) いたづらなるわざ。——**じに**「徒死」(名) 死にても其かひなきこと。むだじに。——**に**「徒」(副) 無益に。むだに。——**ね**「徒寢」(名) たゞひとり寢ること。いたづらぶし。——**びと**「徒人」(名) 何の役にもたゝぬ人。——**ぶし**「徒臥」(名) いたづらね。——**もの**「徒者」(名) ㊀役にたゝぬもの。㊁惡戲をなすもの。㊂淫奔なるもの。㊃【動】「ねずみ」の異稱。——**こ**「徒子」(名) いたづらをする小兒。

いた・で「痛手」(名) 重き負傷。ふかで。おもで。ぢゆうしやう。

いた・ど「板戸」(名) 板にて造りたる戸。

いた・どり「虎杖」(名)【植】蓼(タデ)科に屬する草本、酸味を有し、莖は帶赤色にして二尺内外の高さに達す、葉は長楕圓形狀をなし、夏の頃、紅白の小花を開きて實を結ぶ。(酸模)。

いた・の・ま「板間」(名) 床に板をしきて、蓋をなさざる所。十——**かせぎ**「板間稼」(名) 湯屋にて、他人の所有物を窃かに取る盜人。

いた・の・もの「板物」(名) 板をえんに入れて、たゝみたる織物。

いた・ばさみ「板挾」(名) ㊀板と板との間にはさまること。「—のふみ」。㊁甲乙兩者の間にたちて、去就を決しかぬること。

いたは・し シ―ワ(しくしくしき、しけれ)「勞」(形、二) ㊀いそし、いそがし。㊁いたまし。ふびんなり。(可憐)。㊂なやまし。やまし。(病、痛)。

いた・ばし「板橋」(名) 板にて造りたる橋。

十**いた・はじかみ**(名)【植】「さんせう」の古名。

いたはり リ―ワ「勞」(名) ㊀功あること。ほねをり。㊁あはれみ。ねぎらひ。㊂やまひ。いたづき。

いたは・る ル―ワ(らりるるれれ)「勞」(他、ら四) ㊀いたはしく思ひて愛憐す。㊁なぐさめて優待す。ねぎらふ。

いたは・る ル―ワ(らりるるれれ)「勞」(自、ら四) ㊀勸勞す。ほねをる。つとむ。㊁やむ。つかる。

いたび「木蓮子」(名)【植】桑科に屬する蔓草、葉はもくせいに似て鋸齒なく、冬凋まず。——**かづら**「木蓮子葛」(名)【植】「いたび」に同じ。

いた・びき「板挽」(名) 材木をひきわりて板となすこと。又、其工人。

いた・びき「板引」(名) 糊をつけたる絹を板に張りて、光澤をいだしたるもの。

いた・びさし「板廂」(名) 板にて作りたるひさし。

十**いた・ぶ** ばびぶぶべべ「傷」(自、は四) ふかくかなしむ。いたむ。かなしぶ。

十**いた・ぶ** びびぶぶぶれびよ「甚振」(自、は上二) ㊀はなはだしくなりゆく。㊁あらくなる。

いた・ぶき「板葺」(名)「いたぶきやね」の略言。——**やね**「板葺屋根」(名) 板片を以て葺きたる屋根。

いた・ぶね「板舟」(名) 板を以てかりにつくりたるふね。

いた・ぶ・る らりるるれれ「搖」(他、ら四) ㊀脅迫して物を求む。㊁物を動搖せしむ。ゆすぶる。

〰**いた・ぶ・れる** れれれるるれれれよ「搖」(自、ら下一) ゆれうごく。

いた・べい「板屏」(名) 板にて造りたる屏。(板障)。

いた・べうし ウシ―ヒョ「板表紙」(名) 板にて造りたる表紙、主に折り手本などに付く。

いた・ま「板間」(名) ㊀「いたのま」の略言。㊁屋根のふき板の間。

いたま・し しくしくしき、しけれ「傷」(形、二) いたむべし。可憐なり。哀なり。いたはし。かなし。

〰**いた・まへ** エ―マ「板前」(名) まないたをつかさどる人。れうりにん。

いたみ「傷」(名) ㊀哀しむこと。(傷)。㊁身體に傷など受けてなやむこと。いたしと思ふ感覺。(痛)。㊂ものの破損又は瑕疵。

いたみ・い・る らりるるれれ「痛入」(自、ら四) ふかくいたみ思ふ。おそれいる。

いたみ・ざけ(名)「伊丹酒」 攝津國伊丹より出す「酒。(丹醪)。

いた・む まみむむめめ「痛」(自、ま四) ㊀いたみを感ず。(疼痛)。㊁もだゆ。うれふ。㊂やぶる。こはる。

いた・む めめむむむるめよ「傷」(他、ま下二) ㊀いたみを感ずるに至らしむ。㊁苦しむ。なやます。㊂こはす。やぶる。

いた・む まみむむめめ「悼」(自、ま四) 人の死亡せるをかなしみなげく。(傷)。

いた・む めめむむむるめよ「撓」(他、ま下二) 革を打ちかたむ。たはむ。ねる。

いた・め「板目」(名) ㊀板と板とのあはせめ。㊁板の木理のあらくして、直く揃はぬもの。

いため・がは ワ―ガ「撓革」(名) いためて練りたる革。

いため・がみ「板目紙」(名) 紙を糊にて、いくへも張り重ねたるもの、板に張りてつくる故に板目あり、書物の表紙などにつくる。

いため・はだ「板目肌」(名) 刀の地鐵の鍛方、鍛ひたる目の木理の如くに見ゆるもの。

いため・ぼり「板目彫」(名) いための板に彫刻をなすこと。こぐちぼりの對。

〰**いため・つ・ける** けけけるけれけよ「痛付」(他、か下一) まのあたり責めなじる。

〰**いた・める** めめめるめれめよ「煠」(他、ま下一) 食物を油にていりつく。

いた・もの「板物」(名)「いたのもの」の略言。

いた・や「板屋」(名) 板にて屋根をふきたる家。——**がひ** イ―ガ「板屋貝」(名)【動】瓣鰓類中單柱類に屬する貝、肉柱即ち後肉柱は一本にして味美なり、脚はこれを缺き、兩殻は大小不同にして、貴鍋或は杓子などに用ひらる、南海に多く產す。いたらがひ。(文蛤)。

いた・やね「板屋根」(名) いたにてふきたる屋根。

十**いた・やぐし**「痛矢串」(名) 身に徹して重傷を負はしめたる矢。(流矢)。

いたら・がひ イ―ガ(名)【動】㊀「いたやがひ」の一名。㊁「あかがひ」の一名。

いたり「至」(名) 物事の極度。きはまり。

いた・る らりるるれれ「至」(自、ら四) ㊀到來す。きたる。㊁到着す。とゞく。㊂及ぶ。㊃極まる。(到)。

いた・ゐ「板井」(名) 板を以て圍ひたる井戸。

(**い・たん**「異端」(名) ㊀其道にあらざること。㊁正しき道に反したること。

いち「市」(名) ㊀多數の人集まりて賣買すること、又、其場所。㊁市街。まち。——**をなす**「爲レ市」 人多くあつまるにいふ。

(**いち**「一」(名) ㊀物の極、㊁對なきこと。最上。㊂其ものゝみなること。ひとり。㊃ひとたび。いちど。㊄まじりけなきこと。もつぱらなること。㊅ひとしきこと。同じきこと。㊆三味線の絲の最も太くして最も上にあるもの。㊇髻を結びたる元結より後方の部分。

(**いち**「一」(數) 數のはじめ。ひとつ。

(**いち—**「一」(接頭) ㊀或語に冠して確定して指さざる意を表はす。ある。「—日」。㊁或語に冠して全體の意を表はす。すべての。みな。「—座大いに驚く」。

いち—「逸」(接頭) 或語に冠してすぐれてはやき意を表はす「—あし」「—はやく」。

(**い・ぢ**「意地」(名) ㊀こゝろね。根性。㊁思ひこみたることをつらぬかんとすること。㊂ことさらに人にさからふこと。

いち・あし「逸足」(名) 速かに歩行すること。いそぎ「あし。

(**いち・いたい・すゐ**「一衣帶水」(名) 幅狹き河海。

(**いち・いち**「一一」(名、副) ひとつゞゝ。

〰**いぢ・いぢ**(名、副) いぢけたるさまにいふ語。

(**いち・う**「一宇」(名) 一つの家屋又は殿堂。

(**いち・う**「一宇」(副) 殘らず。悉く。

(**いち・えふ** ヨ―ウ「一葉」(名) ㊀一枚の木葉。㊁こぶね。小船。——**らん**「一葉蘭」(名)【植】蘭科に屬する小草、深山に生ず、莖一本葉一枚にして小花を開く。

(**いち・おう**「一應」(副) ひとゝほり。「—ごもつとも」。

(いち-がい[一概](名,副) ❶いち度に。同時に。❷おしなべて。ひきくるめて。
(いち-がうゞ[一毫](名) ❶一本のけすぢ。❷少許のもの。
いちかは-がみいちかは[市川紙](名) 甲斐國西八代郡市川大門村邊にて製する抄入紙。
いちがふ-ますいちがふ[一合枡](名) 凡一合を入るゝます。内方二寸一分、深さ一寸四分五厘。
(いち-がん[一眼](名) めつかち。かため。どくがん。(獨眼)。
(いち-ぎ[一義](名) 一つのことわり。いちり。
(いち-ぎ[一議](名) たゞ一度の評議。
(いち-ぎ[一儀](名) ひとつの事。一件。
{いち-ぎたな[意地穢](名) むさぼりてのみくひすること。(卑食)。
いち-くさ(名) 【植】「まんねんぐさ」に同じ。
いちぐ-さしかけ[一具差懸](名) 「いちぐゆがけ」に同じ。
いちぐ-ゆがけ[一具𩊱](名) 左右の手に掛くる革のゆがけ。古昔、軍陣に用ひしもの。
‡いち-ぐら[市座](名)市の商品を陳列せる處。肆。
いちぐら-ずみ[一庫炭](名) いけだずみ。
いちぐ-るいちぐる「非」(他,ら四) 「いぢる」に同じ。
(いち-げ[一夏](名) 【佛】佛家にて、四月十五日より七月十五日までの稱。其間を安居(あんご)の期とす。
(いち-げい[一藝](名) 一つの技藝又は才能。
(いち-げつ[一月](名) ❶ひとつき。❷年の初めの月。しやうぐわつ。
{いち-げる(自,か下一) ❶おそれちゞむ。そのゝく。(戰慄)。❷堅さにかじく。
(いちげん-きん[一絃琴](名) 一條の絃を張りたる琴。すまごと。
いちげん-ろん[一元論＝Monism](名) 【哲】宇宙の現象の本體は唯一なりとする論。又、唯一の原理を立て、一切を說明する說。
いち-こ[市子](名) くちよせ。あづさみこ。(巫女)。
いちご[苺](名) 【植】薔薇科に屬する灌木。莖・葉共に刺多し。花托の中心高く突起し、其上に許多の子房ありて多漿なる假果をなす。(覆盆)。――-あじさゐ[苺鱠](名) 一種の料理。大根をおろし、酢にて蜜柑の實とあへたるもの。
(いち-ご[一期](名) 一しやうがい。
‡いち-こち[壹越](名) 「いちこつてう」の略言。――-てうてう[壹越調](名) 十二律の一、官音なり。
(いち-ごん[一言](名) ひとことば。すこしのことば。――-はんく[一言半句](名) すこしのことば。
(いち-ざ[一座](名) ❶第一番に位する坐席。かみざ。❷其座全體。❸おなじ座席。❹一つの座位。「一の評」。
(いち-さんくわ-ぶつ[一酸化物](名) 【化】酸素一原子と化合してなれる酸化物。
(いち-じ[一時](副) ❶しばらく。ざんじ。❷かつてありしとき。あるとき。
いちじ-かき[一字書](名) 字を一字づゝ書きて、その優劣を競ふ遊戲。
(いちじき-きやういちじき[一食頃](名) 一度食事をするばかりの極めて僅かの時間。「じ」。
(いちじ-きん[一時金](名) 「いちじしきん」に同じ。
(いちじ-ごめん[一字御免](名) 「いちじはいりやう」に同じ。
(いちじ-しきん[一時賜金](名) 官吏・軍人など、其の時かぎりの下賜金。
(いちじ-はいりやう[一字拜領](名) 高貴の人の諱の一字を拜領して自己の諱をつくること。
(いちじ-はうていしき[一次方程式](名) 【數】たゞ一つの未知數の第一乘のみある方程式。即ち、$3x+17=32$の如し。
(いちじ-ふさいり[一事不再理](名) 【法】旣に判決を經たる事件は、更に審理せずといふ原則。
いち-じゆく(名) 【植】桑科に屬する木。葉は大形にして分裂し、果實は五月頃葉間に結ぶ。(無花果、天仙果)。
(いち-じよう[一乘](名) 【佛】成佛すべき唯一の道。――-の-ほふ[一乘法] ❶成佛すべき唯一の敎法。❷法華經に說ける法。
いち-じるし[著](形,二) あきらかに知れわたれる。かくれなし。ちよめいなり。「同じ」。
‡いち-じろし[著](形,一) 「いちじるし」に同じ。
{いちぜん-めし[一膳飯](名) 飯を椀にもり、一椀づゝ價を定めて賣るもの。――-や[一膳飯屋](名) いちぜんめしを賣る店。
(いち-ぞく[一族](名) 同じ族。血屬。
(いち-ぞん[一存](名) おのれひとりの考へ。
(いち-だい[一代](名) ❶人の一しやう。❷一家の戶主。――-き[一代記](名) 人一代の事蹟をかきあらはしたる記錄。(傳)。
(いち-だいじ[一大事](名) ひとつの大なる事。容易ならぬ事。「身の一」。「一の和氣」。
(いち-だん[一團](名) ひとかたまり。ひとくみ。
(いち-だん[一段](名,副) ❶ひときり。ひときり。❷ひときは。ひときは。いつそう。――-くわ

つよう[一段活用](名) 【文法】動詞の語尾變化の一。――-らく[一段落](名) ひとまとまり。ひときり。「文章の一」。
(いち-ぢやういちぢやう[一定](名) 確定して動かすべからざること。一つに定まること。いつてい。「一もなきことなれば、ゆるし玉ふ」。「に」。
(いち-ぢやういちぢやう[一定](副) かならず。たしかに。
(いち-ぢん[一陣](名) ❶ひとまとり。「一の風」。❷戰陣の備へ立ての一隊。❸すべての軍隊。
(いち-づ[一途](名) ひとすぢ。ひたすら。
{いち-づく[意地盡](名) いぢのかぎりをつくすこと。はりあひ。いきはり。
(いち-でうゞ[一條](名) ❶ひとすぢ。❷一つの事。「お話しの一就引して」。
(いち-ど[一度](名,副) ひとたび。いつぺん。
(いち-どう[一同](名) ❶同じきこと。❷全體。
(いち-どう[一同](副) みな。いづれも。
いち-どき[一時](名) ひとときに。いちじ。
(いち-どく[一讀](名) いつぺんよむこと。――-くわい[一讀會](名) 第一讀會に同じ。
(いち-なん[一男](名) そうりやう。ちやうなん。
(いち-に[一二](名) ひとつふたつ。わづかの數。――-さんくわ-ちつそ[一二酸化窒素](名) 【化】「あさんくわちつそ」に同じ。
(いち-にち[一日](名) ❶朝より夜までの間。ひとひ。まゆうぶつ。❷朝より次ぎの朝までの間。一晝夜。❸あるひ。❹月の第一の日。ついたち。――-ていい[一日程](名) 一日にあゆみ得るみちのり。――-へんじ[一日片時](名) ひとひ。かたときゝ。まばしの間。
(いち-によ[一如](名) ❶相異ならざること。二ならざること。「邪正一」。❷【佛】眞如實相の理。
(いち-にん[一任](名) ❶まかせきり。❷官職にあること。
(いち-にん[一人](名) ❶ひとり。❷主權者。天子。「一慶あれば」。――-たうせんいちにん[一人當千](名) 一人の力よく千人にも當たること。――-まへまへ[一人前](名) ❶人一人に供すべきだけの分量。❷人一人の負擔額。「一一圓」。❸人一人として の價値を有すること。
(いち-ねん[一年](名) ❶陰曆にて、三百六十日の稱。陽曆にて三百六十五日の稱。❷世紀又は年號の第一の年。❸ある年。
(いち-ねん[一念](名) ❶ひとすぢに思ひこみたること。又、ちよつと思ひ出だしたること。❷極めて短かき時間。
いちねん-ぐさ[一年草](名) 【植】一年ごとに新芽を出だす草の總名。いちねんさう。
(いちねん-こん[一年根](名) 【植】一年ぎりにて枯死する根。稻などの如きもの。
(いちねん-さうり[一年草](名) いちねんぐさ。
(いちねん-さんぜん[一念三千](名) 【佛】吾人の一念のうちに、三千の法界を具有すといふこと。
(いちねん-しぐわんへい[一年志願兵](名) 滿十七歲以上滿二十八歲以下の男兒にして、中學程度或は中學程度以上の學校を卒業するか、若しくは定規の試驗に及第したるものにして、現役中の諸費を支辨し、一個年間陸軍に服役する者の稱。
(いちねん-せい[一年生](名) ❶學校の第一年級に屬する生徒。❷【植】「いちねんこん」に同じ。――-しよくぶつ[一年生植物](名) 【植】一年間に、播種し成長し更に開花結實に至る迄の生代を了する植物。稻などの如し。
(いちねん-ぢゆう[一年中](名) 一年の始めより終りまでのあひだ。ねんぢゆう。ひとゝせのうち。
(いちねん-ふしやう[一念不生](名) 【佛】禪敎の所立にして、心性上に一念想をも生せざる境界の稱。即ち、頓敎の證果。
(いち-のう[一能](名) ひとつの技藝又は學術に通達すること。
‡いち-の-かみ[一上](名) 左大臣の異稱。太政官の事を總理せし故に名づく。
‡いち-の-かみ[市正](名) 古昔のいちのつかさの長官。「稱」。
‡いち-の-きさき[一后](名) 皇后宮を申し奉る。
いち-の-こ[一五](名) ぬひばりの一種。一寸五分のたけのもの。「稱」。
‡いち-の-だいじん[一大臣](名) 左大臣の異稱。
‡いち-の-つかさ[市司](名) 古昔、京都の市の事をつかさどりたる官。東と西とに分る。
いち-の-て[一手](名) 第一番の仕方。
‡いち-の-ひと[一人](名) 攝政又は關白の異稱。
いち-の-みこ[一皇子](名) 最初に生まれ給へる皇子。
いち-の-みや[一宮](名) ❶いちのみこ。❷諸國にある第一位の神社。「所」。
いち-ば[市場](名) 商人のあつまりて賣買をなす所。
(いち-はつ[一八](名) 【植】鳶尾科に屬する草本。葉は劍狀綠色にして、花は夏始に開く。花蓋の外面の片は細裂せる突起を有す。花梗は單一なると分岐せるとあり。花蓋の片は毛狀の鋸齒を有す。觀賞用として栽培せらる。(紫羅傘、鳶尾)。
いち-はやし[逸速](形,一) いきほひ烈し。

いきほひ疾し。すみやかし。とし。はやし。

†いち-はや-ぶ いちはやぶる[逸速](自、は上二) すみやかなる。はげしくなる。

{いち-ば-る いちばる[意地張](自、ら四) いぢを張りて、我思ふまゝをたてとほす。

(いち-ばん[一番](名) ㊀ひとくみ。㊁第一。㊂物品の中にて最も大なるもの。——がけ[一番駈](名) ㊀第一ばんに、敵陣にかけ入ること。㊁人に先んじて事をなすこと。——ぞなへ[一番備](名) 第一番目にそなへたる軍隊。——て[一番手](名) 第一番に繰り出す人數手勢。——でし[一番弟子](名) 弟子の中にて第一位にあるもの。——どり[一番鶏](名) 曉に、まづ第一に鳴くにはとり。——のり[一番乘](名) 先陣又は先頭となり、敵陣に向ひて第一に乘り入ること。——め[一番目](名) ㊀第一番。㊁芝居の舞臺にてはじめに行ふ狂言。——やり[一番鎗](名) 人より先に敵陣へかけいりて、鎗をいるゝこと。

(いち-ばん[一番](副) ㊀こゝろみに。かりそめに。「—、やって見やうか」 ㊁このうへもなく。ことにすぐれて。「—國のたからなるもの」

いちひ イチヒ[櫟](名)【植】殼斗科(ブナ)科に屬する常綠喬木。葉は披針狀をなし互生す。花は單性雌雄異株なり。飛驒・下野國等の高山に產す。木材は種々の用に供せらる。いちひがし。(石櫧)。

[いちび]

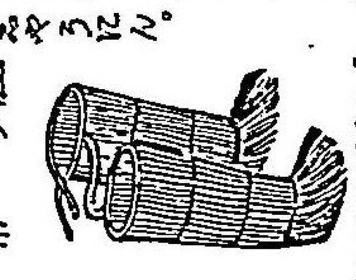
いちび(名)【植】錦葵(アフヒ)科に屬する一年生草本。高さ六七尺許。葉は心臟形にして尖り、花は葉腋に單生し、花瓣は黃色を呈す。雄蕊は花瓣より短し。莖の皮より纖維を採り、これを綱又は絲に製し種々の用に供す。きりあさ。(商麻)。

いちび(名)【植】田麻科に屬する一年生草本。高さ二三尺許。葉は長楕圓形にして尖る。花は商麻に似て小さく、果實は無花果に似て小し。種子は胡麻に似る。莖の皮より纖維を採り綱又は絲に製し種々の用に供す。多く海邊に栽培す。つなそ。(黃麻)。

いちひ-がし イチヒ[櫟樫](名)【植】「いちひ」に同じ。

いちび-がら[商麻稈](名) いちびの莖の皮をはぎたるもの。これを燒きて炭となし、ほくちを製す。

いち-びと[市人](名) 市に居る人。市に居て商賣に從事する人。あきうど。まちうど。


[いちびはばき]

いちび-はばき[商麻脛巾](名) 商麻の皮にて作りたるはゞき。

いち-ひめ[市姫](名) 市街を守護する女神。

(いち-ぶ[一分](名) ㊀古昔、國司の下官なる史生の稱。㊁一分銀の略言。㊂一尺の百分一。㊃一を十又は百に分ちたるものゝ一。㊄こわり。せうぶぶん。——ぎん[一分銀](名) 德川時代の銀貨幣の一。一兩の四分にあたりたるもの。

いちぶ(名)【植】「いちび」の一名。

(いち-ぶ[一部](名) ㊀ひとくみ。ひとそろひ。㊁あるぶん。㊂ぜんたい。㊃一卷若しくは數卷より成る書籍の一組。——しじゆう[一部始終](名) ㊀書物の始めより終りまでをいふ。㊁物事の始めより終りまでをいふ。

(いちぶつ-じやうど ジヤウド[一佛淨土](名)【佛】同じ佛界に生まれあふこと。

(いちぶ-はんけつ[一分判決](名)【法】或事件の一部分のみの判決。

いちぶ-めし[一分召](名) 古昔、式部省にて、諸國の史生を任命せしこと。

(いち-ぶん[一分](名) 其人の面目又は職責。「—が立たぬ」

(いち-べつ[一瞥](名) ちらとみること。ちよつとみ。

(いちべつ-いらい[一別以來](名) いちどわかれてよりこのかた。

(いちまい-かんばん[一枚看板](名) ㊀俳優又は其他遊藝人の技術のすぐれたるが、他と連名にせず、特に一枚の看板に其名を掲ぐること。㊁俳優又は其他遊藝人の魁(サキガケ)の稱。㊂一團隊の領袖。㊃衣類の上きものを、たゞ一枚の外に所有せざるをあざけりいふ語。

いちまい-だな[一枚棚](名) 稻などを積み載せて、田の中を引き行く小舟。たぶね。

いちまい-ゑ[一枚繪](名) 「にしきゑ」「えどゑ」に同じ。

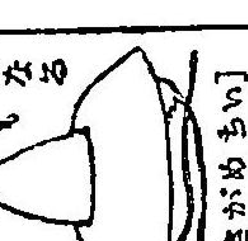
いち-まつ[市松](名) 「いちまつもやう」の略言。——こもん[市松小紋](名) いちまつもやうの小紋。——もやう[市松模樣](名) 一種の地紋。「いしだゝみ」に同じ。元文の頃、俳優佐野川市松といふもの、此模樣の服を着せしに起る。

(いち-み[一味](名) ㊀たゞ一つの品(多く藥品にいふ)。㊁我にひとしくみかたせるもの。——どうしん[一味同心](名) 心を一にして、深く結托してあること。又、其人。

(いち-みやう[一名](名) 又の名。別名。異名。

†いち-め[市女](名) 市に住居する女。又、女の商人。

(いち-めい[一命](名) ㊀人一人のいのち。㊁支那の上古にて、士となること。「—而僂」。


[いちめがさ]

いちめ-がさ[市女笠](名) 中高なるぬりがさ。古昔、婦人の多く用ひしもの。「あめふるひの—」。

{いち-める いちめる(他、ま下一) 弱者を虐待す。えくたに。さいなむ。

(いち-めん[一面](名) ㊀ひとかた。一方。㊁ひとつら。總體。——しき[一面識](名) ひとたびあひてみ合はせて、知己となりたること。「—の無いものに、かたいな無心」

(いち-もく[一目](名) ㊀たゞ一箇の目。㊁たゞひとめみること。「—瞭然たり」。㊂圍碁にて、一箇の碁子の稱。——さん-に[一目散](副) ひたすら急ぎて。脇目もふらずに。いっさんに。——おく(圍碁の語より出づ)強きものに譲る。

(いち-もち[逸物](名) ㊀拔群の人物。㊁駿足なる乘馬。又、鷹などにもいふ。「これ國光の—なり」

(いち-もつ[逸物](名) 「いちもち」に同じ。

(いち-もつ[一物](名) ㊀ひとつのもの。㊁胸中に、何か一條の惡しき計畫を抱くこと。

(いち-もん[一門](名) 一家族又は同姓の一族。

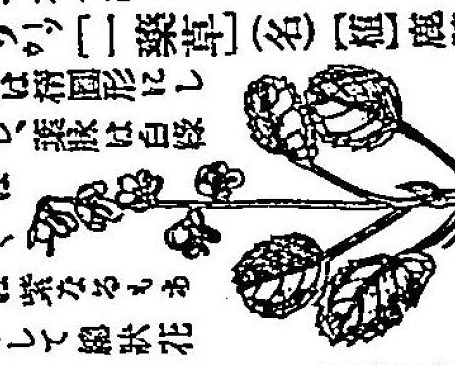
(いち-もん[一文](名) ㊀一錢の十分の一。㊁一つの字。一つの文。——じ[一文字](名) ㊀一といふ文字。㊁一といふ文字の如くに、眞直なること。㊂かけものゝ裝飾の一。普通のある紙帛の上下に、横につくるもの。——せに[一文錢](名) たゞ一文のぜに。わづかの金錢。——なし[一文無](名) 一もんの錢をも所有せぬこと。すかんぴん。——ふつう[一文不通](名) ㊀字一字をもよむを得ざること。すこしも字を知らざること。㊁互に一つのてがみのとりやりもなさざること。——をしみ[一文惜](名) わづかなる錢をも惜むこと。

(いち-や[一夜](名) ㊀日ぐれより夜明けまで。ひとばん。㊁あるばん。

(いち-やう ヤウ[一樣](名) ひとつさま。同じさま。

(いちやう-らいふく ヤウ[一陽來復](名) (冬至より陽氣きたりかへるの義) 陰曆にて、十一月又は冬至の稱。「—」に同じ。

いちや-ぐさ[一夜草](名)【植】「べんけいさう」


[いちやくさう]

(いちやく-さう ヤクサウ[一藥草](名)【植】鹿蹄草科に屬する草。葉は楕圓形にして深綠色を呈し、葉脈は白綠色なり。花瓣は六個にして多くは白く、稀には紫なるもあり。花梗は長くして總狀花序を生ず。觀賞用として栽培せらる。(鹿蹄草)。

(いちや-けんげう ケンゲウ[一夜檢校](名) (いちやだけ、檢校の身分なる義) 暫時の榮華にあふこと。

{いちや-ざけ[一夜酒](名) 一夜のほどにかもしたる酒。ひとよざけ。(甜酒)。

{いちや-づくり[一夜造](名) ㊀いちやのうちにつくること。㊁たゞ一時の間にあはせにつくること。

{いちや-づま[一夜妻](名) 遊女などの類。

(い-ちゆう[意中](名) ㊀心のうち。㊁心のうちにおもふこと。——の-ひと[意中人](名) おもふ人。こひしき人。

(い-ぢゆう[移住](名) 土地をかへて住居すること。外國にうつり住むこと。——みん[移住民](名) 本國より他國に移りすむ人民。

(いち-らく[一樂](名) 「いちらくあみ」又「いちらくおび」の略言。——あみ[一樂編](名) 和泉の人、土屋一樂の編み出でし籐細工。——おり[一樂織](名) ㊀いちらくあみ。㊁織物の名。精好なる絹帛にして浮き織りにしたるもの。

いち-らし(形、二) いたはしげなり。いたいけなり。

い-ちらす[射散](他、さ四) 矢を射て敵を

(いち-らふ ラフ[一臈](名) 年功によりて長たる人。「—の職人」「—の老僧」

(いち-らん[一覽](名) いちど目をとほすこと。ひとゝほり見ること。——ごていき-ばらひ[一覽後定期拂](名) 手形支拂人が手形所持人の呈示により、手形を一覽したる後、確定せる期間を經過せる日に、支拂ふこと。——ばらひ[一覽拂](名) 手形支拂人が手形所持人より手形を呈示すれば、直ちに支拂ふこと。

(いち-り[一里](名) 里程の名。普通三十六町をいへど、處によりては、五十町又は七十町をいふ。

(いち-り[一理](名) ひとゝほりの道理。

(いちり-いちがい[一利一害](名) 利と害と相伴ふこと。利と害と相半すること。

(いち-りう[一流](名) 他に異なりたる一派の流儀。「自我—をきはめたり」

いちり-づか[一里塚](名) 古昔街道に一里ごとに土を高くもり、榎などを植ゑし目標。(里堠)。

いちりやう-ざし リヤウ[一兩刺](名) 竹串に小魚二尾を刺して燒き、串の根を紙にて卷きたるもの。

いちりやう-ばん リヤウ[一兩判](名) 一兩に通ずる小判。

(いちりん-さう サウ[一輪草](名)【植】毛茛科に屬する草。高さは五六寸内外、小葉は深裂す。三四月の頃、白色の花を開く。萼片は大形にして五個あり。觀賞用として栽培せらる。(鵝瓶梅)。

いちりん-ざし[一輪插](名) 一輪又は二三輪の花ある枝をいくること、又、其ための小さき花瓶。
(いぢ・る[弄](他、ら四) 手にて物を玩弄す。もてあそぶ。
(いち-るゐ[一類](名) ㊀どうるゐ。㊁なかま。
(いち-れい[一禮](名) 一回禮を行ふこと。
(いち-れつ[一列](名) ㊀ひとならび。ひとつら。㊁なかま。くみ。——いつたい[一列一隊](名) みなひとひとむれ。
(いちれん-たくしやう[一蓮託生](名) ㊀【佛】念佛を稱ふれば、死後、もろ共に極樂の蓮華の上にうまるといふこと。㊁人と共に、善くもなれば惡しくもなること。
(いち-ろく[一六](名) ㊀すごろくなどにて、さいの目に一と六との出づること。㊁明治九年以前の休日、即ち、月の中にて、一日・十一日・二十一日及六日・十六日・二十六日の稱、此諸日は休暇と定まりたり。——しようぶ[一六勝負](名) ㊀すごろく。ばくち。㊁運任せに、冒險なる事を行ふこと。
(いち-ゐ[一位](名) 【植】松柏科の喬木、葉は線形にして互生し、葉腋に花をつく、雌雄異株なり、材は紅色を帶び、緻密なり。(樸木、水松樹)。
(いち-ゐ[一葦](名) 小さき舟。こぶね。
(いち-ゐん[一院](名) ㊀二人以上の上皇ましますとき、第一番めの上皇を申す語。㊁一つの寺院又は官廳。——せい[一院制] 國會が、國民の選擧に係かる議員を以て、組織したる一院のみなること。二院制の對。
(いち-ゑん[一圓](名) ㊀そうたい。ぜんたい。㊁我國貨幣の單位、一錢の百倍。
(いち-ゑん[一圓](副) ㊀ことごとく。みな。㊁ひたすら。一向。

†いつ[稜威](名) 尊嚴なる威光。
いつ[何時](名) いかと定まらぬ時。
いつ[何時](副) いづれの時に。「一行くか」。
いつ[五](數) 二と三とを合せたる數。いつつ。ご。
(いつ[一](數) 「いち」に同じ。——をきいてじふをしる[聞一知十] 知解の極めて敏捷なるにいふ。
い・つ[冱](自、た下二) こほりて破裂す。「いてる」。
い・づ[出](自、だ下二) ㊀うちより外へいづ。㊁あらはる。㊂發生す。おこる。㊃まぬかる。のがる。㊄ぬきんづ。すぐる。
いづ-[何](接頭) 武語に冠していづれの意を表はす。「一方」。
(いつ-いう[佚遊](名) あそびにふけること。たのしみあそぶこと。
いづ-いし[伊豆石](名) 伊豆國より出だす石材。多くは建築に用ひらる。
†いつ-か[五日](名) 五月五日の節句。
いつ-か[何時](副) ㊀いつともなく。いつのまにか。㊁おそかれはやかれ。早晩。㊂いづれの時か。いつごろか。㊃かつて。いつぞや。
(いつ-か[一價](名) 【化】水素一原子と化合し或はこれと入れ換はると、原子又は根に關していふ。——げんそ[一價原素](名) 【化】當量と原子量と同一なる原素、例せば、水素・鹽素の如し。
(いつ-か[一家](名) ㊀一つの家庭。㊁一家族。「一の整理」。㊂學術・技藝など、他と異なりて一派をなすこと。「一の學風」。——をきぢよす[機杼一家] 一派の言論又は調話などをつくりだす。
(いつ-かう[一向](名) ひとむきに心を注ぎ、他を顧ざること。——しゆう[一向宗](名) 【佛】淨土宗より分派したる眞宗の稱、親鸞上人の創始にかかる、一向に無量壽佛を念ずることを以て宗旨となすよりいふ、十一代顯如上人より門跡と號す。ざやうどしんしゆう。ほんぐわんじしゆう。もんとしゆう。
(いつ-かう[一向](副) ㊀ひとむき。ひたすら。㊁いつさい。すべて。
(いつ-かく[一角](名) ㊀【動】游水類に屬する哺乳動物、頭部白く背部黑斑にして、二本の牙あり、藥劑に用ひらる、北極の海に産す。㊁いつかくの角。㊂ひとかど。ひとすぢ。
(いつ-かく[一格](名) おのれひとりから一つの格式を立つること。
いつ-かけ[沃懸](名) ㊀いかけの音便。㊁器物の緣などを金屬を以て被ふこと。(鍍銀)。——ぢ[沃懸地](名) 「いかけぢ」の音便。
(いつ-か-げん[一家言](名) 自家主張の論說。
†いつ-かし[嚴](形、二) たふとし。いつくし。
いづ-かた[何方](代) どちら。どこ。
(いつ-か-ちゆう[一家中](名) 武家時代に、一家の臣僕をとりていふ語。「赤穗一の浪人ども」。
いつ-かど[一角](名、副) ひときはまされるさまにいふ語。
†いつか-の-せち[五日節](名) 古昔、五月五日に、天皇武德殿に出御ありて、行はれし宴會。
†いつが・る[聯](自、ら四) つながる。
いつかん-ばり[一閑張](名) 一種の漆塗り細工、机・茶筒などを紙にて張り、それを漆塗りにしたるもの、飛來(ひらい)一閑の創始にかかるといふ。
いつき(名) 【植】山茱萸科に屬する木、白色花瓣樣の四箇の苞より成れる總苞を有す、木材は種々の用に供せられ、果實は食すべし。やまぐは。やまぼうし。からぐは。(半被幼、四照花)。
†いつき[齋](名) ㊀いつくこと。㊁「いつきのみこ」の略言。
(いつ-き[一揆](名) ㊀烏合の兵、暴徒。㊁土民蜂起して、所在を抄掠するもの。
(いつ-き[一氣] ひといき。
(いつ-き[一騎](名) ひとりのうまのり。——うち[一騎打](名) ㊀一騎づつ列なりて行くこと。(單列)。㊁雙方一人づつ、鋒を交へて勝負を爭ふこと。
(いつき-かせい[一氣呵成](名) ひといきに、一文章をかき終ふること。
(いつき-たうせん[一騎當千](名) 一騎の力よく千人にあたること。
いつ-きぬ[五衣](名) 衣服の五品、即ち、表衣(うはぎ)・下襲(したがさね)・半臂(はんぴ)・単(ひとへ)・引倍衣(ひへぎ)の稱。
†いつき-の-みこ[齋御子](名) 古昔、天皇即位のとき、伊勢の大神又は加茂の神などに、つかへ奉らしめられし、未嫁の女王又は内親王。
†いつき-の-みや[齋宮](名) ㊀伊勢大神宮。㊁いつきのみこ。又、其居所。——のつかさ[齋宮寮](名) いつきのみやの事をつかさどりし官。
†いつき-の-ゐん[齋院](名) 加茂のさいゐん。——のつかさ[齋院司](名) いつきのゐんの事をつかさどりし官。
(いつき-むすめ[齋娘](名) たいせつにして、かしづきそだつる娘。秘藏娘。
†いつき-め[齋女](名) 神に奉仕する少女。
(いつ-きよ[一擧](名) ㊀ひとたびおこること。㊁たゞひとたびこゝろみること。ひとたびなすこと。「一して功を奏す」。㊂ひとたび出兵すること。「天兵一して」。——しゆ-いつとうそく[一擧手一投足](名) (ひとたび手をあげひとたび足をふみだす態) わづかばかりのはたらきにいふ語。——りやうとく[一擧兩得](名) ひとつのしわざにて、二樣の利益を收め得ること。
(いつ-きよう[逸興](名) おもしろみ。たのしみ。
(いつ-きよう[一興](名) 一の興あること。「これも亦一」。
†いつ・く[齋](自、か四) ㊀心身を清めて神につかふ。㊁かしづきまもる。たいせつにす。
いづ-く[何處](代) 「いづこ」に同じ。
いつ・く[射付](他、か下二) 射て中つ。
†いつくし[嚴](形、二) ㊀げだかし。いかめし。(嚴)。㊁うつくし。うるはし。(美)。
†いつくしび[愛](名) いつくしみ。
†いつくし・ぶ[愛](他、は四) いつくしむ。たいせつにす。
いつくしみ[愛](名) いつくしむこと。
いつくし・む[愛](他、ま四) ちようあいす。たいせつにす。あはれむ。いとほしむ。めぐむ。めづ。
いつく-どうおん[異口同音](名) 多くの人が聲をそろへて、皆物など語ること。
(いつ-くわ[一花](名、副) 暫しの間。
(いつ-くわい[一回](名、副) ㊀ひとたび。㊁ひとまはり。㊂一年。——き[一回忌](名) 死にて後、翌年の其日に行なふ佛事。
いつくわく-せんきん[一攫千金](名) 一仕事に、千金をつかみとること。(冒險事業にいふ)。
(いつ-くわん[一貫](名) ㊀錢一千文又は九百六十文の稱。㊁貫目千匁の稱。㊂首尾始終をつらぬくこと。ぬきとほすこと。
いづくん-か[安](副) 何處にかの意。どうしてか。「一知らん」。
いづくん-ぞ[焉](副) 何處にその意。どうしてぞ。「一知らん」。
いつ-け[一家](名) おなじ家のもの。親族。「一門」。
(いつ-けつ[一決](名) ㊀ひとたびきまること。㊁ひとつにきまること。
(いつ-けん[一見](名) ㊀ひとたび目をとほすこと。ちよつとみること。㊁ひとたび會合すること。——きうのごとし[一見如舊] 一見して意氣相投じ、むかしからの友の如くに、親密なる間柄となること。
(いつ-けん[一件](名) ㊀ひとくだりの事。㊁ある事件。
いつ-けん[一間](名) ㊀家の柱と柱との間。「家屋殿俗云兩殿、九間四面」。㊁六尺の長さ。
いつけん-や[一軒屋](名) 近隣のなきいへ。
いづ-こ[何處](代) どこ。いづく。
(いつ-こ[一己](名) おのれ一人。
(いつ-こう[逸口](名) いひあやまり。いひすぎ。
(いつこく-もの[一國者](名) ㊀一國を限りて、他の事を知らぬもの。頑固にして人の意見をいれぬもの。㊁腹立ち易き人。
(いつこく-せんきん[一刻千金](名) (蘇東坡の詩に、「春宵一刻直千金」とあるに出づ) 一刻の間にも千金の價値あること、其時間の興味大なるにいふ。
(いつこ-じん[一箇人](名) 國家・社會其他團體に對して、それを組織せる各人の稱。
いつこん-ぞめ[一斤染](名) べにの花一斤を以て、一匹の絹をそめたるもの、其色きはめてうすし。
いつ-さい[一切](名、副) のこらずのもの。全體。悉皆。——きやう[一切經](名) 【佛】佛教の經典の總名、經・律・論の三藏をいふ、凡て七千餘卷。

宇治黄檗山に板木あり。——きゅおやう[一切衆生](名)[佛]世に生存せるものゝ總稱。

(いっさく[一昨](名) 年月日にて、中一つ隔てて過ぎ去りたるを、——おつ[一昨日](名)をとゝひ。——てう[一昨朝](名)をとゝひのあさ。——ばん[一昨晩](名)をとゝひのばん。——ねん[一昨年](名)をとゝし。——や[一昨夜](名)をとゝひのよる。

(いっさつ[一札](名)一通の文書。「—仍而如件」

(いっさん[逸散](名)にげちること。——に[逸散に](副)ひたすらにいそぎて。「—かけゆく」

(いっさんくわたんそ[一酸化炭素](名)[化]木炭若しくは炭素化合物の燃焼の際、空氣の供給不充分なるとき生ずる無色の瓦斯。大氣に觸るれば淡青色の焰を發して燃え、二酸化炭素となる。炭火を焚くとき見ゆるものこれなり。

(いっサンマイ[一三昧](名)[佛]一念をこめて事をなすこと。一心不亂。

(いっし[一子](名)ひとりご。

(いっし[一紙](名)◯一枚の紙。二枚の文書。又、同じ紙。

(いっし[縊死](名)首をくゝりて死ぬること。

(いっし[逸事](名)世に多くあらはれざる事柄。

いづし[何](代)「いづち」に同じ。

(いっしう[一周](名)◯ひとまはり。◯満一年。

(いっしうき[一周忌](名)いっくわいき。「一週忌」

いつしか[何時](副)いつのまにか。「—秋も過ぎゆきて」

(いっしき[一式](名,副)ひとそろひ。そうたい。

(いっしき[一色](名,副)ひといろ。ひとえな。

(いっしそうでん[一子相傳](名)學術技藝などの奥秘を、我子の中ひとりに傳ふるのみにて、他にもらさゞること。又、其傳ふる奥秘。「—の術」

(いっしおん[一私人](名) 國家又は其統治機關に對して、其統治を受くる各人の稱。

(いっしどうじん[一視同仁](名)世人に對し彼此親疎の差別を設けず、おなじく仁愛をつくすこと。

(いっしつ[一室](名)おなじ室。ある室。ひとま。

(いっしはんせん[一紙半錢](名)紙一枚錢半文。轉じて、わづかなるもの。

(いっしゃう[一生](名)人のうまれてより死ぬるまでの間。(終身)。——がい[一生涯](名)いっしゃう。——けんめい[一生懸命](名)命にかけて物事をすること。

(いっしゃうさんたん[一唱三歎](名)詩文を一たび唱へて三たびこれに和すること。轉じて、詩文の巧妙なるを稱するにもいふ。

(いっしゃうぞく[一裝束](名)甲冑の五品、即ち「こて」「はいだて」「かぶと」「はらまき」「すねあて」の總稱。

(いっしゅ[一種](名)◯同類屬中の一物又は別異なる物。ひといろ。ひとくさ。◯いつそものに同じ。

(いっしゅつ[逸出](名)はなれいづること。

(いっしょ[一書](名)◯ある書物。◯一通の文書。「—呈上仕候」◯一冊若しくは一部の書物。

(いっしょ[一所](名)ひとゝころ。——けんめい[一所懸命](名)一箇所たまはりたる知行を、いのちにかけてたのみとなすこと。——ふぢゅう[一所不住](名)住所不定にして、永く同じ處に住まぬこと。

(いっしょ[一緒](名)一まとめ。又、同一。——に[一緒に](副)ひとまとめに。おなじく。ともに。

(いっしょうます[一升枡](名)物一升を量る桝。內方四寸九分、深さ二寸七分一厘。

(いっしん[一身](名)◯我身ひとつ。◯からだいっぱい。「—是膽」

(いっしん[一新](名)たびあらたまること。全くかはりあたらしくなること。

(いっしん[一審](名)[法]或事件の裁判を最初の裁判所が、事實及法律の點に就きて審判をなすこと。

(いっしん[一心](名)一方にのみむけたる心。——ふらん[一心不亂](名)心を一方にとらして、他をかへりみざること。

(いっしんけう[一神教=Monotheism](名)造化の神は惟一なりとする宗教。即ち、基督教、猶太教の如きをいふ。

(いっしんとう[一親等](名)[法]親等の一。或人と其人又は其人の配偶者より、一世を隔つるものゝ關係。例せば、或人と其親若しくは子との關係、又は其人と配偶者の親若しくは子との關係これなり。

いっす[逸](自さ變)◯それる。はしる。◯にぐる。のがる。◯ちる。うす。

いっす[逸](他さ變)◯はなつ。ゆるす。◯のがす。にがす。◯おとす。「名を—」

(いっすい[一水](名)◯ひとすぢの水流。◯ひとしづく。一たらし。「酒が—もない」

(いっすいもの[一種物](名)酒宴などを催すとき、各自に一種宛の肴をもちよること。

(いっすん[一寸](名)◯一尺の十分一。◯わづかの間。「—前は暗」——のがれ[一寸逃](名)當時責任を免れんとすること。——ぼふし[一寸法師](名)矮小なる人を嘲りていふ語。(矮人)。

(いっせ[一世](名)「いつせい」に同じ。

(いっせい[一世](名)◯一期の世。いちだい。いつせ。◯其當時。其時代。「—に傑出す」◯父子唯一

代移れること。◯歐洲に於ける同一名の帝王中、其第一の人を呼ぶ稱。

(いっせい[一齊](名,副)同時。又、等一。——しゃげき[一齊射撃](名)其部隊が同時にひとしく敵に對して射撃をなすこと。

(いっせいちだい[一世一代](名)◯一生涯。◯遊藝者などが、一生涯の中にて、これを限りと最も晴れの所作をすること。「—の大出來」

(いっせう[一笑](名)ひとわらひ。わらひぐさ。——にふす 氣にとめず又は眼中におかずして、其場の事をすますこと。

(いっせき[一夕](名)ひとばん。ある夜。

(いっせつ[一說](名)ひとつの說。又、ある說。

(いっせつ[一切](副)いつさい。いつから。「—知らぬ」

(いっせつたしゃう[一殺多生](名)[佛]一人を殺して、多くの人をたすくること。

(いっせのげんじ[一世源氏](名)皇子の臣下となりたる方に、源氏を賜はりたるもの。

(いっせん[一錢](名)◯圓の百分一。◯いちもんせん。一文。——きり[一錢切](名)中古、錢一文の竊盜をも、刑に處せしこと。一說に、過料として、犯人の持てる金は、一文たりとも取上ぐるをいふなりといふ。——あたひせず[一錢不直]いちもんのねうちもなし。

(いっせんどばらひ[一千度祓](名)祓ひの詞を千たび奏して祓除をなすこと。

いづせんれう[伊豆仙寮](名)[植]「うばがねもち」に同じ。

(いっそ(副)◯むしろ。◯どうしても。◯かへって。

(いっそう[一層](副)ひときは。ひとしほ。さらに。

いつぞや[日外](副)いつの頃なりしか、かつて。さきつころ。

(いったい[一體](名)◯おなじ身體。ひとつのからだ。◯おなじくみ。ひとつの關係。

(いったい[一體](副)◯すべて。おしなべて。◯もともと。どうかんがへても。

(いったう[一刀](名)◯一本のかたな。◯ひとたち。「—に斬りたふす」——さんれい[一刀三禮](名)佛像をきざむに、ひとかたなごとに三たび禮拜するをいふ。——りう[一刀流]劍術の一派。伊東一刀齋の創めしもの。——りやうだん[一刀兩斷](名)◯一刀にて、ひとつのものを二つにきりわること。◯果斷裁決を神速にすること。

(いったん[一端](名)かたはし。「—を以て推測す」

(いったん[一旦](副)いちど。ちよつと。

(いったんし[一彈指](名)指にてはじきみる間。極めて短き時間。一彈指頃六十五刹那。——きゃう[一彈指頃](名)前條に同じ。

(いっち[一致](名)◯ひとつになること。「人心—」◯同じきこと。合ふこと。

いづち[何地](代)いづこ。いづかた。どこ。

(いっちはんかい[一知半解](名)物事に就いて識る所の極めて淺薄なること。

(いっちゃうら[一帳羅](名)たゞひとかさね又は一枚の外、所有せざる晴れ着。

(いっちゃくしゅはん[一搩手半](名)ありひとゝかひとを張りたる間の長さに、其半の長さを加へたるもの。「—の彌陀の三尊」

いっちゅうぶし[一中節](名)淨瑠璃節の一種、都一中の創めしもの。

いつつ[五](名)古昔の時刻の名、今の八時。

いつつ[五箇](數)二と三とを合はせたる數。

いつつあこめ[五袙](名)五枚かさねてあこめを着ること、貴婦人の裝束。

いつつきぬ[五衣](名)五枚重ねたる樣に仕立てたる着物。古昔の婦人の服、俗に十二單(ひとへ)といふ。

いつつのたなつもの[五穀](名)五穀。即ち、米・稗・麥・豆・稻をいふ。

+いつつのをしへ[五教](名)儒學にて、仁・義・禮・智・信をいふ。

いつつをぐるま[五緒車](名)くるまの一種。くるまの簾の邊と、編み目の緣を覆ひたる革との間に、二條の風帶を垂れたるもの。昔のまゝ五緒車ともいふ。

いって[五手](名)「いつてぶね」の略言。

(いって[一手](名)ひとて。「—に引き受く」

(いってう[一朝](名)◯あるあさ。◯あらかじめも設けぬ時。——いっせき[一朝一夕](名)◯ひとあさとひとばんと。◯須臾の間。暫時。

(いってつ[一徹](名)◯一なる跡。おなじすぢ。◯ひとすぢにて、性質を具ふること。——もの[一徹者](名)ひとすぢに思ひこみたる事を、容易に動かさぬ人。

いつてぶね[五手船](名)古昔、伊豆より造り出だしゝ船。又、五挺立の船なりともいふ。

(いってん[一點](名)◯點ひとつ。「—の雲もなし」◯わづかばかりなる箇所。◯漏刻(ろうこく)の初刻。一夜を五更に分ち、一更を又五分して一點とす。

(いってん[一天](名)大空の全體。——か[一天下](名)あめのしたの全體。

(いってんこう[一點紅](名)◯妓女の異稱。◯すぐ

れたるもの。尤物。

(いってん-まかい[一天四海](名)「いってんか」に同じ。

いってん-の-きみ[一天君](名) いってんかに君たる人。

いってん-ばり[一點張](名) 他を顧慮せずに、思ひこみたる一事をのみ專心に力むること。

(いってん-ばんじよう[一天萬乘](名) 一天下をしろしめし給ふ所の皇位。又、主上を申し奉る語。

(いっ-と[一途](名) ひとみち。ひとすぢ。「政令ーに出でず」。

(いっ-とう[一統](名) ひとつにすべあはすること。

(いっ-とう[一統](副) のこりなく。いちどう。

(いっ-とう[一等](名) 第一、又、最上。――しん[一等親](名) 父母・養父母・子・養子をいふ。

(いっ-とう[一頭](名) ㊀ひとあたま。㊁一匹。(獸類などにいふ)。――ち[一頭地](名) あたまの高さ。「ーを拔出す」。

いっ-とき[一時](名) ㊀ひとゝき。㊁ざんじ。「ーの間も惜し」。

(いっとく-いっしつ[一得一失](名) 一つの利益あると同時に、一つの不利益あること。

いっと-ます[一斗枡](名) 一斗の量をはかる枡、内方一尺〇五分、深さ五寸九分一厘。

いづな-つかひ[飯綱使](名) (信濃國飯綱の神を使ふといふ義)狐をつかふ妖術。又、其人。

いつ-に[一に](副) ㊀べつには。ひとつには。または。あるひは。㊁もつぱら。ひとへに。

╪いづ-の-ちわき[稜威道別](名) いきほひよく道路をわけゆくこと。「間。

いつの-ブトン[五布蒲團](名) 表裏ともに五巾の布にて仕立たる蒲團。

╪いつ-の-むしろ[厳席](名) 神の御座に布くむしろ。

(いっ-ぱ[一派](名) 一の流儀より分派せる一流。

いづ-のり[伊豆海苔](名) 【植】伊豆の近海より產する甘海苔、色は濃黄綠色にして、香味多し。

(いっ-ぱい[一杯](名) ㊀十分に充ちたること。㊁のこりなく行きわたること。㊂酒一杯。「ーのまぬか」。――きげん[一杯機嫌](名) 酒に醉ひて愉快なる心地すること。――くはす 人をだます。

(いっ-ぱい[一敗](名) ひとたびやぶるゝこと。ひとたびまくること。――ちにまみる[一敗塗地] ひとたび敗れて、また爲す能はざるにいふ。

いっぱい-さぎ[一杯鷺](名) 【動】さぎの一種、最も小なるもの、肉少くして、漸く一杯に過ぎざるより此名あり。

(いっ-ぱう[一方](名) ひとつの方向。又、ある方向。

(いっ-ぱく[一白](名) ㊀九星の一、此の星に當る人は人に愛敬せらるれども嫉妬の念深く、輕佻なり、中年には苦勞多けれども、晩年に出世すといふ。㊁馬の肢の下端にのみ白斑あるもの。

いつ-ばかり[何時許](名) いつのころ。

(いっ-ぱつ[一髮](名) 一本の髮の毛。――せんきん[一髮千鈞](名) (一ぽんの髮毛にて千鈞の重さあるものを引く義)極めて危險なるにいふ。

いつは-の-まつ[五葉松](名) 【植】松の一種、常綠葉を有し五葉叢出す、葉脚に鞘あり、毬果は長楕圓狀卵形なり、高山に自生す、觀賞植物として栽培せらる。ごえふのまつ。

いつはり[僞](名) ㊀自然のまゝにあらざること。人爲。㊁誠實ならざること。㊂眞實にあらざること。㊃眞正ならざること。かり。㊄あざむき。うそ。たぶ

らかし。(詐)。――びと[僞人](名) いつはる人。うそをいふひと。

いつは・る[僞](自、ら四) いつはりを爲す。いつはりを言ふ。かまへていふ。うそをいふ。

いつは・る[僞](他、ら四) あざむく。だます。たぶらかす。

(いっ-ぱん[一斑](名) いちぶぶん。ひとこわけ。――をみてぜんぺうをぼくす[見一斑卜全豹] (豹の皮の一部分を見て、他の部分を推知するの義) 物事のいちぶぶんを見て、其全體を推知するにいふ。

(いっ-ぱん[一般](名) ㊀ぜんたい。さうたい。㊁同一。「他とー」。――くわいけい[一般會計](名) 普通の場合に於ける國家の會計、即ち、會計法に準據すべきもの。特別會計の對。――すう[一般數](名) 【數】文字を以て表はされたる數。――はうりやく[一般方略](名) 演習に於ける兩軍共通の方略、又、大體の作戰計畫。――はふ[一般法](名) 【法】普通一般に適用せらるゝ法律、即ち、一主權の下にある全國内に行はるゝもの又は一般の人に適用せらるゝもの、若しくは一切の事項に關するもの、稱。

(いっ-ぱん[一飯](名) いつぺんのしよくじ。――のとく[一飯德](名) 一たびめしをくはせられたる恩、即ち、わづかばかりのめぐみ。「ーも必ず報ゆ」。

(いつ-び[溢美](名) ほめすぎ。過賞。

(いっ-ぴつ[一筆](名) ㊀一本の筆。㊁同筆なる文詞。

(いっ-ぴん[一品](名) ㊀ひとつのしな。㊁最もすぐれたるもの。「天下ー」。

(いっぷ-いっぷ[一夫一婦](名) ひとりの男子が、

ひとりの婦人を妻とする外に、妾を持たぬこと。

(いっ-ぷうりう[一風流](名) ㊀ひとふう變はりたる流儀。㊁一つの風雅。

(いっ-ぷく[一腹](名) 同じ腹より生まるゝこと。――いっしやう[一腹一生](名) 同じ腹に生まれたる兄弟姉妹。

(いっ-ぷく[一服](名) ㊀タバコ・うすちや・せんちやなどをのむにいふ語。ひとのみ。㊁藥の一回のむだけの量、又、其一包みの量。――いっせん[一服一錢](名) 古昔、路傍にて一服の煎茶を一錢にて賣れる人。――もる 毒藥を用ひて人を殺すにいふ。

(いっぷ-たさい[一夫多妻](名) ひとりの男子が多くの妻を持つこと。

いつぶ・す[鎔潰](他、さ四) 金屬の器物をとかして、ふたゝび地金とす。

╪いつ-べ[厳瓮](名) 神を祭るにつかふ瓶。

いづ-へ[何邊](代) いづれのかた。

╪いつへ-の-おんぞ[五重御衣](名) いつついろの絲にて織りたる衣。

(いっ-ぺん[一遍](名、副) ㊀ひとむき。いっかう。㊁ひととほり。

(いっ-ぺん[一片](名) ㊀ひとひら。ひときれ。㊁いっぱう。「そのーをみて」。

(いっ-ぽ[一歩](名) ㊀ひとあし。㊁いちだん。「ー下る」。㊂段別の名、方六尺。――はたかくいっぽはひくく[一歩昂一歩低] よろぼひつゝあるくにいふ。

(いっ-ぽん[一品](名) 親王の位階の第一。

(いっ-ぽん[一本](名) ㊀一つの書物、又、或書物。㊁一かぶの樹木。㊂一すぢの長き物(扇、鉛等にいふ)。㊃ひとたち。(撃劍にいふ)。――だち[一本立](名) ㊀樹木がたゞ一本、廣き處などにあること。㊁人のちからをからず、おのれ一人獨立してなすこと。㊂孤立して對手なきこと。――ばし[一本橋](名) 溪流又は田畝の溝渠などに、樹木一本さしわたして、橋とせるもの。まるきばし。――やり[一本槍](名) ㊀古昔の戰爭に、槍ひとつきに勝敗を分つこと。㊁其人の唯一の長技。㊂一意にもしとほすこと。――まいる 撃劍にて、一たち打ちあつるにいふ。轉じて、一言の詰責を加ふるにいふ。

(いっぽん-きやう[一品經](名) 法華經二十八品の中を、一つづゝ分ちて佛前にて讀むこと。

いづ-み[泉](名) (出水の義) 地中を流動する水の地表に湧出するもの。╪――どの[泉殿](名) 泉の上にかけて造りたる家。「ーにいてゝきく」。

(いつ-みん[逸民](名) 世をのがれたる人。無位の人。

いつ-も[何時](副) いつの時にても。いつにても。つねに。

いづも-がな[出雲假名](名) 「ひらがな」の一名。

いづも-むしろ[出雲蓆](名) 出雲より織り出だすむしろ、上品のもの。

(いつ-や[乙夜](名) 古昔の二更、今の午後十時。――のらん[乙夜覽](名) (唐書に、天子は乙夜を以て讀書の時と定められたりとあるに出づ)天子の御讀書にいふ語。

╪いづら[何](代) いづれ。いづこ。どこ。

(いつりう-えん[溢流堰](名) 「あらひぜき」に同じ。

いづれ[何](代) たしかにそれと定めかぬる物事を指す語。

いづれ[何](副) 久しくすぎぬほどに。

いづれ-も-さま[何樣](名) みなさま。

(いつ-わ[逸話](名) 世に知れぬはなし。

い-て[射手](名) 弓を射る人。

いで(感) 人をうながすとき又は相手に對して疑ふときなどにいふ聲。「ー、もの見せん」。

いで-あ・ふ[出逢](自、は四) 行きあふ。あふ。であふ。

(い-てい[異體](名) 普通のものとは違ひたるかたち。

いで-いり[出入](名) いづるといること。ではひり。

いで-い・る[出入](自、ら四) ではひりす。「山の端にー宵の月」。

(い-てう[異朝](名) 異なる國のてうてい。ぐわいこく。とつくに。

(い-でう[異條](名) ことなることがら。

(い-てき[夷狄](名) 王化にうるほはぬ未開化の民。えびす。えみし。ばんい。

╪いで-きえ[出消](名) さしいでゝ、はえなきこと。「上手めきたまふ男たちも、中々ーして」。

いで-く[出來](自、か變) ㊀出できたる。出現す。㊁成る。とゝのふ。

いで-しほ[出潮](名) 月の出づる時にみちくる海水。でしほ。みちしほ。

いで-たち[出立](名) ㊀出て行くこと。㊁よそほひ。したく。

いで-た・つ[出立](自、た四) ㊀いではじむ。㊁よそほふ。㊂出て行く。㊃世にあらはる。

い-てつ[鑄鐵](名) 「ちうてつ」に同じ。

(い-てふ[移牒](名) 文書を以て通知すること。

いてふ[銀杏](名) ㊀【植】公孫樹科に屬する喬木、扇形の葉を有し一年内に脱落す、種子は白色にして核果狀なり、木材は種々の用に供し、種子は銀杏(ギンナン)といひ食すべし、又、觀賞用として栽培せらる。(公孫樹、鴨脚樹)。㊁德川時代の男子の結髮の

一種。——あし【銀杏脚】(名) 膳などの足の末ひろくして、いてふの葉の形したるもの。——がへし【銀杏返】(名) 婦人の結髪の一種、髻の上を兩分して左右に曲げてむすびたるもの。——だいこん【銀杏大根】(名) だいこんを縦に四つ切りになし、横に薄くいてふ形にきざみたるもの。——ば【銀杏羽】(名) をしどりの兩脇にありて、いてふの形したる羽。おもひば。——ば【銀杏齒】(名) いてふの葉の如くに末のひろがりたる下駄の齒。

いでまし【出座】(名) 天皇のみゆき。おなり。

いでます【出座】(自、さ四) 出でたまふ。

いでゆ【温泉】(名) 土中より自然にわき出づる湯、即ち、地中を流動する水の地熱を受けて湧出するもの。をんせん。

[いてる]【冱】(自、下一) こほりて破る。「凍す。」

いでゐ【出居】(名) 表向きの間の客を通すところ。きやくでん。きやくま。

い・てん【移轉】(名) ❶うつりかはること。うつりかはり。❷物事の所在をうつすこと。自己の住所をかふること。

いと【絲】(名) ❶綿・麻・繭等を細くながくひきのばして、よりをかけたるもの。❷細長くしていとの如きもののすべていふ。❸琴又は三絃などに張りて鳴らす絲。❹琴又は三絃などの稱。

いと(名) ❶みどりご。「—宮。」「—ひめ君。」❷小娘(京阪地方の方言)。

いと【最】(副) 甚しく。きはめて。もつとも。

いと・いり【絲入】(名) もめんいとの中に、きぬいとをまじへて織りたるもの。

いと・いんげん【絲隠元】(名) いんげんのさやを、絲の如くに細くきざみたるもの。

い・どう【移動】(名) うつりかはり。うごき。

い・どう【異同】(名) 異なると同じきと。

いと・うち【絲打】(名) きぬいとにて組みたるもの。「—の。」

いと・うを【絲魚】(名) 動 「いとより」に同じ。

いと・おり【絲織】(名) 織物の名。よりたる絹絲にて織りたるもの。

いとかけ・がひ【絲掛貝】(名) 動 前鰓類中海螺類に屬する貝、にしに似て小さく、外面のたてすぢふとくして、恰も白き絲をまとひ付けたるが如くに見ゆ。

〔いとかけがひ〕

[いとかけぼら]【絲掛螺】(名) 動 「いとかけがひ」に同じ。

いと・がひ【絲貝】(名) 動 「いとかけがひ」に同じ。

†いとき・なし【幼】(形、二) 「いとけなし」に同じ。

いと・きり【絲切】(名) 陶器の底、即ち、ろくろより絲にてきりとりたるもの。いとぞこ。ひねりどめ。——だんご【絲切團子】(名) 絲にてくくり切りたる團子。——ば【絲切齒】(名) 人類の牙齒。(犬齒)

いと・ぐち【絲口】(名) ❶絲の端。❷物事のなりはじまり。たんちよ。「—がつく。」

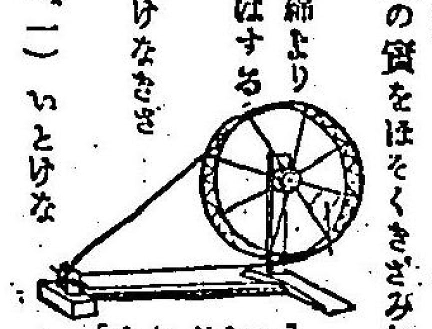
いと・ぐら【絲座】(名) 三味線のさをの上のいとまきを貫く處。

†いと・くらべ【絲競】(名) 琴などをひきくらべすること。

いと・くり【絲繰】(名) ❶絲をくる女。❷「をだまき」に同じ。❸いとをくるわく。——うを【絲繰魚】(名) 動 「いとより」に同じ。——ぐるま【絲繰車】(名) 繭より絲を引き出して、これを繰る車。

いと・ぐり【絲栗】(名) 栗の實をほそくきざみたるもの。

いと・ぐるま【絲車】(名) 綿より絲をとり又はこれをよりあはする車。


〔いとぐるま〕

†いと・け【幼氣】(名) いとけなきさま。をさなげなるさま。

†いとけ・し【幼】(形、二) いとけなし。をさなし。

いとけ・なし【幼】(形、二) 年未だ長ぜず。あどけなし。をさなし。

いとげ・の・くるま【絲毛車】(名) 古昔の一種の牛車、車のやかたに、よりいとをふきおろして簾の如くに垂れ、青絲毛・紫絲毛などありて宮女等の用ひしもの。又、葬式に死人を乘することありしともいふ。(絲葺車)

いとこ(名) 父又は母のをひ又はめひ。(從兄弟・從姉妹)。——おほをぢ(名) 祖父母のいとこ。(族伯祖父)。——おほをば(名) 祖父母のいとこ。(族伯祖母)。——ちがひ(名) 父のいとこ。——に(名) (追々甥々に煮(似)る義なりといふ)あづき・ごぼう・やきどうふ等を入れたる汁。——め(名) いとこにあたる婦人。(從姉妹)。——をぢ(名) 父のいとこ。(從祖父)。——をば(名) 父のいとこ。(從祖母)。

いと・こんにやく【絲蒟蒻】(名) 絲の如くに細くしたるこんにやく。

いと・ざくら【絲櫻】(名) 植 薔薇科に屬する木、枝は軟弱にして下垂し、葉は長楕圓形或は披針形にして尖頭を有し、萼の筒部は圓筒形或は上部にくびれを有し、花柱の基部は毛を生じ、花柄は花と同長或は花より長し。觀賞用として栽培し、又、木材を種々の用に供せらる。えだりざくら。えだれひがん。(枝垂櫻)

いと・さめ【絲雨】(名) こまかき雨。こさめ。

いと・し(しくしき)【愛】(形、二) いとほし。かはゆし。

いと・しば【絲芝】(名) 植 えばの一種、細くして絲狀をなす。

いと・じり【絲尻】(名) 「いときり」に同じ。

いと・すぎ【絲杉】(名) 植 すぎの一種、幹は直立して枝葉下に垂る。

いと・すげ【絲菅】(名) 植 莎草科に屬する草本、山間又は陰地に生ず、葉は長くして、比較的大形なる花序を生ず。

いと・すすき【絲薄】(名) 植 すゝきの變種、葉・莖・根共に細くして、穗は紫赤色を呈す。

いと・すぢ【絲筋】(名) 絲のすぢ。又、細長なるものにいふ語。

いと・ぞこ【絲底】(名) 陶器のそこ。いときり。いとぞこ。

いと・だけ【絲竹】(名) ❶樂器の總名。琴・笛の類。❷轉じて、音樂。

いと・だて【絲立】(名) 絲を入れて置くふくろ。

いと・だて【絲經】(名) 經を撚の絲にて織りたるむしろ。旅行などのときにゐなかものの着用するもの。

いとだ・ひ【絲纜】(名) 動 「いとより」に同じ。

いとど【最最】(副) いよいよ。はなはだしく。ことさらに。

†いと・どし(しくしき)【最最】(形、二) いよいよはなはだし。

†いと・な・し(しくしき)【忙】(形、二) いそがはし。いとまなし。

いと・なます【絲膾】(名) 膾をこまかくきりたるもの。

いとなみ【營】(名) ❶いとなむこと。わざ。❷よういしたく。

いとな・む【營】(他、ま四) ❶こしらふ。ととのふ。つくりなす。❷たくはふ。

†いと・の・くつ【絲鞋】(名) 絲にて編みて作りたるくつ。古昔、はきたるもの。

いと・はぎ【絲萩】(名) 植 枝の細き萩。

いとは・し(しくしき)【厭】(形、二) いとふべし。いやなり。

いと・ひ【厭】(名) いとふこと。いむこと。きらひ。

いと・ひば【絲檜葉】(名) 植 さはらの變種、葉は小形鱗片狀にして、莖は下垂せる枝を有す、觀賞用として栽培せらる。

いと・びん【絲鬢】(名) 徳川時代の中頃に行はれたる男子の髮の結び方、頭の髮を剃りさげて、兩のびんを細くせまく結びたるもの。——やつこ【絲鬢奴】(名) いとびんに髮を結ひたる男子。

いと・ふ【厭】(他、は四) ❶いやに思ふ。いみきらふ。いやがる。にくむ。❷いたはる。かばふ。

いと・へん【糸偏】(名) 漢字の偏の名。紙・經等の字の左にある「糸」をいふ。

いとほ・し(しくしき)【愛】(形、二) あはれなり。いたはし。ふびんなり。いとし。かはゆし。

いとほし・む【愛】(他、ま四) いとほしと思ふ。あいす。あはれむ。

いとま【暇】(名) ❶用のなきこと。かんか。ひま。休暇を期はること。❷官を辭すること。❸別れ去ること。

いと・まき【絲卷】(名) ❶絲を巻きておく道具。❷三味線の頭に附して絲を巻きつくるもの。琵琶にては、轉手(てんじゆ)といふ。——ひとで【絲卷人手】(名) 動 棘皮動物類に屬する棘皮動物、體は五稜形を有し、腹面短かし、背面は綠色にして赤色の斑紋を有す、肉食を貪り好んで貝類を食ふ。(海盤車)——ゆば【絲卷湯婆】(名) 方形に切りたるゆば。

いとま・ごひ【暇乞】(名) わかれをつぐること。いとまを乞ひ求むること。

†いとま・し(しくしき)【挑】(形、二) はりあふ狀なり。きそひあらそふ狀なり。

†いとま・ふみ【暇文】(名) いとまを求むる願書。(辭表)。

いど・む【挑】(他、ま四) ❶きそひあらそふ。きそひせまる。はりあふ。❷戀慕をもとめかく。

いと・むし【絲蟲】(名) 動 「こはるぎ」に同じ。

いと・め【眼目】(名) いとひ。えんばい。

いと・め【絲目】(名) ❶いとすぢ。❷器の表面に附くる線。

いと・やなぎ【絲柳】(名) 植 楊柳科に屬する木、枝は下垂し、雄花は通常雄蕊を有し、雌花は甚だ短き柄を有する子房を有す、葉は綫狀披針形にして、木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。

†いと・ゆふ【絲遊】(名) 「かげろふ」に同じ。

いと・より【絲撚】(名) 動 ——ぐるま【絲撚車】(名) 「いとぐるま」の略。

に同じ。——たひ(イヒ)[絲撚鯛](名)【動】硬鰭類いとより科に屬する魚、體は紅色にして黃色なる六條の縱線あり、背鰭及臀鰭は共に其端に黃色の線あり、尾は黃色を呈す、體長一尺に及ぶ、深海の泥底なる場所に棲息す、形は鯛に似る。いとより。いとうを。いとくりうを。——め[絲撚女](名) 絲をよるを業とする女。

い-と・る(イトル)[射取](他、ら四) ❶射あてゝ獵物となす。❷的に射あてゝ賭け物を取る。

いと-わく[絲籰](名) 絲をまとひつくるわく。いとくり。

いな[鯔](名)【動】「ぼら」の幼期の名。

いな[稻](名)【植】「いね」の轉。

いな[否](副) 人の言ふことに不同意を表して打ち消す語。いや。いゝや。いゝえ。

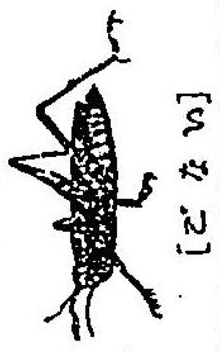
いな-き[稻置](名) ❶古昔は、邑長の名、むらをさ。❷後世は、姓(かばね)の名、第八位に居る。

いな-き[稻城](名) 刈りたる稻をかけてほす具、竹又は木にて造りたるもの。

十いな・く(イナク)[嘶](自、か四) 馬つかれてなく。

いな-ぐら[稻倉](名) いねを入れておく藏。

いな-ご[稻子](名)【動】直翅類中蝗蟲(ばつた)科に屬する蟲、體長は七八分、體色は綠若しくは褐、後脚は肥大にして跳躍に適し、首圓く眼大く、前翅の前緣はけづりたるが如し、雄蟲は後翅を以て前肢の兩側を摩りて聲をなす、我國にて最も有名なる稻の害蟲なり。いなばった。(蝗)。——まろ[稻子麿](名)【動】蝗蟲科の昆虫、はたおりに似、長さ一寸乃至四寸、綠色又は褐色にして足端赤し。


〔いなご〕

いな-こき[稻扱](名) 稻の穗をこく道具、齒を櫛にてつくり、形櫛の如し。いねこき。

いなさ(名) ひがしみなみの風。

〃いな-す(イナス)[往](他、さ四) ゆかしむ。さらしむ。かへらしむ。

十いな-せ(名) 否と諾と。「—のおとづれ」。

〃いな-せ[鯔背](名) 近古、江戶魚河岸のいさみはだの人々が、髷(まげ)を魚のいなのかしらに似せて結びたるより出づ、いさみはだ又はきほひはだの通稱。

いなだ(名)【動】「ぶり」の幼期の稱。

十いなだき[頂](名)「いただき」の音便。

十いな-たま[稻魂](名) いなづま。いなびかり。

いな-づま[稻妻](名) 空中電氣の放電する際に發する火花。いなびかり。(電)。——がた[稻妻形](名) いなづまの形をとりたる模樣。——びし[稻妻菱](名) 菱形の稻妻の模樣。——をれくぎ[稻妻折釘](名) 二重に曲れる折釘。

十いな-つるび[稻交](名)「いなづま」に同じ。

いな-な・く(イナナク)[嘶](自、か四) 馬聲高く鳴く。いばゆ。

いな-のめ(名) あけがた。よのあけ。(黎明)。

いな-はき[稻掃](名)「いなはきむしろ」の略言。——むしろ[稻掃筵](名) 稻の穗を取り扱ふむしろ。

いな-びかり[稻光](名) いなづま。いなつるび。いなたま。

十いな・ぶ(イナブ)[辭](他、は四) いなむ。じたいす。

十いな・ぶ(イナブ)[辭](他、は上二) 前條に同じ。

いな-ほ[稻穗](名) いねの穗。

いな・む(イナム)[辭](他、ま四) ❶辭退す。ことわる。❷不承知をいふ。はゞむ。

いな-むし[稻蟲](名)【動】(い)直翅類に屬する禾本植物を害する昆蟲の總稱、後翅は膨大にして跳躍に適し、第一腹節に聽器を備ふ、觸角短く三個の單眼あり、雄蟲は後翅を以て前翅の附間を摩擦して聲をなす、雌蟲は晚秋地に卵を藏む、卵は翌春に至りて孵化す。(蝗蟲)。(ろ)「いなごまろ」に同じ。

十いな-むしろ[稻莚](名) ねどこに敷くむしろ。ふとん。

いな-むら[稻叢](名) わらのまゝに積みたる稻。

いな-や[否](副) すぐに。たゞちに。「聞くや—、おどろきさわぐ」。

い-なり[稻荷](名) (稻生(いなり)の義) 五穀の神として倉稻魂(うかのみたま)神を祀りたるもの。——ずし[稻荷鮨](名) 煮たる油揚の中に、酢を和したる飯をつゝみたるもの。——まうで(マウデ)[稻荷詣](名) 中古の風俗、二月初午稻荷のやしろに參詣すること。——まち[稻荷待](名) いなりまつりの稱。〃——まち[稻荷町](名)「へいへいやくしや」の異稱。——まつり[稻荷祭](名) 二月初午の日に行ふ稻荷神の祭事。

十いな・る(イナル)[嘶](自、ら四) うめく。うなる。

いにしへ(イニシヘ)[古](名) (往過の義) 過ぎ去りし時。むかし。

いぬ[犬](名) ❶【動】哺乳類中肉食類に屬する獸、世界至る所に家畜として飼養せらる、性怜悧にして、視官は鈍けれど、聽官と嗅官とは最も鋭敏なり。❷まはしもの。諜者。

いぬ[戌](名) ❶十二支の第十一位。❷西北の方位、にしきた。❸古昔の時刻にて、五つ、今の午後八時より九時までの間。

十い・ぬ(イヌ)[寐](自、な下二) ねる。

い・ぬ(イヌ)[往](自、な變) ❶ゆく。さる。❷ふす。

いぬ-あららぎ[犬蘭](名)【植】「いぬえ」の名。

いぬ-いたどり[犬虎杖](名)【植】いたどりの變種、高さ尺餘に過ぎず。

いぬ-うど[犬獨活](名)【植】「しゝうど」に同じ。

いぬ-え[犬荏](名)【植】唇形科に屬する一年草、大種のものゝ葉は荏(え)の如く、小種のものゝ葉は細長なり、秋末に小形にして紫色なる花を開く。

いぬ-おふもの(オフモノ)[犬追物](名) 古昔、行はれし射術の演習、竹垣にて馬場をかこひ、中に犬を放ち、これを逐ひ射て勝敗を定むるを、矢は蟇目、服は柔裕直垂、一手十二騎なるを正式とす、源賴朝の時代に始まりたりといふ。

いぬ-かうじゅ(カウジュ)[犬香薷](名)【植】唇形科に屬する草、原野に生ず、高さ一二尺、葉は對生す、夏の頃、葉間に三四寸の花穗を生ず。

いぬ-からたけ(カラタケ)[犬革韭](名)【植】からたけの一種、叢生し、秋生ず。

いぬ-がし[犬樫](名)【植】樟科に屬する喬木、やぶにっけいの類、春の頃、紅色の美花を開く。

いぬ-かひ(カヒ)[犬飼](名) 鷹狩りのときに、鳥を追はしむる犬を飼ひならす人。——ぼし[犬飼星](名) けんぎう。ひこぼし。(牽牛星)。

いぬ-がみ[犬神](名) 犬の靈(れい)を使ふ妖(あや)しき術。——つき[犬神憑](名) 犬の靈のりうつりたりと稱する一種の精神病、中國邊に多し。

いぬ-がや[犬榧](名)【植】かやの一種、葉は濃綠色にして二縱列をなす、仁より燈油を製し、材は種々の用に供せらる。

いぬ-がらし[犬辛子](名)【植】十字花科に屬する草、花は黃色にして、下部の葉は羽狀に分裂し、果實は狹長なり。のがらし。きつねのからし。(山芥菜)。

十いぬ-き(名) 家のいりぐちの右だゝみ。(閾)。

いぬ-ぎり[犬桐](名)【植】「あぶらぎり」に同じ。

いぬ-くぐり[犬潜](名) 垣牆などにある穴、犬の出入りのため穿ちたる穴。

いぬ-ぐす[犬楠](名)【植】樟科に屬する喬木、葉は楕狀の下部を有し下面に白色毛を具す、花房は有柄なり、種子より油を搾り、樹皮は染料とし、木材は種々の用に供せらる。やまぐす。たぶのき。

十いぬ-くひ(クヒ)[犬食](名) 犬をかみあはするたはむれ。(鬪犬)。

いぬ-ごま[犬胡麻](名)【植】唇形科に屬する植物、山中に生ず、葉は鋸齒をなして粗き皺紋を有し、胡麻に似たる臭氣あり、花は小形にして白く、夏の頃、梢に穗狀(すゐじゃう)り開く。

いぬ-ころ(名) 犬の子。

いぬ-じに[犬死](名) 死にて益なきこと。むだじに。

〃いぬ-じもの[犬自物](名) 犬に似たるもの。

いぬ-そらまめ[犬蠶豆](名)【植】「からすのゑんどう」に同じ。

いぬ-たで[犬蓼](名)【植】蓼科に屬する草、葉は長楕圓形にして小し、花は葉腋に生じ、花序は穗狀にして密生せる花より成る。あかたで。(馬蓼)。

いぬ-だら[犬楤](名)【植】「はりぎり」に同じ。

いぬ-つげ[犬黃楊](名)【植】冬靑(もち)科に屬する植物、高さ一丈餘に達す、葉は楕圓形又は倒卵形にして鋸齒を具す、實は紫黑色にして小し、觀賞用として栽培し、木材は印版・櫛等の料に供せらる。

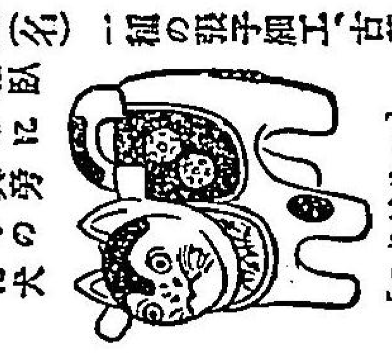
いぬ-のふぐり(名)【植】玄參科に屬する草、莖は平臥し、葉は小卵狀心形にして葉柄を具し、緣邊に粗齒を帶ぶ、花は葉腋に單生して、殆んど葉と同長なる柄を有す、花冠は小形にして淡紅色なり。(婆婆納)。

十いぬ-はこ[犬張子](名) いぬはりこ。

いぬ-ばしり[犬走](名) ❶城又は築地などの壁外と堀との間に設けある、犬の通ひ得べきほどの足だまり。❷小走りに疾步すること。

いぬ-ばへ(バヘ)[犬蠅](名)【動】雙翅類中家蠅(いへばへ)科に屬する蟲、黃色を帶び翅に褐色の紋あり、犬に寄生して血を吸ふ。

いぬ-はりこ[犬張子](名) 一種の張子細工、古昔は、面は小兒に似せ體は臥せる犬に似せたるものにして、小兒誕生のとき枕頭に置き魔避けとせしものなりしが、今は面身共に犬に似せて、玩弄物とす。


〔いぬはりこ〕

いぬ-びえ[犬稗](名)【植】顯花類、禾本科に屬する一年草、高さ二三尺、葉細長く平行脈を有し、花は小形にして殼に芒を具ふ、家畜の飼料とす。

十いぬ-びと[犬人](名) 古昔、宮城にて、いぬぼえをしたるひと。

いぬ-びは(ビハ)[犬枇杷](名)【植】桑科に屬する直立木本、葉は楕圓形にして殆んど平滑なり、夏秋の交に無花果に似て小さき實を結ぶ、食ふべし。

いぬ-ふせぎ[犬防](名) 佛堂の前にかまへたるひくき格子。

十いぬ-ぼえ[犬吠](名) 古昔、外蕃の參朝せしとき、隼人(はやと)が宮城の御門にゐて、犬のとほぼえに類したる聲を出だしゝこと。

いぬ-ほほづき(ホホヅキ)[犬酸漿](名)【植】(い)茄科に屬する有毒草本、花は白色にして織形花序に排列し、果實は球形にして黑色を呈し、葉は卵形なり。(龍葵)。(ろ)「いぬびは」の一名。

いぬ-まき[犬槇](名)【植】松柏科に屬する常綠木、葉は細長くして一個の中肋を有す、木材は用途尠からず、又、觀賞植物として栽培せらる。ラカンま

よう。
いぬ・むぎ[犬麥](名)【植】「ころぼふむぎ」に同じ。
いぬ・よもぎ[犬蓬](名)【植】「ひきよもぎ」に同じ。(菴蘭)。
いぬ・ゐ[戌亥](名)方角の名、戌と亥とのあひだ、即ち、西北の間。
いぬ・ゑんじゆ[犬槐](名)【植】ゑんじゆの一種、葉は大形にして厚し、夏の頃、黃花を開く。
いね[稻](名)【植】禾本科に屬する草本、高さ三四尺、葉は細長にして、頴類は甚だ小く、花穎は殆んど癒合して頴果を被包す、禾本科中最も要用なるものにして、種子は、食用又は製酒の原料とし、莖及葉は、繩席其他種々の用に供せらる。——かり[稻刈](名)秋に熟したる稻を刈り取ること。——きび[稻黍稷](名)【植】「ろゝきび」に同じ。——こき[稻扱](名)「いなこき」に同じ。——つきこまろ[稻搗子麿](名)【植】「きりぎりす」に同じ。——むし[稻蟲](名)【動】「いなごまろ」に同じ。
十い・のとし[射殘](名)古昔、正月の射禮のとき、參り來らざりしものに、翌日また射させしこと。
いのち[命](名)㊀動植物の生活する元力。いきのを。たまのを。せいめい。㊁動植物の生活する期間。よはひ。とし。「—は、風前の燈の如し」。——がけ[命掛](名)いのちを失ふともかへりみずして、事をおこなふこと。——がへ[命換](名)一命にかゝはるべき重大なる物事。——ごひ[命乞](名)いのち永かららんことを、神佛にいのること。又、殺さるべき人の爲に、其命の助からんを乞ふこと。——しらず[命不知](名)いのちを重ぜざること。——生命の危險なるをもかへりみず、押し切って事をなする性質、又、其人。——の・おや[命親](名)已に死すべき場合を救ひくれたる人。——の・せんたく[命洗濯](名)平生の勞を慰むること。きばらし。——びろひ[命拾](名)已に一命を失はんとしたる場合を免れたること。九死に一生を得たること。——みやうが[命冥加](名)死すべきほどの場合に、ふしぎに助かりたること。
いのり[祈](名)神佛に祈願をすること。いのること。(祈禱)。——の・し[禱師](名)祈禱する法師。
いの・る[祈](他、ら四)自己又は他人の禍福吉凶に關して、神佛に願をかく。
いは[岩](名)㊀石の大なるもの。いはほ。㊁粘土の凝固したるもの。
い・ば[射場](名)弓を射るひろには。(射的場)。
(いはう・みやう)[醫方明](名)印度の醫術の一分科にして、醫術を研究するもの。
いは・うら[岩占](名)「いしうら」に同じ。
いは・おこし[岩粔籹](名)一種の菓子、おこしごめを飴にて固めたるもの。
いは・おもだか[岩澤瀉](名)【植】水龍骨科に屬する草、葉は蘭の如く細長くして、芽胞の房叢は圓形なり、觀賞用として栽培せらる。
いは・がく・る[岩隱](自、ら下二)㊀(なきがら石棺の中に入る義)貴人の崩じたまふにいふ。㊁いはのかげにかくる。
十いは・かせ[醫博士](名)古昔、典藥寮の博士。
いは・かど[岩角](名)㊀岩石の角。㊁門の如く左右に岩石の聳えたてるところ。
十いは・がね[岩根](名)㊀岩のねもと。㊁【植】蕁麻(イラクサ)科に屬する植物、夏季花を開く。——さう[岩根草](名)【植】水龍骨(カヅラ)科に屬する陰花植物、葉は方形にして厚し。
いは・き[岩木](名)㊀いしと木と。ぼくせき。㊁强情なること、感覺の遲鈍なること。「人の心の—ならん」。㊂亞炭の一名。
いはき・がみ[磐城紙](名)磐城國田村郡附近より出す半紙。
いは・きつつき[岩啄木鳥](名)【動】「いはげら」に同じ。
十いは・く[曰](名)いはれ。わけ。おさい。「—のあること」。
(いは・く)[豈](自、か下二)子供らしくあり。
いは・くぐり[岩潛](名)【動】一種の鳥、形はほぼおろに似て大く、頭は灰色にして背に黑褐色の斑を有し、翅は黑色にして端末赤褐色なり。
十いは・くすぶね[岩樟船](名)神代に用ひしふね。
十いは・ぐつ(名)「をぐつ」に同じ。
いはくに・ちぢみ[岩國縮](名)周防國岩國地方より製出する木綿ちゞみ、夏衣に適す。
いはくに・ばんし[岩國半紙](名)周防國岩國地方より製出するはん紙。
十いは・くも[岩雲](名)岩の空に出づる雲、岩石の屹立したるさまにみゆる故に名づく。
十いはけ・な・し[稚](形、二)をさなげなり。こどもらし。あどけなし。
いは・げら[岩啄木鳥](名)【動】きつゝきの一種、深山に棲む、體は綠色にして頭部と腹部とは紅色なり。
いは・ごけ[岩苔](名)【植】「いはひば」に同じ。
十いは・こす[岩越](名)ことぢの先の緒のある所。

十いは・さか[磐境](名)古代、石をめぐらして、神祇をまつりたるところ。
いは・しみづ[石淸水](名)岩石の間より湧き出づる淸水。
(いば・しんゑん)[意馬心猿](名)煩惱情慾さかんにして、心中靜定せざるさまにいふ語。
(いは・すき)[齋鋤](名)「いむすき」に同じ。
いは・すずめ[岩雀](名)【動】「いはくゞり」に同じ。
いは・せきしやう[岩石菖](名)【植】百合科に屬する草、谷間の岩石などに着生す、花莖は短毛を有し粘質を分泌す、花は白色なり、觀賞用として栽培せらる。
いは・たおび[岩田帶](名)姙娠したる婦人が腹に纏ふ帶、姙娠して五個月目より結ぶ。(姙帶)。
いは・たけ[岩茸](名)【植】地衣類に屬する菌、深山の岩石に生ず、平面狀にして表面灰色をなし、裏面は帶黑色にして黑色粉狀の短纖維を密生す、食用に供せらる。
いは・ちどり[岩千鳥](名)㊀【動】ちどりの一種、尾はつばめの如く裂け、身極めてかろく、河上に群飛す。㊁【植】蘭科に屬する草、深山の岩に生ず、一莖に一葉をいだす、蘭に似て小花を開く。
(い・ハツ)[衣鉢](名)「えハチ」に同じ。
いはつき・ねぎ[岩槻葱](名)武藏國岩槻地方より出すねぎ。
いはつき・もめん[岩槻木綿](名)武藏國岩槻地方より織り出す木綿。
いは・つぐみ[岩鶫](名)【動】「いそつぐみ」に同じ。
いは・つつじ[岩躑躅](名)㊀岩石の間に生ずるつゝじの稱。㊁かさねの色目、表は紅にして裏は紫なるもの。
いは・つぼ[岩壺](名)㊀がんせきの間の、ひくゝ凹になりたるところ。㊁内の空虛なる一種の石、大小一ならず、鈴石・袋石・壺石ともいふ。
いは・つらら[岩垂氷](名)【鑛】鍾乳石の稱、つらゝの形に似たるよりいふ。
いは・と[岩戶](名)人の住む岩窟。
いはと・かぐら[岩戶神樂](名)芝居の囃子、太鼓にて奏するもの。
いはと・がくれ[岩戶隱](名)天照大神が素盞嗚尊の暴狀を憤り、天のいはとにかくれたまひければ、天地晦冥となりたりとの故事。
十いは・とこ[岩床](名)㊀岩の平かなる所。㊁人を葬りたる所。
十いば・どの[射場殿](名)古昔、宮廷に設けられたりし射場。
いは・な[岩魚](名)【動】喉鰾類中さけ科に屬する魚、鱗は圓滑にして細小なり、皮膚は粘液に富む、體色は背部蒼黑、腹部灰白にして淡黑色の斑點あり、體長一尺二三寸に達す、我國東北及北海道の溪流に多し。(鰯魚)。
いは・なし[岩梨](名)【植】石南(シヤクナゲ)科に屬する小灌木、富士・日光などの高山に、地を匍ひて簇生す、葉は橢圓形をなし、花序は總狀にして少數の花より成り、花冠は壺より長からず、實は大豆の如くにて圓く、味酸く甘し。

[しなはい]

いは・にし[岩螺](名)【動】腹足類中前鰓類に屬する貝、介殼の外面は粗くして圓疣あり、海濱に多し、からにし、いぼにし、ほうくにし。
いは・ね[岩根](名)㊀いはのねもと。㊁いはほ、がんせき。——かへで[岩根楓](名)【植】かへでの一種、日光・木曾などの山中に生ず、葉大形なり。
いは・はざま[岩峽](名)岩と岩との間隙。
いは・はし[岩橋](名)淺瀨に石をおき並べ飛石としたるはし。
十いははし・の(枕)「よる」「まぢかし」「あふみ」に冠らする詞。
十いば・はじめ[射場始](名)古昔、宮中に行はれし儀式、射場殿にて弓を射はじむること。
十いはひ[齋](名)㊀いみ愼むこと。いみ。㊁かしづきまもること。
いはひ[祝](名)いはふこと。ことほぎ。ことぶき。——ごそく[祝具足](名)武家の子息の元服の祝ひにそなふる甲冑。
十いはひ・そ・す[祝過](自、さ四)いはひすごす。
十いはひ・びと[家人](名)いへびと。
十いはひ・どの[齋殿](名)神をまつる殿閣。
いはひ・の・いと[祝絲](名)よろひのたくぼくおどしの絲。
十いはひ・の・かがみ[齋鏡](名)㊀いはひやまふ鏡、神鏡。㊁三種神器の一、八咫鏡。
十いはひ・の・つゑ[祝杖](名)「うづゑ」に同じ。
十いはひ・の・ぬし[齋主](名)神につかふる人。かんぬし。
十いはひ・の・みや[齋宮](名)かしづきいはひまつる宮、いつきのみや。

いは·ひば イハ [岩檜葉](名)【植】卷柏科に屬する隱花植物、溪間陰濕の岩石上に若生す、又、觀賞用として栽培せらる。(卷柏)。
‡**いはひ·びと** イハ [齋人](名) 神につかへまつる人。かんぬし。
‡**いはひ·べ** イハ [齋瓮](名) 古昔、神酒を神にたてまつりしとき、用ひたる陶器の甕。いんべ。(忌瓮)。

[べひはい]

‡**い·はひ·もとほ·る** イワイオル [這回](自、ら四) (い這ひ回るの義) はひまはる。はひめぐる。
‡**いは·ふ** イハフ [齋](他、は四) ㊀けがれをいみつゝしみて、神を奉祀す。㊁守護す。かしづく。まもる。
いは·ふ イハフ [祝](他、は四) ㊀吉事を賀す。ほぐ。ことほぐ。ことぶく。㊁未來の吉事をねがふにもいふ。
いは·ぶき イハ [岩欵冬](名)【植】ゆきのしたの一種、葉は喇叭狀をなして綠色なり、花小さし。
いは·ふぢ イハ [岩藤](名)【植】荳(マメ)科に屬する亞灌木、山中に生ず、花は小形にして莖より長き柄を有す、觀賞植物なり。
‡**いは·ふね** イハ [岩船](名) 神代に、神々が乘りたまひしといふ船。
いは·ほ イハオ [巖](名) 大なる石。いは。
‡**いは·ま** イハ [岩間](名) いはといはとのあひだ。
‡**いは·まくら** イハ [岩枕](名) ㊀岩を枕にしてねること。㊁山路の旅。
〔**いはみ·ぎんざん** イハ [石見銀山](名) 鼠ごろし藥の一種、石見國邇摩郡の銀山より出づる礜石にて製したるもの。

‡**いは·む** イハム [充溢](自、ま四) 充滿す。みつ。
いは·もと イハ [岩本](名) 岩の根もと。
いは·もみ イハ [岩樅](名)【植】石南(シャクナゲ)科に屬する灌木、高山に生ず、葉細く、淡紅色の小花を開く。
いは·や イハ [岩屋](名) ㊀岩をうがちて造りたる居所。(窟)。㊁岩の間の洞穴。――**ぎく** [窟菊](名)【植】「あぶらぎく」の一名。
いは·やなぎ イハ [岩柳](名)【植】楊柳科に屬する灌木、葉も莖もやなぎに似て、二三月の頃、白き花をひらく。にはやなぎ。こゞめやなぎ。(珍珠花)。
‡**いば·ゆ** [嘶](自、や下二) いなゝく。
いは·ゆる イハ [所謂](副) 世に云ふところの。ふつうにいへるところの。
いばら [茨](名) とげある小木の總名。うばら。
いばら [薔薇](名)【植】薔薇科に屬する灌木、大形の美花を生じ、葉は複葉にして葉柄に着生する托葉を具す、雌蕊は多數ありて壺狀の萼筒內に隱在す。ばら。
いばり [尿](名) ゆばり。――**ぶくろ** [膀胱](名) ゆばりぶくろ。ばうくわう。
〔**い·ば·る** (自、ら四) たけき姿をよそほふ。つよきをもとめす。いきほひを張る。
いはれ イハレ [謂](名) いはるべきわけ。いふべきゆゑよし。理由。
いは·れんげ イハ [岩蓮華](名)【植】景天(ベンケイソウ)科に屬する草、古き瓦屋根などに生ず、花瓣は互に結合し、雄蕊は通常十箇にして雌蕊は五箇なり、觀賞用として栽培せらる。

[げんれはい]

いは·ろくしやう イワーシヨウ [岩綠靑](名)【鑛】「ろくしやう」の色のこくして粗きもの、孔雀石をくだきて製す。

いは·ゐ イハイ [岩井](名) 岩のあひだより切き出づる井戸。又、石を囲みてつくりたる井戸。
いはゐ·ぐし イハ [岩井櫛](名) 伽羅にてつくれる櫛。
〔**い·ばん** [夷蠻](名) えびす。
いはん·や イハ [況](副) まして。其上に。
いひ イイ [飯](名) 米を蒸したるもの。米を炊きたるもの。めし。かたかゆ。ごぜん。まんま。
‡**いひ** イイ [樋](名) 板にて箱を作り、地中に埋めて水のかよひ路とするもの。又、池の内より外へ水の出づる樋。ひのくち。とひ。
いひ イイ [謂](名) ㊀いふこと。となへ。㊁わけ。こと。
いひ·あ·つ イイ [言當](他、た下二) 考へいひて、物事をあつ。
〔**いひあてる** [言當](他) 「いひあつ」の訛。
いひ·あは·す イイアワス [言合](他、さ下二) 約す。申し合はす。
いひ·あはせ イイアワセ [言合](名) 言ひあはすること。くちやくそく。
〔**いひあはせる** [言合](他) 「いひあはす」の訛。
いひ·あひ イイアイ [言合](名) いさかひ。こうろん。
いひ·あ·ふ イイアウ [言合](他、は四) ㊀耳に物をいふ。耳に言をかはす。㊁くちあらそひす。さうろんす。こうろんす。いさかふ。
いひ·あらが·ふ イイガウ [言爭](他、は四) いひあらそふ。口論す。
いひ·あらそ·ふ イイソウ [言爭](他、は四) いさかふ。いひあふ。
いひ·あらは·す イイワス [言顯](他、さ四) 言に出す。
いひ·あり イイ [飯蟻](名)【動】あかあり。

いひ·いだ·す イイ [言出](他、さ四) 言を發す。いひはじむ。
いひ·い·づ イイ [言出](他、た下二) いひいだす。
いひ·い·る イイ [言入](他、ら下二) いひこむ。いひおく。
いひ·いれ [言入](名) 「ゆひなふ」に同じ。
いひ·お·く イイ [言置](他、か四) いひのこす。ことばをのこす。
いひ·おと·す イイ [言落](他、さ四) ㊀いふべきかどをもらす。いひもらす。㊁わるくいふ。くさす。
いひ·がかり イイ [言掛](名) ㊀はなしかけ。いひかけ。㊁あとかたの無き事を誣ふること。㊂いひあひして窮地となること。
いひ·かか·る イイ [言掛](他、ら四) ㊀あひて向かひてことばをかく。はなしかく。㊁いひだす。㊂あとかたなき事を誣(シ)ふ。
いひ·か·く イイ [言掛](他、か下二) ㊀はなしをしかく。㊁誣(シ)ひいふ。
いひ·かけ イイ [言掛](名) ㊀いひかくること。はなしはじむること。いひいだし。㊁一語にて二語の意を兼ぬること。例せば、「聞く」「菊」の意をかけて「音にのみきくの白露」といふが如し。㊂誣(シ)ひいふこと。無體なることをいひて、人を困らしむること。
いひ·かた イイ [言方](名) ことばづかひ。いひやう。
いひ·かた·む イイ [言固](他、ま下二) 語をつがふ。やくそくす。
いひ·かため [言固](名) やくそく。
いひ·かは·す イイカワス [言交](他、さ四) ㊀たがひにいふ。かたりあふ。㊁ことばにてちかふ。くちやくそくをなす。

〔**いひかはせる** [言交](他) 「いひかはす」の訛。
‡**いひ·がひ** ガイイ [飯匙](名) 釜よりめしをうつはにもる杓子。
いひ·がひ ガイイ [言甲斐](名) 口を添へていふだけのねうち。口をそへていふほどのりえき。――**なし** [言甲斐無](形、二) ㊀口をそへていふかひなし。㊁おくびやうなり。ひけふなり。
いひ·かへ·す イイカエス [言返](他、さ四) ㊀くりかへしていふ。㊁くちごたへをなす。さからひいふ。㊂答辯す。こたふ。
いびき [鼾](名) 寢てゐるときの鼻息。
いひ·ぎり イイ [飯洞](名)【植】椅科に屬する木、葉は心臟形をなし、萼片は通常五個あり、花瓣は存在せず、花序は圓錐狀をなす、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に供せらる。(椅)。
いひ·き·る イイ [言切](他、ら四) ㊀いひをはる。㊁だんげんす。
‡**いび·く** [鼾](自、か四) いびきを發す。
いひ·くく·む イイ [言含](他、ま下二) いひふくむ。
いひ·ぐさ イイ [言草](名) 言ふべきたね。いひごと。申しわけ。
いひ·くさ·す イイ [言腐](他、さ四) おとしていふ。わるくいふ。
〔**いひ·くた·す** イイ [言腐](他、さ四) いひくさす。
いひ·くだ·す イイ [言下](他、さ四) いひくさす。
いひ·くら·す イイ [言暮](他、さ四) 其事のみをいひて、日をくらす。
いひ·くろ·む イイ [言黑](他、ま下二) まことらしくいひなす。ことばにてごまかす。

〔**いひくろめる** [言黑](他) 「いひくろむ」の訛。
‡**いひ·げ** イイ [飯笥](名) 古昔、飯をもりたるうつは。おハチ。めしびつ。
いひ·け·す イイ [言消](他、さ四) ㊀人のはなしをうちけす。いひつぶす。㊁いひかふ。
‡**いひ·け·つ** イイ [言消](他、た四) いひけす。
いひ·こしら·ふ イイロウ [言拵](他、は下二) あざむく。まろうしこむ。
いひ·こ·む イイ [言込](他、ま四) いひいる。
いひ·ごと イイ [言事](名) いひぐさ。
いひ·こ·む イイ [言籠](他、ま下二) 論じて屈服せしむ。いひやぶる。
〔**いひこめる** [言籠](他) 「いひこむ」の訛。
いひ·さ·す イイ [言差](自、さ四) いひかけてやむ。
‡**いひ·した·み** イイ [飯簁](名) 古昔、飯を蒸すときに、こしきのそこにおきし竹かご。(箄)。
‡**いひ·しろ·ふ** イイシロウ (他、は四) 互にいひあらそふ。ことばたがひす。ろんじあふ。
いひ·すぎ イイ [言過](名) いひすごすこと。
いひ·す·ぐ イイ [言過](他、か上二) いひすごす。
‡**いひ·すぐ·す** イイ [言過](他、さ四) いひすごす。
いひ·すごし イイ [言過](名) いひすごすこと。
いひ·すご·す イイ [言過](他、さ四) ものいふに度を過ごす。程をこえていふ。
いひ·ずし イイ [飯鮨](名) すし、飯もてつくる故に名づく。
いひ·す·つ イイ [言捨](他、た下二) 答

へなもとめずものをいひはなす。
いひ-すて〔イイ〕〔言捨〕(名) いひすつること。
〔**いひすてる**〔言捨〕(他)「いひすつ」の訛。
いひ-そこなひ〔イイ—ナイ〕〔言損〕(名) いひそこなふこと。いひあやまり。
いひ-そこな・ふ〔イイ—ナウ〕〔はひふへ〕〔言損〕(他、は四) いふべきすぢをあやまる。いひあやまる。いひそんず。
†**いひ-そ・す**〔イイ〕〔さしすせ〕〔言過〕(他、さ四) いひすごす。「我たけくいひそし侍るに」。
いひ-そや・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言囃〕(他、さ四) いひたてゝもてはやす。いひはやす。
いひ-だこ〔イイ〕〔飯蛸〕(名)【動】二鰓類中章魚(タコ)科に屬する海產動物、形小さくして體軀は楕圓形なり、第一對の腕脚は他に比すれば短く、吸盤は廣し、左方の第三脚は褶形の交接器に變ず、體色蒼白なり、近海に產し食用に供せらる。

〔いひだこ〕

いひ-だ・つ〔イイ〕〔てててつつる〕〔言立〕(他、た下二) ㊀まうしたつ。まうしあぐ。㊁おしたてゝいふ。とりあげていふ。いひはる。
いひ-たて〔イイ〕〔言立〕(名) おしていひたつること。いひたつべきたね。こうじつ。
〔**いひたてる**〔言立〕(他)「いひたつ」の訛。
い-びたり〔寢尿〕(名)〔寢浸の轉〕ねむり居て小便をもらす疾。ねせうべん。いびたれ。
いひ-ちら・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言散〕(他、さ四) ㊀いひやぶる。いひまかす。㊁いひひろぐ。いひふらす。
い-びつ〔飯櫃〕(名)〔いひびつの轉〕㊀こばんがた。

だゑん。㊁圓き形のひずみたるもの。
†**いひ-つか・ふ**〔イイツ—カウ〕〔はひふへ〕〔言繼〕(他、は四) いひつぐ。いひつゞく。
いひ-つぎ〔イイ〕〔言繼〕(名) いひつたへ。でんごん。
いひ-つ・く〔イイ〕〔けけくくるれけよ〕〔言付〕(他、か下二) ㊀命令す。まうしつく。㊁あばきつぐ。つげくちす。
いひ-つ・ぐ〔イイ〕〔がぎぐげ〕〔言繼〕(他、か四) ㊀いひつたふ。いひつゞく。㊁でんごんす。
いひ-つく・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言盡〕(他、さ四) いふべきかぎりは殘りなくいふ。
いひ-つけ〔イイ〕〔言付〕(名) いひつくること。めいれい。まうしつけ。「—にそむく」。
〔**いひつける**〔言付〕(他)「いひつく」の訛。
いひ-つた・ふ〔イイッ—タウ〕〔へへふふるれへよ〕〔言傳〕(他、は下二) ㊀言を以て傳へ來る。はなしに殘る。㊁いひ觸らす。㊂でんごんす。
いひ-つたへ〔イイッ—タエ〕〔言傳〕(名) ㊀言ひ傳へ來たること。(口碑)。㊁いひふらし。㊂でんごん。
〔**いびったれ**〔寢浸〕(名)「いびたり」の訛。
いびつ-なり〔飯櫃形〕(名) 楕圓なる形。
いひ-つの・る〔イイ〕〔らりるるれれ〕〔言募〕(他、ら四) わが思ふことをはげしく言ひはる。
いひ-つ・む〔イイ〕〔めめむむるれめよ〕〔言詰〕(他、ま下二) ㊀極言す。かぎりまでいふ。㊁なじりて閉口せしむ。
〔**いひつめる**〔言詰〕(他)「いひつむ」の訛。
いひ-つらひ〔イイッ—ライ〕〔言論〕(名) あげつらひ。
いひ-つら・ふ〔イイッ—ラウ〕〔はひふへ〕〔言論〕(他、は四) いひあらそふ。こうろんす。あげつらふ。
いひ-と・く〔イイ〕〔かきくけ〕〔言釋〕(他、か四) べんかいす。せつめいす。
いひ-とほ・す〔イイトオス〕〔さしすせ〕〔言通〕(他、さ四) いひ

はる。しゆちやうす「自說を—」。
†**いひ-とほ・る**〔イイトオル〕〔らりるるれれ〕〔言通〕(自、ら四) とゞこほりなく言ふ。べんぜつさわやかにいふ。
†**いひ-とよ**〔イイ—〕(名)【動】「ふくろふ」の古名。(梟鵄)。
〔**いひ-と・る**〔イイ〕〔らりるるれれ〕〔言取〕(他、ら四) ことばにうつしていふ。
いひ-な・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言做〕(他、さ四) ㊀然らざるをそれらしくいふ。㊁となへいふ。
いひ-なづけ〔イイ〕〔言名付〕(名) 幼時よりあらかじめ結婚を約しておくこと。(許嫁)。
いひ-なほ・す〔イイナオス〕〔さしすせ〕〔言直〕(他、さ四) いひかふ。いひあらたむ。
いひ-なほし〔イイナオシ〕〔言直〕(名) いひなほすこと。
いひ-なや・む〔イイ〕〔まみむめ〕〔言難〕(他、ま四) ㊀いふをはゞかる。㊁いふにゑぶる。
いひ-ならはし〔イイナラワシ〕〔言習〕(名) いひつたへ。くちくせ。
いひ-ならは・す〔イイナラワス〕〔さしすせ〕〔言習〕(他、さ四) ㊀ならはしにて、言ひつたふ。㊁くちぐせにいふ。
いひ-な・る〔イイ〕〔れれるるれれ〕〔言習〕(自、ら下二) 其事をいふになる。
いひ-にく・し〔イイ〕〔くしきけれ〕〔言惡〕(形、一) いふになやまし。いふに難し。
いひ-ぬ・く〔イイ〕〔かきくけ〕〔言拔〕(他、か四) いひくるめてのがる。いひくるむ。
いひ-ぬけ〔イイ〕〔言拔〕(名) いひぬけること。
〔**いひ-ぬ・ける**〔イイ〕〔けけけるけれけよ〕〔言拔〕(自、か下一) よそごとを言ひてのがる。
いひ-のこ・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言遺〕(他、さ四) ㊀はなすべき事をはなし終へずして止む。はなしをのこす。㊁のちにいひおく。あとへいひおく。
いひ-のこり〔イイ〕〔言遺〕(名) いひのこること。

いひ-のこ・る〔イイ〕〔らりるるれれ〕〔言遺〕(他、ら四) いふべき事あとにのこる。
いひ-バチ〔イイ〕〔飯鉢〕(名) めしびつ。めしバチ。
いひ-はな・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言放〕(他、さ四) いひはなつ。
いひ-はな・つ〔イイ〕〔たちつて〕〔言放〕(他、た四) 心に思ふかぎりをいひ切る。
いひ-はや・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言囃〕(他、さ四) はめいふ。いひひろむ。さんびやうす。
いひ-は・る〔イイ〕〔らりるれ〕〔言張〕(他、ら四) いひとほす。しゆちやうす。
いひ-ひらき〔イイ〕〔言開〕(名) べんかい。いひわけ。べんめい。
いひ-びつ〔イイ〕〔飯櫃〕(名) めしびつ。めしバチ。
いひ-ひら・く〔イイ〕〔かきくけ〕〔言開〕(他、か四) 仔細を明かにせんがためにいふ。いひて仔細を明かにす。べんかいす。べんめいす。いひわく。
いひ-ふく・む〔イイ〕〔めめむむるれめよ〕〔言含〕(他、ま下二) ㊀合點のゆくやうによくいふ。㊁其人の言ふべき事又は行ふべき事を、いひ聞せておく。
いひ-ふくめ〔イイ〕〔言含〕(名) いひふくむること。
〔**いひふくめる**〔言含〕(他)「いひふくむ」の訛。
いひ-ふ・す〔イイ〕〔せせすするれせよ〕〔言伏〕(他、さ下二) いひて屈從せしむ。いひやぶる。
〔**いひふせる**〔言伏〕(他)「いひふす」の訛。
いひ-ふらし〔イイ〕〔言觸〕(名) いひふらすこと。うはさ。ひやうばん。
いひ-ふら・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言觸〕(他、さ四) ㊀いひひろむ。いひちらす。㊁世間にてうはさす。ひやうばんす。
いひ-ふる・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言古〕(他、さ四) 言ひ

なれて、めづらしからざるやうになる。
〔**いひぶん**〔イイ—〕〔言分〕(名) ㊀いふべきこと。いふべきかど。㊁いひぐさ。こうぶつ。
いひ-べた〔イイ〕〔言下手〕(名) いひかた拙きこと。
†**いひ-ぼ**〔イイ〕〔飯粒〕(名) ㊀めしつぶ。㊁疣(ボイ)の古名。いなめ。
いひ-ほど・く〔イイ〕〔かきくけ〕〔言解〕(他、か四) いひひらく。
いひ-まぎら・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言紛〕(他、さ四) いひくろむ。いひなす。
いひ-ま・ぐ〔イイ〕〔げげぐぐるれげよ〕〔言曲〕(他、か下二) 然るべきことを然らざるやうにいひなす。理を非にまげていふ。
〔**いひまげる**〔言曲〕(他)「いひまぐ」の訛。
いひ-まはし〔イイマワシ〕〔言回〕(名) いひまはすこと。「—がうまい」。
いひ-まは・す〔イイマワス〕〔さしすせ〕〔言回〕(他、さ四) いひめぐらす。たくみにいふ。
〔**いひ-まへ**〔イイマエ〕〔言前〕(名) ㊀言ふべきたね。こうぶつ。いひぐさ。㊁言ひわけ。いふところ。
いひ-もらし〔イイ〕〔言漏〕(名) いひもらすこと。
いひ-もら・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言漏〕(他、さ四) ㊀ひみつを人にもらす。㊁いひのこす。
いひ-やう〔イイヨウ〕〔言樣〕(名) いふことばのさま。いひまはし。
いひ-やぶ・る〔イイ〕〔らりるれ〕〔言破〕(他、ら四) いひまかす。いひふす。ときふす。
いひ-や・む〔イイ〕〔まみむめ〕〔言止〕(他、ま四) ㊀いひをはる。㊁いひかけてやむ。
いひ-や・る〔イイ〕〔らりるれ〕〔言遣〕(他、ら四) 他につげしらす。いひつかはす。
いひ-よ・る〔イイ〕〔らりるれ〕〔言寄〕(他、ら四) ものをいひ

かけて、したしみ近づく。
〔**いびり**(名) いびること。
〔**いび・る**〔らりるるれれ〕(他、ら四) ㊀わづらはしきほどになやます。あへたぐ。さいなむ。せびる。㊁あぶり燒く。焙りつく。
いひ-わ・く〔イイ〕〔かきくけ〕〔言分〕(他、か四) 次條に同じ。
いひ-わ・く〔イイ〕〔けけくくるれけよ〕〔言分〕(他、か下二) 情實をときわけていふ。いひて情實をときあかす。べんかいす。べんめいす。(分疏)。
いひ-わけ〔イイ〕〔言分〕(名) べんめい。べんかい。
〔**いひわける**〔言分〕(他)「いひわく」の訛。
いひ-わたし〔イイ〕〔言渡〕(名) ㊀いひわたすこと。めいれい。ふれ。㊁裁判の宣告。
いひ-わた・す〔イイ〕〔さしすせ〕〔言渡〕(他、さ四) ㊀めいれいをつたふ。おほせを告げしらす。いひつたふ。㊁判決の旨を宣告す。
いひ-わた・る〔イイ〕〔らりるれ〕〔言渡〕(他、ら四) ㊀いひつゝとしつきを經。㊁いひふらす。
いひ-わづら・ふ〔イイ—ラウ〕〔はひふへ〕〔言煩〕(他、は四) いひにくゝ思ふ。いひはゞむ。
いひ-わ・ぶ〔イイ〕〔びびぶぶるれびよ〕〔言詫〕(他、は上二) いひにくゝ思ふ。
いひ-わん〔イイ〕〔飯椀〕(名) めしわん。おちやわん。
(**い-ふ**〔ハイ〕〔拜〕(名) ㊀笏をとりて拜する禮。㊁手をこまぬきて行ふ禮。
(**い-ふ**〔異父〕(名) 兄弟共に其母を同じうして父を異にするもの。
い・ふ〔ハイ〕〔はひふへ〕〔言〕(他、は四) ㊀おもひをこゝろにのぶ。ことばにいだす。ことばにのぶ。㊁はなす。かたる。つぐ。㊂なづく。となふ。よぶ。
い・ふ〔ハイ〕〔はひふへ〕〔言〕(自、は四) くちをきく。ものをいふ、

(いふ-いふ)イフイフ[悒悒](名、副) 心むすぼるゝさまにいふ語。
いふ-いふ イウイウ[言言](副) いひつゝ。いひながら。
(い-ふう)[異風](名) 異なりたる風俗。ことなりたるすがた。
いぶか-し しくしきけれ[訝](形、二) うたがはし。不審なり。ふえぎなり。あやし。
いぶかしみ[訝](名) ふえん。うたがひ。
いふかた-な-し イウ[くしきけれ][言方無](形、二) いはんやうなし。
いふ-がひ ガイ[言甲斐](名) 言ふだけのりえき、
——な-し くしきけれ[言甲斐無](形、二) ㊀いひても其甲斐なし。㊁いくぢなし。ふがひなし。
いぶか-る らりるれれ[訝](他、ら四) いぶかしくおもふ。不審におもふ。あやしむ。
いぶき[伊吹木](名)【植】松杉科に屬する喬木、幹は直立し、葉は杉葉の如く尖りたるものと小形鱗片狀なるものとあり、暖地に産す、木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。
卄いぶき(名) ㊀いき。(氣息)。㊁かぜ。
いぶき-とらのを[伊吹虎尾](名)【植】蓼(テ)科に屬する草、葉は狹小にして深綠、夏初に花を開く、花瓣は六個にして淡紅色なり、近江國伊吹山より出でしが故に名づく。(金線重樓)。
いぶき-ばうふう ハウフウ[伊吹防風](名)【植】繖形科に屬する有毛草本、海邊に自生し、又、栽培す、複葉を有し、嫩葉は赤色を帶ぶ、花は白色小形なり。(細葉邪蒿)。
いぶき-びやくしん[伊吹柏槇](名)【植】「いぶき」に同じ。
(いふ-きやうだい)イフキヤウダイ[異父兄弟](名) たねがはりの兄弟。

いぶき-よもぎ[伊吹蓬](名)【植】よもぎの一種、うらに白毛多きが故に、うらぶろと名づく、もぐさを製す。(裴蒿)。
(い-ふく)[衣服](名) きぬ。ころも。きもの。いえやう。ふく。
(い-ふく)[異服](名) かはりたる着もの。よのつねならぬ服。
(い-ふく)[異腹](名) はらちがひ。はらがはり。ことはら。
(い-ふく)[畏服](名) おそれえたがふこと。(畏伏)。
いぶし[燻](名) ㊀いぶすこと。㊁硫黄を燃して亞硫酸瓦斯をつくり、錏のうつはなどに煤色をつくること、「—をかける」。㊂蚊遣り火。かいぶし。
(いふ-おやう)イウシヨウ[揖讓](名) 互に禮式をなしてゆづりあふこと。
いぶ-す すせしすせ[燻](他、さ四) ㊀ものを燒きて烟をおこす。くすぶ。ふすぶ。くゆらす。㊁あぶりてやく、「蛤を—」。㊂金屬の類にいぶしをかく。㊃蚊遣り火をたく。
いぶせ-し くしきけれ(形、二) ㊀おぼつかなし。いぶかし。㊁心むすぼる。氣はれず。(鬱悒)。
(い-ぶつ)[異物](名) 普通ならざるもの。つねにかはりたるもの。
(いふ-にふ)イフニフ[邑入](名) 領地より上る收入。領地のあがりもの。
(いふ-めい)イウ[言目](名) 言ふとはりのこと。言ふがまゝのこと。
いふ-やう イウヤウ[言樣](名) いふやうす。いはく。
いぶり[燻](名) ㊀けぶること。㊁心強くなさけなきこと。㊂人をいびること。
いぶり-だ-す すせしすせ[燻出](他、さ四) 人を苦しめて追ひ出す。
いぶり-もの[燻物](名) 人情のなき人。

いぶ-る らりるれれ[燻](自、ら四) けぶる。くすぶる。
(い-ぶん)[異聞](名) 異なりたる風聞。
(い-ぶん)[移文](名) ㊀おほやけの照會文。㊁處々にまはす廻狀。くわいぶん。くわいぶやう。「北山の—」。
(い-ぶん)[以聞](名) まうしあげ。上申。
(い-ぶんぼ)[異分母](名)【數】二項以上の分數式にて、其の分母の同一ならざること。
いへ エイ[家](名) ㊀人の住むための建てもの。㊁つま。㊂わがうち。わがや。㊃やがら。うがら。㊄先祖より傳はり來たる代々のみやうせき、「—をつぐ」。㊅いへがら。もんち。㊆【法】戸主が支配統轄する親族團體の稱、即ち、戸主と共に同一の戸籍に登錄せられてあるものをすべていふ。
(い-へう)ヘウ[意表](名) おもひのほか。あんぐわい。「—に出づ」。(意外)。——ぐわい[意表外](名) 「いへう」に同じ。
いへ-がら イエ[家柄](名) ㊀貴きいへすぢ。もんばつ。名家。㊁家の格式。家の地位。「—低し」。
卄いへ-ごと イエ[家言](名) 家のたより。家の傳言。
卄いへ-ざかり イエ[家離](名) 家をとほくはなること。
いへ-じち イエ[家質](名) 金を借るに家屋をその抵當に入るゝこと。
いへ-ぢ イエ[家路](名) ㊀其家の方へ行く路。㊁我家へかへる路。
いへ-ぢ イエ[家地](名) よろひの下地につくる布、巾一尺二寸餘、地はおもに藍にて染め、これに金箔にて紋又は模樣をおす。
卄いへ-づかさ イエ[家司](名) 家事を取り扱はする人。けいし。かれい。かぢゆう。かふ。

いへ-つき イエ[家附](名) まへ方より、其家につきて居ること。「—の娘」。
卄いへ-つぎ イエ[家繼](名) 「かとく」に同じ。
卄いへ-づ-く イエ(かきくけけ)[家着](自、か四) 家に近づく。
いへ-づくり イエ[家造](名) 家の造りかた。やづくり。やがまへ。いへがまへ。かさく。
いへ-つづき イエ[家續](名) 家々のたてつらなりてあること。又、其所。
いへ-づと イエ[家裹](名) 家へもちかへるみやげ。
卄いへ-つ-どり イエ[家鳥](名)【動】「にはとり」の古名。
いへ-で イエ[家出](名) ㊀ひそかに家を拔け出づること。㊁法師になること。
卄いへ-とうじ イエ[家刀自](名) いへとじ。「—に、盃さゝせて」。
卄いへ-どころ イエ[家處](名) すみか。すまひ。ぢゆうきよ。ぢゆうしよ。
卄いへ-とじ イエ[家刀自](名) ㊀家の主人の妻。內儀。㊁家の主人の母。
いへ-なみ イエ[家並](名) 家々のならびたること。又、其所。
いへ-にれ イエ[家楡](名)【植】「せつぶんさう」に同じ。
いへ-ぬし イエ[家主](名) ㊀其家の主人。いへのあるじ。㊁貸し家のもちぬし。又はとりしまりをする人。やぬし。さはいにん。
卄いへ-の-いも イエ[家芋](名) 「さといも」に同じ。
卄いへ-の-いも イエ[家妹](名) おのれの妻。
卄いへ-の-きみ イエ[家君](名) 主人。だんな。
いへ-の-こ イエ[家子](名) ㊀良家に生まれ出でたるもの。家門の子。㊁ぶんけ。いちもん。㊂家につかふもの。らうたう。

いへ-の-もん イエ[家紋](名) 中古より始まりたる一種の徽章、武家がはたざるしに付けたるより起り、衣服調度等にまでつくる其家々の徽號。もんどころ。もん。
卄いへ-ばち イエ[家蜂](名) 家に飼ふ蜜蜂。
いへ-ばと イエ[家鳩](名)【動】鳩の一種、嘴は短くして少しく膨大せる末端のみ角質なり、翼長大にして飛力強し、足は短小にして赤色を帶ぶ、毎歲二回産卵す、多く家に飼ふ。
いへ-ばへ バエ[家蠅](名)【動】普通に人家に住める蠅、口器は蝶の如く捲かれ、吸引力強し。
卄いへ-びと イエ[家人](名) ㊀家につかふる人。けにん。㊁貴族の家に出入する人。
いへ-みつ イエ[家蜜](名) 「はちみつ」に同じ。
いへ-もち イエ[家持](名) ㊀家作を持てる人。㊁こしゆ。家長。㊂家計のやりかた。
いへ-もと イエ[家元](名) ㊀嫁ぎたる婦人の里方。㊁遊藝などの流儀の本家。
卄いへ-ゐ イエ[家居](名) ㊀すまゐ。ぢゆうきよ。㊁わが家に居て休息すること。
卄いへ-ゐ-る イエ[ゐゐゐるゐるゐれゐよ][家居](自、わ上一) ㊀家をつくりてすまふ。いへゐす。㊁家に居て休息す。
(い-へん)[異變](名) 異なりたること。つねにかはりたる事件。
いほ イオ[庵](名) 草木を結びて造りたるかりや。いほり。(廬)。
卄いほ イオ[五百](名) ㊀ごひゃく。㊁數の多きにいふ語、「—のりの數」。「—とせ」。
いぼ[疣](名) 一種の皮膚病、筋肉凝塊をなして皮膚の飯粒ぐらゐの大きさに高くなること。いひぼ。(肬)。

(い-ぼ)[異母](名) 兄弟にして、父同じけれど母異なること。はらちがひ。
いぼうじり(名)【動】「いぼむしり」の音便。
いぼ-がへる ガエル[疣蛙](名)【動】かへるの一種、形頗る大にして、背にいぼ多く、一種の臭氣あり。くそがへる。
いぼ-ぐさ[疣草](名)【植】鴨跖草(ツユクサ)科に屬する草、水邊に生ず、細長なる尖葉と帶紫白色の花とを有す。(水竹葉)。
卄いほ-さ-す イオ[さしすすせせ][庵](自、さ四) いほりをつくる。
いぼ-しめぢ[疣茸](名)【植】「いぼたけ」に同じ。
[いぼ-おり][疣毟](名)【動】「いぼむしり」に同じ。
——まき[疣毟卷](名)(い)婦人の髮の結び方、たゞくるくるとまきつけたるもの。(ろ)そくはつの一種。
卄いほ-しろ-をだ イオ[五百代小田](名) 多くの田。
いぼ-た[疣取](名) ㊀「いぼたらふ」の略言。㊁【植】木犀科に屬する小木本、葉は長橢圓形をなし、通常五分內外の幅を有す、花梗は多數の毛を具し、花冠の裂片は反捲せず、此木に蠟蟲を養育し、それより蠟を採る。(水蠟樹)。
いぼ-たけ[疣茸](名)【植】きのこの一種、始めて生え出でたる時、恰もいぼを寄せあつめたるが如きさまなる故に此名あり。
いぼ-だひ イーダイ[疣鯛](名)【動】硬鰭類中まながつを科に屬する魚、頭部は縮小して背部は潤し、腹部は側扁にして斜方形をなす、體色は背部蒼色にして腹部は淡し、體長大なるは二尺に達す、我國西南殊に中國の遺海に多し。
いぼたらふ ーロウ[疣取蠟](名) 一種の蠟、いぼたらふのむしの幼蟲が、分泌せる白色の蠟質を採集し

いまがた【今方】(名) 今ごろ。現在。

いまがは【今川】(名) 水にて晒し粉を溶き、これをかれの茎に注ぎ、餌を包んで燻したもの。昔時、江戸の今川橋辺の者、燻を始めしより名づくといふ。

いまがは-やき【今川焼】(名) 今川に同じ。

いまき【今来】(名) いまいまし。(新撰)

いまごろ【今頃】(名) いまのとき。いまごろ。「…のよの一」

いまざか【今坂】(名) 「いまさかもち」の略。

いまさかもち【今坂餅】(名) 餡を包みたる餅などの表面を紅白種々の色を附す。「連雀」

いまさと-ぶり【在】(自ハ四) 「いまさとの歌語。

いまさら【今更】(副) 今改めて。今となって。

いまし【汝】(代) なんじ。なんぢ。そなた。(國)

いまし【今】(副) 「いまに同じ。——がた【今方】(副) いまがた。

いまし-の-ま【今間】(名) 今の間。「一は思ひ見むだになんに」

いまし-は【今者】(副) 今となっては。今は。

いまし-ぶんしゃう【今時分】(名) いまごろ。「去年の一」

いまし-む【戒】(他マ下二) ❶告げて慎ましむ。❷懲罰して遇ちなからしむ。❸禁制す。とゞむ。❹守備を厳にす。不慮に備ふ。❺非行過失のなからんことを望む。「自ら一」❻人を禁錮す。ぎばる。

いましめ【戒】(名) ❶いましむること。いましむる文。❷いましむる法。❸ばつ。ちゅうばつ。❹ばつせられたる人。

いましめる【戒】(他) 「いましむの訛。

いま-す【在】(自サ四) ❶居たまふ。❷来たまふ。行きたまふ。「むの敬語。❸

いま-す【在】(他サ下二) 「いましの訛。

いまそかり【御座】(自ラ変) おいでなさること。「。

いまそかり【御座】(自ラ変) 「いますかりに同じ。

いまだ【未】(副) なほ其ときに至らずして。——し【未】(形シク) まだそれに達せず。

いまだき【未】(名) まだ其ときに至らざること。

いまだに【未】(副) 今に至るまで。

いまだ-ふ【未】(副) 「いまだに同じ。

いまだ-ふ【未】(形シク) 「いまだしの古形。

いまだ-ふ【未】(形ハ四

‡いむ-はた-どの［忌機殿］(名)　天照大神の御衣を織るはたどの。
‡いむ-び［忌火］(名)　清めたる火。神にたてまつる物を調理するに用ふ。——にはびのまつり［忌火庭火祭］(名)　古昔、六月、行はれし祭事、内膳司にて行へり。——や［忌火屋］(名)　いむびを鑽(き)りいだしゝ家屋。
‡いむ-べ［齋部］(名)　❶神を祭るに用ふる品々を作り、又、潔齋して神事にあづかりし職。❷姓(かばね)の一。(忌部)。
‡いむ-べ［忌瓮］(名)　いはひべ。いんべ。
‡いむ-をの［忌斧］(名)　神殿を造作し、或は神に奉る材木を切りとるに用ふる清めたる斧。
‡いめ［夢］(名)　ゆめ。「一に見ゆ」。
‡いも［妹］(名)　❶男子より女子を親しみ呼ぶ稱。❷いもうと。女弟。
いも［芋］(名)　【植】天南星科に屬する栽培草本。塊狀の地下莖を有す。葉は稍圓形にして葉柄長く、肉穗花序は長き佛焰の狀をなし、子房は一室を有す。地下莖及葉は食用に供せらる。さといも。たうのいも。はすいも。やつがしら等種類多し。
いも［藷］(名)　【植】(い)纏繞草本にして莖に子を結び食用とすべきもの〻總稱。つくねいも。かしうい　も等なり。(ろ)やまのいも。(は)さつまいも。(甘藷)。「(疱瘡)。
いも［疱］(名)　顏面にあるいもがさのあと。あばた。
いも-アン［藷餡］(名)　さつまいもを蒸して磨りつぶし、これを砂糖とまぜたるもの。
いも-うと［妹］(名)　❶同胞にて後に生まれたる女子。❷己より年少の婦人を親しみて呼ぶ稱。——ぶん［妹分］(名)　假りに妹と定めたるもの。(義妹)。——むこ［妹婿］(名)　妹の夫。
いもかけ-どうふ［藷掛豆腐］(名)　豆腐の汁に、やまのいものすり汁をかけたるもの。やまかけどうふ。とろゝどうふ。
‡いも-がさ［疱瘡］(名)　はうさう。もがさ。
いも-がしら［芋頭］(名)　さといもの根。おやいも。(魁芋)。
いもかは-うどん゙ (名)　尾張國鳴海邊にてはじめて製したる平うちのうどん。
いも-がび [芋貝](名)　【動】腹足類中前鰓類に屬する小螺。白色に紅斑ありて際なく、殼形は頂部平坦にして、胴部と足部は迴旋せず。近海に産す。
いも-がぼ [疱顏](名)　疱痕のあるかほ。あばたづら。ぢやんこづら。
いも-がら［芋幹］(名)　芋の莖を干したるもの。食用に供す。なまなるをずゐきといふ。(芋莖)。
いも-がり［妹許］(名)　妹の居る所。
いも-ごみ［藷籠］(名)　一種の食品。米の粉にやまのいもをすりまぜ、これを圓筒形につゝみて、小口切りにしたるもの。「酒」(山芋酒)。
いも-ざけ［藷酒］(名)　やまのいもを摺り入れたる
‡いもし［鋏］(名)　いもがら。
‡い-もじ［鑄物師］(名)　「いものし」の略言。
{い-もじ［い文字］(名)　【動】烏賊の異稱。
{い-もじ(名)　「ゆもじ」に同じ。
‡いも-しうとめ［妹姑］(名)　姑の姉妹。
いもじり(名)　【動】「いぼむしり」の轉。
いも-しる［藷汁］(名)　「とろゝじる」に同じ。
いも-しんじよ［藷糝薯］(名)　一種の食品。やまのいも又はつくねいもをおろし、これに豆腐を入れてゆでたるもの。
いも-せ［妹脊］(名)　❶女と男と。❷夫婦の稱。めをと。❸兄と妹と。姉と弟と。——どり［妹脊鳥］(名)　【動】「はこべどり」の一名。
いもち-びやゔ (名)　稻の病の一、稻生長して一尺許となりたる頃、葉に黴菌寄生して白斑を現し、次第に衰弱して抽穗せざるもの。(稻熱病)。
いも-でんがく［芋田樂］(名)　一種の料理。さといもを串にさして味噌をぬり、これをやきたるもの。いものおでん。
いもと［妹］(名)　いもうと。「妻の稱。
‡いも-なね［妹］(名)　(「なね」は愛する義)妹又は
い-もの［鑄物］(名)　金屬を溶かして、鑄造せる器物の總名。——し［鑄物師］(名)　いものを作る職人。いもじ。(治人)。「こいも。
いも-の-こ［芋子］(名)　おやいもに附きたる小塊。
いも-の-やま［芋山］(名)　謎歌にて、「山の芋」を轉倒していふ語。「田」。
いも-ばたけ［芋畑］(名)　芋を植ゑたるはたけ。「芋
‡いもひ゛[齋](名)　いむこと。ものいみ。「一の御莚にまゐれる」。
‡いも-ふ゛[齋](自、は四)　「いむ」の延言。
いも-むし［芋蟲］(名)　【動】蛾類の幼蟲の總稱。形は蠶に似て、長さ二三寸より三四寸、後に蛹となり更に羽化して成蟲即ち蛾となる。種類甚だ多し。(蠋蠋)。
{いも-めいげつ［芋名月］(名)　(いもを供ふるより名づく)陰曆八月十五夜の月の稱。
‡いも-ゐ［齋居］(名)　ものいみをして居ること。——の-みや［齋居宮］(名)　伊勢のさいぐう。
いや［彌］(副)　だん〳〵かさなりて。ますます。いよ〳〵。ますゝ〳〵。

{いや［否］(名)　このまぬこと。欲せざること。「一なり」。
いや［否］(副)　いゝえ。いな。「一さうで無い」。
{いや(感)　おどろきたるときの發聲。「一、これは」。
{いや-いとこ［彌從兄弟］(名)　父のいとこの子。またいとこ。ふたいとこ。(再從兄弟)。
{いや-いや［否否］(名)　「いや」をかされて厭ふ意味を強めたる語。「一ながら」。
{いや-いや［否否］(副)　❶いなりして。「一、それはさうでない」。❷いやとはおもひながら。——さんばい　おふさんばい　いやとはおもひながら、思えず知らず酒を飲み過ごす。又、いやとはおもひながら、つひ深入りするにいふ。
(い-やゔ [異樣](名)　かはりたるさま。
{いや-おう［否應］(名)　いなむとうけがふと。——なし［否應無］(形、一)　是非を言はず。這言なし。——なしに［否應無］(副)　無理に。おしつけて。
‡いや-おひ゛［彌生］(名)　❶草木のおひかさなること。❷陰曆三月の異稱。やよひ。——のつき［彌生月］(名)　陰曆三月の稱。
いや-き［否氣］(名)　いとはしく思ふ心もち。いやと感ずるきもち。「すり。
(い-やく［醫藥］(名)　❶醫術と藥品と。❷藥品。くすり。
いや-し゛[賤、卑](形、二)　❶くらゐひくし。みぶん高からず。たふとからず。❷ひんなり。まとりたり。いやしむべし。❸いさぎよからず。こゝろけがらはし。❹僅少。やすし。
‡いや-さ-く［彌重］(自、か四)　いよ〳〵まさる。「いやさきふれる從井のまろ背」。
いやしく-も［苟］(副)　❶かりそめにも。かりにも。❷もしも。もし。「秦兵一退かば」。❸たゞ。たゞに。「一、これを知るのみにあらず」。
いやしみ［賤］(名)　さげすみ。あなどり。けいべつ。
いやし-む゛[卑、賤](他、ま四)　みくだす。かろしむ。みさぐ。あなどる。かろんず。さげすむ。
いやしん-ず゛[卑](他、さ變)　いやしむ。
いや-す゛[療](他、さ四)　やまひをなほす。
いやちこ(名)　神佛などの利益のいちじるしきこと。あらたか。「れいげん一なり」。(灼然)。
‡いや-つぎつぎ［彌次次］(名)　ながくあとをつぎゆくすること。
いや-ば［彌齒］(名)　重りて生ゆる齒。
いや-ふう［否風］(名)　いやみ。
いや-まさり［彌增］(名)　いよ〳〵まさること。
いや-まさ-る゛[彌增](自、ら四)　いよ〳〵多くなる。だん〳〵まさる。「なり。
‡いや-まし゛[否](形、二)　いやなる樣子
いや-まし［彌益］(副)　いやがうへに多く。いよ〳〵多く。
{いや-み［否味］(名)　相手に不快の感をなさしむる言語又は態度。「みきらふ。
‡いや-む゛[否](他、ま四)　いなむ。きらふ。い
‡いや-め［否目］(名)　惡くなる目つき。淚ぐみたる目つき。「一のけしき」。
{いやら-し゛[否](形、二)　❶きらふべし。きらはし。❷いとあかし。みだりがまし。
い-ゆ゛[癒](自、や下二)　病なほる。ぜんくわいす。はんぷくす。
‡い-ゆ-く゛[行](自、か四)　行く。
いよ［彌］(副)　「いや」の轉。
{いよ(感)　人をはめはやすときの發聲。「一、えらい」。
いよ-いよ［愈］(副)　其上に。ますます。
(い-よう［異容］(名)　普通ならざるかたち。をかしき形。いぎやう。
いよ-がすり［伊豫飛白］(名)　伊豫國より産出するかすり織。
いよ-かづら［伊豫葛］(名)　【植】蘿藦(ががいも)科に屬する草。葉は廣楕圓形或は倒卵形にして、花冠は暗黃色なり。觀賞用として栽培せらる。
(い-よく［意慾］(名)　心の欲する所。意のこのむ所。
いよ-こざね［伊豫小札］(名)　よろひのこざねの一種。形は鉢附けのこざねに似て、一文字に切り其末を丸くしたるもの。
いよ-しろめ［伊豫白味］(名)　(初め、伊豫より出だしゝが故に名づく)「アンチモニー」の一名。
いよ-す［伊豫簾］(名)　「いよすだれ」に同じ。
いよ-すだれ［伊豫簾］(名)　❶伊豫國より産するすだれ。篠極めて細く、長さは七八尺ありて、上品なり。いよす。
いよ-ぞめ［伊豫染］(名)　模樣の名。伊豫簾を二枚以上重ねてすかしながむれば、木目の如き一種の模樣の見ゆるものなるが、此模樣を取りて、絹などに染めたるをいふ。
いよ-だ-つ゛[彌竪](自、た四)　寒さ又は恐怖などにて身の毛立つ。「身の毛一」。
いよ-ど［伊豫砥］(名)　一種の砥石。伊豫より出づ。色白くして質軟し。
いよ-まさ［伊豫柾］(名)　「いよまさがみ」の略言。——がみ［伊豫柾紙］(名)　一種の紙。伊豫國より出す。多くは錦繪などに用ふ。まさがみ。
{いよめ(名)　【動】「にほ」の一名。(阿波の方言)。
‡いよやか(名)　木などの高くそびえたるさまにいふ語。いよよか。(森然)。

いりあ—いりく

いりあげ-ざる [入揚] (他下一) 其人のために少からぬ損害をなす。

いりあひ-あい [入相] (名) 日がまさに入れんとするころ。——の-かね [入相鐘] (名) 日没の頃、寺院にてつく鐘の音。(晩鐘)

いりあひ-げいこ [入會稽] (名) 【法】 貧村落の住民が一定の山林又は野地に於て、共同して收益を得ること。入會利。

いりあや [入文] (名) 織りの手一曲織り終りて復た旧れて織りかくすこと。

いりうらを [入夫] (名) 婿の夫となる人。

いりうみ [入海] (名) 陸に入りこみたる海の部分。(海灣) 「ホ(西江)」

いりえ [入江] (名) 其にいりこみたる海の部。

いりおくて [入介] (名) 稻種の名。かくがくの角に ひとすぢの線のそくものゝいりすみ。

いりがはら [炒瓦] (名) 「いりなべに同じ」

いりかはり [入代] (名) いりかはるとき。かうたい。

いりかはり-かはる [入代] (自ら四) いりかはる。

いりかぶ-する [入通] (自サ變) 立ち入りて往來す。

いりがら [炒殼] (名) ❶穀類をいりて油を取りたるもの。食用に供す。❷豆類のからをいりたるもの。「菜の種殼」

いりぐち [入口] (名) ❶はひるところ。門口。❷物のはひるところ。

いりくみ [入組] (自サ四) かたれまじはる。

いりあ—いりく

いりあげ-ざる [入揚] (他下一) 其人のために少からぬ損害をなす。

いりあひ-あい [入相] (名) 日がまさに入れんとするころ。——の-かね [入相鐘] (名) 日没の頃、寺院にてつく鐘の音。(晩鐘)

いりあひ-げいこ [入會稽] (名) 【法】 貧村落の住民が一定の山林又は野地に於て、共同して收益を得ること。入會利。

いりあや [入文] (名) 織りの手一曲織り終りて復た旧れて織りかくすこと。

いりうらを [入夫] (名) 婿の夫となる人。

いりうみ [入海] (名) 陸に入りこみたる海の部分。(海灣) 「ホ(西江)」

いりえ [入江] (名) 其にいりこみたる海の部。

いりおくて [入介] (名) 稻種の名。かくがくの角に ひとすぢの線のそくものゝいりすみ。

いりがはら [炒瓦] (名) 「いりなべに同じ」

いりかはり [入代] (名) いりかはるとき。かうたい。

いりかはり-かはる [入代] (自ら四) いりかはる。

いりかぶ-する [入通] (自サ變) 立ち入りて往來す。

いりがら [炒殼] (名) ❶穀類をいりて油を取りたるもの。食用に供す。❷豆類のからをいりたるもの。「菜の種殼」

いりぐち [入口] (名) ❶はひるところ。門口。❷物のはひるところ。

いりくみ [入組] (自サ四) かたれまじはる。

いりあ—いりく

いりあげ-ざる [入揚] (他下一) 其人のために少からぬ損害をなす。

いりあひ-あい [入相] (名) 日がまさに入れんとするころ。——の-かね [入相鐘] (名) 日没の頃、寺院にてつく鐘の音。(晩鐘)

いりあひ-げいこ [入會稽] (名) 【法】 貧村落の住民が一定の山林又は野地に於て、共同して收益を得ること。入會利。

いりあや [入文] (名) 織りの手一曲織り終りて復た旧れて織りかくすこと。

いりうらを [入夫] (名) 婿の夫となる人。

いりうみ [入海] (名) 陸に入りこみたる海の部分。(海灣) 「ホ(西江)」

いりえ [入江] (名) 其にいりこみたる海の部。

いりおくて [入介] (名) 稻種の名。かくがくの角に ひとすぢの線のそくものゝいりすみ。

いりがはら [炒瓦] (名) 「いりなべに同じ」

いりかはり [入代] (名) いりかはるとき。かうたい。

いりかはり-かはる [入代] (自ら四) いりかはる。

いりかぶ-する [入通] (自サ變) 立ち入りて往來す。

いりがら [炒殼] (名) ❶穀類をいりて油を取りたるもの。食用に供す。❷豆類のからをいりたるもの。「菜の種殼」

いりぐち [入口] (名) ❶はひるところ。門口。❷物のはひるところ。

いりくみ [入組] (自サ四) かたれまじはる。

いりこ—いりた

いりこ [海參] (名) 一種の食品。なまこの腹を去り、口にはしたるもの。はしこ。(俗稱)

いりこ [炒粉] (名) 米の粉をいりたるもの。菓子の原料として用ひらるゝ。くわだこ。

いりこづけ [煎雜] (名) 一種の料理。魚の肉を醤油などにてこれを煮したるもの。

いりこみ [入込] (名) ❶くぼみなく入りまじること。❷芝居の下等桟敷。

いりこ-む [入込] (自マ四) ❶まじりてゐる。❷其中にはひる。❸いりくむ。

いりごめ [炒米] (名) 「やきごめ」に同じ。

いりごろ (名) 「いりなべに同じ」

いりざけ [煎酒] (名) 酒に醤油又はかつをぶしを加へて、煎じ出だしたるもの。なまり・そしゐなどに用ふ。(繰酒) 「ごこ」

いりまごこ [入仕事] (名) いれてまにてなすこと。

いりまはし [入廻] (名) ひまはし。

いりまめ [炒豌] (名) いりたる豌豆。

いりみ [炒炭] (名) 火にもより湿気を去りて、火のうつりやすきやうにせる炭。

いりづの [入角] (名) 「いりがくに同じ」

いりたち [入立] (名) ❶入り込むこと。入りびたること。❷古着、賣られて屋中に入り込みて、女房と同席せしこと。「宵は、女房の一なりし人の」

いりたち-つ [入立] (自タ四) ❶其家にゐること。❷たちいる。

いりたまご [煎玉子] (名) たまごに醤油と酒又はみりんを加へて、いりたるもの。

いりこ—いりた

いりこ [海參] (名) 一種の食品。なまこの腹を去り、口にはしたるもの。はしこ。(俗稱)

いりこ [炒粉] (名) 米の粉をいりたるもの。菓子の原料として用ひらるゝ。くわだこ。

いりこづけ [煎雜] (名) 一種の料理。魚の肉を醤油などにてこれを煮したるもの。

いりこみ [入込] (名) ❶くぼみなく入りまじること。❷芝居の下等桟敷。

いりこ-む [入込] (自マ四) ❶まじりてゐる。❷其中にはひる。❸いりくむ。

いりごめ [炒米] (名) 「やきごめ」に同じ。

いりごろ (名) 「いりなべに同じ」

いりざけ [煎酒] (名) 酒に醤油又はかつをぶしを加へて、煎じ出だしたるもの。なまり・そしゐなどに用ふ。(繰酒) 「ごこ」

いりまごこ [入仕事] (名) いれてまにてなすこと。

いりまはし [入廻] (名) ひまはし。

いりまめ [炒豌] (名) いりたる豌豆。

いりみ [炒炭] (名) 火にもより湿気を去りて、火のうつりやすきやうにせる炭。

いりづの [入角] (名) 「いりがくに同じ」

いりたち [入立] (名) ❶入り込むこと。入りびたること。❷古着、賣られて屋中に入り込みて、女房と同席せしこと。「宵は、女房の一なりし人の」

いりたち-つ [入立] (自タ四) ❶其家にゐること。❷たちいる。

いりたまご [煎玉子] (名) たまごに醤油と酒又はみりんを加へて、いりたるもの。

いりこ—いりた

いりこ [海參] (名) 一種の食品。なまこの腹を去り、口にはしたるもの。はしこ。(俗稱)

いりこ [炒粉] (名) 米の粉をいりたるもの。菓子の原料として用ひらるゝ。くわだこ。

いりこづけ [煎雜] (名) 一種の料理。魚の肉を醤油などにてこれを煮したるもの。

いりこみ [入込] (名) ❶くぼみなく入りまじること。❷芝居の下等桟敷。

いりこ-む [入込] (自マ四) ❶まじりてゐる。❷其中にはひる。❸いりくむ。

いりごめ [炒米] (名) 「やきごめ」に同じ。

いりごろ (名) 「いりなべに同じ」

いりざけ [煎酒] (名) 酒に醤油又はかつをぶしを加へて、煎じ出だしたるもの。なまり・そしゐなどに用ふ。(繰酒) 「ごこ」

いりまごこ [入仕事] (名) いれてまにてなすこと。

いりまはし [入廻] (名) ひまはし。

いりまめ [炒豌] (名) いりたる豌豆。

いりみ [炒炭] (名) 火にもより湿気を去りて、火のうつりやすきやうにせる炭。

いりづの [入角] (名) 「いりがくに同じ」

いりたち [入立] (名) ❶入り込むこと。入りびたること。❷古着、賣られて屋中に入り込みて、女房と同席せしこと。「宵は、女房の一なりし人の」

いりたち-つ [入立] (自タ四) ❶其家にゐること。❷たちいる。

いりたまご [煎玉子] (名) たまごに醤油と酒又はみりんを加へて、いりたるもの。

いりた—いりも

いりたれ [煎垂] (名) 醤油に味醂・酒・砂糖などを加へて煎じたるもの。

いりつき [入月] (名) 月の入るとき。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつけ [煎付] (他カ下一) 「いりつく」の語。

いりつ-く [煎付] (他カ四) 水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。「そなくす」

いりつ-く [煎付] (自カ四) 水分がなくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつ-け [煎付] (他カ下二) 煮て水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつける [煎付] (他) 「いりつく」の語。

いりどうふ [煎豆腐] (名) 一種の料理。豆腐を湯煮にして其水分をきり、醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりとり [煎鳥] (名) 一種の料理。鳥の肉に蓮根・牛蒡などを切りて加へ、これを醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりなべ [煎鍋] (名) 物をいるときに用ふる鍋、又は土にてつくり、形平たくいりかへす。(俗)

いりに [入荷] (名) 港などに遠方より貨物の到着すること。

いりび [入日] (名) 日暮れとなりて、西方に入る太陽。

いりびた [入浸] (名) 「いりびたり」に同じ。

いりびたり [入浸] (名) ❶水にひたりてゐたるもの。❷絶えず他家に起臥すること。

いりふね [入船] (名) 港に入り来る船。

いりまじ-る [入雜] (自ラ四) いりこみ、まじりてまじる。さくざつす。

いりた—いりも

いりたれ [煎垂] (名) 醤油に味醂・酒・砂糖などを加へて煎じたるもの。

いりつき [入月] (名) 月の入るとき。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつけ [煎付] (他カ下二) 「いりつく」の語。

いりつ-く [煎付] (他カ四) 水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。「そなくす」

いりつ-く [煎付] (自カ四) 水分がなくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつ-け [煎付] (他カ下二) 煮て水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつける [煎付] (他) 「いりつく」の語。

いりどうふ [煎豆腐] (名) 一種の料理。豆腐を湯煮にして其水分をきり、醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりとり [煎鳥] (名) 一種の料理。鳥の肉に蓮根・牛蒡などを切りて加へ、これを醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりなべ [煎鍋] (名) 物をいるときに用ふる鍋、又は土にてつくり、形平たくいりかへす。(俗)

いりに [入荷] (名) 港などに遠方より貨物の到着すること。

いりび [入日] (名) 日暮れとなりて、西方に入る太陽。

いりびた [入浸] (名) 「いりびたり」に同じ。

いりびたり [入浸] (名) ❶水にひたりてゐたるもの。❷絶えず他家に起臥すること。

いりふね [入船] (名) 港に入り来る船。

いりまじ-る [入雜] (自ラ四) いりこみ、まじりてまじる。さくざつす。

いりた—いりも

いりたれ [煎垂] (名) 醤油に味醂・酒・砂糖などを加へて煎じたるもの。

いりつき [入月] (名) 月の入るとき。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつけ [煎付] (他カ下二) 「いりつく」の語。

いりつ-く [煎付] (他カ四) 水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。「そなくす」

いりつ-く [煎付] (自カ四) 水分がなくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつ-け [煎付] (他カ下二) 煮て水分なくなりて鍋にひつゝき焦つまる。

いりつけ [煎付] (名) ❶いりつけたる食物。❷「につけ(煮附)」の一種の料理方。

いりつける [煎付] (他) 「いりつく」の語。

いりどうふ [煎豆腐] (名) 一種の料理。豆腐を湯煮にして其水分をきり、醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりとり [煎鳥] (名) 一種の料理。鳥の肉に蓮根・牛蒡などを切りて加へ、これを醤油・味醂などにていりつけたるもの。

いりなべ [煎鍋] (名) 物をいるときに用ふる鍋、又は土にてつくり、形平たくいりかへす。(俗)

いりに [入荷] (名) 港などに遠方より貨物の到着すること。

いりび [入日] (名) 日暮れとなりて、西方に入る太陽。

いりびた [入浸] (名) 「いりびたり」に同じ。

いりびたり [入浸] (名) ❶水にひたりてゐたるもの。❷絶えず他家に起臥すること。

いりふね [入船] (名) 港に入り来る船。

いりまじ-る [入雜] (自ラ四) いりこみ、まじりてまじる。さくざつす。

いりも—いれ

いりもの [炒物] (名) ❶肉類などをいりつけたるもの。❷米豆などをいりて砂糖を掛けたるもの。まめいり。

いりもみ [煎揉] (名) もみがごとく烈しき風。

いりもむ-む [煎揉] (他マ四) はげしく揉む。

いりゆ [炒湯] (名) 飯をこがして湯を注ぎ其香を移したるもの。

いりよりかは [入川] (名) いりぬ。にふようがは。

いりわけ [入譯] (名) すぢみち。筋の由。

いりん [淪倫] (名) 人生の名分。人生の道義。

いる [入] (自ら四) ❶うちへ行く。到る。❷かくる。かくれる。「日一」。❸ナニむ。いたる。「技藝に一」。❹納まる。❺要す。用ひらる。「金が一」。❻中に生ず。いでく。「ひゞが一」。❼動詞の下に付け、其意を強むるに用ふる語。「おもれ一」。「かんに一」

いる [炒] (他カ四) 物を土鍋又は鐵皿などに入れ、煮つめて水分をさる。(風俗)

いりも—いれ

いりもの [炒物] (名) ❶肉類などをいりつけたるもの。❷米豆などをいりて砂糖を掛けたるもの。まめいり。

いりもみ [煎揉] (名) もみがごとく烈しき風。

いりもむ-む [煎揉] (他マ四) はげしく揉む。

いりゆ [炒湯] (名) 飯をこがして湯を注ぎ其香を移したるもの。

いりよりかは [入川] (名) いりぬ。にふようがは。

いりわけ [入譯] (名) すぢみち。筋の由。

いりん [淪倫] (名) 人生の名分。人生の道義。

いる [入] (自ら四) ❶うちへ行く。到る。❷かくる。かくれる。「日一」。❸ナニむ。いたる。「技藝に一」。❹納まる。❺要す。用ひらる。「金が一」。❻中に生ず。いでく。「ひゞが一」。❼動詞の下に付け、其意を強むるに用ふる語。「おもれ一」。「かんに一」

いる [炒] (他カ四) 物を土鍋又は鐵皿などに入れ、煮つめて水分をさる。(風俗)

いりも—いれ

いりもの [炒物] (名) ❶肉類などをいりつけたるもの。❷米豆などをいりて砂糖を掛けたるもの。まめいり。

いりもみ [煎揉] (名) もみがごとく烈しき風。

いりもむ-む [煎揉] (他マ四) はげしく揉む。

いりゆ [炒湯] (名) 飯をこがして湯を注ぎ其香を移したるもの。

いりよりかは [入川] (名) いりぬ。にふようがは。

いりわけ [入譯] (名) すぢみち。筋の由。

いりん [淪倫] (名) 人生の名分。人生の道義。

いる [入] (自ら四) ❶うちへ行く。到る。❷かくる。かくれる。「日一」。❸ナニむ。いたる。「技藝に一」。❹納まる。❺要す。用ひらる。「金が一」。❻中に生ず。いでく。「ひゞが一」。❼動詞の下に付け、其意を強むるに用ふる語。「おもれ一」。「かんに一」

いる [炒] (他カ四) 物を土鍋又は鐵皿などに入れ、煮つめて水分をさる。(風俗)

いれ—いろ

いれ [入] (名) ❶いるゝこと。はひること。❷見えざること。

いれ [入] (名) ❶いるゝこと。はひること。❷見えざること。

いれ—いろ

いれ [入] (名) ❶いるゝこと。はひること。❷見えざること。

いれ [入] (名) ❶いるゝこと。はひること。❷見えざること。

いろ—いろ

いろ [色] (名) ❶光線の眼に感ずる性質。赤・黄・青・白・黒の五色を基本とし、これを種々に混合して種々の色を生ず。❷顔色。❸容貌。❹情慾。❺情人。❻種類。❼風采。❽情趣。❾情景。❿遊興。⓫遊女。⓬遊女屋。⓭遊女屋の主人。⓮遊女屋の女房。⓯遊女屋の男衆。⓰遊女屋の若い者。⓱遊女屋の下女。⓲遊女屋の遣手。⓳遊女屋の禿。⓴遊女屋の新造。㉑遊女屋の番頭。㉒遊女屋の帳場。㉓遊女屋の台所。㉔遊女屋の風呂場。㉕遊女屋の便所。㉖遊女屋の玄関。㉗遊女屋の門口。㉘遊女屋の裏口。㉙遊女屋の勝手口。㉚遊女屋の庭。㉛遊女屋の座敷。㉜遊女屋の二階。㉝遊女屋の三階。㉞遊女屋の四階。㉟遊女屋の五階。㊱遊女屋の六階。㊲遊女屋の七階。㊳遊女屋の八階。㊴遊女屋の九階。㊵遊女屋の十階。

いろ—いろ

いろ [色] (名) ❶光線の眼に感ずる性質。赤・黄・青・白・黒の五色を基本とし、これを種々に混合して種々の色を生ず。❷顔色。❸容貌。❹情慾。❺情人。❻種類。❼風采。❽情趣。❾情景。❿遊興。⓫遊女。⓬遊女屋。⓭遊女屋の主人。⓮遊女屋の女房。⓯遊女屋の男衆。⓰遊女屋の若い者。⓱遊女屋の下女。⓲遊女屋の遣手。⓳遊女屋の禿。⓴遊女屋の新造。㉑遊女屋の番頭。㉒遊女屋の帳場。㉓遊女屋の台所。㉔遊女屋の風呂場。㉕遊女屋の便所。㉖遊女屋の玄関。㉗遊女屋の門口。㉘遊女屋の裏口。㉙遊女屋の勝手口。㉚遊女屋の庭。㉛遊女屋の座敷。㉜遊女屋の二階。㉝遊女屋の三階。㉞遊女屋の四階。㉟遊女屋の五階。㊱遊女屋の六階。㊲遊女屋の七階。㊳遊女屋の八階。㊴遊女屋の九階。㊵遊女屋の十階。

いろ—いろ

いろ [色] (名) ❶光線の眼に感ずる性質。赤・黄・青・白・黒の五色を基本とし、これを種々に混合して種々の色を生ず。❷顔色。❸容貌。❹情慾。❺情人。❻種類。❼風采。❽情趣。❾情景。❿遊興。⓫遊女。⓬遊女屋。⓭遊女屋の主人。⓮遊女屋の女房。⓯遊女屋の男衆。⓰遊女屋の若い者。⓱遊女屋の下女。⓲遊女屋の遣手。⓳遊女屋の禿。⓴遊女屋の新造。㉑遊女屋の番頭。㉒遊女屋の帳場。㉓遊女屋の台所。㉔遊女屋の風呂場。㉕遊女屋の便所。㉖遊女屋の玄関。㉗遊女屋の門口。㉘遊女屋の裏口。㉙遊女屋の勝手口。㉚遊女屋の庭。㉛遊女屋の座敷。㉜遊女屋の二階。㉝遊女屋の三階。㉞遊女屋の四階。㉟遊女屋の五階。㊱遊女屋の六階。㊲遊女屋の七階。㊳遊女屋の八階。㊴遊女屋の九階。㊵遊女屋の十階。

いろ—いろ

いろ [色] (名) ❶光線の眼に感ずる性質。赤・黄・青・白・黒の五色を基本とし、これを種々に混合して種々の色を生ず。❷顔色。❸容貌。❹情慾。❺情人。❻種類。❼風采。❽情趣。❾情景。❿遊興。⓫遊女。⓬遊女屋。⓭遊女屋の主人。⓮遊女屋の女房。⓯遊女屋の男衆。⓰遊女屋の若い者。⓱遊女屋の下女。⓲遊女屋の遣手。⓳遊女屋の禿。⓴遊女屋の新造。㉑遊女屋の番頭。㉒遊女屋の帳場。㉓遊女屋の台所。㉔遊女屋の風呂場。㉕遊女屋の便所。㉖遊女屋の玄関。㉗遊女屋の門口。㉘遊女屋の裏口。㉙遊女屋の勝手口。㉚遊女屋の庭。㉛遊女屋の座敷。㉜遊女屋の二階。㉝遊女屋の三階。㉞遊女屋の四階。㉟遊女屋の五階。㊱遊女屋の六階。㊲遊女屋の七階。㊳遊女屋の八階。㊴遊女屋の九階。㊵遊女屋の十階。

い・る[入](他、ら下二) ㊀うち入る。おく。なかへ進る。㊁いたす。すゝむ。㊂かくす。おとす。忘る。㊃納む「利息を—」。㊄費やす。用ふ「ちからを—」。㊅志たがふ。承知す「いさめを—」。㊆中へ挟む「疑を—る除地なし」。

いる[沃](他、ら上二) そゝぎかく。

いる[鑄](他、ら上二) 金屬を熔解し鎔型にいれて、器物を作る「鐵砲を—」。

いる[射](他、ら上一) ㊀矢又は彈丸をはなちやる。㊁放出す。そゝぐ。はなつ。

〔**い・る**〕[癒](自、ら上二) 病癒ゆ。

いるか(名) 【動】游水類中有齒類に屬する哺乳動物、體長六七尺、頭部長くして上下の顎に圓錐形の小齒あり、脊鰭は背の正中にありて鎌狀をなす、何れの海洋にも產し、群集して游泳す、肉は食用に供せられ、油及革も種々の用に供せらる。(海豚)。

イルマン(名) (葡 Irmão 兄弟の義)基督敎の敎職の中にて師父の次位にあるもの。

イルミネーション[Illumination](名) 多くの燈火を點じて裝飾すること。

(**い・るゐ**)[衣類](名) 身に着るもの丶總稱。きもの。いふく。いしやう。

(**い・るゐ**)[異類](名) ㊀尋常普通ならぬもの。類にはづれたるもの。㊁人類に異なりたるもの、即ち、禽獸・變化(ヘンゲ)。——**いぎやう**[異類異形](名) さまざまのかたちのもの。よのつねならぬもの。妖怪、變化。

〔**いれあ・げる**〕[入揚](他、か下一)「いりあげる」に同じ。

(**い・れい**)[異例](名) ㊀ためしなきこと。㊁つねならざること。びやうき。

(**い・れう**)[醫療](名) いしゆつを以て、疾病を療治すること。ちれう。れうぢ「—機械」。

〔**いれ・かけ**〕[入掛](名) 相撲(スマフ)などにて、其日の興行を中途にて止むること。

いれ・かたびら[入帷](名) 著物などを、箱に入るゝときに包む服紗(フクサ)の如きもの。

〔**いれ・かはり**〕[入代](名) 每年十一月に俳優が劇場を交代して始めて打つ芝居。

いれ・か・ふ[入替](他、は下二) かへている。いりかはらしむ。

いれ・かへ[入替](名) ㊀いれかふること。㊁抵當に入れたる品物を、他の品物といれかふること。

いれ・がみ[入髮](名) 髮を結ぶに添へ入るゝ毛髮。そへがみ。いれげ。(義髮)。

いれ・き[入木](名) 彫刻のなほしをするに、他の木をうめこむこと。

いれ・げ[入毛](名)「いれがみ」に同じ。

いれ・こ[入子](名) ㊀一つの器の中に、順次に小なるを重ねてくみいれたるもの。㊁外部にあらはれずして、內部にかくれてあること。(內子)。——**ざけ**[內子鮭](名) 【動】はらゝごを持ちたる鮭。——**まくら**[內子枕](名) 枕の中に、別の枕のいりてあるもの。「こ。又、其所。

いれ・どみ[入込](名) 多數の人のいりこみたる

いれ・ずみ[入墨](名) ㊀昔時の刑罰の一、腕にきずつけて墨を刺し、後日の目標となしゝもの。(黥)。㊁ほりもの。(刺青)。

〔**いれちがひ**〕[入違](名)「いれちがへ」の訛。

いれ・ちが・ふ[入違](他、は下二) ㊀ありやこりやにいる。いるゝ所をあやまる。㊁かれを出だしこれを入る。「ちがふ。

〔**いれ・ちが・ふ**〕[入交](自、は四) いりちがふ。

いれ・ちがへ[入違](名) いれちがふること。いれまちがひ。

いれちや・がゆ[入茶粥](名) ちやがゆ。

いれ・ぢゑ[入智惠](名) 他人よりをしへられたる謀略又はかんがへ。「こと。

〔**いれ・でま**〕[入手間](名) てつだひてを入るゝ

いれ・ば[入齒](名) 人造の齒を以て、脫(ヌ)け齒のあとに入るゝこと。又、其入れたる齒。(義齒)。——**し**[入齒師](名) 入齒を業とするもの。

いれ・ひも[入紐](名) 袍直衣(ナホシ)・狩衣(カリギヌ)などの紐、雌紐と雄紐とをとりあはせ、輪にさし入れて掛けむくもの。

いれ・ふだ[入札](名) にふさつ。とうへう。

いれ・ブツじ[入佛事](名) ㊀佛事のいとなみの施物又は費用。㊁入費を出だしたるのみにて、其利益なきこと。

いれ・ぼくろ[入黑子](名) 腕に人名などを細くいれずみにすること。(刺青)。「じらしむ。混ず。

いれ・ま・ず[入雜](他、さ下二) 入りま

〔**いれまぜる**〕[入雜](他)「いれまず」の訛

いれ・め[入目](名)「ガラス」などにてつくりたる眼球、眼球なきものが、これを眼孔に嵌め入れて、明を粧へるもの。(假眼、義眼)。「文字

いれ・もじ[入文字](名) 歌の中に、かくし入れし

いれ・もとゆひ[入元結](名) 元結を志めて更に其上に結びかざる元結、童子の髮を結ふに用ゐるもの。えもとゆひ。おほもとゆひ。

いれ・もの[入物](名) ものを入るゝうつは。(容物)。

〔**いれる**〕[入](他)「いる」の訛。

[いれもとゆひ]

〔**い・れる**〕(自、ら下一) ㊀炒(イ)られてあり。㊁心いらだつ。「、綿。

いれ・わた[入綿](名) 衣服などによそほひいる

いろ[色](名) ㊀發光體より發射する光り又は暗體より反射する光りが、眼に刺戟を與ふるによりて感發する一種の現象、其主なるは、赤・黃・靑の三、混じて紫・綠などの間色を生ず。㊁喪服のにびいろ。㊂たんおき「—許さる」。㊃つや。かざり。いろどり。㊄かほいろ。がんえよく「—を變ず」。㊅容貌のうるはしきこと、又、其人。㊆男女の愛情。おもしろう。㊇いろめきたること。いろごのみ。㊈えな。たぐひ。「十人十—」(種)。㊉きざし。やうす。(候)。㊀てうえ。ひゞき「音—」(頭)。㊁毛髮の色のうるはしきこと。㊂愛する男又は女。情人。㊃醬油の異名。

†**いろ**—[愛](接頭) 或語に冠して親愛の意を表はす「—ね」「—と」「—は」。

(**い・ろ**)[倚廬](名) 喪中にこもり居る假り家。

いろ・あ・ぐ[色上](他、か下二) いろあげす。(染色)。

いろ・あげ[色揚](名) 古き布などの色あせたるを、再び染めなほして鮮かになすこと。

いろ・あそび[色遊](名) 遊里にてのあそび。

いろ・あひ[色合](名) 色のほどあひ。いろの加減。いろけ。

いろ・いと[色絲](名) ㊀さみせんのいと。又、さみせん。㊁種々のいろに染めたる絲。(綵線)。

†**いろ・いろ**(名、副) 涕泣するさまにいふ語。

いろ・いろ[色色](副) かれこれと。さまざまに。

†**いろ・え**(名) 兄を親しみて呼ぶ稱。

いろ・えんぴつ[色鉛筆](名) 蠟の中に染料を混ぜ合せたる鉛筆、軸には心と同じ色を塗る。

いろ・か[色香](名) ㊀いろとかをりと。㊁容色の艶麗なること。

いろ・がは[色革](名) 染めがは。

いろ・がはり[色變](名) ㊀種類のかはりたるもの。㊁文色のかはりたるもの。㊂婚禮のときに著かふる色のかはりたる著物。(色直)。

いろ・がひ[色貝](名) さまざまの介。

いろ・がみ[色紙](名) 色染めにせる紙。(花紙)。

〔**いろ・きちがひ**〕[色狂](名) 色情に因りて、精神錯亂せること。又、其人。(花風病)。

†**いろ・くづ**[鱗](名) ㊀いろこ。こけ。うろこ。魚の總名。「ること。

いろ・ぐるひ[色狂](名) 色慾におぼれ放蕩す

いろ・け[色氣](名) ㊀いろあひ。「—のいゝそめかた」。㊁えきおやう。(春心)。

いろ・けし[色消](名) ㊀【理】色收差を消すこと。㊁不風流。不粹。——**レンズ**[色消—](名) Achromatic lens【理】色收差のなきレンズ。

†**いろ・こ**[鱗](名) ㊀「うろこ」に同じ。㊁人の頭部につく垢。こけ。ふけ。(雲脂)。——**がた**[鱗形](名)「うろこがた」に同じ。

†**いろ・と**[色子](名) 役者などの稱。

〔**いろ・ごと**〕[色事](名) ㊀男女間のみだらなる行ひ。㊁芝居のぬれ事。——**し**[色事師](名) ㊀ぬれ事の役をなす役者。㊁遊冶郞。

いろ・ごのみ[色好](名) 色事を好むこと。「—のうまれつき」。(酒色家)。

いろ・ごろも[色衣](名) ㊀種々の色に染めたる衣服。㊁うるはしき著物。「るはし。

いろ・ざざえ[色蠑螺](名) 【動】にしの類、殼色う

いろ・ざし[色差](名) ㊀いろあひ、いろけ。㊁いろどり。さいしき。

いろ・ざと[色里](名) 遊女・藝者などの集まり住居する所。いうり。くるわ。(花柳巷)。

いろ・ざま[色樣](名) 色合ひ。

いろ・ざ・む[色褪](自、ま下二) ㊀色あす。光澤うす。(褪落)。㊁顏色靑ざむ。

いろ・しうさ[色收差](名) 【理】白き光りが「レンズ」を通過するとき、分散するため、物像の周圍に色つき見えて鮮明ならざること。

いろ・しな[色品](名) 種々の物。

いろ・じろ[色白](名) 人の肌の色の白きこと。(哲)。

いろ・ずり[色摺](名) さいしきせる摺り物。——

のもの[色摺物](名) 鳳凰・桐又は雲龍などの模樣を、いろどりて摺りたる物。

†**いろ・せ**(名) あに。(家兄)。

いろ・そ・ふ[色添](自、は四) ㊀物の種類增す。㊁在來のものより、一層色はゆ。

いろ・だ・つ[色立](自、た下二) ㊀いろ生ず。㊁顏色變ず。㊂きざす。

いろ・だま[色玉](名) 【植】「ざくろ」の一名。

いろ・づ・く[色着](自、か四) ㊀色生ず。㊁成熟す。うむ。㊂いろけづく。

いろ・つけ[色着](名) 色をそむること。彩色。

いろ・つや[色艷](名) ㊀色とつやと。㊁かほいろ。㊂おやうあい又はかざり。「—のない話」。

†**いろ・と**(名) おとうと。(家弟)。

(**いろ・どうき**)[異路同歸](名) みちはそれぞれことなれど、もちつくさきはことならざること。

いろ・どり[色取](名) ㊀さいしき。ちやくしよく。㊁けしやう。化粧。㊂かざり。裝飾。

卄いろ-どり[色鳥](名) 種々の鳥。

いろ-どりのこ-がみ[色鳥子紙](名) 越前のいろほうしよ、大阪のごようがみ、修善寺のかきいろがみの類をすべていふ。

いろ-ど・る ら,り,る,る,れ,れ [色取](他,ら四) ㊀さまざまの色を以てさいしきす。さまざまの色をとりあはせてかざる。㊁顔に、紅・おしろい・まゆずみなどを塗りて化粧す。㊂つやをつく。かざる。潤色す。——つき[色取月](名) 九月の異名。木葉のいろづくによりて名づく。

卄いろ-な-ぐさ[色無草](名) 【植】松の一名。

いろ-なほし オシナホ[色直](名) 結婚の後、三日まで着たる白小袖を、色ある小袖に着かふること。今は、結婚の當夜に行ふ。

卄いろ-ね(名) あね。(家姉)。

いろ-ね[色音](名) ねいろ。こわね。「—ゆかしき想夫戀」。

卄いろ-は(名) はゝ。(家母)。

いろ-は[伊呂波](名) ㊀ひら假名四十七文字の稱、初めの三字を取りてこれに名づく。㊁兒童に初めて書を學ばしむるに、ひら假名四十七文字を授くること。轉じて、學びの初歩、初學。㊂初歩の平易なる事。——うた[伊呂波歌](名) いろは四十七文字の歌、四十七文字は同一文字を重用せざる今様歌に組立てあり、弘法大師の作にて、涅槃經中有名なる「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の四句の意を述べたるものといふ、即ち「色はにほへど散りぬるを、我世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢見じ醉もせず」なり。——がな[伊呂波假名](名) ひらがな四十七文字の稱。——ガルタ[伊呂波骨牌](名) 一種の骨牌、一枚ごとに、伊呂波短歌一首づゝの繪を畫き、これに首字をしるし、都合四十七枚あり、歌に合せて取るもの。——たとへ[伊呂波譬](名) 「いろはたんか」に同じ。——たんか[伊呂波短歌](名) いろは四十七文字をおのおの首におきて、兒童の教訓とせる譬へ歌。——ぼたん[伊呂波牡丹](名) 【植】ぼたんの一種、花普通の牡丹より劣る。

卄いろ・ふ ウイロ [は,ひ,ふ,ふ,へ,へ][色](自,は四) ㊀めうつりす。㊁色まして濃くなる。

いろ・ふ ウイロ [は,ひ,ふ,ふ,へ,へ][綺](他,は四) ㊀關係す。あづかる。㊁とりあつかふ。㊂いぢる。もてあそぶ。

卄いろ・ふ ウイロ [へ,へ,ふ,ふる,ふれ,へよ][色](他,は下二) いろを添ふ。うつくしくす。

卄いろ-ふし[色節](名) 取り立てゝいふべき晴れなる事。

いろ-ぶみ[色文](名) 戀愛の程をかきたてたる書狀。えんしよ。けさうぶみ。(艶書)。

いろ-ほうしよ-がみ[色奉書紙](名) ほうしよがみの一種、色を付けてすきたるもの、筑前又は越前より出す。

いろ-め[色目](名) ㊀古昔、衣服の色合ひの名目、「かさねの—」。㊁ながしめに見ること。又、其めつき。「—をつかふ」。(秋波)。㊂色のほどあひ。

いろ-めか・し しく,しく,し,しき,しけれ [色](形,二) いろごのみらし。いろめきて見ゆ。

いろ-め・く か,き,く,く,け,け [色](自,か四) ㊀色生ず。㊁軍勢崩れ始む。㊂いろごのみらしく見ゆ。

いろ-もの[色物](名) 寄席にて講談などの堅きものに對して落語などの艶めきたるものゝ稱。

いろ-り[色利](名) 煮物に加へて、味を添ふるもの。

いろ-わけ[色分](名) ㊀地圖などに、彩色して區劃をなすこと。㊁物事の區別。

いろ-ゑ[色繪](名) ㊀彩色をほどこせる繪畫。(彩畫)。㊁刀劍のふちかしらなどに、金銀を嵌め入れたるもの。㊂金屬彫刻に象眼・鍍消し・鍍金などの色彩を加ふること。

(い-わう)ワウ[以往](名) 以後。こうらい。こうご。しやうらい。

(い-わう)ワウ[醫王](名) やくし(藥師)。

(い-わう)ワウ[硫黄](名) 「ゆわう」に同じ。

卄いわ・く け,け,く,くる,くれ,けよ [稚](自,か下二) 幼稚にして、かよわくあり。

卄いわ・く け,け,く,くる,くれ,けよ (自,か下二) あわつ。

卄いわけ-な・し く,く,し,き,けれ [幼稚](形,二) いとけなし。

いわし[鰯](名)(よわしの義) 【動】喉鰾類中にしん科に屬する魚、體は紡錘形にして鱗は疎大なり、體色は背部蒼色にして腹部銀白色なり、脂多ければ搾りて燈油となし、又、干(ほ)してほしかとなし肥料に用ふ、沖繩地方より東北及北海道に至る近海に產すれど、安房・上總地方を最とす。——くぢら[鰯鯨](名) 【動】くぢらの一種、胸と腹との皮に縱線ありて、編みたる竹の如し、鰯を好みて食す。かつをくぢら。

(い-ゐ)[依違](名,副) 決斷する能はざるさまにいふ語。「—決せず」。

(い-ゐき)[異域](名) ぐわい國。いこく。——のおに[異域鬼](名) 他國にて死にたるもの。

(い-ゐ-ぢゆうぎやう) ヂウギヤウ [異位重行](名) 古昔、公事儀式などのとき、内裏の庭に公卿のたちならびたる配列。

いを[魚](名) 「うを」に同じ。——うり[魚賣](名) うをうり。さかなうり。——ぐし[魚串](名) 魚をやくに使用する串。——すき[魚鋤](名) 【植】「やまごばう」に同じ。(商陸)。——つり[魚釣](名) 魚をつること。又、其人。——とり[魚捕](名) 魚を捕ること。又、其人。

卄いを-ぬ ね,ね,ぬ,ぬる,ぬれ,ねよ [寢](自,な下二) 熟眠す。ねる。

いを-の-ふえ[魚鰾](名) 魚類の脊柱の下にある薄皮袋圓形の氣胞、魚は其伸縮によりて身體の比重を加減し游泳するを得。(魚胞)。

いを-の-め[魚目](名) うをのめ。(疣眼)。

(いん)[印](名) ㊀文字を木・竹・牙・角・石・玉・金などに彫刻し、これを文書に押捺して信となすもの。㊁眞言宗の僧侶が、呪文を唱へ雙手を結ぶこと。「—をむすぶ」。㊂古昔、支那にて、官位のあるしとせし佩びもの、金石などに彫刻を施し、位階に應じて其品を類別せり。㊃歸着する所の證據。「現與心—」。

(いん)[因](名) 事の成り立つもとゐ。

(いん)[音](名) 「おん」に同じ。

(いん)[引](名) ㊀簡單なるはしがき。㊁古詩の一體。

(いん)[陰](名) 陰陽の條を見よ。

(いん-あ)[姻婭](名) えんつゞき。えんるゐ。

(いん-あ)[瘖啞](名) おし。おふし。

(いん-あく)[陰惡](名) あらはれざる惡事。

いん-イオン[陰—](Anion)(名) 【理】陰電氣を帶ふ「イオン」。

(いん-いつ)[隱逸](名) 世をのがれかくるゝこと。——くわ[隱逸花](名) (周茂叔の愛蓮の說より出づ)菊の異稱。

(いん-いん)[殷殷](名,副) 雷のひゞき又は音の盛んなるさまにいふ語。

(いん-いん)[陰陰](名,副) 空陰りてもの寂しきさまにいふ語。

(いん-う)[陰雨](名) ㊀そらかきくもりて雨降ること。㊁ながあめ。(淫雨)。

インヴァーネス[Inverness](名) 形二重廻しに似て袖狹く丈短き外衣、羅紗などにて仕立つ。

(いん-えい)[胤裔](名) しそん。ばつそん。すゑ。

(いん-えい)[印影](名) 印を押捺したるあと。

(いん-えい)[陰影](名) かげ。

(いん-えん)[因緣](名) ㊀【佛】物事の成立のもと即ち因と、成立せしむるちから即ち緣とによりて、定められたる人生の關係。ちなみ。ゆかり。たより。いんねん。㊁ゆらい。らいれき。

(いん-えん)[夤緣](名) ㊀たより。てづる。㊁つゞき。

(いん-か)[印可](名) 師が弟子に、其教ふる物事を能く爲し得るを認めて證明を與ふること。ゆるし。

(いん-かう)カウ[印行](名) 文書・圖畫等を印刷して發行すること。

(いん-かん)[印鑑](名) ㊀印形のみほん。印の眞僞を判ずる基とするもの。㊁印を押したる符券。

(いん-かん)[殷鑑](名) (論語に、「殷鑑不遠在夏后之世」とあるより出づ)戒めとすべき前人の跡。

(いん-き)[陰氣](名) ㊀物に翳はれて、はればれせざること。㊁鬱々として心の快活ならざること。

インキ[Ink](名) 西洋諸國にて用ふる墨汁。(洋墨)。

(いん-きふ)キフ[飮泣](名) 聲を立てずして泣くこと。

(いん-きやう)キヤウ[陰莖](名) 男子の生殖器。

(いん-ぎやう)ギヤウ[印形](名) 印(一)に同じ。

(いん-きよ)[隱居](名) ㊀官又は世にたづさはらずして、閑居すること。(隱棲)。㊁【法】戶主が自己の自由意思により、一定の條件に從ひて、戶主たる地位より退くこと。

(いん-きよく)[陰極](名) 【理】電池又は電解器若しくは眞空管に於て、電池の陰極と繫ぎたる端。陽極の對。——はうしやせん ハウシヤ [陰極放射線](名) 【理】眞空の度の高き眞空管内に於て放電するとき、管の陰極より發出する放射線、管の壁光を放つによりてこれを認む。

(いん-きん)[印金](名) 紗・絹などに、うるしと糊とを以て紋を押し、其上に金箔をおきたるもの。

(いん-ぎん)[慇懃](名) ㊀ねんごろ。ていねい。㊁よしみ。まじはり。㊂男女の情交。「—を通ず」。

(いん-く)[印矩](名) 印を捺(お)すに用ふる定規、木にて作れる小さき曲尺のごときもの。

インク[Ink](名) 「インキ」に同じ。

インクライン[Incline](名) 傾斜面に鐵軌を敷設し、或動力によりて、船舶・荷物等を臺架の上に載(の)せて昇降せしむる裝置。

(いん-くわ)[陰火](名) 夜に燐などの燃ゆる火。妖怪に伴ひて起る火。おにび。

(いん-ぐわ)[陰畫](名) 寫眞の種版の畫像。

(いん-ぐわ)[因果](名) ㊀原因と結果と。㊁原因と結果とを連結したる關係、即ち、一が他に對して變化の基因となり、他が一に對して變化の成果となる狀態。㊂前業の應報。むくい。㊃ふしあはせ。

(いん-くわ-しよくぶつ)[隱花植物](名) 【植】羊齒類・菌類・藻類・「バクテリヤ」等の總稱、雌雄兩蕊を有する花なくして、概ね微細なる子實の如きものを生じて蕃殖す、これを胞子といふ、顯花植物の種子とは、全く性質を異にし、胚を有せざるが故にまた無胚子ともいふ、發育機關の高等なるものは、根・莖・葉の區別明かなれど、下等なるものは、全體一樣の形狀を有す。

(いん-ぐわ-てきめん)[因果覿面](名) 惡事のむくいは、めのまへにあらはるゝこと。

(いん-くわ-てん)[引火點](名) 燃料の點火しはじむるときの溫度。

(いんぐわ-りつ)[因果律=Causality](名) 原因結果の關係に於ける自然の規定。此關係は無限の連鎖にして、必然的に規定せられ、一現象の起るには、必ず此原因ありて、又、同一なる原因よりは、必ず同一なる結果を生ずといふこと。

(いん-くん-し)[隱君子](名) ㊀世にあらはれず、山林などに隱れすむ有德の人。㊁[植]菊の異稱。

(いん-けつ)[引決](名) 責を引き自殺すること。

(いん-げつ)[隱月](名) 琵琶の撥をさむる所。

(いん-けん)[引見](名) よびよせて對面すること。

(いん-けん)[隱見](名) 見えかくれすること。ほのかに見ゆること。

(いん-けん)[隱劍](名) わきざし。

(いん-けん)[隱險](名) うはべは柔和にして、心中のねぢけたること。

(いん-げん)[隱元](名) [植]「いんげんさゝげ」の略言。——ささげ[隱元大角豆](名) 隱元禪師が、始めて明國より持ち來たりたるより此名ありといふ。[植]荳(マメ)科に屬する栽培植物、花序は總狀にして葉より短く、花は白色或は帶紫色なり、種子及嫩莢は食用に供せらる。——な[隱元菜](名) [植](い)菜の一種、あぶらなに似て、色うすく淡白し。(ろ)「はぼたん」の一名。——まめ[隱元豆](名) [植](い)いんげんさゝげ。(東京の方言)。(ろ)ふぢまめ。(京阪地方の方言)。

(いん-げん)[隱現](名) 或はかくれ或はあらはること。——はう[隱現砲](名) 低位置にて裝塡し、發射の際に、砲身を高位置にのぼせて陵堡の上に現はし、發射終れば再び低位置に降下せしむる裝置の砲架を有する大砲。——はうだい[隱現砲臺](名) いんげんはうを据ゑつけたる砲臺。

いん-こ[鸚哥](名)[動] 攀木類中鸚鵡科に屬する鳥。頭は圓く短大にして上嘴は鈎曲す、舌は肥厚肉質にしてよく人語を眞似す、羽色は紅・白・綠ありて美麗なり、熱帶地方に產す。

‡いん-こ[忌火](名) いむひ。

(いん-ご)[隱語](名) かくしことば。なぞ。ふちやう。あひづ。

(いん-こう)[咽喉](名) ㊀のど。㊁人體ののどにもたとふべき要害。「—の地」。

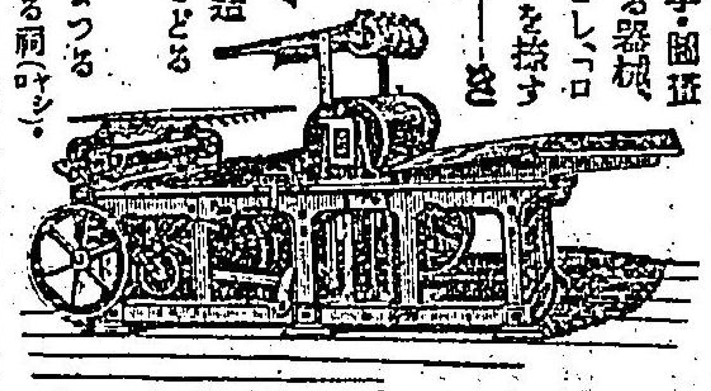
(いん-こく)[印刻](名) いんばんをほること。

(いん-ごふ)[因業](名) ㊀[佛]因緣ある惡業。㊁ざんこく。無慚。「—なおやぢ」。

(いん-ざい)[印材](名) 文字を彫刻して印とすべき材。即ち、木・石・玉・竹・牙・角・金屬など。

(いん-さつ)[印刷](名) 文字・圖畫等の版面に「インキ」をつけて紙面に印象すること。——きかい[印刷器械](名) 文字・圖畫の版面を紙面に印刷する器械。人力又は汽力を動力とし、「ロール」によりて「インキ」を捺するやうの裝置なり。——きよく[印刷局](名) 內閣七局の一、總理大臣の管理に屬し、官報法令全書等の編輯・印刷、印紙・切手・證劵類の製造及抄紙等の事をつかさどる所。

(いん-し)[淫祠](名) まつるべき理由なくて祭りある祠(ヤシロ)。



[いんさつきかい]

(いん-し)[印紙](名) ㊀印を押捺せる文書。㊁手數料・租金等を支拂ひたることを證明するために、文書などに貼用する切手。政府これを發行して賣り下ぐ。えうにふいんし。㊂「いうびんきつて」の俗稱。

(いん-し)[因子](名) [數]「いんすう」に同じ。

(いん-じ)[淫辭](名) みだらなることば。理にあはぬことば。

(いん-じ)[陰事](名) かくしおく事。祕事。密事。

(いん-じ)[印璽](名) [法]御璽と國璽と。

(いん-じや)[隱者](名) 世にあらはれずしてかくれ居る人。

(いん-しやう)[隱症](名) 內部に籠もりて、發せざる病。「—のおやうかん」。

(いん-しやう)[印象](名) ㊀物の面に印したる形跡。㊁[心]對象の惑覺せられたる狀態。

(いん-しやう)[印章](名) 「いんぎやう」に同じ。

(いん-じゆ)[印綬](名) 支那にて官印を佩ぶるくみひも。——をとく[解印綬] 官を辭す。おゐよくす。

(いん-じゆん)[因循](名) ㊀敢爲の氣象なく、物事にためらひなづむこと。㊁進步の知識なく、舊弊を固守すること。

(いん-しよ)[隱所](名) ㊀かくれたるところ。㊁かはや。(厠)。

(いん-しよう)[引證](名) 證據をひくこと。ひきごと。

(いん-しよく)[飲食](名) 飲むと食ふと。又、飲みものと食ひものと。——てん[飲食店](名) 飲食をあきなふみせ。料理屋・そば屋の類。

(いん-しん)[音信](名) おとづれ。たより。

(いん-しん)[殷賑](名) さかんなること。にぎはふこと。

(いん-すう)[因數](名) [數]一數が數個の數の相乘積なるとき、元數に對する各數の稱。

インスピレーション[Inspiration](名) 神の靈を吹きこまれたるかの如くに感ずること。精神奮興して悲壯となること。(神來、感激)。

(いん-ぜい)[印稅](名) 著者が、其書の賣價の幾分を出版者より受け取ること。

(いん-せき)[姻戚](名) えんじやのみうち。えんつゞき。

(いん-せふ)[引接](名) [佛]彌陀の弘願力に由り念佛の行者を來迎して、安樂界に往生せしむるといふこと。

(いん-ぜん)[院宣](名) 上皇若しくは法皇の宣旨。

(いん-ぜん)[隱然](名、副) はつきりとせざれど、何處となく其勢を現すさまにいふ語。

(いん-ぞく)[姻族](名) ㊀婿若しくは嫁に關する親族。㊁[法]婚姻によりて、配偶者の一方と他の一方の親族との間に生ずる親族關係、例せば、夫が妻の父母・祖父母に對する如き關係これなり。

(いん-そつ)[引率](名) ひきゐること。つれだつこと。

(いん-だう)[引導](名) ㊀みちびくこと。㊁死人を葬るとき、冥土にゆくしるべをなすとて、僧侶が行ふ式。

(いん-たく)[隱宅](名) ㊀隱居したる人の住宅。㊁「べつさう」。

インチ[吋=Inch](名) 英國にて用ふる長さの單位、一「フート」の十二分の一、我國の八分・三八一。

(いん-ち)[印池](名) 印肉をいるゝ器。

(いん-ち)[引致](名) ひきゆくこと。つれゆくこと。

(いん-ぢ)[印地](名) 「いんぢうち」の略言。——うち[印地打](名) 小石を打ちあふたはむれ。(石戰)。

インヂウム[Indium](名) 純白色の稀有なる金屬、鉛より較や軟く、赤熱すれば氣體となる。

インデン[印傳](名) 「いんでんがは」の略言。——がは[印傳皮](名) なめしがはの一種、羊又は鹿のかはを以て作り、袋物などにす。

(いん-でん-き)[陰電氣](名) [理]樹脂を毛皮にて摩擦したるとき、樹脂にあらはるゝ如き類の電氣。陽電氣の對。

(いん-どう)[引頭](名) 大法會のとき出づる僧の職名。

(いん-とく)[隱慝](名) ㊀かくして祕密にすること。かくまふこと。㊁あらはれざる罪惡。

(いん-とく)[陰德](名) 恩德を施したれど世に知れざること。——やうはう[陰德陽報](名) 陰德あるものは、顯れたるむくいありて、吉慶來る。

(いん-とん)[隱遁](名) 世を捨てゝ、山林などにかくるゝこと。

(いん-なう)[陰囊](名) 睾丸及精系の包被、囊狀をなす。きんたま。

(いん-にく)[印肉](名) 印を押すに用ふる肉、艾にひまし油を和し、煉りて色つけたるもの、朱・黑・靑など種々の色あり、靑肉は凶事に用ふるを習慣とす。(印色)。

(いん-ねん)[因緣](名) いんえん。——づく[因緣盡](名) いんねん。

(いん-の-くそ)[犬糞](名) 犬のくそ。又、きたなきものを譬へいふ語。——でかたきをとる 些細なる事を恨みて、心ぎたなく復讎をなす。

(いん-の-こ)[犬子](名) いぬのこ。

(いん-ばん)[印判](名) いんぎやう。

(いん-ばい)[淫賣](名) 「ばいいん」に同じ。

(いん-ばい-ふ)[淫賣婦](名) 「ばいいんふ」に同じ。

(いん-び)[隱微](名) ㊀かすかにしてあらはれざること。㊁おくぶかくして知りがたきこと。

(いん-び)[淫靡](名) みだらなること、風儀正しからざること。

(いん-ぴ)[蔭庇](名) 恩惠を蒙ること。おかげ。「長官の—の下」。

(いん-ぴ)[隱祕](名) かくれたること。祕密。

(いん-ぷ)[陰符](名) ㊀兵陣又は謀計の書。㊁まじなひのふだ。おふだ。

インフルエンザ[Influenza](名) 一種の傳染性の病、惡寒發熱を生じて身體の違和を感ずるもの。流行性感冒。

(いん-ぷ)[印譜](名) 印影を蒐集したる書。

‡いん-べ[忌瓮](名) 「いはひべ」に同じ。

(いん-ぺい)[隱蔽](名) おほひかくすこと。

いんべ-やき[伊部燒](名) 一種の陶器、備前國伊部(イムベ)より製出するもの。

(いん-ぼう)[陰謀](名) ㊀ひそかに計畫する謀略。㊁反逆內亂又は他國を略取せんとする謀略。㊂[法]二人以上、互に犯罪の意思を表示決定して、一致結合したる狀態。

(いん-ぽん)[印本](名) 印刷せる書冊。

(いん-ぽん)[淫奔](名) いたづら。だらく。みだら。

(いん-ま)[今](名) いま。

(いん-みやう)[因明](名) 印度に行はるゝ五明學の一にして、即ち、一種の論理學、宗・因・喩・合・結の五段の形式を立て、物事の眞僞を考定するもの。

(いん-めつ)[湮滅](名) あとかたのほろびたること。

(いん-めつ)[隱滅](名) ㊀かくれて見えざること。㊁[天]一の天體が他の天體に掩はれて、全く見えざること。

(いん-もつ)[音物](名) 好意を通ずるために、贈與する物品。おくりもの。

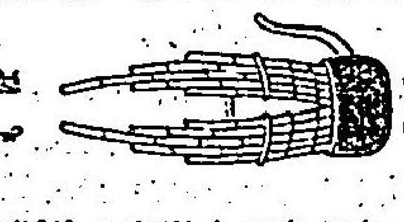
(いん-もん[陰門](名) 婦人の生殖器。
(いん-やう[陰陽](名) ㊀支那の易學の語。天地の元氣判れて相反對の性質を有する二樣の氣となる。一を陰といひ一を陽といふ。萬物の化育は此兩氣の消長によるものとす。これをものに就きていへば、日は陽、月は陰、火は陽、水は陰、男は陽、女は陰、南は陽、北は陰、春は陽、秋は陰、夏は陽、冬は陰、上は陽、下は陰、晝は陽、夜は陰、天は陽、地は陰等なり。㊁[理]電氣又は磁氣の消極と積極との稱。
†いん-やう-くわく[淫羊藿](名) [植]「いかりさう」の一名。
(いん-やく[隱約](名) ㊀かすかにして知りがたきこと。㊁世にあらはれずして困窮すること。
(いん-よう[引用](名) 他の事例を引きて考證となすこと。ひきごと。――しよ[引用書](名) 引用に供する書物。
(いん-らく[淫樂](名) みだらがましきたのしみ。
(いん-らん[淫亂](名) みだらなる行爲をほしいまゝにすること。色情にすきむこと。
(いん-りよく[引力](名) [理]物質の相牽引する力。其種類により重力・磁氣力・電氣力・凝集力・附着力・毛細管引力・親和力等の名あり。
(いん-れい[引例](名) ひきごと。
(いん-れう[飮料](名) のみもの。のみもの。
――すゐ[飮料水](名) のみみづ。
(いん-れき[陰曆](名) 太陰曆の略言。
(いん-ろう[印籠](名) 藥をいれ腰に佩ぶる細小の匣。もとは印判肉を入れたるより此名あり。三重或は五重にし、蒔繪・堆朱(ついしゆ)など精巧なる細工を加ふ。德川時代の禮服の裝飾品に用ひられたり。(香匣)。――し[印籠師](名) いんろうをつくる職人。(香師)。――づけ[印籠漬](名) 胡瓜又は白瓜などの種を去り、紫蘇などを入れて鹽漬けとせるもの。――ぶた[印籠蓋](名) かぶせぶたの一種。いんろうのふたの如くふたとみと平面となれるもの。――ゆば[印籠豆腐皮](名) いんろうの形につくれるゆば。

[いんろう]

(いん-わい[淫猥](名) みだらなること。風儀のはしたなきこと。

う

う 唇を圓く尖らせ、舌の後部を高くして發する母音。五十音圖、あ行の第三に位し、う列の久・須・都・奴・不・武・由・留・于の韻(ゐん)となる。
う[兎](名) [動]うさぎ。
う[卯](名) (うさぎの義) ㊀十二支の第四位。㊁方角の名。東方。㊂時刻の名。今の午前六時。
う[鵜](名) [動]水禽類中蹼足類に屬する鳥。後趾内方に向ひ、他の三趾と共に蹼を以て相連續せらる。形からすに似て黑く、背と肩とは茶色。嘴は長くして末端曲がる。能く水を潛り巧かに魚を取る。えまつどり。(鸕鷀)。
(う[羽](名) ㊀はね。つばさ。は。㊁五音の一。最も高音なるもの。


[う]

(う[竽](名) 一種の樂器。管を參差し鳥翼に象りて排列す。形狀笙に似る。古昔は三十六管なりしが、後世に至り二十六管又は十九管となりたりといふ。管ごとに簧(した)あり。うのふえ。
(う[宇](名) ㊀のき。やね。家構へ。㊁家屋を數ふるにいふ語。㊂天地四方の稱。無限の空間。「一宙」。
(う[有](名) ㊀宇宙間に實在するもの。あるもの。㊁[佛]愛・取の煩惱によりて結果が後生に發生せしむること。
う-う(うる)[得](他、あ下二) ㊀わがものとなす。所有とす。をさむ。うく。㊁なしあたふ。よくす。「物を習ひ―」。㊂成す。遂ぐ。㊃相遇す。とらふ。㊄さとる。さとる。「我巳にこれを―」。
う-う(うる)[得](自、あ下二) ㊀あふ。あたる。かなふ。「兩者相―」。㊁たる。やすんず。
†う[諾](感) 承諾の意の發聲。「否も―も」。
ウーロン-ちや[烏龍茶](名) 支那より産する茶。特種の製法によるものにして、紅茶と綠茶との中間物の如きもの。
ヴァイオリン[Violin](名) 一種の樂器。西洋傳來のものにして、四絃を張り、小弓の絃を以て、これを鼓して鳴らす。「だ長し」。
う-あいさ[鵜秋沙](名) [動]あいさの一種。嘴甚
(う-い[雨意](名) あめもやう。
(う-い[羽衣](名) 「はごろも」に同じ。
(う-いう[烏有](名) (烏(いづ)くんか有らんの義) ㊀其物事あらざること。㊁火災にて皆燒となること。
う-う(うゑる)[飢、饑](自、わ下二) ㊀食物を得ずして、胃空虚となる。はらくる。㊁凶作にして食料乏しくあり。
う-う(うゑる)[植](他、わ下二) ㊀物を地上にうめ立つ。㊁種子をまく。㊂はめこむ。いれこむ。

(う-えん[有緣](名) [佛]佛門に緣あること。
ウォーター-シュート[Water shute](名) 高き臺より船に乘りて水の上にすべり落つる遊戲。
ヴォルト[Volt](名) [理]電壓の單位の稱にして、一「オーム」の抵抗の導線に一「アンペーア」の電流を通過せしむる電壓をいふ。攝氏十五度に於ける「クラーク」電池の兩極の電位の差の〇・六九〇四に當る。
(うか-うか[浮浮](名、副) ㊀心落ち着かざるさまにいふ語。㊁思慮なきさまにいふ語。
(う-かく[羽客](名) せんにん。神仙。
うかがひ[伺](名) ㊀うかゞふこと。㊁案を具して、政府又は上官等の指令を請ふこと。(申稟)。――しよ[伺書](名) 官府などの指令を請ふために、提出する文書。(具稟)。――ずみ[伺濟](名) 官府などより指令をうけをはりたること。(稟准)。
うかが-ふ(ふ)[窺](他、は四) ㊀のぞき見る。ひそかに見る。(覗)。㊁ひそかにそのいたるをまつ。(候)。㊂すこしく知る。すこしく試みる。㊃ひそかに得んとのぞむ。ねらふ。
うかが-ふ(ふ)[伺](他、は四) ㊀たづぬ。たゞす。㊁おとづる。とぶらふ。「うかゞふ」
(うかさ-る(るゝ)[浮](自、ら下二) 物に氣を取
うか-す[浮](他、さ四) うかしむ。
うが-つ(つ)[穿](他、た四) ㊀あなをあく。ほる。㊁つらぬく。ぬきとほす。つきぬく。㊂道理をきはむ。秘密をせんさくす。㊃おしわけて行く。つきぬけて通る。「林をうがちて進む」。
(うか-と[浮](副) 心つかずに。うつかりと。
うかの-みたま[宇伽御魂](名) 稻梁など人の食物となるものを司どる神。即ち、稻荷に祀りこめたる神の名。(倉稻魂)。
う-かは(がは)[鵜河](名) 鵜を使ひて、鮎など捕ること。
う-かひ(かひ)[鵜飼](名) ㊀鵜を飼ひならし、これをつかひて魚を捕らしむること。㊁うかひを業とする漁夫。――び[鵜飼火](名) 鵜をつかふときにたく火。――ぶね[鵜飼船](名) 鵜をつかふときに用ふる船。
うがひ(がひ)[嗽](名) 水などを含みて口をそゝぐこと。――ぐすり[嗽藥](名) うがひに用ふる水藥。くちそゝぐくすり。(含嗽劑)。――ぢやわん[嗽茶碗](名) うがひに用ふる茶碗。
†うが-ふ(がふ)[嗽](自、は四) うがひをなす。くちそゝぐ。
うか-ぶ(ぶ)[浮](自、は四) ㊀水の上にあり。沈まずしてあり。㊁定處なくて存す。動きて定まらず。㊂志を得て世に出づ。㊃思ひ出づ。「心に―」。㊄死者の靈が、妄執を脫して成佛す。
うか-ぶ(ぶる)[浮](他、は下二) ㊀水の上などにうかばしむ。㊁思ひ出す。㊂出世せしむ。㊃そらよみす。あんずよみす。
(う-がふ[烏合](名) 紀律なき上よりあつまり。
うかぶ-せ[浮瀨](名) 出世するよ時。「韻」
うがふ-の-しゆう[烏合衆](名) 紀律なき團
(うかべる[浮](他) 「うかぶ」の訛。
†うか-み[窺見](名) うかゞひ見ること。間諜。
うか-める(む)[浮](自、ま四) 「うかぶ」に同じ。「こ」
うか-める(むる)[浮](他、ま下二) 「うかぶ」に同
う-がら[鵜鶘](名) [動]鵜の一種。體色稍や赤色を帶び、嘴細く尖りて、足赤し。
う-から(名) 血脈のつゞきたる親族。えんぞく。みよりやから。(親族)。「さまにいふ語」
(うかり[浮](名、副) 心つかずぼんやりしてある
うか-る(るゝ)[浮](自、ら下二) ㊀心そらにうきたつ。㊁ふかく興に入りて、魂を奪はる。㊂うつかりしてあり。㊃浮動なり。心定まらず。
うかれ-がらす[浮鴉](名) ㊀月夜にうかれて、啼くからす。㊁夜うかれあるく人の稱。
うかれ-づま[浮妻](名) うかれめ。「もの」
うかれ-びと[浮人](名) ㊀らうにん。㊁だらうく
うかれ-ぶし[浮節](名) 「なにはぶし」に同じ
うかれ-め[浮女](名) 歌舞吹彈して人をたのしましむることを業とする女。人の枕席にはんべることを業とする女。うかれづま。(遊女)。
(うかれる[浮](自) 「うかる」の訛。
う-かんむり[宇冠](名) 漢字の冠りの名。即ち、定・安などの如き字の上にある「宀」の形の稱。
うき[浮子、泛子](名) (い)魚の餌(ゑ)につくを知るために、釣絲につけ水に浮かす木片。(ろ)網を水中にしきて其所在を知るために、網綱につくる木「片」。
†うき[浮](名) 「さかづき」の古名。
†うき[泥](名) 「どろ」の古名。
うき[憂](名) うれひ。かなしみ。
(う-き[雨季](名) 一年の周期に雨多き時期の稱。我國梅雨の季節の如し。
(う-き[右揆](名) 右大臣の異稱。
(う-ぎ[雨儀](名) 古昔、宮中の儀式を雨天のときは、省略して擧行ありしこと。
(う-ぎ[羽儀](名) 禽類に此羽可用爲儀とあるに出づる模範となること。「天朝に―す」。
うき-あが-る(るゝ)[浮上](自、ら四) ㊀底より上にうかび出づ。㊁くるしき所をたすかる。
うきあげ-ぼり[浮上彫](名) 模樣などを、高くはり上げたる彫刻。

うき-いし［浮石］（名）火山の噴出したる熔岩の一種。粗鬆にして夥多の小孔あり。水に浮ぶ。輕石。

うき-いはイハ［浮石］（名）❶「うきいし」に同じ。❷水上に浮べるが如く見ゆる石。

{**うき-うき**［浮浮］（名、副）心うかれてあるさまにいふ語。

うき-おり［浮織］（名）こまかき模樣を地の上にうかし織ること。又、其織物。――**もの**［浮織物］（名）うきおりにしたる織物。

うき-かは-たけカハ［浮河竹］（名）（水にうかぶ河竹の意）浮沈定めなき身に譬へいふ語。特に、遊女の身の上にいふ語。

うき-ぎ［浮木、槎］（名）❶水の上に浮べる木片。❷いかだ。ふね。舟筏。「―に乘りて、われかへるらん」❸法華經に、盲龜がうきゝにあへりとの譬へあるより、逢ひがたき幸福にいふ語。

うき-ぎ［楂魚］（名）【動】硬骨類中まんぼう科に屬する魚。體は卵圓形をなし、皮膚は粗糙にして革の如し。脊鰭は短くして高く、尾部にて脊鰭と相合す。腹鰭なし。遠海に産す。肉の白色なる部分を取り、麹漬け又は粕漬けとなし食用とす。うきゝ。まんぼう。まんぼうざめ。（翻車魚）――**まんぼう**バウ（名）【動】「うきぎ」に同じ。

うき-くさ［浮草］（名）【植】浮萍科に屬する草。池沼などの水面に浮生する扁平の小植物にして、各地に産す。扁平體の下面は通常帶紫色を呈す。（浮萍）。

十**うき-ぐつ**［浮沓］（名）「うきぶくろ」に同じ。

うき-ぐも［浮雲］（名）定めなく風にしたがひて、空中にうかぶ雲。

うき-こ［浮粉］（名）米を細粉とせるもの。菓子などを製するに用ひ、又、紅を凝結せしむるにも用ふ。

うき-しま［浮島］（名）島の水上に浮びたるが如く見ゆるもの。又、水上に浮べる島。

うき-しづみ［浮沈］（名）❶うくとしづむと。❷榮ゆると衰ふると。

うき-す［浮巢］（名）❶にほ鳥の巢。此鳥は、多く蘆の枯れ葉などにて巢を作るが故に、水増せど浮びて水に沒されずといふ。❷住處の定めなきに譬へいふ語。

うき-す［浮洲］（名）沼などに、泥炭・材木・泥などあつまり、其上にいつとなく草木生ひ出でゝ、浮びたる洲の如く見ゆるもの。「田沼の―」

うき-た・つツ、テ、ツ［浮立］（自、た四）うかれてこゝろそゝらとなる。

うき-とうだい［浮燈臺］（名）燈臺の一種。船の檣上に燈明を設け、洲の附近に碇泊して、航路を示すもの。

うき-ドック［浮船渠＝Floating dock］（名）空虛の鐵櫃にてつくり、水上に浮泛して作業するドック。櫃内の空氣の量によりて浮沈し、船體を出入せしむ。

うき-どり［浮鳥］（名）水にうかびて居る鳥。

うき-な［浮菜］（名）【植】「かぶら」の一名。

うき-な［浮名］（名）よからぬ名。又、いろごとなどのひやうばん。

うき-ね［浮寢］（名）❶船中にねること。❷旅所の獨寢かはること。❸寢ぬれど心安からぬこと。

うき-はうだいハウ［浮砲臺］（名）港灣防禦又は砲臺攻撃のために、特別なる構造をなしたる戰艦。堅牢なる甲鐵を設けて、特に許多の砲を備置したるもの。今時は其使用を見ざれど、時に殘敗の戰艦を以て、これに充つることあり。

うき-はし［浮橋］（名）數多の舟を浮べて、其上に板を亘したる橋。ふなばし。（舟梁）。

うき-ひやうしヒヤウシ［浮拍子］（名）浮きたるひやうし。うかれびやうし。

うき-ぶくろ［浮袋］（名）❶魚の鰾(ニベ)。❷水に游泳するとき、溺れざるために身體に着くるもの。革などにてつくり、中に空氣を滿たす。

うき-ふし［憂節］（名）かなしきこと。つらきこと。

うき-ふね［浮舟］（名）水上にうかべるふね。――**の**（枕）「こがるゝ」に冠らする詞。

うき-ぼり［浮彫］（名）模樣をたかく彫りたる彫刻。うきあげぼり。

「船中にねること。

うき-まくら［浮枕］（名）❶うきね。ひとりね。❷

うき-み［憂身］（名）うきふし多き身。――**をやつす**或物事に熱心して、うきふし多きにいふ。

うき-め［憂目］（名）つらきこと。　「の對。

うき-もん［浮紋］（名）浮きあげにしたる紋。固紋

（**う-きやう**キヤウ［右京］（名）古昔、朱雀大路を界として、京都を東と西とに分ちたる其西方の稱。左京の對。西の京。長安。――**しき**［右京職］（名）古昔、右京の事をつかさどりし職名。　「の中。

うき-よ［憂世］（名）うきふし多き世。つらき世。世

うき-よ［浮世］（名）定めなき世。無常の世。世の中。――**ぐるひ**グルヒ［浮世狂］（名）浮世の事に心を奪はるゝこと。酒色にふけること。名利に熱すること。――**ざうし**ザウシ［浮世草紙］（名）元祿時代に行はれし一種の小說。當時の世態を寫し綴りしもの。「八文字屋の―」――**の-あみ**［浮世網］（名）うきよの迷ひの脫れがたきこと。――**の-やみ**［浮世闇］（名）人間の迷ひ。――**ばなし**［浮世話］（名）せけんばなし。ざつだん。――**ぶし**［浮世節］（名）世俗のはやりうた。（下四）。――**ぼん**［浮世本］（名）「うきよざうし」に同じ。――**ゑ**［浮世繪］（名）うき世の風俗を畫きたる繪。土佐繪より分れ、岩佐又兵衛の創めし畫風。

（**う-きよく**［紆曲］（名）❶くねりまがること。❷とほまはり。とほまはし。

う・くケ、キ、ク［浮］（自、か四）❶水上にありて沈まず。うかぶ。うかむ。（泛）。❷水中より水上へ出づ。❸落居なくして存す。動きて定まらず。❹輿じてたましひ身にそはず。心酒色に奪はれて仕事手につかず。❺酸味のため又は不快なる音のために、齒のゆるみ動くが如き感起る。

う・くケ、ケ、ク、クル［浮］（他、か下二）うかしむ。うかす。

う・くケ、ケ、ク、クル［受、承］（他、か下二）❶迎へ取る。「天命を―」❷迎へ防ぐ。「大兵を―」❸きる。かうむる。「恩を―」❹もる。のす。「野猿給一兩三人」❺いる。をさむ。❻うけたまはる。辭す。「命をうけて行く」❼つぐ。うけつぐ。❽うべなふ。きゝいる。❾むかひあたる。

う・くケ、ケ、ク、クル［請］（他、か下二）ものに對するあたひをはらひて、取りもどす。「質物を―」

十**う・ぐ**ゲ、ゲ、グ、グル［穿］（自、か下二）あなあく。

うぐひイグヒ［石斑魚］（名）【動】硬鰭類中うぐひ科に屬する魚。體は狹長にして側扁す。鱗は圓滑にして細し。頭部は黑くして微綠を帶び脊は紅なり。背部は淡綠色にして淡黑色の斑紋あり。腹部は紅色を帶びて底面は白色なり。體長大なるものは一尺許。我國到る處の河川湖沼等に産す。あかはら。

うぐひすヒス［鶯］（名）❶【動】燕雀類中うぐひす科に屬する鳥。形はめじろに似て肥え、體色は背部綠褐色にして腹部灰白色なり。嘴は細くして尖る。氣管の分岐部に鳴管を有し、囀をはなてうるはし。初春よりさへづる。人家に飼ひ聲を翫ばず。糞は洗粉の料に供せらる。とゞめどり。にほひどり。きやうよみどり。❷「せつかひ」（殺皮）の異稱。❸香をたくに、香の包紙を刺し又は火加減を見るに用ふる具。長さ四寸餘にして形串の如し。銀又は赤銅にてつくる。――**がひ**ガヒ［鶯貝］（名）【動】あこやがひの一種。長さ三寸許。殼は鳥の翅(ヲ)の形をなす。――**かン**［鶯羹］（名）抹茶をまぜたる羊羹。――**たけ**［鶯茸］（名）【植】春未に生ずる紅茸の稱。（竹茹蕈）。――**ちや**［鶯茶］（名）染色の名。綠に茶と黑とのまじりたる色。うぐひすの羽色に似たり。――**な**［鶯菜］（名）【植】（い）あぶらなの變種。一年生或は二年生の栽培草木にして、種子は一列に並べり。葉は食用とすべく種子より油を採るべし。（ろ）小さきこまつな。（菘花菜）。――**のみ**［鶯呑］（名）酒の飲み方。二人が十杯づゝ引きうけ、早く呑むと遲く呑むとによりて、かちまけを決すること。――**まゆ**［鶯眉］（名）古昔、與女中の描きし眉。眉を上下より細く剃りつけて、中にこれだけ色を施しゝもの。十六七歲の頃より描きしとぞ。――**もち**［鶯餅］（名）餅菓子の一種。餅に餡を包み兩頭を尖らせて、青き粉をまぶしたるもの。

{**うぐら**（名）【動】「むぐらもち」に同じ。（三河、周防の方言）。{――**もち**（名）【動】「むぐらもち」に同じ。（豐後の方言）。

（**う-くわ**［羽化］（名）❶【動】幼蟲の羽を生じて成蟲となること。❷人間の體に羽を生じて、仙人となること。――**とうせん**［羽化登仙］（名）人間に羽生じ天に登りて仙人となること。　「りみち。

（**う-くわい**［迂回］（名）とほみちをまはること。まはりみち。

（**う-くわつ**［迂闊］（名）まはりどほきこと。心の行きとゞかぬこと。事情にうときこと。――**に**［迂闊］（副）ふかく考へずに。うつかりと。

十**うけ**［食］（名）くひもの。をしよくもつ。け。

うけ［泛子］（名）「うき」に同じ。

うけ［空箭］（名）（空箭の義）馬の飼ひ桶の類。

うけ［受］（名）❶うくること。❷うくる器。❸うつばり。きゝへ。❹答ふること。こたへ。❺{おもはく。こゝろもち。きあひ。「世間の―わるし」

う-け［有卦］（名）陰陽家にて、人の生年を干支に配して定めたる幸運の年まはり。此年まはりにあたりし人は、七年間吉事つゞくといふ。

うけ-あひアヒ［請合］（名）うけあふこと。ひきうけ。はきよう。

うけ-あ・ふアフ［ハ、ヒ、フ、ヘ］［請合］（他、は四）❶身に引き受く。❷たがひなきことを保證す。

十**うけ-あゆみ**［浮步］（名）足音極めて靜かにあるくこと。柔かにあるくこと。

うけら（名）【植】「うけらうと」に同じ。

うけらうそ（名）【植】紅色躑門に屬する海草。ところてんぐさに似て、細長く紫色なり。煮てところてんの如くに凝し食用に供す。おもに紀州に産す。

うけ-うり［請賣］（名）❶問屋より卸し賣りの物を取り次ぎて賣ること。❷自家の考定によらず、他人の意見又は學說等を其まゝ述ぶること。

うけ-おひオヒ［請負］（名）❶當事者の一方が或仕事を完成せんことを約し、相手方が其結果に對して報酬を與へんとを約すること。❷國債募集の一方、銀行をして引き受け組合を組織して、國債を引き受けしめ、便宜債券の發賣を許すこと。――**にん**［請負師］（名）うけおひ仕事を引き受くる人。う

うけおい[請負人]（名）うけおうひと。

うけおう[請負]（他ワ五）❶ひきうく。❷我一己に引き受けて、責を塞ぐ。

うけおえる[請負]（他ア下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおこす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を始む。❷引き受けて、仕事を始む。

うけおさめる[請負]（他マ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしえる[請負]（他ア下一）❶引き受けて、仕事を教ふ。❷引き受けて、仕事を教ふ。

うけおしまい[請負]（名）❶引き受けて、仕事を終ること。❷引き受けて、仕事を終ること。

うけおしまう[請負]（他ワ五）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまえる[請負]（他ア下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまおす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまおる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまかす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまがる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまきる[請負]（他カ上一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまくる[請負]（他カ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまける[請負]（他カ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまこむ[請負]（他マ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまさす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまじる[請負]（他ザ上一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおします[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんてる[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんなす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんねる[請負]（他ナ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんのす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんはす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんばす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんぶる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんぼす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんぼる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんもす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんやす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんゆる[請負]（他ヤ下一）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんよる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんらす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんりる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんれる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんろす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんわす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんをす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんずる[請負]（他サ変）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんたつ[請負]（他タ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんだす[請負]（他サ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんつる[請負]（他ラ四）❶引き受けて、仕事を終る。❷引き受けて、仕事を終る。

うけおしまんんんんんんんんんんんてる[請負]（他タ四

うし‐あはせ[牛合](名) 牛と牛とをたゝかはせて勝負せしむると。

うじ‐うじ(名、副) ㊀ためらひてぐづ〳〵するさまにいふ語。㊁うごめくさまにいふ語。うざ〳〵。

うし‐うま[牛馬](名) ㊀牛と馬と。㊁【動】大隅國種子島に産する一種の獸、身は牛に似て頸は馬に似たるもの。

うし‐おふ‐もの[牛追物](名) いぬおふものの類、牛を追ひて射るあそび。

うし‐かた[牛方](名) 牛をつかふ人。牛車を扱ふ人。

うし‐かひ[牛飼](名) 牛を飼ふ人。牛をつかふ人。特に、御所車の牛をつかふ人。うしかた。うしつかひ。(牧夫、牧童)。

うじ‐ぐさ[蛆草](名)【植】荳(マメ)科に屬する草、葉は羽狀複葉にして數個の小葉より成り、花は帶黃色、莖は木質、莢は脫落し花序は頂上に生ず、葉は味噌の蟲を殺すに用ふ。(山馬蝗、木藜蘆)。

うし‐ぐは[牛鍬](名) くはの一種、牛にひかせて、田畑を耕すに用ふ。からすき。(犂)。

うし‐ぐるま[牛車](名) ㊀牛を付けて挽かする大なる荷車。㊁牛を付けて挽かするやかた車。

うし‐ごろし[牛殺](名) ㊀牛をころす職業のもの。とぎうにん。(屠牛人)。㊁【植】薔薇科に屬する木、高さ一丈餘、葉はうめもどきに似て長し、夏の頃、梢に五瓣の白花を開き、赤き實を結ぶ。——**ば**[屠牛場](名) 牛をころす所。とぎうば。

うし‐ざき[牛裂](名) 古昔の刑罰の一、極めて殘酷なるものにして、手足を牛四疋に緊束し、牛に柴を負はせ火を點じて馳驅せしめ、其勢によりて、罪人の身體を四つざきにするをといふ。

ウシチ[烏瑟](名)【佛】(梵語、Uṣṇīṣa の略言) 佛の三十二相の一、頭上の肉高く起りて髻(ケイ)の如きさまをなすもの。(肉髻)。

うし‐つかひ[牛役](名) 「うしかひ」に同じ。

うし‐つき[牛附](名) 「うしかひ」に同じ。

うし‐とら[丑寅](名) 方角の名、東と北との中間、即ち、鬼門。(艮)。

†**うじな**[貉](名)【動】「むじな」の古名。

うしなひ[失](名) うしなふと。

うしな・ふ[失](他、は四) ㊀ものを無くなす。㊁すておく。「機—べからず」。㊂おとす。わするる。「茫然として、—所あるがごとし」。㊃見えぬやうにす。㊄冥途の人となす。死なす。「愛子を—」。

うし‐ぬすびと[牛盜](名) ㊀牛をぬすみたるもの。㊁古昔、人を罵りていひし語。㊂【動】「いしもち」の一名。

うし‐の‐とづの(名) 牛の角の中にあるかたき骨、藥料に供せらる。(牛角䚡)。

うし‐の‐さうめん[牛索麵](名)【植】「ねなしかづら」に同じ。

〔**うし‐の‐した**〕[牛舌](名) ㊀【動】「したびらめ」の一名。(東國の方言)。㊁【植】「いぬびは」の一名。(豐前地方の方言)。

うし‐の‐たま[牛玉](名) 牛の額に生ずる毛のかたまりたる如きもの、形丸くして大きさ一寸餘、其中にかたまえんあり、「牛玉」の字を充てたるを「ごわう」と誤り讀み、寺院などの寶物とせり。(牛黃)。

うし‐の‐ち[牛乳](名) 牛の乳房より搾り取る乳汁。ぎうにう。うしのちゝ。「ミルク」。

うし‐の‐ちち[牛乳](名) うしのち。

うし‐の‐つのつき[牛角突](名) 「うしあはせ」に同じ。

うしのつの‐もじ[牛角文字](名) (延政門院の御歌に、「二つもじ、うしのつのもじ、直ぐな文字、ゆがみ文字とぞ君は覺ゆる」とあるより出づ)「い」の字の異稱、其形牛の角に似たる故にいふ。

うし‐の‐はなぎ[牛鼻木](名) ㊀牛のはなづらにとほす木片。(牛桊)。㊁【植】「がまずみ」の一名。

うし‐の‐ひたひ[牛額](名)【植】とうえんぐさの一種、莖は細長くして圓き横斷面を有し、尋常葉は存在せず、雄蕊は通常三個あり、莖を蓆につくり、其心を燈心とす。(石龍芻)。

†**うしは・く**[領](他、か四) 主宰となりて、土地を占領す。

うし‐はこべ[牛蘩蔞](名)【植】はこべの一種、莖は一寸許、上部にあるものは殆んど葉柄なし、花柱は通常五個あり、はこべ鹽を製する原料とし、又、小鳥の飼料とし或はひたし物として食用とす。

うし‐ばへ[牛蠅](名)【動】雙翅類中牛蠅科に屬する蟲、全體黑毛を密生し、處々黃白色なり、牛の皮下に寄生し、其皮膚に潰瘍を生ぜしむ。

うし‐べや[牛部屋](名) 牛を繫ぎおくところ、うしごや。(牛欄)。

うしほ[潮](名) ㊀海水の定時の漲落の稱、日月殊に月(地球に近きゆゑに)の引力の作用が、地球に及ぼすにより、これに面する方及背する方の海水は漲昂す、これを高潮といふ、又、それに直角なる側面の海水は低落す、これを低潮といふ、漲昂するものを、さしほ・あげしほ・みちしほと稱し、低落するものを、ひきしほ・さげしほ・おちしほと稱す。㊁海水の稱。(潮)。——**に**[潮煮](名) 一種の料理、鯛などの肉又は骨を水煮にし、鹽にて味をつけたるすひもの。「鯛の—」。

うし‐ほほづき[牛酸漿](名)【植】「こなすび」に同じ。

うし‐まつり[牛祭](名) 山城國太秦(ウヅマサ)の廣隆寺の祭事、陰曆九月十二日の夜に、摩陀羅(マタラ)神と名づけ、奇異の服裝に扮したる僧侶が、牛にのりて社をめぐり祭文をよむ。

うし‐みつ[丑三](名) ㊀古昔の時刻の名、丑の時を五つに分ち、其第三にあたるとき。㊁轉じて、よなか。深更。

うじ‐むし[蛆蟲](名) ㊀【動】「うじ」に同じ。㊁人をさげしみ罵りていふ語。

うし‐むし[牛蟲](名)【動】「あとびさり」の一名。

うし‐や[牛屋](名) ㊀牛を飼ふ小屋。㊁牛肉を賣る家。

(**う‐しやう**)[右相](名) 右大臣の異稱。

(**う‐しやう**)[羽觴](名) さかづき。——**をとばす**[飛羽觴] さかもりをなす。さけをくむ。

(**う‐じやう**)[有情](名) 生活して情を有するもの、即ち、一切の動物の稱。

(**う‐しやうこく**)[右相國](名) 右相に同じ。

〔**うじや‐うじや**〕(名、副) ㊀「うじ〳〵」に同じ。㊁わけもなきことをくだ〳〵しくのぶるさまにいふ語。

(**う‐しようしやう**)[右丞相](名) 右相に同じ。

(**う‐じやく**)[烏鵲](名)【動】「かさゝぎ」に同じ。「—南に飛ぶ」。

うしゆ‐きつ[雲州橘](名)【植】(い)「ウンしうみかん」に同じ。(ろ)たちばなの變種、實はみかんより大きく、味ひきはめて酸くにがし。

うしろ[後](名) ㊀顏の反對の方。しりへ。あと。㊁せなか。せ。背後。㊂見えぬ處。

うしろ‐あし[後脚](名) ㊀もとあし。㊁足を後にして逃(ニ)げんとするさと。

うしろ‐あたま[後頭](名) 頭の後部。

うしろ‐あはせ[後合](名) ㊀互にうしろとうしろとをむけあふと。㊁かれとこれと相反するさと。「—かた」。そむくと。

うしろ‐かげ[後影](名) 行き去る人のうしろすがた。

うしろ‐がみ[後髮](名) 後頭部の髮。——**をひかる** 心後に殘りて、思ひ切りがたきにいふ。

うしろ‐ぐら・し[後暗](形、二) ㊀見えぬ所又は後の邪心にかゝる、案ぜらる。うしろめたし。㊁人を欺きたる所爲などありて、心安からず。㊂ふた心あるらし。疑ふべし。

うしろ‐ざし[後挿](名) うしろにさすかんざし。

うしろ‐すがた[後姿](名) 背面の姿。

うしろ‐だて[後楯](名) ㊀うしろへこだてに取るもの。後方の防禦。㊁うしろみ。こうけん。(後援)。

うしろ‐で[後手](名) ㊀うしろの方。㊁兩手を脊中にまはすと。「—にいましむ」。

†**うしろ‐べた・し**[後目痛](形、二) うしろめたし。

うしろ‐まき[後卷](名) 戰國時代に、城を圍み攻むる軍を、更に其後より圍みしと。

うしろ‐み[後見](名) ㊀うしろに居て人の身の上をたすくると。うしろだて。㊁未成年者又は不能力なる戶主のこうけん。

†**うしろ・みる**[後見](自、ま上一) うしろみをなす。こうけんをなす。

†**うしろ・む**[後見](自、ま上二) 「—みる」。

うしろ‐むき[後向](名) うしろを見せてゐると。まへむきの對。(背面)。

†**うしろ‐めた・し**[後目痛](形、二) 「うしろぐらし」。

†**うしろ‐めたな・し**[後目痛](形、二) うしろめたし。

うしろ‐やす・し[後安](形、二) 後の邪心にかゝらず。安心なり。うしろめたしの對。

〔**うしろ‐ゆび**〕[後指](名) あざけり若しくはうたがひて、かげにて他人の非をさしいふと。——**をさす** かげにてそしる。

うす[臼](名) (い)穀物などをつき又は碎き又はまらぐる道具、なかくぼくして其處に穀物などを入れ杵にてつく、からうす・ふみうす・つきうす等あり。(舂)。(ろ)上下二個の圓形の石を合せ、其相接する面に齒を刻み、其處に穀粒をいれ、上なる石を廻轉して、これを粉末にするもの。ひきうす。(磨)。

う・す[失](自、さ下二) ㊀なくなる。㊁死亡す。しぬ。㊂消滅す。きゆ。㊃ほろぶ。おつ。「威うせて位危し」。

うす—[接頭] 或語に冠してうすき意を表はす。「—むらさき」。(淡)。

†**う‐ず**[髻華](名) 古昔、冠又は髮の上にかざしたるかざり、草木の枝又は造花などを用ひたり。(鈿)。

う‐ず[雲珠](名) ㊀唐鞍をかくるとき、鞍のうしろなる尻がいの辻の上につくるかざり、形寶珠の如し。㊁「うずくら」の略言。

うす‐あかり[薄明](名) ㊀ほのかにさすひかり。はくめい。㊁日出前若しくは日沒後あかるきさと。地平線下の太陽の光線が、空氣のために屈折して起る現象。

うす‐あばた[薄痘痕](名) 目に立たぬほどのあばた。うすいも。(淡痘痕)。

うす‐いし[臼石](名) ㊀自然にうすに似たる形の石。㊁うすに似たる一種の玉。

うす‐いた[薄板](名) ㊀織物の名、うすき地合ひのもの。あついたの對。㊁花瓶をおく方形の板。㊂經木の巾ひろきもの。

うす‐いちご[臼莓](名)【植】「うすのき」に同じ。

うす-いも［薄痘痕］（名）うすあばた。
うす-いろ［薄色］（名）㊀織色の名、經は紫にて緯は白にて織りたるもの。㊁かされの色目、表は薄花田色に赤色を帶び、裏は薄むらさきなるもの。㊂薄むらさきの稱。
うす-うす［薄薄］（副）いくぶんか。ほのかに。
うす-えふ ウーヨウ［薄葉］（名）「うすやう」に同じ。
うす-かは ワーカ［薄皮］（名）㊀膜（まく）に同じ。㊁婦人などの皮膚の色白くきめこまかなるにいふ語。
うす-がみ［薄紙］（名）うすき紙。あつがみの對。
うす-ぎ［薄着］（名）着物をうすくきると。
うす-ぎぬ（名）㊀寒冷紗の如きうすききぬ。（薄帛）。㊁薄ききぬの衣服。「牛若は―ひきかつぎて」。（羅衣）。
うす-ぐも［薄雲］（名）㊀うすくたなびきたる雲。㊁［動］どぶかひの一種、介殼は長楕圓形にして長さ二寸許、白色にして黑き斑點あり。
うず-くら［雲珠鞍］（名）雲珠を付けたる鞍。「カラくら」の一名。「三歳駒に、―おかせ」。
うす-ぐら・し くしくしき けれ［薄暗］（形、二）光りうすくして物色はほのかなり。ほのぐらし。微明なり。
うす-げしやう ーシヨウ［薄化粧］（名）あっさりとほどこす化粧。あつげしやうの對。
うす-こうばい［薄紅梅］（名）㊀［植］紅梅の一種、花の色うすきもの。㊁染色の名、うすこうばいの花の如き色。
うす-さ［薄］（名）うすき度合ひ。
うず-ざくら［雲珠櫻］（名）［植］櫻の一種、蕊は長く、花は一重なり。――もえぎ［雲珠櫻萌黄］（名）かされの色目、表は薄青、裏は櫻色。
ウスサマ［烏瑟沙摩］（名）［佛］（梵語、Ucchusma）汚穢を轉じて、清淨ならしむる（穢）跡を守る明王、眞言宗にて祭る。

うす・し くしき けれ［薄］（形、二）㊀厚みすくなし、厚からず。㊁すくなし、あさし。「情―」、「儲―」、「色―」。㊂ゆたかならず、とぼし、「手當―」。㊃濃くあらず、「味噌汁―」。㊄愛情少なし。誠意少なし。
うす-しほ オーシ［薄鹽］（名）うすき鹽加減。
＋うすす・く かきくく くけけ（自、か四）そゞろに走る。おどろきはしる。あはてはしる。
＋うずすま・る らりるる るれれ（自、ら四）むれよる。群集す。
うす-ずみ［薄墨］（名）㊀墨色の淡きこと。㊁「うすずみがみ」の略言。㊂そばがき。（女房詞）。――がみ［薄墨紙］（名）ゑゆくゑ。宿紙。↔――のりんじ［薄墨綸旨］（名）うすゞみ紙に書き認めて給はれる綸旨。
うす-ぞめ［薄染］（名）㊀色を薄く染むること。㊁「うすぞめごろも」の略言。――ごろも［薄染衣］（名）淡紅色に染めたる着物。（秋羅）。
うす-だたみ［薄疊］（名）春又は夏の候に用ふるたゝみ、うすべりなどの類。
うす-ちや［淡茶］（名）㊀ひきちやの一種、臼にて粉にひき、薄く湯にたて、飲む、香氣はげし。こいちやの對。㊁うすき茶色。――いろ［薄茶色］（名）「うすちや」の（二）に同じ。
うす-ぢり［薄塵］（名）漆うすき梨地ぬり。むらなしぢ。
うす-つ・く かきくく くけけ［舂］（自、か四）㊀日影、西に沒せんとす。㊁物を臼に入れてつく。
うす-で［薄手］（名）㊀かるき手疵、けいゐやう。（微傷）。㊁物の拵へ方のうすきこと、「―の茶碗」。
うす-ねずみ［薄鼠］（名）うすき鼠色。
うす-のき［臼木］（名）［植］石南（シヤクナゲ）科に屬する木、高さ三四尺、黑色の漿果を生ず、蕊は卵形にして互生す、菓は半圓形の裂片を有す、果實は食すべし。

〔うす-のろ［薄鈍］（名）才能すこしく普通より劣りたると。又、其人。
うす-ば［臼齒］（名）中の臼の如く凹みたる齒。
うす-ば［薄刄］（名）刄をうすく鍛ひたる庖丁。
〔うす-ばか［薄馬鹿］（名）「うすのろ」に同じ。
うすば-かげろふ ウーロウ［薄羽蜉蝣］（名）［動］脈翅類の昆蟲、體は蜻蛉に似て弱く、翅は大にして白粉あり、その幼蟲は即ち「ありぢごく」なり。（蛟蜻蛉）。
うす-はた［薄機］（名）「うすもの」に同じ。
うす-びたひ クーヒ クイ［薄額］（名）かんむりの一種、破の低きもの。
うす-べ［臼邊］（名）［動］「むすめどり」に同じ。――どり［臼邊鳥］（名）［動］「にはとり」の一名。
うす-べうし ウービヨウ（名）矢のはねの一種、黑き所の少きもの。「二十四さいたる―の矢負ひ」。（截田鳥毛）。
うす-べり［薄緣］（名）へりを付けたるござ。
うす-み［薄］（名）うすくある度合ひ。
うす-みどり［薄綠］（名）うすきみどり色。
うす-みの［薄美濃］（名）透きとほるほどに、薄く抄（ス）きあげたるみのがみ。
うす-むらさき［薄紫］（名）うすきむらさき色。
うす-め（名）［動］「むすめどり」に同じ。
うす-もの［薄物］（名）薄く織りたる織物、紗・絽の類。うすはた。うすぎぬ。（羅、穀、紗）。
うす-やう ウーヨウ［薄樣］（名）（い）薄く漉きたる鳥の子紙。（ろ）極めてうすくすきたる雁皮紙。
うす-やくそく［薄約束］（名）深からぬやくそく。假りのけいやく。
うす-ゆき［薄雪］（名）㊀少しばかり降り積もりたる雪。（微雪）。㊁一種の菓子、芳しく燒きて、砂糖のころもをかけたるもの。――こんぶ［薄雪昆

布］（名）甚だ薄くけづりたる昆布、大阪の名產。
うすら［薄］（名）「うすらか」に同じ。
うすらか［薄］（名）うっすりとしてあるさまにいふ語。
うすら・ぐ がぎぐぐ げげ［薄］（自、か四）㊀時を過ぐすに從ひて、漸く薄くなる。うすろぐ。㊁かろくなる。あはくなる。おとろふ。
うすら-ひ イー［薄氷］（名）薄く張りたる氷。
うす・る れれるるれれよ［薄］（自、ら下二）自然にうすくなる。うすらぐ。
うすろ・ぐ がぎぐぐ げげ［薄］（自、か四）「うすらぐ」に同じ。
うす-わた［薄綿］（名）着物にうすく入れたる綿。――いれ［薄綿入］（名）綿をうすくいれたる衣服。
＋うすわら・ふ はひふふへへ ワーラウ［薄笑］（自、は四）すこし笑ふ。ほゝゑむ。（微笑）。
（うすゐ［雨水］（名）㊀あまみづ。㊁二十四氣の一、陰曆にて、正月の中、陽曆の二月の十八日。
〔うするゐ（名）うづくまること。（蹲踞）。
（うせい［迂生］（名）自家の謙稱。やつがれ。わたくし。
＋うせうしやう ーシヨウ シヨウ［右少將］（名）右近衞府の少將。
＋うせうべん ーシヨウ［右少辨］（名）古昔の官名、辨の條を見よ。
うせ-びと［失人］（名）うせたる人。逃亡人。
うせ-もの［失物］（名）㊀紛失したる物品。ふんしつもの。㊁うせびと。逃亡人。
〔う・せる せせせるせれせよ［失］（自、さ下一）㊀「うす」の訛。㊁「來る」「行く」「去る」などを罵りていふ語。
うそ［獺］（名）［動］肉食類中鼬鼠科に屬する獸、蹠行にして、指趾五つありて蹼を張る、尾長し、水邊に住し、時々水中に潜行して魚類等を捕へ食ふ。をそ。
うそ［鷽］（名）［動］燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、嘴短くして黑く、頭は深黑にして頸のあたり深紅なり、尾黑し、其外の體色は灰青色にして赤色を帶ぶ、人家に飼養して鳴聲を愛づ。うそどり。うそひめ。
＋うそ［嘯］（名）口をつぼめて氣を吹くと。又、口をつぼめて聲を出だすと。「或は―を吹き」。
うそ［嘘］（名）事實ならざる言、虛構したる言。いつはりのことば。そらごと。（虛言）。〔――つき［嘘吐］（名）よくうそをつく人。（浮詐人）。
うそ-かへ エーカ［鷽替］（名）筑前太宰府及東京龜井戸の天滿宮にて、參詣人が互に木にてつくりたる鷽をかへあふ神事、太宰府のは、正月七日の夜の酉の刻頃に行ふ、龜井戸のは、一月二十四・二十五の兩日の中これを行ひ、後には參詣人が持參のものを神主受け取りて、別のものを替へ渡すこととなれり。
うそ-どり［鷽鳥］（名）［動］「うそ」に同じ。
〔うそ-はっぴやく［嘘八百］（名）うそいつはりの多きと。
うそ-ひめ［鷽姬］（名）［動］「うそ」に同じ。
うそぶき［嘯］（名）㊀うそぶくと。うそ。㊁うそぶく形をしたるめん相。
うそ-ぶ・く かきくく くけけ［嘯］（自、か四）㊀口をつぼめて音を出だす。口をつぼめて氣を吐く。㊁詩歌を吟ず。㊂長くして大なる聲を發す。
＋うそ-む・く かきくく くけけ［嘯］（自、か四）「うそぶく」に同じ。
＋うそ-ゑ・む まみむむ めめ［微笑］（自、ま四）少しくわらふ。うすわらふ。ほゝゑむ。びせうす。
うた［歌］（名）㊀聲にふしを付けてうたふと。音律に合はせてうたふと。㊁うたふやうに作りたる詞の總稱、即ち、かぐらうた・さいばら・今樣・淨瑠璃・琵琶うた等。（唄、謠）。㊂五・七・五・七・七の五句、即ち、三十一綴音を以つてなれるうた。やまとうた。わか。
――あはせ ワーア［歌合］（名）歌を詠むもの左右に分れ、判人を立てゝ、詠みたる歌のよしあしを評して、勝負をさだむると。
（うだい［有待］（名）［佛］他の補助を受けざれば、世に存在し、又は業の成就せざると。
（うだい［宇內］（名）あめのした。天下。
＋うだいし［右大史］（名）古昔の官名、文書・勘例などの事をつかさどりしもの。
〔うだいしやう ヨーシ ヨウ［右大將］（名）右近衞の大將。
うだいじん［右大臣］（名）大政官の上官の名。
＋うだいべん［右大辨］（名）古昔の官名、辨の條を見よ。
うだい-まつ［鵜松明］（名）雨中に點ずるたいまつ、かばの木の皮にてつくり、鵜飼に用ふ。
＋うだいも（名）［植］「つくねいも」に同じ。
＋うたうた・し しくしくしき しけれ（形、二）いよいよ甚し。又、屈輯の意なりともいふ。
うた-うたひ ウーウ タイ［歌唱］（名）うたをうたふ人。又、うたをよくうたふ人。
＋うた-うら［歌占］（名）和歌にて、運命の吉凶を占ふと。
＋うた-がき［歌垣］（名）古昔の一種の遊戲、男女相あつまりて、歌をうたひかはして舞踏す。
＋うた-かた［泡沫］（名）㊀水の上に浮ぶ泡。㊁泡の消えやすきより、はかなき事に譬へいふ語。――ぐさ［泡沫草］（名）［植］酉獅の一名。
＋うたかた（副）ゑばし。暫時。「―人にあはで」。
うた-がたり［歌語］（名）歌のはなし。歌についてのものがたり。
うたがは・し しくしくしき しけれ ワーガ ワシ［疑］（形、二）うたがふべし。いぶかし。不審なり。あやし。
うたがひ イーガ［疑］（名）ふしん。あやしみ。ぎねん。

ちきゅう【地球】(名) 太陽系の中で太陽から三番目に近い惑星。自転しながら太陽のまわりを公転している。

ちきゅうぎ【地球儀】(名) 地球の表面を縮小して球面上に表した模型。

ちきゅうぎょうせい【地球行政】(名) 地球全体を一つの行政単位として行う行政。

ちきゅうけいさつ【地球警察】(名) 地球全体の治安を守る警察。

ちきゅうこく【地球国】(名) 地球全体を一つの国家とする考え。

ちきゅうじん【地球人】(名) 地球に住む人。

ちきゅうせい【地球製】(名) 地球で作られたこと。

ちきゅうぜい【地球税】(名) 地球全体で課される税金。

ちきゅうそだち【地球育ち】(名) 地球で育ったこと。

ちきゅうだん【地球団】(名) 地球全体を代表する団体。

ちきゅうちょう【地球庁】(名) 地球全体の行政を担当する官庁。

ちきゅうてき【地球的】(形動) 地球全体にかかわるさま。

ちきゅうぶんか【地球文化】(名) 地球全体の文化。

ちきゅうぼうえいぐん【地球防衛軍】(名) 地球を防衛する軍隊。

ちきゅうまもり【地球守り】(名) 地球を守ること。

ちきゅうまわり【地球回り】(名) 地球の周囲を回ること。

ちきゅうめいれい【地球命令】(名) 地球全体に出される命令。

ちきゅうもの【地球物】(名) 地球で作られた物。

ちきゅうりょこう【地球旅行】(名) 地球全体を旅行すること。

ちきゅうれき【地球暦】(名) 地球で使われる暦。

ちきゅうろん【地球論】(名) 地球に関する論。

ちきゅうわ【地球和】(名) 地球全体の平和。

ちきょ【地虚】(名) 地球の虚空。

ちきょう【地教】(名) 地球の教育。

ちきょく【地局】(名) 地球の局。

ちきょり【地距離】(名) 地球上の距離。

ちきん【地金】(名) 地球の金属。

ちく【地区】(名) 地球の区域。

ちくいち【地区一】(名) 地球の一区域。

ちくいちばん【地区一番】(名) 地球の一番目の区域。

ちくいちばんめ【地区一番目】(名) 地球の一番目の区域。

ちくいちばんめのく【地区一番目の区】(名) 地球の一番目の区域。

ちくいちばんめのくいき【地区一番目の区域】(名) 地球の一番目の区域。

ちくいちばんめのくいきだい【地区一番目の区域代】(名) 地球の一番目の区域代。

ちくいちばんめのくいきだいきん【地区一番目の区域代金】(名) 地球の一番目の区域代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうち【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうち【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうち【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじき【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらい【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみ【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきん【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがく【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうだいきんはらいこみきんがくひょう【地区一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表】(名) 地球の一番目の区域代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表示機械装置代金払い込み金額表。

ちくいちばんめのくいきだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみきんがくひょうじきかいそうちだいきんはらいこみき

うち-か・つ たちつて「打勝」(他、た四) かつの意を強めたる語。
うち-がね「打金」(名) 前裝の銃砲の火門の上に、裝置しあるはじきがね、これをはじき雷管を打ちて發火せしむ。(火鷄、鷄頭)。
うち-がは ワーガ「內側」(名) うちのかは。內面。
うち-がひ イーガ「打違」(名) ㊀うちゝがひ。ゆきちがひ。㊁食をいれて腰に帶ぶる底なき袋、うちゝがへて帶ぶるより名づく。こしぶくろ。(裹)。
うち-かぶと「內胄」(名) ㊀かぶとのうら。(裹兜)。㊁うちわのやうす。內情。——をみすかす 內情をよく察知するにいふ。
うち-か・ふ ウーカ「へへふふる」「ふれへよ」「打更」(他、は下二) ㊀更にあらためて打つ。㊁金屬製の具をさらにきたひかふ。
うち-かへ エーカ「打更」(名) うちかふること。
うち-かへし エシーカ「打返」(名) うちかへすこと。
うち-かへ・す エスーカ「さしすす」「すせせ」「打返」(他、さ四) ㊀打ちて、先方へかへす。㊁人に打たれたる報いとして其人を打つ。㊂くりかへす。反覆す。㊃ふるき綿を更に綿弓にてはじきうつ。㊄退きし波再び寄せ來る。
〔うちかへる「打更」(他) 「うちかふ」の訛。
うち-がみ「打紙」(名) 木づちにてうちて、つやを出だし滑かにしたる紙。
うち-がみ「氏神」(名) ㊀氏の先祖として祭る神、藤原氏の春日、源氏の八幡の類。㊁人々の住む所の鎭守の神。うぶすな。(產土神)。
うち-がり「內借」(名) 價又は貸錢などの幾部分を前拂ひにて借り受くること。ないしやく。
うち-き「內氣」(名) 物事に遠慮ぶかきこと。ひかへめがち。

うち-ぎ「袿」(名) 古昔の婦人の衣服、袖廣く裾模樣などありて、裝束の下に着しもの。
うち-きき「打聞」(名) ㊀聞くこと。㊁聞きて書きつけたるもの。
うち-ぎぬ「打衣」(名) 古昔の婦人の衣服の一、ひとへの上又はあこめの上に着しもの。
うち-ぎね「打杵」(名) 「きね」に同じ。
うち-きん「內金」(名) 契約したる金高の幾部分の金。
〔うち-きん「打金」(名) 廉價なる品を高價なる品と易ふるとき、不足だけの金額をつくなふこと。
うち-くだ・く かきくく くけけけ「打碎」(他、か四) 碎くの意を強めていふ語。
うち-くつろ・ぐ がぎぐぐ げげげげ「打解」(自、か四) ㊀心にわだかまりを懷(イ)かず。㊁心に惡苦をとゞめず。
うち-くび「打首」(名) 古昔の重刑の一、罪人の首を斬ること。ざんざい。(刎首)。
うち-くもり「內曇」(名) ㊀鳥の子紙の一種、上下に雲形をすき出だしたるもの。㊁一種の砥石、山城國鳴瀧より出づ、玉子色に紫色の模樣あるもの。㊂カハラけの一種、內に黑きあやあるもの。
うち-ぐり「打栗」(名) かちぐりを蒸して、甘味を付けたるもの。又、これに紙をあてゝ打ちつぶし區平にしたるもの。又、細く切りたる栗。
うち-くるぶし「內踝」(名) 內面へ向へるくるぶし。
うち-ぐるま「內輪」(名) 器械の內側に車輪の裝置しあるもの。
〔うち-ぐるま「內車」(名) 自家の人力車。
うち-ぐるわ「內郭」(名) 城の內部のくるわ、そとぐるわの對。
うち-けし「打消」(名) ㊀うち消すこと。㊁【文法】はたらきの然らざる意を表はすと。「ず」「あらず」等の助動詞によりてこれを表はす。(否定)。
うち-け・す さしすす すせせ「打消」(他、さ四) ㊀消すの意を強めていふ語。㊁皆無にす、遮る、きやす。㊂其事實を否認す。
うぢ-こ「氏子」(名) ㊀氏神の末裔、うぢびと。㊁うぶすなの守護の下にある人。——ぢゆう「氏子中」(名) 同一の氏神を祀るもの。
うち-ころ・す さしすす すせせ「打殺」(他、さ四) ㊀殺すの意を強めていふ語。㊁たゝきころす。㊂彈丸にて射殺す。
うち-しき「打敷」(名) 古昔、多く用ひし布帛の敷き物、今時多くは佛壇などの机にかく。(盖袱)。
うち-じに「討死」(名) 敵と戰ひて、其場にて死ぬること。せんし。
うち-す・う ゑゑううる うれゑよ「打据」(他、わ下二) ㊀据うの意を強めていふ語。㊁うちたふす。
廿うち-すが・ふ ガウース「はひふふ」「ふへへへ」「打過」(他、は四) うちすぐ。引き續く。
うち-すずめ「內雀」(名)【動】火とりむしの雌の異稱。
廿うち-すみ「內住」(名) ㊀古昔、內裏に住居せしこと。㊁御召しによりて、常に宿直(トノヰ)に供奉せし藏人女房。
〔うちすゑる「打据」(他) 「うちすう」の訛。
うち-せん「內鐵」(名) 桶側の彎曲したる所をけづる鉋。
うち-だし「打出」(名) ㊀うちいだすこと。㊁ものの模樣などを、裏より打ちて表へ出だすに用ふる型。㊂芝居などのはね。
うち-だ・す さしすす すせせ「打出」(他、さ四) ㊀うちて出だす。㊁うち始む。㊂芝居などにて、終りの合圖に、

太鼓をうちて見物人を去らす。㊃裹より打ちて、表へ模樣を出だす。㊄土地を測量して、餘地を出だす。
うち-だち「打太刀」(名) ㊀實用の太刀、かざりにする太刀に對していふ。㊁太刀を打つこと。
うち-たふ・す オータ「さしすす」「すせせ」「打倒」(他、さ四) ㊀たゝきたふす。
廿うち-たれがみ「打垂髮」(名) 婦人又は小兒の髮の結ばずして垂れたるもの。「うなゐこが、—をふりわけて」。
うち-ちがひ イーガ「打違」(名) すぢかひ。ゆきちがひ。
うち-ちが・ふ ウーガ「へへふふる」「ふれへよ」「打違」(他、は下二) ㊀交叉せしむ。すぢかひになす。㊁ゆきちがはす。
うち-ちが・ふ ウーガ「はひふふ」「ふへへへ」「打違」(自、は四) ㊀互に交叉す。すぢかひになる。㊁ゆきちがふ。
うち-ちやうちやく ウーチョ「打打擲」(名) 「ちやうちやく」に同じ。
うち-ちら・す さしすす すせせ「打散」(他、さ四) ㊀ちらすの意を強めていふ語。㊁追ひちらす。攻めちらす。
うち-つ・く けけくくる くれけよ「打付」(他、か下二) ㊀うちあつ。なげあつ。㊁さしあつ。㊂露骨にものす。
廿うち-つくに「內國」(名) ㊀古昔、地方に對して、都に近き所の稱。㊁外國に對して、我國の稱。
うち-つけ「打付」(名) ㊀なげつけ。㊁そつゐ。だしぬけ。㊂露骨。むきだし。——がき「打付書」(名) ㊀はしりがき。なぐりがき。㊁手紙の見舞ひの語などを略して、用事のみを書きたるもの。——ごころ「打付心」(名) 假に思ひたつ心。
うち-で「打出」(名) 古昔、儀式の折りに、御簾(ミス)の下より衣物をだしゝこと。——のこづち「打出小槌」(名) 寶の名、飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ槌。——のたち「打出太刀」(名) 護身の料に、夜間枕邊にそなへおく太刀。
うち-でし「內弟子」(名) 師匠の家に寄宿して居る弟子。塾生。
うち-てふつがひ ウーチョウ ツガイ「內蝶番」(名) よろひの胴にあるてふつがひ。
うち-と「內外」(名) ㊀うちとそとと。㊁內國と外國と。
うち-と・く けけくくる くれけよ「打解」(自、か下二) ㊀心をうちあけて睦(ムツ)じくす。へだてなく親しむ。㊁心になやみなくなる。ゆるやかになる。
廿うち-とけ-ごと「打解言」(名) 打ちとけて語ることば。むつごと。
廿うち-とけ-ごと「打解事」(名) へだてなきたはむれ。みだらなるたはわざ。
廿うち-とけ-ぶみ「打解文」(名) うちあけて事情をいふ手紙。
廿うち-とけ-わざ「打解業」(名) うちとけごと。
廿うち-と・す せしすする すれせよ「內外」(自、さ變) 出入りす。
うち-とねり「內舍人」(名) ㊀古昔、中務省に屬せし官、公家の子弟を登庸して、禁裏殿上の事をならはしたるもの。㊁現今は、東宮職及主殿寮の最下級の官屬。
廿うち-どの「打殿」(名) 古昔、裝束につやをいださんが爲めに設けられし所。
廿うち-と-の-ふみ「內外典」(名) 佛教の經典と儒道の經書と。ないてんとげてんと。
廿うち-と-の-みや「內外宮」(名) 伊勢の內宮と外宮と。
うち-と・む めめむむる むれめよ「打留」(他、ま下二) ㊀物をうちてとめおく。㊁斬り殺す。㊂彈丸を放ち中て取る。㊃興行の終りとす。
〔うち-どめ「打留」(名) をはり。けっきよく。どんづまり。
〔うちとめる「打留」(他) 「うちとむ」の訛。
うち-どり「內取」(名) ㊀古昔、角力の節會にさきなはれし儀式。㊁親方の內にてするけいこ相撲。
うち-なび・く かきくく くけけけ「打靡」(自、か四) なびく。したがふ。
うち-なびく「打靡」(枕) 「くろかみ」「へさかの山」「春」「やなぎ」に冠らする詞。
うち-ならし「擊鳴」(名) 一種の樂器、平たくして曲がり、ものにかけて鳴らすもの。けい。(磬)。
廿うち-ならし「內習」(名) うちにてならはすこと。したげいこ。
うち-なら・す さしすす すせせ「打鳴」(他、さ四) たゝきてならす。ならす。(拍)。
うち-には ワーニ「內庭」(名) 家の內の室と室との間にある庭。
うち-ぬき「打拔」(名) ㊀うちぬくこと。㊁地を深く穿ちて、井をつくること。
うち-ぬ・く かきくく くけけけ「打拔」(他、か四) つらぬく。ぬく。
うち-ね「擊根」(名) 一種の兵器、敵になげうつもの、形しゆりけんに似て、ふとく短し。
廿うち-の-うち「家內」(名) 家のうち。かない。「—では兄弟多し」。
廿うち-の-おとど「內大臣」(名) 「うちのおほおみ」に同じ。
廿うち-の-おほおみ オーオ「內大臣」(名) 內大臣の一名。
廿うち-の-かしはで-の-かみ ワーカシ「內膳正」(名) うちのかしはでのつかさの長官。
廿うち-の-かしはで-の-つかさ ワーカシ「內膳司」(名) 古昔、宮內省の被管にして、天子の食物をつかさどりしつかさ。
廿うち-の-かにもり-の-かみ「內掃部頭」(名) うちのかにもりのつかさの長官。

‡うち-の-かにもり-の-つかさ[内掃部司](名) 古昔、宮中のさうぢをつかさどりしつかさ。
‡うぢ-の-かみ[氏上](名) 同氏族中にて正系をひきたる家の長、これを上として、一族の事をつかさどらしめしもの。うぢのちやうじや。うぢのをさ。
‡うち-の-くすり-の-かみ[内藥正](名) うちのくすりのつかさの長官。
‡うち-の-くすり-の-つかさ[内藥司](名) 古昔、中務省の被管にして、宮中の醫藥に關する事をつかさどりしつかさ。
‡うち-の-くら-の-かみ[内藏頭](名) うちのくらのつかさの長官。
‡うち-の-くら-の-つかさ[内藏寮](名) 古昔、中務省の被管にして、宮中の金銀・珠玉・寶器・綾錦其他一切の財貨に關したる事務をつかさどりしつかさ。くられう。
‡うち-の-しるすつかさ[内記](名) 古昔、中務省の被管にして、詔勅をつくり、御所の記錄の事を司どりしつかさ。即ち、今の文事秘書官の如きもの。ないき。
‡うち-の-たくみ-の-かみ[内匠頭](名) うちのたくみのつかさの長官。たくみのかみ。
‡うち-の-たくみ-の-つかさ[内匠寮](名) 古昔、中務省の被管にして、宮中の營繕其他雜務などの裝飾の事をつかさどりしつかさ。たくみれう。
‡うぢ-の-ちやうじや[氏長者](名) 「うぢのかみ」に同じ。後世、平氏・源氏・藤原氏・橘氏にのみたまはりし號。
‡うち-の-つはもの-の-くら-の-かみ[内兵庫正](名) うちのつはもののくらの長官。
‡うち-の-つはもの-の-くら[内兵庫](名) 古昔、御料の兵器をつかさどりしつかさ。
うち-の-とねり[内舍人](名) 「うちどねり」に同じ。
うち-のべ[打延](名) うちのばすこと。うち延ばすこと。「—のかなもの」。「んわう。
‡うち-の-みこ[内御子](名) ひめみこ。ないしんわう。
うち-のり[内法](名) ❶柱などの、内面に向かへる側より他の同じ側までのさしわたし。❷すべて中空器の中空部の縱・横・深さの稱。例せば、一升枡の内法は、縱・横各四寸九分にして、深さ二寸七分といふが如し。
‡うち-の-ゐや-の-かみ[内禮正](名) うちのゐやのつかさの長官。
‡うち-の-ゐや-の-つかさ[内禮司](名) 古昔、中務省の被管にして、宮中の禮儀をつかさどりしもの。
‡うぢ-の-をさ[氏長](名) 「うぢのかみ」に同じ。
うち-は[團扇](名) あふぎて風を起す具、細き竹條を骨とし紙又は帛を貼(は)りて、柄を附したるもの、多くは圓形をなす。(爨)
うち-は[内端](名) ❶うちき。❷ひかへめ。
うち-はし[打橋](名) 假りにかけわたす橋。
うちは-だいこ[團扇太鼓](名) 一種の太鼓、一枚革をまるく張り、柄をつけて、團扇形に拵へたるもの。
うち-はた-す[打果](他、さ四) 兵器を以て打ちて、死にいたらしむ。うちころす。ぶちころす。
{うち-はちもんじ[内八文字](名) 遊女の郭内をねり行く足つき、兩足の先を内方へむけてあるくこと。
うちは-ぶくろ[團扇河豚](名) 【動】ふぐの類、腹の皮脹くしてよくのぶるもの。
‡うち-はへ[打延](名) ながびきて、いつ終るとも分きがたきこと。
うち-はらひ[打拂](名) ❶うちはらふこと。❷塵をはらふ具、ちりはらひ。
うち-はら-ふ[打拂](他、は四) ❶はらひのける。❷遂ひしりぞく。❸小銃・大砲などを打ちて、敵を追ひちらす。
うち-ばん[打盤](名) 物を打つに用ふる盤。
うち-び[打火](名) 燧にて鑽り出す火、きりび。
うち-ひ-さす[打日差](枕、「みや」「みやこ」に冠らする詞。
「る紐」(紐)
うち-ひも[打紐](名) 二筋以上の絲にて組みたる紐。
うち-ぶ[打步](名) ❶兩替にて、呼び値(ね)の等しき通貨の價格の差。❷送金人が實際に銀行に拂込みたる金額と、爲替手形の額面高との差。
うち-ぶところ[内懷](名) ❶胸部と衣服との間。❷相撲などにて、胸部に近接したる處の稱。❸人のないしよう。
うち-ぼり[内堀](名) 内部のほり。そとぼりの對。
‡うぢ-ぶみ[氏文](名) 先祖よりの由緒をしたためたる文書。けいづ。
{うち-べんけい[内辯慶](名) 家人外のものに對しては卑屈なれど、家人に對してはいと暴慢なるものをあざけりていふ詞。
うち-まか-す[打任](他、さ下二) ❶事物を擧げて委任す。❷放任す。其まゝにす。❸尋常にてあり。ありふれたり。
‡うち-まき[打撒](名) ❶まじなひのためふりまく米。❷米の異稱、又、米粒にもいふ。「摑。
{うち-まく[内幕](名) うち〳〵の事。ないぶの實

うち-まく[打幕](名) 幕の一種、まんまくに似て、上に横に一布を張りて、下は縫はざるもの。
うち-また[内股](名) うちもゝ。——-かうやく[内股膏藥](名) 自家に確たる主義定見なく、かれにつきこれにつく、ものをあざけりていふ語。——-もの[内股者](名) うちまたがうやくの人。「る。のる。
うち-また-が・る[打跨](自、ら四) またがる。
うち-またげ[打跨](名) うちまたがること。
‡うち-まつ[打松](名) 「たいまつ」に同じ。
うち-まめ[打豆](名) 大豆を少し煮て乾し、槌にて打ちひらめたるもの、多く汁などに入れて食ふ。
うぢ-まる[宇治丸](名) 鰻を酢にし又はひものとなしたるもの、山城宇治の産物。
‡うち-まゐり[内參](名) 宮中へ參内すること。さんだい。
うち-み[打身](名) 身體にうち傷などを受けて、其後をり〳〵痛みを感ずること。
{うち-みす[内御簾](名) 芝居にて舞臺の方より入り口の間のきたなしき、そとみすの對。
‡うち-みだり[打亂](名) 「うちみだりのはこ」の略言。——-の-はこ[打亂筥](名) 櫛其他の化粧道具を入るゝ匣。
うち-みづ[打水](名) 地を濕し塵を鎭め、或は冱涼氣をとるために、大地に撒(ま)く水。
うち-むらさき[内紫](名) ❶【動】雙殼類の貝、殼は厚く外面白色に内面紫色なり。❷【植】「ザボン」の一種、果實の内部は淡き紫色を帶ぶ。
うち-むろ-づくり[内室造](名) 屋根の裏を見せたるまゝにて、天井を張らぬ造り方。
うち-もの[打物](名) ❶うち切るための武器、即ち、太刀・刀の類。❷うちきたひたる金具。❸一種の乾菓子、みぢん粉に砂糖を加へ、型にいれてうちなしたるもの。❹槌にてうちならしたる布。❺手にてうちならす樂器、即ち、つゞみの類。——-し[打物師](名) 刃物をきたふ職人。(刀工)。
うち-もも[内股](名) 股のうちがは。うちまた。
(うちや-てん[有頂天](名) ❶【佛】九天の中の最高所。❷好む所に熱中して、他事にうはのそらなること。
{うち-や・る[打遣](他、ら四) やる。すてゝおく。はかしておく。
(う-ちゆう[雨中](名) 雨のふるなか。
(う-ちゆう[雨注](名) 矢・彈丸などが、雨のごとくにそゝぐこと。
‡う-ちゆうじやう[右中將](名) 右近衛府の中將。「の條を見よ。
‡う-ちゆうべん[右中辨](名) 古昔の官名、辨
うち-よ-す[打寄](自、さ下二) よせ來る。より來る。——-る[打寄](枕) 「するが」に冠らする詞。
うち-ろんぎ[内論議](名) 古昔、正月の御齋會の結願の日などに御前にて佛教の問答をなしゝこと。
うち-わ[内曲](名) ❶うち。家内。❷城内。國内。みかたうち。❸ないしよう事。ない〳〵。❹心の謙遜なること。控腹がちなること。てすぎぬこと。
うち-わけ[内分](名) 本家の知行の中を、末家に分ち與ふること。
うち-わけ[内譯](名) 金錢又は物品の總額を記し、其部分の目を小わけして記載すること。「—何圓、諸雜費」。
うち-わけ[打分](名) 鬪誹にて、一敗一勝してつまり勝敗のつかざること。
うち-わた[打綿](名) うちわけたるくりわた。又、うちかへしのふるわた。
うち-わたし[内渡](名) ❶知行(ぎやう)所をたまふとの證書。❷渡すべき金額の一部を渡しおくこと。
うち-わた-す[打渡](他、さ四) ❶わたす。❷見渡す。❸長くならぶ。
うち-わた・る[打渡](自、ら四) わたる。
{うち-わに[内鰐](名) わにあしの一、爪先を内の方へ向けてあるくこと。そとわにの對。
うち-わ-もめ[内曲揉](名) 家内又は味方の紛擾あること。(内訌)。「りの對。
うち-わり[内割](名) 「ぶあひ」(步合)に同じ。外割
うち-わ-る[打割](他、ら四) ❶わるの意を強めていふ詞。❷たたきわる。❸打ちあける。
うち-を[打緒](名) うちひも。「白絲の—」。
‡うつ[珍](名) 賞翫すべきものなること。珍美なること。「—のみてぐら」。
(うつ[鬱](名) 氣のはれぬこと。氣のふさぐこと。
う・つ[打](他、た四) ❶たゝく。ぶつ。❷たたきて鳴らす。「太鼓を—」。❸たゝき入る。うちこむ。「釘を—」。❹斬る。殺す。「首を—」(擊)。❺攻む。犯す。「賊徒を—」(討)。❻放射す。はなつ。「小銃を—」❼强(し)く。擲(う)く。❽なじる。ひなんす。❾投ぐ。撒(ま)く。「網を—」「水を—」。❿張る。掛ふ。「幔幕を—」。⓫組み合はす。あむ。「紐を—」。⓬地を丈量す。はかる。⓭圍碁又は博奕のたはむれをなす。⓮蒔繪・讃說などをつくる。⓯きたひ作る。「刀を—」。⓰手付をわたす。⓱興行をなす。「十日間うちとほす」。
う・つ[棄](自、た下二) 壓倒せらる。ひるまる。まける。

うつー[空](接頭) 或語に冠して中の空虚なる意を表はす語。「―せみ」。(虚)。
うづ[渦](名) ㊀水勢の輪の如くめぐること。又、其水。㊁すべて渦の形したるあや。
＋**うづ**[珍](名) 「うづ」(珍)に同じ。
＋**うーづ**[烏頭](名) とりかぶとの根、毒あり、藥料に供せらる。
＋**うづ**[堆](名) むっくり高きさまにいふ語。
(**うつーあり**[鬱燠](名) むしあつきこと。
＋**うつーあし**[内足](名) 足のをれかゞむ内面の所。ひっかゞみ。(國)。
(**うつーい**[鬱伊](名) 氣ふさがること。
(**うつーうつ**[鬱鬱](名、副) ㊀氣分のはれ〳〵せぬさまにいふ語。㊁草木などのしげれるさまにいふ語。㊂雲氣などのさかんなるさまにいふ語。㊃物事のふさがりとゞこほるさまにいふ語。
うーづかひ[鵜飼役](名) 鵜をつかひて魚を捕ること。又、其職業の人。
(**うっかり**(名、副) 茫然として心のそらなるさまにいふ語。――**ばら**(名) 心うっかりしやすき人。
うつーぎ[空木](名) 【植】虎耳草(ユキノシタ)科に屬する灌木、高さ四五尺、枝と葉とは共に對生す、葉は兩面とも粗糙なり、四月頃花開く、花は一樣にして、花絲は有翼扁平なり、觀賞用として栽培せられ、木材は木釘などに用ひらる。(溲疏)。
(**うっーき**[鬱氣](名) ㊀氣散ぜざること。心晴れやかならざること。㊁こもりふさがる氣。㊂たちのぼる氣。
うーづき[卯月](名) (「うのはな」の咲く月の義) 陰曆四月の稱。＋――**のーいみ**[卯月忌](名) 四月八日の稱、即ち、釋迦の入滅したりといふ日。――**のーはな**[卯月花](名) 【植】「うのはな」の一名。

――**ばな**[卯月花](名) (四月にさく花の義) 【植】「しやくなげ」の一名。
うづき[疼](名) うづくこと。いたみ。
＋**うつ・く**[虚](自、か下二) ㊀中うつろとなる。㊁心茫然としてあり。
うづ・く[疼](自、か四) 時々刻々に痛みを感ず。ちく〳〵いたむ。
＋**うつく・し**[愛](形、二) 愛すべし。「らし」。あいらし。
うつく・し[美](形、二) ㊀つやゝかなり。あてやかなり。みめよし。きれいなり。(麗、艶、妍)。㊁心いさぎよし、行いやしからず。うるはし。
＋**うつくしみ**[愛](名) うつくしむこと。いつくしみ。
＋**うつくし・む**[愛](他、ま四) いつくしむ。あいす。したしむ。
(**うっーくつ**[鬱屈](名) ㊀氣のふさぐこと。㊁物事のふさがりとゞこほること。
うづくま・る[蹲](自、ら四) ㊀獸など、前足をたてゝすわる。㊁膝を折り腰をおとしてゐる。
うつけ[空](名) ㊀から。あき。空虚。㊁うはのそら。ぼんやり。うっかり。(呆痴)。
(**うっーけつ**[鬱結](名) 氣のむすぼるゝこと。
うつけーもの(名) ばかもの。たわけもの。(呆痴漢)。
(**うっーさん**[鬱散](名) きばらし。うさばらし。
うつし[寫](名) ㊀うつしとること。㊁原形になぞらへてつくること。模造。㊂うつしたる文書又は圖畫。㊃とうほん。謄本。㊄模造品。
うつし[映](名) 影をうつすこと。
うつし[移](名) ㊀うつすこと。㊁のりかへの車馬。㊂「うつしばな」の略言。――**ぐさ**[移草](名) 【植】「つゆくさ」の一名。
＋**うつ・し**[現](形、二) 現在なり。うつゝなり。あらはなり。たしかなり。(顯)。

＋**うつしーごころ**[現心](名) あらはなるこゝろ。たしかなるこゝろ。
うつしーごころ[移心](名) うつる心。かはりやすき心。「すき心」。
＋**うつしーざま**[現様](名) 常の樣。たしかなるさま。
うつしーのはひ[移灰](名) 紅をおろすときに用ふる灰。
うつしーばな[移花](名) 一種の繪具、つゆくさの花を摘み、紙にうつして染料とす。
＋**うつしーびと**[現人](名) 此世に生活せる人。
うつしーぶみ[移文](名) くわいしやう。まはしぶみ。
うづーしほ[渦潮](名) うづをまく潮。「鳴門の―」。
＋**うつしーみ**[現身](名) 現在せる身。いきながらふる身。
うつしーゑ[映繪](名) 暗所にて、光線の作用を以て、繪の形をあらはし出だすもの。かげゑ。
うつ・す[移](他、さ四) ㊀これをかれにかふ。かれをこれにひきなほす。「風をうつし、俗を易ふ」。㊁處を變ず。かふ。「居を―」。㊂及ぼす。「禍を我に―」。㊃過ごす。「時を―」。㊄おくる。あたふ。㊅傳染せしむ。㊆文書にしたゝめておくる。「―病死靈」。
うつ・す[寫](他、さ四) ㊀原物のとほりにかきとる。㊁原物になぞらへ造る。模造す。㊂光線の作用により、物の形を寫眞にとる。
うつ・す[映](他、さ四) 照らして影をあらはす。「鏡に―」。
うっ・す[鬱](自、さ變) ㊀しげる。つもる。㊁伸びず。散らず。とゞこほる。㊂氣むしのぼる。㊃心思結ぼる。うれふ。ふさぐ。

うっ・す[鬱](他、さ變) ㊀とづ。かゞむ。ふさぐ。㊁むす。ねかす。「麹を―」。
(**うっすら**[薄](名、副) 「うっすり」の轉。
うっすり[薄](名、副) うすく。ほんのり。
うつせーがひ[虚背貝](名) 海邊などに漂着する肉なき介殼。
(**うっーせき**[鬱積](名) とゞこほること。つもること。
＋**うつーせみ**[現身](名) 此世に現在する身。うつしみ。
うつーせみ[空蟬](名) ㊀蟬のぬけがら。せみがら。㊁轉じて、蟬。「―の聲」。――**の**[空蟬](枕) 「人」「いのち」「世」「妹」に冠らする詞。
(**うつーぜん**[鬱然](名、副) 草木のしげるさま又は物事のさかんなるさまにいふ語。
(**うっーそう**[鬱葱](名) むしのぼる氣のさかんなるさま又は草木のしげれるさまにいふ語。
＋**うつーそみ**[現身](名) 「うつせみ」に同じ。
うづーだいこん[渦大根](名) 【植】「さんごおゆな」の一名。
(**うっーたう**[鬱陶](名) 心むすぼるゝこと。ふさぎ。――**し**(形、二) ㊀心ふさぎてはれず。㊁うるさし。わづらはし。
うづたか・し[堆](形、一) もりあがりて高し。「うづたかきまで飯をもりて」。
うった・ふ[訴](他、は下二) ㊀官府に申し出て、是非曲直の判決を請ふ。(訟)。㊁不平などを人に告ぐ。㊂或物事によりて其解決を求む。「遂に砲火に―るに至る」。
(**うったへ**[訴](名) 「そしよう」に同じ。
＋**うったへーに**(副) ㊀ひたすらに。ひとへに。㊁うちつけに。やがて。

＋**うーづち**[卯槌](名) 古昔、卯杖と同じく、正月上の卯の日に兵衛府より奉りし槌。
(**うっちやらか・す**[打遣](他、さ四) すておく。
(**うっちや・る**[打遣](他、ら四) すておく。
うつつ[現](名) ㊀此世に現在してあること。現實。㊁心神のさだかならぬ境。まぼろし。――**をぬかす** 迷ひて心をうしなふ。
＋**うつ・つ**[打棄](他、た下二) うちすつ。
うっーて[討手](名) (「うちて」の音便) 敵・賊又は罪人などをおひかくる人。捕手。
うってーがへ[打手替](名) ㊀いりかはりたちかはりすること。㊁碁の手の名、打って敵の石をとり、直ちに敵に其の部分に於ける我石を取らるゝこと。
(**うってーつけ**[打附](名) 其儘よく適合すること。
うっとり(名、副) 心を喪(ウシナ)ふさまにいふ語。(恍惚)。
＋**うつーなし**[疑無](形、二) うたがひなし。
＋**うづなひ**[諾](名) うべなふこと。しようだく。
＋**うづな・ふ**[諾](他、は四) しようちす。うべなふ。うけいる。
うつは[器](名) ㊀中に物をいるべきもの。うつはもの。いれもの。㊁器具器械の總稱。㊂物事を擔當し得る才能度量。きりやう。㊃其物事を擔當し得る人物。「廊廟の―」。――**もの**[器物](名) 物を入るゝ具。いれもの。
＋**うつはり**[梁](名) うつばり。はり。
うつばり[梁](名) 棟をうくるはり。はり。
＋**うつは・る**[偽](他、ら四) いつはる。
＋**うつはりーごと**[偽言](名) うそ。きよごん。
うつーぶき[俯向](名) うつむき。
うつーぶ・く[俯向](自、か四) うつむく。

うつーぶ・く[俯向](他、か下二) うつむかす。
うつーぶし[俯伏](名) うつぶすこと。うつむき。――**め**[俯目](名) 顏稍や下向きとなりあること。
うつーぶ・す[俯伏](自、さ四) うつむく。
うつーぶ・す[俯伏](他、さ下二) うつむかす。
うっぷるひーのり[十六島海苔](名) 【植】出雲國うっぷるひ島より出づる一種のあまのり、色紫黑にして味美なり。
(**うっーぷん**[鬱憤](名) つもり〳〵しうらみ。宿怨。「―晴らす」。
(**うっーぺい**[鬱閉](名) ㊀ふさぐこと。とぢこもること。㊁物を一處にとぢこむること。
うつほ[空](名) 中の空虛なること。うつろ。くう。きよ。から。
うつぼ[洞](名) 中の空虛なる處。
うつぼ[靱](名) 矢を入るゝうつはの名。

[うつぼ]

(輔、靭)。――**いちご**[靱苺](名) 【植】「いちご」の一種。――**がひ**[靱貝](名) 【動】螺の一種、介殼かたつぶりに似て、褐茶色なり。
＋**うつぼーかもん**[空勘文](名) 女叙位の名目、叙位すべき人なく、たゞ名目のみを存しおくこと。
うつぼーぎ[空木](名) 中の朽ちてうつろになりたる木。
＋**うつぼーぐさ**[空草](名) 【植】「ねぎ」の古名。
(**うつーぼつ**[鬱勃](名) ㊀雲などの盛んに起るさまにいふ語。㊁おもひ胸にふさがるさま又は意氣起りあがるさまにいふ語。
うつぼーづけ[空穗附](名) 相撲の四十八手の一、いきほひつよく握りあげて投ぐる手。

廿うつぼ-ばしら[空柱](名) 古昔、あまだれをうくるためにたてし柱。たてどひ。
うつぼ-ぶね[空船](名) 大木の中をうつろにして造りたる船。まるきぶね。(獨木舟)。
うづ-まき[渦卷](名) ㊀うづまくこと。うづをまく水流。(渦狀)。㊁一種の菓子、うどん粉に卵を和したるものを延べ、これを燒き餡をつゝみまきて、輪切りにしたるもの。
うづ-ま・く[渦卷](自、か四) うづになりて「まふ。
うづ-ま・る[埋](自、ら四) うづもる。
うづみ-ひ[埋樋](名) 土中にうづめて、水をとほすとひ。かくれどひ。
うづみ-び[埋火](名) 灰の中にうづめたる炭火。
うづみ-もん[埋門](名) うらてにある小門。
うづ・む[埋](他、ま四) ㊀物の内に入れかくす。㊁土中に入れ没す。㊂粗末なる葬りをなす。
うづ・む[埋](他、ま下二) 前條に同じ。
うつ-むき[俯向](名) うつむくこと。うつぶし。
うつ-む・く[俯向](自、か四) ㊀下へ向く。㊁頭を垂る。たる。「かす。
うつ-む・く[俯向](他、か下二) 下へ向ふす。
うつ-むけ[俯向](名) うつむくること。
〰うつむける[俯向](他) 「うつむく」の訛。
〰うづ-むし[渦蟲](名) 【動】「みづすまし」の一名。
うつ-むろ[空室](名) 四方を土もてぬりたるむ「ろ。
〰うづめる[埋](他) 「うづむ」の訛。
廿うつ-もも[內股](名) うちもゝ。
うづも・る[埋](自、ら下二) 物の中にかくれ掩(ホ)はる。うづまる。うまる。
〰うつ-もん[鬱悶](名) 心むすぼれもだゆること。
廿うつ-ゆふ[空繭](名) 中の空虛になれる繭。

うづら[鶉](名) ㊀【動】鶉雞類に屬する鳥、形はにはとりの雌に似て首小さく尾短し、全身茶褐色にして黑白の斑點あり、多くは原野に棲む、肉は味美なり。㊁芝居の下棧敷。(東京の方言)。㊂樫櫚の毛と加賀苧とをあはせなひたる船綱。――いし[鶉石](名) 小さき圓き瑪瑙(メナウ)。つがるめなう。――がうし[鶉格子](名) 遊女屋の格子(カウシ)の一種、形うづらかごに似る。――かご[鶉籠](名) うづらをかひおく方形の籠。――がひ[鶉貝](名) 【動】前鰓類中鶉貝類に屬する貝、介殼圓くして、うづらの羽の斑に似たる模樣あり。――ごろも[鶉衣](名) 敝(ヤブ)れて短くなりたる着物。敝衣。――たけ[鶉茸](名) 【植】蓋の上の斑色が鶉の毛色に似たる松茸。――の-とこ[鶉床](名) ㊀うづらの臥すところ。㊁轉じて、いぶせき臥床(フシ)の稱。――ふ[鶉斑](名) 茶色に黑白の斑文あるもの。――まめ[鶉豆](名) 【植】さゝげの一種、莖は纏繞せず、羽狀複葉にして三箇の小葉より成る、花は白色にして、種子に渦紋あり、種子及嫩莢は食用に供せらる。ちりめんまめ。――もく[鶉木](名) 【植】「やくすぎ」の一名。――やき[鶉燒](名) 食物をあぶらもていりつけ、鶉色としたること。又、其食物。
廿うつら-うつら(名、副) ㊀よく念を入るゝさまにいふ語。㊁ねむりに睡りを催すさまにいふ語。うとうと。「合はせ。
うつり[映](名) ㊀うつること。㊁色と色との取り合はせ。
うつり[移](名) ㊀うつること。㊁他よりのおくり物の器に、其返禮としているゝ品の稱。――か[移香](名) 物にうつりて殘る香。――かはり[移代](名) 次第にかはること。かうたい。へんせん。

――かは・る[移變](自、ら四) 漸々にかはりゆく。へんせんす。かうたいす。――がみ[移紙](名) 他よりおくり物の器に、返禮のため入れてかへす紙。――ぎ[移氣](名)、うつりやすき性質。うはき。――やまひ[移病](名) はやりやみ。でんせんびやう。
(うつ-りん)[鬱林](名) 木ぶかく茂りたる森林。
うつ・る[移](自、ら四) ㊀所かはる。㊁遷ず。かはる。かはりゆく。㊂及ぶ。延(ヒ)く。㊃色づく。そまる。㊄過ぎゆく。㊅感染す。でんせんす。㊆もとろへかはる。おとろふ。
うつ・る[映](自、ら四) ㊀こゝの光り又は影が、かしこに現はる。㊁色と色とよく出合ふ。㊂よく適應す。
うつろ[空](名) うつほ。うろ。から。(虛)。
廿うつろは・す[移](他、さ四) うつろふやうにす。變化せしむ。おとろへしむ。
廿うつろひ-ぎく[移菊](名) かされの色目、表は紫、裏は白又は黄なるもの。
廿うつろ・ふ[移](自、は四) ㊀場所をかふ。㊁うつりかはる。㊂おとろふ。
うつろ・ふ[映](自、は四) 影又は光りなどうつる。「朝日に――山」。
うづ-わ[渦輪](名) 【動】「うづわがつを」の略言。――がつを[渦輪鰹](名) 【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、背部蒼黑色にして、後方に雲紋あり、體長一尺に達す、東海に多く、習性かつをに似る。
廿うづ-ゐ[蹲居](名) うづくまりて居ること。(蹲踞)。
廿う-づゑ[卯杖](名) 古昔、正月上の卯の日に、兵衛府より奉りしつゑ、五色の絲にて卷きたるもの。
うつを[鬱](名) 「うつぼ」の轉。

廿うつを-ばしら[空柱](名) 「うつぼばしら」の轉。
廿う-つて[討手](名) 「うつて」に同じ。
うで[腕](名) ㊀臂(ヒヂ)と手頸(テクビ)との間の稱、下膊骨即ち橈骨一對尺骨一對とより成り、これに諸種の筋肉附着す。たゞむき。かひな。㊁轉じて、肩と手頸(テクビ)との間の稱、上膊骨一對及下膊骨とより成り、諸種の筋肉附着して上肢の運動をなす。㊂うでまへ。伎倆。㊃ちから。腕力。「――立て」。㊄「うでぎ」などの稱。――おし[腕押](名) 一種の遊戲、兩人腕をたて掌を握(ニギ)りあひて、互に押しあふこと。――ぎ[腕木](名) 一端に於てのみ支えて、横に突出せしめ、其上に物をさゝへしむる材。(枅)。――くび[腕首](名) てくび。たゞむき。(手頸)。――ぐみ[腕組](名) 兩のうでを胸のあたりにて組むこと。――くらべ[腕競](名) うでまへ又はちからをくらべあふこと。――こき[腕扱](名) 伎倆の特にすぐれて居ること。又、其人。――ぞろひ[腕揃](名) うでまへのすぐれたるものゝそろひ居ること。――だて[腕立](名) ㊀ちからわざなどに、腕をつかふこと。㊁腕力によりて、人と爭ふこと。――だめし[腕試](名) ちからをこゝろみること。――づく[腕盡](名) ㊀腕のかぎりをつくすこと。㊁腕をくらぶること。
うてな[臺](名) ㊀四方眺望のために建つる屋根なき高どの。㊁花瓣を受けもつ處。「はすの――」。(萼、花蒂)。
うで-ぬき[腕貫](名) かひなに付くる裝飾、環狀をなし腕をつらぬき娛(ハ)む。うでわ。(釧)。
廿うての-つかひ[討手使](名) 討手にさしむくる使者。つゐたうし。
うで-びき[腕引](名) 一種の遊戲、互にうでのかがみに、一本の手拭などの端を挾みて、これを引きあふこと。

(うで-まくり)[腕捲](名) 腕を覆ふ着物の袖口をまき上ぐること。(攘臂)。
うで-まへ[腕前](名) てなみ。わざまへ。
うで-まもり[腕守](名) うでぬきに神佛の守り札を入れたるもの。
(う・でる)[茹](自、た下一) ㊀氣をのまる。けおさる。まく。㊁くさる。すゆ。
(うでる)[茹](他) 「ゆでる」の訛。
うで-わ[腕輪](名) うでの裝飾にはむる輪。うでぬき。
(う-てん)[雨天](名) 雨の降るそら。あめふり。あまぞら。「日々――鬱陶しく」。――じゅんえん[雨天順延](名) 集會などにて、かねて期したる當日が、雨天なれば其翌日にのばし、其翌日また雨天なれば其翌々日にのばすこと。
(う-と)[烏兎](名) (金烏卽ち日と玉兎卽ち月との義)日月。光陰。としつき。
うど(名) 【植】(い)五加(ウコギ)科に屬する草本、葉は通常二回羽狀複葉をなす、春の頃、嫩(ワカ)き芽を採りて食用に供す。(土當歸)。(ろ)「ゑゝうど」の一名。(獨「活)。
うどり(名) 【動】「うとうどり」の略言。
うど-うと(名、副) ㊀ねむりを催すさまにいふ語。うつらうつら。㊁心物事に疎はれたるさまにいふ語。ぼんやり。
うと-うと・し[疎疎](形、二) きはめてうとし。えたしく無し。
うとう-どり(名) 【動】「うとうやすかた」に同じ。
うとう-やすかた(名) 【動】游水類中扁嘴類に屬する鳥、小鴨大にして頸長く色薄黑し、嘴根部に赤色の瘤狀物あり、嘴脚共に茶褐色を帶ぶ、腹部は白色なり、北國の海濱に產す。(善知鳥)。「げん。

(う-とく)[有德](名) ㊀德あること。㊁いうふく。ぶ
うと・し[疎](形、二) ㊀むつましからず。えたしからず。㊁久しく交通せず。㊂ふあんないなり。まはりどほし。くらし。
う-どねり[內舍人](名) ㊀古昔、中務省に屬せし帶劍侍衛の職。㊁今時は、東宮職及主殿寮の最下級の官屬。
うどの-あし[鵜殿葦](名) 【植】葦の一種、攝津鵜殿に生ず、此莖を篳篥(ヒチリキ)の簧(シ)に用ふ。
(うど-の-たいぼく)[獨活大木](名) 身體人にすぐれて大なるも、役に立たざるものをあざけりていふ語。
廿うと・ぶ[疎](他、は四) 「うとむ」に同じ。
うとま・し[疎](形、二) うとむべし。きらはし。
うとみ[疎](名) うとむこと。
うと・む[疎](他、ま四) ㊀えたしまず。おろそかにす。㊁忌みきらふ。㊂遠ざく。つれなくす。
うど-め(名) ㊀うどの萌芽、食物のあへしらひに用ふ。(土當歸芽)。㊁【植】五加(ウコギ)科に屬する木、多數の太き刺を有し、葉は二回羽狀複葉なり、嫩枝は食用に供せらる。たらのき。(楤木)。「同じ。
うど-もどき[獨活擬](名) 【植】「うどめ」の㊁に
う-どん[饂飩](名) うんどん。(切麪)。――こ[饂飩粉](名) 「うどんのこ」に同じ。――どうふ[饂飩豆腐](名) 「はちはいどうふ」に同じ。――のこ[饂飩粉](名) 小麥の粉、おもにうどんを製するに用ふる故に此名あり。――ふるひ[饂飩篩](名) うどんのこをふるふ篩(フルヒ)

ウドン-げ［優曇華］(名) ㊀(「ウドン」は梵語 Udumbara (優曇鉢羅)の略、靈瑞又は瑞應と譯す)想像上の植物、芽出て、一千年、苔をふくみて一千年、花開きて一千年、都合三千年に一たび花を開くものにして、此花の開くとき、金輪王出現すといふ。㊁芭蕉の花の異稱。㊂【動】くさかげろふ蟲の卵が、他物に附着したるもの、稱、莖部ありて恰も花の咲きたる如きが故に此名あり。

うどん・ず［踈］(他、さ變) うとむ。

〔うな(名) 【動】(い)「うなぎ」の略言。(ろ)「ふな」の訛。

うな—［頸］(接頭) 或語に冠してうなじの意を表はす。「—垂る」、「—尻」。

うな—［海］(接頭) 或語に冠してうみの意を表はす。

廿うな-かけ・る［項掛］(自、ら四) ㊀うなじに手をかく。㊁志たしみあふ。

うながし［促］(名) ㊀うながすこと。㊁廿收税吏。

うなが・す［促］(他、さ四) ㊀もよほし立つ。㊁租税を取り立つ。さいそくす。いそがす。せつく。

廿うな-か・す［項掛］(他、さ四) うながける。

廿うな-かぶし(名) うなかぶすこと。

廿うな-かぶ・す(自、さ四) ㊀うなじをたれかたむく。㊁愛慰す。えんぱいす。

廿うな-がみ［項髮］(名) たてがみ。うしろがみ。

うながみ-ど［海上砥］(名) 一種の砥石、其質粗し、下總國銚子邊より出す。

うなぎ［鰻］(名) 【動】無脚鰭類中うなぎ科に屬する魚、淡水に産す、形蛇に似て腹白し、多く蒲燒きにして食ふ。むなぎ。うな。(鰻、鱺)。——かき［鰻鉤］(名) 鰻を捕るに用ふる漁具、長き柄に「て」の字形の鉤をつけたるもの、水底をかきて、鰻を鉤にかけ捕る。——ざる［鰻笊］(名) うなぎをいるゝざる。——どんぶり［鰻丼］(名) 「うなぎめし」に同じ。——のかばやき［鰻蒲燒］(名) 一種の料理、鰻を背開きにして、たれをつけて燒きたるもの。——のぼり［鰻登］(名) 物の多く倍數となりて、殖(フ)え行くこと。——めし［鰻飯］(名) 丼(ドンブリ)に飯を盛り、其上にうなぎの蒲燒をのせたるもの、うなぎどんぶり。

廿うな-ぐ［項］(他、か四) うなじにかく。

うな-こぶ［項瘤］(名) 牛の項にある肉塊、軛を受くるところ。

廿うな-ざか［海境］(名) 海の限界。「—をすぎ」。

うなさ・る［魘］(自、ら下二) 夢の中に恐ろしき物事に襲はれて、おぼえず聲を立つ。

〔うなされる［魘］(自) 「うなさる」の訛。

うなじ［項］(名) 頭の後方なる下部、ぼんのくぼ。えりくび。くびすぢ。(脰)。

うな-だ・る［項低］(自、ら下二) うなじをたる。頭を垂る。(低頭)。

うな-づ・く［頷］(自、か四) 承諾の意を表して、頭を前へ動かす。首肯す。(點頭)。

廿うなて(名) 田にひく用水の溝。(池溝)。

う-なは［鵜繩］(名) ㊀鵜飼ひ人の鵜をあやつるために、鵜の首へつくる繩。㊁一種の漁具、鵜の羽又は襤褸(ボロ)などを繩につけて、魚を驅(カ)るに用ふるもの。

うな-ばた［海邊］(名) うみのへり。

うな-ばら［海原］(名) ひろびろと見えわたる海上。(滄海)。

うなひ［耡］(名) たがやすこと。

うな・ふ［耡］(他、は四) 鋤鍬を以て田畠を起しうねをこしらふ。種子をおろして土を覆ふ。たがへす。たがやす。

うな-べ［海邊］(名) うみのほとり。

うな-め［畦目］(名) よろひのおどし絲の並びて、田畠のうねの如く目をあらはしたるもの。

廿うなや［檻］(名) ひとや。ひとや。ごくや。

うなり［唸］(名) ㊀うなること。うめくこと。(呻吟)。㊁【理】高低浮沈の音響、即ち、音波が濃厚なる部と稀薄なる部と翻覆交錯して、耳に高低浮沈ある音の感覺を起すもの。「鐘の—」。㊂凧(コ)につけて風にうならするもの、多くは鯨の鬚又は籐の皮を薄くして、小さき弓に掛けてはる。(風箏)。——ごゑ［唸聲］(名) うなる聲。うめきごゑ。

うな・る［唸］(自、ら四) ㊀なやみて聲を發す。くるしみうめく。㊁高低浮沈ある音響を發す。

廿うな-わ・く［膿沸］(自、か四) 膿(ウミ)出づ。

廿うなゐ［髫髮］(名) ㊀幼少なる男女の結びたる髮を後へ垂れたるもの。㊁うなゐこ。子供。——こ［髫髮子］(名) ㊀髮をうなゐにむすびたる子供。㊁こども。幼童。——はなり［髫髮放］(名) うなゐ髮をあげず、鬖々と散らしておくこと。——まつ［髫髮松］(名) 墓の標に植うる小さき松の稱、幼兒の髮の如く、松葉の不規律に鬖々たるより名づく。——をとめ［髫髮小女］(名) 髮をうなゐにむすびたる少女。

うに［海栗］(名) 【動】海膽類に屬する棘皮動物、圓形幅狀の介殼は黑紫色をなし、長棘叢生す、海濱の岩礁上に多く見る所なり、其卵巣を鹽藏して鹽丹(ニウ)と稱し珍重す。(海膽)。

ウニウ(名) 【動】「アイヌ」語 Uneu「をっとせい」の稱。

ウニコール［Unicorn］(名) 【動】「いっかく」(一角)に同じ。

うに-つぼ［海栗壺］(名) うにの介殼。

〔うぬ［汝］(代) 輕蔑の意を含む對稱の代名詞。なんぢ。

うぬ-ぼ・る［自惚］(自、ら下二) わけもなく自ら慢じ自ら恃(タノ)む。自ら多とす。

うぬ-ぼれ［自惚］(名) うぬぼるゝこと。(自多)。——かがみ［自惚鏡］(名) 其容貌を實際のものよりよく見する鏡。

〔うぬぼれる［自惚］(自) 「うぬぼる」の訛。

〔うぬ-ら［汝等］(代) 輕蔑の意を含む對稱の代名稱。なんぢら。

うね［畦］(名) 田畑の中に土をもりたてゝ長くつゞけたるもの。(隴)。

ウネウ(名) 「アイヌ」語 Uneu「をっとせい」の稱。

うね-うね［畝畝］(名) 各所のうね。

うね-うね［畝畝］(名、副) 高低屈曲のさま又は波のよせくるさまにいふ語。

うね-おり［畝織］(名) 織物の名、畑のうねの如く凸に絲をあらはして織りたるもの、羽後國秋田の名産なり。(白羅布)。

うね-くね(名) ㊀うねくること。㊁彼是交錯して、凸凹をなすこと。

うね-く・る(自、ら四) 「うねる」に同じ。

〔うねくれる(自) 「うねくる」の訛。

うね-ざし［畝刺］(名) 絲を浮かべて、恰も田畑のうねの如く縫ひ刺すこと。——たび［畝刺足袋］(名) うねざしにしたる足袋。

廿うね-べ(名) 「うねめ」に同じ。

廿うね-め［采女］(名) 古昔、後宮にて、御膳の事に預かりし女官の稱、郡の少領以上の姉妹の容貌端正なる者より采(ト)られたり。——のかみ［采女正］(名) うねめのつかさの長官。——のぢやう［采女正］(名) 前條に同じ。——のつかさ［采女司］(名) 古昔、宮内省に屬し、采女の檢校をつかさどりしもの。

うねり(名) うねること。「波の—」。(蜿蜒)。

うね・る(自、ら四) 或は上下に或は左右に彎曲す。うねくる。うねくれる。(蟠紆、紆行)。

うのあし-がひ［鵜脚貝］(名) 【動】よめがさらの類、介殼陣笠狀にして螺旋部なく、多く海濱の岩石に附着す、形鵜の脚に似たれば此名あり。

う-の-け［兎毛］(名) ㊀うさぎの毛。㊁極めて小なる物事にいふ語。「—ほども知らず」。(秋毫)。

う-の-はな［卯花］(名) ㊀うつぎの花。(水晶花)。㊁かさねの色目、表は白く、裏は青し。㊂とうふのかす。きらず。——をどし［卯花威］(名) 白き絲にておどしたる鎧。——くたし［卯花腐］(名) 登雨と梅雨との間にふりつゞく雨。——づき［卯花月］(名) 陰曆、四月の異稱。——づきよ［卯花月夜］(名) 卯の花の白くさきみちたるさまを、月の影になずらへていふ語。——なます［卯花膾］(名) 上に湯びきの魚肉又はおろし大根をふりかけたるぬたなます。——めし［卯花飯］(名) 豆腐の粕を加へ、加味して煮たる飯。——やき［卯花燒］(名) 鮒を燒き酢をかけて、豆腐のからをふりかけたるもの。

う-の-ふえ［竽笛］(名) 「う」(竽)に同じ。

う-のみ［鵜呑］(名) 鵜の如く、物をたやすく呑み込むこと。まるのみ。

うのめ-がへし［畦目返］(名) 裏表より返してうなめに縫ふ縫方。

うのめ-たかのめ［鵜目鷹目］(名) 鵜又は鷹の魚をあさるにたとへて、人の熱心に物をさがし出さんとするさまにいふ語。

うのめ-ゆわう［鵜目硫黃］(名) 硫黃の一種。

うは—［上］(接頭) 或語に冠して「うへ」「はじめ」などの意を表はす。「—ずみ」。

うば(名) ㊀おほば。祖母。㊁老いたる女。らうぢょ。(媼、姥)。㊂めのと。乳母。

うば［豆腐皮］(名) 一種の食品、豆腐の汁に灰汁を入れ、これを煮て、上に生じたる薄皮を採りて乾したるもの。ゆば。

うば-あいさ［姥秋沙］(名) 【動】あきさの一種、目の上に黑線あり。

〔う-ばい［烏梅］(名) 乾かしたる梅の實、染料或は藥料に供せらる。

ウバイ［優婆夷］(名) (梵語 Upasika)佛道に入りたる在家の女、優婆塞の對。(信士女)。

うは-うす［上臼］(名) 挽臼の上の方の石。

うは-うは［上上］(名、副) 氣の逆上して、落ちつかぬさまにいふ語。

廿うは-おそひ［上襲］(名) 中の着物をよごさぬためにきるおほひのうはぎ。

うは-おび［上帶］(名) 鎧の上にしむる帶。

うは-おほひ［上覆］(名) 物の上にかけて、其物をおほふもの。うはっぱり。(外被)。

うは-がき［上書］(名) 書狀・はこ・書物などの外面に書く文字。

うは-かすみ［上霞］(名) 薄くたなびきて見ゆるかすみ。

うばがね-さう(名) 【植】「うばがねもち」に同じ。

うばがね-もち(名) 【植】紫金牛(ヤブカウジ)科に屬する灌木、莖細く、長さ三四尺、實圓し。(杜莖山)。

うは-かは［上皮］(名) ㊀皮の上にある皮、あらかは。㊁上のおほひ。㊂うはべ。そとがは。

うは-かは［上側］(名) へうめん。うはつら。

うはがひ ウハガヒ[上交](名) うはがへ。うはまへ。
うばがひ ウバガヒ[姥貝](名) 【動】あかゞひの一種。肉は食用に供せらる。多く常陸より產出す。
うはがへ ウハガヘ[上換](名) 「うはつぱり」に同じ。
うはがみ ウハガミ[上紙](名) 香匣などのへうぐ。
(うはき)ウハキ[浮氣](名) うつりやすき氣性。
うはぐすり ウハグスリ[上藥](名) 陶器の上にぬり、燒きてつやを出す藥。つやぐすり。(釉)。
うはぎ ウハギ[上着](名) 表面に着る服。(表着、上衣)。
うはぎ (名) 【植】よめなの古名。
(うはきもの)ウハキモノ[浮氣者](名) 心のうつりやすき人。
うはぐむ (自,ま四) 呆(ボ)る。(惘)。
うはぐみ [惘](名) うはぐむこと。
うはこと ウハコト[譫言](名) ❶熱病などに罹り、心混亂して、あるにもあらぬ言をいふこと。❷事情をわきまへぬ放言を罵りていふ語。
うばぐち ウバグチ[姥口](名) 老女の口の如くに、物の姿が上よりはさまり、又、器物の口の大なるもの。
うはさ ウハサ[噂](名) ❶世間のいひふらし。ふうぶん。風說。❷其物事につきての談話。はなし。「―をすれば影」
うはざうり ウハザウリ[上草履](名) 屋(ヤ)下又は樓などに履(ハ)く草履。
うばざき ウバザキ[姥鷺](名) 【動】涉禽類中鷸科に屬する鳥。嘴長くして角狀なり。面部は羽毛を生ぜずして稞出せるを常とす。
うばざくら ウバザクラ[姥櫻](名) ❶【植】さくらの變種。花は八重、蕚は大なり。❷年よりたる女。
うはざし ウハザシ[上差](名) ❶古昔、えびらの左の方にさし二筋の矢。鏑矢(カブラヤ)又は雁股(カリマタ)なるを規定とせり。❷直垂(ヒタタレ)、狩衣(カリギヌ)の袖などに、丸打、組緒などにてほどこすかざりぬひ。(上刺)。

うはさしぶくろ ウハサシブクロ[上刺袋](名) 古昔、人の出て行くとき、衣服其他の翠具を入れて從者にかつがせたる袋。破れざる様に、縫にて其上をさしたり。

[うはさしぶくろ]

うばざめ ウバザメ[姥鮫](名) 【動】横口類中ねずみざめ科に屬する魚。鱗は延長し、齒は微小にして多く、皆圓錐狀にして尖頭なし。前脊鰭は大にして胸腹兩鰭の間に對す。體長六七尋、海洋を横行し、他の魚群を襲ひ、時には人類を犯すことあり。うばぶか。
うはしき ウハシキ[上敷](名) ❶敷の上に敷く布。くらしき。
うばしぎ ウバシギ[姥鷸](名) 【動】しぎの一種。全身は淡灰紫色にして黑斑あり。
うはしる ウハシル[上汁](名) うはずみ。
うはすべり ウハスベリ[上滑](名) うはべ〳〵して物事に注意のたらぬこと。
うはずみ ウハズミ[上澄](名) 流動物の上方のすみたる部分。うはみづ。
(うはずる)ウハズル[上擦](自,ら四) ❶かろ〴〵しく浮くやうになる。「調子が―」❷音のみ殺(貴)らしくして心浮薄なり。

[うばしぎ]

ウバソク[優婆塞](名) (梵語 Upasaka)俗家にありて、佛門に入りたる男子の稱。優婆夷の對。(信士男)。
うばたま[烏羽玉](名) 一種の菓子。餡を包みたるぎうひの上に砂糖をかけたるもの。
うばたまの[烏羽玉](枕) 「ぬばたまの」に同じ。
うはちどり ウハチドリ[上千鳥](名) 【動】「みやこどり」の一名。
うはづく ウハヅク[上付](自,か四) うはきになる。うはうはす。
うはづつみ ウハヅツミ[上包](名) 物の上のおほひ。うはおほひ。
うはつぱり ウハツパリ[上張](名) 衣の汚るゝを防ぐために、其上に被ひ着る衣服。
うはつら ウハツラ[上面](名) うはべ。うはかは。へうめん。
(うはて)ウハテ[上手](名) ❶上の方。❷風の吹き來る方。かざかみ。❸技藝智力などの優りたること。―ずかし[上手透](名) 相撲の四十八手の一、敵の腕をだきこみ、頭を敵の胸にあてゝひねること。―なげ[上手投](名) 相撲の四十八手の一、うはてより敵の廻しのみつをとり、身をひねりながらなげうつこと。
(うはてうし)ウハテウシ[上調子](名) ❶ものしかめてうきたること。❷性質浮薄なること。音聲のみ巧みにて其實無きこと。
うはでうし [上調子](名) 「うはてうし」に同じ。
うはなみ ウハナミ[上波](名) 水面にたつ波。
うはなり ウハナリ[後妻](名) 後に娶れるつま。こうさい。―うち[後妻打](名) 古昔、夫が妻を離縁して、直に後妻を迎へたるとき、先妻が親族どもと語共に、後妻の家をおそひしこと。
うはに ウハニ[上荷](名) ❶馬の上に付くる荷。❷運送する荷物の上部のもの。―ぶね[上荷船](名) 埠頭(フトウ)に着くときに、荷物のみを積みて岸につくる小舟。はしけぶね。
うはぬり ウハヌリ[上塗](名) ❶中ぬりしたる壁の上に更に土をぬること。❷物事のある上に更に添へ加ふること。「恥の―」

うはのそら ウハノソラ[上空](名) うちやうてん。
うはのり ウハノリ[上乘](名) 舟につみたる荷につき添ひて、其荷を守りて送ること。又、其人。
うはば ウハバ[上端](名) 上になれる餘分の端數。一圓十五錢といへば、十五錢は一圓のうはばなり。
うはば ウハバ[上齒](名) 上の齒ぐきにつきたる齒。
うはば ウハバ[上葉](名) 上方にある木葉。
うはばげ ウハバゲ[上剝](名) ぬりものなどの上のはげたること。
うはばび ウハバビ[上澄](名) 表面に出でゝ漂(タダヨ)ひゐること。
うはばみ ウハバミ[蟒](名) 【動】(へび(上蛇)の轉なりといふ)(一)蛇類中闊口類に屬する爬蟲。印度に產す。形大にして口を極大に開く。肛門の兩側に後肢の痕跡あり、無毒なり。(二)巨大なる蛇の汎稱。をろち。だいじや。(巨蛇)。
うはひ ウハヒ[上氐](名) 上部のはれ。
うはひ ウハヒ[上翳](名) 一種の眼病。そこひの對。(外障眼)。
(うはひげ)ウハヒゲ[上髭](名) 唇の上にあるひげ。
うばふ ウバフ[奪](他,は四) ❶掠(カス)め取る。ふんだくる。❷ぬすみとる。❸沒收す。剝奪す。とりあぐ。「官を―」❹君を除きて其位に即く。(篡)。❺心氣を失せしむ。「膽を―」
うばぶか ウバブカ[姥鱶](名) 【動】「うばざめ」に同じ。
うはぶち ウハブチ[上扶持](名) 扶持に同じ。
うはぶみ ウハブミ[上文](名) うはがき。うはぐゝみ。
うはべ ウハベ[上邊](名) ❶表面になりたる所。おもて。へうめん。ぐわいめん。❷あらは。みえ。
うばほほ ウバホホ[姥頰](名) 具足に屬する頰あての一種。
うはまへ ウハマヘ[上前](名) ❶器物などの前を合はせて、其衣の方になる部分。❸取り次ぐ代金などの幾分。「―をはねる」
うはみ ウハミ[溢](名) 古昔、袴の上に着したる一種の裳(モ)の如きもの。
うはみぞざくら ウハミゾザクラ(名) 【植】櫻の一種。核は平滑なり。木材は細工物の用に供せらる。
うはみづ ウハミヅ[上水](名) うはずみの水。―ざくら[上水櫻](名) 【植】「うはみぞざくら」に同じ。
うはむき ウハムキ[上向](名) ❶上に向ひたること。あをむき。❷うはべ。ぐわいけん。
うはむしろ ウハムシロ[上蓆](名) ねござの上に敷くむしろ。
うはめ ウハメ[上目](名) ❶瞳(ヒトミ)を上へ向けたる目。「―に人を見る」。むかふめの對。❷秤竿に記したる點を標準とする見方。
うばめ ウバメ[姥目](名) 【植】殼斗科に屬する木。葉は凋くして鋸齒を有す。其の切黄色の花を垂れひらく。―がし[姥目樫](名) 【植】「うばめ」に同じ。―がしは[姥目柏](名) 【植】「うばめ」に同じ。
うはも ウハモ[上裳](名) 裳(モ)の上に更に着くる裳。
うはもり ウハモリ[上盛](名) きはめて上になるべきもの。第一流。
うはやく ウハヤク[上役](名) 上に立つ役人。
うばら[茨](名) 【植】「いばら」に同じ。―ぐつわ[茨轡](名) 唐鞍を用ふるときの馬の轡。
うはゑ ウハヱ[上繪](名) 布帛などの染色の上を、更に繪の具にて畫き添へたる繪。「半襟の―」。又、其人。―かき[上繪書](名) うはゑを描くこと。―や[上繪屋](名) 上繪をする家。
うはを ウハヲ[後夫](名) のちのをつと。うはなりの對。

(うはんまへ)ウハンマヘ[上前](名) 「うはまへ」の訛。
うひ ウヒ[初](名) はじめ。「―の子もち」。
うひ― [初](接頭) 或語に冠してはじめての意を表はす。「―產」
うひうひし ウヒウヒシ[初初](形,二) はじめてらし。初心らし。物なれぬさまなり。
うひかうぶり ウヒカウブリ[初冠](名) げんぷくして始めて冠を着くること。
うひご ウヒゴ[初子](名) 始めて生まれたる子。うひざんの子。(初生子)。
うひざん ウヒザン[初產](名) 始めての出產。はつざん。
うひだち ウヒダチ[初立](名) うひでたち。
うひだつ ウヒダツ[初立](自,た四) 始めて起つ。
うひたび ウヒタビ[初旅](名) 始めての旅行。はつたび。
うびたひのむま ウビタヒノムマ[兎額馬](名) 額白き馬。
うひぢん ウヒヂン[初陣](名) 始めて戰場に出づること。「若武者の―」
うひまご ウヒマゴ[初孫](名) はじめてのまご。
うひまなび ウヒマナビ[初學](名) ❶學問を修めはじむること。❷未熟のがくもん。あさがく。
うひやうゑ ウヒヤウヱ[右兵衛](名) 右兵衛府の長官。
うひやうゑのかみ ウヒヤウヱノカミ[右兵衛督](名) うひやうゑふの長官。
うひやうゑふ ウヒヤウヱフ[右兵衛府](名) 衛府の一。兵衛を檢校し、車駕の出入を主(ツカサド)りし府。
うふ ウフ[右府](名) 右大臣の異稱。
(うぶ)ウブ[初](名) ❶うひ〳〵しきこと。❷婦人の初心なること。未だ男子に接せざること。「―のきむすめ」。
うぶがみ ウブガミ[胎髮](名) うぶげ。
うぶがみ ウブガミ[產神](名) うぶすながみ。

うぶぎ［産衣］(名) 生まれたる子に、始めて着する衣もの。
うぶぎぬ［産衣］(名)「うぶぎ」に同じ。
うぶげ［産毛］(名) 子の生まれたるときはへある髮。［産髮］。
うぶごゑ［産聲］(名) 子の生まれて始めて出す聲。
うぶすな［産土］(名) ㊀人の生まれたる本土。㊁「うぶすながみ」の略言。――がみ［産土神］(名) うぶすなを鎭護する神。――まゐり［産土神詣］(名) 子生まれて百ケ日にあたる日、うぶすなの神に參詣すること。みやまゐり。
うぶち［産血］(名) 婦人が小兒を生むときに出づる血。
うぶね［鵜舟］(名) 鵜がはにつかふ小舟。うかひぶね。
うぶのかみ［産神］(名)「むすぶのかみ」に同じ。
うぶめ［産女］(名)（生女の義）㊀はらみをんな。㊁さんぷ。産をする女。――どり［産女鳥］(名) 想像の鳥、國(ｶﾞﾝ)天のもの、又は形に似て其聲小兒の泣き聲の如しといふ。
うぶや［産屋］(名) 古昔、子を産むために、新につくりし家。さんおく。
うぶゆ［産湯］(名) うまれたる子に、はじめて入浴せしめ、けがれを洗ひおとす湯。［洗兒湯］。
うぶやしなひ［産養］(名) 古昔、子を生みてより三日目及五日目の夜などに、いはひをなしし事。
うぶゐ［産井］(名) うぶゆの水をくみとる井戸。
うぶんぼく［烏文木］(名)［植］「こくたん」の唐名。
うへ［上］(名) ㊀高き所。高き位。㊁へうめん。うはつら。㊂ぬたぐき、かしら。㊃かたはら。ほとり。㊄もて。さき。㊅すぐれたること。たふときこと。㊆加ふること。そふること。「其一」。㊇至尊。主上。㊈朝廷。宮禁。㊉將軍。公方。⑪貴人又は其內室。⑫政府。官廳。⑬仰ぎたつとぶもの、又は尊稱。めうへ。⑭貴人の稱號に添へ用ふる語。「父一」「兄一」。⑮其物事につきていふこと。「身の一話」。
うへ［筌］(名) 魚をとる道具、ほそき竹をあみてつくりたるもの。(筌)。
うべ (名)［植］「むべ」の古名。
うべ［宜］(副) 眞に然ること。さもあるべきこと。むべ。――うべし［宜宜］(形二) ㊀もっともらし。㊁重々しく、おごそかなり。
うへさま［上樣］(名) 德川時代に、其將軍をさしていひし語。
うへだ［上田］(名) 高き田。「住吉の岸の一に」。
うへだじま［上田縞］(名) 信濃國上田地方より産出する紬縞。
うへつかた［上方］(名) 身分貴き人。(貴戚。貴顯)
うへつぼね［上局］(名) 殿上の局の稱。
うべなふ［諾］(他、は四) うけごむ。
うへなし［上無］(形二) ㊀それより上のものなし。それにこゆるものなし。㊁きりなし。かぎりなし。
うべなむべなう［諾諾］(他、は四) うべなふ。
うへのきぬ［袍］(名)
うへのはかま［表袴］(名) 東帶のとき上につくる袴。地質は綾、表は白色にして、裏は赤色、表に模樣あるは、位高き人の着しもの。

［うへのはかま］

うへびと［上人］(名) てんじやうびと。
うへぶし［上臥］(名) 禁中のとのゐ。
うへわらは［上童］(名) 殿上につかはるる女子。
うぼく［烏木］(名)［植］「うぶんぼく」に同じ。
ウボンさい［盂盆齋］(名)「ウラボン」の一名。
うま［馬］(名) ㊀［動］奇蹄類に屬する大形の獸、第三趾中にて中指のみ發達し、指趾の半端は蹄を成す。これを以て地を踏む。鬣あり、顏齒は上下各六枚を通例とし、それ以上は其老少を知る。從來高さ四尺を以て定とす。はやく、主要なる家畜の一なり。物をはこび車をひく等用最も多し。㊁［數］六の稱の名。㊂將棊の駒の名。けいま。㊃遊女屋などにて、遊興費の支拂不足なる嫖客についてゆき、其不足額を受取るもの。
うま［午］(名) ㊀十二支の一、第七位。㊁巳と未との間。南の方。㊂古昔の時刻の名、今の晝の十二時。
うま―［馬］［接頭］ 或語に冠して其種族の中にて大なるものを表はす。「一びる」「一ぜり」。
うま―［甘］［接頭］ 或語に冠して味うまき意を表はす。「一ざけ」。
うまあぶ［馬虻］(名)［動］「うまばへ」に同じ。
うまい［熟寐］(名) よくねること。こゝろよくねむること。(熟睡)
うまいくさ［馬軍］(名) 騎馬兵のたゝかひ。
うまいしや［馬醫者］(名) 馬の病をなほす醫師。(馬醫)

うまいたる［甘汁］(名) ㊀味よき汁。㊁他人の勞によりて受くる利益。
うまうと［羽毛］(名) 鳥のはねと毛と、即ち鳥の皮膚に生じて皮膚を被へる表皮の化成物。羽は中央に軸ありて下部は皮膚に入り上部は羽枝分支し、其末端は鉤ありて相絡連す。毛と共に體溫の發散を防ぐもの。
うまうど［馬獨活］(名)［植］「えしやうど」に同じ。
うまうま［甘甘］(名)（小兒の語）。
うまおひ［馬追］(名) ㊀馬をつかふこと。又、其人。㊁［動］「うまおひむし」の略言。――むし［馬追蟲］(名)［動］直翅類中螽蟖科に屬する小蟲。夏日燈火を慕ひて家屋に來り、特有の鳴聲を發す。形小なり。
うまかけ［馬駈］(名) けいば。
うまかた［馬方］(名) 馱馬を與くを職業とする者。まご。ばくらう。
うまかひ［馬飼］(名) 馬をかふ人。
うまがほ［馬顏］(名) 長き顏を嘲りていふ語。
うまき［鵜卷］(名) 鵜の多くあつまりて、魚をとりまき漸次に岸へもしよすること。
うまぎぬ［馬衣］(名) 馬にきする絡物。多くは、紺又は萌黃の木綿に、其家の定紋を染めぬきたるもの。(馬衣)
うまぐし［馬櫛］(名) 馬の毛をすく櫛。うまはけ。
うまぐすし［馬醫］(名) うまいしや。ばい。
うまぐは［馬鍬］(名) 農具の一、下部の横木に數個の齒ありて、田を掻き返したる後に、地を掻きならすに用ふ。まぐは。
うまげた［馬下駄］(名)「こまげた」に同じ。
うまげむり［馬烟］(名) 馬弃り地なりて起す塵ほこり。(馬塵)
うまご［孫］(名) まご。
うまごやし［馬肥］(名)［植］荳科に屬する草。莖葉は蔓狀にして、花梗は短く少數の黃花を生ず。托葉は細裂し、果實は螺旋狀にして毛狀の突起を具す。肥料及馬の食料に供せらる。(首蓿。迦枝革)
うまこりの［美織］(枕)（うまくおりの義）「しあと」やに冠らする詞。
うまさくり (名) どろなどの中にのこる馬のあと。
うまざけ［甘酒］(名) うまき酒。
うまさし［馬差］(名) 宿驛にて人馬を差圖する者。(馬宰)
うまし［美］(形二) ㊀甘し、美し。こゝろよし。㊁味好し。㊂たくみなり。おもしろし。
うまいさる 他人の仕事によりて利益を得る者。
うまじるし［馬標］(名) 古昔の武具の一、大將の馬の側にたて、軍中の目表しとしたるもの。
うまずげ［馬菅］(名)［植］莎草科の草本。葉は細長く、薬には藥稍を具ふ、穗は大なり。
うまずめ［不産女］(名) 子をうまぬ女。
うまぜみ［馬蟬］(名)［動］「くまぜみ」に同じ。
うまぜり［馬芹］(名)［植］「やまぜり」に同じ。
うまぞひ［馬添］(名) 馬に乘りたる人のともびと、馬のくちとり。うまつき。(馬丁)
うまだし［馬出］(名) 城門外に更に一塀をなす處。(出城)
うまたて［馬立］(名) うまつなぎ。(閑)
うまだらひ［馬盥］(名) ばだらひ。
うまつき［馬付］(名) うまぞひ。
うまつぎ［馬繼］(名) 道中にて馬をつぎかふる所。うまや。(驛)
うまつなぎ［馬繋］(名) 馬をつなぐもの。うまたて。とつなぎ。――ば［馬繋場］(名) 馬を繋ぐところ。
うまづら［馬面］(名)「うまがほ」に同じ。
うまに［馬荷］(名) 馬につくる荷物。
うまに［旨煮］(名) 一種の料理、肉と野菜類とを味醂・砂糖・醬油・鰹節などにて、風味よく煮つけたるもの。
うまぬすびと［馬盜人］(名) ㊀馬をぬすむ賊。㊁［動］「あかめだか」の一名。
うまのあし［馬脚］(名) 下等の役者を嘲りていふ語。
うまのかみ［右馬頭］(名) 古昔の官名、みぎのうまのつかさの長官、馬の飼養等をつかさどりしもの。
うまのかみ［馬頭］(名) 古昔、うまのつかさの長官、又、皇太子の馬をつかさどりしもの、名。
うまのきばね［馬牙骨］(名) 馬の下あごの稱。
うまのくぼかひ［馬陰貝］(名)［動］「こやすがひ」に同じ。
うまのす［馬尾］(名) 馬の尾の毛。
うまのすずくさ［馬鈴草］(名)［植］馬兜鈴科に屬する上昇本草。鈍頭長心形の全邊葉と、上部黑紫色にして下部綠色なる萼を有す。花は不整齊なり。(馬兜鈴)
うまのたま［馬玉］(名) 馬の腹中に生ずる石塊の如きもの、鼠色又は茶色にして、これを斷ち截れば渦の模樣あり。「ヘイサラバサラ」「ドウサラバサラ」。せきふん。(馬墨)

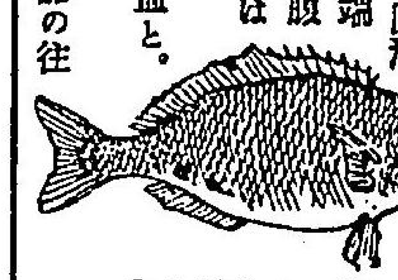
+うま-の-つかさ[馬寮](名) 古昔、兵衛府に屬し、馬の飼養其他馬に關係したる一切の事をつかさどりし寮。めれう。
+うま-の-つめ[馬爪](名) ばづ。
+うま-の-はなむけ[餞別](名) 旅に行く人を送りて、其人に物をおくること。古昔は、其人の乘れる馬の鼻に向けて、物をおくりしよりいふ。はなむけ。
〔うま-の-ほね[馬骨](名) 素性不分明なる人を嘲りていふ語。
〔うま-の-みみ[馬耳](名) 人に意見などせられても、更にとりあはぬこと。――にかぜ 馬は耳に風を受くとも感ぜぬを、人の意見に少しも感ぜざるにたとへいふ。――にねんぶつ 馬は念佛を聞くとも更に感ぜぬを、人の意見に少しも感ぜざるにたとへいふ。
うま-の-め[馬目](名) 【植】泡吹科に屬する灌木。本、綠色の枝を有し、花瓣は黃色にして五個あり、雄蕊は五個ありて皆完全なり。觀賞用として栽培せらる。
うま-のり[馬乘](名) ㊀馬に乘ること。又、其人。㊁馬に乘ることにたくみなる者。㊂馬に乘る如きさまに、物にまたがること。――ぞめ[馬乘初](名) 新年などに、始めて乘馬すること。ひめはじめ。――ばおり[馬乘羽織](名) 馬に乘るとき着する羽織。多くは、うしろをぶっさきにしたるもの。――ばかま[馬乘袴](名) 馬に乘るときの袴。十番の袴よりはまち高く裾ひろきもの。
うま-ば[馬場](名) ㊀馬に乘る場所。ばゝ。㊁良馬の出づる土地。「奥州は日本の―」。
+うま-はたけ[馬刷](名) 馬の毛をはくに用ふる刷毛。うまぐし。

+うまは-る[らりるれれ][殖](自、ら四) ふえてひろがる。はんしよくす。
+うま-びと[美人](名) 德高き人。位ある人。身分いやしからざる人。(君子、縉紳)。
うま-びる[馬蛭](名) 【動】環蟲類中蛭類に屬する蠕形動物。池沼溪流等に產す。體軀大にして一見恐怖を起すが如くなれど、動物の血液を吸ふものにあらず、植物質を食として生活す。
+うま-ふ[はひふふへ][殖](他、は四) はんしよくせしむ。ふやす。多くす。
うま-ぶね[馬槽](名) ㊀秣(マグサ)を入るゝ桶。かひをけ。㊁大いなる桶。
+うま-ぶき[馬蕗](名) 【植】「ごばう」の古名。
うま-へん[馬偏](名) 漢字の偏の名。駒・驅・騷などの字の左方にある字の稱。
うま-まはり[馬廻](名) 昔時、武家にて、主の馬のまはりにつき添ひし武士の稱。
うま-や[馬屋](名) ㊀馬を飼ひ置く小屋。(廐)。㊁旅路の便利をはかり馬又は人足などを備へ置きて、旅客の求めに應じつぎたてをなしゝ所。しゆく。うまつぎ。(驛)。――ごえ[馬屋肥](名) 肥料の一種。家畜を飼ひ置く假屋の中に、たまりたる糞尿と布藁との相混じたるもの、多くは先づ堆積して腐熟せしめて使用す。――ぢ[驛路](名) うまやのある所。えきろ。(驛路)。
+うま-ゆみ[馬弓](名) 馬に乘りて弓を射ること。きしや。
うま-る[らりるるれれ][埋](自、ら四) うもる。うづもる。
うま-る[るれるるるれれよ][生](自、ら下二) 子、母の腹より出づ。出生す。(誕)。
うまれ[生](名) ㊀生まるゝこと。たんじやう。㊁生まれ出でし處。生國。生地。㊂うぢ。そだち。すじやう。

うまれ-あは-す[さしすすせせ][生合](自、さ四) ㊀世を同じうして生まる。㊁其時に生れ出づ。
(うま-れう[右馬寮](名) 「うまのつかさ」に同じ。
うまれ-がはり[生變](名) 生まれかはること。又、生まれかはりたるもの。再生。(後身)。
うまれ-かは-る[らりるるれれ][生變](自、ら四) 死にたるものゝこんぱく、再び他のものに生を變へて此世に出現す。
うまれ-こきやう[生故郷](名) 生地。ふるさと。
うまれ-つき[生付](名) 生まれつくこと。生まれつきたる性質。しやうとく。せいしつ。てんしつ。(生得、天資)。
うまれ-つ-く[かきくくけけ][生付](自、か四) おのづと其性に具はる。うまれながら身に受く。
うまれ-び[生日](名) 生まれたる日。たんじやうび。
〔うまれる[生](自) 「うまる」の訛。
うみ[海](名) ㊀地球上陸にあらざる部分の潮水をたゝへたるところの專稱。㊁湖水など大水をたゝへたる所にもいふ。㊂水のたゝへたる所にもたとへいふ。「硯の―」。㊃物事のたゝへあつまりたる所にも假りいふ。「許下は、人物の―」。
うみ[膿](名) はれもの又はきず其他疾病によりて、皮膚筋肉の腐亂して出づる汁。うみしる。
うみ[生](名) 生むこと。生みたること。「―の親」。
うみ-うさぎ[海兎](名) 「あめふらし」(雨虎)の(い)に同じ。
うみ-うし[海牛](名) 【動】「うみうさぎ」に同じ。
うみ-うそ[海獺](名) 【動】「ラッコ」の一名。
〔うみ-うなぎ[海鰻](名) 【動】「あなご」の一名、(九州地方の方言)。
うみ-うま[海馬](名) 【動】「たつのおとしご」に同じ。

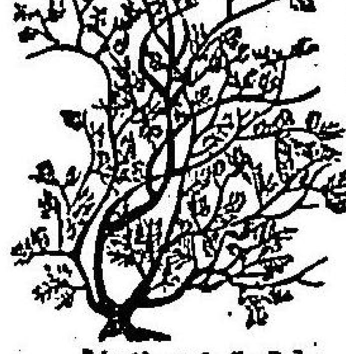
うみ-おと-す[さしすすせせ][產落](他、さ四) 子を生む。ぶんべんす。
+うみ-が[海所](名) (「が」は、所の意) 海の邊。海のあたり。
+うみ-が-つき[產月](名) うみづき。りんげつ。「―もすぎ給ひて」。
うみ-がめ[海龜](名) 【動】龜鼈類に屬する爬蟲。長さ七尺に達す。赤褐色にして甲紋十五あり、我國近海に產す。しやうがくばう。(蠵龜)。
うみ-がも[海鳧](名) 【動】「うがも」に同じ。
うみ-がや[海萱](名) 【植】「をぎ」に同じ。
うみ-がらす[海鴉](名) 【動】(い)「いがひ」の一名。(ろ)「ちぬ」の一名。(安藝の方言)。
うみ-ぎし[海岸](名) うみに沿ひたるきし。
うみ-ぎは[海際](名) うみべ。かいへん。
うみ-くちなは[海蛇](名) 【動】蛇類中溝牙類に屬する爬蟲。有毒にして牙の前面に縱溝を有し、尾は側扁にして游泳に適す。南海に產し、琉球諸島中殊に永良布島に多く產するより「えらぶうなぎ」ともいふ。
うみ-ごめ[海米](名) 【植】「こうぼふむぎ」に同じ。
うみ-ざうめん[海索麪](名) 【植】紅色藻門に屬する海草。形さうめんの如く細長く、うるはしき紅色を帶ぶ。鹽漬けにし又は乾して食すべし。
+うみ-さち[海幸](名) すなどりの利あること。
うみ-しか[海鹿](名) 【動】「あめふらし」に同じ。
うみ-しじみ[海蜆](名) 【動】蜆(シジミ)の一種、海に產す、介殼は黑褐又は茶褐なり。
うみ-しる[膿汁](名) うみ。のうしる。
うみ-すぎ[海杉](名) 【動】珊瑚蟲類中八放線類に屬する腔腸動物。八觸手を有し、群體をなして生活し羽狀に生長す。共有肉の中軸に角質の骨軸を生じ、周圍に石灰質の皮を成す。一見植物かと疑はる。海底の岩礁等に着生す。うみひば。

うみ-すずき[海鱸](名) 【動】海に產するすゞきの稱。かはすゞきの對。
うみ-すずめ[海雀](名) 【動】(い)固顎類中硬皮類に屬する魚。海產にして堅牢なる鱗甲を被り、頭に二角を有す。すゞめふぐ。(ろ)「かはごふぐ」の一名。(阿波の方言)。(は)水禽類中短翼類に屬する鳥。嘴は堅硬にして尖銳なり、兩翼短小にして脚は殆ど尾端にあり、體大にして巧みに游泳し、又、水中に潛伏す。

[うみすずめ(い)]
うみ-すひ-いし[膿吸石](名) 一種の小石、圓くひらたきもの。膿をすふ特效あり、龍骨の類。
うみ-そ[績麻](名) うみたる麻いと。
うみ-たけ[海竹](名) 【動】九州邊の泥海に生ずる一種の貝。殼はどぶがひに似て、肉を上に出だす、肉は長さ一尺許にして色黑し、腸を捨てゝ食用に供し、又、鹽漬けにして貯へおく。
うみ-だ-す[さしすすせせ][生出](名) ㊀胎兒を產出す。㊁かせぎて金錢を增殖す。
うみ-たなご[海鰤](名) 【動】硬鰭類中うみたなご科に屬する魚。體は楕圓又は卵圓形にして側扁し、鱗は小にして圓形なり、頭部短く、口小にして吻端にあり、背部は鋼青色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは一尺許に達する近海魚なり。

[うみたなご]
うみ-ち[膿血](名) ㊀膿と血と。㊁血の混じたる膿汁。
うみ-ぢ[海路](名) 海上の船の往來道。ふなぢ。

うみ-づき[產月](名) 姙娠してより約十ヶ月目にあたる月、即ち、胎兒の一定の發達を遂げて、やがて產出すべき當月。(臨月)。
うみ-つ-く[けけくくるくれけよ][產付](他、か下二) ㊀生みて物に附着せしむ。㊁天性其性を受けしむ。生みて其質を得しむ。「愚鈍に―」。(稟賦)。
+うみ-つ-ぢ[海路](名) うみぢ。海路。
うみ-づら[海面](名) うみのおもて。かいめん。
うみ-て[海手](名) 海の方。
うみ-てふ[海蝶](名) 【動】「とびのうを」に同じ。
うみ-どらがめ(名) 【動】「かぶとがに」に同じ。
うみ-どぢやう[海泥鰌](名) 【動】「ぎんぽう」に同じ。
+うみ-の-おきな[海翁](名) 【動】「えび」の異稱。「世の人は、―と、いふめれど」。
うみ-の-おや[生親](名) おのれを生みたる父母。かりのおやの對。
うみ-の-こ[生子](名) おのれが生みたる子。かりの子の對。
うみ-の-ちち[生父](名) おのれを生みたる父。かりの父の對。
うみ-の-はは[生母](名) おのれを生みたる母。かりの母の對。
うみ-の-ふすま[海衾](名) 海のくもりたるさまを、衾にたとへいふ語。
+うみ-の-みやこ[海都](名) 龍宮。
〔うみ-ばうず[海坊主](名) ㊀【動】「しやうがくばう」の一名。(筑前の方言)。㊁海上に現はるといふ變化(ヘンゲ)。
うみ-ばた[海端](名) うみべ。(海畔)。
うみ-ひば[海檜葉](名) 【動】「うみすぎ」に同じ。
うみ-べ[海邊](名) 海のほとり。うみばた。

うみ-へちま[海絲瓜](名)【動】一種の海產動物、我國沿海に多く生す。有生の時は淡紫色を帶ぶれど、乾燥したる骨骼は淡黄色にして強直なり。かいめん。
うみ-へび[海蛇](名)【動】「うみくちなは」に同じ。
うみ-ほほづき[海酸漿](名)赤辛螺(アカニシ)などの卵莢。形は長刀(ナギナタ)又は巾着に似る。中の液を出だし孔をあけて、女子供の吹き鳴らすもの。
うみ-ホッス[海拂子](名)【動】「ホッスがひ」の一名。
うみ-まつ[海松](名)㊀海邊にある松。㊁【動】うみすぎの一種、其角質骨骼は黑色にして、裝飾具に製せらる。くろさんご。


[(二)うみまつ]

うみ-やなぎ[海柳](名)【植】「あまも」に同じ。
うみ-わた[海綿](名)【動】「かいめん」に同じ。
うみ-を[績苧](名)うみたる麻。
うみ-をそ[海獺](名)【動】「あしか」に同じ。
(う-む[有無](名)㊀あるとなきと。㊁【佛】有に執着すると無に執着すると。㊂いやとおうと。然ると然らざると。――を いはせず 他を押しつけて事をなさしむるにいふ。
う・む[倦](自、ま四)㊀あく。たいくつす。いやになる。㊁力拔る。氣弱る。つかる。「國人内に―」。
う・む[熟](自、ま四)㊀果物充分に熟す。じゆくす。㊁腫物熟してうみ出づ。つゆ。
う・む[生](他、ま四)㊀子を產す。ぶんべんす。㊁增殖す。ふやす。
う・む[績](他、ま四)麻又は苧の類を、細くつむぎて長くのばす。

う・む(他、ま下二)㊀埋む。㊁水を混じて、湯をぬるくす。
‡うむが・し(形、二)「おむかし」に同じ。
‡うむかし・む(他、ま四)「おむかしむ」に同じ。
うむ-が-つき[産月](名)うみづき。りんげつ。
‡うむぎ(名)蛤の類の古名。「―をなますとして」。
うめ[梅](名)【植】薔薇科に屬する木、花は春に開く、五瓣又は六瓣、香甚だ高し、色は白・紅・薄紅・えぼりなど種々あり、葉は楕圓形或は卵形にして尖頭を有し、果實の肉は核に密着す、果實は食用に木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。
うめ-あは・す[埋合](他、さ下二)㊀これとかれとを平均す。㊁つくなふ。
うめ-あはせ[埋合](名)うめあはすこと。
(うめ-あはせる[埋合](他)「うめあはす」の訛。
うめ-うつぎ[梅楊櫨](名)【植】うつぎの一種、蘂短く、花うめに似る。
うめ-が-え[梅枝](名)梅の枝。――でんぶ[梅枝田夫](名)刻みするめを酒と醬油とにて煮て、これに山椒の粉をふりかけたるもの。
うめ-が-か[梅香](名)うめの花のかをり。
うめ-がさね[梅襲](名)かさねの色目、表は濃き紅、裏は紅梅なるもの。
うめ-がへし[梅返](名)元祿の頃行はれし染色、紅梅色に染め、主に、羽織の裏などに用ひたり。
うめ-き[埋木](名)板などの間隙に木をうむること。――ざいく[埋木細工](名)うめきにて、人物花鳥等いろいろの形をこしらへ出だす細工。又、其細工物。よせぎざいく。
うめ・く[呻](自、か四)㊀苦しさのあまりにうなる。わめく。㊁をめきさけぶ。をめく。

(うめ-くさ[埋草](名)かけたる部分又はあきたる所を滿さんための物。「時間の―」。「借金の―」。
うめ-ず[梅酢](名)梅の實を鹽漬けとしたる汁、多くは紫蘇の葉を加ふ、鎖とぎ其他金屬の細工などに用ふ。(梅漿)。
うめ-ぞめ[梅染](名)㊀かさねの色目、表は白く、裏は濃き蘇芳なるもの。㊁梅の木の皮の汁にて染めたる色、茶色に似る。
うめ-た・つ[埋立](他、た下二)うめたてをなす。
うめ-たて[埋立](名)㊀埋(ウヅ)めふさぐこと。㊁堀を埋めて陸となすこと。――こうじ[埋立工事](名)海を埋めて陸となす工事。――しんち[埋立新地](名)うめたてによりて出來たる場所。――ち[埋立地](名)うめたて、出來たる地。
(うめたてる[埋立](他)「うめたつ」の訛。
‡うめちや-ぢよらう[埋茶女郎](名)昔、吉原にありし下等なる娼妓。
うめ-づけ[梅漬](名)㊀梅の實を鹽漬にしたるもの。㊁うめずに漬くること。又、うめずに漬けたる野菜ものなどの稱。
うめ-どひ[埋樋](名)ふせどひ。うづみひ。(水道)。
うめ-ばたけ[梅圃](名)梅をうゑたる園。うめぞの。(梅花樹)。
うめ-ばち[梅鉢](名)紋所の名、五瓣の梅花を、正面より見たるかたちにゑがけるもの。――さう[梅鉢草](名)【植】「いちりんさう」の一名。
うめ-はつづき[梅初月](名)陰曆十二月の異稱。
うめ-びしほ[梅醬](名)一種の食品、梅の實にて製したるひしほにて、梅干の肉をよくすり、砂糖を混じて味をつけたるもの。(梅酥)。

うめ-ぼし[梅干](名)㊀一種の食品、梅の實を鹽に數日つけおき、これを取り出して、數日間日にさらし、後更に紫蘇の葉を加へたる梅酢に漬けたるもの。(乾梅)。㊁梅干に似たるあめ製の菓子。――ばば[梅干婆](名)皮膚しわよりたる老嫗。
うめ-みぞ[埋溝](名)うめどひ。
うめみ-づき[梅見月](名)(此月に梅よく咲く故、梅を見るべき月との意)陰曆二月の異稱。
うめ-もどき[梅擬](名)【植】冬青(ソヨゴ)科に屬する木、高さ一丈許、夏、淡赤色の五瓣の小花を開く、冬に近づくに從ひ實熟して赤色に變ず。らくさうこう。(落霜紅)。
(うめる[埋](他)「うむ」の訛。
‡うも(名)【植】「さといも」の古名。
うも・る[埋](自、ら下二)うづもる。
うもれ[埋](名)うもること。――ぎ[埋木](名)㊀太古より木の幹の水中又は土中などにうづもれて、稍や化石の如くなれるもの。(陰枋)。㊁世に捨てられて顧るものなき身にたとへいふ語。――ざいく[埋木細工](名)埋木を細工して各種の器具をつくりたるもの頗る雅致あり、仙臺地方の名產とす。
(う-もん[有紋](名)㊀紋のある衣服。㊁儀式正しきこと。
‡うや[禮](名)禮儀。さはふ。ゐや。
(う-や[烏夜](名)やみのよ。やみ。
うや-うや・し[恭](形、二)うやまふ狀にてあり。つゝしむさまなり。いんぎんなり。
(う-やく[烏藥](名)一種の藥品、色は黑く、特異の臭氣あり。(矮脚樟)。
うや・す[飢](他、さ四)空腹にす。うゝるやうにす。(餓)。
うや-な・し[禮無](形、二)不作法なり。れいぎなし。

うやまひ[敬](名)うやまふこと。
うやま・ふ[敬](他、は四)たつとびてゐやを盡くす。つゝしみてつかふ。そんけいす。
うや-むや[有耶無耶](名)あいろの分明ならざるさまにいふ語。
(う-ゆ[飢](自)「うう」の訛。
(う-ゆ[植](他)「うう」の訛。
(う-よ[雨餘](名)雨のはれたる後。
(う-よ[紆餘](名)㊀まがりくねること。㊁まはりどほきこと。
(う-よく[羽翼](名)㊀羽とつばさと。㊁輔佐。たすけ。
(う-よく[右翼](名)中軍の右方にある軍隊。
うら[裏](名)㊀うしろ。はいご。「山の―」。㊁おもての對。うち。なか。ないぶ。りめん。㊂すゑ。はし。㊃こずゑ。(梢頭)。㊄胸中の思ひ。ないえん。(心)。㊅うらうへ。うらはら。㊆衣の内面につくる布帛。㊇一の定理の假說及終結を否定して得たる定理、即ち、元の定理の逆なる對偶なり、「甲が乙なれば丙は丁なり」に對して、「甲が乙ならざれば丙は丁ならず」といふが如きこれなり、元の定理は眞なれど、裏は一般に眞理ならず。――を かへす 同一なる事をかさねてなす。
うら[占](名)物の形又はゐるしなどに依りて、未來の吉凶を豫言豫想すること。うらなひ。
うら[浦](名)㊀海又は湖などの灣曲して陸地へ入りこみたる部分。㊁うみべ。海邊。
うら-いた[裏板](名)㊀やねうらに張り付けたる板。㊁天井。
うら-うち[裏打](名)㊀裏をつけたるきもの。㊁物の裏面に、糊などもて他の薄きものをはりつくること。うらつけ。(裝背)。

うら-うづがひ[裏渦貝](名)【動】にしの一種、大きさ一寸許、底にうづの狀をなす細紋あり。
うら-うへ[裏表](名)㊀うらとおもてと。㊁表裏を異にすること。うらはら。はんたい。
うら-うめ[裏梅](名)紋所の名、梅の花を裏面より見たる形。
うら-うら(名、副)のどか。ほがらか。うらゝか。
うら-えり[裏襟](名)着物の襟の裏に縫ひつくるきれ。
うら-がき[裏書](名)㊀紙の裏に文字を書くこと。㊁卷き物などの裏に書きつくる文章。㊂借金證書の裏に、返濟の金額を受け取りたる旨を記すること。㊃爲替手形等の讓り渡し又は質權設定を證するため、一定の方式に從ひ、其面(必ず裏面と限らず)に其旨を記載すること。――きんし[裏書禁止](名)爲替手形等の發行人若しくは其所持人が、爾後の裏書を禁示する旨を記載すること、かくて該手形等は更に他に讓り渡すことを得ざるものとなる。――にん[裏書人](名)うらがきをなす人。――ゆづりうけにん[裏書讓受人](名)裏書によりて、其債權を他よりゆづりうくる人。――ゆづりわたしにん[裏書讓渡人](名)裏書によりて、其債權を他にゆづりわたしたる人。
うら-か・く[裏缺](自、か四)㊀矢中りて、戎服の裏につきとほる。㊁敵の謀の反對に出づ。
‡うら-が-な・す(他、さ四)心をうきたゝしむ。慰む。
うら-かぜ[浦風](名)浦に吹く風。海濱にたつかぜ。――ぐさ[浦風草](名)【植】「うらおろ」に同じ。
‡うら-かた[占象](名)占にあらはれたる象。

廿うら-がな・し しくしくしき 「心悲」（形、二） 心中にかなしく思ふ。
うら-がね「裏曲」（名） 「うらじやく」に同じ。
うら-がへし エシ 「裏返」（名） うらがへすこと。
うら-がへ・す エス 「裏返」（他、さ四） 裏をおもてにす。てんたうす。ひっくりかへす。
うら-がへ・る エル 「裏反」（自、ら四） ㊀裏と表とかはりあふ。ひっくりかへる。 ㊁味方が敵となる。（反逆）。
うら-が・る 「末枯」（自、ら下二） 草木の「枝・葉枯る。」
うら-がれ「末枯」（名） 草木のうらの枯るゝこと。
うら-き「末木」（名） こずゑ、木梢。
うら-ぎく「裏菊」（名） ㊀菊花の裏より見たる形の模樣。 ㊁錨に付くる菊花形のかざり。 ㊂【植】菊科の多年生草本、莖は高さ二三尺、葉は長さ三四寸線形全緣をなし、秋黃房花序の花を開く。
うら-ぎり「裏切」（名） 味方にそむき敵に通ずること、內通、（翻城）。
廿うら-ぐ・し げげぐ 「嬉」（自、か下二） 愉快きはまる。興(キョウ)に入り我を忘る。うきたつ。
うら-ぐち「裏口」（名） 家のうしろの出入口、表口の對。（背戶）。
うら-ごし「浦越」（名） ㊀浦を越すこと。 ㊁浦の方より陸へふきあげて來る風。
廿うら-ごひ・し 「心戀」（形、二） 心のうち戀し。
廿うら-ご・ふ 「心戀」（他、は上二） 心のうちにて戀ひ慕ふ。
廿うら-さだめ「占定」（名） うらなひもて、物事を決定すること。
廿うら-さと「浦里」（名） 浦近くある里。漁村。
廿うら-さび・し 「心寂」（形、二） 心さびし。

廿うら-さ・ぶ 「心寂」（自、は上二） 心さびしくあり。
うら-じやく「裏尺」（名） 曲尺(サシ)の裏にありて、表の曲尺にともなひ、物の形をはかるに用ふるもの。
うら-じろ「裏白」（名） ㊀【植】裏白科に屬する羊齒、葉は通常叉狀に分岐して芽を有し、芽胞は被包を有せず、葉柄を種々の用に供し葉は正月のかざりに用ふ。ほなが。もろむき。 ㊁紙を横に二つに折りて、表の方のみに文字を書きたる手紙。 ——いちご「裏白苺」（名）【植】薔薇科に屬する植物、葉は三箇の小葉より成り、莖と共に長き帶褐色の腺毛を有す、果實は食用に供せらる。えびかづらいちご。さるいちご。 ——のき「裏白木」（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は卵形にして下面に白毛密生す、五月頃、小花叢(ムラ)がりひらく、實はさくらんぼうに似て赤し、熟すれば甘味あり、食用に供すべし。
うら-だな「裏店」（名） うらながや。うらや。（下戶）。
うら-ぢ「裏地」（名） 裏に縫ひつくべききれぢ。
うら-ぢ「浦路」（名） うらのみちすぢ。
うら-つけ「裏附」（名） うらうち。
うら-づたひ ツイ 「浦傳」（名） 浦に沿ひて道を行くこと。
うら-て「裏手」（名） 裏の方面。りめん。はいご。
うら-て「占手」（名） 相撲又は歌合せなどにて、最初第一番のつがひの稱。
うら-どほり「裏通」（名） うらての道路。
廿うら-と・く 「心釋」（自、か下二） 心とく。胸癒ゆ。「るこ」
うら-なぎ「浦和」（名） 浦によせくる浪の靜かな
うら-なし「裏無」（名） ㊀うらをつけざること。 ㊁うらをつけざる草履。

廿うら-な・し 「心無」（形、二） 心につゝみかくす所なし。
うら-なひ イナ 「占」（名） ㊀うらかたを考へて、吉凶を判斷すること。うらなふこと。 ㊁うらなひをする人。うらなひしや。（卜筮）。 ——しや「占者」（名） うらなひを業として生活する人。はっけみ。ばいぼくしや。（賣卜者）。
うら-な・ふ ウナ 「占」（他、は四） うらに依りて、吉凶を考へ定む。（陳卦）。
ウラニウム [Uranium]（名）【化】「ウラン」に同じ。 ——ガラス [Uranium-glass]（名） 「ウラニウム」の鹽類を混ぜる「ガラス」、黃色を帶びよく燐光を放つを以て、「ガイスレル」管を製するに用ふ。
廿うら-の-かみ「陰陽頭」（名） うらのつかさの長官。
廿うら-の-つかさ「陰陽寮」（名） 「おんやうれう」に同じ。
うら-ば「裏葉」（名） 草木のうらの葉、「葛の—」「くずの—」。
うら-はず「末筈」（名） 弓づるをかくる所の上の部分。もとはずの對。
廿うら-はづか・し 「心恥」（形、二） 心の中にて恥かし。
廿うら-はひ ハイ 「兆」（名） うらかた。
廿うら-はみ「占食」（名） 龜の甲を灼(ヤ)きてすゑるうらの其裂け目。
廿うら-はら「裏腹」（名） うらうへ。はんたい。あべこべ。
うら-はん「裏判」（名） 文書の裏に保證として捺印すること、又、其印跡。
うら-びと「浦人」（名） 浦のほとりに住む人。
廿うら-び・る 「心詑」（自、ら下二） つらくあり。わびしくあり。（怏怏）。

廿うら・ふ 「占」（他、は四） うらなふ。「あふべしとうらへる君を」。
廿うら・ふ 「占」（他、は下二） うらなふ。
廿うら-ぶ・る 「心詑」（自、ら下二） 憂(ウ)くおもふ。うらびる。
廿うらへ エウ 「占」（名） うらなふこと。うらなひ。
廿うら-べ「占部」（名） 古昔の官名、神祇官に屬し、占ひの事をつかさどりしもの。（下官）。
うら-べ「浦邊」（名） うら。うみべ。
うら-ぼし「裏星」（名）【植】羽前に生ずる一種の草、葉のうらに金色の星あり、冬も枯れず、中には葉の三つまたに分裂したるものあり。
ウラボン「盂蘭盆」（名）（梵語 Ullambana、倒懸と譯す）陰曆七月十五日に行ふ佛事、食器にいろいろの食物を盛りて、十方の佛僧に施し、以て七世及現世の父母の倒懸の苦を救はんとなり。ぼんまつり。たまゝつり。ボン。 ——ゑ「盂蘭盆會」 前條に同じ。
廿うら-ま「浦曲」（名） 海ばたの曲り入りたる所。
うら-まさり-の-こうばい「裏優紅梅」（名） かさねの色目、表は紅梅にして裏は紅なるもの。
うら-まち「裏町」（名） うら通りの町。とほり町のうしろ。（後街）。
うらみ「怨」（名） うらむること。うらむる思ひ。（恨）。
うらみ-うた「怨歌」（名） うらみのこゝろをふくめてよみたる歌。「—を、はやくよみかけよ」。
うらみ-ごと「怨言」（名） うらめしき心の中を語ることば。
うら-みごろ「裏身頃」（名） 衣服のみごろの裏にあたる布。
うらみ-じに「恨死」（名） うらみを懷きて死ぬること。

うら-みち「裏道」（名） ㊀裏口より通行する路。 ㊁ぬけみち。間道。
うらみ-なき「怨泣」（名） 人を怨みて泣くこと。
うらみ-ね「怨寢」（名） 男の無情を怨みて、獨り寢ること。
うら・む 「恨」（他、ま上二） ㊀不滿足又は不平の心を持つ。（怨）。 ㊁他のおむけを不快に思ふ。他の行爲をにくみいきどほる。 ㊂後悔す。くやむ。「自ら機を失したるを—」。
うら-むらさき「裏紫」（名） 「むらさき」に同じ。
うらめ・し 「怨」（形、二） うらみに思はる。殘念なり。
うら-もやう ウヨ 「裏模樣」（名） 物のうらにある「もやう」。
うら-もん「裏門」（名） 家屋などのうらてのもん。裏木戶の門。（後門）。
うら-もん「裏紋」（名） 正式の紋所のかはりに用ふる紋所。かへもん。
うら-や「裏屋」（名） 人家のうらに建てたる家。うらだな。うらながや。
廿うら-やす・し 「心安」（形、二） こゝろやすし。あんおんなり。
うら-やなぎ「裏柳」（名） かさねの色目、表は白、裏は萠黃なるもの。
うら-やま・し 「羨」（形、二） うらや[illegible]「し。」
うら-やまぶき「裏山吹」（名） かさねの色目、表は黃色にして、裏は萠黃(モエギ)なるもの。
うら-や・む 「羨」（他、ま四） （心(ウラ)病む義） ㊀人のすぐれたる狀を見て、其如くならんと思ふ。 ㊁人のすぐれたる狀を見て、其人をにくゝ思ふ。
廿うらら「朗」（名） くもりなくのどやかなるさまにいふ語。ほがらか。（霽）。 ——か「朗」（名） ほがらか。うらら。 ——げ・し しくしき 「朗」（形、二） うらゝかにてあり。

うら-わ「浦曲」（名） 浦の屈曲したる處。「—の千鳥あともとゞめず」。
うら-わか・し 「末稚」（形、二） ㊀草木のうらみづ／＼しくわかし。 ㊁心わかし。氣わかし。
ウラン [Uranium]（名）【化】「クロム」族に屬する金屬、甚だ稀なるものにして其主なる鑛石は「ウラン」鑛なり、黃色の酸化物は、美麗なる黃色の燐光を放ち、黑色の酸化物は、磁器の着色料に用ひらる。
うり「瓜」（名）【植】(い)葫蘆科に屬する植物の總稱、昔は「ふり」と稱したり。まろうり・きうり・まくはうり・すゐくわ・たうぐわ・へちま・かぼちや・ゆふがほ等の種類あり、各其條を見よ。 (ろ)まくはうり又は胡瓜(キウリ)の專稱。 ——をとうじてたまをう「投瓜得瓊」（瓜をおくりて其返禮に瓊を得たる義）人に些少のおくりものをして、多大の返禮を受けたるにいふ。
うり「賣」（名） うること。うりひさぐこと。
うり-あ・ぐ 「賣上」（他、か下二） ㊀品物を賣りきる。うりつくす。 ㊁賣りたる錢を收む。
うり-あげ「賣上」（名） うりつくすこと。賣りきること。又、其あがり高。 ——かんぢやう「賣上勘定」（名） ㊀うりあげて、其あげ錢をとりをさむる勘定。 ㊁品物を請け賣りするに、前金を納めずして、一定の時期に賣り高の勘定に從ひて納むること。 ——ちやう「賣上帳」（名） うりあげたる品物の價を記入するための帳簿。
うり-あり・く 「賣行」（他、か四） ものをうらんとて方々へ行く。
うり-いへ エイ 「賣家」（名） うるべき家。うりや。

うり-かけ［賣掛］(名) ものを賣りて其代金を未だ收めざること。又、其代金。かけ。

うり-かひ［賣買］(名) 賣ると買ふと。ばい〱。あきなひ。

うり-き-る［賣切］(他、ら四) 賣りつくして、品物拂底す。

うり-きれ［賣切］(名) うりはてたること。うり盡くしたること。

〔うり-きれる［賣切］(他)「うりきる」の訛。

うり-ぐすり［賣藥］(名) かねて調合しおきて賣る藥品。ばいやく。

うり-くち［賣口］(名) うりさき。さばけくち。(販路)。

うり-ぐひ［賣食］(名) 所有の道具などを賣り、其代によりて、日々の生活をたつること。

うり-けんおやう［賣券狀］(名) うり渡すべき事を契約して認めたる證狀。(沽券狀)。

うり-こ［賣子］(名) 商家にて賣りあるくにつかふ雇ひ人。品物を擔(カ)がしめて行商せしむる者。

うり-ことば［賣言葉］(名) 他の怒りを招く言葉。けんくわをもとむることば。(惡言)。——にかひことば 惡言をうけて惡言をかへすこと。

うり-こみ［賣込］(名) うりこむこと。うりはむること。

うり-こ-む［賣込］(他、ま四) ㊀賣り入る。㊁うりさきを擴ぐ。得意をつくる。

うり-ごゑ［賣聲］(名) 賣子が商品の名を呼ぶ聲。

うり-さき［賣先］(名) 品物を賣り付くべきあひて。賣りこむべきあて。うりくち。さばけくち。

うり-さ-ぐ［賣下］(他、か下二) 官より物を民間に賣る。

うり-さげ［賣下］(名) うりさぐること。

うり-ざね［瓜核］(名) 瓜のたね。(瓣)。——がほ［瓜核顏］(名) (瓜のたねに似たるかほの意) 色白くなかだかにて、稍や長き顏の稱。(瓜子面)。

うり-さばき［賣捌］(名) ㊀賣りさばくこと。賣りひろむること。㊁賣りさばく所。

うり-さば-く［賣捌］(他、か四) うりひろむ。うる。はんばいす。

うり-しろ［賣代］(名) 品物をうりたる代金。——なす［賣代爲］(他、さ四) うりあげて錢とす。

うり-すゑ［賣据］(名) ㊀おき据ゑのまゝ賣却する物。㊁賣るべき建物。

うり-だし［賣出］(名) ㊀賣りだすこと。うりそむること。うりはじめ。㊁商賣の景氣をつけんために、日を撰び、特別にやすく賣りなどして、客をひくこと。

うり-だ-す［賣出］(他、さ四) ㊀うりだしをなす。㊁名望を露はす。㊂名望あらはれゆくこと。

うり-て［賣手］(名) 貨物を賣る人。かひての對。

うり-ぬし［賣主］(名) ㊀貨物を賣る人。㊁［法］賣買契約により、相手方に對し或財産權を移轉する義務を負ふもの。

うり-ね［賣値］(名) 賣品の價。もとねの對。

うり-の-き［瓜木］(名)【植】山茱萸科に屬する木、葉は舐瓜(マクハウリ)に似る、みきのあま皮を斜(ハ)ぎ、宿場馬にかけて、蠅よけとす。うりばかへで。(八角楓)。

うりば-かへで［瓜葉楓］(名)【植】うりのき。

うり-ばへ［瓜蠅］(名)【動】鞘翅類中金花蟲科に屬する蟲、金褐黑にして細長く、前胸に深き横溝あり、瓜の葉を食ふ。

うり-はらひ［賣拂］(名) うりはらふこと。うりて手ばなすこと。

うり-はら-ふ［賣拂］(他、は四) ㊀賣りすつ。賣りてばなす。うりきる。

うり-ひろ-む［賣弘］(他、ま下二) 賣りひろぐ。あまねくうり出す。

うり-ひろめ［賣弘］(名) 賣りひろむること。「—にゆく」。

〔うり-ひろめる［賣弘］(他)「うりひろむ」の訛。

うり-もの［賣物］(名) 賣るべき品物。ばいひん。はんばいひん。

うり-もみ［瓜揉］(名) 一種の料理、きうり又はしろうりを薄くきざみ、これに鹽を少しかけもみやはらげ、さんばいずにて味をつけたるもの。

うり-や［賣家］(名) うりいへ。

う-りやう［雨量］(名) 雨雪などの降れる分量。雨雪などの降下して地面を被ひたる容積。——けい［雨量計］(名) 雨量を計る具、圓筒にして漏斗狀の蓋にて罩ひ、其中央に小孔を穿ち、筒内に溜りし水の深さによりて雨量を計る、通常「ミリメートル」を用ふ。

うり-よね［賣米］(名) 米を賣り出すこと。又、其米。かひよねの對。(糶)。

うり-わたし［賣渡］(名) うりたる物品を渡すこと。

うり-わた-す［賣渡］(他、さ四) うりわたしをなす。

(う-りん)［羽林］(名) 近衛府の唐名。——け［羽林家］(名) 古昔の公卿の家格、侍從より近衛の少將及中將を經て、次第に昇進するを得しもの。

う-る［賣］(他、ら四) ㊀價の金を受けて物品を渡す。ひさぐ。はんばいす。さばく。㊁需要者を求む。㊂名望をひろむ。㊃だしぬく。あざむく。「友を—」。㊄自ら媒介す。てうふ。(衒)。

うる-あは［糯粟］(名) 粘力(ネバ)少き種子の粟。もちあはの對。

うるか(名) 鮎の腸又は子を鹽づけにしたるもの。「—[illegible]」。

‡うるき(名)【植】(い)「ゑふにひとへ」の古名。(ろ)【植】「さんきらい」の古名。

うる-きび［粳黍］(名) 粘力(ネバ)少き種子の黍。

〔うる-け-る〕(自、か下一) うるはふ。ふやける。

うる-ごめ［粳米］(名) うるしね。(秔)。

‡うる-さ-し［厭］(形、二)「うるせし」に同じ。

うる-さ-し［煩］(形、一) わづらはし。いとはし。(五月蠅)。

うるし［漆］(名) ㊀【植】「うるしのき」の略言。㊁一種の塗料、うるしの木より取りたる灰色の樹液、水分を去れば黑褐色のものとなる、著しく乾燥する性質を有し、薄く塗れば光澤あるが故に、ぬりものを製作するに必要のものとす。——いし［漆石］(名) ㊀一種の石、黑き光澤ありて、漆をぬりたる如し、北國に多し。からすいし。㊁「せきたん」の一名。(越後の方言)。——かき［漆掻］(名) ㊀うるしの木よりうるしの液を採集すること、其方法は、樹幹を切傷し、滲出する樹液を篦(ヘ)にて掻きて採集するなり。㊁うるしの液を掻きとる人。——かぶれ［漆瘡］(名) うるしの毒に感じて生ずる皮膚病。——こし［漆漉］(名) うるしを漉(コ)すに用ふる紙、主に吉野紙を用ふ。——ざいく［漆細工］(名) 器物に漆をぬりて、いろ〱の細工をなすこと。又、其器物。うるしぬり。——ぬり［漆塗］(名) ㊀器物にうるしを塗ること。又、其器物。㊁うるしを使用する人。——のき［漆木］(名)【植】漆樹科に屬する木、葉は多數の小葉より成れる羽狀複葉にして、小葉は中肋の兩側に十五個内外の脈を有す、果實は平滑なり、樹幹より汁液を採りて漆を製し、果實より蠟を製し、又、木材は種々の用に供す。(漆樹)。——ばけ［漆刷毛］(名) 漆を塗るに用ふるはけ。([illegible])。——まけ［漆負］(名) うるしかぶれにかゝり易きこと。——むろ［漆室］(名) うるしを塗りたる器物を入れて、かげぼしにする所。——ゑ［漆畫］(名) 塗物の上に、色漆にてゑがきたる繪。

うるし-きび［稷］(名)「うるきび」に同じ。[illegible]

うるし-ね［粳稻］(名) 米の粘力(ネバ)少く、飯に炊(カシ)ぎて常食となすもの。

‡うる-せ-し［麗］(形、二) ㊀うるはし。㊁たくみなり。

うる-ち［粳］(名) うるしね。

うるは-し［麗］(形、二) ㊀いろよし。㊁あいらし。つや〱し。㊂みめよし。うつくし。㊃たふとぶべし。[illegible]

‡うるは-し-む［麗］(他、ま四) かはゆがる。むつまじくす。

‡うるひ(名)【植】「ゑふにひとへ」に同じ。

‡うるひ［閏］(名) 閏(ウルフ)の古言。

‡うるひ［潤］(名) うるふこと。うるほひ。

うるふ［閏］(名) ㊀太陰暦にて、一年を三百六十日と定め、これを十二ヶ月に分かてど、月の運行と少差ありて、端數を出すが故に、其端數積りて一ヶ月に滿ちたるを、一年に加へたるものをいふ。大抵、五年に二度のうるふを生ず、十九年即ちうるふ七つを重ねて、餘分全く盡く、名づけて一章といふ。㊁現今我國に行はるゝ太陽暦即ち「グレゴリー」暦にては、前者と異にして三百六十六日の年をいふ、即ち、一年を三百六十五日とすれど、地球の回歸年は三百六十五日五時四十八分四十六秒なるが故に、其端數を積み、毎四年に、一日を二月の末に加ふ、かくせば百年の後には、殆んど一日の超過のみなるを以て、百年目にはうるふを置かずして、四百年目にこれを置く。

‡うる-ふ［潤］(自、は四) うるはふ。

‡うる-ふ［潤］(他、は下二) うるはす。

うるふ-づき［閏月］(名) 閏のある月。

うるふ-どし［閏年］(名) 閏のある年。

うるほ-す［潤］(他、さ四) ㊀水氣をもたす。しめす。ひたす。ぬらす。㊁そむ。します。㊂利益を受けしむ、恩徳を施す。

うるほひ［潤］(名) ㊀しめること。しめり。しとり。濕氣。水分。㊁まうけ。りえき。めぐみ。利徳。

うるほ-ふ［潤］(自、は四) ㊀水氣をもつ。しめる。ぬる。㊁しむ。そまる。㊂利益恩澤を受く。まうかる。

ウルマン(名)「イルマン」に同じ。

うるみ［潤］(名) ㊀うるむこと。にごり。くもり。かすみ。㊁醸酒中、泡の狀態が透明ならずして、曇りのあること。㊂濁酒の濁りたるもの。——しゆ［潤朱］(名) うるしぬりの黑色をおびたる朱。

うるみ-わん［潤椀］(名) うるみぬりにて塗りたる椀。

うる-む［潤］(自、ま四) ㊀透明ならず。曇る。㊁くもりて光澤うすし。あざやかならず。㊂泣聲しぶる。㊃打たれて肌に色を生ず。

うる-め［潤目］(名)【動】「うるめいわし」の略言。(鰮)。——いわし［潤目鰯］(名)【動】喉鰾類中にしん科に屬する魚、鱗は楕形をなして剝げ易く、口は斜仰し齒は短小なり、體形は多少延長し腹底は圓く、背部は淡蒼色にして腹部は白色に黄色を含む、體長は六寸餘に達す、我國西南海に多し、常に遠海に棲息す、脂すくなく味淡泊なり、多く干物として食す。

‡うれ［末］(名) 木の末端。うら。こずゑ。

うれ［賣］(名) うれゆくこと。うれ口。「—がよい」。

うれ-くち[賣口](名) うるゝみち。はんろ。
うれ-こみ[賣込](名) うるゝ口の付くと。
うれ-さき[賣先](名) うれくち。
うれ-し(しく、しく、し、しき、しけれ)[嬉](形、二) よろこばし。こゝろよくたのし。(怡)。――げ[嬉氣](名) うれしきさま。――なみだ[嬉涙](名) うれしさのあまりに出る涙。かんるゐ。
†うれし-む(ま、み、む、む、め、め)[嬉](自、ま四) うれしくおもふ。
うれ-だか[賣高](名) 貨物の賣れたる高。
†うれた-し(しく、しく、し、しき、しけれ)[憂](形、二) うれはし。なげかはし。(慨慨)。
うれ-だ-す(さ、し、す、す、せ、せ)[賣出](自、さ四) ㊀漸々販路ひろがる。うれはじむ。㊁名望あらはれゆく。
†うれ-は[末葉](名) ずゑの葉。うらは。「槙の―」。「草の―」。
†うれは-し(しく、しく、し、しき、しけれ)[憂](形、二) うれふべし。なげかはし。
うれひ[憂](名) ㊀うれふると。うれふべき事。㊁もふく。忌中。「父の―にあたる」。
うれ-ふ(は、ひ、ふ、ふ、へ、へ)[憂](他、は四) 次條に同じ。
うれ-ふ(へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ)[憂](他、は下二) ㊀うれはしくおもふ事を他に告ぐ。なげきうったふ。㊁病む。わづらふ。(患)。㊂かなしむ。なげく。(愁)。㊃おもんぱかる。かんがへる。「國家の前途を―」。㊄害とふ。惡む。㊅不安心にてあり。心もとなくあり。
うれへ[憂](名) ㊀なげきうったふると。愁訴。㊁びやうき。わづらひ。㊂なげき。かなしみ。㊃わざはひ。害患。㊄ふあんしん。えんぱい。――ぶみ[愁文](名) 歎願書。愁訴狀。
うれ-る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[賣](自、ら下一) あきなひ案「呂す。
うろ[虚](名) ㊀うつろ。(空)。㊁あな。(洞)。

(うろ[雨露](名) ㊀あめとつゆと。㊁うるほひ。「―のめぐみ」。
(うろ[有漏](名) 【佛】色界无色界に於ける見思の煩惱のために、業を發生して、色界无色界を出離する能はざると。轉じて、人間又は凡夫界。
(うろ[紆路](名) まはりみち。とほきみち。
(うろ[烏鷺](名) ㊀からすとさぎと。㊁黑と白と。――のあらそひ[烏鷺爭] 碁を圍むと。
うろ-うろ(名、副) まどひて方向の定まらぬさまにいふ語。(彷徨)。
うろ-おぼえ[空覺](名) 記憶の確實ならぬと。
†うろ-くづ[鱗](名) ㊀うろこ。㊁魚類の異稱。うを。
うろこ[鱗](名) (いろこの轉) ㊀【動】爬蟲類特に魚類の皮膚を蔽へる薄片、爬蟲のは表皮の化成したるものなれど、魚類のは眞皮の化成したるものにして、其表面に透明なる薄膜をのこせり、形狀種々あれど、魚類のは多く屋瓦狀に列ぶ。こけ。いろこ。㊁物の外表にありて魚類などのうろこに似たるものの稱。㊂【動】「もろこ」の一名。――がた[鱗形](名) 模樣の名、うろこ形にこしらへたる模樣、即ち、三角形。
(うろ-だう[有漏道](名) 【佛】布施・持戒・忍辱・精進等によりて、有漏生死の果を成就すると。
(うろた-へる(へ、へ、へる、へる、へれ、へよ)[狼狽](自、は下一) あわてまどふ。らうばいす。
(うろ-ぢ[有漏路](名) 【佛】此世。「シャバ」。
(うろ-つ-く(か、き、く、く、け、け)(自、か四) ㊀あわてゝ、物事手につかず。㊁まよひ歩く。さまよふ。
うろ-ぬ-く(か、き、く、く、け、け)[虚拔](他、か四) 多くあるものゝ中より、ものゝ間をへだて、引きぬく。まびく。「人參を―」。

うろ-のみ[有漏身](名) 【佛】凡夫の身。
ウロン[胡亂](名) (字の唐宋音なりといふ) あやしく疑はしきと。合點のゆかぬと。(涉疑)。
(うわう-さわう[右往左往](名) ㊀右へゆきまた左へゆくと。㊁不紀律に散りゆくと。「皆々―にかへる」。
(うわ-る(ら、り、る、る、れ、れ)[植](自、ら四) 植ゑらる。「稻が―」。
(うゐ[有爲](名) 【佛】人生の生滅無常なると。三界輪廻の境界。
ウヰウヰけう[回回教](名) 「フヰフヰ」教に同じ。
ウヰ-きやう[茴香](名) (「ウヰ」は字の唐音) 【植】繖形科に屬する栽培草本、特異の香氣を有す、葉は多數の絲狀片より成り、花は黃色小形にして複繖形花序に排列す、果實は長楕圓形にして藥用及食用に供せらる。クレのおも。(八月珠)。
ウヰスキー[Whisky](名) 酒精分強き一種の酒。
うゐ-てんぺん[有爲轉變](名) 【佛】うきよの物事は、うつりかはりて須臾(シバラク)も住せざると。
ウヰラウ[外郎](名) (字の唐音にして、明の歸化人員外郎の賣り始めたるより此名ありといふ) 「ウヰラウぐすり」又は「ウヰラウもち」の略言。――ぐすり[外郎藥](名) 相模國小田原より出す有名なる賣藥諸病に効ありといふ。トウチンかう。――まめ[外郎豆](名) 【植】「からすまめ」の一名。――もち[外郎餠](名) 一種の菓子、米の粉に砂糖を加へ蒸して製したるもの、周防國山口の產最も有名なり。
うゑ[飢](名) うゝると。食足らざると。
うゑ-[植](接頭) 或語に冠して植うる意を表はす。「―木」。

うゑ-き[植木](名) ㊀移し植ゑたる木。㊁鉢などに植ゑたる小き花木。ばんさい。――ばち[植木鉢](名) うゑ木をうゑおく鉢。(石盆)。――むろ[植木室](名) 冬季に寒を拒る、花木又は早く花を開かせんとする花木を入れおくための室、陸室・唐室等の構へあり。――や[植木屋](名) 庭園の植物に手を入れ又は庭などを作るとを職業となすもの。(園丁、蒔蒔郞、花匠)。
うゑ-こみ[植込](名) 庭園に草木を多く植ゑたる所。「杉の―」。
うゑ-じ[植字](名) 活版に用ふる活字、又、活字を組み立つると。しよくじ。
うゑ-じに[餓死](名) 飢ゑて死ぬると。(殍)。
うゑ-つ-く(け、け、く、くる、くれ、けよ)[植付](他、か下二) 草木をうつして生ひ立たす。「稻を―」。
うゑ-つけ[植付](名) ㊀植ゑつくると。㊁たうゑ。「五月の―」。
(うゑつける[植付](他) 「うゑつく」の訛。
うゑ-ばうさう[植疱瘡](名) 天然痘の感染を防がんために、疱瘡の膿液をうつして人のからだにうゝると、今は專ら牛に移して、再びこれを人にうゝるとなれり。(種痘)。
†うゑ-め[植女](名) 田に苗を植うる女。「さなへとる、みたの―もいろいろの」。
うゑ-もの[植物](名) ㊀しよくぶつの總稱。㊁田畝にうゝる蔬菜の特稱。
†うゑ-もん-ふ[右衞門府](名) 古昔、禁裏の諸門の警護にあたりし武官の府。
(うゑる[飢](自) 「うう」の訛。
(うゑる[植](他) 「うう」の訛。
(うゑん[迂遠](名) ㊀まはりどほきと。つたなきと。㊁道路屈曲して遠きと。

うを[魚](名) 【動】魚類の總稱、形は概ね圓錐形にして、且多少側扁なるを常とすれど、中には球形のものあり、體軀は、頭・軀幹及尾の三部より成り、頸といふ部分なし、移動器は水中生活に適したる鰭にして、胸腹の二偶鰭と脊・尾・臀の三奇鰭とを有す。――をえてうへをわする[得魚忘筌] (莊子の言に出づ) 學問の眞意を會得して、言文の形跡に拘泥せざるにたとへいふ。
うを-あみ[魚網](名) うをゝ捕るあみ。さかなあみ。
うを-いち[魚市](名) 魚をうりかひする市場。
うを-うり[魚賣](名) 魚を賣りて活計をたつる人。いをうり。さかなや。
(うを-がし[魚河岸](名) うをいちのある河岸。
うを-ぐし[魚串](名) 魚を燒くに用ふる串、竹又は鐵銅などにてつくる。いなぐし。(炙串)。
うを-たか[魚鷹](名) 【動】「みさご」の一名、好みて魚を取るより此名あり。(王雎)。
うを-だな[魚棚](名) ㊀魚を置く棚。㊁魚を賣るいへ。うをや。さかなや。
うを-にかは[魚膠](名) 魚類の皮・骨等より製したる膠。
うを-の-め[魚目](名) 手足などに生ずる神經の乳嘴突起の發育せるもの、かたくなりて恰も魚の目に似たるより此名あり。
うを-や[魚屋](名) 魚を賣る家。さかなや。
(うん[運](名) 人の身にめぐりて來る命數、天命のまはりあはせ。うんめい。
(うん(感) 承諾の意を表する發聲。(諾)。
(うん(感) 氣絕などし又ははげしく驚くときなどに發する聲。「―とばかりに」。
(うん-あう[蘊奧](名) 學問技藝などのおくそこ。おく。

(うん-う[雲雨](名) ㊀くもとあめと。㊁男女の共寢。
(うん-ぬん[云云](名) 連續したる言文を中途にて斷ち、後の意をかく〳〵といひとゞむるに用ふる語。しか〳〵。これ〳〵。
(うん-うん(感) くるしみにたへずうなる聲。
(うん-えん[雲烟](名) ㊀くもとけむりと。㊁山水の名畫などにいふ。「壁間に―を掛く」。――くわがん[雲烟過眼](名) 其場のみ目をとむるばかりにて、これに心の執著せざるとにいふ。
(うん-か[雲霞](名) ㊀雲とかすみと。㊁ものゝおびたゞしく群がるにたとへいふ語。「―の如く集まり寄る」。㊂【動】有吻類中蟬類に屬する小蟲、種類多し、體長多くは二分許、頭は突出す、前翅は鱗狀にして毛なく、後肢は長くして脛節に毛刺あるを常とす、葉脈を吸收し農家に有害なり、殊に多數群をなして稻田に來り、軟葉又は花の汁液を吸收して稻を枯らすに至る。(浮塵子)。
(うん-が[運河](名) 荷物を運送せんがために、陸地を堀り割りて設けたる河。ほりわり。
(うん-かう[芸香](名) 【植】「ヘンルウダ」の一名。
(うん-かう[運行](名) ㊀巡り回りて進行すると。㊁【天】遊星・彗星・衞星等の、其軌道上を運動すると。又、公轉ともいふ。
(うん-かく[雲客](名) 雲のうへびと。てんじやうびと。
(うん-かく[芸閣](名) 藏書の室。しよもつぐら。
(うん-かん[雲漢](名) あまのがは。天河。
(うん-き[雲氣](名) ㊀氣象變化のため雲の動くありさま。㊁空に立ちのぼる一種異樣の氣。「上有―」。
(うん-き[溫氣](名) ㊀あたゝまり。㊁暑氣蒸すが如きと。

(うん-げい)[雲霓](名) くもとにじと、即ち、雨のふらんとするもやうにいふ語。
(うん-げん)[繧繝](名) ㊀染色の名、色と色との間をぼかし染めにしたるもの。㊁織物の名、縞と縞とのさかひをくまどりて、織りたるもの。(暈繝)。——べり[繧繝緣](名) うんげんの織物を緣につけたる疊。
(うん-ぐわ)[雲臥](名) 世をさけて深山などに棲むと。
(うん-ざ)[運座](名) 多數の人の集りて、各自に俳句を作り、それを集めて互選する會。
(うん-さい)[雲齋](名) 「うんさいおり」の略言。——おり[雲齋織](名) 一種の織物、地粗く文斜に織りたる厚き木綿布、雲齋と云ふ人、織り出だしゝといふ。
(うん-さう)[運漕](名) 船にてものをはこびおくること。——てん[運漕店](名) 運漕の事を取り扱ふ店。
(うん-ざり)(名) 物事に厭き果つるさまにいふ語。
(うん-ざん)[運算](名) [數]式の示す規則に從ひ、加・減・乘・除又は移項等を行ひて、要する數値を算出すること。
ウン-しう[溫州](名) (溫州は支那の地名)[植]「ウンしうみかん」の略言。——みかん[溫州蜜柑](名) [植]蜜柑の一種、赤色を帶ぶ、味最も美なり。うんしゆきつ。
(うん-しふ)[雲集](名) くもの如く多くよりあつまること。——むさん[雲集霧散](名) おほくのものが、よりあつまり又はちり〴〵になる狀にいふ語。
(うん-じやう)[運上](名) 商人の營業又は運送の物品に課する租稅。(抽稅)。

(うん-じやう)[雲上](名) ㊀雲の上。㊁禁中。——びと[雲上人](名) 禁中に伺候せる公卿などの稱。くものうへびと。殿上人。
(うん-しゆ)[運輸](名) 荷物をはこびおくること。——えいげふ[運輸營業](名) 運賃又は手數料を受けて、もの、はこびおくりの業を營むと。
(うん-しよく)[暈色](名) 虹の如き色。
うんしよく-ガラス[暈色硝子](名) 光線を種々に反射して、暈色を出すガラス。
(うん-しん)[運針](名) 裁縫の針を運ぶ動作。
(うん-しん-げつ-せい)[雲心月性](名) 利慾の念なきにいふ語。
++うん-ず ぜ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ[倦](自、さ變) ㊀倦む。いやになる。㊁つらく思ふ。
(うん-すゐ)[雲水](名) ㊀雲と水と。㊁行脚(アンギヤ)僧の異稱、其雲にしたがひ水にまかせて、あてどころなく遊歷經歷するよりいふ。(遊僧)。
(うん-そう)[運送](名) ㊀物をはこび送ること。うんぱん。うんしゆ。㊁[法]陸上又は湖川・港灣・海外は(ママ)名く)にて、物品又は旅客のはこびおくりをなすこと。——えいげふ[運送營業](名) 運賃又手數料を受けて運送の業を營むと。——けいやく[運送契約](名) [法]當事者の一方が相手方に物を運送せんことを約し、他の一方がこれに對して運送賃を拂ふことを約したること。——じやう[運送狀](名) ㊀[法]荷送人が運送人に對して物品の運送につき交付する證書、商法三三二條に規定の要件を具すべきものとす。㊁運送人が荷受人に對して、物品と共に發送する通知狀。——せん[運送船](名) 軍事の輸送に用ふる船。——ちん[運送賃](名) 物品又は旅客の運送に對して受くる報酬。——とりあつかひ[運送取扱](名) 物品又は旅客運送の取り次ぎを爲すこと。——とりあつかひ-えいげふ[運送取扱營業](名) 自己の名を以て、運送の取り扱ひを營業となすこと。——とりあつかひ-にん[運送取扱人](名) 自己の名を以て運送營業をなす者。——にん[運送人](名) 自己の名を以て運送業を營む人。——ひん[運送品](名) 運送の目的たる物品。——ほけん[運送保險](名) 運送する物品に對し、荷主が生ずべき損害を塡補するために爲す保險。——れう[運送料](名) 「うんそうちん」に同じ。
(うん-ちゆう)[雲中](名) くものなか。——の-はくかく[雲中白鶴](名) 俗に拔け離れたる氣宇ある人にいふ。
(うん-ちん)[運賃](名) 運送人が、物品又は旅客をうんそうするに對して、受くる報酬。うんそうちん。(運搬賃)。
(うん-てい)[雲梯](名) 高き梯子、古昔、城攻めなどに用ひしもの。
(うん-でい)[雲泥](名) ㊀天上の雲と地上の泥との義。相違の甚しきものにたとへいふ語。「—の差」。——ばんり[雲泥萬里](名) 雲と泥との如き非常なる懸隔あるにいふ。
(うん-てん)[運轉](名) ㊀めぐりころばること。くる〳〵まはること。㊁ころばすこと。まはすこと。うごかしはたらかすこと。㊂繰りまはし。運用。——しゆ[運轉手](名) 汽車・汽船・電車などの機關の運動をつかさどる人。
(うん-どう)[運動](名) ㊀めぐりうごくこと。㊁衞生のためにからだを動かすこと。㊂散步。遊行。㊃位置の變化。㊄奔走盡力すること。周旋。——き[運動器](名) [動]動物が自體の移動を行ふための機官。高等動物及節肢動物のは、骨と筋肉とより成りたる肢部にして、軟體動物及蠕形動物などの如き骨なき下等動物のは、單に筋肉より成り、又、原生動物の如きもの、は、纖毛若しくは原形質の伸縮なり。——しや[運動者](名) 或物事のために奔走盡力する人、「議員選擧の—」。——しんけい[運動神經](名) 興奮を中樞より末梢端に傳ふる神經。遠心性神經。——ちゆうすう[運動中樞](名) 總て運動に關する遠心神經を出す神經細胞の中樞、大腦は此中樞の最高府なり、其他延髓・脊髓等もまた中樞となる場合あり。——のエネルギー[運動の—=Kinetic energy] [理]物體が運動するとき有する「エネルギー」、質量と速度との平方の相乘積の半を以てこれを測る。——のていりつ[運動の定律] [理]物體の運動に關する定律、「イギリス」人「ニュートン」氏の創說にして三則あり。(第一)物體は外力の作用を受けざれば、常に靜止するか、或は一直線上に等速の運動をなすものなり。(第二)運動量の變化は、其作用したる力に比例し、其方向に起る。(第三)作用あればこれに等しき反作用あり。——りやう[運動量](名) [理]物體の質量と速度との相乘積、質量及速度の何れも大なるほど、物體の慣性大なり、故に慣性の量、即ち、運動の量なりとす。
(うん-どん)[饂飩](名) 一種の食品、小麥粉に鹽を加へ水にてかため、薄くのばし細く切りたるもの。
(うん-ぬん)[云云](名) 「うん〳〵」の音便。
(うん-ぱん)[運搬](名) ㊀物品又は旅客の輸送。もちはこび。うんそう。㊁[地]河水又は海水若しくは風が、土砂又は頑礫等を流轉せしむること。
(うん-ぱん)[雲版](名) 一種の樂器、からかねの板にてつくり、まはりに雲がたの模樣を付けたるもの、葬式のとき寺にて用ふ。
(うん-ぴつ)[運筆](名) ふでのはこび方、かき方。
(うんぷ-てんぷ)[運否天賦](名) 運の吉凶は、自然の天命なりといふこと。
(うん-ぼ)[雲母](名) [鑛]「うんも」に同じ。
(うん-めい)[運命](名) 人の身にめぐり來たる善惡吉凶の事柄。——ろん[運命論=Fatalism](名) [哲]人生の賢愚又は浮沈等すべて先天的に定まるものにして、人力の如何ともすべからずといふ說。
(うん-めん)[饂麪](名) つゆにしたるうどん。
(うん-も)[雲母](名) [鑛]板狀又は片狀の硅酸鑛物、白雲母と黑雲母とあり、花崗岩中に存在す、薄くして剝離すれど、片々彈力性を有し光澤あり、扇子などの地紙に粉色するに用ひらる。
(うん-ゆ)[運輸](名) 貨物を運ぶこと。
(うん-よう)[運用](名) はたらかし用ふること。「活用」「—の妙は一心に存す」。
(うん-りやう)[雲量](名) [地]雲が空を掩へる量、天空を十分して、その一を單位とす。
(うん-りよう)[雲龍](名) 雲と龍とのある模樣。
(うん-ゐ)[云爲](名) いふとなすと。言行。

え

え 「あ」と「い」との中間母音、「い」の場合よりも、口を稍や廣く舌稍や低くして發す、五十音圖に於て、安行第四に位し、衣列の計・世・天・禰・閉・女・江・禮・惠の頭となる。
++え[兄](名) 「あに」に同じ、「大—」「—君」。
++え[枝](名) 草木の枝。えだ。「うめが—に、きゐる鶯春かけて」。
++え[肢](名) 身體の枝、手足、「四の—」。
++え[胞](名) 「えな」に同じ。
++え[宴](名) 「えん」の略言。さかもり。うたげ。
え[柄](名) 器物の手に把る所の長く出でたるもの、「把手」「斧のふる—」。(把)。
え[榎](名) [植]「えのき」に同じ。
え[荏](名) [植]「えごま」に同じ。
え[江](名) 陸地に深くいりこみたる湖海の一部分。「なには—」「すみの—」。
え[能](副) 能く。あへて。「—聞かず」。
++え(感) 疑問の意の發聲。「—どうだれ」。
++え(感) 然諾の意の發聲。「—さうです」。
(えい)[穎](名) ㊀はさき。のぎ。㊁[植]禾本科植物の花、即ち、穎花の外部にある二苞片の稱。㊂秀出せるもの、「—を脫ぐ」。㊃才氣。——をだっす[脫穎] はさきをあらはす。才氣をあらはす。
(えい)[纓](名) ㊀古昔の禮服の冠りの後方に垂れしもの。(薇尾)。㊁かんむりのひも。「結—」。
(えい)[營](名) ぢんや。「陣—」「軍—」。
(えい)[詠](名) 詩歌などを咏ずること。又、其詩歌。
(えい)[裔](名) 先祖よりこのかた連續せる血族の關係。子孫。「平氏の後—」。
(えい)[翳](名) ㊀くもり。㊁かげ。おほひ。㊂きぬがさ。㊃古昔、貴人の面を蔽ふに用ひし具、形

は柄の長き兩刃の如きもの。さしば。
(えい)[鋭](名) ㊀するどきこと。㊁するどきはもの。「―を執る」。㊂よりすぐったる兵士。「―を雖くして來り戰ふ」。
(えい)(感) 力を入るゝときなどの發聲。
(えい-い)[鋭意](名) 心をはげましふるふこと。
(えい-えい)[營營](名、副) 往來するさま又はいそがしきさまにいふ語。
(えい-えい)[曳曳](感) 力を入るゝときの發聲。
(えい-か)[詠歌](名) ㊀歌を詠ずること。又、よみたる歌。㊁巡禮又は淨土宗の信者がうたふ一種の歌。
(えい-がい)[嬰孩](名) ちのみご。みどりご。
(えい-かう)[影向](名) 神佛が其姿を現じたまふこと。
(えい-かく)[鋭角](名)【數】一直角より小なる角。 ――さんかくけい[鋭角三角形](名)【數】三つの角が皆な鋭角より成りたる三角形。
(えい-がく)[英學](名)「イギリス」國の語學。
(えい-かん)[叡感](名) 主上の御感。「―特になゝめならず」。
(えい-き)[英氣](名) 人にすぐれたる才氣。
(えい-き)[鋭氣](名) ㊀するどき氣象。㊁するどき勢。「―を挫く」。
(えい-き)[盈虧](名)【天】天體の光りが其位置によりて增減すること、月の影が漸次變形するが如きこれなり。
(えい-きう)[永久](名) ながく久しきこと。久しく變ぜざること。(永遠)。 ――ちくじやう[永久築城](名) 永久防禦の目的を以て築したる築城。
(えい-きやう)[影響](名) 關係を及ぼすこと。さしひびき。

(えい-きよ)[盈虛](名) みつることと缺くること。又、「えいき」に同じ。
(えい-きよく)[郢曲](名) いまやうぶりのうたひもの。俗なる音曲。(巴調)。
(えい-く)[影供](名) 神佛又は古人などの肖像に、供物をさゝぐること。
(えい-くわ)[穎果](名)【植】果肥にして果種子を有する閉果、聚合雌蘂にて成る、果皮は種子に密着す、稻麥等の禾本科植物に見る所なり。
(えい-ぐわ)[榮華](名) ときめきさかゆること。さかえ。「一門―盡きて」。
(えいくわ-だん)[曳火彈](名) 發射したるものが、火を曳く裝置をなしたる榴散彈又は榴彈。
(えい-けつ)[英傑](名) 多くの人にすぐれたる人。すぐれびと。(英雄)。
(えい-けつ)[永訣](名) ながきわかれ。えにわかれ。
(えい-げつ)[盈月](名) 新月より滿月に至る間の稱、此間に於て、月の形は漸次圓くなるよりいふ。
(えい-げふ)[營業](名) 生計を立つるため又は收入を得るために、繼續の目的を有して營む事業。特に、商業上の關係を有する事業。なりはひ。すぎはひ。 ――くわいしや[營業會社](名) 營利の目的を以て或行爲を常業となす會社。 ――くみあひ[營業組合](名) 同營業者が、共同の利益を圖り又は取り締りをなすために、設立したる公共團體。 ――しや[營業者](名) 營業の名前主。 ――しようにん[營業使用人](名) 營業者が營業のために使用する者。 ――ぜい[營業税](名) ㊀直接國税の一種、其課税標準は、賣り上げ・資本・請け負ひ・報償等の金額又は賃貸價格・從業者の員數等の中何れかにして、營業の種類によりこれを異にす。㊁商業又は工業を營むものに賦課する地方税。 ――ひ[營業費](名) 營業上直接に要する費用、即ち、使用人の給料又は原料の購買費の如きこれなり。

(えい-こ)[榮枯](名) さかゆると衰ふると。
(えい-ご)[穎悟](名) さとくかしこきこと。すぐれてかしこきこと。
(えい-ご)[英語](名)「イギリス」國のことば。
(えい-こく)[影國](名) 附庸の國。ぞくこく。
えい-こさく[永小作](名)【法】小作料を拂ひて、他人の土地に耕作又は牧畜をなすこと。 ――けん[永小作權](名)【法】物權の一種、即ち、永小作をなす權利、存續期間は二十年以上五十年以下とす。 ――にん[永小作人](名)【法】永小作權を有する人。
(えい-ごゑ)[曳聲](名) 力を入れて發する聲。
(えい-さい)[穎才](名) すぐれたる才智。又、其人。(英才)。
(えい-さう)[詠草](名) 歌のさうかう。歌のてびかへ。(歌稿)。
(えい-ざう)[營造](名) ㊀家屋倉庫などをまうけつくること。㊁「えいざうぶつ」(二)に同じ。「官立諸―の收支」。 ――ぶつ[營造物](名) ㊀まうけつくりたる家屋・倉庫など。㊁【法】直接に公衆の利益に供する目的の用をなす建設物、例へば、道路・鐵道・學校・病院の如きこれなり。「或個人にて專ら使用する―あるときは」。
(えい-ざう)[映像](名) 光線の屈折又は反射によりて、物像の現出すること、又、其現出したる物像。
(えい-さん)[叡算](名) 主上の御年齡を申し擧る語。

えいざん-かたばみ[叡山酸漿](名)【植】かたばみの一種、葉は大形にして尖頭を有す、花は白色又は淡赤色なり。
えいざん-すみれ[叡山菫菜](名)【植】菫菜科に屬する草本、不整齊なる花冠を有し、花瓣は五個あり、葉は複葉にして小葉は通常分裂す。(胡菫草)。
えいざん-ゆり[叡山百合](名)【植】百合科に屬する草本、雄蘂は丁字狀の葯を有し、花蓋は斜形にして甚だ長く白色なり、觀賞用として栽培せらる。よしのゆり。
(えい-し)[英資](名) すぐれたるうまれつき。
(えい-し)[英姿](名) すぐれたる雄々しき姿。
(えい-し)[殪死](名) たふれしぬること。
(えい-し)[叡旨](名) 主上の仰せ。主上の御旨。
(えい-じ)[嬰兒](名) みどりご。ちのみご。
(えい-じつ)[永日](名) ながの日。春日。
(えいじ-はつぱふ)[永字八法](名) 永の一字にて運筆の八法をあらはせるもの、漢の蔡邕の創定する所といふ。

[えいじはつぱふ]

(えい-しやく)[榮爵](名) 高貴なる爵位。
(えい-しゆ)[贏輸](名) かちまけ。
(えい-しゆん)[英俊](名) 多くの人よりすぐれてある人。
(えい-しよ)[營所](名) ぢんや。兵營。
(えい-しよ)[英書](名)「イギリス」語の書物。
(えい-じよく)[榮辱](名) ほまれをうくるとはづかしめをうくると。
(えい-しん)[鋭進](名) するどく進むこと。

(えい-しん)[詠進](名) 歌を詠みて朝廷などにたてまつること。
(えい-じん)[英人](名)「イギリス」國の人。
えい-ず[詠](他、さ變) ㊀詩歌の類を聲高くうたふ。㊁詩歌の類を製作す。
えい-ず[映](自、さ變) ㊀影を現す。うつる。「花の影、水に―」。㊁はえやす。かゞやく。さす。「日にえいじて光彩陸離」。
(えい-せい)[叡聖](名) 主上のすぐれて賢明にましますを申し奉る語。
(えい-せい)[營生](名) ㊀なりはひ。とせい。すぎはひ。㊁生命力を保存永續せしむること。(衞生)。
(えい-せい)[永世](名) 長く年月の經過すること。ながねん。えいたい。 ――ちゆうりつ[永世中立](名)【法】國際上に於て、國家が永世に、他國間の戰爭に關するを得ず、他國の保護を受くるを得ず、他國と同盟するを得ず、又、國際間の關係を生ずる恐れある行爲をなすを得ざる等の義務を負擔すること、此地位は條約によりて生じ又は數國が其獨立を擔保する條約に伴ひて生ず。 ――ちゆうりつこく[永世中立國](名)【法】永世中立の義務を負擔せる國家、白耳義・瑞西等の如きこれなり。 ――むきゆう[永世無窮](名) 世のあらん限りつゞきてたゆるなきこと。
(えい-せん)[永錢](名)「えいらくせん」の略言。
(えい-ぜん)[營繕](名) 建築物のしうふく。(修理)。 ――ひ[營繕費](名) しうふくの費用。
(えい-ぞく)[永續](名) ながく保ちつゞくること。つぎて絶やさゞること。(繼、紹)。
(えい-そつ)[鋭卒](名) するどく強勇なる兵卒。
(えい-たい)[永代](名) えいせい。ながよ。 ――どきやう[永代讀經](名) 寺院にて、永代に亡者のため讀經すること。

(えい-だう)[影堂](名) 祖先などの靈を祭りたる堂。
(えい-たん)[詠歎](名) 息を長くして歎ずること。
(えい-だん)[英斷](名) すみやかに決斷すること。決行にためらはざること。
(えい-ち)[叡智](名) ㊀最も深遠なる智識。㊁【哲】[Intellect] 宇宙の本體たる理性、時空の制限を受けず因果律に支配せられざる自由なるものにして、吾人認識の形式に獨立し、思惟すべけれど認識すべからず、それ自身にして眞の實在即ち本體なり。 ――せかい[叡知世界=Intellectual world](名)【哲】吾人が宇宙本體の一部として存在せる位置、感覺即ち現象世界の對。
(えい-ちう)[裔冑](名) すゑのちつゞき。子孫。
(えい-ちゆう)[營中](名) ㊀ぢんやの中。㊁將軍の城中。
(えい-ぢゆう)[永住](名) ながく同じ所に住みつくこと。「―の志」。
(えい-てつ)[英哲](名) さときこと。かしこきこと。又、其人。
(えい-てん)[榮典](名) ㊀名譽なるためし。㊁人の名譽を表彰するために設けある制度。
(えい-てん)[榮轉](名) 在來よりまさりたる官職又は位置にすゝむこと。
(えい-ねん)[永年](名) ながき年月のあひだ。
(えい-はく)[曳白](名) (白紙を曳く義)詩歌の會などにて、句を成すを得ず、徒らに料紙などを持ちあるくこと。
(えい-びん)[鋭敏](名) するどくさときこと。又、感じの甚だするどきこと。
(えい-ぶん)[英文](名)「イギリス」國の言語を以て記載せる文章、

(えい‐ぶん［叡聞］(名)　主上の聞こしめし給ふこと。
(えい‐まい［英邁］(名)　すぐれたること。いとまさりたること。
(えい‐みん［永眠］(名)　死ぬること。
(えい‐や(感)　力を入るゝときの發聲。
(えい‐やう［營養］(名)　動植物が體質の消耗を補ひ生活力を維持すること。其作用は營料の攝取・消化・吸收又は呼吸・排泄・循環等なりとす。――‐えき［營養液］(名)　血液の稱。
(えい‐ゆう［英雄］(名)　才智・能力などの拔群なる人物。
(えい‐よ［羸餘］(名)　あまり。のこり。
(えい‐よ［榮譽］(名)　世にはまれあること。はえある ほまれ。――‐けん［榮譽權］(名)【法】榮譽の表章を享有し得る權利、爵位を稱するなどの如きこれなり。
(えい‐らう［永牢］(名)　德川時代の刑罰の一、一生のあひだ牢に監禁すること。(長囚)。
えいらく‐せん［永樂錢］(名)　支那明朝の永樂年中に鑄たる錢、中古より多く日本に輸入せり。
えいらく‐やき［永樂燒］(名)　やきもの、一種、永樂年中の製作に係るやきものを模擬して、燒きはじめたるもの。
(えい‐らん［叡覽］(名)　主上の御覽あそばすこと。
(えい‐り［銳利］(名)　するどきこと。「才鋒―」。
(えい‐り［營利］(名)　財產上の利益をはかること。かねまうけ。玄やうばい。「―の業」。――‐かうゐ［營利行爲］(名)【法】營利を目的とする行爲。
(えい‐りよ［叡慮］(名)　主上の思召(オボシメシ)し。
(えい‐ゐき［塋域］(名)　はかば。墓所。
(えい‐ゑん［永遠］(名)　ながきあひだ。世のあるかぎり。「―の大計」。

(えう［要］(名)　㊀かなめ。かんじん。㊁えうよう。ひつえう。㊂ちかひ。やくそく。
(えう［妖］(名)　㊀あやしきこと。㊁わざはひ。
(えう［曜］(名)　㊀かゞやき。ひかり。㊁日・月・星の稱。㊂日・月・火・水・木・金・土を、日に配したる稱。
(えう［幼］(名)　㊀をさなきこと。をさなきとき。㊁をさなきもの。こども。「老を扶け―を攜へ」。
(えう‐えう［夭夭］(名、副)　年わかくみめよきさまにいふ語。
(えう‐えう［杳杳］(名、副)　はるかなるさまにいふ語。
(えう‐えき［徭役］(名)　官府が人民を強制的に公用に使ふこと。ぶやく。えだち。
(えうえき‐ち［要役地］(名)【法】地上權の行使によりて、利益を受くる土地。
(えう‐えん［妖艷］(名)　つやつやしくなまめきたること。うつくしきこと。
(えう‐おん［拗音］(名)　熟音の一種、子音と半母音と相合して成る、珊瑚の二樣ありて、假名二字を連ねてこれを表はす、即ち、ちや・ちゆ・きや・くわ等の如き音。
(えう‐がい［幼艾］(名)　年少くみめよき女。
(えう‐がい［幼孩］(名)　みどりご。をさなご。
(えう‐がい［要害］(名)　地勢險難にして敵を防ぐに適當なる所。(阨塞)。――‐の‐いた［要害板］(名)　兜の附屬品、まびさしと鉢と續く處の内部に、あてたる鐵板。
(えう‐がく［幼學］(名)　をさなき時の學問。うひまなび。
(えう‐きう［要求］(名)　㊀乞ひ求むること。㊁他人に對し、或行爲を爲さんことを求むること。
(えう‐きよく［謠曲］(名)　うたひ。

(えう‐くわい［妖怪］(名)　へんげ。ばけもの。えうま。
(えう‐くん［幼君］(名)　年齡はわかき主君。
(えう‐げき［要擊］(名)　㊀ねらひうち。㊁まちぶせして擊つこと。
(えう‐けつ［要訣］(名)　かんじんの奧義。おくのて。かなめ。
(えう‐げつ［妖孽］(名)　わざはひ。ものゝけ。
(えう‐けん［要件］(名)　㊀すておきがたき用事。㊁或行爲に必要缺くべからざる條件。必要條件。
(えう‐かう［要港］(名)　軍事上重要なる所と指定せられたる港、要港部を置き其守備を掌らしめ、兼ねて軍需品又は艦船・兵器等の小修理をなさしむ。「竹敷―」。
(えう‐こつ［腰骨］(名)【生】腸骨一對・坐骨一對・恥骨一對より成る骨盤。こしぼね。
(えう‐さい［要塞］(名)　㊀くにざかひの屯營。邊障。㊁國防上必要なる地に設置したる永久築城、陸地要塞と海岸要塞との二種あり。――‐ちたい［要塞地帶］(名)　國防上の必要より建設したる防禦營造物の周圍に於ける一定の區域。――‐はうへい［要塞砲兵］(名)　要塞の衛戍として屯在せる砲兵。
(えう‐し［要旨］(名)　かんえうなる主旨。
(えう‐じ［要事］(名)　えうようなる事がら。
(えう‐しき［要式］(名)　一定の法式に從ふ事を要すること。――‐けいやく［要式契約］(名)【法】其成立若しくは完全なる效力に關して、法律上一定の方法に從ふを必要條件とする契約。
(えう‐じや［幼者］(名)　㊀をさなきもの。こども。㊁二十歲以下の者。

(えう‐じやう［要償］(名)　損害のつぐなひをもとむること。
(えう‐じゆ［幼主］(名)　えうくん。わかぎみ。
(えう‐じゆつ［妖術］(名)　あやしき術。てはふ。
(えう‐じよう［要衝］(名)　物事のあつまり又は必ず通過すべきかなめの場所。
えう‐す［夭］(自、さ變)　わかじにす。
えう‐す［要］(他、さ變)　㊀ひつえうにてあり。いりまへにてあり。㊁まちぶせす。まちうく。「敵を道に―」。㊂もとむ。ねがふ。
(えう‐せう［幼少］(名)　㊀をさなくいとけなきこと。年齒はわかきこと。㊁わかもの。こども。
(えう‐せき［遙昔］(名)　むかし。むかし。
(えう‐せつ［夭折］(名)　わかじに。
(えう‐そ［要素］(名)　或事物の成立效力等に必要なる元素。もと。ねもと。
(えう‐たい［拗體］(名)　詩に定めたる平仄の格に合はぬ一種の詩體。
(えう‐たう［夭桃］(名)　㊀うつくしき桃の花。㊁よめいりどき。むすめざかり。
(えう‐ち［幼稚］(名)　をさなきこと。えうせう。又、こども。――‐ゑん［幼稚園］(名)　學齡以下の小兒を教育する校舍。
えう‐ちゆう［幼蟲］(名)【動】卵子より孵化して未だ成蟲とならざるもの。
(えう‐ぢよ［幼女］(名)　いとけなき女子。「疾、
(えう‐つう［腰痛］(名)　腰のいたみ。腰のいたむ
(えう‐てう［窈窕］(名)　うるはしきこと。おくゆかしきこと。たをやか。しなやか。
(えう‐てん［要點］(名)　かんえうなる箇處。
(えう‐どう［幼童］(名)　わらべ。こども。

(えう‐ねん［幼年］(名)　をさなき年齡。いとけなきこと。――‐しう［幼年囚］(名)　十六歲未滿の囚人。
(えう‐はい［遙拜］(名)　はるかにはなれたる所にありて、神佛などを禮拜すること。――‐じよ［遙拜所］(名)　えうはいする所。「神武天皇の―」。
(えう‐べう［杳渺］(名、副)　はるかなるさまにいふ語。
(えう‐ふ［徭夫］(名)　にんぷ。にんそく。
(えうぶつ‐けいやく［要物契約］(名)【法】契約の成立條件が、たゞ當事者雙方の意思表示の合致のみならず、更に目的物の引渡しを要するものなること。
(えう‐ま［幺麼］(名)　ちひさきこと。(微小)。
(えう‐ま［妖魔］(名)　㊀えうくわい。へんげ。㊁すべて人にわざはひをなすもの、稱。
(えう‐みやう［幼名］(名)　をさなき時の名。「めをさなな。
(えう‐む［要務］(名)　必要缺くべからざるつとめ。
(えう‐めい［杳冥］(名)　はるか。ほのか。「と、
(えう‐や［妖冶］(名)　うつくしくなまめかしきこと。
(えう‐よ［腰輿］(名)　手にて舁(カ)き行く輿(コシ)。
(えう‐よう［要用］(名)　㊀ひつようなること。かんえう。㊁重大なる用事。
(えう‐らん［搖籃］(名)　㊀小兒を入れてつるしおくかご、時々これをうごかして、中の小兒を慰め又は眠らしむるもの。小兒のつりねだい。㊁物事發展の端緒。「文明の―」。
(えう‐りやう［要領］(名)　事がらのおもなる部分又はおもなる主意。えうてん。
(えう‐りやく［要略］(名)　必用なる所のみを取りて、他をはぶきたること。あらまし。およそ。
(えう‐れい［要領］(名)　「えうりやう」に同じ。
(えう‐ろ［要路］(名)　㊀肝要なるみちすぢ。㊁政治上の樞機に參する地位。「―の顯官」。

(ええ(感)　おどろき又はなげくときなどの發聲。
(ええ‐えう［榮燿］(名)　㊀さかえ。えいぐわ。㊁奢侈なる生活をなすこと。
エーカー［Acre］(名)　英國の地積の單位、我國の四段二十四步にあたる。
エーテル［Ether］(名)　㊀【理】光・熱・電氣・磁氣の現象の想像的媒體、極めて輕微にして且彈性に富み、宇宙至る所に散布し、彈性學等にて固體の性質を有するものと假定せらる。㊁【化】一種の香氣を有する無色の液體、「アルコール」に硫酸を混じて蒸溜すればこれを得、流動し易く、發揮し易く、又、燃燒し易きものなり、有機化合物の溶劑として用ひ、又、外科手術の際に痲醉劑として用ひらる。
エール［Ale］(名)　淡色の麥酒。
ゑ‐が［垣下］(名)　「ゑんが」の略言。「―の公達」。
ゑ‐かうろ［柄香爐］(名)　一種の佛具、把手のつきたるかうろ。手爐。
ゑ‐がち［得勝］(名)　こゝろえ顏なること。承知したる體にてあること。
(えき［易］(名)　㊀支那及我國に行はるゝ一種の哲學、陰陽變化の原理に基因し、神人交感の神秘に信賴し、蓍(メドギ)をかぞへ卦を施き、以、天地萬物の消長吉凶を說くもの、支那の古聖人伏羲氏の創始にかゝるといふ、夏の時代にも殷の時代にも、これに就きて演繹推論せし所のものありたりといへど、今は傳はらず、今傳はるは、周時代の演繹推論せし所のものにて、即ち、文王のもの、家と周公のも

やさい【野菜】(名)「[野菜類]」の略。

やさおとこ【優男】(名)「[優男]」に同じ。

やさがた【優形】(名)「[優形]」に同じ。

やさき【矢先】(名)「[矢先]」に同じ。

やさぐれる(動)「[やさぐれる]」に同じ。

やさしい【易しい】(形)「[易しい]」に同じ。

やさしい【優しい】(形)「[優しい]」に同じ。

やさしがる【優しがる】(動)「[優しがる]」に同じ。

やさしさ【優しさ】(名)「[優しさ]」に同じ。

やさしみ【優しみ】(名)「[優しみ]」に同じ。

やさしめ【優しめ】(名)「[優しめ]」に同じ。

やさしめる【優しめる】(動)「[優しめる]」に同じ。

やさしや【優しや】(名)「[優しや]」に同じ。

やさしゅう【優しう】(副)「[優しう]」に同じ。

やさしゅうする【優しうする】(動)「[優しうする]」に同じ。

やさしゅうて【優しうて】(副)「[優しうて]」に同じ。

やさしゅうない【優しうない】(形)「[優しうない]」に同じ。

やさしゅうなる【優しうなる】(動)「[優しうなる]」に同じ。

やさしゅうなれる【優しうなれる】(動)「[優しうなれ

えど-むらさき[江戸紫](名) 染色の名、藍がちの紫色。(深紫)。
えど-もも[江戸桃](名)【植】「さきわけもゝ」の一名。
えど-ゑ[江戸繪](名)「にしきゑ」の一名。
えな[胞衣](名) ㊀胎兒を包める膜。(胎包)。㊁胎兒の胎盤の稱、其一部は母體の子宮壁に附着す、胎兒は臍帶を以てこれと連接し、これにより養分を母體より受け又は代謝を營む。たいばん。(胎盤)。——をけ[胞桶](名) えなを入れて、土中にうづむるまげもの。おしなけ。
えならず いふにいはれず。得もいはれず。
艹えに[緣](名) えん。ゆかり。「通ふばかりの—」。
えに-し[緣](名) ゆかり。えん。
エニシダ(名) (「オランダ」語より出づといふ)【植】荳(マメ)科に屬する小木本、葉は一箇或は三箇の小葉より成り、綠色なる枝は時に無葉なることあり、花は黄色にして美麗なり、觀賞用として栽培せらる。(金雀枝)
エネルギー[Energy](名) ㊀【理】仕事をなし得る能、其量は其爲し得る仕事を以て測る、「エネルギー」に二種あり、運動の「エネルギー」及位置の「エネルギー」これなり、「エネルギー」には熱・音・光・電氣・磁氣等の諸態あれど、要するに此二種の外に出でず。㊁人生の精力。事を爲す元氣。——のほぞん[—の保存=Conservation of energy]【理】宇宙間にある諸物質の有する「エネルギー」は、種々其態を變じ、或は一體より他體に移行すといへど、其總量は常に一定すといふこと。
え-の-あぶら[荏油](名) えごまより取りたる油、桐油などに用ふ。
え-の-き[榎木](名)【植】楡(ニレ)科に屬する喬木、葉は稍圓形にして、夏の初、黄もえぎ色の花を開く、花蓋は覆瓦樣に排列せる片より成り、花柱は子房の頂上の中央に位し、果實は球形なり、木材は種々の用に供せらる。(朴)。——だけ[榎茸](名)【植】えのきに生ずるきのこ。

え-の-ど[疭](名) 脇の下又は股の付き根の腫れ痛む疾。
〔えのあまに[江島煮](名)「うしほに」の一名。江島にてなす故に此名あり。
えのみ-ごせう[榎實胡椒](名)【植】「こせう」に同じ。
え-はう[吉方](名)「あきのかた(明方)」に同じ。
え-ハチ[衣鉢](名) (袈裟と應器(鉢)との稱にして、始祖即ち達磨が、二祖即ち慧可に正法眼藏を付囑せしとき、其證として袈裟と應器とを授けたりといふ故事に出づ) ㊀【佛】沙門が其師より受けつたへたる佛敎の妙義。㊁轉じて、受けつたへたる學問技藝などの妙義。——をつたふ[傳衣鉢] 師より其道の妙義をうけたるにいふ。
艹え-はやし[江林](名) 江のほとりの林。
えひ[鱝](名)【動】横口類に屬する魚、體軀は扁平にして菱形又は團扇形をなす、尾は薄く狹くして背上に附着し、鰭は擴張して體幹の周緣をなす、鰓孔は口と共に下面に開く、種類少からざれど、多くは定着魚にして、近海に棲息し通常沙底に俯伏す。(海鷂)。
えび[葡萄](名) 染色の名、熟せるえびかづらの實に似たる色、赤色を帶びたる栗色。
えび[海老](名)【動】十脚類中長尾類に屬する節足動物の總稱、體は延長し外皮は甲殼をなす、長き二對の觸角を有す、腹部はまた能く發達して頭胸部より長し、腹肢は五對ありて且尾鰭あり、其種類多し。(蝦)。

艹えび(名) (薰皮香の義なりともいひ、又、衣服にたきしむるより衣被香の義なりともいふ) 一種の香料、せんだんのきの葉と皮とを、細末になしたるもの。(裛衣香)。
えび-いろ[葡萄色](名)「えび」(葡萄)に同じ。
艹えび-かづら[葡萄](名)【植】(此類の植物に、蝦の鬚の如きものあれば、此名あるか)。(い)「ぶだう」の古名。(ろ)「えびづる」に同じ。——いちご[葡萄苺](名)【植】「うらじろいちご」の一名。
えび-がに[蝦蟹](名)【動】「ざりがに」に同じ。
えび-ぐさ[蝦草](名)【植】「いぶきとらのを」の一名。
〔えび-どし[蝦腰](名) えびの如くに曲りたる腰。
えび-ざこ[蝦雜魚](名) 小蝦の中に、小さき魚の混交せるもの。(雜蝦)。
艹えびす[夷](名) ㊀「えみし」の訛。㊁都に遠き所の邊民。㊂野蠻なる人民。
えびす[惠比須](名) 七福神の一、其像は狩衣(カリギヌ)差貫(サシヌキ)に、風折り烏帽子を着て、鯛を釣る狀をなす、一に夷(エビス)三郎といふ。——あふぎ[惠比須扇](名) 伊勢國山田邊より、春の始めに出す粗造の扇、注連(シ)飾りなどにつくるもの。——かう[惠比須講](名) 惠比須神をまつる祭禮、陰暦十月二十日、商家にてこれを行ふ。——がみ[惠比須紙](名) 多くの紙を重ねて裁ち斷るとき、角の內へ折れこみて、裁ち殘りになりたるもの。(閃刀紙)。——ぐさ[惠比須草](名)【植】荳(マメ)科に屬する草、夏より秋にかけて、葉間に花を開く。けつめい。(決明)。艹——ぐすり[惠比須藥](名)【植】「しやくやく」の古名。
えびす-ごころ[夷心](名) 猛惡なる心。未開に

してあら／＼しき心。
〔えびす-ぜに[惠比須錢](名) 數人寄り合ひ勘定の上、分配の出來ざる餘錢。
えびす-ぜん[夷膳](名) (えびすの如く、禮を知らずといふ義か) 膳の側面を人に向けて据うること。
えびす-だひ[夷鯛](名)【動】「うかめだひ」に同じ。
艹えびす-ね(名)【植】「われもかう」の古名。(地楡)。
艹えびす-ぶな[夷鮒](名)【動】鮒の一種、肩に節の如きものあり。
えびす-まつり[惠比須祭](名)「えびすかう」に同じ。
艹えびす-め[夷布](名)【植】「こぶ」(昆布)の古名。
艹えび-ぞめ[葡萄染](名) ㊀うすむらさき。㊁織色の名、經(タテ)赤にして、緯(ヨコ)薄紫のもの。㊂かさねの色目、表は蘇芳にして、裏は花田のもの。
えび-ちや[葡萄茶](名) 茶を帶びたるえび色。
えび-ぢやう[海老錠](名) ㊀魚形につくりたる錠。(魚鑰)。㊁大なる門のくわんぬきなどの錠。
〔えびちや-しきぶ[葡萄茶式部](名) 女學生の異稱(多くえびちや色の袴を穿つよりいふ)。
えび-づる[蘡薁](名)【植】葡萄科に屬する蔓草、多く山野に生ず、春宿根より發芽す、莖・葉共に小さく、葉は掌狀に分裂し下面に淡赤色の毛を密生す、果實は紫黑色にして球形をなし、食用とすべく、又、以て酒を釀すべし。(野葡萄)。
えび-ね[海老根](名)【植】蘭科に屬する草、葉は長くして濶く、花は總狀の穗狀花序に排列し一箇の萼を有し、花瓣は帶褐紫色を呈す、觀賞用として栽培せらる。
艹えび-の-か[裛衣香](名)「えび」に同じ。
えび-むし[海老蟲](名)【動】「たいこむし」の一名。

艹え-ひめ[兄姬](名) 第一のむすめ。「—弟姬」。
えびら[箙](名) ㊀矢を盛りて背に負ふ器。㊁蠶を入れて繭を作らしむる器。(箔)。

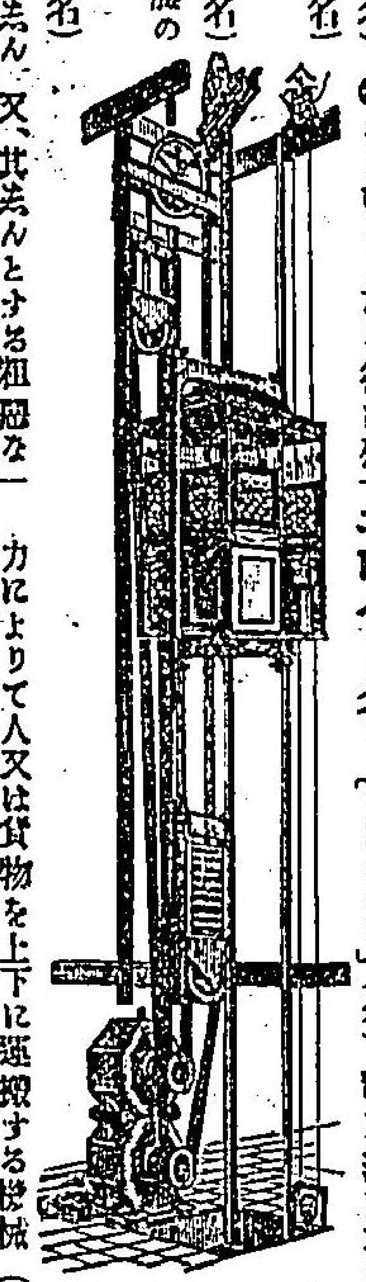
えびら(一)

えび-を[海老尾](名)【動】きんぎよの一種、其尾蝦に似る。
(えふ[葉](名) ㊀草木の葉。㊁紙などの如く扁くして薄きものを數ふるにいふ語。「一—」「二—」。
(え-ぶ[胑舞](名)「えんぶ」の略言。
(えふ-えき[葉腋](名)【植】葉と莖との間。
(えふ-さい[葉菜](名) おもに葉を需要する菜類。
(えふ-しん[葉針](名)【植】葉の變形にして針狀をなすもの、さぼてん・めぎ等の葉は全部變形し、ひいらぎ等の下枝に發生せる葉は、葉綠變じて鋸齒の堅き葉針となる。
(えふ-せう[葉鞘](名)【植】平行脈葉の下部に、管狀の葉柄ありて莖を包めるもの。
〔え-ぶな[江鮒](名)【動】「すばしり」の一名。(京阪地方の方言)。
(えふ-たく[葉托](名)【植】葉柄の脚部の左右にある一雙の子葉の稱。
(えふ-にく[葉肉](名)【植】葉の骨骼を成す部分、即ち、葉脈の部分を除きたる他の部分の總稱。
え-ぶり[柄振](名) ㊀「さすまた」の一名。(杁)。㊁てうなの柄。(楄)。
(えふ-へい[葉柄](名)【植】葉片の下端より細長き柄を生じて、枝に附着せる部分。
(えふ-へん[葉片](名)【植】葉の開展して扁き部分。
(えふ-みやく[葉脈](名)【植】葉片の骨骼をなす脈の稱、纖維即ち維管束にて成り、莖の維管束に接續す。

(えふ-りよく-そ[葉綠素](名)【植】葉綠體內に合有せる綠色の物質、葉の綠色を帶ぶるは、これを合有するによる。
(えふ-りよく-たい[葉綠體](名)【植】葉肉の中にある綠色の小球體。
エボナイト[Ebonite](名) 彈性「ゴム」に高き溫度に於て、多量の硫黃を吸收せしめたるもの、彈性を失ひて黑色の角の如し、電氣の絶緣體にして、電氣器械に廣く用ひられ、又、種々の製作に用ひらる。
えみ(名) 錯のきはめてふくれたる狀の製作。
艹えみ-し[蝦夷](名) 蝦夷(エゾ)の古稱。
〔エム(名) (Moneyの頭字を取る)金錢の隱語。
え-もの[獲物](名) ㊀獵りなどして得たる鳥獸の類。(得物)。㊁自分の手に得たる武器。「—をひっさげて」。
(え-もり[柄漏](名) 傘の柄の上部より雨の漏ること。
(え-もん[衣紋](名) ㊀衣服裝束の着方。㊁着物の襟を合はすること。
艹えやみ[疫](名) ㊀流行性の惡病。はやりやみ。ときのけ。㊁おこり。(瘧)。艹——ぐさ[疫草](名)【植】「リンダウ」の古名。
艹え-よぼろ[役丁](名) 役(エ)に出づる男丁。
えら[鰓](名)【動】魚類の呼吸器、數對の櫛齒狀又は板狀の瓣より成り、鰓骨に支へられて口腔の左右にある鰓室內にあり。
〔えら-し(形、二) ㊀勝れてあり。非凡なり。㊁仰山(ギヤウサン)なり。大層なり。
えらび[選擇](名) えらぶこと。せんたく。——て[選者](名) えらびをなす人。

えら・ぶ [選、擇](他、は四) ㊀多き中より拔きとる。見分けて採る。える。㊁擧げて其職に任ず。
えらぶ-うなぎ [永良部鰻](名) 【動】「うみくちなは」に同じ。
えらみ [選](名) えらむこと。えらび。
えら・む [選](他、ま四) えらぶ。(擇)。
えり [襟](名) ㊀頸にまとふべき衣服の部分。(衿)。㊁えりに當たる頸背。うなじ。(領)。㊂「カラー」。
えり [魞](名) 魚を捕る具。湖などに竹を並べて、細長く屈曲したる袋狀にして、魚の入るに易くして出づるに難きやうに作りたるもの。(笯)。
えり-あし [領脚](名) えりの邊の髮のはへぎは。
えり-あて [襟宛](名) 衣服の襟の裏にあてゝ、其汚れを防ぐ布片。
えり-かざり [襟飾](名) 洋服の襟につくるかざり。綢珍・緞子・絹などにて作る。其形種々あり。
えり-ぎらひ [選嫌](名) このむときらふと。すききらひ。
えり-くづ [選屑](名) ㊀えらびとりたる後に殘りたるもの。㊁不用物。殘物。
えり-くび [領首](名) えり。うなじ。(項)。
えり-さき [襟先](名) 衣服の襟の下端の腰の邊にあたれる部分。
えり-しん [襟心](名) 衣服の襟に入れたるしん。又、其しんとする粗惡なる木綿。
えり-つき [襟付](名) ㊀襟のやうす。㊁えりもと。
えり-どり [選取](名) 好むまゝにえらみとると。
えり-ぬき [選拔](名) えりぬくと。又、えりぬきたるもの。
えり-ぬ・く [選拔](他、か四) 多くの中よりえらみ出だす。よりぬく。(銓、選)。

えり-びと [選人](名) 衆人中よりえらび出だしたる人。選にあたれる人。
えり-まき [襟卷](名) 首の周圍に纏ひて、寒氣を防ぐもの。毛皮・毛布・絹等を用ふ。
えり-まはり [襟周](名) ㊀領の周圍。㊁襟のあたり。
えり-もと [襟元](名) うなじ。えりのもと。——**につく** 勢よき方に追從するにいふ。
えり-わ・く [選分](他、か下二) 多數の中より、えらびて善惡適否を分つ。(詮揀)。
エル [Ell](名) 布匹を測る西洋尺度の名、各國異同ありて一定せず。
え・る [選](他、ら四) えらむ。
エルグ [Erg](名) 【理】一「ダイン」の力が、物體に作用して、これを一「サンチメートル」だけ動かす仕事。
エレキ (名) 「エレキテル」に同じ。
エレキテル (名) (「オランダ」語 Electriciteit の訛) 【理】電氣。
エレベーター [Elevator](名) 電力・汽力或は水力によりて人又は貨物を上下に運搬する機械(昇降機)。


[エレベーター]

廿**えん-をぢ** [伯父](名) 父の兄。
(**えん**) [緣](名) ㊀ゆかり。ちなみ。たより。てづる。㊁くわんけい。かゝりあひ。㊂人倫のくわんけい。特に、夫婦のくわんけい。「—を結ぶ」。㊃原因をして結果をなさしむる作用。
(**えん**) [緣](名) ㊀母屋の端。㊁「えんがは」の略言。

(**えん**) [掩](名) ㊀おほふと。おほひ。㊁[Occultation] 【天】一の天體が他の天體をおほふと、殊に日が惑星又は衞星をおほふと、又は遊星が其所屬衞星をおほふと。
(**えん**) [宴](名) 酒食を設け人を饗すると。さかもり。さけのざ。
(**えん**) [炎](名) ㊀はのほ。ひさき。㊁もゆると。㊂あつさ。あつき。㊃筋肉又は眼等が、赤色・腫脹(ハレ)・發熱・疼痛(イタミ)等を起すと。
(**えん**) [艶](名) ㊀つや。いろ。㊁うるはしきと。つやゝか。
(**えん**) [鹽](名) 【化】酸の水素を金屬元素にて置換したる化合物、鹽化「ナトリウム」又は硫酸銅の如きこれなり、中性の化合物にして「リトマス」液の色を變ぜず。
(**えん-いう**) [奄有](名) おほひたもつと。「天下を—す」。
(**えん-いん**) [讌飲](名) さかもり。宴えん。
(**えん-いん**) [延引](名) 豫定の期限よりおくるゝと。えんにん。(遲延)。
(**えん-えき**) [演繹=Deduction](名) ㊀一事より他事に及ぼしつゞけて論ずると。推論。㊁【論】推論の二大法の一、既知の原理より漸次論下して、現前の事實に到達し、其理由を說明すると。歸納の對。
(**えん-えん**) [奄奄](名、副) 氣息のたえ〳〵なるさまにいふ語。
(**えん-えん**) [燄燄](名、副) 火のもえあがるさま。
(**えん-か**) [嚥下](名) のみくだすと。
(**えん-か**) [烟霞](名) けむりとかすみと。——**のへき** [烟霞癖](名) 山水の風景を好む性質。
(**えん-か**) [緣家](名) 姻族の關係ある家。みうち。つゞきあひ。えんぢや。(親戚)。
(**えん-が**) [垣下](名) (今「えん」は「ゑん」なるべけれど、姑く從來の慣例に從ふ) 人を饗應するときの接伴人、主人を助けて饗應の取り持ちする人。かいもと。えが。

(**えん-かい**) [緣海](名) 【地】半島及列島にて區劃せらるゝ海。日本海又は「ベーリング」海の類。
(**えん-かい**) [沿海](名) ㊀海にそひたる陸の部分。うみべり。㊁陸に沿ひたる海の部分。沿岸海。——**かうかい** [沿海航海](名) 沿海の諸港の間を航通すると。——**ぼうえき** [沿海貿易](名) 「えんがんぼうえき」に同じ。
(**えん-がい**) [掩蓋](名) おほひ。
(**えん-かく**) [沿革](名) うつりかはり。へんせん。
(**えん-がく**) [緣覺](名) 【佛】十二因緣を觀じて眞諦を悟る地位。——**じよう** [緣覺乘](名) 【佛】緣覺に至るみち。
えん-がは [緣側](名) 家の座敷外にある板敷。
廿**えん-が・る** [艶](自、ら四) あだ〳〵しきさまかたちをなす。
(**えん-がん**) [沿岸](名) ㊀水流又は海洋にそひたる岸。㊁水流又は海洋にそひたる處。——**かい** [沿岸海](名) 海洋の陸地にそひたる部分、沿岸地の繼續と見做され、其國の主權の下に屬す。——**ぼうえき** [沿岸貿易](名) 沿岸に於ける貿易、沿岸國の主權の下に服從すべきもの。
(**えん-き**) [延期](名) 期限を延ばすと。ひのべ。
(**えん-き**) [鹽基](名) 【化】酸を中和すべき水酸化物、即ち、水酸化「カリウム」・水酸化銅などの如きこれなり。
(**えん-ぎ**) [緣起](名) ㊀【佛】因と緣と相應じて萬法の起ると。㊁神社佛閣などの沿革又は利益功德などの傳說。(瑞相)。㊂きざし。前兆。「—が惡い」。
(**えん-ぎ**) [演戲](名) 「えんげき」に同じ。

(**えん-ぎ**) [演義](名) 事實を敷延して、つぶさに、おもしろく言ひなすと。(衍義)。「—三國志」。
(**えんき-さん**) [鹽基酸](名) 【化】酸の稱、其分子式の水素が、金屬に置換せらるゝ、故に名づく、水素原子の數に從ひ、一鹽基酸・二鹽基酸・三鹽基酸等の別ありて、硝酸は一鹽基酸、硫酸は二鹽基酸、燐酸は三鹽基酸なり。
(**えんきせい-えん**) [鹽基性鹽](名) 【化】水酸根一部を含む鹽。
(**えんきせい-さんくわぶつ**) [鹽基性酸化物](名) 【化】酸に溶解し中和して鹽を生ずる酸化物、酸化亞鉛又は酸化鐵などの如きこれなり。
(**えん-きよ**) [燕居](名) 安息して家にあると。
(**えん-きり**) [緣切](名) 親子・兄弟又は夫婦の關係を絕ちて、他人の關係となると。「夫婦の—」。(離緣)。
(**えん-ぐみ**) [緣組](名) ㊀えんをむすびて姻族となると。(結親)。㊁【法】血統上親子にあらざるものが、法律上親子の關係を結ぶと。やうしえんぐみ。
(**えん-くわ**) [鉛華](名) 「おしろい」の一名。
えんくわ-アンモニウム [鹽化—=Ammonium chloride](名) 【化】白色の固體、「アンモニア」と鹽化水素との等容積を混じて製す、水に溶解し易く、其溶液は中性の反應を呈す。硇砂。
(**えん-くわい**) [宴會](名) 相會して酒のみするると。さかもり。
えんくわ-カリウム [鹽化—=Kalium chloride](名) 【化】白色立方體の結晶物、水に溶け易く、加里石鹽として天然に產す。
えんくわ-ぎん [鹽化銀](名) 【化】白色の粉末、水及酸に溶解せず、日光にあつれば紫黑色に變ず。
えんくわ-すゐそ [鹽化水素](名) 【化】鹽素と水素との直接化合によりて生ずる無色の氣體、刺戟性の臭氣を有す、食鹽に硫酸を加へてこれを製することを得、水に溶解し易し、其溶解は、鹽酸なり。
えんくわ-ぶつ [鹽化物](名) 【化】鹽素と他の元素との化合物。
えんくわ-ナトリウム [鹽化—=Natrium chloride](名) 【化】普通に鹽又は食鹽と稱するもの。
えんくわ-マグネシウム [鹽化—=Magnesium chloride](名) 【化】苦味を有する潮解性の結晶體、粗製の食鹽の潮解し易きは、これを含むによる。

廿**えん-げ** [艶氣](名) なまめきたるすがた。
(**えん-げい**) [演藝](名) 公衆の前にて、落語・講談・演戲又は踊りなどの遊藝をなすと。
(**えん-げき**) [演劇](名) 役者が脚本により、種々の扮裝をなして、種々の事を演ずるもの。しばゐ。
(**えん-けん**) [延見](名) 呼びよせて對面すると。ひき入れて會見すると。
(**えん-けん**) [偃蹇](名) ㊀おごりたかぶるさま又は高きさまにいふ語。㊁まがりくねるさま又は弊ふさまにいふ語。
(**えん-げん**) [艶言](名) なまめきたることば。
(**えん-げん**) [延言](名) 音をのべひきていふ語。
(**えん-こ**) [緣故](名) ㊀ゆかり。たより。よしみ。ちなみ。㊁つゞきあひ。えんつゞき。
(**えん-ご**) [掩護](名) おほひまもると。
(**えん-ざ**) [宴座](名) 儀式のとき、正しくしてつく席。穩座の對。
(**えん-ざう**) [醃藏](名) しほに漬(ツ)くると。しほに漬(ツ)けたるもの。しほづけ。

ページ—ページ　122

きしが、近時のものは、支那風の衣服にて、忿怒の相をなす。――がほ[閻魔顔](名) 恐かみづら。ゑぶづら。――だいわう[閻魔大王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。――てん[閻魔天](名)【佛】前條に同じ。――てんく[閻魔天供](名)【佛】「エンマ」天をまつるわざ。――ラ[閻魔羅](名)【佛】(梵語閻魔羅闍の略)「エンマ」の條を見よ。「エンマ」に同じ。――わう[閻魔王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。

(えん-む[煙霧](名) けむりと霧と。「一濛々」。

えん-むすび[縁結](名) ㊀えんぐみ。結婚。㊁遊女などのする一種の遊戯、數多の男女の名を紙片に記して捻り、これを無心に結びて配合をうらなふこと。

(えん-めい[延命](名) いのちの長く延ぶること。――ぎく[延命菊](名)【植】菊科の多年生草、葉は倒卵形、頭狀花序にして、舌狀の花冠は白色又は帶紅色等を呈す。――さう[延命草](名)【植】「えんねんさう」の一名。――ぶくろ[延命袋](名) 俗間に唱ふる賀の給の一、錦の袋の腹を脹らせ口を括りたる形を造けるもの。

(えん-ゆ[縁由](名) ゆかり。たより。てづる。

エンラ[閻羅](名)【佛】(梵語閻魔羅闍の略)「エンマ」の條を見よ。「エンマ」に同じ。――にん[閻羅人](名)【佛】地獄の獄卒。――わう[閻羅王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。

(えん-らん[延攬](名) 我味方にとりこむこと。「英

(えん-り[厭離](名) いとひてはなれ去ること。――ゑど[厭離穢土](名)【佛】極樂に生まるゝため、此の世を厭うて離れ去ること。

(えん-りう[淹留](名) 久しくとゞまること。

(えん-るゐ[縁類](名) 結婚に因るつゞきあひ。

(えん-るゐ[鹽類](名)【化】おもに鹽基及酸の化合物。――せん[鹽類泉](名) 鹽類を含む鑛泉。

(えん-れい[艷麗](名) つや〳〵しく麗しきこと。

(えん-れい[延齡](名) 「えんめい」に同じ。――さう[延齡草](名)【植】「えんねんさう」に同じ。

(えん-ろ[沿路](名) えんだう。みちべり。

(えん-を[厭惡](名) いとひにくむこと。いやに思ふこと。

＋えんをん-のぎ[宴穩座](名) 宴座と穩座と。

お

お 「あ」と「う」との中間母音、「う」よりも脣を稍や廣く舌を稍や低くして發す、五十音圖に於て、安行の第五に位し、於列の古・曾・登・乃・保・毛・與・呂・遠の韻となる。

お-[御](接頭) ㊀(「おほ」の約)或語に冠して尊敬又は鄭重の意を表はす語。「一ふみ」。「一つくる」。㊁中古以來、婦人の名に冠する語。「一梅」。「一秋」。

(**お**(感) 俄かなる物事に驚きたるときの發聲。

オーバー-コート[Over-coat](名) 外套。

オーバー-シューズ[Over shoes](名) 雨天などの際、靴の上にはくゴム製の上靴。

オーム[Ohm](名)【理】電氣抵抗の單位、即ち起電力一「ヴォルト」にて電流一「アンペーア」の通ずるときの抵抗にして、横斷面一平方「ミリメートル」長さ一〇六・三「センチメートル」の水銀の抵抗に同じ。

オーラミン[Auramine](名) 鹽基性の黄色染料、過湯及び酒精に溶解し、黄色を呈す。

(お-あし[御足](名) 錢の異稱。

(お-あひだ[御間](名) 物事の中間に在りて、何方にも適當せざるさまにいふ語。

おい[老](名) ㊀多くの年を身に積むこと。年つもりて身體衰ふること。老ゆること。㊁年よりたる人。としより。「一もわかきも」。――をやしなふ[養老] 老體の養生をなす。又、老人によくしてあてをなす。

(**おい**(感) (同輩又は下位のものに對して用ふ) ㊀呼びかけられて答ふる聲。㊁他人をよびかくるに發する聲。「一どこへゆく」。――おい(感) ㊀前條に同じ。㊁泣きて發する聲。「一と泣く」。

＋**おい-おい-し** しく しし しき しけれ (形、二) 老人らし。

＋**おい-かゞま・る** ら り る る れ れ [老屈](自、ら四) 年老いて腰曲がる。年老いて體衰ふ。

おい-かけ[老懸](名) 古昔、武官のかぶる冠の左右に着けし飾り、菊花を半切にしたるが如きもの。ほゝすけ。(緌)。

[おいかけ]

＋**おい-が・る** [老嗄](自、ら下二) 年老いて聲枯る。

＋**おい-がれ**[老嗄](名) おいがれたること。

おい-き[老木](名) 年を積みて、幹枝などの垂れ屈(かゞ)まりたる木。

＋**おい-ぐ・む** [老](自、ま四) 老ゆ。

おい-ごころ[老心](名) 老人の涙もろき心。

おい-く・つ [老朽](自、た上二) 老いて無用の人となる。

おい-くづ・る [老頽](自、ら下二) 老いて元氣なくなる。

おい-こみ[老込](名) おいておとろへたること。らうすゐ。「一姿の爺どの」。

おい-と・む [老込](自、ま四) おいておとろふ。らうすゐす。

＋**おい-さ・ぶ** [老進](自、は上二) 年を積みて老いかさなる。

＋**おい-さらぼ・ふ** (自、は四) 極めて老衰す。年よりてよわりはつ。

(**おい-し** しく しし しき しけれ [甘](形、二) 美味なり。うまし。

おい-つ・む [老積](自、ま四) 年つもる。老いの身となる。

おいて[於](接) (「おきて」の音便) ありて。にて。「是に一」。

おい-で[御出](名) ㊀「出づ」の敬語。「御門を一になる」。㊁「居る」の敬語。「奥に一あそばす」。――おいで[御出御出](名) 手まねにて人を呼ぶこと。

(**おいて-きぼり**(名) おきざり。(東京地方の方言)。

(**おい-で・る** [御出](自、た下一) ㊀「行く」又は「去る」の敬語。㊁「居る」の敬語。㊂「來る」の敬語。㊃「出づ」の敬語。

(**おいど**[臀](名) 尻の異稱。

＋**おい-なみ**[老次](名) 老の加はること。

＋**おい-の-なみ**[老波](名) ㊀老の加はるを、波のよするにたとへいふ語。㊁老いて顔に皺よるを、波の皺にたとへいふ語。

おい-は・つ [老果](自、た下二) 甚しく「老いおとろふ」。

＋**おい-ば・む** [老](自、ま四) 老人めく。

(**おい-へ**[内室](名) 人の妻の稱。

おい-へ[御家](名) 貴人の一家の敬稱。――さうどう[御家騒動](名) 貴人の一家が、嬖臣愛妾などのために騒動を起せること。――ほ[御家頰](名) 兜の附屬品、めんぽはの皺なく滑かに作りたるもの。――もの[御家物](名) 御家騒動を脚色(シク)としたる芝居。――りう[御家流](名) 書體の一、尊圓法親王の書法を傳へたるもの、徳川時代の公文書は此書體に限れり。

＋**おい-ほ・く** [老耄](自、か下二) 老いて心おろかになる。らうまうす。

＋**おい-ほ・る** [老耄](自、ら下二) 年老いて心にぶくなる。おいぼく。らうまうす。

(**おい-ほれ**[老耄](名) ㊀「おいほれ」の訛。㊁老人をのゝしりていふ語。

(**おい-ほれる**[老耄](自) 「おいほる」の訛。

おい-まつ[老松](名) ㊀年を積みたる松。㊁俗謠の小唄の名。

おい-ゆ・く [老行](自、か四) 次第に年よる。

＋**おい-ら**[己等](代) われら。(東京の方言)。

＋**おい-らか**(名) おとなしきこと。しんしやう。

＋**おい-らく**[老](名) 老い行くこと。

(**おいらん**[花魁](名) ㊀東京の遊郭にて、姉女郎の稱。(粉頭)。㊁轉じて、娼妓の稱。

おい-り[御入](名) 入來の敬稱。「上使の一」。

おい-れ[老入](名) 年老いたる後。老後。

おい-ろ[御色](名) 「べに」の異稱。(徳川時代の御殿女中の語)。

(**おう-あ**[歐亞](名) 「ヨーロッパ」洲と「アジア」洲と。「一の天地」。

(**おう-うつ**[蓊鬱](名) 樹木の茂げれるさまにいふ語。

(**おう-か**[謳歌](名) ㊀衆人聲をそろへてうたふこと。㊁衆人其德をほめたゝふること。

(**おう-き**[應器](名) 「ハチ」(鉢)の異稱。

(**おう-きふ**[應急](名) 急場のまに合はすること。

(**おう-ぐ**[應供](名)【佛】(人天の供養をうくる義)佛の尊稱、如來十號の一。

(**おう-くわ**[歐化](名) 「ヨーロッパ」洲の諸國の風俗思想などをまね其如くなること。

(**おう-げ**[應化](名)【佛】佛が時機に應じ、本體を改更して假體を現ずること。

(**おう-けつ**[甌穴](名)【地】急湍の激するために、溪間に生じたる凹處。

おう-さい-や(感) (「おうさりや」の音便にして、おう然りやの意)三番叟を舞ふときの掛け聲。

(**おう-しやう**[毆傷](名) ㊀人に暴行を加へて傷(キズ)をおはすること。㊁うちきず。うたれきず。

(**おう-しよう**[應鐘](名) ㊀十二律の一。㊁陰曆十月の異稱。

(**おう-しん**[應身](名)【佛】如來の三身の一、如來が機に應じ物に接し、釋迦と現じ彌勒と現じ色身を現じて、法を說き衆生を度すといふこと。――ブツ[應身佛](名)【佛】色身を現じたる如來。

おう-・ずる ぜ じ ず ずる ずれ ぜよ [應](自、さ變) ㊀人の言に答ふ。こたふ。㊁仕向けに隨ふ。したがふ。「指揮に一」。㊂和して起る。つれて生ず。「天下響の如く一」。㊃適當す。かなふ。「分に一」。

(**おう-せつ**[應接](名) ㊀あひしらひ。もてなし。㊁めんくわい。であひ。――しよ[應接所](名) おうせつをなす場所。

(**おう-せん**[應戰](名) 敵の攻擊に應じて戰鬪すること。

(**おう-そ**[應訴](名) 原告の提起したる訴訟に對して被告となること。

(**おう-だ**[毆打](名) 人の身體に暴行を加ふること。

(**おう-たい**[應對](名) 人に面會して、其問ひにこたふること。うけこたへ。

(**おう-だ-さうしやう**[毆打創傷](名)【法】人に暴行を加へ又は詭計を用ひて、其身體を傷害す

ること。――ざい〔毆打創傷罪〕（名）〔法〕暴行又は脅迫を以て、故意に他人の身體を傷害し、若しくは故意なくして死に致したる犯罪。
（おうだ-ちし〔毆打致死〕（名）〔法〕人を殺すの故意なきに、毆打して死に致したること。
おう-た-どころ〔御歌所〕（名）宮中に置かれたる一局、陛下の御詠歌に關する事を掌り、且つ臣民の詠進を管理する所。
（おう-たふ〔應答〕（名）おうたい。うけこたへ。
廿おうど〔首〕（名）「おびと」の音便。
（おう-ど〔嘔吐〕（名）へどつくこと。はき。
廿おうな〔女〕（名）をんな。め。
廿おう-な〔老女〕（名）おいたる女。（嫗）。
廿おう-な-し　けれくしき〔奥無〕（形、二）（「おくなし」の音便）おく深からず。あさはかなり。
（おう-はう〔應報〕（名）善惡の作業に對して、現ずる吉凶のむくい。
（おう-ぶん〔應分〕（名）身のほどにかなふこと。
（おう-ぶん〔歐文〕（名）「ヨーロッパ」洲諸國に行はるゝ寫音文字、横文字。
（おう-へん〔應變〕（名）不慮の場合には、それに應じて事を行ふこと。「臨機―」。
（おう-ぼ〔應募〕（名）つのりに應ずること。――かく〔應募價格〕（名）公債又は株式等の募集に應じて、其額面に對する實際の拂ひ込み金額、例へば、公債額面百圓に對して、九十五圓を拂ひ込まんとするときは、其九十五圓をいふ。――しや〔應募者〕（名）つのりに應ずる者。
（おう-よう〔應用〕（名）㊀其場合にしたがひ其物事をはたらかし用ふること。㊁其原理を實際にはたらかし用ふること。「―化學」「―植物學」「―經濟學」。

廿おう-よ-る　らりるれ〔奥寄〕（自、ら四）（「おくよる」の音便）奥の方へよる。
（おう-ろう〔甌窶〕（名）高くして狹く傾きたる土地。
（おう-ゑん〔應援〕（名）たすけ。かせい。ふくひ。ゑんぺい。すけぜい。
（お-えつ〔嗚咽〕（名）聲物にさゝへられてむせぶること。又、むせびなき。
おお（感）㊀古昔、貴人の出行あるとき、先驅が行人を戒めし聲、警蹕（ケイヒツ）の聲。㊁俄かなる異變にあひ又はわすれたる事を思ひ出しゝときなどの發聲。
〔お-おさへ　オサエ〔御押〕（名）人よりさゝれたる杯を押さへて、更に重ねて飲ましむること。
お-が〔大鋸〕（名）大なるのこぎり。
お-かう　ゴウ〔御講〕（名）〔佛〕我國佛教の各宗にて、其開宗の命日などに行ふ佛事。
お-かがみ〔御鏡〕（名）「おかがみもち」の略言。――もち〔御鏡餅〕（名）圓く扁く鏡の如き餅、神事・祝賀等に用ふるもの。
おが-くづ〔大鋸屑〕（名）大鋸（オガ）にて材木をひきたる屑。ひきくづ。
お-かげ〔御蔭〕（名）たすけ。みやうおよ。かご。（庇蔭）。――まゐり〔御蔭參〕（名）諸國より多人數のもの打ち揃ひて、或時期に、伊勢の大神宮に參詣すること。
お-かす　さしすせせ〔犯、侵〕（他、さ四）㊀法度（ハット）又は德義にそむきたる事をなす。「法律を―」。㊁人を陵ぐ。人を虐（シヘタ）ぐ。㊂攻め入る。掠めとる。㊃冒し難き事を敢て爲す。「白刃を―」。（冒）。㊄姦淫す。㊅關係をつく。わづらはす。「兵學を以て諸侯を―」。
〔お-かず〔御數〕（名）（種々調理して、飯を具ふるもの、菜）飯のさい。

お-かた〔御方〕（名）㊀人の敬稱。㊁人の妻女の敬稱。――ごしよ〔御方御所〕（名）古昔、將軍家又は大臣家などの男子の部屋住みの稱。――すまゐ〔御方住居〕（名）前條に同じ。――ばうちやう　ボウチヨウ〔御方庖丁〕（名）和泉國堺より出す庖丁、其庖丁をつくり出しゝものが、妻に工事を補助せしめたる事あるより此名ありといふ。――めく　かかくけけ（自、か四）貴人の妻らしくあり。
お-かちん（名）餅の異稱。かちん。
お-かど〔御門〕（名）門の敬稱。｛――ちがひ　チガイ〔御門違〕（名）めざす所の正を失すること。
〔お-かは　ワ-カ〔御厠〕（名）（「おかはや」の略）小兒の便器。おまる。（虎子）。
おが-ひき〔大鋸挽〕（名）のこぎりにて、材木を伐ることを職業となすもの。こびき。
〔お-かひこ　イ-カ〔御蠶〕（名）㊀かひこ。㊁絹。――ぐるみ〔御蠶括〕（名）上より下まで絹物の衣服を身に纏ひたること。
廿お-かべ〔御壁〕（名）「とうふ」の異稱。（女房詞）。
おかま-こほろぎ　コオロギ〔御竈蟋蟀〕（名）〔動〕直翅類中螽斯科に屬する蟲、全體赤色にして後肢頗る長く、長刺あり、翅と聽器とを缺き、跗節は側扁なり、晝間は床下に棲み、夜間は多く竈に來る。えんのしたこほろぎ。えびこほろぎ。（竈馬）。
お-かみ〔御上〕（名）㊀みかど。朝廷。主上。（官家）。㊁政府。官廳。「―の御無理は御もっとも」。㊂貴族の敬稱。
〔おかみ（名）料理屋又は下宿屋の女主人。｛――さん（名）中流以下の人の妻の敬稱。
〔お-かめ〔阿龜〕（名）㊀醜類にして低鼻なる婦人の

顔の假面。㊁お龜の假面に似（に）たる顔の女をあざけりていふ語。㊂「おかめそば」の略言。――ざさ〔阿龜笹〕（名）〔植〕「ごまいざゝ」に同じ。――そば〔阿龜蕎麥〕（名）つゆそばの一種、かまぼこ又は松茸などをいれたるもの。
〔お-かん〔御燗〕（名）酒を煖むること。又、酒の煖り。
おかん-あげ〔御髮揚〕（名）（「かん」は、かみの音便）貴人の髮を結ふ人。
廿おき〔息〕（名）「いき」に同じ。
おき〔沖〕（名）㊀海のはるか岸を離れたる處。㊁湖の底深き處。㊂田畠原野の遠く開けたる處。
おき〔燠〕（名）㊀紅熱せる炭火。㊁薪のもえはてて、炭火の如くなれるもの。（熾）。
おき〔置〕（名）おくこと。「一日―」「二日―」。
〔おき-あがり-こぼふし　ウ-ボ〔起上小法師〕（名）達磨（マルマ）人形の底に錘（リオモ）をつけたる小兒の玩具、これを倒すも、底の錘の重さにより直ちに起き直るやうに造る。おきやがりこぼし。（不倒翁、起居道子）。
おき-あが-る　らりるれ〔起上〕（自、ら四）臥したるものがおきたつ。
おき-あげ〔置揚〕（名）高蒔繪などをなすに、地に蛩胡粉を盛りて高くすること。
おき-あげ〔置上〕（名）器物を高くおくために、下に他物をおくこと。
〔おき-あさり〔沖淺蜊〕（名）〔動〕あさりの一種、殼厚く毛多く、種々の斑紋あり。
おき-あはせ　リセ-ア〔置合〕（名）とりあはせ。あしらひ。
廿おき-あみ〔置網〕（名）「まちあみ」に同じ。
おき-かき〔燠搔〕（名）㊀おきをかきたて又はかきよする鐵器。㊁おきを持ちはこぶ鐵器、形ひのしに似たるもの。（燠舁）。
〔おき-がけ〔起掛〕（名）臥床より起きいでゝ、ほどへぬこと。

おき-がた〔置形〕（名）布に模樣を染めずして、繪の具を置きたるもの。そめがたの對。
おき-かへ　エ-カ〔置換〕（名）㊀かれとこれとをとりかへおくこと。㊁〔化〕一物質が或化合物にあひて、これを分解し、其一成分と交換してこれを拆出すること、例せば、水に「ソヂウム」を投ずれば、水の成分なる水素の一部は、瓦斯となりて發散し、「ソヂウム」は殘餘の部分と結合して、苛性曹達を生ずる如きこれなり。㊂〔數〕代數式中の文字を其數値に書き改むること。又、聯立方程式にて、一の未知數を他の未知數にて表はして代ふること。
おき-かへ-る　エル-カ　らりるれ〔起返〕（自、ら四）起きなほる。おきあがる。
廿おき-くち〔置口〕（名）縁をとりたるもの。
おき-くむし〔阿菊蟲〕（名）あげはの蝶の蛹。
おき-ごたつ〔置炬燵〕（名）行火（アンクワ）の如く、匣の内に爐を設けて、坐上におくこたつ。（火避）。
おき-ざより〔沖鱵〕（名）〔動〕「だつ」の一名。
おき-ざり〔置去〕（名）他を打ち捨てゝ、おのれ一人立ち去ること。「妻を―にす」。
〔おき-ぜね（名）おきがけ。おきながら。
おき-ずみ〔置墨〕（名）墨を用ひて頭髮の生へ際にぬり又は眉を描くこと。又、其墨。
廿おき-そ〔沖〕（名）おき。「―の風」。
廿おき-つ　てつつるてよ〔掟〕（他、た下二）定む。きむ。
廿おき-つ-かぜ〔沖津風〕（名）沖よりふきくる風。
おき-つけ〔置附〕（名）其處へすゑおきて、他へ移さぬこと。
廿おき-つ-しまね〔沖津島根〕（名）沖にある島。
廿おき-つ-しまもり〔沖津島守〕（名）しまもり、今の島司の如きもの。

廿おき-つ-しまやま〔沖津島山〕（名）海中にある島の山。
廿おき-つ-しらなみ〔沖津白波〕（名）沖に立つしらなみ。
廿おき-つ-すたへ〔奥津棄戸〕（名）棺を地にすゑおき、石をつみかさねて、其上に土を盛りたる塚。
おき-つ-だひ　イ-ダ〔興津鯛〕（名）㊀あまだひを鹽乾しにしたるもの、駿河國興津の名産。㊁〔動〕「あまだひ」の一名。
おき-つち〔置土〕（名）更におき加へたる土。又、平地の上に高くおきたる土。
廿おき-つ-とり〔沖津鳥〕（名）沖に居る水鳥。
廿おき-つ-なみ〔沖津浪〕（名）沖にたつ波浪。
廿おき-つ-ふね〔沖津舟〕（名）沖をこぎゆく舟。
おき-て〔掟〕（名）㊀さだめ。きまり。㊁法制。規定。㊂田畠の小作。
おき-てがみ〔置手紙〕（名）面談のかはりに、用向きをかきたゝめ置く手紙。
〔おき-てぬぐひ　イ-グ〔置手拭〕（名）頭又は肩などに手拭をおくこと。又、其手拭。
おき-どころ〔置處〕（名）㊀ものを置くべき所。又、物を置きたる所。㊁なすべきやう。「手足の―を知らず」。
おき-どこ〔置床〕（名）處を移し得べき床の間、即ち、床の間のさまにつくりある臺。
おき-な〔翁〕（名）（息長の略）㊀老人。（叟）。㊁能樂の一、最もめでたき曲にして、おきなの假面

［おきな（二）］

をかぶりて行ふ。――アンドウ[翁行燈](名) 古昔、芝居の顔見世の時に掛けし方形の「アンドウ」。

――がひ[翁貝](名)【動】どぶがひの一種、色白し。

――ぐさ[翁草](名)【植】(い)菊科に屬する宿根草、夏初に、紅色の小花を開く、花瓣は六個あり。ゑやぐさ。(白頭翁)。(ろ)翁の異稱。(は)松の異稱。

[(い) おきなぐさ]

――ごと[翁言](名) 翁のことば。

十――さ・ぶ[翁進](自、は上二) 年稍もりて老人めく。

おきな・は[水索](名) 魚を捕るに用ふる綱。

おきな・ひ[補](名) おぎなふと。――ぐすり[補藥](名) 身體滋養のための藥劑。

十おきな・びと[翁人](名) 老人。おきな。

おきな・ふ[補](他、は四) ㊀不足をたす。かけたるをふさぐ。㊁おぎなひぐすりを用ふ。㊂缺員の官職に任ず。

おきな・ほ・る[起直](自、ら四) ふしてありしより起きて坐す。

おきな・わたし[翁渡](名) 昔時、芝居の顔見世のとき、祝儀として式三番を舞ひしと。

⌒おき・ぬけ[起拔](名) 寢起きたるまゝなると。

十おきぬ・ふ[補](他、は四)「おぎなふ」に同じ。

おき・の・たいふ[沖大夫](名)【動】「あはうどり」の一名。

十おきの・る[賂](他、ら四) 價をかりて、物品を賂買す。かけにて買ふ。

おき・び[置火](名) 炭火。

おき・ふし[起臥](名) ㊀起くるとふすと。㊁居常の意にもいふ。

おき・ぶみ[置文](名) 書きのこしおきたる文書。かきおき。おきてがみ。

十おき・まどは・す[置惑](他、さ四) 見わけがたきさまにおく。

⌒おき・まり[御決](名) 共れに定まりてあると。――もんく[御決文句](名) つねに口にする文句。いひぐさ。

十おき・み[正親](名)「おほきみづかさ」の略言。

おき・みやげ[置土産](名) 立ち去るときに、居遺れる人に置きて與ふるもの。(留別)。

おき・めばる[沖目張](名)【動】「あかめだひ」の一名。

おき・もの[置物](名) ㊀床の間などに据ゑ置きて、かざりとする器物。「獅子の―」 ㊁共位地に立てども共權能なく、物事すべて配下のものゝ手に成る人をあざけりていふ。

おき・や[置屋](名) 藝妓又は娼妓を抱へ置き、揚屋・茶屋などの迎に應ずるのみにして、客を上げて遊興せしめざる家。

おき・やう[御形](名)【植】「はゝこぐさ」に同じ。

⌒おき・やん(名) 妙齡の女子の擧動かろ〴〵しくして慇面なきと。又、共人。

十おき・よ・どころ[御清所](名) ㊀古昔、貴人の勝手部を取り扱ひしところ。㊁もの忌みの中に居りし所。

おきろ(名) 甚だしきと。計り難きと。

⌒おき・ろく[隱岐綠](名)【鑛】「おきろくしやう」の略言。――しやう[隱岐綠靑](名)【鑛】ろくしやうの一種、繪の具に用ふ、昔時、おもに隱岐より出でし故に此名あり。

十おきろ・な・し(形、二) 宏大無量にて、はかり得られぬほどなり。

十おき・ゑ[置餌](名) 鷹を飼ふ餌。

おく[奧](名) ㊀外面へ遠き內部、內へ入りこみたる所。「―庭」 ㊁室の隅、すみ。㊂物のつめ。最末。「巻き物の―」 ㊃貴人の妻の稱。㊄貴族などの妻女の起居する所。「―づとめ」「―家老」 ㊅物事の秘密、「心の―」 ㊆深くして知り易からざる意義。㊇陸奧(ムツ)の略言。「―の海」。

おく[置](他、か四) ㊀一定の場所にすう。(置)。㊁埋葬す。はふむる。㊂用ひず。やくに立てず。(措)。㊃豫め爲す。「取て―」「見て―」 ㊄手許に留む。「預り―」 ㊅家內に畜ふ「車夫を―」 ㊆預く。「質を―」 ㊇隔つ。「二日をおきて」。

おく[起](自、か上二) ㊀臥したるよりたちあがる。㊁目さむ。

⌒おく[億](數) 數の名、萬の萬倍。

⌒おく[憶](名) 數の多きにいふ語。「―兆」。

おく・い[奧意](名) ㊀おくのて。おくぎ。「學問の―」 ㊁そこのこゝろ、まことのこゝろ。

おく・いん[奧印](名) 事實の眞正なるとを明かにするため、本文の終りの方になす印證。

十おく・か[奧處](名) ものゝ至極せる部分。「―も知らず行く」「文選」(賦)。

おく・がき[奧書](名) 書物の終りに書きつけたる

おく・がた[奧方](名) 貴人の妻。(夫人、令閨)。

おく・ぎ[奧義](名) あうぎ。おくのて。

⌒おく・クフ[億劫](名)「おくコフ」の訛。

⌒おく・けん[臆見](名) 例證によらず推論によらず、たゞ自家の想像によりてのみの意見。

おく・こしよう[奧扈從](名) おくづとめの小姓。

⌒おく・コフ[億劫](名) ㊀【佛】一劫の萬々倍。㊁なすに手おもきと。ひまどると。㊂かぞへ盡しがたき數にいふ語。

おく・ざしき[奧座敷](名) 奧の方の座敷。

おく・さま[奧樣](名) 身分よき人の妻。

⌒おく・さん[奧樣](名)「おくさま」の音便。(「おくさま」よりは敬意輕し)。

おく・ぐし[御髮](名) 他人の頭髮の敬稱。

⌒おく・じま[奧縞](名) 縞柄の名、紺色と樺茶色との竪縞。サントメジマ。(棧留)。

おく・じやうるり[奧淨瑠璃](名) 德川時代に、奧羽地方に流行せしぶやうるり、扇子拍子にてかたりしもの。

おく・す[臆](自、さ變) 氣おくれして恐怖す。おそる。「臆」。

⌒おく・せいご(名)【動】「いさき」の一名。(奧州の方言)。

⌒おく・せつ[臆說](名) ㊀事體を極めず推測していふ意見。㊁[Hypothesis]事物の原因を說明せんがために、假定したる意見。

⌒おく・そく[臆測](名) よき程に推測すると。「―を逞うす」。

十おく・だか・し[臆高](形、二) おくびやうなり。

⌒おく・だん[臆斷](名) おしはかりにてさだむると。おくそく。

オクタント[Octant](名) 物の角度を測るに用ふる器、三百六十度の圓周を八分したるもの。(八分儀)。

おく・ちやうば[奧帳場](名) 奧にある帳場、頭役・支配人などの居る所。

十おく・つ・き[奧津城](名)「はか」(墓)の古名。

おく・づけ[奧附](名) 書册の末尾に著者の姓名などを記載しある紙。

おく・づとめ[奧勤](名) 貴人の奧向きにつとめすると。

十おく・つま[奧妻](名) 鍾愛する妻。

おく・て[晩稻](名)【植】おそく成熟する稻。(遲稷)。

オクテーブ[Octave](名)【理】或振動數を有する音に對し、二倍の振動數を有する音。原音の對。

⌒おく・てう[億兆](名) ㊀限りなき大數にいふ語。㊁人民、衆庶。「君は―の心を心とす」。

十おく・どこ[奧床](名) 奧の方にある臥床。

十おく・に[奧](副) 心に深く、切に。

⌒おくにかぶき[阿國歌舞伎](名) 慶長年中、出雲の神子(ミコ)阿國なるものが、神樂を變じて演じ始めし舞曲の名、現今の芝居の濫觴なりといふ。

[おくにかぶき(慶長年中の繪)]

おくに・もの[御國者](名) ゐなかざむらひ。ゐなかもの。

おく・の・て[奧手](名) ㊀ごくい。ひけつ。㊁惟一の手段。

おく・の・ゐん[奧院](名) 佛刹の本堂より奧の方に、佛などを安置しある處。

おく・ば[奧齒](名) 口腔の左右の奧にある齒。(臼齒)。

おく・び[衽](名)「おほくび」の略言。おくみ。

おくび[欠](名) 胃にたまりたる瓦斯が、口に逆ひ出づるもの。――にもださず 或言語を決して口にせざるにいふ。

⌒おく・びやう[臆病](名) 膽力なくして、僅かなる物事にもおぢおそるゝと。(怯懦)。――かぜ[臆病風](名) おくびやうの心。おくびやうのやうす。「―に吹かる」。――がみ[臆病神](名) ㊀おくびやうの心を生ぜしむる神、「―にさそはる」。㊁おくびやうもの。――ぐち[臆病口](名) 芝居の本舞臺の下方にある出入り口。――もの[臆病者](名) 臆病なる性質の人。(怯夫)。

おく・ぶか・し[奧深](形、二) ㊀奧ふかくあり。奧まで遠し。㊁意味ふかくして、容易に知りがたし。

おく・ま・る[奧隱](自、ら四) 奧深くあり。

おくみ[衽](名) 衣服の前の左右にありて、上は衿(エリ)につゞき下はつまに至る半幅のきれ。――さき[衽前](名) おくみの端末。――なり[衽形](名) なゝめなると。

おく・むき[奧向](名) 家の奧の方。勝手のかた。「―の用事」。

⌒おく・めん[臆面](名) 氣おくれしたる容貌。「―が無い」。

おくやく[奥役]（名）芝居にて、一切の事務の要にあたる役。

おくやま[奥山]（名）奥深くして、人里はなれたる山。

おくゆか・し[奥床]（形、二）一奥ふかくしてあらはならず。おくふかし。二輕浮又は野鄙ならずして、思慮深げに見ゆ。

おくゆき[奥行]（名）地面家屋などの表より後への長さ、即ち、間口へ直角なる一邊。

おくよこめ[奥横目]（名）德川時代の奥づとめの監察吏。

〔おくら[後]（名）もの、終止、をはり。

おくらか・す[後]（他、さ四）おくるゝやうにならす。おくれしむ。

〔おくらかせる[後]（他）「おくらかす」の訛。

おくら・す[後]（他、さ四）おくらかす。

おくり[送]（名）一おくると。二物品を人に托して送るときの目錄書。——がな[送假名]（名）漢字の和讀に便する爲め、其側又は下に附したる語尾又はて・に・を・は。——こ・む[送込]（他、ま四）おくりこむと。——こみ[送込]（名）おくりいる、「荷物を—」。——ざかな[送肴]（名）宴席にて、人に肴などをおくると。——じやう[送狀]（名）おくる物品に添へて、其員數・品目などをかき志るしておくる文書。（送狀子）。——ぜん[送膳]（名）招きて饗應する代りに、膳部を人に贈ると。——てがた[送手形]（名）物品を送るに添ふる手形、即ち、おくりじやうの類にして、發送者の記名捺印あるもの。（來文）。——び[送火]（名）七月十六日即ち盂蘭盆の最終日の夕に、祖先の御魂をおくるため、又、葬式の出棺後に、死者の亡魄を送るため、門前にて焚くかゞり火。——むかへ[送迎]（名）おくるとむかふると。（迎將）。——な[諡]（名）人の死後、其德を稱して追贈せる號、義公・烈公などの類。——もの[贈物]（名）人に贈與する進物、れいもつ。はなむけ、つかひもの。（饋送、苞苴）。廿——ゐ[贈位]（名）人の死後に贈る位階。ぞうゐ。

おく・る[送]（他、ら四）一此所より彼所にやる。つかはす。いたす。（遣）。二旅立ちする人を見おくる。三行く者のあとに從ひ行く。「おくりて門に到る」。四經過す。すごす。「年を—」。五むくゆ。かへす。「恩を—」。（報）。

おく・る[贈]（他、ら四）一つかはす。やる。たまふ。さづく。あたふ。二死者に官位をさづく。「從二位を—」。

おく・る[後]（自、ら下二）一人の後になる。おくれる。二人より劣る。三およばず。とゞかず。四おそる。おづ。五生きのこる。

おくれ[後]（名）一おくるゝと。あとになると。二むちおそるゝ心。三「おくれげ」の略言。——げ[後毛]（名）婦人の結髮に、おくれて生じたる毛の髻に及ばずして、垂れ下がるもの。——ざき[後咲]（名）花の時節におくれて開くと。はやざきの對「—の寒牛花」。——ばせ[後馳]（名）一おくれてかけつくると。二時機におくれたると「—の年始」。

おけら[螻蛄]（名）[動]「けら」に同じ。

おけれ[螻蛄]（名）[動]「けら」に同じ。

〔おこ[蠶]（名）かひこ。（關東の方言）。——さま[蠶樣]（名）前條に同じ。

おご[海髮]（名）[植]「おごのり」の略言。

おこし[御越]（名）來ると又は行くとの敬語。

おこし[粔籹]（名）「おこしごめ」の略言。——ごめ[粔籹米]（名）一種の菓子、糯米の蒸したるものに砂糖を加へ、これを乾し煎たるもの。又、其粉としたるもの。（炒米）。

おこしび[熾火]（名）火勢を熾（サカ）んにせる火。（活火）。

おこ・す[起]（他、さ四）一臥してあるものを立たしむ。二目さめしむ。三衰へたるものを盛んにす。四開始す。はじむ。「亂を—」。五生ず。發す。六ふるはす。さかんにす。七土地を開拓す。ひらく。八智見を啓發す。ひらく。「予を—ものは」。

おこ・す[致]（他、さ四）他方より此方におくりいたす。

おこ・す[致]（他、さ下二）前條に同じ。

おごそか[嚴]（名）威儀正しく侵すべきと。いかめしきと。げんぢゆう。

おこそづきん[御高祖頭巾]（名）（日蓮宗の高祖日蓮上人の像の頭巾に似たればいふ）一種の頭巾、目ばかり出して他をつゝみかくすもの、今時もに、婦人冬季にかぶる。

おこたり[怠]（名）一なまけ。ぶまやう。二つかれ。ゆだん。三おこたりたるより起りたる罪過。四病氣の恢復にむかふと。廿——ぶみ[怠文]（名）あやまりじやうもん。たいじやう。

おこた・る[怠]（自、ら四）一つとめず。はたらかず。二氣力おとろふ。なすに堪へず。三注意せず。油斷をなす。四疾病やゝ癒ゆ。

廿おこづり[誘]（名）おこづると。

廿おこづ・る[誘]（他、ら四）意にかなひたる言又は事を以て、其人を誘ふ。

廿おこと[御事]（代）あなた。そなた。

おことじる[御事汁]（名）古昔、御事始及御事

納に調製せし味噌汁。

おことに[御事煮]（名）「おことじる」の一名。

おことはじめ[御事始]（名）一古昔、十二月八日に、來る正月の儀式の調度の用意なしゝと。二古昔、東國にて陰曆二月八日に農事を始めしと。

おことをさめ[御事納]（名）古昔、十二月八日に農事を終へしと。

おこなは・る[行]（自、ら下二）一用ひらる。使はる。二障りなくなりたつ。三人々使ふやうになる。流行す。はやる。

〔おこなはれる[行]（自）「おこなはる」の訛。

おこなひ[行]（名）一おこなふと。わざ。とりあつかひ。二品行。行狀。みもち。三僧などの戒行を修すると。——びと[行人]（名）佛教又は道家の戒を修むる人。又、其行（ギヤウ）をなす人。（道士）。

おこな・ふ[行]（他、は四）一爲す。ふるまふ。二務む。あつかふ。三佛道を修す。

おごのり[海髮]（名）[植]紅色藻門に屬する海草、色紅にして長さ一二尺、おもに、刺し身のつまなどに用ふ。おご。

〔おこは（名）こはめし。せきはん。

おこり[起]（名）おこると。おこる所。はじまり。もと。

おこり[瘧]（名）間歇熱の一種、隔日又は每日時を定めて、始めは寒く後には熱の起るもの、多くは蚊の媒介によりて傳染す。わらはやみ。

おごり[驕]（名）おごると。おほへい。たかぶり。

おごり[奢]（名）過度のつひえ又はかざり。

おこりさめ[發歇]（名）身體の熱氣の或はおこり或はさむると。

おこ・る[起]（自、ら四）一發作す。えやうず。はじまる。（作）。二おきあがる。うごきだす。三たかまる。ふくる。四勢盛る。さかる。五勃興す。ふるふ。「士氣大に—」。六啓發す。ひらく。「智識—」。七族によりて熱發す。「ねつが—」。

〔おこ・る[怒]（自、ら四）いかる。（忿）。

おご・る[驕]（自、ら四）一人をあなどりて自ら尊大にす。たかぶる。二無禮をなす。三きまゝなるふるまひをなす。四控御に從はず。なれず。えたがはず。「馬おごりて馳せず」。

おご・る[奢]（自、ら四）一身分に過ぎたる虚飾をなす。過度に金錢をつひやす。二人を饗應す。自ら錢を投じてもてなす。ふるまふ。

おざ[御座]（名）一座席の敬稱。二僧侶の說教の敬稱。

おさがり[御下]（名）一神佛の供物（クモツ）などをとりさげたるもの。二主家よりの頂戴物（古着など）。

おさき[御先]（名）一「さき」の敬語。二人の手先につかはるゝものをあざけりていふ語。——まつくら[御先眞暗]（名）先見なきと。

〔おさげ[御下]（名）一女帶の結び方、やの字にして結びとめずに、かけと端とを垂れておくもの。二さげ髮。

おさし[御差]（名）大名の子に、乳をのまする女。

おさじ[御匙]（名）一古昔、將軍家又は大名などの侍醫。ごてんい。二匙の如き細長き顏を嘲りていふ語。

おざしき[御座敷]（名）一座敷の敬稱。二酒宴の席。（藝者などの出づる場合にいふ）。

〔おさだまり[御定]（名）いつも同じ體なると。

おざつき[御座附]（名）藝妓の宴に招かれて、最初に三味線を彈（ヒ）き且歌ふと。

〔おざなり[御坐形]（名）其場かぎりにものすると。

おさ・ふ[押、抑]（他、は下二）一おしとゞむ。おしつく。二こらふ。えのぶ。「涙を—」。三かぶす。おほふ。「耳を—」。四ふせぐ。さゝふ。五捕ふ。「盜人を—」。

おさへ[押、抑]（名）一おさふると。二おさふるに用ふるもの。おもし。「紙に—をおく」。（壓）。三隊後のとりしまり。志んがり。四ふせぎ。まもり。——ば（名）八重齒の一名。——もとゆひ[押元結]（名）頭の上より掛けて左右へ分け、耳のうしろよりさげて、髮を結ぶに用ふるもとゆひ。

〔おさへる[押]（他）「おさふ」の訛。

おさ・ゆ（他、や下二）おさふ。

おさらば[御然者]（感）人と別るゝときにいふ語。

おし[啞]（名）もの言へぬ人。あふや。おふし。

おし[押]（名）一おさへつくると。二あくまで我意をつらぬかんとすると。

おし[壓]（名）一おすと。おしつくると。二おすに用ふる物。おもし。三人を威すべき勢あると。「—になる技倆」。四狐鼠などを捕る一種の裝置。おとし。

おし[御師]（名）一先達（センダツ）の稱。二格低き神官。

おし——[押]（接頭）或動詞に冠して「むげに」「えひて」などの義を表はし且意を強くする語。「—入る」。

おし（感）（「おゝ、しゝ」の約言）古昔、登降の時よびし聲。「—といひて」。

おしあけがた[押明方]（名）あけがた。

おしあげポンプ[押揚——＝Force pump]（名）[理]水を押し揚げて低所より高處へ送る「ポンプ」、圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に內方に開く瓣ありて、活塞には瓣なし、又、圓筒の底に上方に開く瓣あるが故に、活塞を引き上ぐるときは、水は圓筒內に入り來り、これを押し下ぐるときは、水は管中に入る、故に管を長くして、活塞の引き上げ押